THE KAIZO

改造

五月号

1924


爽快
健康の爲め
長壽の爲め
クラブ煉歯磨
歯は強く美しくなるクラブ歯磨


氣分よく映画を
御鑑賞遊ばすには
是非東キネへ
京キネへ
增築落成
東洋キネマ
經營者 德川夢聲

厨川博士の遺稿
『苦悶の象徴』を讀みて

文學士 矢野峯人

×

かねて友人山本修二君の手によりて整理中であつた厨川白村博士の遺稿が、新裝して愈改造社から出版された。四六判にして二百有餘ページ、天金白羽二重の、背に小さく貼つた黑皮の面には、金文字の光も鮮かに、『苦悶の象徴』と印せられてある。見返しには、更に、勿忘草の色をからませたこの清楚にして高雅極まりなき裝幀は、たしかに本邦最近の出版界に於ける白眉たると共に、又博士の著書中未だ其の比

を見ざる所である。隨分と澁り屋で氣難かしかつた先生も、この秀拔の出來榮に對してはあの世で思はず破顏一笑せらるゝであらう。

×

本書は山本君の跋文にも見ゆる通り、先生が年來心を傾けられ、最後まで深く意を用ゐられた一大事業のいはゞ胚珠たる芽生えたるに過ないが、而も先生が遺された純文藝上の纒つた著述としては、其の出世作『近代文學十講』『文藝思潮論』以後はじめてのものである。從つて、本書は、たとひ未定稿であり、之に依つて評價さるゝ事は先生の最も心外とし不滿とさるゝ所であらうとも、尙且つ先生の文藝に對する識見抱負を窺ふ上に、最も重大なる意義を有するものと言はねばならぬ。

×

先生は曾て何處かで、遠からず『プロレゴメナ』刊行の意志ある事を洩らされた事があつたやうに記憶するが、この『苦悶の象徵』こそは恐らく、其の序論又は總論として執筆されたものであらう。一切の文藝乃至藝術を『苦悶の象徵』なる語を以て蔽ふ事が妥當であるか否かは姑く措き、先生が特に獨自の文藝論に此名を附せられたには慥に深い理由がある。

×

知れる人は知れるやうに、先生はこの世にあつて常に險しい路を歩むべく運命づけられた人であつた。枉げ難き己が性格と、傷つき易き神經とのために、先生は始終環境との抗爭衝突を人一倍強く經驗された。さうして其の遣り所無き滿腔の不平憂悶を和げ醫するものとては、僅に讀書と執筆とあるのみであつた。從つて讀書の對象となるものには、自ら深刻悲痛なる味を含めるものが選ばれがちに其の吐露する言辭は亦自ら矯激の調を帶びざるを得なくなつた。即ち、先生にとりて、一切の言說は必然的に悉く『苦悶の象徵』たらざるを得なかつたのである。かくして先生の文藝論は、取も直さず先生自らの尊き體驗に生れたるもの、其の魂の僞らざる叫びとなつて來るのである。世上凡百の理論、如何に巧緻を衒はうとも、體驗によりて基礎づけられざるものは眞に形骸骨骸に等しい。

×

先生がフロイド一派の精神分析學に親しまれるやうになつたのは果して何時頃からであつたか、不幸にして私は詳にしないが、彼等の所說の當否は別問題として、兎に角、先生が其晩年特　彼等の研究に多大の興味を感ずると共に、その影響を蒙る事もかなり深かつたのは事實である。少くとも『苦悶の象徵』一卷は、フロイド說に對し不即不離の態度を取りながら文藝の創作鑑賞の心理を豐富なる引例によつて說明せんとの企てである。

×

先生は大學教授の職に在つてゆかれた。然しながら、先生の本領眼目は、單に專門の學府に於て少數の後進を誘掖指導するに止まらず、進んで廣く一般民衆の文化に貢献せんとする所にあつた。從つて、先生一代の事業、其の不朽の功績は文藝の社會的浸潤に對する殆ど空前ともいふべき一大寄與であつた。先生の存在に依つて、信頼するに足る親切なる西洋文藝輸入者を有してゐた我が所謂知識階級はその死によりて好適の指導者解説者を失つたのである。まことに、人の價値は棺を蔽つて定まるといふ。先生の眞價は何物よりも先生の死によつて最も明確に證明されたと思ふ。瓦石を以て珠玉に代へる事が不可能なる限り先生の死によりて生じた空虚は永久に滿足されまい。

×

かく考へ來れば、『この苦悶の象徴』一卷、そは、一世の指導者、文化の開發者を以て任じ、啓蒙を以て旨とせられた先生が、玆土に遺された貴重なる置土産であり、忘れがたみである。平易にして而も餘りに專門的に傾く事無き本書は、言ふに足るべき文學概論の未だ現れざる本邦の讀書界にはじめて投ぜられた一大光明といふべきであらう。

アインスタイン全集完成

世界中で尤も難解視されたアインスタイン全集は我社多大の犠牲を忍びて翻刻に從事中であつたが、第一卷、第二卷は既に震災前に出來ましたが、第四卷は震災後完成するに至つた。何にせよ翻譯が悉く高等數學、乃至は難解の公式を有することとてその譯難は外觀より想像の及ばぬものであつた。現代に於て本書の如き最高意義を有する文献が我社によりて翻譯されたのは我國としても、又我社としても多大の滿足を覺ゆるものである。しかも震災後かかる數學的難解の活字を有する印刷所は唯だ單に秀英舍あるのみであつたのだ。●秀英舍が營利以外に超然として本書の刊行に努力した功勞は永久に沒すべからさるものがある。第三卷も引續き刊行に努力中であつたが漸く本月完成するに至り、玆に全くアインスタイン全集は全部完了を告げたのだ。最後に我社は之が翻譯に從事した石原博士阿部、山田、遠藤の三教授の勞に對して感謝の意を捧ぐるものである。しかし唯だ玆に心殘りなるはこの四卷にて登載することの出來なかつた部分に對して補卷として本年中に發行する考だ。此旨大方篤志者の諒承を仰ぎたい。不朽の名著の譯了に際し、我社同人も感慨無量である。其物質上の損害の如きは本社の甘んじて受けなければならぬ犠牲であつた。

吉江喬松著

近代文明と藝術

四六判上製

定價貳圓　書留送料十七錢

最新刊

當代文藝の存在價値は、一方に歴史的見地から、他方に社會的見地から見て、定めらるべきものである。即ち時代觀と社會觀とよりして照合決定せらるべきものである。

現在我々は共通の世界苦の中にあつて、眞に新しき時代の表現たる文藝を求めてゐる。この新表現こそは、無數の暗默の生命が初めて、その全的本質の美と力とを發揮して、その當然の存在を主張する反映でなければならない。（著者）

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二



(五月號)

青年の新運動參加に就き

帝大生に成る四月黨の生誕、安部氏等主唱のフェビアン協會の成立は五月の空に青葉の勢よく天に沖するが如く鮮新潑溂の感をいだかせるが、しかしその割に我國人の注視を惹くに至らざるは内部の組織に多大の缺陷があり、そして組織者達の經綸が時處にシックり適合せざるによるのではあるまいか。尤も後者の活躍の範圍は英國のフェビアン協會の如く必ずしも直接民衆と動くつもりではなかろう。だが、前者の標的とする所は實際政治の革正であり、既成政黨の打開であり、國民自覺の先驅者たるにあればそこに時代を貫く熱流の横溢を必要とし、時代を高く標識する經綸を必要とし、諸運動を屏息して第一線の勝者たる勇氣と力量とを必要とす。此等新人にその持合せがあるか——聊か心細さを覺ゆ

勞働組合の方向轉換は時局柄我々に重大な意義を示唆したが、今回の鈴木氏の選洲によりていよ〳〵勞働總同盟を全日本的にし、そして總同盟の名をして從來より一層の重きを加へしめた。今回鈴木氏の行が隱忍自重して世界的に行動するによりて勞働總同盟は一躍世界的となり、その發言、その動作も單に一國内に止まざるに至るべく、この處、勞働總同盟の擧措及鈴木代表の言動が異常なる期待をかけらるる所以だ。

然しながら我々は勞働總同盟の實力、技術が必ずしも我國の政治を左右するまでに材翼を成せりとは斷じ兼ねる。その組合員の訓練と力量とに於て未だ前途遼遠なるを感ぜない譯には行かない。だが、四月黨等の智識階級の擡頭に比較して世人の期待はいづれにあるであらうか。

政局の打開は勇敢なる自信にある。自己の合理的力量を信ずるにある。百の學問ありとも一の我執なくんば斷じて男子の事業は遂げ得ないであろう。

今や我々青年の前に放擲されたる大問題は山の如く堆かい。護憲運動の如きも其一であるが、しかし此名は美なれど政友會、憲政會、犬養氏均しく其前科あるに於て斷じて護憲を叫ぶ資格はない。政友本黨と相去る果して幾歩ぞ。日露交渉の如き重大事なるかの樣なれど共以上に我々が力瘤をいれねばならぬ問題は、對支、對米の問題である。此等諸問題の根本的解決も要は我々の新經綸に待たねばならぬ。舊政策を踏襲する老耄内閣の斷じてよくする所ではない。隨つて現内閣が提唱しつつある經濟會議、文政審議會も現内閣の手によりては何事も成すことが出來ないだろうことは確く信ずる。我々は八十に近い老人どもが普選とか、經濟會議とか、文政審議會とか若者見たいに新柄好みなるを苦笑すると共に、我々が現實政治と、現實社會とに處して愈々具體的に行かねばならぬ時代が來たことを玆に重ねて警告する。

社會運動と政治運動

（其二、完結）

福田徳三

九

勞働階級が所有を獲得することは、彼等に取りて、解放の必然的行程たるのみならず、國家の立場から見ても、其本來の使命により多く接近する所以である。何となれば、國家は其構成員たる一切の人格が完全なる自決性を得るによつてのみ、自己人格の完成を實現し得るものであつて、而して勞働階級が所有を獲得することは、彼等に人格自決性の一手段が與へられることであるからである。從つて、勞働階級は、自律的にも他律的にも、當然の要求として、國家に對して、變化したる新所有關係に相應す可き憲法の變更を提案するのであつて、其の合理性も合法性も些の疑を容るゝ餘地は無いのである。此れは單に理屈上の要求たるに止るものではない。或意味に於いては、勞働階級に取りては、其の

矛盾から釋放せられ得可き現前唯一の道であつて、此場合、國家は彼等に取りて、大慈大悲の救世主たりとも云ひ得るのである。所謂國家社會主義――ワグナー先生の主張した其れよりも、寧ろ其後の所謂『エタチズム』の形に於いて、而して又其れとは、趣を異にすることは勿論であるが、近來我邦に於いて高畠素之君等の主張する其れも含めて――なるものに、或點に於いて、深い意味があることが拒み得ないのは、此の意味に於てゞあらう。兎にも角にも、所有を獲得し、若くは確實なる獲得の機會が、其眼前に展開しつゝある勞働階級は、必然的に先づ、政治的に而して又た社會的に支配階級と等位に置かれんことを切望し、其の切望は、先づ第一に國家の憲法と行政の更正に對する懇となるのである。

此の要求は、其要求者の精神的發達の程度、教育の程度の異るに從ひ、種々異なる形を取るのである。他方に於いては、支配階級の彼等に對する態度と、國家が彼等の聲に耳を藉す度合との異るに從つても、其の要求提出の形態は同一なるを得ないのである。勞働運動が、英國に於いて、レヴエラース運動、ラダイト運動として顯はれたのは、此道理を端的に例示するものと思ふ。支配階級と其の國家とは、或は立法上或は行政上、彼等の要求を容るゝに吝かならざる場合は、いくらもあらう。乍去、要求の全部が其儘に受入れられた場合は、今迄は一回もなかつたのである。國家が自ら之を欲すると否とに拘らず、兎に角自發的に、被支配階級の此の必然的要求を容れ、之れに應ず可き各般の措置を取るとき、即ち政治改良が行はれるのである。此意味に於ける政治改良は、之を大別して二種となすことが出來よう。第一は、行政改良で、第二は憲法改良である。行政改良は必ずしも、本來の社會運動と直接には、深い關係を有することとなくとも行はれる。即ち主として、行政の機關に關する改良であつて、個々の國家機關及び其の運用間の關係に於ける調節を本體とするものである。此種の改良は、可なり古い時代に於いても行はれた。乍去、此種の改良も長い眼を以つて

之を眺めると、政治的革命と前後何れかの關係を有つものである。然らざる行政改良は、いつしか無効無用に歸することが多いことを見出すのである。第二種類の改良は、之れに反し、國民生活の根底から起つて來るものであつて、堪へ難き矛盾の撤廢を目的とするものである。其れは、當然政治生活から出で來るものでなく、國民の社會生活から迸り出るものであつて、其の使命は、社會的に起つた變動を政治上に――公法に於いて、國法に於いて――裏書せしむることに存するのである。其の變動は、時に極めて甚大なこともあらう。乍併其れが改良である限り――其れが革命に化せざる限り――は、改良の實行者は、國家と其の機關とであらねばならぬ。權力を有つ人が如何に異つた人々であつても、改良を實行する瞬間に於いては、其の實行者は權力の所有者であらねばならぬ。然らざれば、其れは改良と呼ばれることを許されないのである。此意味に於て、私は、大化の革新も明治の維新も共に、一の政治改良であつて、革命と做す可きものではないと信ずるものである。權力の所有者は、無論其人を渝つた、乍併、渝つたものは、其の個人である。權力の所有者が、改良の實行に當つたと云ふこと、其事に至つては、一の變化も起つて居らぬのである。換言すれば、一切の政治改良は、其れが改良たる可くは、而して、改良たる限りは、權力の所有者に如何なるペルソーネン・ヴェクセル（役者の差し換へ）が起らうとも、改良の實行者たるものは、其の實行の瞬間に於いては、權力の所有者であつたのである。

十

此の改良と其の根本的性質を異にする政治運動は、政治革命である。如何なる政治形態に於いても、其れを容器とする社會に於いては、絕へず運動が行はれる。而して其運動は、社會的支配階級が、同時に政治的支配階級たることによ

つて、調節せられて居るのである。然らざるときは、調節は新たに見出されねばならぬ。一定の政治形態を變更せんとの運動は、權力者の支配を受くる階級から起り、此の支配と其れに基く法律とを撤廢しようと期するものである。故に手近かに云へば、被支配階級は支配階級に對して、其の有する支配權を行使すること其事によつて、其の有する支配權を廢す可く努力せよと要求することになるのであつて、支配階級は、自己の利益を他人に讓る爲めに其の有する權力を行使す可く餘儀せらるゝ譯である。トコロが、抑も此くの如き要求の起つたのは、支配階級が其の支配權の具體的根據たる經濟財所有の獨占を最早有たない爲めであるから、彼等は此の具體的事實的根據によつて、此の如き自滅的要求に對抗することは出來ない。彼等の恃みとす可き所は、唯形式の上にのみ存するに止まる。法の神聖とか、秩序の安定とか、政體の擁護とか云ふ登諸は、必竟するに、此く形式のみによつて、自己の地位を擁護す可く餘儀せられた支配階級が好んで濫用する處である。此くして、如上の矛盾は、形式と實質の矛盾として顯はれ、一方は形式の爲めに鬪ひ、他方は實質の爲めに鬪ふものとなる。部分的利益は終ひに全體的利益に讓らねばならぬのであるが、其讓歩は決して容易に成されないで、永い鬪爭を要することになる。斯くして、政治革命の機運は促進せられざるを得なくなるのである。

法の威嚴は、二つの要素によつて支持せられる。一は形式的、一は實質的である。形式要素とは、其れが國家意思の聲明であること之れであり、實質要素とは、其れが社會生活の具象であること之れである。完全なる法は此の二要素を具備せねばならぬ。二者其一を缺けば、其れは最早眞の法ではない。虛僞の法である。虛僞の法は、何等かの運動によつて、早晩其の缺く處のものを補充す可く努力せねばならぬ。此の努力は、法の本性が要求する必然の作用である。若しも此の努力が起らないならば、其の法は滅亡する外はない。例へば、中世の封建法の如くに。

被支配階級が所有を現實に獲得するか、若くは其の獲得の機會が眼前に横はるかするときには、所有社會の權化たる法の完全性は失はれる。而して支配階級は、唯形式の上にのみ於いて、卽ち其れが國家意思の聲明せられたものであるとのことのみを以つて、既存の法の擁護と主張とを支持する。其の實質は既に彼等の手から失せ去つて居るのである。これに反して、被支配階級は、其の主張を唯だ實質の上にのみ置く、形式は未だ彼等を認めてゐないのである。斯くして均しく所有社會に於ける財の所有者でありながら其れが支配階級に屬すると、被支配階級に屬するとの差異により、其の所有を支持する法の根據は異ることになり、國家は恰かも兩手に花を有つものゝ如くなるのである。兩手に花を有つことは善いことではない、何となれば、國家は其の依つて立つ法の完全性を、之によつて失ふものであつて、法の全部が不完不具のものとなつて仕舞ふから。而して其れと共に、其の國民に向上發展の意氣の衰へざる限りは、各半分つゝの法を有する二つの階級は、其れ〳〵其の缺く所の一半を獲得しようとして運動し始めるのである。支配階級は、實質上にも被支配階級を支配することによつて、其の失つたものを恢復せんとし、支配階級は、形式上に於て、未だ與へられて居ないものを新たに獲得することによつて、從來の支配關係を一掃しようとして兩者は全力をあげて各々努力することになる。此の努力は到底協調、妥調せらる可くもない、兩者の主張は對角線的に相排斥し合ふものである。此の排斥は鬪爭を喚起す。要求者と拒絕者とは、全社會を源平の二大陣營に分つ。而して、其の要求は、被支配階級が、法の形式の認識を求むるものであるが故に、而して鬪爭の相手方たる支配階級が認識の實權を掌握するものである爲め、此の認識は容易に可能とならない。ソコデ、如上の鬪爭は先づ以つて被支配階級の認識を可能ならしむ可き樣なる國家憲法の變革を以つて、其標的とすることになるのである。被支配階級が此の鬪爭に於いて敗者となるときは、彼等の手にある不完全法は更らにより不完全のものとせられ、彼等の社會的地位は、鬪爭開始の以前に比して遙かに下降するを免れない。

其反對に、若しも彼等にして、勝者たるならば、彼等の望む憲法の變革は——無論彼等の望む通り其儘ではないが——實現せられることとなる。斯くの如く所有社會に於いて被支配階級が經濟財を獲得する可能を得たことから始まる社會的變動は、所有社會の法の完全性の變革を喚び起し、此の變革に應ずる憲法改正の必要を生じ、其の結果被支配階級の社會權に於ける擴張か又は縮少かを產み出すことになる。此の行程は卽ち我々が名づけて政治革命と呼ぶ所のものである。政治革命は、所有社會（ベジッツ・ゲゼルシアフト。ホセシーヴ・ソサイエテー）が行詰るとき起る所の政治運動であつて、其の終局を表示するものであると共に、所有社會が獲得社會（エルヴエルブス・ゲゼルシアフト。アクヰジチーヴ・ソサイエテー）への進展を劃する一階段たるものである。

十一

政治革命を促す事情に物質的と精神的との二がある。物質的事情とは、社會に於ける所有階級が自ら勞働することなきに至り、勞働するものは無所有階級のみに限られ、其結果所有階級は、所有をして價値あらしめ、財產の收益力を維持す可き活動から遠り、無所有階級のみが確實に此活動に從事するに到ること是れである。精神的事情とは、此の變化によつて促かさるゝ國家憲法に對する思想の變革是れである。此思想上の變化は、概ね革命の來る前かなり長い間徐々に成熟するものであつて、其成熟には一の嚮導原理と爲るものを要するのである。今日までは、其嚮導原理は常に平等と云ふ標語を以つて一括せられて居つた。言ひ換ふれば、今日までに於いて、國家憲法の變更を要求する運動は、常に其旗印として平等を標榜し來つた。かくて、所有の一般化的傾向は、精神的には平等思想によつて伴はれるのを常としたのである。

物質的精神的二つの事情が、被支配階級をして、必然的に革命的ならしめるのは、事實上の變化に相應す可き形式上の變化が、國家又は其の支配階級によつて拒まれるとき、之を見るのである。此の矛盾なくして起る革命運動は徒勞に歸する。被支配階級が、物質的並に精神的財貨を確實に獲得することなくして、憲法改正の要求を提出して、唯だ形式上の變革を望むとも其は無効であり、又た無力である。此くの如き無効、無力の努力は、却つて彼等をして、其の有てる物をも失はしむるに至ることを免れない。其の反對に、物質的並に精神的財貨を獲得した被支配階級の形式變革要求は、容易に拒絶し難い力强いものである。乍併、革命運動は、物質的事情と精神的事情とを有し、而して此兩者は決して同一種のものでないが爲めに、凡ての革命運動は、其深い根底に於いて、拔け難き一の大なる自家矛盾を包藏して居ることを忘れてはならない。物質的事情から云へば、革命の運動は、被支配階級が經濟財を獲得したとに其の根據を有するものである。經濟財の獲得は、其量に於て、又其質に於いて決して平等なるものではない。同じく被支配階級と云ふとも、其れに屬する凡てのものが、財の獲得者たるのではなく、又た財の獲得者間にあつても、其の獲得量は決して平等均一なるのではない。從つて、此の具體的根據の上に立つ革命運動は決して平等無差別の運動ではない、否、一の差別的根據の上に立つ現實の運動である。然るに精神的には平等の主張の根據の上に立つ。兩者は、終局に於て相納鑿し、相扞格せざるを得ぬものである。主義として、被支配階級の凡てのものに向つて、平等の認識を要求する革命運動は、現實には、被支配階級中經濟財を獲得したものが、其の實質に相應す可き形式の認識を求むる運動であると云ふ此の深い自家撞着は、容易に打克ち得るものではない。此の自家矛盾の爲めに、凡ての革命運動の陣營中には、獅子身中の蟲とも見る可き、自家正面の敵を戰友として包藏して居るのであつて、此の獅子身中の蟲の爲めに、折角成効した革命も、却つて勝利者の呪となることもあり得るのである。從つて、一の成効せる革命は、古き矛盾、古き衝突は之

を一掃し得るとしても、同時に、更らに新しき矛盾、新しき衝突の種を播くものなることは、否定し得られないことである。

歴史に顯はれた諸の政治革命、其一つとして、コンプロミッスならざるはない。何となれば、今日までの政治革命は、其何れも、決して、平等の理想を實現したものではなく、革命運動に方つての主張其儘に成就せられたものはないのであつて、革命成るの日に實現せられた處は、其主張、其標榜を著しく修正し、變化したものである。其の實現は、革命の物質的事情に相應するものであつて、其の理想、其の主張には必ずしも相應するものではない。現實の物質的事情は決して平等ではない。財の所有は、何れの世に於いても、差別的、不平等的である。斯くて、實現せられた革命は何れも同樣に、差別的、不平等的であることを免れないのである。其の差別、其の不平等は、從來の被支配階級を更らに二大分する。被支配階級中、財の所有者たるものは、現實の革命成就により惠まれるものであり、其の所有者たらざるものは、革命の爲めに、多大の犧牲を捧げ乍ら、些も之れによつて惠まれないものである。前者は新憲法の謳歌者となり、後者は、これに對する不平者となる。此道理は、現在の露國は勿論、獨逸の狀態を一瞥するものには、別に管々しい說明を要するまでもあるまい。

之を要するに、人格解放の運動の第一段は、社會財經濟財と精神財の所有獲得、之れに相應す可き社會國家の秩序の認識要求の發生である。其第二段は此の要求への讓步としての政治改良が行はれるか、又は政治改良が拒否せられ若くは不十分であるときに起る政治革命である。

人格解放の運動が、永く第二段に於て、即ち政治改良か政治革命かに於いて、停止して居ることもある。乍併、其れは停止であつて、終局ではない。終局するものは、政治運動である、人格解放運動其ものではない。何んとなれば、凡

ての改良、凡ての革命は、人格解放運動の最後の要求を現實する事とは限らないからである。凡ての人格をして完全に自決的ならしむ可き機會は、必ずしも與へられない。何んとなれば、凡ての改良、凡ての革命は、必ずしも、各人格に、所有の獲得を確保し、其の勞働を所有に導き、價値の收得に均霑せしめるものでないから。斯くて、人格解放の運動は、漸くにして、所有社會の狹い殼から拔け出でゝ、獲得社會の廣い舞台に上り政治運動から出でゝ、社會運動となるを免れ得ないのである。

十二

『狹い意味にて云ふ『社會的』――獨逸語で云へば『ゲゼルシアフトリヒ』でなく『ソチアール』――とは、此運動に關連する凡てのことを意味するのである。換言すれば『社會的』とは、共同生活の組織化の行程中に於いて、奪はれた人格性の恢復に關する一切の事を指し示めすのである。即ちシュタインの考へた處とは寧ろ正反對に、少くとも狹い意味に於ての『社會的』と云ふことは、非人格性を意味するものでなく、人格性の充實の要求に關することを意味して居るのである。シュタインは、社會運動なるものは、人格が非人格の爲めに壓迫せられ毀傷せられて居る狀態から起るものなることを十分に認めたが、其の壓迫者たる非人格性の方を主としたるものを社會と見たので、其の取除きの運動を從としたのである。此れは疑もなく、主客顛倒の誤に陷つたものである。壓迫者は社會ではない。社會は却つて、被壓迫者である。『社會的』とは、被壓迫者の解放に關すること一切を形容する詞である。其反對に、此の壓迫者を以て直ちに、國家そのものなりとするのも誤であるオッペンハイマーの說は其一例である。社會主義の階級國家論も其一例である。無政府主義も其一例である。人格たる國家本來の面目は、決して、壓迫者たることには存せぬ。――此誤は、國家

を權力と法律の方面、即ち單に最高統治の組織たる方面からのみ見る從來の國家哲學から起つたのである。國家を人格意思の主體として見る時は、此誤は容易に見出し得らる可きである。──人格は、自己の自主、自決のみによつて立つものではない。他の人格をも對等の人格として尊重するものでなければならぬ。……國家は、非人格對人格の爭を容れる容器として、非人格性の外圍を以て取卷れては居つたが、其外圍の包む内部に於ては、決して、非人格性の負擔者ではなく、兩者相爭ふに一任して置いたのである。言ひ換へれば、國家が非人格性の負擔者たるは、唯其外圍を以てするのみで、其存在の全部を以てしたものでは、決してないのである。

國民經濟てふ經濟組織は、右外圍を限界とする國家てふ容器の包擁する限度に於いて、財産對勞働の鬪爭を容れて居つた。然るに、其鬪爭が、容器以外に溢れるようになると、經濟組織は、其範圍を國家と同一にする能はざるに至り、國家に盛り上げ切れる以外に、經濟生活の運動が認められることになる。其運動は、經濟的ではあるが、最早國家的ではない。ソコデ、其れは、非國家的、反國家的、超國家的と認められ、而して、其運動を『社會運動』と名くることか、普通であるが故に、其全體を目して『社會』とする樣になり、其結果、社會の非國家性、超國家性が高調せらるゝこととなつたのである。……

國家てふ容器に盛り上げられた限りの社會運動は、判然と指摘することか出來る。其内外に亘る社會運動の全體は、必判然と指摘することか出來ぬ。唯國家てふ容器に盛り上げられよう／＼として居るものとして、我々の眼に映ずる。畢竟、國家てふ容器は、段々増大し行く社會運動に對しては、其彈力性が、不足するもので、其外圍を外面的に著しく擴大したには相違ないけれども、到底一切を容れ切ることは出來ないのである。』　前掲拙著一四七至一五四頁より摘記。但し若干辭句を修正す

十三

勞働によつて獲得せられた所有が、他人が之を獲得し去らず、其所有者の手に永く維持せられ得るの道は、唯一つしかない。即ち其所有者が繼續して自ら勞働するによりて、其價値を支持すること是れである。

此の價値支持の繼續的努力は、他人に對しては、自己所有の不斷的擴大の努力としてのみ維持せられ得るのである。基督は此道理をいみじくも道破して云ふ『有てるものは與へられて猶餘あり、有たぬものは其有てるものまでも奪はる可し』。有てるものが與られて餘あるのは、單に有つが爲めではない。基督が其喩に示めした通り、三千、二千の金を主人の不在中に、更らに四千、六千に增殖した從僕の爲した如くになすによつてのみである。有てるものは、增すことの努力を爲すものであり、又た其れでなければならぬのである。かくて獲得せられた所有は、單に既收得物たるに止つてはならない。其れは同時に不斷の新收得者であらねばならないのである。收得の淵源は二つある。第一は、所有物の利用による價値の增進、第二は、所有者の勞働力の運用による價値の增進是れである。所有物の利用によると勞働力添加によるとを問はず、價値の增進は、誰人かの手に收得せられる餘剩價値となつて顯はれる。所有をして永く所有の効あらしめるものは、其れが餘剩價値の收得力を有するからであつて、單なる所有の事實によるものではない。經濟學の殊に流通經濟の原理の學問的建立は、此の餘剩價値の收得を發見することによつてなされた。此の發見をしたフランソア・ケネーは、最も正當なる意味に於いての經濟學建立者であつたのである。餘剩收得社會の發見は獨り經濟學を學問たらしめたのみではない。其れは同時に、近世の社會運動の本質、社會運動と政治運動との根本的差異を悟らしむ可きものである。何となれば、政治運動は、單なる所有社會と其運命を共にするものであり、政治革命は、所有社會の終末を意

味するものであつて、而して社會運動は、單なる所有社會に於いて起らず、其れが政治革命によつて幕を閉ぢた後の社會即ち獲得社會に於いて、始めて起るものであるから。

餘剩獲得の努力は、決して突如として起つたものではない。否其れは、經濟社會の發端から存するものである。（後段所引ブュクセンシュツの言を參考せよ）。從つて、經濟社會を說くに所有社會の觀念を以つてせんとする見解は、最原始の經濟社會をだも十分に說明し得るものではない。乍併、歷史的時期の長さから云へば、所有社會と經濟社會とが殆んど一致して居たことは、甚だ長いのである。是れ或學者等――我邦にて其の代表的な學者は土方成美教授である。同氏の種々の論文殊に近刊の同氏著『財政學の基礎概念』自第一章至第三章を見よ――が、所有社會の觀念のみを以つて經濟社會を說くに差支なしと考へる所以である。乍併其れは、所有確定以前の原始經濟社會、否、封建經濟成立に至るまでのあらゆる經濟を說明する力を有せない。況んや、近世の資本主義經濟をや。近世の資本主義經濟は、決して單なる所有經濟社會であるのではない。若し其れであるのならば、近世資本主義經濟に於いて起つた社會運動は、全然無意味なものとなつて仕舞ふ。所有社會の觀念は政治運動と其終端としての政治革命とまでは說くことが出來る。其以後の經濟社會を說くことは出來ないのである。其狀は恰かもデモクラシー主義を以つて、人格解放運動の最高の主張なりとする政治學者の如くである。社會の凡てが國家てふ容器に盛り上げ切れるものとする假設の上に、一切の思索を置く以上は、政治論としては、デモクラシー以上に出づる能はず、經濟論としては、所有社會の觀念以上に出づること能はざるは、蓋し已むことを得ないのである。近世社會運動の理解は、其の不可能の發見の上に立つものでなければならないのである。政治革命――殊に佛蘭西大革命――の眞意義を知つた後にあらざれば、社會運動の本質は之を悟了することと不可能なのである。

十四

政治革命は、單なる所有、殊に等族身分に基く所有、無勞にして收得者たる所有の社會支配に代ふるに、勞働による收得者としての所有を以てしたのである。勞働の結果たる所有は、其れが新收得によつて成立したものなると共に、他に對して自らを維持す可く、絕へず新たなる勞働によつて、其の價値を支持して行かねばならぬといふ約束の下に立つものである。新なる勞働によつて、既得所有の價値を維持するの道は、絕へず餘剩價値を收得するによつて、其の所有を擴大することにのみ存するのである。孔子曰く、未だ進まずして而して退かざるものあるを聞かずと。是れが資本主義社會、餘剩價値社會の眞想である。未だ擴大せずして維持せられ得る所有なしてふことが、資本主義經濟の特徵であるのである。――二十年前の私の論文『企業心理論』『企業倫理論』並に『餘剩價値の宗教』（何れも收めて拙著『經濟學研究』にあり）を參考せられたし――政治革命に於いて行詰りを救はれた單なる所有社會は、獲得せられた所有の社會、從つて又た絕へず獲得の努力を繼續する所有の社會となる。約言すれば單なる所有社會は政治革命によつて終りを告げ、之れに代つて、獲得社會、餘剩收得社會（エルヴェルブス・ゲゼルシアフト・メーアヴェルト・エルヴェルブングス・ゲゼルシアフト）となる。獲得社會、餘剩收得社會のことを、略して營利經濟と云ふ、乍併、此の略稱は或は誤解を招く慮がある――土方教授は私がベジッツ・ゲゼルシアフトと云ふよりも、エルヴェルブス・ゲゼルシアフトと云ふ可きであると、同氏の論文を評した私信に答へて、『私は營利社會の概念を必ずしも必要又は妥當なりと思ふことは出來ません』云々と答へられた。此れは恐らく私のエルヴェルブス・ゲゼルシアフトを單なる營利社會の意と誤解して之を非とせられたものであらうと思ふ――政治革命の最大の意義は實に此點に存するのである。即ち單なる所有

社會を變じて、餘剩獲得の所有社會としたことが——他の點の功過は姑く措き——政治革命の最重の意義であつたのである。何となれば、其れによつて、近世の社會運動が可能となつたのであるから。若しも此の業績がなかつたならば、政治革命は甚だ無意義なものであつたと云はねばならないのである。而して又た、人格解放の運動として、政治運動以外に社會運動が獨立にして、而して更らにより深き、又たより高き意義を有することも亦不可能であつたであらうと思ふ。

獲得によつて成立した所有は、絕へず獲得者たるの實を具ふることによつてのみ維持せられる。獲得者としての所有は二つの要素を有つ。第一は、所有素材と其の價値と利用とである。第二は、獲得者たる所有主自らの有つ勞働力である。第一は第二に從ふによつてのみ獲得者たり得る。フランソア・ケネーは其經濟表の根本思想を此の道理の發見の上に於いて居る。彼がクラス・プロヂユクチーヴと稱したものは、右の第一を第二に服從せしむる階級の謂である。無論其を農業のみに限つたことの誤なることは言ふまでもないが、我々は過を見て茲に仁を知るのである。アダム・スミスに至つては、更らにより正しく、此道理を說いて居る。即ち彼の固定資本、流通資本の區別は、實に此道理の說明たるもので、彼の祖述者の殆んど凡ては、此消息を看破ることが出來ず、唯區別其もののみを繼承し、區別の依つて起る根本の思想を全く忘れて仕舞ひ、マルクスが出で來つて、其の不變資本、可變資本の差別論を以つて、再び此の思想を經濟學に恢復するまでは、全く高閣に束ねられて居たのである。スミス曰く、固定資本は流通資本の助あるにあらざれば收益を産み出すこと能はず、從つて、資本たること能はずと。勞働力の添加あるにあらざれば、所有は獲得者たる能はず、從つて、其の所有は維持せられ能はないことを、スミスは、固定資本、流通資本てふ名稱の分別によつて、的確に說明したのである。マルクスは、餘剩價値を生ずるものは、可變資本のみの爲す所である。不變資本は可變資本の生じた餘剩價値を傳來するのみであると說いた。彼は更らに、利潤率は決して可變資本のみに對して算出せられるものでな

十四

政治革命は、單なる所有、殊に等族身分に基く所有、無勞にして收得者たる所有の社會支配に代ふるに、勞働による收得者としての所有を以てしたのである。勞働の結果たる所有は、其れが新收得によつて成立したものなると共に、他に對して自らを維持す可く、絕へず新たなる勞働によつて、其の價値を支持して行かねばならぬといふ約束の下に立つものである。新なる勞働によつて、既得所有の價値を維持するの道は、絕へず餘剩價値を收得するによつて、其の所有を擴大することにのみ存するのである。孔子曰く、未だ進まずして而して退かざるものあるを聞かずと。是れが資本主義社會、餘剩價値社會の眞想である。未だ擴大せずして維持せられ得る所有なしてふことが、資本主義經濟の特徵であるのである。——二十年前の私の論文『企業心理論』『企業倫理論』並に『餘剩價値の宗教』（何れも收めて拙著『經濟學研究』にあり）を參考せられたし——政治革命に於いて行詰りを救はれた單なる所有社會は、獲得せられた所有の社會、從つて又た絕へず獲得の努力を繼續する所有の社會となる。約言すれば單なる所有社會は政治革命によつて終りを告げ、之れに代つて、獲得社會、餘剩收得社會（エルヴエルブス・ゲゼルシアフト・メーアヴエルト・エルヴエルブングス・ケゼルシアフト）となる。獲得社會、餘剩收得社會のことを、略して營利經濟と云ふ、乍併、此の略稱は或は誤解を招く慮がある——土方教授は私がベジツツ・ゲゼルシアフトと云ふよりも、エルヴエルブス・ゲゼルシアフトと云ふ可きであると、同氏の論文を評した私信に答へて、『私は營利社會の概念を必ずしも必要又は妥當なりと思ふことは出來ません』云々と答へられた。此れは恐らく私のエルヴエルブス・ゲゼルシアフトを單なる營利社會の意と誤解して之を非とせられたものであらうと思ふ——政治革命の最大の意義は實に此點に存するのである。即ち單なる所有

社會を變じて、餘剩獲得の所有社會としたことが——他の點の功過は姑く措き——政治革命の最重の意義であつたのである。何となれば、其れによつて、近世の社會運動が可能となつたのであるから。若しも此の業績がなかつたならば、政治革命は甚だ無意義なものであつたと云はねばならないのである。而して又た、人格解放の運動として、政治運動以外に社會運動が獨立にして、而して更らにより深き、又たより高き意義を有することも亦不可能であつたであらうと思ふ。

獲得によつて成立した所有は、絕へず獲得者たるの實を具ふることによつてのみ維持せられる。獲得者としての所有は二つの要素を有つ。第一は、所有素材と其の價値と利用とである。第二は、獲得者たる所有の所有主自らの有つ勞働力である。第一は第二に從ふによつてのみ獲得者たり得る。フランソア・ケネーは其經濟表の根本思想を此の道理の發見の上に於いて居る。彼がクラス・プロヂユクチーヴと稱したものは、右の第一を第二に服從せしむる階級の謂である。無論其を農業のみに限つたことの誤なることは言ふまでもないが、我々は過を見て玆に仁を知るのである。アダム・スミスに至つては、更らにより正しく、此道理を說いて居る。即ち彼の固定資本、流通資本の區別は、實に此道理の說明たるもので、彼の祖述者の殆んど凡ては、此消息を看破ることが出來ず、唯區別其もののみを繼承し、區別の依つて起る根本の思想を全く忘れて仕舞ひ、マルクスが出で來つて、其の不變資本、可變資本の差別論を以つて、再び此の思想を經濟學に恢復するまでは、全く高閣に束ねられて居たのである。スミス曰く、固定資本は流通資本の助あるにあらざれば收益を產み出すこと能はず、從つて、資本たること能はずと。勞働力の添加あるにあらざれば、所有は獲得者たる能はず、從つて、其の所有は維持せられ能はないことを、スミスは、固定資本、流通資本てふ名稱の分別によつて、的確に說明したのである。マルクスは、餘剩價値を生ずるものは、可變資本のみの爲す所である。不變資本は可變資本の生じた餘剩價値を傳來するのみであると說いた。彼は更らに、利潤率は決して可變資本のみに對して算出せられるものでな

く、總資本に對して算出せられるものなることを說いて、獲得所有維持の行程―彼れは之を價値增進の行程（フエルヴエアトングス・プロツエツス）と名けた――を詳かにしたのである。此說明は訂正を要することと勿論ではあるが、少くとも、其れは、所有社會即經濟社會論比するときには、或はコペルニクス回轉とも稱し得可き進步たることは、一の疑を容れる餘地はないのである。

餘剩價値獲得行程としての勞働に服從する所有は、其の利用と其價値とを以つて、資本となる。資本が勞働する所有者の手にあるとき、其れは獲得資本となる。此の獲得資本は唯一の獲得者ではない。其れと相並んで獲得者たるものは、所有と離れた單純なる人間の働きである。其れは即ち單純なる勞働力である。單純なる勞働力は、今日の資本主義經濟に於いては、必ずしも所有の獲得者たるのではないが、所有の獲得に向つて努力するものであることは同一である。爲さゞるに非ず能はざるのみである。何んとなれば、勞働力が所有に到達する爲めには、現在の經濟生活に於いては、其勞働の對象たる素材を所有することを要する。然るに此素材は、獲得資本に屬し、獲得資本主の手に存する。從つて、所有に到達し得んが爲めには、凡ての勞働力は、先づ既存の獲得資本に服從することを餘儀なくせられるのである。他方に於いて、アダス・スミスの說いた如く、獲得資本も亦獲得者たり得ん爲めには、必ず單なる勞働力の力に須たなければならない。殊に所有の量が所有者の勞働力を超過すること遙かに多いことを原則とする今日に於いては。

十五

斯くの如くにして、政治革命の後に來るものは、單なる所有階級と無所有階級との對峙でなく、獲得資本の所有者であり、あらゆる價値增進、あらゆる餘剩價値獲得の機會の專有者たる所謂資本階級と、其の機會を一も有せず、單に勞働

力のみの所有者であり、單に生存を支へ得る——若くは得ざる——無資本勞働階級との對峙である。此の對峙あつて始めて、社會運動は起るのであり、又た其れが人格解放運動の旗手たることが有意義となるのである。

資本の獲得があらゆる經濟的獲得の標的となつた現代に於いては、此の資本獲得から疏外せられることは、人格の解放を不可能ならしめられることである。單なる所有社會に於いて、所有から疏外せられることが、人格の自由から疏外せられることであつたと同じに、獲得の社會に於いて、獲得の機會から疏外せられることは、人格自由の要求と正面的に衝突するのである。人格の蹂躙、非人格の人格壓迫は、所有社會に於けると、獲得社會に於けるとでは、其の取る所の形態は甚だ異つたものではあるが、其れが蹂躙たり、壓迫たることに至つては、同一であるのである。不自由と矛盾とは、政治革命によつて毫も一掃せられるものではない、唯だ其の形態に變化を招來したのみであつて、不自由と矛盾とは今や新なる面目の下に再び社會に起り來るのである。

此の矛盾は、一方が餘剩の上に立ち、他方が餘剩と全く無關係なるより起るのではない。資本も勞働も、其活動の動源は一に餘剩の產出と其の收得の努力とに存して居るのである。此の產出と其の收得の努力とを總稱して營利主義（エルヴエルブス・プリンチツプ）と云ふ。此意義にての營利主義は資本のみを支配すると考ふる人が尠からずあるが、其れは大なる誤謬である。營利主義は、資本と勞働とを一樣に支配して居るものである。資本的企業家のみが、營利經濟の負擔者たるのではない。雇傭勞働者も亦同樣に營利經濟の負擔者である。唯其の異る處は、雇傭勞働者にあつては、契約所得たる勞銀から生計維持の費用を控除したものが餘剩であつて、其れのみが、彼等が資本を獲得し得る資源であるのに反し、資本的企業者の餘剩は、殘高所得たる利潤であり、利潤は同種倍加の行程を經過し、其生るゝとき既に資本たるものであること之れである。勞銀は生るゝときは、此の資本性を些しも帶びて居らぬ。複雜なる過程を經て初めて資

本となり得るに過ぎないものである。蛇は一寸にして既に人を呑むの概あり、利潤は如何に小額であつても、他日大なる資本となる可き樣子を具へて居るものである。否其れのみではない。勞銀が生計維持費を支辨して猶餘ありや否やは初からは分つて居らぬ。否寧しろ其正反對に、甚多くの場合に於いては、餘なきことが、初めから分つて居るのである。營利的たらざるのでなく、然あり得ないのである。是れ勞銀所得が、原則として非營利的にして、自定的——ゾムバルトの語を藉りれば欲望充足的——に見へる所以である。此外觀を透視する能はざる甚だ多くの學者が、勞銀の本質を、一概に自足的にして非營利的なりとするは、言ふまでもなく、誤謬に相違ないが、然し此誤謬の普く行はれことには、一應の辯柄は存するのである。

かくて、資本は絕へず同種倍加を爲し、亘刻も休息せざる價値增進努力の唯一の負擔者であり、勞銀は自足自給主義の代表者たるかの如くに誤り見られ、不斷增進擴大の行程中にある資本は、其れが獲得資本たるの實を擧ぐる爲めには、其成立に於けると同じく、其の擴大發展に、必ず勞働の助けを藉らなければならないものであることが、全く忘却せらるるに至つたのである。否、此の誤りに陷らなかつたマルクスも、資本主義經濟の終端は消費にありとし、從つて資本主義經濟は一の內在的矛盾を有するものなりと主張したことによつて、折角の正しき觀察を不徹底的たらしめたのである。資本の自己擴大の努力は其の生命であり其の最根本的特質である。此の自己擴大は、外來的には制約せられる。何となれば、其は勞働の助けなくしては行はれ得ないものであるから。其反對に、此の擴大の傾向には內在的には、一の制約をも有して居らぬものである。內在的制約を有さないと云ふことが、資本の資本たる所以であつて、其れを有するとき、資本は所有ではあるが、資本たる性質を失ふものである。私が河上博士の甚だ有力なる非難——度々繰返して力說せられたる——あるにも拘らず、資本經濟內在矛盾說に極力反對する所以は此一事を確信するからである。

凡ての勞働所産が結局消費し盡さるゝものならば、消費者餘剩――マーシアルの力を用ゐて說いて居る所の――はあり、其の享受的收得はあらうが、生產者餘剩はあり得ない。生產者餘剩なくしては、資本は維持せられ得ない。資本は其存在其ものに於いて、生產者餘剩の繼續的收得を前提するものである。何んとなれば、新資本の形成、資本の增大に充つ可き餘剩は、生產者餘剩であつて、消費者餘剩ではないから。否、資本の形成――カピタル・ビルデング――と云ふことは、大抵の場合に於いては、必竟する所、消費者餘剩を轉じて生產者餘剩となすことの謂に外ならず、所謂資本形成者としての貯蓄とは、此の轉化の別名たるに外ならないのである。

十六

資本的企業者の手に殘高所得として殘る利潤は、生產物の價値から、一切の費用價値を控除した殘高である。費用の中重なる部分を占めるものは、支拂勞銀高である。生產能率同一にして、生產價値同一なるものとすれば、支拂勞銀の高は、利潤の高に反比例する。但し價格のタームスに於ては必ずしも左樣ではない。何んとなれば、價格のタームスに於ては、資本的企業者は支拂勞銀高の增加を自己生產物の買手をして支拂はしめて、自己の利潤はこれがために影響を被らないようにする可能を有ち、而してあらゆる場合に於て、此可能を利用することを怠るものではないから。其れは實に於ては、消費者餘剩の生產者餘剩への轉化の一方法たるに外ならないのである。資本的企業家は、兩面に敵を有する、一面には、勞働者の所得、他面には、一般購買者の所得是れである。彼は、場合の許す限り、其一又は其二をも取つて、自己餘剩の增大を圖るものである。否、圖らねばならぬものである。かくして彼は、自己以外の誰人にも、生產者餘剩の收得、從つて資本の收得を不可能ならしめ、己れのみが其の可能を獨占せんとするものである。是れは、

資本の本質から出て來る要求である。資本は誰人が其所有者であるに頓着なく、資本所有者でさへあれば、其人をして、餘剩の收得者たらしめ、其人以外の誰人をも餘剩の收得者たらしめないことによつて、最もよく自家の本質たる同種擴大の使命を盡し得るものである。競馬の騎手は、已れの乘れる馬のみ疾走せんことを欲する、他の馬の疾走せんことは、決して之れを希ふものではない。

かくして資本主義經濟に於いては、無資本勞働者には、資本獲得のあらゆる機會が閉されんとするのである。勞働者は、雇傭關係に於いて、資本の從屬者とならねばならぬものであるから、資本は最も徹底的に、此の機會封鎖を行ひ得るのである。雇傭關係に入り込み來らざる生產物の買手に對しては、此閉鎖は行はれ得ることあり、然らざることあり、完全閉鎖を行ふことは出來ないのである。完全閉鎖の對象たる雇傭勞働者に對する其の完全封鎖は、原則として、其支拂ふ勞銀の額を、資本獲得を可能ならしめざる限度に限ることによつて行はれるのである。かくして資本對勞働の對峙の第一の形が與へられる。即ち、資本は、勞働の無資本性、勞働の資本獲得不可能性を、永續的のものとす可く全力をあげて盡くす所の一大權力たるの形ちを取るのである。此狀態の永續的となつたのが、普通資本主義と呼ばれる處のものである。是れ實に、獲得社會の第一の形態である。

此の形態に於ける獲得社會は、政治革命を持つて成立したものであつて、政治革命前期に屬する所有社會とは、明白に而して顯著に異る所のものである。所有社會に於いては、所有無所有の事實が、階級を裁斷した。即ち所有階級は、單に所有者たる丈けで其存在をジアスチフアイし、自ら勞働に從事することはない。從つて、無所有階級たる勞働者は、勞働に從事することによつて、所有者となり、形式上には認められないが、實質上には、支配階級と全く同一のものとなる可能を有して居るのである。之れに反し、獲得社會に於ける支配階級たる資本階級は、企業者として、最も有

力に働くものであり、働かなければ、企業者たり得ないものである。而して企業者は、自ら働らくによつて、資本獲得のあらゆる機會を獨占し得、又た事實上獨占するものであつて、而して他の資本なくして働く雇傭勞働者を、永續的に、事實上資本獲得の一切の機會から疏外して居るのである。所有社會に於ける被支配階級は、其の實質に相應する形式が與へられないために惱んだのであるが、獲得社會に於ける被支配階級は、形式は勿論のこと、實質を得る機會さへも拒まれて居るために惱むものである。後者の惱みは前者に比すれば、遙かに大に遙かに深いものである。前者の惱みは、政治運動を喚起した、後者の惱みは社會運動を生ずる。されば社會運動が政治運動に比して、遙かに痛切な、遙かに深刻な運動であることは、誠に當然なことであるのである。

十七

與へられたる我々の生活運營に於いては、所有と獲得（ベジッツとエルヴエルブとを對立することは、希臘に就てプュクセンシュッツの試みたのが最も早い而して有力な試みであつた。B. Büschsenschütz, Besitz und Erwerb im griechischen Altertume Halle 1869. Besitz und Erwerb stehen in einem solchen nothwendigen Zusammenhange, dass sie sich gegenseitig bedingen; denn einerseits ist der Sache nach der Erwerb das frühere indem er den Besitz erst schafft, und stets als dauernde Grundlage desselben zu betachtein, sofern er die durch Benutzung verbrauchter Besitzstücke ersetzt oder erneuert, andererseits verlangt der Erwerb in den meisten Fallen gewisse Hilfsmittel, die wiederum unter den Besitz gerechnet werden müssen, insoweit sie nicht allen gemeinsam von der Natur geboten werden. SS 3—4）とは、人格の自主、自決の完全なる實現に缺く可からざる條件であり、又た、

其の内容である。此條件を獲得し、此内容を具備することが、人生の運動の標的である。社會運動は、今日までに知られて居るあらゆる人生運動中、此の獲得此の實現に最も近く肉薄する所の運動と見らるゝときに於いて、始めて其の眞意義を有つものである。此の獲得、此の實現は、其運動の標語とせられて居る所の平等の實現とは、決して同一なるものではない。否、其れらへの行程とも見らる可きものではないのである。社會運動は、此の標語を掲ぐることによつて益したことは甚だ多い、併し乍ら其れと同時に、此の爲めに損したことも決して尠くないのである。平等の標榜は、事實との矛盾である計りでなく、人格解放の觀念其ものと衝突するものである。何となれば、人格性は個人性と相伴つて始めて生きるものである。人格は平等であるが、個人は差別的である。個人性なき人格性は、根のない植物である。所有と獲得とは、人格的事實であると共に、個人的事實である。一の社會に於いて、其社會の發展の程度の許す限りの個人性が所有と獲得との主體たるのである。

資本と勞働とが社會を二大階級に分つこと其の事が、人格性の壓迫となるのではない。資本と勞働とが經濟上に於いて全然絶縁せられることが、人格性の壓迫となるのである。換言すれば、資本の獲得へ導かざる勞働と、勞働の作用を經過せざる資本との存在が人格性の實現を妨ぐるものである。後の矛盾は、政治運動によつて、一應は取除かれた。從つて、政治革命の後に來る社會運動は、主として資本へ導かざる勞働の其導きの恢復運動に集中せられねばならぬのである。社會運動の歸趣は、資本、勞働對立の廢止ではない。何となれば、資本の廢止は、勞働の眞意義の沒却であるから。凡ての勞働は、人格發展の具體的條件としての餘剩價値收得による資本獲得者たるの實を具備することによつて、人格性實現の行程たり得るのである。凡ての勞働を資本へ導け、凡ての資本を勞働の結果たらしめよ、此れが社會運動の標語でなければならないのである。

乍去、今日までの社會運動は、決して此の標語によつて指導せられたものではない。是れ、政治運動に於けると異り、社會運動は、先づ社會革命運動の色彩を帯び、社會改良運動は、却つて最終の階段として起り來つた所以である。就中、一切の資本を廢止す可しと云ふ意味にての共產運動が、殆んど凡ての國に於ける社會運動の第一期を形づくて居居る以所である。

共產運動は、社會運動としては、一の過渡的產物と見られ得る。此意味に於いて、其れは純粹ならざる一の社會運動である。何となれば、其れは、之れを希ふと希はざるとに拘らず、結局獨裁政治へ導き行くものであるから、獨裁政治への導き行きは、社會運動の本來の面目を着色するに、再び政治運動の舊塗料を以てするものである。資本の廢止、資本の共產てふ無理な要求は、其れが表面的には、――アナルコ、コムニズムに於いて――無政府主義と相伴はしめられて居るに拘らず、最も大なる助けを國家と其憲法とに期待するものである。社會運動が一度脫却した舊態たる政治運動に落ち行くのは、此れが爲めである。而して獨裁政治の行詰りを十分に體驗した社會運動にして、始めて眞個の社會運動となるであらう。其日は未だ曙光を認め得るに過ぎない。唯だ最も進步した社會運動の行はるゝ國に於て、我々は、稍々捕捉し得可き或ものを見出すのである。其れは即ち英國に於ける勞働黨內閣の成立が、我々に暗示する所である。政治の社會化、政治運動の社會運動化、政黨の社會化などと云ふ言葉を以ては、此の新しい趨勢は、十分に言ひ現はし得ないほど、其意義は重要なのである。此等の言葉は唯極めて漠漠と、時流の趨り行く所を言ひ表はすに過ぎない。根柢を流るゝ潮流は、モツト深刻な意義を有するものである。

十八

社會運動は、政治運動から展開し來つたものである。從つて、其れは、政治運動と全く絶縁せられ得ないものである。唯だ、兩者の接近に、二つの極端に相反した道行が存在するのである。一つは、プロレタリヤの獨裁政治に於て、現實の通例を見る所のものであり、一は、英國勞働黨內閣の成立に、一部の趨勢を現はした所のものである。

右兩者の差異を生ずるものは、理想的標語たる平等と、現實生活に於ける資本と其獲得の機會との連續の態樣の差異是れである。單に勞働のみを有し、其れを資本獲得の機會へ導き行き得べき可能を有せざる勞働階級は、一體としての意識と一致とを永く缺いて居たものである。彼等は烏合の衆であつて、一體の統一體を形くつて居らなかつた。社會上の地位と經濟上の運命とを共通に有し乍ら、統一的意思を有する一體とはなつて居らなかつた。唯だ政治上に於いて、作爲的の團體が存して居たに過ぎぬ。而も其れは政黨と稱する虛僞の團體であつた。彼等を結びつけるものは、政見と稱する甚だ漠然たる、現實の生活に根柢を有せざるプログラムたるに過ぎなかつた。殊に普通選擧權と云ふ曖昧な要求が、彼等の共同の陣地であつた。デモクラシーと稱する不徹底な主義が、彼等の政治綱領であつた。初めの社會民主黨は、此等のものによつて結成せられた烏合の衆であつたに過ぎない。其れは、理想的標語たる平等てふスペルが成した處である。乍併、一度社會民主黨に團集した彼等は、漸くにして現實に目覺める可き機會を與へられた。彼等は現實の生活の中から、統一的の意思――之を名けて階級意識と云ふ――を得るに至り、玆にプロレタリアの眞の一致が成立することとなつた。階級意識を得たとは云ふが、其れは、平等てふ魔語に囚はれて居ることは、依然たるものであつた。從つて彼等は、ブルヂオアの階級に對する其挑戰を平等の名に於いて開始した。而して、其れが、早急に政治運動へ下降し行くとき、其處に社會革命が現るるのである。

社會革命とは、平等の名に於いて、事實は、プロレタリアの階級が、國家に於ける支配政權を、力――暴力――によ

つて、自己の手に收めることの謂である。標榜する所は平等であるが、事實は、一階級の獨裁のみが、其結果である。プロレタリア獨裁は、社會運動の早急的にして飛躍的なる政治化である。而して其れは、人格解放運動としての完全なる妥當性を有せざるものである。何となれば、其れによつて實現せらるゝものは、更らにより大なる不自由社會であるから。プロレタリア獨裁は、勞働の結果たる資本を、勞働の結果たらざる所有へ轉化するものであつて、獲得社會を一變して、無償收得——掠奪又は贈與——社會とするものである。其の矛盾は、今迄に存した何れの矛盾よりも、更らに大なるものたらざるを得ないのである。

資本が勞働の結果たり、凡ての勞働が資本へ導かれ得可き社會を實現せんとする社會運動は、右の如き社會革命ではなくして、社會改良でなくてはならぬ。獲得社會の顚覆でなくして、其の進化的改造でなくてはならぬ。其は社會運動の政治運動への命がけの飛躍（サルトム・モータ―レ）によつて成され得可きものでなくして、社會運動の漸進的進展により、政治運動を健全化し、之れを自己の補助者若くは道案內者とするものでなくてはならぬ。私は、英國に於ける勞働黨內閣の成立は、此の健全化、此の包括力の充實の一着步であるものと見て、深い興味を覺ゆることを禁じ能はぬものである。——意味は違ふが、私は日本勞働總同盟の近時の傾向も亦粗ぼ正しき道を辿り行きつゝあるものと考へる——何となれば、其れは、社會運動の政治化でなく、政治運動の社會化を意味するものと信ずるから。政治運動の社會化は、恰も社會運動の政治化が先づ普通選擧權の實施において始まつた如く、普通選擧制度を比例代表制にまで進め行くことから始められなければならぬ。比例代表制度の重大なる意義は單なる一の政治運動としてゞなく、政治運動の社會化たることに存するものと信ずる。

而して其れと同時に、政治上に於て、單に憲法の變革が意義を有する時代は過ぎ去り、行政の社會化が重大なる意義

を有する時代――之を此の頃の言葉で社會化と云ひ、古き言葉では社會改良と云ひ、又は社會政策の建立と云ふ――が來らねばならぬものと信ずる。かくして、社會運動に於ける政治運動は、始めて其の眞使命に目覺めることが出來よう。然らざる限り、政治運動は社會運動に對しては、一の誘惑者、一の攪亂者として、永く累を及ぼすことを已めないであらう。

(十三・四・四)

墺太利に於けるケルゼンとアドラーとのマルキシズムの國家觀に關する近時の論戰、クノーの近業、ケルエンの諸研究、翻つてはグムプロヴヰッツ又はヲッペンハイマー、トエニス等の、マルクス、エンゲルス等の國家、社會觀其れ等は、或は意識し、或は意識せずして、多かれ少かれ彼のフオン・シュタインの破天荒に卓越した思想の感化を脱して居ないものであると思ふ。私は社會政策の果樂に於いては常に而して深くシュタインの影響を免れないものである。此一文も『社會政策と階級鬪爭』の諸文に於けると同樣に然るものである。誰か云ふシュタインは七十年前の舊思想家であると。彼はソヴォエット國家の到來を千八百五十年に於いて既に明白に豫言して居るではないか。

日本に於ける民主主義の發達と無産階級運動

山川　均

一

私は曾つて或る人から、日本の勞働者と社會主義者とは、何故に普選運動に參加せぬかと云ふ質問を受けたことがある。この質問には、吾々の態度に對する不滿の意味が含まれてゐた。そして日本の勞働者と社會主義者が選擧權獲得の運動をやらぬといふことは、殆んど解すべからざることゝ思はれてゐたらしかつた。然しながら私に取つては、今日まで日本の勞働階級が、大體に於て、選擧權獲得運動に參加せぬ態度を取つて來たのは、實際の必要に出でたものであつた。日本の無産階級運動、ことに勞働組合運動の現狀が、これを必要としてゐたのであつた。そしてこの『必要』はまた、日本の資本主義の特殊な發達狀態に基づく根底のあるものであつた。その頃も在野黨の年中行事の一つとして、普選運動が頻りに景氣附けられてゐた。そして之に對する無産階級の態度が、多少世間の問題になつてゐた。そこで右の質問に答へて、日本の無産階級が何故に普選獲得運動に參加せぬかを說明した私の答を骨子とし、更らに之を布衍して發表したものが、『普選運動と無産階級の戰術』であつた。

私はこの文章のうちに、二つの事柄を主張した。即ち第一には、資本主義の特殊の發達狀態の結果として、日本のブルジョアジーは今日に至るまで、先進國のブルジョアジーのように、政治上のデモクラシーを完成しなかつた。そして今後といへども、恐らく日本には、標本的のブルジョア民主國と同じ程度には、ブルジョア・デモクラシーの完成せらるゝ機會は無い。そこで今後の日本が、政治上のデモクラシーの時代を通過するこ

したならば、それは多かれ少かれ、縮約され省略された、變則的の形で通過するに相違ない。そして無産階級の一般的な戰術は、この事實を根底として決定しなければならぬと云ふことである。

第二には、今若し假りに無産階級に選擧權が與へられたとしたならば、吾々はこの選擧權を如何に利用すべきであらうか。私は第一の考察を、直ちに問題に當て嵌めて見た。そして其の他の事情（例へば、無産階級の政治運動に必要な準備や機關の有無など）は暫らく別として、唯だ前述の考察からしては、積極的大衆的の棄權運動が――若し可能とすれば――與へられた選擧權を最も有效に利用する方法であると主張したのである。

然るに其の後に於ける無産階級運動の實際によつて、積極的大衆的の棄權運動に可能性のないことが、だん／＼に證據立てられて來た。そして此の時から僅かに二年を隔てた今日――そして普通選擧の實現がよほど間近に迫つて來た今日――となつては、積極的大衆的の棄權運動には、全然可能性のないことが明白になつて來た。

棄權說の失敗を明白にした事情には色々あるが、日本の無産階級運動のうちに、農民運動の占むべき位地が、急速に大きくなつたことは慥かに其の一つである。そして昨秋の府縣會議員選擧に於ける多少の經驗も、また其の一つである。そして是等の事實が、意識的にも無意識的にも、勞働組合運動の方面に反響を與へたことも事實である。

いづれにせよ、そして其の理由は何所にあらうとも、組織せられた無産階級（勞働組合と小作人組合）の殆んど全部に近い大多數が、いよ／＼普通選擧が實施せられたなら、投票權を行使するといふ大體の考へに傾いて來たといふ事實そのものが、棄權運動の不可能を決定的に證據立てたものである。ブルジョア・デモクラシーの時代を最も短時日に經過するためには、積極的大衆的の棄權運動は、考へ得られる最も有效な戰術である　そしてブルジョア・デモクラシーの時代を、多かれ少かれ短時日に經過してしまふと云ふことは、日本に於ける資本主義の特殊な發達狀態に應じた、無産階級の戰術の根底でなければならぬ。けれどもそれにも拘らず、積極的の棄權運動は、その他の條件の上から見て、その他の形勢の上から見て、到底行はれ得ぬことが明かになつたのである。

組合に組織された工業勞働者と農民とは、無産階級のうちの尙ほ一少部分である。けれども若し積極的大衆的の棄權運動が行はれ得るとしたならば、それは是等の少數者たる組織された工業勞働者と農民とが、無産階級の大衆を指導する時に、初め

て行れ得ることである。然るにこの工業勞働者と農民の組合の大多數が、既に投票權行使の態度を定めたとすれば少くとも、近き將來に於ける普選實施に對する當面の方策としての棄權運動については、最早や問題は殘されて居らぬ筈である。棄權說の主張は全然敗れたものである。

少くとも普通選擧による第一回の總選擧を、積極的にボイコツトすることは、無產階級の政治行動の意識を一層明白に確立し、將來、議會運動に參與する場合の危險を最も少くする上から見て、固より望ましいことであつた。けれども最も望ましいことが、必ずしも最も可能的なことではない。吾々は積極的に棄權することが出來なければ、吾々は積極的に投票權を行使しなければならぬ。如何なる場合にも、吾々は政治的冷淡から來る投票權の無關心な行使にも、無關心な不行使にも、極力反對しなければならぬ。

そこで私の前論の第二の論點については、爭ふことの出來ない事實によつて、今日では最早や全く問題がなくなつたものである。けれどもそれと同時に、棄權說は如何なる意味で不可能であつたか、また棄權說の不可能と第一の論點との間には、如何なる關係があるかを、今一度考へて見ることは、必ずしも無益でないと思ふ。

二

先づ第一に日本のブルジョアジーは今日までに、政治上のデモクラシーを完成して居らぬ。これは恐らく、何人にも異論のないところであらう。けれども精密に云へば、日本のブルジョアジーがデモクラシーを發達せしめなかつたと云ふことも、固より程度の問題である。既に憲法が制定され、代議政治が樹立され、法治主義の原則が認められ、人民の言論、集會、結社の自由が、憲法の明文によつて保障せられてゐる以上は、是等の政治上の形式が、實に於いては、如何に中世紀的專制政治とブルヽクテー目ニ、ア[illegible]トミシツプの精神によつて無效にされてゐようとも、日本にも或る程度のデモクラシーが發達してゐることは爭はれぬ。そこで日本のブルジョアジーは政治上のデモクラシーを完成しなかつたと云ふことは、固より日本には、政治上のデモクラシーが少しも發達しなかつたと云ふ意味ではない。否日本に於いても、ブルジョアジーが漸次に政權を確立した結果は、多かれ少なかれ、政治の民主化といふ方向を指して進んでゐるのである（例へば政黨內閣制の確立）。

第二には、今日まで政治上のデモクラシーを完成しなかつた日本のブルジョアジーは、今後に於ても、政治上のデモクラシ

ーを完成する機會がない、即ち日本には、民主化した先進資本主義國のような、ブルジョア・デモクラシーの實現を見ずして終ると云ふ、私の第二の主張に對しては、第一の主張のように、多くの人々の同意を得られぬに相違ない。何故ならば現に可なり多くの人々は、今日、日本に政治上のデモクラシーが完成せられて居らぬのは、たゞ政治上の進歩が『後れてゐる』ためだと解してゐるからである。この見解によれば、たゞ進歩が『後れてゐる』のである。そしてこの『後れてゐる』ところの政治的進歩、今後の發達によつて追ひつかるべきものである。日本はこれから、ぼつ〳〵、ブルジョブ、デモクラシーに向つて進むべきものであり、進みつゝあるものである。

この二つの見解のいづれが正しいか。それは勿論、いろ〳〵の論據によつて論議することが出來る。けれども何人をも首肯せしめる最後の決定は、唯今後の事實によつて證明せしめる外はない。

然しながら此の點につけても、特に附け加へておかねばならぬことは、日本の今後にブルジョア、デモクラシーが完成されぬと云ふことも、固より程度の問題だといふことである。

(一)標本的の民主主義國に於いて、民主政治が樹立せられたのは、大體に於いて、新興のブルジョアジーが、革命階級として擡頭した時である。ブルヂョアジーは中世紀的の專制政治を覆へして、多かれ少かれ革命的民主政治を獲得し、樹立したものである。

(二)斯くして革命的に樹立せられた民主政治は、資本主義の自由主義平和主義の時代に至つて、新進氣鋭の商工階級の手によつて精練され、完成せられたものである。

(三)そして民主政治を樹立してから完成するに至るまで、當年のブルジョアジーは、その背後には、一般大衆を、眞實の味方として居つた。言葉を換へて云へば、ブルジョア・デモクラシーの確立は、ブルジョアジーの事業であつたと同時に、一般民衆の事業であつた。

然るに現在の日本は、精密に以上の三點に於いて、形勢が非常に違つて居る。

(一)日本のブルジョアジーに、最早や新興階級としての、革命的精神の消え失せてゐることは云ふまでもない。否な反對に、日本のブルジョアジーは中世紀的專制政治の遺物と抱合することによつて、その政權を確立したものである。

(二)今日の日本には、政治上の自由主義となつて現はるべき經濟上の基礎がない。言葉を換へて言へば、資本主義の自由主義的性質がない。日本の資本主義は、明かに帝國主義を必要と

し、帝國主義の上に立ち、帝國主義を特質とする發達段階に達してゐる。

（三）そして日本のブルジョアジーは、最早その背後に、絶對に忠誠な民衆を持つては居らぬ。否なブルジョアジーは却つて其の脚下から階級的に目醒めた無產階級の擡頭によつて斷へず威嚇せられてゐる。

斯やうな形勢の下に、日本のブルジョア・デモクラシーは是から順當な標準的な發達をして、『後れてゐる』進歩を取り返へし斯くて地球の全表面が反動主義とブルジョア・ディクテトルシップの荒野と化してゐる時に、獨り東方の花彩列島に時ならぬ自由と民主の花を咲かせるものと想像することは、不可能でなければ至難である。

そこで日本のブルジョアジーは、今日までにデモクラシーを完成しなかつたように、今日以後も、恐らくデモクラシーを完成する機會がないと考へることは、最も合理な豫想と云つてよい。

三

然らば今後の日本には、政治上のデモクラシーが、決して今日以上に發達せぬかと云へば、必ずしもさうでない。否な反對に却つて政治上のデモクラシーの發達すべき、幾つかの條件を缺げることが出來る。

（一）ブルジョアジーは無產階級と對立した時には、一ツの階級には相違ない。けれどもブルジョアジーの內容は、必ずしも純一でない。否なその內部の利害は、常に相反して居る。例へば英國の保守黨と自由黨の一部とは、政權が勞働黨の手に移ることを阻止するためには、他年の政敵たる兩黨が、舊怨を棄てゝ協力しなければならぬと主張した。けれども一朝勞働黨といふ共同の敵を取り去つたなら、保守黨と自由黨との間には、直ちに政權の爭奪戰が行はれる。否な現に英國の自由黨は、保守黨に政權を握らせぬためには、却つて勞働黨を助けてゐる。或る財閥系統と他の財閥系統の間には、必ずしも利害が一致せぬ。そして或る種類の資本と他の資本との間には、少くとも當面の利害が相反してゐる。そこで同じブルジョア政黨が、幾つか分立することになる。そしてブルジアョジーの內輪同士で、何づれの一團が直接政權を握るかといふ、政權の爭奪戰が行はれる。そしてこの政權爭奪の鬪ひに勝つためには、ブルジョア政黨は、民衆を味方としなければならぬ。斯ようにブルジョアジーの內部に於ける政權爭奪の鬪ひは、知らず〱の內に、一般民衆の勢力を誘致し、知らず〱の內に民衆の要求を容れ、政治上のデモクラシーを發達せしめる機會となる。現に日本では、ブル

ジョア政黨の爭ひによりて、普通選擧の實現が促進されたのは其の實例である。

普通選擧の實現が、果してどの程度まで、日本の政治を實質的に民主化するかは疑問である。けれども唯だ形式の上だけにもせよ、それは疑ひもなく、政治上のデモクラシーの一歩前進には相違ない。

謂ゆる官僚內閣によつて選擧權の擴張が行はれたり、多かれ少かれ進步的なその他の政策が實行されるのも、之と同じであつて、要するに彼等が政權を獲得し、若しくは政權を維持する必要が、たまたま政治上の民主化の機緣となつて居るのである。

日本の今後に於ても、斯ような形勢が、政治上のデモクラシーを發達せしめる機會となることは疑ひがない。けれども其れ故に、今後の日本には、政治上のデモクラシーが累積的に進んでゆくとは、必ずしも云はれない。斯ような形勢を生じるのは、ブルジョアジーが民主的な性質をもち、民主的な目標を指して進んでゐるからではなくて、要するにブルジョアジーが政權を掌握し、政權を維持するための必要に基づいてゐるだけである。從つてそれには、一定の限度がある。況んや政治の形式の上の民主化は、必ずしも政治上の實質の上の民主化を伴ふものではない。普通選擧の實現は、政治の形式の上では、明かに民主化への跳躍である。けれどもそれ故に、普通選擧下の日本に於いても、英國の無産階級が公然掲げてゐる綱領と同じ綱領を掲げて、選擧運動が出來るとは限らない。否な反對に、形式の上では民主主義が一步を進めても、實際に於ては、政治上の自由は却つて奪はれるといふことも、考へ得られることである。現に政府は、最近の臨時議會に普選に近い選擧權の擴張を提案すると云ひ、比較的進步した勞働組合法案を提出すると傳へられ、從つて治安警察の一部改正をも企てゝゐると云ふことである。然るに一方には、勞働組合の大會に於ける代議員の言論が、起訴されるとかされぬとか、日本以外の國では殆んど想像も出來ないことが傳へられて居る。それは差引き、政治的自由の進步であらうか。それとも退步であらうか。そして斯ような政治の形式の上の民主化と、實質の上の專制政治化とは、決して相伴ひ得ぬものではない。否な一度び自由主義の精神を失ふて反動主義化したブルジョアジーが、その內部に於ける政爭のためや、乃至は自己の政權を維持する必要のために、進步的な政策を以つて民衆を利用する場合には、大抵は左の手で與へられたところのものは、右の手で取り返へそうとするのである。そこで斯ような動機から促進せられた政治上の自由は、何時でも、そして何等かの方法で、取返へされ得るものであつ

て、斯ような少しづつの進步が累積して、究極は政治上のデモクラシーが完成せらるといふ、何等の保障もないものである。けれども兎にも角にも、斯ような動機からして、今後の日本に、多かれ少かれ政治上のデモクラシーが進步することは、決してあり得ぬことではない。

（二）ブルジョアジーの內部には、或る財閥系統と他の財閥系統、或る大資本と他の大資本、大地主と大工業との內に、利害の對立があるばかりでなく、資本の集中が進めば進むほど、財閥、大資本家、大地主の階級の利害と、一般商工階級の利害とは、必ずしも一致せぬことになる。そしてブルジョアと純粹の無產階級との中間には、どちらとも附かぬ中間的の階級がある。そして是等の中間的の階級は、意外に多數である（このうちには知識分子の多數を含んでゐる。また事實上の無產者であつて、しかもブルジョアに近い心理をもつてゐる全べての小ブルジョア分子を含んでゐる）。そして彼等の利害は、財閥、大資本、大地主などの階級の利害といふよりは、寧ろ一般商工階級や小資本の利害と一致する。そこで一般商工階級、乃至は大資本に對する小資本の階級は、その階級本來の利害から云つても、また中間階級の勢力、進んでは無產階級の勢力をも味方として大資本にあたる必要から云つても、勢ひ財閥と大資本と大地主の反動主義に對して、多かれ少かれ進步主義を取り、露骨なブルジョア專制政治に對して、多かれ少かれ自由主義を取ることになる。例へば英國の保守黨に對する自由黨や、米國の二大ブルジョア黨を橫斷しようとする謂ゆる第三黨の運動がその實例である。

日本ではこの運動の先き觸れとなつたもの、乃至はこの運動が思想的に現れたものが、即ち數年前に、一時高潮に達した小ブルジョア民主主義（乃至は民本主義）であつた。普通にこの思想は、明治初年の自由民權運動の單なる續づきと見做されて居り、當時の民本主義の主張者のうちにも、現に『憲政濟美』を標語とした者すらもある。けれども明治初年の自由民權運動は、その歷史的使命を果して永久に死んだものであつて、今日の民本主義や政治上の自由主義は、決してその相續人でないばかりでなく、却つて往年の自由民權運動の、墳墓を發かうとしてゐるものである。明治初年のデモクラシーの運動は、中世紀的の專制政治と抱合した現在の政黨となつて、ブルジョアの政權を樹立した。そして今日のデモクラシーと政治上の進步主義とは、この間の資本主義的發達が生み出した小ブルジョアと中間階級との反逆——とまで行かなくとも、少くとも彼等の不滿と不平と呟やきに外ならぬ。そこで數年前に一時高潮に達した

民本主義の思想運動は、數年後の今日、初めて實際政界の一角に——まだ極めて影は淡いが——兎も角も現はれかけた小ブルジョア黨組織の運動（例へば革新俱樂部、或る程度に於て實業同志會、その他の謂ゆる政黨革新運動を前影したものに外ならぬ。

財閥と大資本に對する小ブルジョアの政治勢力は、政界の水平線上に、まだ拳大の雲として現はれたばかりである。けれどもこの拳大の雲はやがて擴大して、必ずや一個の政治勢力を形造るに相違ない。何故ならば資本主義發達の必然が、それを命じて居るからである。そして小ブルジョアと中間階級の政治的勢力の大きくなることは、多かれ少かれ、政治上の進步主義と自由主義との勢力の加はることを意味してゐる。

斯ように資本主義は、反動主義と露骨な獨裁政治とに向つて進む一方には、ブルジョアジーの內部に於ける利害の分化により、この獨裁政治と反動主義とを多かれ少かれ緩和するところの、小ブルジョア的な進步主義と自由主義の勢力をも加へてゆく。例へば伊太利のように、反動的なブルジョアが革命的の方法によつて、一擧にして獨裁政治を樹立した場合の外は、末期の反動的な資本主義といへども、少くとも累進的の勢ひでは、露骨な獨裁政治に進まぬのは之が爲めである。

日本の今後に於いても、小ブルジョアの進步主義と自由主義とが、今日以上に有力となつて來ることは疑ひがない。けれども共れ故に、日本の將來には、小ブルジョアの勢力によつて、政治上のデモクラシーが完成せられると信ずべきであらうか。

政治上のデモクラシーを完成したブルジョアジーの運動と、今日の小ブルジョア進步主義、乃至は小ブルジョア急進主義の運動とは、根本に於いて性質が異つてゐる。當年のブルジョアジーは、革命的の階級であつた。今日の小ブルジョアは、決して斯ような歷史的使命をもつて居らぬように、決して斯ような革命的な精神をも持つては居らぬ。當年のブルジョアジーは、其の背後に民衆を持つてゐた。今日の小ブルジョアは、その脚下に、却つて階級的に目醒めた無產階級の脅威を持つてゐる。今日の小ブルジョアと中間階級の爲し得ることは、大資本の上からの力と、無產階級の下からの力との中間に介在して、若しくは此の二つの力の對立を利用して、僅かに存在の間隙を作つてゆくことである。小ブルジョア急進主義の特質は、英國の自由黨——といふよりも特にロイド・ヂョーヂの政治に於て、最もよく具體化されてゐる。躊躇、逡巡、四方八方への氣兼ね、表裏、反覆、不決定と無節操——たゞ共れだけである。一度び無產階級が獨立の政治的勢力となつた處では、小ブルジョア急進主義は最早や指導的の力ではなくて、引づられて行く力であ

る。それは或る時はブルジョア反動主義に引づられ、或る時は無産階級の政治的勢力に引づられる。そして小ブルジョア急進主義が、眞に政治上の自由と民主主義の勢力となるのは、たゞ無産階級に引づられた時である。英國の自由黨が勞動黨に引づられてゐるのは、その實例である。

そこで今後の日本に、財閥と大資本家に對する小ブルジョアと中間階級との政治的勢力が加はつて來れば、多かれ少かれ、政治上の進步主義と自由主義が勢力を增して來る。そして之はやがてデモクラシーの發達――乃至は發達の可能――を意味するものである。けれども小ブルジョア急進主義が、この方面に相當の效果を擧げるためには、二つの條件の一つが備はつてゐなければならぬ。即ち無産階級が、全然、小ブルジョア急進主義に溶け込んでしまふか、それとも彼等を引きずつて行くほどに、無産階級が獨立した政治上の一勢力に發達して居るかと云ふことである。

(三) そこで無産階級の政治的勢力が大きくなると云ふことも、日本の將來に政治上のデモクラシーの發達を豫期せしめる一つの場合として考へねばならぬ。否な或はこの場合が、日本の將來に政治上のデモクラシーを發達せしめる色々の狀況の中でも、最も有力なものであるかも知れぬ。無産階級が政治上の一勢力となり、無産階級の政黨が相當に大きなものとなれば、小ブルジョア急進分子は無産階級の勢力をかりて、反動的な大資本の勢力に對抗することが出來る。否な無産階級自身が小ブルジョア急進分子を引きずつて、大資本の反動主義を抑へることが出來る。フランス昨今の政局は丁度その實例を示しめしたもので、一九一九年の總選擧で右黨と中央黨の聯合軍――國民聯合――が大勝を占め、ポアンカレーはこの基礎の上に、思ひ切つた反動政策を行ふて來た。ところが急進黨は之に對抗するために社會黨と提携し、更に共産黨をも味方に引入れて左翼聯合を形成し、來るべき總選擧を待つてゐる。昨年中、パリの市會議員選擧に、急進黨が共産黨の候補者を援けて當選させたことは當時世間の耳目を聳動せしめた出來事であつた。そこで若し來るべき總選擧に左翼聯合が勝利を占め、ポアンカレーが失脚したならば、フランスの帝國主義と反動主義とは、或る程度まで緩和せられるに相違ない。

斯ように無産階級の政治的勢力が加はり、殊に議會に於けるキヤスチング・ヴオートを握る程度になれば、政治上のデモクラシーを發達させる――と云ふよりも、資本主義の反動化に對して自由主義とデモクラシーを擁護し、乃至は小ブルジョア急進主義をして、帝國主義反動主義を一時的に抑制し緩和せしめ

る——上に、相當の効果のあることは爭はれぬ。そこで日本の場合にも、無產階級の政治的勢力の發達が、多かれ少かれ政治上の自由と民主主義とを促進するに相違ないと云ふことは、恐らく誤りのない豫想である。

然しながら來るべき總選擧に、左翼聯合が勝利を占め、フランスの反動主義が幾分緩和されたとしたならば、フランスの資本主義はそれだけ、末期の反動主義的な性質から、再び民主主義的な昔の性質に蘇えつたものであらうか。決してさうでない。左翼聯合の勝利とポアンカレーの失脚とは、明かに政治上の自由主義とデモクラシーの勝利である。けれども此の一時的部分的の勝利が累積して、遂にはフランスに、再び自由の血の漲つた資本主義の時代が返り咲きをすると考へるべき、少しの理由もないのである。

ブルジョアジーがデモクラシーを確立した場合には、彼は新興階級の革命的精神によつて、中世紀的の勢力を破壞し去つたのである。そして彼れの背後には、全民衆を持つてゐた。然るに小ブルジョア急進主義が無產階級の力を借りて、反動的資本帝國主義に打勝つた場合には、それは決して、資本帝國主義を破壞し去つたものではない。從つてこの一時的にして部分的な勝利は、何時取り返へされるかも知れぬ。極めて不安定なものである。

然しながら無產階級の政治的勢力が非常に大きくなり、無產階級の政黨が絕對的に、そして永久的、壓倒的の多數を占めるようになつたらどうだらう。その結果は、再び政治上のデモクラシーが完成されるのではあるまいか。或はさうかも知らぬ。少くとも吾々には、今までのところでは、斯ような場合を明白に想像するだけの實例がない。そしてデモクラシーの傳統が最も根強く植えつけられてゐる國に、斯ような形勢が起つた場合（そしてデモクラシーの傳統の根強い國でなければ、斯ような形勢は起り得ぬ）には、その結果はどうなるかと云ふことは、恐らく今後の英國で、試驗されるだらう。

けれども無產階級の政治的勢力がこの程度に大きくなつた場合には、それは最早や『ブルジョア、デモクラシー』の完成に滿足して居らぬことだけは少しの疑ひがない。之に反して無產階級が一度びその經濟上、社會上、政治上の根本的な綱領を實現しやうと試みたなら之に對してブルジョアジーが『ブルジョア、デモクラシー』の定石通りの反對方法を取るかどうかは疑問である。そして之に近い場合の實例としては、吾々はイタリーに於ける反動主義的獨裁政治の樹立を見たのである。

斯ように資本主義そのものは、自由主義とデモクラシーの性

質を失つて、反動主義の性質がます／＼露骨になつて來るにも拘らず、一方には之に對抗し、或は之を緩和する力が働いてゐる。そして政治上の自由主義とデモクラシーとは、一時的乃至は部分的の勝利を得る機會が少なくない。

けれども其れにも拘らず小ブルジョア急進主義の勝利は、如何なる場合にも、資本主義そのものゝ性質を一變するものではない。言葉を換へて云へば、現在の反動的な資本主義そのものを、再び昔日のような、デモクラシーと自由の精神の漲つた、若い資本主義に引き戻すものではない。

そこで今後の日本には、政治上の自由主義とデモクラシーとは、今日以上の發達をするであらうか。中世紀的專制政治と抱合したブルジョアジーの反動主義が如何に強いにせよ、そして小ブルジョア急進分子が氣力を失ふてゐて、如何にその勢力が微弱であるにせよ、今後の日本に、政治上のデモクラシーが、今日以上に少しも發達せぬと想像すき理由はない。現に日本に於ても、上に述べた三つの場合が、多かれ少かれ進步的な政策を促進する動機となつてゐる。たゞ無產階級は、まだ政治的には組織せられて居らぬ。從つて其政治的勢力は尙ほ微弱である。そこで少くとも今日までのところでは——そして尙ほ當分の間は——第一と第二の形勢が、主として日本に於ける進步的な政策を促進して居つた。そして第一と第二の形勢のうちでも今日までは、主として第一の形勢が進步的な政策を促進して居つた。然るに之に對して、第二の形勢がだん／＼重きを爲して來たことは、最近に於ける見遁しがたい傾向である。そして日本の資本主義の發達が、ます／＼ブルジョアジーの間の利害の分化を引き起すに從つて、ブルジョア反動主義と小ブルジョア急進主義との對立が、今日以上に鮮明となるに相違ない。そして無產階級が獨立した政治的勢力として或る程度に有力となるまでは日本にデモクラシーを發達せしめる機會は、主として小ブルジョア急進分子の勢力を中心として展開する第二の形勢に求めねばならぬ。

四

今後の日本には、多かれ少かれ、政治上の自由が伸張され、政治上のデモクラシーが進步する機會があるとしたならば、その結果は、無產階級運動の上に、如何なる影響を與へるであらうか。云ふまでもなく、それは無產階級運動の促進を助けるに相違ない。

或る人々は、ブルジョア、デモクラシーの發達は、無產階級運動を去勢し墮落せしめると主張する。これは或る場合には慥

かに事實であつて、無產階級運動が、しば〳〵この危險に遭遇したことは爭はれぬ。無產階級運動はこの危險に對して、斷えず警戒しなければならぬ。けれども其れ故に、無產階級は政治的自由の伸張と民主化とに對して、反對しなければならぬといふ理由はない、否反對に、或る程度まで政治上の自由が擴張され、或る程度まで政治上のデモクラシーを獲得することは、無產階級が政治的に成熟するために必要な條件である。そして政治上の自由が擴大すればするほど、そして政治が民主化すればするほどそれは原則としては、無產階級に取つて有利である。

勿論ある特殊の狀況の下では、無產階級は積極的に、政治的自由を獲得する運動をせぬ方が有利な場合がある。けれども之は政治的自由が望ましくないからではなくて、この運動に伴ふ當面の危險の方が、餘りに大きいからである。そして無產階級運動の實際が、政治的自由を獲得する利益を棄てゝも、當面の危險を避けなければならぬ狀態にあつたからである。

數年前に於ける普選運動と無產階級運動―特に勞働組合運動――との關係は、丁度右の場合に當て篏つてゐる。そこで無產階級が普通選擧獲得運動に參加することには、反對すべき理由があつた。日本の實際の形勢からして、此の態度が正しかつたか、又は誤つてゐたかは全然別問題として、少くとも、當然反對しなければならぬ場合をも考へることが出來る。けれども普選獲得運動への參加に反對することは、決して普通選擧の實施に反對することではない。尤も實際には、普選運動參加に對する反對が、知らず知らずの間に、普選の實施そのものに對する反對と混亂したと思はれる場合もあつたし、普選運動參加に對する反對と高調するために、普選そのものに反對した人も或はあつたらう。けれども無產階級が原則として、普通選擧の實現に反對すべき理由はない。假りに積極的大衆的の棄權を主張する立場に立つて見ても、普通選擧の實現は、固より歡迎しなければならぬ。何故ならば、選擧權あつての棄權であつて、無產階級に選擧權のないところには、政治的無關心はあつても、積極的大衆的棄權運動はあり得ぬからである。

斯ように政治的自由の擴張と民主化は、原則として、無產階級に取つて有利なものである。ブルジョア・デモクラシーの範圍內に於て、無產階級の解放が成し遂げられるかどうかは全然別問題として、兎にも角にも、或る程度に政治的自由があり、或る程度にブルジョア・デモクラシーが發達してゐないでは、無產階級が階級的に成熟し政治的に成熟することは至難である。政治の民主化は、無產階級運動を墮落せしめるものであつて、政治的自由が奪はれて居れば居るほど、無產階級は革命的

になると考へるのは、勞働者の生活が惡くなればなるほど、勞働階級は革命的になると云ふのと同じであつて、それは或る場合には眞理であつてもすべての場合に於ける眞理ではない。戰後のドイツの勞働者は、生活がどん底に沈んで行けば行くほど、革命的になりつゝあるとは云れない。またイタリーの無產階級はファスチストの獨裁政治によつて、一層革命的になつたとは思はれぬ。

之に反して無產階級運動が、ブルジョア・デモクラシーによつて開かれた道を利用し、若しくは逆用するといふことそれ自體は、無產階級運動の墮落でも右傾でも何でもない。問題はただ利用の仕方である。例へば勞働組合を公認する法律が制定されたとしたならば、組合運動がこの法律を楯に取つて、組合の壓迫を試みる傭主と對抗することは、決して組合運動の墮落ではない。アメリカでは共產黨は不合法的な團體である。けれども其れ故に、アメリカの共產黨の運動は、ドイツの合法的な共產黨の運動よりも、より革命的であるとは云はれない。全世界の有ゆる國語で公刊されてゐるマルクスの『共產黨宣言』は、日本では國禁の文書である。けれども其れ故にマルクスの『共產黨宣言』は、日本に於て特別に『革命的』であるべき筈はない。無產階級の運動が『革命的』であるといふことは、その運動方法が不合法的であると云ふことゝ、殆んど同一意義であるかの如く見做してゐる人がある。けれども不合法的なことにも反革命的なことがあるように、合法的な方法と合法的な運動にも、深刻な革命的意義を有する場合がある。同盟罷業を犯罪と見做す治安警察法が撤廢されたなら、同盟罷業は、勞働組合の一運動方法としての價値を減ずるであらうか。決してさうではない。或る人々は云ふだらう。無產階級の解放運動は、その運動方法が合法であるか合法でないかを問ふてゐる暇がないと。けれども政治的自由の擴大によつて、曾ては不合法だつた運動方法が合法的の運動方法となり、從つて無產階級は其の運動方法の領域を縮少することなしに、しかも其の運動方法のうち、合法的な部分が擴大して、不合法的な部分がそれだけ縮少してゆくことは、必ずしも其の運動が、革命的でなくなつたことを意味するものではない。無產階級運動は、如何なる狀況の下にも、合法的の運動方法に限るべきものであつて、一切の不合法的の運動方法は、原則として排斥すべきものであるかどうか。之は自づから別個の問題であつて、こゝには論及せぬ。けれども革命的といふことゝ不合法的といふことゝを同一視し、一切の合法的の運動方法には、すべて革命的意義がないかの如く考へるのは、慥かに誤つてゐる。

『革命的』とか革命運動とかいふ言葉を、やゝもすればローマンチツクに考へたり、何か尋常人の尋常の行動とはかけ放れた非凡な行動、英雄的な行動のやうに思つたり、または古めかしい小說的な空想や、陰謀的な彩色を加へたりして、知らず知らずの間に『革命的』であることを享樂し、そして平凡で通俗で散文的な日常の運動の價値を、實際的價値よりも過少に見ることは、慥かに陷入り易い誤謬である。

吾々はブルジョアの政治に警戒しなければならぬ。そしてブルジョアの政治が與へて吳れるものには、更らに警戒しなければならぬ。政治上の自由や進步的な政策は、しばしば無產階級運動を馴致し去勢するための好餌に用ひられてゐる。けれどもそれにも拘らず、政治的自由の伸張と民主化そのものは、無產階級運動に取つて有利である。

五

斯ように今後の日本に於て、中世紀的な專制政治と抱合したブルジョアジーの反動主義に對して、小ブルジョア急進主義が今日以上に有力になり、今日以上に戰鬪的になり、その結果として、政治上のデモクラシーが發達し、政治的自由が伸張することは、無產階級に取つて有利である。この點については、恐らくは多くの人々の意見は一致する。そして私も亦た、固より何等の異論のないものである。

然らば今後に於ける小ブルジョア急進主義の擡頭に對して、無產階級は如何なる態度を取るべきかといふ問題になると、必ずしも多くの人々の見が一致せぬばかりでなく、根本的に異つた二つの見解がある。

けれども日本の政治的勢力のうちには、中世紀的遺物は尙ほ有力に根を張つてゐる。そして今日では、それは反動時代に入つた資本主義と密接に絡らみ合つてゐる。この有力な反動勢力に對して、小ブルジョア自由主義乃至は小ブルジョア急進主義の勢力は、比較的微弱である。小ブルジョア急進主義は、無產階級を味方にしないでは、固より反動勢力と對峙することは出來ぬ。そこで小ブルジョア急進主義をして、これ等の反動勢力に打ち勝たしめ、そして日本の今後に政治上のデモクラシーを確立せしめる最も有力な道は何かと云ふ問題が起つて來る。

それは無產階級が小ブルジョア急進主義の中に、完全に溶け込むことである。言葉を換へて云へば、無產階級運動が、小ブルジョア自由主義の運動になつてしまふことである。もう一度言葉を換へて云へば、無產階級運動そのものが無くなつて、無產者の大衆が、小ブルジョアの指導の下に、小ブルジョア自由

主義の運動に完全に溶け込んでしまふことである。

その爲には、先づ第一に邪魔になるものは、無産階級の意識である。そして第二には、この階級意識に基づいた無産階級の要求である。そして第三には、この意識と要求とに出發した、無産階級の組織と運動である。一と口に云へば、無産階級が、大資本の階級と異るやうに、小ブルジョアと中間階級とも異つた獨立の一階級として、階級的に結成し成熟することである。

之に反して無産階級の間に、階級的の意識が生まれ、無産階級が多かれ少かれはつきりと、ブルジョア・デモクラシーよりも向ふにある解放の目標を見、そしてこの目標に達しようとする大衆的の無産階級運動が一度び存在してゐては、無産階級が小ブルジョア自由主義に完全に溶け込んでしまふことは、絶對に不可能である。勿論この場合にも、無産階級は、ブルジョア・デモクラシーと政治的自由の効用を適當に評價し、適當に尊重し、適當に利用することは出來るだらう。けれども無産階級が、眞實に小ブルジョア自由主義に溶け込むためにはそれだけではまだ足りない。それには小ブルジョア自由主義と政治上のデモクラシーとが、無産階級に取つての一切萬事でなければならぬ。無産階級がその全幅の希望と全幅の信仰とを、デモクラシーと自由主義とに捧げて居つてこそ、初めて完全に、小ブルジョア自由主義に溶け込むことが出來る。

一九五〇年代から七〇年代にかけての、英國の勞働運動の狀態は、ほゞ之に近かつた。當時の組合運動の精神から見れば、資本制度は永久的な社會制度であつて、勞働組合そのものも、この永久的な社會制度の、永久的にして有機的な一部分をなすものに過ぎなかつた。組合運動の目標は、少しもこの社會制度の限界を超えてはゐなかつた。そして勞働階級の要求は、すべて自由主義的な資本主義——小ブルジョア自由主義——の範圍内で實現せられるものだつた。斯ように當年の英國の勞働階級は、その全幅の希望を自由主義に懸け、その全幅の信仰をブルジョア・デモクラシーに捧げてゐた。そして斯ような勞働階級の支持を得てこそ、新興の商工階級は、よく政治上のデモクラシーを完成することが出來たのである。

今後の日本には、多かれ少かれ小ブルジョア急進主義が勢力を増し、多かれ少かれ政治上の自由が伸張せられるに相違ない。そして之は無産階級に取つて固より有利である。けれども今後の日本に政治上のデモクラシーが發達するといふことが、若し一九五〇年代の英國の徑路が、日本の今後に繰返へされる——そして繰返へされねばならぬ——といふことを意味するとしたならば、今日までに日本の勞働階級が歩んで來た道は、

『革命的』とか革命運動とかいふ言葉を、やゝもすればローマンチックに考へたり、何か尋常人の尋常の行動とはかけ放れた非凡な行動、英雄的な行動のやうに思つたり、または古めかしい小說的な空想や、陰謀的な彩色を加へたりして、知らず知らずの間に『革命的』であることを享樂し、そして平凡で通俗で散文的な日常の運動の價値を、實際的價値よりも過少に見ることは、慥かに陷入り易い誤謬である。

吾々はブルジョアの政治に警戒しなければならぬ。そしてブルジョアの政治が與へて呉れるものには、更らに警戒しなければならぬ。政治上の自由や進歩的な政策は、しばしば無產階級運動を馴致し去勢するための好餌に用ひられてゐる。けれどもそれにも拘らず、政治的自由の伸張と民主化そのものは、無產階級運動に取つて有利である。

五

斯ように今後の日本に於て、中世紀的な專制政治と抱合したブルジョアジーの反動主義に對して、小ブルジョア急進主義が今日以上に有力になり、今日以上に戰闘的になり、その結果として、政治上のデモクラシーが發達し、政治的自由が伸張することは、無產階級に取つて有利である。この點については、恐らくは多くの人々の意見は一致する。そして私も亦た、固より何等の異論のないものである。

然らば今後に於ける小ブルジョア急進主義の擡頭に對して、無產階級は如何なる態度を取るべきかといふ問題になると、必ずしも多くの人々の見が一致せぬばかりでなく、根本的に異つた二つの見解がある。

けれども日本の政治的勢力のうちには、中世紀的遺物は尙ほ有力に根を張つてゐる。そして今日では、それは反動時代に入つた資本主義と密接に絡らみ合つてゐる。この有力な反動勢力に對して、小ブルジョア自由主義乃至は小ブルジョア急進主義の勢力は、比較的微弱である。小ブルジョア急進主義は、無產階級を味方にしないでは、固より反動勢力と對峙することは出來ぬ。そこで小ブルジョア急進主義をして、これ等の反動勢力に打ち勝たしめ、そして日本の今後に政治上のデモクラシーを確立せしめる最も有力な道は何かと云ふ問題が起つて來る。

それは無產階級が小ブルジョア急進主義の中に、完全に溶け込むことである。言葉を換へて云へば、無產階級運動が、小ブルジョア自由主義の運動になつてしまふことである。もう一度言葉を換へて云へば、無產階級運動そのものが無くなつて、無產者の大衆が、小ブルジョアの指導の下に、小ブルジョア自由

主義の運動に完全に溶け込んでしまふことである。

その爲には、先づ第一に邪魔になるものは、無產階級の意識である。そして第二には、この階級意識に基づいた無產階級の要求である。そして第三には、この意識と要求とに出發した、無產階級の組織と運動である。一と口に云へば、無產階級が、大資本の階級と異るやうに、小ブルジョアと中間階級とも異つた獨立の一階級として、階級的に結成し成熟することである。

之に反して無產階級の間に、階級的の意識が生まれ、無產階級が多かれ少かれはつきりと、ブルジョア・デモクラシーよりも向ふにある解放の目標を見、そしてこの目標に達しようとする大衆的の無產階級運動が一度び存在してゐては、無產階級が小ブルジョア自由主義に完全に溶け込んでしまふことは、絕對に不可能である。勿論この場合にも、無產階級は、ブルジョア・デモクラシーと政治的自由の効用を適當に評價し、適當に尊重し、適當に利用することは出來るだらう。けれども無產階級が、眞實に小ブルジョア自由主義に溶け込むためにはそれだけではまだ足りない。それには小ブルジョア自由主義と政治上のデモクラシーとが、無產階級に取つての一切萬事でなければならぬ。無產階級がその全幅の希望と全幅の信仰とを、デモクラシーと自由主義とに捧げて居つてこそ、初めて完全に、小ブルジョア自由主義に溶け込むことが出來る。

一九五〇年代から七〇年代にかけての、英國の勞働運動の狀態は、ほゞ之に近かつた。當時の組合運動の精神から見れば、資本制度は永久的な社會制度であつて、勞働組合そのものも、この永久的な社會制度の、永久的にして有機的な一部分をなすものに過ぎなかつた。組合運動の目標は、少しもこの社會制度の限界を超えてはゐなかつた。そして勞働階級の要求は、すべて自由主義的な資本主義——小ブルジョア自由主義——の範圍内で實現せられるものだつた。斯ように當年の英國の勞働階級は、その全幅の希望を自由主義に懸け、その全幅の信仰をブルジョア・デモクラシーに捧げてゐた。そして斯ような勞働階級の支持を得てこそ、新興の商工階級は、よく政治上のデモクラシーを完成することが出來たのである。

今後の日本には、多かれ少かれ小ブルジョア急進主義が勢力を增し、多かれ少かれ政治上の自由が伸張せられるに相違ない。そして之は無產階級に取つて固より有利である。けれども今後の日本に政治上のデモクラシーが發達するといふことが、若し一九五〇年代の英國の徑路が、日本の今後に繰返へされる——そして繰返へされねばならぬ——といふことを意味するとしたならば、今日までに日本の勞働階級が步んで來た道は、

全然、無益であつたといふことになる。唯だに無益であつたばかりでなく、極めて有害な過失であつたと云はねばならぬ。

ことに大正七八年の頃に小ブルジョア自由主義の思想が勃興し、ブルジョア政黨によつて初めて普選運動が起こされた時、組合運動が之に對して消極的否定の態度を取つたことは、取り返へしのつかぬ誤謬であつたと云ふことになる。何故ならば、當時日本の組合運動は、ほんの産ぶ聲をあげたばかりの搖籃期にあつた。農村の無産階級も、殆んど組織せられてゐなかつた。無産階級運動の斯ような出發點に於て與へられた方向は、以後久しい間の運動の方向を決定するに相違ない。この時勞働階級が、普選運動に積極的に參加して居つたなら、日本の勞働運動は、少くとも或る程度まで、ブルジョア急進主義に溶け込んでゐたに相違ない。そして日本の政治の發達――從つて無産階級運動の發達――にも、どうでも斯うでも一九五〇年代の英國を繰り返へすべき必要と運命とがあるものとしたならば、當時斯ような徑路を取らなかつたことは、非常の損失であつて、よし日本の無産階級運動が今日以後、正しい軌道に立ち返へるにしたところで、過去十年間の發達は、全然無意義な脇道であり、迂回であつたといふことになる。

日本には、現に斯ような見解（假りに第一の見解と名づけておく）を取つてゐる人が少なくない。日本の今後にも、政治上のデモクラシーが順當の發達をするものといふ見解を取る以上は、勢ひ右の如き結論に到達しなければならぬ。小ブルジョア自由主義は、勢ひ斯ような見解を取つてゐる。そして今少し無産階級運動に接近した立場にある人々の間にも、多少の程度の相違こそあれ、結局は右の結論に歸着する見解を取つてゐる人がある。

六

ロシアでは、一九一七年三月の革命によつて、ブルジョア・デモクラシーが勝利を得た。けれども十一月には、無産階級革命が成功した。ロシアでも、ブルジョア・デモクラシーの時代が全然無かつた譯ではない。けれどもブルジョア・デモクラシーが確立され、そして安定を得る暇がなかつた。ロシアは八ケ月の間に、ブルジョア・デモクラシーの時代を急過したと云つてよい。この點に於ては、ロシアと英國とは、反對の兩極に立つてゐる。日本はロシアでない如く、否なそれ以上に、日本は英國ではない。ロシアに於ける發達の徑路が、そのまゝ日本に繰り返へされると思ふことが空想であるやうに、英國に於ける發達の道程が、そのまゝ日本に反覆せられると考へるのは、

それ以上の空想である。

そこで第二の見解は、日本に於ては、ブルジョア・デモクラシーは英國に於いて完成せられたやうに、今日まで完成されなかつた如く、今後に於ても恐らく完成せられない——言葉を換へて言へば、日本に於ては、デモクラシーの發達階段は甚しく壓縮され、變形され、若し英國の發達を標本とすれば、この標本からは、甚しく變則的な徑跡を辿るに相違ない。そして之に對する無產階級の運動は、この特殊な形勢に應じた特殊な方向——英國の無產階級運動の標本からは甚だしく變則的な方向——を取つて進まねばならぬと云ふことである。

今後の日本には、何故に英國と同じやうな、順當なデモクシーの發達段階が踏れぬか、そして何故に、日本のブルジョア急進分子は、英國のそれのやうな光輝ある成功をして、政治上のデモクラシーを完成することが出來ぬかといふことは、前數項の說明の內にも、自づから答へられてゐる。先づ第一には、大正の日本、殊にその經濟狀態は、最早や一九五〇年代の英國ではない。當年の自由主義は、英國に商工業の黃金時代の到來を告げ知らせる福音であつた。無限の世界市場は、その前に門戶を開いてゐた。そしてどちらを見廻しても、英國の商品を脅かすような、有力な競爭者らしい者も現はれてゐなかつた。ブルジョア自由主義が中世紀的特權の遺物を掃蕩して進む一歩ごとに、英國には空前の好景氣が展開し、空前の富がまのあたりに累積された。そしてこの好景氣の配前に預つたものは、必ずしも商工階級ばかりでなく、勞働者の賃銀は高まり、生活は向上した。そして十九世紀の初年に見た勞働階級の不滿と動搖とは跡方もなく消え失せた。英國に於ける當年のブルジョア急進主義には、斯ような經濟上の根底があつたのである。

一世紀の四分の三を經過した今日となつては、世界のどちらを眺めても、最早や斯ような條件の片影すらも見出すことは出來ぬ。世界の市場は、列國の資本帝國主義によつて、固くその門戶が閉されて居るように、世界の原料の產地には、容易に近づくことが出來ぬ。大正の日本に於ける小ブルジョア急進主義は、最早商工階級に對しても勞動階級に對しても、往年の英國に與へたような繁榮を約束するものではない。自由主義は最早や、資本主義の指導的精神ではなくなつた。そして斯ように經濟上の根底を持つて居らぬといふことが、やがて今日の小ブルジョア急進主義に、最早や當年の意氣と實力との無い所以である。

之に反して、小ブルジョア急進主義が戰はねばならぬ反動勢力は、一層强大になつてゐる。卽ち資本主義が資本帝國主義の段

階に發達した爲めに、新たな反動主義の經濟上の根底が出來たことが、第二の理由である。英國のブルジョア急進主義は、中世紀的特權の遺物を一掃して、新興ブルジョアの事業を完成すればよかつたのであつた。ところが日本の小ブルジョア急進主義が勝利を得るためには、ブルジョアジーと抱合してゐる封建的特權の運動（これは日本に於ては、特に有力である）と戰はねばならぬことばかりではなく、今や資本主義そのものゝ指導的精神となつて來た新しい、そして一層有力な反動主義と戰はねばならぬ。

　第三には、それにも拘らず、小ブルジョア急進主義は、その背後に、往日のやうな力を持つては居らぬ。さきにも指摘したやうに、英國の小ブルジョア自由主義は民衆そのものゝ信仰であり、その運動は、無産階級の大衆的の運動的であつたが、日本の小ブルジョア急進主義は、その脚下には階級的に意識し、そして階級的に組織せられつゝある無産階級を持つてゐる。小ブルジョア急進主義は、それが政治上の自由主義を意味する範圍内に於ては、固より無産階級の援助と協力を得るだらう。けれども彼等の道づれは、決して頼母しい道づれではない。彼等を後援するものは、最早や政治的自由の伸長が、一切の望を叶へて呉れると信じてゐた、當年の英國の勞働階級ではないのである。無産階級は政治的自由を要求する。そして政治的自由を獲得するためには、小ブルジョア急進分子を支持することをも憚らぬ。けれどもかくて獲得せられた政治的自由とデモクラシーとは、單に財閥と大資本と大地主との鬪ひに用ひられるばかりでなく、直ちに資本主義の搾取と支配との全體に向けられるものである

　そこで無産階級の要求が、政治的自由とブルジョア・デモクラシーから一歩を踏み出した瞬間に、小ブルジョア急進分子は抑々どんな態度を取るだらう。英國の政局──デモクラシーが標本的に完成された英國の政局──は、立派な例證を與へてゐる。今日でこそ英國の自由黨は、保守黨を政權から叩き落すためには、暫らく勞働黨の内閣を認容し、或る點までは其の政策を支持してゐる。けれどもこの自由黨は、六ケ月以前に、英國の議會に有名な社會主義的決議案が勞働黨によつて提出された時には、保守黨と共に、決して社會主義的綱領を認容するものでないことを明かにした政黨である。勞働黨の提出した社會主義綱領に對して、保守黨は絕對反對の立場を取つたが、自由黨は修正案を提出した。これはやがてブルジョアの資本帝國主義と無産階級の社會主義との間に、小ブルジョア急進主義が占めてゐる曖昧な、不決定な、中間的の立場を最もよく象徵したも

のある。けれども最後の票決には、自由黨は保守黨と共に反對の投票をした。自由黨は今、勞働黨内閣を認容して居るが、それは決して、勞働黨の社會主義を認容したものではない。勞働黨の内閣の政策が自由貿易政策と、シンガポール海軍根據地の放棄と、露國承認と、國際聯盟による歐洲平和の維持に踏み止どまつてゐる間は、それは下院に於ける自由黨の支持を得ることが出來る。けれども勞働黨内閣の政策が、一度び社會主義的な根本施設に一歩でも踏み出したなら、其の瞬間に、自由黨は究極、保守黨の味方であるか勞働黨の味方であるかゞ明かになる。小ブルヨジア急進主義が反動的資本主義と離れてゐる距離は、決して無產階級の社會主義と隔たつてゐるほどに、隔つてゐるものではない。

　そこで一度で階級意識に目醒さめた無產階級が、最早や小ブルジヨア急進分子に取つて、頼母しい道づれでないように、無產階級の側から見れば、小ブルジヨア急進分子は、極めて頼母しくない道づれである。曾つてはブルジヨア急進主義が完全な勝利を收め、デモクラシーが最も豐富な、標本的な發達の道程、を辿つた英國に於てすらも、マクドナルドをして社會主義綱領の討論を結ぶ最後の演說のうちに、

『今日の政界には資本主義黨と勞働黨、即ち社會主義黨との、二つの黨派があるのみ』と云はしめたように、英國の歩んだこの平坦な道程の導くところは、反動的な資本主義の政治勢力と無產階級の政治勢力との眞正面からの對峙であつて、この兩勢力の間にはさまつた小ブルジヨア急進主義は、だん〴〵重要を失つて來る。そこで今後の英國でも、自由黨が勞働黨を助けたり、勞働黨が自由黨を支持して保守黨に當るといふような事は、しば〴〵繰り返へされるに相違ない。けれども政治の局面は、帝國主義化した資本主義と、無產階級の社會主義との間の爭鬪戰を中心として展開するものであつて、小ブルジヨア急進主義が勞働階級を率ゐて、もう一度英國を、自由主義の天國に引き戻すといふが如きことは絕對に考へ得られぬことである。

　斯ように一方には、帝國主義の發展段階に達して保守的反動的な資本主義があり、他方には、階級的に自覺して無產階級の社會主義的要求の生れた所では、小ブルジヨア急進分子の立場は極めて不安定なものであり、極めて不確定なものである。勿論、今後の日本にも、政治上の自由は多かれ少かれ伸張され、政治は多かれ少かれ（よし形式だけにしても）、民主化するだらうそして其の爲めには小ブルジヨア急進分子は、固より相當の役目をするだらう。小ブルジヨア急進主義は、資本主義に對抗するためには、或る時は無產階級の助けを借り、或る程度まで

は無產階級の利害にも讓歩するだらう。そして無產階級も亦た、資本帝國主義に反對する範圍內では、小ブルジョア急進分子を支持して、其の勢力を利用するに、相違ない。斯ように小ブルジョア急進分子と無產階級とは、或る所までは、一緒に進むことが出來る。けれども『或る所まで』といふのは、今日以後、或は三十年、或るは五十年かゝつて、小ブルジョア急進主義が日本にデモクラシーを確立し完成する所までと云ふ意味ではない。言葉を換へて云へば、日本の小ブルジョア急進分子が、日本にデモクラシーを完成するには（完成することが出來ると假定して）、今後三十年を要するものとして、それから先きは、無產階級は最早や小ブルジョア急進主義と提携して進むことは出來ないが、そこまでは一緒に進むことが出來ると云ふ意味ではない。日本の無產階級は、今日只今、すでに小ブルジョア自由主義の範圍では實現することの出來ない要求を持つてゐる。否な小ブルジョア急進主義と正面から衝突するような要求を持つてゐる。そしてこの要求に當面した瞬間には、日本のブルジョア急進分子は、勞働黨の社會主義綱領に當面した時の、英國の自由黨と同じ態度を取らなければならぬ。

ところが斯ような無產階級的の要求は、小ブルジョア急進分子が日本にデモクラシーを完成する三十年間を待つて後（英國の場合のように）、初めて現はれるものではない。それは今日、既に現れて居り、そして今日以後、政治的自由と政治の民主化が進む一歩ごとに、ます〳〵大きくなつて現れるものである。そこで日本の小ブルジョア急進分子は、或る瞬間には、或る問題について無產階級の支持を受け、無產階級と轡を並べて進むだらう。けれども次の瞬間には、彼等は却つて反動的資本主義の指導の下に、銃劍を逆さまにして、無產階級と對峙しなければならぬだらう。

これは言葉を換へて云へば、日本の今後には、自由主義とデモクラシーとが、資本主義の指導的精神として確立され完成される機會がない、と云ふことを意味してゐる。それにも拘らず政治的自由と民主化とは、多かれ少かれ發達するだらう。けれども、それは資本主義の指導的精神として發達するものではなくて、寧ろ反動時代に入つた資本主義の勢力に對抗して發達せしめられるものであり、斯くて獲得せられた政治的自由と民主化とは、資本主義の指導的精神として確立され、安定を與へられるのではなくて、究極は、無產階級の實力によつてのみ、初めて維持せられてゆくべきものである。從つて英國のように、資本主義の自由主義時代が政治上のデモクラシーを完成し、デモクラシーの傳統が根強く植ゑつけられてゐる所では、いよ

〳〵資本家階級の政治的勢力と無産階級の政治的勢力とが正面から對峙する場合になつても、（マクドナルドの言葉を借れば、政界には、資本主義黨と勞働黨、即ち社會主義黨との二つの黨派あるのみとなつても）この鬪ひは——少くとも形勢が極度に切迫するまでは——デモクラシーの土俵内で行かれるが、日本の場合には、云はゞデモクラシーを挿さんだ鬪ひが絶えず行はれることにある。言葉を換へて云へば、既に獲得せられた或る程度の政治的自由と民主化とは、絶えず之を奪還しようとし、又は單なる形式に過ぎないものに變へようとする鬪ひが行はれるに相違ない。

斯ように今後の日本には、政治上のデモクラシーが發達するにしても、それは最早や十九世紀の下半に於ける英國のそれのような、決して安定的なものではなく、極めて不安定なものであつて、詰りは、資本家階級の政治的勢力と、無産階級の政治勢力との、二つの實力の消長によつて變動するのである。即ち言ひ換へれば、それは相對峙してゐる二つの勢力の、どちらか一方の決定的の勝利を見ないでは、安定せぬものである。

英國は五十年乃至七十年間のブルジョア・デモクラシーの順當な發達といふ極めて平坦な、然しながら極めて氣永な道程を辿つて、ほゞこの狀態——ブルジョアと無産階級との政治勢力の對峙——に到達した。日本は恐らく、ブルジョア・デモクラシーの安定といふ時期を通過することなしに、或はこの時期を極めて僅かな時間のうちに急速に通過して、この狀態に到達するに相違ない。そして日本の無産階級の運動は、その戰術の根底を、その所におかねばならぬ。

七

最も英國の場合には、『資本主義黨と勞働黨即ち社會主義黨との、二つの黨派あるのみ』といふ狀態には達したいが、デモクラシーの制度そのものが、甚だしく不安定になつたとは思はれぬ。現にこの二つの勢力は、デモクラシーといふ土俵の内で爭ふてゐる。そこで英國では、最後の決算に至るまで、一切の勘定はデモクラシーの帳合ひの上で決濟されるものと思はれてゐる現に勞働黨の主要な人物がそう信じてゐるばかりでなく、反對勢力の代表者も、そう信じてゐる。私も亦それを希望するものゝ一人である。せめてはイギリス一ヶ國だけでも、社會組織の根本的な變革が、徹頭徹尾、平和のうちに理知的に行はれた實例を殘すことは、決して人類の不名譽でないからである。

けれども英國の社會的變革が、最後の決算に至るまで、徹頭徹尾、デモクラシーの土俵の内で行はれるかどうか、そしてい

よく〳〵形勢が切迫した時に、果して何ち側でも踏み切りをしないかどうかと云ふことは、これは俄かに斷言することは出來ぬ。今日はこの二つの勢力が、初めて土俵の上で相對したばかりである。況んや英國のデモクラシーそのものにしても、今日では、最早や資本主義の自由主義時代ほどに安定的であるとは云はれない。現に戰爭當時の經驗は、英國のデモクラシーといへども、其の內容と其の實質とは、可なりに伸縮の出來得ることを示してゐる。

　資本主義が反動時代に入つてから、後くればせに政治上のデモクラシーを發達しようとする日本に取つては、ドイツの形勢は一層興味がある。ドイツのブルヨジアジーは一八四八年の革命によつて、その地歩を確立したにも拘はらず、政治上のデモクラシーを完成してはゐなかつた。ドイツは日本と同じやうに、或は日本以上に、中世紀的勢力によつて支配され、中世紀的の遺物が澤山に殘つてゐた。然るに一九一八年の革命は、これ等の中世紀的遺物を、きれいに一掃した。そして大工業と財政資本とが、初めて完全に獨逸を支配するやうになつた。當時の形勢を無產階級革命に導くことが出來なかつたといふ意味では、ドイツの革命は失敗した、そしてこの失敗の責任は、大部分、無產階級の政治的勢力を指導した社會民主黨の負ふべきものであつたことは云ふまでもない。けれどもそれにも拘らず、中世紀的の遺物を一掃して、政治勢力の分野が初めてはつきりとし、ブルヨジアジーと無產階級との兩勢力を、明白に且つ直接に相對峙せしめた點では、革命は僅かに、新しい形勢に向つて一大踏步をしたものであつた。

　一九一八年十一月のドイツでは、少くとも當面の主要な要求に於ては、ブルジヨアは革命的無產階級と一致して居つた。否なドイツのブルジヨアは、ブライスの云つてゐるように、『街上に示威運動をやつてゐる勞働大衆に少しも劣らぬほど、革命的にして非立憲的』であつた。たゞ彼等が躊躇したのは、革命に反對だつたからではなく、革命の結果、權力が勞働階級の手に推移することを恐れたからであつた。そこでブルジヨアジーと無產階級との間の唯一の爭點は、この革命を相續するものはデモクラチツクな選擧によつて成立するワイマルの憲法會議であるか、それとも革命的形勢のうちから自然に生れた、ベルリンの勞兵委員會であるかと云ふことであつた。社會民主黨はこの革命的な組織をすてゝ、デモクラシーの形式を取つた。そして十一月十六日の第二回勞兵大會に於て、最高の權力を、憲法會議の手に移す決議をしたのである。斯ようにドイツの社會民主黨は、ブルジヨアジーと協力して、デモクラシーを確立しよ

うとした。そしてその結果は、大工業と財政資本とが、完全にドイツの支配者となつた。けれどもデモクラシーはどうなつたらう。

革命が中世紀的遺物を一掃した跡のドイツは、何と云つても、政治的自由は着しく伸張され、政治は民主化したに相違ない。三十萬の黨員と無數の新聞雜誌を有し、ロシアを除いての最も有力な共產黨がドイツに發達した一事だけでも、有力にこれを物語つてゐる。けれどもドイツの政治的自由とデモクラシーとは、決して十九世紀の後半に於ける、英國のそれのように、安定的なものではない。ブルジョアの勢力は絶ず之を侵さうとし、無產階級は斷えず實力によつて、之を維持しなければならぬ。それは大資本と反動主義の獨裁に推移して安定するか、さもなくば、無產階級の獨裁に推移して、初めて安定を見るべきものである。

最近に於けるドイツの政局の發展は、ます〱明白にこの事實を證據たてゝゐる。ドイツはブルジョア・デモクラシーから、一步一步、反動主義の獨裁に推し移つてゐる。十月の末日（昨年）には、サキソニーの勞働政府は兵力によつて顚覆された。十一月二十三日には、フオン・ゼークト將軍の一片の布告によつて、ドイツ共產黨の一切の組織と活動とは禁止され、機關紙や印刷所に至るまで沒收された。これは殆んど信ずべからざる出來事のようであるが、ドイツのデモクラシーの不安定な性質を考へたなら、寧ろ當然の歸趨に外ならぬ。

八

私は以上の數項に於いて、今後の日本に於ける政治的自由の伸張と民主化の進行とに對する――從つてまた小ブルジョア自由主義、乃至は小ブルジョア急進主義の擡頭に對する、二つの見解を說明した。第一の見解は、日本のブルジョア急進分子は今後の日本にブルジョア・デモクラシーを完成すべき歷史的使命を有するものである――言葉を換へて云へば、日本は今日以後に、安定したブルジョア・デモクラシーの時代を通過するといふ見解である。從つて無產階級は、デモクラシーの確立と安定とに、協力しなければならぬと云ふことになる。

そして此の協力が最も完全に行はれる場合は、無產階級が完全に、小ブルジョア急進主義に溶け込んだ場合である。よし完全に溶け込むことは出來ぬにしても、無產階級の心理狀態と運動とが、その狀態に近ければ近いほど、その協力は、より有效に行はれることになる。從つて階級意識に立脚して、無產階級の政治勢力が組織され、無產階級の獨立した政治行動が有力

となることは、小ブルジョア急進主義の勢力を弱め、從つてデモクラシーの確立と安定とを妨げることになる。

第二の見解は、日本に於ける資本主義の特殊な發達狀態の結果として、日本は最早や今後に於ても、完成され、安定した、眞實の自由主義時代、眞實のブルジョア・デモクラシーの時代を通過せぬ――そして通過する必要がない――とする見解である。その見解に從へば、無產階級は政治的自由の伸張と政治の民主化とを促進するためには、出來得る限り、大資本の政治勢力と小ブルジョアの政治勢力とを相爭はしめ、資本帝國主義の反動勢力と對峙してゐる限りに於ては、無產階級は獨立した政治上の立場から、小ブルジョア急進主義を支持し、彼等の政治勢力を有效に利用すると同時に、ブルジョア・デモクラシーに安定を與へいことを利益とする。即ちブルジョア・デモクラシーが安定し、小ブルジョア自由主義が無產階級の心理と運動とを支配する時期――若しくは之に相當した時期――を全然飛び越えるか、さもなくば最少の時間に縮約して通過し、斯くて政治勢力の分野が單純になり、ブルジョアジーと無產階級との政治勢力が、正面から直接に對峙する形勢を促進することが利益である。唯だに利益であり、または望ましいことであると云ふばかりでなく、日本の今後に於ける自由主義とデモクラシーの發達についての斯ような見解が正しいとしたならば、これは唯一の道程であつて、この道程を外づれた步みは、すべて脇道であり迂回であると云ふことになる。

第一の見解に從へば、日本の無產階級運動が步んだ過去の道程は、悉く誤謬であつた。そして日本の無產階級が新しい形勢に處するの途は、今日まで血と犧牲によつて綴られた無產階級運動の歷史を抹殺し、階級的に白紙となつて、小ブルジョア自由主義の運動となつて出直ほすことである。

第二の見解に從へば、日本の無產階級運動が步んで來た過去の道程には、よし色々の誤謬があつたにせよ、全體に於いて正しい道であつた。そして日本の無產階級が新しい形勢に應ずる道は、今日までに築づき上げた立脚地を確實に踏みしめつゝ、更らに新しい一步を踏み出すことである。第二の見解によれば、この新しい一步は、この鞏固な立脚地が築かれて、初めて安全に踏み出せるようになつたものであり、今日までに綴られた無產階級運動の歷史により、その續づきとしてのみ、初めて無產階級的に意義あるものである。

第一の見解によれば、日本の無產階級運動が新形勢に應ずる道は、政治運動の方面では、小ブルジョア自由主義に溶け込むことである。そして經濟運動の方面では、その要求と目標と

を、自由主義の範圍內で實現せられるものに限定することである。

第二の見解によれば、今後に於ける經濟運動の任務は、今日までに築づき上げた階級意識と階級的目標との下に、勞働者と農民との大衆を産業的に結束し、勞働者と農民との大衆を、この階級意識と階級的目標の水準にまで引き上げることである。そして政治運動の方面では、無產階級の一切の要素を、獨立した一つの政治的勢力に結束し、小ブルジョア自由主義に溶け込むことなしに、自由主義と急進主義の政治的勢力を刺激し壓迫して反動的資本主義に當らせると同時に、絕えず無產階級の要求によつて政治勢力の分野を明確にし、ブルジョア・デモクラシーに安定の暇を與へぬことである。

九

ブルジョア政黨とブルジョア政黨との間の政權爭奪から、近き將來に普通選擧が實施されたなら、無產階級はこの選擧權を如何に利用すべきであらうか。第一の見解に從へば、無產階級が從來の一切の立場を棄てゝ、小ブルジョア自由主義の政治運動に參加することは、與へられた選擧權を最大限度に有効に利用する所以である。第二の見解に從へば、與へられた選擧權を、積極的大衆的に棄權することは、ブルジョア・デモクラシーに安定を與へない最大限度の方法であり、同時に亦た無產階級の獨立した政治行動の意識を確立する最大限度の方法である。

そこで棄權說の不可能なことが明かになつたと云ふことは、この最大限度の方法が、現在の情勢の下では、不可能なことが明かになつたと云ふことを意味するものである。けれどもブルジョア・デモクラシーが安定せぬといふこと――若くは安定を與へぬといふこと――にも、固よりその最大限度と最少限度との間には、程度があり、幅がある。日本の今後にブルジョア・デモクラシーが發達せぬ――若くは發達する――といふことが程度の問題であるやうに、今後の日本にブルジョア・デモクラシーが安定せぬ――若くは安定する――と云ふことも、安定を與へる與へぬと云ふことも、同じく程度の問題である。

そこでブルジョア・デモクラシーに安定を與へぬ最大限度の方法が不可能となつたことは、その方法の基づく根本の見解ブルジョア・デモクラシーの安定に協力を與へぬと云ふ根本の方針が、不可能となつたことを意味するものではない。

三月革命後の、不安定なロシアのブルジョア・デモクラシーは、八ケ月にして過ぎ去つた。ドイツの十一月革命後の不定なブルジョア・デモクラシーは、五ケ年間の動搖を經て、今や大

資本と反動主義の露骨なデイクテートルシツプに推移しつゝある。ロシアでは無產階級の指導的黨派は、ブルジョア・デモクラシーに何等の安定をも與へまいとして鬪ふた。ドイツでは、無產階級の指導的黨派は、ブルジョア・デモクラシーに出來得る限りの安定を與へようとして鬪ふた。ドイツの社會民主黨は、革命後の權力を、民衆の革命的の組織たる勞兵委員會から、デモクラチツクに選擧せられた憲法會議に引き渡した。ドイツの社會民主黨は、革命のうちから自然に生じた無產階級の武裝を解除して、ブルジョアの正規軍の手にベルリンを引き渡した。ウイルトの小聯立內閣が倒れた時（吾々はこの跡に、もつと反動的な政府の現はれることを豫期してゐたが）、社會民主黨は謂ゆる大聯立內閣の組織を助けて、ブルジョア・デモクラシーに安定を與へようとする最後の奉公をした。それにも拘らず、ドイツの不安定なデモクラシーは、だん／＼露骨なデイクテートルシツプに推移した。そしてサクセン勞働政府の顚覆後、さすがの社會民主黨も、大聯立から手を引いたのである。

ロシアとドイツの形勢は、決して共まゝ日本に當て嵌めることは出來ぬ。一九一七年の三月ロシアと一九一八年十一月のドイツに於ては、ブルジョア・デモクラシーに安定を與へぬといふことは、直ちに政權を、無產階級の手に收めることを意味してゐた日本の今日には、決して之に似寄つた形勢すらもない。日本の場合、少くとも當面の問題としては、ブルジョア・デモクラシーに安定を與へぬといふことは、無產階級がどの程度まで、獨立した政治勢力として、小ブルジョア自由主義の思想的支配からも、その政治運動からも獨立するかと云ふことを意味してゐる。反動主義から取り返した政權を、小ブルジョアの急進主義が握るか無產階級の社會主義が握るかといふ問題は、當面の問題としては、まだ吾々の前に提出せられては居らぬ。之に反してブルジョアジーの內部に於ける利害の分化と共に、必然に展開する新しい形勢——今後の日本に多かれ少かれ發達しようとする小ブルジョア自由主義、小ブルジョア急進主義の擡頭——に對して、無產階級が如何なる態度を取るべきか——無產階級は小ブルジョア急進主義の指導の下に、ブルジョア・デモクラシーの期間を通過すべきであるか、それとも今日までに築づいて來た階級意識の上に、獨立した無產階級の政治行動を組織すべきであるか——といふことは、差し迫つた問題であるそして普通選擧の實現を前にして、いよ／＼差迫つた問題になつて來る。

この問題に當面して吾々の取るべき無產階級的の戰術——乃至は『革命的』の戰術——は何だらう。吾々はしば／＼『革命

的』といふ言葉を用ひてゐる。けれども吾々は如何なる場合にも、『革命的』といふ言葉に、實際の形勢が意味してゐる以上の意味を含ませてはならぬ。吾々は『革命的』といふ言葉を、吾々の感情と反抗的精神とに快感を與へる誇張した忘想に變化してはならぬ。一切の無産階級的要素を、ブルジョアジーと小ブルジョアジーとの有ゆる政治的勢力から獨立させ、徹底した無産階級意識の上に階級的に結成し、かくて小ブルジョア急進分子の政治的勢力をも、何等の危險なしに利用することが出來、多かれ少かれ今日以後に伸張させられる政治的自由とデモクラシーとを、安全に且つ有効に利用することの出來る、堅固な無産階級的の立脚地を築づき上げること、この一事を外にしては、新しい形勢に應ずる吾々の戰術のうちに、『革命的』な意義を見出すことは出來ぬ。

日本の勞働運動が、過去數年の間、ブルジョアジーの政治に對する大ざつぱな否定と抗議の立場から、選擧權獲得の運動に對して消極的な態度を取つて來たことは、よし無産大衆のうちの比較的少數者の間にもせよ、階級意識を精練し、日本の無産階級運動に鞏固な礎をおいた點に於て、不滅の効果を殘したものである。勿論それには、政治に對する消極的態度を理論化する誤謬を伴ふたにもせよ、當年の組合運動に取つては、如何なる代價を拂ふても、ブルジョアジーの政治勢力の風波に冒されない高い防波堤を築いておくことは、絶對の必要であつた。

然しながら普選運動不參加は、ブルジョア政治に對する消極的の否定に過ぎぬ。若しこの消極的否定の態度を延長して、積極的の對抗を意味する大衆的棄權運動に推移することが出來たなら、日本の無産階級運動は、最早や確乎不動の立脚地を築づき得たといつてよい。

積極的大衆的の棄權運動は、斯ような意味に於て、第一に望ましい方法であつた。そして第一に望ましい方法が敗はれたなら、吾々は何等の躊躇もなく、第二の望ましい方法を取らねばならぬ。

十

積極的の棄權運動が第一に望ましい方法であるとしたならば、積極的棄權に最も近い方法――第二に望ましい方法――は、無産階級が積極的に、組織的に、選擧權を行使することである。或る人々は、積極的棄權の隣は消極的否定の態度であつて、選擧權の行使は、棄權運動とは最も懸け離れた方法であると信じてゐる。けれども事實はそうではなく、積極的の棄權と選極的の行使とは相去ることは一歩であつて、實際に於ても、

將來無產階級の政治行動は、いつ何時でも、積極的の行使から積極的の棄權に移る準備がなければならぬ。積極的の棄權か積極的の行使かは、原則の問題ではなくて、機會の問題である。

之に反して消極的否定の態度と、選擧權の無關心な行使、乃至は組織のない行使――詳しく云へば、無產階級の投票が階級的に統制されないで、ブルジョアや小ブルジョア政黨の間に分散すること――との間は、相去ること一步である。消極的否定の態度と積極的棄權とは、皮相の觀察者には、相去ること一步の如くに見られてゐるにも拘らず、その間に非常の距離があることは、從來の消極的否定の態度を單に延長することによつて直ちに積極的棄權に移ることが不可能だつたといふ眼前の事實によつて、遺憾なく證據立てられてゐる

然らば積極的棄權は、日本の無產階級運動の戰術から、永久に消え去つたものであらうか。斷じてそうでない。

議會といふ場面に現はれるブルジョアジーの政治勢力に、積極的に對抗する方法は、積極的に投票權を行使するか積極的階級的に棄權するかの外はない。そしてこの二つの道の何づれを選ぶかは、たゞ機會の問題である。

けれども若し積極的の棄權と積極的の行使との、どちらが一般的の方法であつて、どちらが例外的の方法であるかと云へば、積極的の行使が一般的の方法であつて、積極的の棄權運動は、例外的の形勢に處し、例外的の形勢を逆用する、例外的の方法であることは爭はれぬ。例へば今日以後二十年、若くは三十年の間、無產階級が政治的無自覺と無關心から、投票權の消極的不行使を續づけることは出來るにしても、相當に長い年月の間、積極的棄權を以つて押し通すことは、實際に於て不可能である。そして其の結果は、必ず投票權の無關心な行使か、無關心な不行使かに墮するに相違ない。

サンヂカリズムの理論は、政治に對して消極的否定の態度を取つて居る。そしてフランスの勞働總同盟が、久しい間その傳統的な非政治主義の態度を續づけることが出來たのは、それが積極的棄權の態度でなくて、消極的否定の態度だつたからである。そして斯ような消極的否定の思想から、勞働總同盟が謂ゆる『政治的中立』の態度を續づけてゐた結果として、組合員の投票の一部分は、無關心に棄權せられてゐた。そして他の一部分――否な大部分は、無關心に、ブルジョア政黨に投票せられてゐたのである。

斯ように相當に長い年月に亘つては、政治的冷淡と政治的無自覺から起る無關心、乃至は消極的態度を續づけることは出來るが、積極的大衆的の棄權運動で押し通すことは不可能であ

る。從つて投票權の行使によつて對抗するか、積極的の棄權によつて對抗するかは、固より原則の問題ではなくて唯だ機會の問題ではあるが、積極的行使による對抗が一般的の方法であつて、積極的棄權による對抗が、例外的の形勢に應ずる例外的の方法であることは、爭はれぬ事實である。

それと同時に、デモクラシーが例外的の發達狀態にある日本の今後には、まさにこの例外的の形勢が、しば〳〵起り得るといふことも、恐らくは爭ふことの出來ない事實である。即ち今後の日本には、投票權の積極的の行使による對抗が、實際上に不可能とされ、乃至は實際上に効果のないものとされるような形勢が――全國的にも地方的にも――起ることは、想像するに難くない。(日本農民組合旭東聯合會が、昨秋の府縣會議員の選擧運動に參加した經驗から、本年の總選擧に對しては、却つて棄權の態度を定むるに至つた實例などは、極めて興味ある現象である。將來に於ても、一般的には積極的行使の方法が取られつゝ、部分的地方的には、積極的棄權の方法を取るべき場合の起ることをも、想像することが出來る)。

日本に於ける政治的自由とデモクラシーとの、極めて不安定な性質を考へたなら、斯ような機會を豫想することは容易である。否な日本の無産階級運動に取つては、斯ような機會を常に打算に入れ、斷えず豫測しておくことは、絕對の必要であると云つてよい。

積極的の棄權と積極的の行使とは、原則の異つた二つの運動方法ではなくて、議會に現はれるブルジョアジーの政治勢力に對する、積極的對抗の表と裏である。それは形勢と機會の必要に應じて、容易に轉換されなければならぬ。若し形勢の必要が之を命じた瞬間に、立ちどころに、積極的の行使から積極的の棄權に轉換することが出きないなら、その積極的の行使は、決して徹底した無産階級的立場からの行使でなかつたことを證明するものである。

けれども之は無産階級が、徹底した階級意識の上に政治的に組織され、訓練されて居る時に、そして徹底的に、ブルジョア・デモクラシーの感化から獨立してゐる時に、初めて望まれることである。ドイツの社會民主黨が十一月の危機に當つて、新たに生まれた民衆の組織を棄て、憲政會議といふデモクラシーの形態を選んだのは、要するに一度びブルジョア・デモクラシーの感化に捉はれたドイツの社會民主黨には、この轉換が出來なかつたことを意味してゐる。(本文の大部分は、昨年中に執筆したものであるが、その後の事實によつて多少の補足をした)。

自由、力、及び無價値の哲學

村松正俊

一

人生の結究の目的は結局人間の幸福に存することを知らなければならない。人生に目的ありや否やを論ずる必要はない。人は之を知らない。知らざるが故に之を求めるのである。自己にあらざるが故に之を求めるとは人間の常に行ふ一つの冒險である。自己に存するが故に之を好むとは一つの心理である。それは類は類を知るといふが如く、同性相寄るといふが如く、調和の理である。しかも人の心理は更に第二の心理をもつ。それは自己に存せざるが故に之を欲するといふこと即ち之である、隣家の果物は欲しいものである。外國の風習は眞似て見たいものである。所有慾の發するところ多くはここに來る。それは對比の理と號して宜しいであらう、これ多くの心理に動かすべからざる二心理である。調和なるが故に同色相集つて美をなす。對比なるが故に綠と赤と相反して强烈なる色彩をつくつてゐる。天性メランコリツクなる人は、自らがメランコリツクなるが故に好んで淋しさを訴へ、孤獨のうちに住まんとする。また性來快濶なる人は、自らが快濶なるが故に、人と接し交際場裏に花と唱はれようとする。これすべて調和の理である、之に反して、ある人はその內に悲哀の情を藏するが故に、之を好まずして却つて、外いたづらに快樂を追ひ、喜びを求める。しかもそれはつひに彼の本性のものでない。同樣にして天性快濶なるが故に、悲哀なる文章に耽り、自ら之を嘗くが如き、しばしば接する例である。その數擧げて數ふべからざるものがある。知るべし、この二つの心理の人間に巢食へることの深く且つ廣きことを。

人は全生活の眞中にゐて、自ら生活の何たるを知らない。また恐らくそれは知るべからざるものであらう。その故に多くの人は之を知らざるがままに放棄して、日夜營々として衣食のた

めに働きつつある。無智なるが故に幸福であるとは彼等に投げられたるところの、いはゆる賢人たちの言葉である。しかもその賢人たち乃至哲學者たちは如何の狀であるか。人生字を知る憂患の初めとはつひに彼等の泣き言ではなかつたらうか。ささやかなる理智は彼等にめぐまれた。之によつて彼等は人生の目的を求め、人生の歸結をさぐらうとする。しかもそのことの不可能なるがためにつひに自ら失望せざるを得ぬ。或るものは自らの論理に迷はされ、ある者は觀念に囚はれ、かくして得たりと信ずるところの結論は、つひに彼自身を慰めるべき一つの迷ひにすぎなかつた。その故に宗教がある。ある宗教がある。甲の宗教がある、乙の宗教がある。丙の宗教がある。又其の故に哲學がある。一哲學がある、Aの哲學がある。Bの哲學がある。かくの如くにして賢人と哲學者とはつひに自己滿足のみで終らざるを得ない。それは彼自身をのみ瞞すところの毒藥である。彼はその論理と觀念とによつて正しく痲痺させられてゐるのである。人生はつひに彼の考へる外にあつた。個人個人の生れ出づるやその個人の意志の外にあるとひとしく、人生の本體とか究局目的とかは人間の思議以外にある。すべてのそれに對する說教者こそ詐僞者なのである。

その故に哲學や宗教は人生にとつて何の意味をもたないのである。それは一つの制度と同じであつて、その創設者なり、その考へる人にとつてこそ必要であるが、それ以外には何の役にも立たない。出來上つた以上それも一つの存在である。存在を否定することは出來ない。それを考へる人にとつて、それが自己陶醉をもち來し、それで滿足されると同樣に、その學徒なりその宗教なりにも同じ效果があるにちがひない。故にその存在は認められる。しかしそれが人生の本體や目的について何ら究明するところのないのはみな同じである。一つの存在には一つの目的で充分である。否らざればその存在は相反する目的のために、存在の必要がないからである。人生は一つである。一つの人生に對して多くの哲學者や宗教家はその學者や宗教家の數だけの解釋を下してゐる。これ自ら明かなるところの彼等の無意味を示してゐはしないであらうか。甲の宗教は乙のそれと戰ふ。Aの哲學はBのそれと相論じてゐる。そのいづれもが正しいかは論爭の結果をまつて知るべきでない。そこに矛盾がある。

形而上學は迷妄者の一發明である。人生に目的ありや否や。それは知るべくもない。ありとすれば何であるか。それも知るべくもない。その故に形而上學がその發達を遂げる。さうしてこれを信ずる限り、人生は正しくそれにちがひないのである。

理性は理智の産物である。經驗は感情の集積である。この二つは二つながら人生の不可能を教へる。否、之を不可解となすことそのことがすでに宗教や哲學にわづらはされた見方である。經驗は何を教へるか。經驗は人生に目的のないことを教へた。目的ありとするも、これは決して一人生の目的ではなかつた。内觀すれば個人個人の目的であつた。その個人の目的さへも實は嘘なのである。目的があつて人が生れたのでない。之に反して生れたが故に目的を求めるのである。金のために？　職業のために？　名聲のために？　支配のために？　すべては生れた後に決定される。しかもそれが滿されたときに於て人生は何であるか。目的は自滅する。滿足された時に滅せざる目的は目的でない。それは手段だ。しかも人間の目的はいづこに行かんとするのであるか。すべてが自滅して滿足してゐるのであるか。然り。自殺者は然りだ。しかも自殺は多く不滿足から發するのではないか。然らず。すべては滿足してゐない。即ちすべては目的を充足せしめてゐない。金を求めるものにその滿足點をきけ。彼は答へない。金で滿足してゐるものは次に必らず求めるものである。支配は？　名聲は？　職業は？　かくして個人個人の目的はつひに存しない。それは存するとすればアポステリオリに存するのである。アプリオリではない。さうしてそれは個人のみに止まらんや。全人生がさうなのである。人生は何に向つて進みつつあるか何を求めんとしつつあるか。答へるものは遂にない。――かくして經驗は人生の目的つひに如何をたづねて失望に終つてゐる。

理性は？　理性はいふ。人間は生物の一つに過ぎない。人間が全生物から獨立した偉いものと考へるから無用な哲學や道徳や宗教や法律が出來るのである。古代生物學は何を教へる。一單細胞動物から人間までの進化は一つの歴史である。人間の世界だけに止つてゐて、歴史が重要な教訓をもたらすやうに、古代生物學は人間に一つの教訓を與へる。また人間が母胎中の十月の經過は何を示すのであるか。これは個體のうちに全種族の進化を行ひつつあるに外ならない。もし人生に目的があれば、それらの進化段階のうちにもそれぞれ目的ありとしなければならない。それらに無いたらば人間に無いこともまたたしかである。しかもそれだけの觀察は單に地球上の出來事を中心にしたものに過ぎない。地球はいかにして形成されたのであるか。太陽系の將來は如何？　宇宙はいかに行くのであるか。――かくして人間の目的はいよいよ五里霧中に彷徨せざるを得ないではないか。それを理性が正しく教へてくれた。

然らば目的とは何であるか。問題の中心はそこにある。元來

人間は生物に過ぎない。むしろそれは一つの存在である。それに本體を求めたり、目的をたづねたりしたのがそもそもの誤りである。價値を求めることは一つの誤りだ。その誤りからすべての誤りが發生する。目的を求めることは、自己にささやかな智識をもてる智識人が勝手にその腦中に組み出した幻影に外ならない。自己にないが故に之を求めたのである。求めんとして得られず、又得たと信じたものが虚であつたときの絶望を思へ。しかしながらその絶望にも關せず智識人、哲學者、宗教家のたぐひは之を求めてゐた。存在は存在である。價値でない。ないところの中にあるものを求めることこそ却つて愚人ではなかつたらうか。さうしてかかる價値のないことはすでに經驗からも、理性からも證せられた。今や目的はない。個人にも。人生にも、それはもとより當然である。存在せざるものを、存在せるが如く考へて探ねてもある理由がないではないか、ここに人生の目的は第一に否定された。

來るべきは何であるか。之を否定したところのその同じ經驗と理性とは、之を更に復活せしめた。人に目的のないことは鳥や猫と同じい。しかも鳥や猫は人と同じく生きてゐる。日に食をとり、眠り、覺め、戀し、子を生み、さうして生きてゐる。そこに人間と何のちがひがあるか。感情と理性との相違であるか。それは神經系統と大腦の發達の程度の相違に外ならない。人間は萬物の靈長ではない。人間は他の生物と質を異にするにあらずして、量を異にするのみだ。すでに生物學や進化論は人間を人間の位置に正しく置いた。人間の目的は犬や猫と何のちがひもない。それが最初の目的である。之を目的と名づけていいかわるいかを知らない。しかも他のあらゆる目的は之に附屬する。之を除いて目的はない。それはつひに他のあらゆる生物とひとしく種族維持と自己保存である。根本的には前者に外ならない。いかに鹿爪らしい尤もな大議論を吐く道德の大先生がひとしく犬や猫と同じ仕事をなしつつあるといふことは、その議論を對照した時に一つの皮肉となる。講堂の眞中で哲學を講じ、人生の目的を論じて、一言之に及ばず、しかも事實として種の營みをなしてゐることは喜劇に價する。金だ? 國家だ? 國防だ? 革命だ? 政治だ? いづれもそのために存してないと何人がいふ。生物としての人間はつひにそれ以外に目的をもつてゐないではないか。

此によつて之を推するにあらゆる道德、あらゆる宗教、あらゆる政治、あらゆる哲學、あらゆる商賣、すべてそれらはことごとくその目的のために存して來たと見らるべきである。人はすぐれてゐる。人は哲學をもち哲學者をもつ。そこに論理の遊びと

哲學の教訓とがある。それはかかる人生の外皮である。道德や宗教や藝術や政治やすべてこれかゝる人生の裝飾物に過ぎない。その外皮、その裝飾の下に、やや理智のある人間はそれをかくしてゐる。しかしそれが遂に人生の外皮であり、裝飾であるといふ事實はつひに如何ともなしがたい。藝術はいかにして發生したのであるか。遊戲であるか。遊戲であるとすれば、それはかかる種の維持をなした殘りの精力のあそびである。藝術が性慾の表現であることは古代人の藝術によつてよく知られる。直接の起原が性慾にないとするとそれと關係の深いことは拒まれい。さうして多く性慾のために起り、そのために用ひられて來たのである。現に存するあらゆる藝術から性慾の要素をとり除いて果してあとに何が殘るのであるか。裸體畫はいふまでもない。小說は必らず愛慾の世界を繪き、戲曲は必らず心中を扱ふものときまつてゐる。それから最も遠いところの愛國劇にしても忠義劇にしても、これはつひに第二義的のものに過ぎず、その根底には性慾が横つてゐるではないか。更に藝術家なる一連の人間を見よ。彼等は普通人と大差ない。ただ普通人よりも道德や法律に束縛されることを好まないだけのことである。故に彼等の本能は機會に應じて直接に動く。彼等の生活が常に戀愛を中心にして動いてゐることは、世界中いついかなる藝術家といへども同じことである。かくして藝術はつひに性慾のために、性慾を中心として、性慾によつて存在するのである。人生の裝飾としていいものはいいものほど性慾に接し、さうしてそれから遠ざかつてゐるやうに見せかけてゐる。

從つて宗教や道德や哲學がさうなのである。あらざるものを欲するが故に、それらの學徒は好んで思想に於てそれから遠ざかつてゐると共に日常生活はつひにそれより脫し得られない、宗教の起原は疑ひもなく性慾にある。佛典の一冊、佛彫刻の一片はすでに之を證して餘がある。宗教的ファナティズムは必らず性欲異常者だ。性愛の宇頂天が宗教の求める歡喜の頂上である。宗教から性慾を除いたら、何が殘るのであるか。同樣にして哲學や道德はそれをただ保護するために存してゐるといはざるを得ない。政治は民を治するといふ。それが宗教と結んだ時はもとより、それから分離してもその本來の目的はただ×××××安全ならしるのを目的にしてゐる。支那の古代人はそこに徹底したところがある。

生活はつひに種の維持のための外はない。それがために種々なる機關や法律や制度が生ずる。種の維持は性欲生活である。故に××××こそ人生の結局の目的でなければならない。さうしてそれは意識するとせざるに關せず、人間としての一つの事

實である。この事實のもたらすところのものは何であるか。それは×××が人間に最も幸福な生活であるといふこと即ちこれである。百萬石と戀とを比較して後者をとらざるを得なくなつたのは人生結局の弱點である。しかもこの弱點たるや人間の本來の面目である。人生は一つの存在である。それ以上の何物でもなく、それ以下の何でもない。存在を認めずして價値のみを高調するが故にそこに救ふべからざる誤りが湧く。道德や法律や制度やつひに人間をして幸福ならしむべきために存する。人間が幸福になるためにそれらに××××××いつて、それらは決してその人間を×××××なければ義務もない。之を取てする時、人間のそれらに對する反抗が生ずるのである。本末を顚倒してならない。しかも人は多く本末を顚倒したがる。そこに歷史上限りなき×××迹が殘されてゐるのである。

二

今や現代惡は至るところに感ぜられる。現代惡とは何であるか。それは細分すれば種々なる方向に現れてゐるであらう。しかもそれの根本はつひに人間の生活を人間本來の生活ならしめざるところに存してゐる。人間は今や幸福でない。何故であるか。あるものは衣を求めんとして得ず、あるものは食を得んとして得ず、あるものはいたづらに勞働してその結果を得ず、或は自由を求めて得ず學問をなさんとして得ず、結局、戀を求めて得ないのである。幸福とは何ぞやとは倫理學者に任ぜよ。現代惡を痛感するものは今や人間の生活がその本來の姿を失つてゐることを知つてゐる。解放とは？　改造とは？　××とは？　乃ち知る現代の×××すでに人間生活と相一致せざることを。かつて人は自由を求めた。自由はいづこに存する。自由を求めた一隊は××にせまつた。×××權力はつひに割かれた。議會とはその結果である。しかも議會はこれを求めた××××××となり了つた。選擧權とは何ぞや。獨裁官の選出機關の一である。普通選擧とは何ぞや。×××の詐僞の一方法である。自由は之をもつものに存する。之をもたざるものは天下に充ちてゐる。今日に及んで自由をいづこに求めんとするのであるか。議會はない。議會の議決は多數黨の黨議に過ぎず。多數黨の黨議とはつまるところ領袖會議の結果に外ならない。政友會總裁の是非は卽ち帝國議會の議決となつて現れてゐた。自由は何處にもない。選擧民は何故にこぞつて政友會員を選出したのであるか。知るべし、近代の詐僞は古代の詐僞よりも念入りになつてゐることを。然らば議會はついに何のなすところもない。暮夜ひそかに政友會總裁の臺所口をたたくものは容れられ、一票を以つて忠

哲學の教訓とがある。それはかかる人生の外皮である。道德や宗教や藝術や政治やすべてこれかゝる人生の装飾物に過ぎない。その外皮、その装飾の下に、やや理智のある人間はそれをかくしてゐる。しかしそれが遂に人生の外皮であり、装飾であるといふ事實はつひに如何ともなしがたい。藝術はいかにして發生したのであるか。遊戯であるか。遊戯であるとすれば、それはかかる種の維持をなした殘りの精力のあそびである。藝術が性慾の表現であることは古代人の藝術によつてよく知られる。直接の起原が性慾にないとするとそれと關係の深いことは拒まなれい。さうして多く性慾のために起り、そのために用ひられて來たのである。現に存するあらゆる藝術から性慾の要素をとり除いて果してあとに何が殘るのであるか。裸體畫はいふまでもない。小說は必らず愛慾の世界を繪き、戯曲は必らず心中を扱ふものときまつてゐる。それから最も遠いところの愛國劇にしても忠義劇にしても、これはつひに第二義的のものに過ぎず、その根底には性慾が横つてゐるではないか。更に藝術家なる一連の人間を見よ。彼等は普通人と大差ない。ただ普通人よりも道德や法律に束縛されることを好まないだけのことである。故に彼等の本能は機會に應じて直接に動く。彼等の生活が常に戀愛を中心にして動いてゐることは、世界中いついかなる藝術家といへども同じことである。かくして藝術はつひに性慾のために、性慾を中心として、性慾によつて存在するのである。人生の装飾としていいものはいいものほど性慾に接し、さうしてそれから遠ざかつてゐるやうに見せかけてゐる。

從つて宗教や道德や哲學がさうなのである。あらざるものを欲するが故に、それらの學徒は好んで思想に於てそれから遠ざかつてゐると共に日常生活はつひにそれより脱し得られない、宗教の起原は疑ひもなく性慾にある。佛典の一冊、佛彫刻の一片はすでに之を證して餘がある。宗教的フアナティズムは必らず性欲異常者だ。性愛の宇頂天が宗教の求める歡喜の頂上である。宗教から性慾を除いたら、何が殘るのであるか。同樣にして哲學や道德はそれをただ保護するために存してゐるといはざるを得ない。政治は民を治するといふ。それが宗教と結んだ頃はもとより、それから分離してもその本來の目的はただ×××××安全ならしるのを目的にしてゐる。支那の古代人はそこに徹底したところがある。

生活はつひに種の維持のための外はない。それがために種々なる機關や法律や制度が生ずる。種の維持は性欲生活である。故に××××こそ人生の結局の目的でなければならない。さうしてそれは意識するとせざるに關せず、人間としての一つの事

實である。この事實のもたらすところのものは何であるか。それは×××が人間に最も幸福な生活であるといふこと即ちこれである。百萬石と戀とを比較して後者をとらざるを得なくなつたのは人生結局の弱點である。しかもこの弱點たるや人間の本來の面目である。人生は一つの存在である。それ以上の何物でもなく、それ以下の何でもない。存在を認めずして價値のみを高調するが故にそこに救ふべからざる誤りが湧く。道德や法律や制度やつひに人間をして幸福ならしむべきために存する。人間が幸福になるためにそれらに××××××いつて、それらは決してその人間を××××××なければ義務もない。之を取てする時、人間のそれらに對する反抗が生ずるのである。本末を顚倒してならない。しかも人は多く本末を顚倒したがる。そこに歷史上限りなき×××迹が殘されてゐるのである。

二

今や現代惡は至るところに感ぜられる。現代惡とは何であるか。それは細分すれば種々なる方向に現れてゐるであらう。しかもそれの根本はつひに人間の生活を人間本來の生活ならしめざるところに存してゐる。人間は今や幸福でない。何故であるか。あるものは衣を求めんとして得ず、あるものは食を得んとして得ず、あるものはいたづらに勞働してその結果を得ず、或は自由を求めて得ず學問をなさんとして得ず、結局、戀を求めて得ないのである。幸福とは何ぞやとは倫理學者に任ぜよ。現代惡を痛感するものは今や人間の生活がその本來の姿を失つてゐることを知つてゐる。解放とは？ 改造とは？ ××とは？ 乃ち知る現代の×××すでに人間生活と相一致せざることを。かつて人は自由を求めた。自由はいづこに存する。自由を求めた一隊は××にせまつた。×××權力はつひに割かれた。議會とはその結果である。しかも議會はこれを求めた××××××となり了つた。選擧權とは何ぞや。獨裁官の選出機關の一である。普通選擧とは何ぞや。×××の詐僞の一方法である。自由は之をもつものに存する。之をもたざるものは天下に充ちてゐる。今日に及んで自由をいづこに求めんとするのであるか。議會はない。議會の議決は多數黨の黨議に過ぎず。多數黨の黨議とはつまるところ領袖會議の結果に外ならない。政友會總裁の是非は即ち帝國議會の議決となつて現れてゐた。自由は何處にもない。選擧民は何故にこぞつて政友會員を選出したのであるか。知るべし、近代の詐僞は古代の詐僞よりも念入りになつてゐることを。然らば議會はつひに何のなすところもない。暮夜ひそかに政友會總裁の臺所口をたたくものは容れられ、一票を以つて忠

政會に投ずるものはすてられたのが本態であつた。しかも議會制度は正しく現代の一制度である。之に滿足ならばそれでいふところはない。之に不滿たるものが續出するのは何の因由するところあつて然るのであるか。議會にして國王から得たる自由の府ならば解放も改造も今日何ら必要もない筈である。現代の詐僞は合理性を以つてする。獨裁は常に變形してあらはれてゐる。生活はかつて安まつたことはない。ここに生活の恢復を目的とするところの改造運動、解放運動がはじまつたのである。

　生活は一つの存在である。それは具體的な生活のいひであつて、決して抽象的な「高遠」な「理想」の如き生活でない。あらゆる理想や觀念はすでに生活にとつて何物でもない。生活の欲するところは自己目的である。日常の生活である。日常の生活さへ幸福であれば何にが何を要求しよう。生活が不幸に陷りかけたのはたしかに理智のおかげである。理智はそのささやかなる力を以つて自然を究明したと信じた。さうして宗教であり、藝術であり、政治であり、經濟であつた。それらが生じたのはただ生活のためにのみ、生活をよりよくし、生活をより幸福にするためにのみ生じたのである。あらゆる人間の生んだものはこれより以來の目的をもたない。政治は決して支配者の支配慾を爲すためのものでない筈である。さうなれば墮落したる政治である。道徳は生活をして幸福ならしむべく、人間がその經驗と理性とから生んだ一つの方法である。人間を縛るために生じたものでない。高遠な理想は人間生活の幸福な生活の影であつて決して日常生活から飛びはなれたものでない。觀念は生活をなめらかに運行せしめるべき一つの道具に過ぎない。かくの如くにして人間はあらゆる制度、あらゆる道具あらゆる方法をこしらへた。それは單に生活のためにこしらへたので、その下に生活を從屬せしめようとしたためではなかつたのである。しかしながらすでに知られたるが如く、あらゆる存在はそれ自身でそれ自身の世界をもつ。この世界はそれだけの獨立性を有しそれだけで存在する。故にそれは本來それが生じたるところの本體からも獨立して自分の世界を保持しようとする。反逆である。子が親に反逆するが如く、弟子が師と意見を異にするが如く、あらゆる存在が存在として存在する限りやむを得ない事實なのである。物界のみに認めるのは早計である。あらゆる存在は進化をつづける。制度は無生物である。しかも制度は制度としてそれ自身の進化をなしてゐる。そこに小さな新しい種が生ずるのである。そこに人間が人間の道具として生み出したいろいろな機關なり、制度なりもまたそれぞれに獨立して、それぞれに特有の進化をつづけるやうになる。人間は自らがその機關なり

制度なりの主であると信じてゐた。さうしてそのつもりでゐたのに、いつの間にかさう信じながら實はそれの奴隷となり了つた。環境が人を支配するとは正しい。人間の生んだ生活の道具は常に人間に對して人間の外にあり、恰も人間の環境として存在してゐるのである。人間の心は自分の意志に從ふよりもはるかに外界に從つてゐる。心理學は之を敎へる。他人の性格は決して先天的のものでない、それは他人の成長と共に環境と同化しつつ形成される。その形成されたる性格が恰もその他人に固有の如く見られてゐるのに過ぎない。人間全體に於てもまた同じである。何人か好んで自己のこしらへた道具の奴隷たるに滿足しよう。好むと好まざるとに關せず、人間はその機關の下に生きるべく餘儀なくされて來たのである。

國家は一つの團體である。この團體は何故に生じたのであるか。いふまでもなく各個人の生活を安全に、幸福ならしめようとして生じたに過ぎない。種族國家は種族をもとにしてゐる。さうして個人の幸福の害されざる限り、國家はあくまで生活の機關であつた。しかも國家が國家としての獨立性をもつて人間の生活から脱出し來るや、それは一個儼然たる大機關となつた。人間は今やその下に××として××なつてゐるに過ぎない。征服の事實はさういふ×××に觀念上の滿足を與へる。それは觀念のみに止まる詐僞に過ぎない。しかも人間はその詐僞で充分である。さうして宗敎も之をたたへ、道德も之を稱し、哲學はそれを理論化する。かくして國家は最高の存在として、同時に最高の價値を有するに至り、哲學的至上存在であり、宗敎的崇拜物となつた。××××××××××××××××××××××。至高なる哲學的存在は天にある。一個の人間は卑しい地上の虫けらに過ぎない。その幸福を蹂躙することは何であるか。それが德である。かくして層々相なしてつひに個人の幸福はいづこにか飛んでしまつたのである。さうして一個人卽ちすべての人間は國家の×××なり了した。さうしてかかる大なる團體はいたるところに生じ、いたるところにその哲學的存在を保守してゐる。死ぬべきものは彼にあらずしてこれである。犧牲となるものはそれにあらずしてこれである。さうして宗敎的熱狂と共に戰爭が開かれ國家の安全のために數萬の人間が死ぬる。その行爲や壯烈であり、その心根や嘉すべしと××××××の××はいづこにあるのであるか。ここに制度の獨立とその進化が見られるのである。

それは一例に過ぎない。さうしてそれはいたるところにある今や人間はその本來の生活を失つた。何人と雖も奴隷でないものはない。奴隷でない存在はない。奴隷でないと信ずるもの

はそれ自身で欺詐にかかつてゐるのである。高遠なる欺詐である。哲學的自慰である。自由はすでにない。現實を見ることが第一の要勢である。さうしてそれは正しく人間がその道具の奴隷となつてゐることを教へてゐる。之をいづこに救はんとするのであるか。

その故に生活の恢復が第一に要求されるものである。生活は進化する。制度も進化する。しかもその二者は主從的關係にあるべくして實はあべこべになつてゐる。その故にこの二つの進化の間に相撞着することを恐れない。ここに生活を中心にして考へれば制度は固定するといひ得られるやうになる。然り。制度は固定する。之に反して生活は進化する。この矛盾は常に制度の改廢によつて解かれなければならない。この改廢の作用は實は絶えず行はれてゐて、事實上の人間の生活は相當に制度の固定を感じないで濟んでゐる。しかしその程度に於て行はれるものは日常の微々なるものに限られる。いかに日常少しづつ改廢しても永年月の間にその改廢されざるものが集積されるとはやむを得ない。況んや、最初から改廢せざらんことを目標にしてゐるのは尙のことである。機關や道具の硬化は必然的に生活を規定して來る。かくして自由なるべき生活はつひにその規定のままに動かなければならないやうになるであらう。硬化の具體的な原因は政治機關にあり、經濟組織にあり、哲學的思惟にある。生活は決して政治のために存するものでもなく、經濟のために有るのでもなく、哲學のために生れたものでもない。そのあべこべである。然るに政治が生活の上に君臨すれば、それは先づ個人の生活を政治機關の型の中に入れる。種々なる法律、規定はその手先きである。さうして人間の生活は第一にそこに絶たれる。經濟が來つて人間をその制度の下に於ける道具となさしめる。さうして哲學や倫理が、かくなるべきものとして人間を觀念させる。準備はととのつてゐる。あとは縛りさへすればいいのである。さうして生活は全くその觀念するとほりに硬化してしまつたのである。生活の恢復とは生活をもと通りにすることである。それは生物としての生活の本來にかへらしめることの外の何物でない。人間は幸福なる生活を欲してゐる。生活の恢復とは即ち幸福の追求である。現代惡とは生活の硬化であり、幸福の阻止である。ここに現代改造の重心が存してゐる。

何人も認めるが如く、今や生活は行きづまつた。即ち生活はすでに機關の奴隷として既に行くところがないのである。××××××××××××××××。第一××××××、第二に經濟への反逆、第三に哲學への反逆、×××××

××××人間ははじめてその生活を恢復すべきである。原始にかへるとは宗教の奴隷であつた時代にかへることでない。本能によつて、本能のままに强くあらんとした時代にかへるのである。小乘的な道德に束縛されず、×××××××、哲學によつて觀念づけられざる本來の生活に歸ることとである。かかる生活はいふまでもなく自由の生活である。人間の認識する自由は政治的自由、經濟的自由、哲學的自由に外ならない。それは認識による自由であつて本來の自由でない。政治は人による束縛である。經濟は物による束縛である。哲學は觀念による束縛である。しかしながら人間の生活は本來かかるものによつて束縛されてゐなかつた。それは最初から本能の生活であつた。本能こそ生物を通して一貫せる唯一の力である。力なくして生活がいかにして可能であるか。今や本能によつての解放が希望されてゐる。現代はあまりに本能を抑壓してゐる。それは生命の道を絶つことである。生物としての人間の第一の要件を抑へんとするものである。これが生活の墮落でないと何人がいはう。實に現代の生活は墮落した。その救濟が第一に本能への復歸である。さうしてそれが自由の獲得である。ここに人間は新しき景相に面して立つ。さうして現代社會改造の一重心はまさにそこに存してゐる。それ以外に自由はない。單なる自由とはつひに哲學的一妄想なのである。意志が自由であるか、自由でないかとは幾多の哲學者を惱ましたところの論題であつた。しかしながらあらる哲學的論題が然るが如く、それにまた互に根據のない形而上學的一遊戲に過ぎない。意志が自由である、と否とは現實に面して何の關係もない。神ありと論ずるものと神なしと主張するものとの間に何の相違があるか。今に及んで神ありと論じてもそれが何の意味をなさざることとは小兒といへども之を知る。「神」といふ概念の內容の變化に從つていくらでも議論は出來る筈である。かくして有神論、無神論は今日に於て殆ど無意義に歸した。自由といふのも亦然り。意志を自由であるとなし然らずとなすも自由の內容によつていくらでも論ずることを得る。科學は決定論に對してある根據を與へたかのやうに見えた。科學以前の自由論は科學によつて覆へされた。しかもその科學が又新なる自由論を支持してゐることを思へ。さこと(に)形而上學の不可能が證せられた如く、自由論もまた不可能なのである。神が神學的偶像であるとすれば、自由は正しく哲學的偶像でなければならない。今日に及んで抽象的な自由論をなす愚者がどこにゐるのであるか。ニイチエが賢くもいつた如く、自由とは新しき束縛を感じないといふことに外ならない。束縛は常である。陸續として來る束縛からいづこに於て自由となつたと

いふのであるか。自由はある意味に於て個人主義の目標であつた。しかも個人主義はその用を終へた。生物としての人間にどこに自由がある。まことに自然は人間をかくの如くにつくり出したのである。人心はつひに永久に自由になることはない。故にいたづらに自由を口にするをやめよ。生活の恢復が要求するところの自由とは決してかかる觀念上の遊戯でもなく、また形而上學的妄想でもない。それは現實に即したる生活の自由である。

何をか生活の自由といふ。生活は生物を通じて共通してゐる生命の流れである。これは名狀すべからざるものである。それは本能である。本能は力である。生活の自由とは正しくこの本能生活の恢復でなければならない。自由は力である。力なきところに何の自由が之れあらん。人はいふであらう。本能に從ふことは生物の運命だ。それは決して自由でないと。そこに論理の遊戯を以つて答へるならば、法則に從ふといふことを認識するのが自由であると答へれば足りるであらう。生物の運命はきまつてゐるかも知れない。その運命たるや單なる自我主義の自我と對比せしめることが出來る。自我こそ自由であるといふ。その自我の存在は既に運命ではなかつたか、それは一つの與へられたる存在ではなかつたか。それを認めずして自我を認めんとするは矛盾である。同樣にして生物として存する限り、その運命を認容することは正しい筈である。生物の生活は本能の生活である。この生活に歸着したる時に於てのみ、はじめて自由の境がある。本能への復歸は力の要望である。それは生命それ自身の叫びである。自由とは正しく力の獲得に外ならない。生活に於けるそれは本能の力を得ることとである。力なき自由を以つて云云するもそれは砂上の樓閣に過ぎない。甲の力が乙の力に勝つてこそ甲に運動の自由がある。乙には之に反して何の自由のない。力の釣合は相互に自由なることを示すものである。運動は力である。力は自由である。自己の意志は力によつて發顯される。さうして力はまさしく本能に存する。本能の生活に歸ることが第一に自由を獲得する所以に外ならない。人は戀に狂ふ男女を以て痴態となすであらう。しかしそれは本能である。それは自然の道である。さうしてこの二人の上に幸福がある。之を批難する凡凡たる道德家に何の力か之れあらん。行動こそ最初に存する。言葉は無力である。力は自由として現れる。然らば生命の本流に歸ることが自由になるべき第一の要件であることは何人も知るべきであらう。そを知り且つ現代の末期の社會がいかに本能生活を阻止してゐるかを知るならば、この意味に於ける自由が社會改造の一原理たるべきこと、また自ら明かとなるべきである。

三

現代惡を認識して之が改造を策するに當つてここにまた重要なる一つの改造の方針がある。それは獨裁の形である。

何故に獨裁が承認されるのであるか。人間はその生物としての生活を阻止されることすでに長きに過ぎた。今や自由が要望されつつある。生活は地上を離れて中空にかかつてゐる。政治は常に獨裁の形をとりつつある。政教一致とは人間をして神の國の支配に置かんとするものである。人間の自由は剝落した。神は萬物の上に君臨してその獨裁の權をふるひつつある。人間に力がなかつたのであるか。さうだ。自己解放の力がなかつたのである。人間は自らの運命を自らの肩に負ふことを忘れた。神の指揮に一切を任じてそれで滿足してゐた。しかしながら神はいづこかにある。神は天に住するものであるか。神は太陽であるか。神は靈であるか。神は自然であるか。それ然り。豈夫れ然らんや。人間が然く信じてゐる間は天下は太平であつた。しかもこの信じてゐることが僞りであると分つた時、神は急に下界に墜落した。まことに神は廣大無邊である。さうしてその獨裁の威力は恐ろしい。神は人間に命じて一切の法律を立てしめた。一切の習慣を造らしめた。人間の行儀座臥すべて神を中心としてなされた。犧牲は神のためであり祭祀は神のためであつた。しかも事實は何であつたか。それの正體はついにただの坊主に過ぎない。一個の同じ人間である坊主が神の代りとして、神としてその獨裁權を振つてゐたのである。政治は神のものである。××××××××しかも眞相は王それ自身であつた。この獨裁は正しく束縛の一種である。それは人間の生活を神のそれに歸せしめることに於て墮落したる生活である。神は本能の生活を禁ずる。あらゆる生命の發露を阻止する。禁慾はその題目であり、奉仕はその云ひ草である。何の慾を禁ずるのであるか。性慾、食慾、所有慾、即ちあらゆる人間の本能的慾望は惡であるとして退けられた。惡か、惡か、まことに倫理的生活がそこに生ずる。ニイチエは一個の革命人である。そこに神の獨裁への反逆があつた。本能をしてその道に歸らしめよ。それが善なのである。人間にとつての善は人間的であることに外ならない。その善を禁ずる生活が墮落したものでないこと何人が確言しよう。寔に神の獨裁こそ恐るべきものであつた。

しかもこの神の獨裁は皮肉にも事實に於て常に人間によつて打ち破られてゐた。神を僭稱する坊主はその第一人者である。坊主は神の代理者に過ぎない。しかも彼は神の名に於て力を有

してゐた。力に自由である。坊主が神に代つてその獨裁術をとるやうになつたのは極めて至當のことといはなければならない。それは神にとつての一つの反逆である。同時に人間にとつての一つの自由獲得の運動である。獨裁は正しくこの方針であつた。坊主が神の代理をやめて、單なる政治の首長となつたとき、神の獨裁は直ちに首長の獨裁となつた。自由なる人間は本能を充足せしめる。首長のみがあらゆる人間の生活を得てゐたことはそこに推定される。しかもその自由は謂間首長一人にのみかがつてゐた。獨裁とは何ぞ。それは自由を反面から述べたに外ならない。自由が力であるが如く、獨裁もまた力である。力なくして自由なきが如く、力なき獨裁は成立しない。反言すれば自由なるものにしてはじめて獨裁の權があると共に、獨裁者には自由がある。從つて神の束縛から脱せんとする方針として自由の認められるものはもとよりであるが、それと共に獨裁も亦有力なる一方針であることを知らなければならない。神の獨裁が首長に歸したことはそれをよく裏づけてゐる。

しかしながら首長の獨裁が人間全體に及ぼした影響はどうであるか。首長獨裁に於て首長一人が自由を享有してゐたことはその獨裁が彼一人に止まり、他のすべての人間に及ばなかつたことを示してゐる。かかる獨裁も歴史的の役目を遂げてゐる。少くとも生活を神から人間の一人の手に奪回したことはそれである。しかもそれが人間の生活そのものに何の關係があるか。大多數の人間は依然たる奴隷である。彼等に生活の權利はない。力はつひに彼等のものでなかつたのである。然らば彼等がつひに蹶起して自由を要求する至つたのは極めて當然のことであらう。かくして首長の獨裁はブルジョワジーの獨裁へと移つていつた。デモクラシーとはその謂ひである。××××とはその形式である。××××をこのまま受けとつて、デモクラシーの表現であると今日の何人が信ずるであらうか。資本階級は英佛の例のごとく、××××はねた。××××は地に落ちた。立憲政治は之に代つた。それだけのことを以つてすべての人間が自由を得たときは愚人にあらずんば考へないであらう。支配階級はいつでも嘘をつく。奴隷の形式は常に變つてゐるがその實質は決して變じない。奴隷が今日ゐないと稱するだけのことをそのまま信じて今日の人間が自由民であると思ふものはその皮相の見や笑ふべきである。見よ、今や賃銀奴隷は天下に滿ちてゐる。それは何らの自由を有してゐない。彼等の生活は至るところから制限されてゐる。生活は不可能である。この奴隷は永久に機械の一部としてこの存在をつづけて行くのである。獨裁は力である。力は一つの貨物の如きものであつた。それ

を獲得したるものみが自由を享樂した。神から首長へ、首長から資本階級へ。今や次に如何なるものがこの寶物を得んとするのであるか。現代の奴隷であるところの無産階級が之を得んとするとある人たちのいふことや、まさに自然のやうに見えるであらう。然らばそれが現代の改造の一方針として認められることもまた無理もないことなのである。自由か、獨裁か、この同じものを抱いて、ここにこの改造の方針がある。そのいづれをとらんとするのであるか。

獨裁はその本質に於て憎むべきものでない。その結果に於て憎むべきものを現出しつつある。神の獨裁は神にとつて必要であつた。しかもすべての人間は奴隷の存在をつづけるべく余儀なくされた。獨裁は必然的に對象を要求する。對象のない獨裁とは自己矛盾である。對象とは獨裁のために犧牲となるものである。神の獨裁は全人類をそれの對象とする。獨裁を正しとするのは獨裁者に於てのみである。之を否とするものはその對象である。結果に於て憎むべしとなす所以のものは立場を對象に置くが故である。惡と善とその立場によつて相反する。本質に於て惡なるものが結果に於て善であり、本質に於て善なるものが結果に於て惡であるとは單に觀點の相違から來るちがひに外ならない。今人間はすべて獨裁の害を受けつつある。害とは何ぞや。自己目的でない點、即ちこれ。あらゆる生活はそれの連續的關係に於て他との關係を維持する。他との關係なき限りそこに存在の根據はない。しかしながら連續の基礎はもとより不連續に存する。自然は之を證し、本質は之をいふ。その故に一つの存在は一面に於て連續的であると共に、一面に於て不連續的である。連續的なる一面より見れば、存在はすべて他に依據する。不連續的なる點に立てば、存在はことごとく自己に完結する。生活もまたその通りである。人間の生活は一つには生物の一部としての生活であるが、一つには人間自身の世界を欲する生活である。ここに自己目的がある。神への生活は人間自身の生活でない。奉仕の生活は一部の眞理しか有してゐない。最も認容せらるべき奉仕の生活といへども人間生活の自己目的を欠いては成立しない。婦人問題を論ずる時、女たる前に人間たれといふのはその意味に於てである。まことに多元論は現代の流行である。自己目的なき生活はついに人間の生活でない。自己目的とは即ち無目的である。生活に目的なしと論じて來たのはその意味に外ならない。ここに生活はそれ自身の存在それ自身のため以外には存してゐないのである。神の獨裁が人間生活を害すること斯くの如きものがある。

××××といへどもその同じ××を免れない。首長は何故

に出現したか。思ふに生活とは一つの流れの如きものである。それはそれ自身のためにあらゆる必要なものを生ぜしめる組織である。制度がある。神は古代人の生活に欠くべからざる一つの道具であつた。それは古代人の生活の一指標なのである。人は神なしに生きられないとは古代の眞理である。神の權威はここに生じた。最初生活の道具に過ぎなかつた神は忽に生活に反逆した。さうして生活の指標としての役目を忘れて人間の上に君臨した。その弊の及ぶところつひに知るべからざるものがある。人間が神を廢位せしめたのはその當然の行動である。同時に生活の必然の行程である。生活は進化する。神の廢位と人間の首長の建設と、いづれも進化しつつある生活の生み出した當然の組織である

首長は恐らく最初ある一家の家長であつたに違ひない。家長の權威は即ち首長の權威に當る。家長はその獨裁權を神より得た。××××××××世界のいたるところの古代史はそのことを告げてゐる。ローマも然りギリシヤも然り。知るべし、家長は神の代辯者であつたことを。家長の權威は絶大である。家の何人も之に絶對の服從をしなければならなかつた。種族の發生は家にかかつてゐる。家長を中心としてこの同じ家は小さな國家を形成する。この小國家は實は一族である。族と族との爭鬪は必然的に征服、被征服の關係を生ぜしめる。ここに征服族は被征族をその族中に收めた。かくの如きくりかへしが何を生むのであるか。即ち××××××××をなすに至り、その家長が長首となるに及ぶのである。家長專制が××××至るべきは火を睹るよりも明かだ。首長の獨裁はここに完成した。

この歴史を見よ。力はつひに獨裁の一特徴である。しかも力の支配は古代にあつてはやはり必要であつた。首長の獨裁は一つには神に對する人間の勝利である。同時にそれは他の人間に對する壓迫のはじまりである。首長の自由は被征服者の努力の結果である。首長以外の人間がいかにしてその生活を生活し得ようといふのであるか。

かくして歴史は限りなくつづく。首長に對する貴族の叛亂、貴族の獨裁と資本階級の勃興、――いづれもが獨裁の主たらんことを求めざるはない。この限りなき支配を叛逆の源はそもそも何處にあるのであるか。いふまでもなく獨裁の本質にあらずしてその結果にある。獨裁の對象は力の支持者である。しかも彼等はその力を用ゐ得ない。力のみでない、それ自身の生活さへ自ら受用し得られないのである。支配の主たらんことを求めるのは決して惡でない。惡は足下から起る。獨裁の事實は常に變せずしてその主は絶えず變りつつある。ここに獨裁を目標と

する社會改造の理想の生ずるのは敢て意とするに足らないのであらう。この意味に於て獨裁はたしかに一つの方針とするに足りる。古來の歴史はすべて階級鬪爭の歴史であるといふのはその意味に解して差支へない。

しかしここに一つの弱點がある。獨裁は必然に對象を豫想する。對象なき獨裁は考へることも出來ない。古代の獨裁は文字通りの獨裁であつた。權力は絶えず分散しつゝある。力は順次に分たれてゐる。即ち自由は今や多數を求めるやうになつた。神の獨裁は神一個のものである。首長の獨裁制に於てそれは神より數多き人間がその權力をもつ。貴族の獨裁制に於ては首長よりも人が多い。かくして近代のブルジョワジーの獨裁に於てその傾向はますます增大してゐる。この極限はいふまでもなく全人間に分散されるところに存する。しかも現代の獨裁は何であるか。それは多數と多數との二つの集團間に於ける獨裁である。それは集合名詞である。階級である。階級獨裁といへどもその心理的事實に於てはあくまでも個人獨裁にちがひない。しかし社會的事實に於ては、階級獨裁である。現代の國家は種族國家でない。××××でない。それは單に資本國家に過ぎない。政治は變形した。經濟がすべての上に立つてゐる。政治としての政治は神と共に、×××××、貴族と共に×んだ。殘つたものは資本と共に榮えつゝある。支配の事實は明瞭である。一階級が正しく他の一××××××××この獨裁を覆沒するものはこの獨裁の對象となつてゐる階級である。對象はいつまでも主觀となり得ない。現代の無產階級はソヴイエツト・ロシヤに於てその獨裁の形を見てゐる。そこに彼らの理想の一實現がある。國家は資本國家から×××に變じようとする。神にはじまつた實物はいつまでもその形を變ぜずして之をもつものを待つてゐる。力は之を獲得するものの上にある。しかも勞働國家は何を對象として獨裁せんとするのであるか。現代の反動時代に於て舊ブルジョワジーの反逆を禦ぐべくそれの對象とすることは必要であらう。しかも歴史的事實は彼等がすでにその力を失つたことを示してゐる。無產階級獨裁の前に戰慄するものは舊ブルジョワジーのみであらうか。無產階級の獨裁の要求するところはいふまでもなく最後の××××××である。××××××は獨裁のない社會だ。しかも獨裁の實を得たるものが舊ブルジョワジーを撃破してその權力を果して何處に置かうとするのであるか。

習慣は第二の本能である。歴史は事實をすゑつける。權力の前に自由を享樂する徒が直ちにその獨裁を棄てるであらうか。彼等の經驗は之を否定する。××××××××××である。對象の

××××××××××はやみはしない。無產階級は第四階級といふ。すでに勞働組合が勞働貴族として、不熟練勞働者を忌避してゐたことは久しい前からの事實ではないか。ここに第五階級の發生がある。生活は長い。生活は進化する。獨裁はかつて變らずに王座を占めつつある。無產階級の獨裁は果して地上の獨裁であらうか。彼等はブルジョワジーの名の下にその憎むところのすべての敵を擊破しようとしてゐるではないか。さうして自己の意識中に生ずる支配の觀念は彼等をして第二の神をつくらしめつつある。かくして彼等は來るべき反逆の徒にそなへるべくその戰備を益す堅くするであらう。ここに自己が破つた同じ方針で以つて敵に破られる惧れのあることはやむを得ない。生活はいかに進むべきか。つひにそれは豫想しがたい。第五階級につづく第六階級の出現を何人が之を保する。第四階級は機械の發達に伴ふ必然的產物である。然らば科學の進步は次にいかなる階級を出現せしめるかを圖りがたい。その時に及んで現代の無產階級はまた今日のブルジョワの態度をとることをなきや否や。

それは豫測しがたい未來のことである。現代惡は現前にある。それはやはり××である。無產階級の獨裁もその事實としての惡を除き得るのであるか。それよりもそもそも現代の無產階級は果してある人たちのいふ如く政治的權力を獲得せんとし或は獨裁せんとしてゐるのであるか。大に疑なきを得ない。然らば獨裁が改造の一原理であることを承認してもなほそこに一二の弱點のあるのを忘れてはならないであらう

四

獨裁は力である。自由も力である。力に二つはない。力は常に一つである。甲に働く力と乙に働く力と異るわけがない。同じ力が何故に一は獨裁となり一は自由となるのであるか。

人は知るであらう。あらゆる意味に於て一つの物が二元的に解釋せられ、又は二元的に用ゐられることを。その故にすべての社會的進化、意識的進化には二元の要素がある。プロとコントラと名づけられる。心理に於ける對比の理と調和の理に當る。一に居るが故に一を好むとはプロである。一に居るが故に一を嫌ふとはコントラである。かくしてその心理の二元的傾向がすべての側面に動いて進化の段階をなしてゐる。心理はすでに二元的である。與件もまた二元的でなければならない。心理の生ずる所以たるやその環境に從ふが故である。相對することの二元の事實は實に進化の基礎である。相反する等しき二力の合成が零となるが如く、零から一方の力を引き去れば他方に同じ力が

殘る理である。その故に無は對立するすべての二元を含む。帶電せざる物質から陰陽いづれかを引きされば殘るものは、その反對の電氣に違ひない。人の思想もまた斯くの如し。その故にニイチエはディオニソス的とアポロン的とを對立せしめた。ギリシヤ人は本來ディオニソス的である。そこにアポロン的のあるのは正にその心理の然らしめたところである、一であれば必然的に之と對立する反對がある。ギリシャ思想にはヘブライ思想が對立する。肯定と否定はその本たる元來一である。肯定を含まざる否定は成立しない。同時に否定を知らざる肯定もまた成立しない。その故に一方の極が大になれば、他方の極もまた偉大である。敵の陣營に應じて味方の陣營もまた異つて來る。ヘーゲルは何故に合を設けたか。正と反とは正しく對立である。合の必要はない。すべてのものが自己目的であるとすれば正は正で充足し、反は反で充足する、さうして正と反とまた相應じて充足する、合の必要はいづこにある。まことに二元の對立こそ事實に於て、心理に於て存することが承諾されなければならない。その故に理想主義と現實主義とは昔から抗爭をつづけてやまない。立場の相違はいづれにも存する。問題はただそのいづれをとるかにある。國民主義と世界主義とはギリシヤの昔から相並んでその存在權を主張しつつある。理論は然りである。現實は否である。四海同胞論と異人民虐殺の事實と、しかもこの二つの主義がそれぞれに正しいこともまた承認される。戰爭と平和とは同じく人類の理想であり同時に現實である。未だ嘗て歷史から戰爭の消えた例がなかつたと同時に、平和に對する人類の希望は決して失はれはしなかつた。現實を肯定するのであるか。はかなき理想を抱くのであるか。いづれにしても二元の對立はやむ時がない。平和は進步である。しかも戰爭が進步を促すこともある。にはかに談ずべからざるものがある。――對立の交代は進化の一特徵である。さうして人間の生活はまさしくその行くべきところへ行きつつあるのではないか。獨裁と自由と、これまたここにその絕好の好題目を提供しつつある。

無は單純に無である。プラス一とマイナス一の和も無である。異符號の二の和も無である。三も無である。無を中心にして對立の双方にいくらでも數をひき出すことが出來る。無は中心である。無は無である。しかも無に段階がある。存在の無と認識の無と、一は存在に關し、一は價値に關する。無たることに於て差はない。相反する二力の合成は無に歸する。數力の合にしても釣合を保つ限り無に歸する。然らばある段階に於ける無を分解して考へるとき、そこに同じ力が異つてあらはれるものにも

不思議はないであらう。極めて簡單にいふならば、獨裁の力は下降的で自由の力は上昇的である。前者は制度の力で後者は本能の力だ。獨裁は力の建設的方向であり自由はそれの崩壞のあらはれである。力は常に同じである。建設とは中心に力を集中することである。自由はそれの分散だ。建設はいふまでもなく社會建設だ。組織體は常に頭腦をもつ。仕事には技師が必要である。頭腦の力、技師の力、これが獨裁の方向である、獨裁は集中で自由は解放だ。いかなる建設が力の集中なくして行はれるものがあらう。そこに獨裁の限界がある。社會の建設とは何であるか。社會は人間生活の一形式である。社會なくして人間は生まれない。それが生活の全體本能だ。個人は個人として生活するよりも社會の一人として生活する。共同の生活がそれの基礎だ。社會生活は進化する。しかも社會生活をして可能ならしむべきその制度やその機關がしばしば硬化することがある。自由と解放はそれを流動せしめて人間生活の進化にかなはしめる。そこに自由の崩壞的要素がある。革命はその最なるものである。しかもその自由、その革命さへ建設としては集中の力を要する。今××××したりとせよ。次の××はもとより人間生活を可能ならしむべきものとして現れなければならない。それは××への道だ。それをして正しき位置に居らしめるのが正しく自由の力である。また獨裁の力である。それが建設の一つの仕事である。大衆は方向を知つてゐる。しかも道を知らない。群集の心理は個人と異る。大衆の全體は本能として建設の道を知つてゐる。しかしその本能は生活としての本能のみである。向ふべき方向を見るところの眼を缺いてゐる。大衆のために眼となるものは正しく獨裁にちがひない。鮭の卵の無數が他の魚に食はれ、人にとられ、自然に痛みつけられると雖、それはその卵の個々の運命である。大衆は個々としてはその道を知らない。之を導くものが獨裁の力である。それは自由の必然の變形だ獨裁は建設に於てのみ大衆を導くことが出來る。それ以上は×××××ない。××がツアーリスムを生むといふのは獨裁が新しき社會體系を完成した後になほその席に止まつてゐるからである。革命が必然にツアーリスムとなるわけがない。しかも多くの場合獨裁はその××××××××に止まつてゐる。ナポレオンはフランス革命の後に出た。それは革命黨がその自由の力を進展せしめなかつたからである。大衆はいつでも自由を要求してゐる。本能的欲望であつて、理智の結果でない。それを忘れて個人が自由の建設の力を奪つたからだ。ボルシエヴイキが獨裁をいふのも自由の掠奪に外ならない。大衆の建設への力を自分のためにとり上げたのだ。建設にはもとより力が

必要である。革命は力の直接の發現だ。その力は大衆に屬する同時にそれは生活そのものに屬し本能そのものに屬する、建設に獨裁の力はもとより必要だ。しかもこの獨裁とはこの正しき意義に於ける獨裁である。未だ嘗て獨裁はその正しい位置に立つてゐたことはなかつた。それの行く道はいつでも同じである。建設は自由の發現である。それは決して强制的に資企的に行はれてはならない。建設に於て力が集中するのは自然の結果である。大衆の意志の自らなる集中である。決して計畫してなされたものでない。そこに進化がある。社會の必然の歴史的進化がある。この進化はあくまで自由であり、あくまで本能的である。建設は崩壊を受ける、自由は最初崩壊の原理であつた。何となればそれが生活の必然の行程であつたからだ。その同じ力が建設に轉じた時、獨裁の正しい意味がある。それはあくまで自由でなければならない。一元論が建設的で多元論が崩壊的であることは知れてゐる。一元論のきはまるところその建設物が固定する。この固定はいはゆる獨裁の形であらはれる。それは一つの個を認めるのみである。あらゆる個が對立してゐる。その價値は各平等だ。いづれもが相對的立場に於て何故に一つの個のみに價値があつて他の多くの個に價値がないのであるか。理はさうである。それにも係らず、その一つの個の價値を强調するのが××である。かかる××はもとより廢止されるべきである。あらゆる個はそれぞれの立場に有り、それぞれの價値をもつ。それが生活の道である。獨裁は常にそれを阻止する。自由とはその各の個の立場を認めることの外の何物でもない。この場合すべての個を許容するとは必然的にその建設物の崩壊とならなければならない。さうしてかかる崩壊こそ望まるべきだ。その××に於て生活がその自由の道を進行するが故である。さうしてそれも××なのである。時代が興らんとする時、一元論の天下であり、ある時代の末期に當つて多元論があらはれるのは生活の進化が必然に然らしめるのである。××は故に自由を求める。自由が力である限り、生活は決してそのまま地に委しはしない。その一時代の崩壊は次の時代の勃興を意味してゐる。自由はかくしてあくまでも人間の希望である。社會進化は人間の生活史から外れるものでない。

×××××いかにして建設されるか。その建設こそ力の集中だ。あらゆる個がその必然から×××××べきである。決して×××××××××××××××るのではない。全體の認識は全體として認識される。ある××××よつて盲目的に全體を認識せずしてその全に參するのでない。獨裁はしばしばこの誤りを生んでゐる。個は自由だ。權威はある。個の獨立はある。それ

が全體と關係してはじめて建設が可能になる。その點に於て個は絕對だ。さうしてこの全を認識するといふ點に於て、あらゆる個が一元に歸する。×××いつでも建設的である。×××××××××××××××それが生活の意志だ。生活は結局大衆の生活に歸する。生活者なき建設はない。建設の目的は大衆に存する。組織や制度は生活のためだ。生活に合すべき建設の仕事は大衆の本能によらずしてどうして出來よう。自由の變形として眞の意味の獨裁が許されるのは、それが×××××合した時のみである。××××××××去らなければならない。崩壞と建設とは元來一だ。自由を忘れたる獨裁はつひに建設の仕事をなすに足りない。それが第一の崩壞を招くのはもとよりその然るところだ。しかもいままでの獨裁は常にその處を誤つてゐた。かかる獨裁は最早や排されなければならない。

個人主義は自由の生む所であると共に、それが崩壞の時代を示すのは當然である。個人主義がその本來の意味で認められないのは近代の科學が證してゐる。それは一つの反動として許容されるのみだ。その故に近代の思想は次第に個人的よりも社會的に傾いて來た。社會的な思想は個人的のそれよりも正しい。自由はそのいづれに屬してゐるのであるか。多くの近代の階級獨裁をいふものは個人主義を時代遲れであるといふ。その言は正しい。しかもその時代遲れの個人主義を持するものは果して何人であるか。自由と個人主義と結びつけてこれを批難するのはボルシエヴィキの徒だ。いつくんぞ知らん自由は大衆に屬してゐる。それは社會的だ。之に反して獨裁は常にその個を他の個の上に××して自ら個人主義となつてゐるではないか。他を責めるものは自らを責めなければならない。自由は大衆のねがふところだ。時代遲れの個人主義はボルシエヴィキ獨裁者の上に落ちてゐる。さういふ皮肉がどこにあらうか。

自由を單に個のみの自由に限るのはやや達せざる所がある。個人主義は決して自由でない。個のみの自由はただ一つの空想だ。それは理想が生んだところの論理上の一觀念に過ぎない。かかる自由の存しないことは今日はもとより昔時にも然りだ。昔時のそれは事實が示した。今日のそれは科學によつて明にされつつある。種族は個の全體である。個自身の自由は常に種族にかかつてゐる。種族を全とすれば個の自由は種族のうちにあつてその全への關係に於てその力をもつ。價値は全を豫想する。種族の力とは生物全體の生活の力だ。全に合せざる個は何らの發言權がない。個の發見はルネサンスにはじまるといふが、この個の發見は同時に社會の發見の基礎であつた。超人の思想はダーウィンに刺戟された最後の逃げ場だ。價値が未だ殘つてゐ

る。超人は承認される。これ今種族を考慮のうちに置くからだ。超人を種族から離したりとせよ。何の力かそこに有してゐるのであらうか、社會性は生物全體に比すればやや小さな全である。しかも人間にとつてはそれは一つの全といへる。人間の本能としての社會性は自由だ。個にのみ閉ぢ籠るのは本能に反する。それはむしろ時代の傾向に反して古代の思想に近い。神の獨裁はその思想の源だ。さうしてあらゆる獨裁も非社會性なる點に於てちがひはない。それは本能に背いてゐる。單純なる本能が純個人的であると共に、これの實現は社會性の上にある。之に反する社會が改造されるべきなのである。生物全體が一つの大いなる陣營をかまへて進化してゆく樣を想像せよ。そこに眞の自由の力が存してゐる。獨裁は單に全を個にのみ止めんとし、その全體の自由を××せんとするものである。

個の自由は全に參して得られる。多元の各は相互認識によつて全に參する、認識は理智に生れ、正しく本能と對する。それは本能の補助だ。あくまで本能の下にゐて生活に加はるものである。この意味に於て認識は一つの力をもつ。個が全に關係するは認識によらざればなし難い。個はあくまで自由になり得る。歴史的發展の結果なる自我は決して全體を認識することによつて消滅しはしない。それによつて却つて存在を認めるのみだ。歴史も事實である。古代の獨裁から自我が生じたことは虚でない。その故に自我を認めたる全が必要なのである。

全は社會であるとせよ。社會生活に種々なる制度、機關の必要なることは言を須たない。個の自由はそれを否定しない。人は個の自由が制度と衝突するといふ。却つて自由を現はすためにその機關なり制度なりが生れたのである。自由と衝突した制度は多い。それはそれだけの存在以外に權力を移入して來たからである。權力は理智の產物だ。哲學的認識の生むところだ。哲學的の認識は認識せんがための認識であつて、生活のための認識でない。認識を認識としてそれを生活の上に奉仕し、それに價値を置かうとするものである。生活のための認識はあくまでそれを生活の道具とする。この二者の立場は各々然りだ。しかも一たび本能に位置するとき、後者をとらざるを得ない。權力は後者からは生れない。それは前者から生じた觀念に過ぎない。理念は現代の生活の上に何をもたらすことを得るものぞ。制度の固定はかかる觀念から發してゐる。それが生活と矛盾するに至るべきは當然のことではないか。

思ふに觀念生活から現實生活にうつつて行くのは近代の思想の必然の傾向である。多元の立場がそれの結果だ。多元はすべての存在をそのまま承認する。それの價値は各の關係に於て無

に歸する。立場は無數である。坐標はどこにでもとれる。無數の立場を中心とした價値の體系は無數である。そのすべてを承認することが多元論だ。あらゆる價値體系はそれぞれの坐標に從つて無價値となる。自由の歸するところその全の承認である。

ボルシエヴイキはその一つに固着するものである。獨裁を主張することによつて一つの體系しか認めないのである。自由をブルジヨワ的となすのは彼らの眼の不明の至すところである。自由は彼らの及ばざるところにあり、しかも生活の根抵に横はつてゐるのである。彼等こそ觀念の生活をなしつつある。全無產階級は彼らによつて何の解放を得たか。知るべし獨裁のつひになすなきことを。

五

本能はいかにして可能であるか、凡そ生活の本能として本能ほど力强いものはないと共にこれほど個人的なものはない。本能の可能は常に反社會性の上にある。すべてとはいはない、ある社會は必らず本能を阻止してゐる。實をいへば社會性もまた本能の一つだ。そこに衝突する理由はない筈である。然るにそれが矛盾する事のあるのはどういふわけであるか。本能とは生活を遂行せしむべき先天的習慣である。それは生活のために生じ生活のために役立つてゐる。生活とは何ぞ。それは衣食住を滿足にし子孫を繁昌せしめることだ。それ以外に生活はない。生活の望むところはそれであり、さうしてそれ以外に何物もないがために、そこに人間の幸福がある。幸福の追求は生活のはじめであつて、また終りだ。幸福は何處にもない。ただ生活に從ふところにのみ、本能に從ふところにのみ存する。本能は生活を導いてゐる。それに幸福がついて來る。本能は盲目である、そこには不幸があるかも知れない。しかもその不幸たる、人間の不幸であつて、生物の不幸でない。何故に道德を以つて本能を律せんとするのであるか。何故に××を以つて本能を阻止せんとするのであるか。いづれも人間の仕事であつて、生活の仕事でない生活に卽するとき、それらの不幸は不幸でない。××××××××道德に叱責せられてなほ幸福のうちに生きる××××××見よ。彼等こそ本能に從つてその生活の幸福を得たるものに外ならない。

この不幸はいづこから來たか。人間は社會性をもつてゐる。社會性は生物としての人間の當然もつところの本能である。何人も之を否定しはしない。蟻が社會生活をなすが如く、蜂が社會生活をなすが如く、人間もまたその本能に支配されて、必然的に社會生活をなしてゐる。社會性を本能でないとは何人もいはな

い。問題はそこにない。

社會性は生活の可能のために存してゐる。もしも社會性にして生活を不可能ならしめるならば、それはその本來の目的と矛盾するものだ。しかも事實は如何。いつでも個人の本能は社會性のために阻止されてゐるではないか。ここに一つの矛盾がある。この矛盾の解決は様々である。蟻や蜂の社會にあつては個の生活は全然社會の中に侵入してゐる、個は社會の一分子として全體の一部をもつに過ぎない。本能は個に附着せずして全に附着してゐる。それも一つの解決法である。人間の社會も之を眞似すべきであるか。かつもしも之を以つて社會發達の高度を示すならば、人間社會は未だしい。が人間社會を以つて譬しとするならば、かかる蜂蟻の社會は個を否定するが故に否認せらるべきだ。然らば社會を否定して個の本能を生かすべき道に進むのであるか。それも一つの解決法だ。人間は個人個人その本能をもち、その生活をもつ。その本能とその生活を可能ならしめるがために社會をつくつたのであるから、××××××××××××××××××××××××右すべきか、左すべきか。

本能は力だ。本能は人間に社會性を與へた。社會生活には全の認識が必要である。そこに單純なる本能が支配しきれざる領土が生ずる。動物にあつては單純なる本能はその動物の生命及び種族を支持するに充分だ。全の認識の必要なところにはそれは不充分だ。蜂や蟻の社會の個に全の認識がある。がそれは分らない。しかし全の認識なくして單純なる本能の一つとして全を認識したるが如くなつてゐることは事實である。人間の社會はさうでない。全の認識なくしては生活は不可能だ。全人間とはいはないまでも、少くともある人間にはそれが必要であつた。之を人間全體として見れば、人間が全の認識を必要とすとはいふまでもなく事實である。それは單純なる本能の支配の範圍の外に脱するものである。しかも生活を可能ならしむべく之を導いて行かなければならない。ここに單純なる本能は一飛躍をした。それが理智である。理智はただ本能の一變形に過ぎない。本能の及ばざるところを補ふべく生じた一補助機關だ。人間は理智に重きを置く。或は理智のみで生活を導きつつあると自信してゐる。それは大きな自惚れだ。人間の理智は實はもろいものである。本能の力が第一である。理智の思ひ及ばざるところ、本能が之を完成してゐる。理智はあくまで本能の變形であり、それの補助に外ならない。

ただ人間はそれに頼りすぎた。そこに理智の専制がある。社會生活は理智によつて制御されつつある。宗教とは、道德とは

法律とは、政治とは、科學とは、凡そこれらのものはことごとく理智の面をかぶつてあらはれた本能の發現だ。理智は本能の上にあると思はれた。本能の發現はいやしくて理智の生活は正しいと思はれた。不幸の源はそれだ。本能に從ふのが自由だとすればあらゆる束縛は理智から來た。さうして人間の社會を制御すべく、理智はあまりに多く本能を阻止する。社會性と本能との衝突とは實は理智と本能との衝突に外ならない、これ本能の子なる理智がその親たる本能に反逆したものである。觀念生活がそこから生じたのである。觀念は固定し、制度は硬化し社會は本能を阻止する。いづれかその親たるものに對する反逆でないものがあらうか。存在は常に獨立性をもつ。觀念は生命から生じ、制度は必要から生れ、社會は個人から出來てゐる。しかもそれがあべこべに之に反逆した。今や觀念は生命の上にあり、制度は必要を超え、社會は個人の上に君臨してゐる。ここに××××××××べきである。本能のとりかへしとはそのことである。生活の恢復とはそのことだ、社會改造とはそのことである。そこに自由の必要なる事は言を須たない。自由は空想である。しかも本能の恢復に於て現實である。本能をとりかへし、生活を恢復したる時に於て自由は實現される。自由が力であるとはそのいひである。自由の本義はかくして明瞭だ。獨裁は事實である。しかも本能を阻止する限りに於てそれは生活と反する。觀念が思想の進化に必要であることはいふまでもない。それなくして思想は存在し得ない。それに固着し、それと共に硬化する時、それは思想の進化を却つて妨げる。獨裁の事實も正しくその意味に於ける事實だ。獨裁の事實は何人と雖も否定しない。存在するが故に事實である。しかも存在そのものが即ちその×××をもつ所以でない。現代の社會惡は事實として存在してゐる。その故に手を拱いて之を見てゐるべきであるか。獨裁が事實で自由が空想であるの故を以つて、前者に存在の理由ありとなすはあまりに淺薄である。獨裁は畢竟するに理智の子である。自由は之に反して本能の生むところだ。しかも獨裁がその事實といふ點を力說していたづらに自由を强壓しようとするのはとらざる所である。獨裁はその限界をもつべきだ。自由も然りだ。しかも本能に基づく限り、その要求は理智の要求よりも正しい。本能は盲目だ。しかもその行くところに行くことは理智よりも正しい。現代改革の因つて來る所以を正しく察するものはそのいづれに組すべきかを明かに見るであらう。觀念生活が崩壞して現實生活が勝利を占めるとは獨裁政治が死んで自由生活が生れることを意味してゐる。舊世界の死とは理智生活の死である。來るべきものは本能の恢復である。自由がその

題目であるべきは何人も之を推する。獨裁にのみ執するのはいたづらに舊日の夢の覺めざるものである。

嘗ては生活は自由であつた。本能の生活であるからである。理智の發生が自由を妨げた。神とはその子である。觀念とはその子である。理想とはその子である。それらのものが原始生活を制御し、本能生活をよりよくなさしむべく生れたことは何人も之を否定ないであらう。ただそれの硬化が人間生活をして不幸に陷らしめた、獨裁とはそこは生じた名である。政治か、權力か、まことに集團生活は機關を必要とする。機關に何故に權力が必要なのであるか。かくして生活は團體主義の領するところとなつた。團體主義とは獨裁の天下である。人類がその生活の安固を保持するために團體主義は必要であつた。しかもそれが本能から遠かるに從つて生活は腐敗した。政治的團體主義は宗教的團體主義と手をたづさへて人間の上を壓した。個の自由はいづこにある。自由はただ×××の上にのみ存する。生活はそれで可能であらうか。否。然らば團體主義は崩壞されなければならない。それは古代の自由社會への要望である。本能は個人に屬する、團體に屬するものでない。自由は必然個の上に來なければならない。何故に個が全體のためにつくさなければならないのであるか。それが第一、疑問である。個を個として全體より解放せよ。それが自由への第一の叫びである。近代個人主義は正しく宗教的團體主義に對する反動でなければならない。それがルネサンスと共に生じたのに別に不思議はないであらう。

個の解放は全に對する打擊である。しかし全はそれによつて崩壞しない。個の存するところに必らず全がある。全と個とは補足的である。全のない個は考へられない。自由が個を全から解放せしめたと信ずるのは一つの幻影である。崩壞したるものは硬化したる全に過ぎない。人間としての全は個の解放によつて完成する。個の解放とは何であるか。個をしてそのまま全ならしめることである。自由は全を征服することによつて生ずる、換言すれば生活が生活を征服して生活は自由である。自己目的とはその謂ひである。個の目的は個自身の上にある。個は何の外のもののために存するのでない。いはゆる團體のために存するのでもなくいはゆる、神のために存するのでもない。個の存するやその個自身のためである。個がその個のために存するとは個の自己目的である、自由は個の完成から發する。個の完成は個の力をして個のために用ゐしめる。力なくんば自由はない。從屬は力のない處に起る。自由は力に屬する。個はその自己の力をそのまま自己のために持つべきである。全とはこの場合その個を意味する。團體主義にあつては個の自由はない。何

となれば個は力を有してゐないのみならず、その用ゐるべき力が全然その團體のために存し、彼個のために存してゐないからである。すべての個がそれ自身のために存在し、それ自身の力を保持した時、團體主義は崩壞する。それでいいのである。その代りに生活はその本然の面を出して來る。そこに生活の恢復があつた。自由とは正しく本能への復歸に外ならない。

　自由への要望は中世紀の宗教的團體主義に對する反動であると共に、それから緣を引いてゐる神權××××××である。政治的自由は自治に歸着する。しかも自由は政治と提携して果してどれほどの實があつたか。政治とは宗教的支配のつづきに外ならない。獨裁の觀念なくして政治はない。權力を認めないところの政治がないと共に、××××××××××××××λ××自由はその本來の意味からして本能的である。政治は理智である。政治的自由とは結局獨裁の一つの形に過ぎない。それが生ぜしめたものが自由主義であつた。

　自由を叫ぶところのものに對して、人はブルジョワ自由主義といふ。これほど誤つた見解はない。ブルジョワは正しく自由主義を保持してゐる。それは自由主義であつて、自由でない。二者の區別を嚴にすべきである。自由は生活の子だ。自由主義は觀念の子であり、理智の子だ。それはあらゆる理智生活、觀念生活とひとしく、一時生活に役立つかも知れないが、つひに硬化して結局生活の道を阻むものである。自由主義は政治との妥協である。自由は之に反して本來の道である。

　自由は空想であるといつた。現實の形にあらはれないといつた。本能に歸つてはじめて現實となるといつた。その故に本能に現れざる自由は何者かと妥協する。自由主義は科學の世界が生み出した一つの偶像である。自由主義は科學と結んで一面昔からの政治を自己の手中に收めた。議會とは何ぞ。憲法とは何ぞ。參政權とは何ぞ、普通選擧とは何ぞ。まことにそれらはブルジョワ自由主義の產物である。神の獨裁から首長の獨裁へ、首長獨裁からブルジョワ獨裁へ、まことに獨裁の命は長いものである。自由主義はここに現代惡の一つなる資本主義を生み出したのである。その故に自由をいふものは資本主義に組せずして、生活の恢復を叫ぶのである。自由主義はすでに硬化した。

　自由は崩壞原理である。しかも自由主義は獨裁の變形であり建設原理である、資本主義は一つの團體主義に外ならない。團體主義に反逆した自由人は舊種族的宗教的政治的團體主義を崩壞せしめる共に、直ちにそのあとに經濟的團體主義の建設されるのを見た。それは個人を再び奴隷に陷れることであり、自由を奪ふことであり生活を阻むことであり、本能を禁ずることで

ある。見よ資本主義社會にいかなる自由があるか。昔時の奴隷は賃金奴隷となり、月給奴隷となつた。生活はいたるところで不可能である。可能なる生活はただ×××のみである。戀愛は果して資本主義社會に於て可能であらうか。行動の自由は、思想の自由は、それは今日眼前に何人も見てゐる事實である。團體主義は自由人にとつて一つの惡である。自由人はその行動を本能に任ずる。制度に屈するものはすでに人間でない。何故今日ニイチユを呼ぶか。團體主義がその發達の頂きに達したからである。自由は之を崩壞せしめる。生活の恢復とは本能の要求である。之を止めるものは一個の機械だ。團體主義で滿足し得るならば、何を好んで舊の宗教的や種族的のそれを破壞しよう。まことに自由とは現代改造の一目標である。

その故に獨裁を否立するのである。自由は力である。自由をして自由ならしめるための力である。獨裁も力である。獨裁は他をして奴隷ならしめる力である。本能に出づるものが善で、觀念に出づるものが惡であるとは言を要せさるまでに認められてゐる。自由は善で獨裁は惡である。獨裁が現代改造の一目標たるは認める。しかもそれはブルジヨワ獨裁につづく新しい獨裁だ。それは團體主義の繼續に過ぎない。獨裁を目標とするものはボルシユヴイキであるが、ボルシエヴイキはブルジヨワの直系の子に過ぎない。獨裁とはいいいひ草だ。科學的共產主義が資本主義の完成したところに行はれるとは、いはゆる科學的共產主義が資本主義をそつくり引き受けることの意味の外の何物でもない。現代の求めるところのものは團體主義でなくして自由である。ボルシエブイキは個に執してはならないといふ。良心とはブルジヨワ倫理であるといふ。誰か烏の雌雄を知らんや。今日は新しい偶像を建てる時でない。生活は限りなく奇形にされた。之を恢復するのが第一の要務である。新しい神を建つてそれを禮拜する時でない。ボルシエヴイキは今日のブルジヨワを追つて自らその代理をなすものだ。形も內容も何の相違かある。それは政友本黨と護憲三派である。獨裁の主がいかに變じようと生活の知るところでない。生活はその本來の道を進みつつある。

六

ボルシエヴイキは無產階級の獨裁を僭稱する。現代が資本主義社會で無產者が自由を要求してゐることは事實である。現代改造の當面の問題が經濟的團體主義の上にかかつてゐることもまた事實である。しかしそれがどうしてボルシエヴイキの獨裁を許すことになるのであるか。彼等が無產階級を口にするのは

名だけである。彼等のいはゆる階級獨裁に昔時の酋長獨裁と如何の相違がある。階級獨裁とはその名や美しい。無産階級が反動革命を抑へるべくその對象をブルジョワジーにとつて獨裁を行ふとはいかにも尤もらしい口實である。しかも事實は何を示してゐるのであるか。無産階級はボルシェヴィキの獨裁によつて何物を得たわけでない。却つてブルジョワジーの獨裁と等しく、無産階級は依然として奴隷である。資本家は奴隷として奴隷として、ゐる。そこに露悪はあつても、うそはない。ボルシェヴイキの獨裁は虛僞そのものである。全無産階級に何ら關係なくして共産黨獨裁をなすことが無産階級獨裁であるか。否共産黨獨裁ならまだしもである。實に政友會や憲政會とひとしく總裁の獨裁である。せいぜい領袖會議の獨裁である。にえ湯を呑まされるのは無産階級の外の何物でもない。元來無産階級は決して自ら獨裁を行ふものでない。

何故であるか。

いふまでもない。一個人にあつて生活の本體が衣食住の日常生活に存するが如く、即ち個體保存と種族維持との本能に存するが如く人間全體の生活に於てはその本體は無産階級即ち生産階級に屬してゐる。本能の生活は理智の生活でない。人生學を識る憂患の初めといふのはその意味である。生活を以つて理想の生活であるとなし、いはゆる文化の生活であるとなし、政治の生活や、文學藝術であるとなすものは智識階級の一迷妄に過ぎない。哲學は決して飯を食べさせない。哲學者といへども概念を衣食とするわけには行かない。いはゆる文明、いはゆる文化なるものは生活の上つ面の皮相的な部分である。それは生活の華であるかも知れない。しかもそれは生活階級を踏み臺にしないでは決して存在しないのである。個人の生活に於て理智が殆どその生活に力を及ぼしてゐない如く、社會生活の基礎は全く生産階級に存してゐる、智識階級や資本階級や、支配階級はその寄生蟲に過ぎない。寄生蟲がその自己を中心にして物を考へ生産階級を度外視して、ギリシヤの文明がどうであるとか、ローマの文化が立派であるとかいふのは全く生活のもとを忘れたものである。それに執し、それをいふものは必らず、不生産階級だ。彼等はいたづらに支配慾に驅られて生産階級を強壓してゐる。之に反して生産階級は決して他を支配しようとはしない、それはただ自分の生活が自由であることを欲するのみである。さうしてただ生産の業に從ふのみだ。自由の生活とは幸福の生活である。それは生物の本然に從ふところの本能の生活である。それでいいのである。それ以上に何物もない。それが生活の基礎構造である。その他のすべてはただその上部構造に過ぎ

ない。それがなくしては生活は不可能である。さうしてそれはただその本能生活を充足せしむべき生活の方法で滿足してゐる。そこには支配慾はない。そこには觀念の生活はない。然らば彼らが他人を××××をなさんとする理由がどこにあるのであるか。獨裁をいふものは必らず上部構造の人間だ。政治を欲するものは指標だ。たとひその人間が無產階級から出たとしてもそれはすでに眞の無產者でなくして指標に屬する。獨裁者はいつでも政治家だ。それがもとのブルジョワであらうと無產者であらうと、社會的機能からいへば政治家であるにはちがひない。さうして政治家とはすでに、無產階級の與り知るところでない。無產階級であるといひ、しかも獨裁者を以つて任ずるものはデマゴーグに外ならない。無產階級は決して獨裁を欲しない。獨裁のみでない。政治そのものに手を觸れようとさへしないのである。

　知るべし、ボルシエヴイキのいはゆる無產階級の獨裁なるものはただその名前のみであることを。それは無產階級の中にある處の野心家をして喜ばしめるに足りるであらう。しかも無產階級そのものは決してそれに關しないのである。然らば獨裁とはたとひ改造の方策として一應は承認されるにしても決してその正しいものでないことが知れるのである。それはせいぜい政治革命の方策であつて決して生活の改造ではない。政治革命ならば昔から幾回となく繰かへされてゐる。明治維新もその一つだ。政友會と藩閥の鬪爭もその一つだ。しかしそれによつて民衆の生活がどれだけ幸福になつたか。政友會はボルシエヴイキで憲政會はメンシエヴイキだ。彼等が天下をとつたところでその行く先は知れてゐる。民衆は彼等に關係がない。民衆はその行くべきところに行くのみである。鐵道が布設されるといふので人を釣るのと、無產階級の獨裁の名で人を釣るとその差異していづれぞ。政友會はそれでも鐵道を布いてゐた。ボルシエヴイキの與へるところはただ觀念だけである。政友會が資本家獨裁であるとすればボルシエヴイキはそれのもつと惡いものである。それはただ政權に渴したものの詐僞だ。自ら政權をとればそれでいい。曰くデモクラシーはブルジョワデモクラシーだ。曰く自由はブルジョワの自由だ。曰く何曰く何。何でも自分の敵をブルジョワと號することは彼ボルシエヴイキの慣用手段である。ロマン・ロランがすでに道破したところである。それでゐて自分はブルジョワの最惡なるに屬してゐるのである。

　今や天下に自由はない。生活はその道を阻まれた。現代惡の根元は生活に自由がないことに存する。ブルジョワの社會はその故に改造されなければならない。民衆はたゞその欲するとこ

ろを求めるのみ。それは名譽でなく權力でなく支配でなく金力でない。それはただ幸福なる生活だ。單に幸福なる生活のみだ。卽ち現代改造の方策は獨裁にあらずして自由である。自由のうちにはじめて生活は可能である。獨裁が理智に出で、指標の手中にある限り、それは決して民衆の欲するところでない。現代に必要なのはデマゴーグの政治革命にあらずして、民衆それ自身の×××である。現代はたしかに新らしき團體主義になりつつある。それを否定しはしない。それはますます個の生活を阻んでゐる。卽ち社會性はいつでも本能と衝突する。幸福はそれの崩壞のうちにある。崩壞原理としても自由が求められなければならない。民衆は幾千年の間自由なくして壓迫されて來たが。太古の原始生活は自由であつた。この自由は文明のはじまりと共に消失した。殘るものは奴隸制度のみである。×××は自由であらう、それは支配階級のみである。生產階級は一日として自由であつたことはなかつた。奴隸の業を考へずにアイスキユロスの悲劇を賞めてはならない。フイディアスの彫刻のうちには幾百の奴隸が生產に從事してゐたであらうか。プラトンの天才をたたへる前にそれをして生活に勞苦ながらしめた奴隸のことを考へよ。源氏物語は立派な文學である。しかもそれは支配階級、有閑階級のいたづら事である。秀吉の覇業の前に幾萬の人民が苦んだであらうか。思ふに政治は常に必らずしも生活をして幸福にせしめない。況んや獨裁の鞭の下にいかなる生活が可能であるか。自由である。自由を除いて生活の目標はない。現代の特徴の一は原始にかへることにある。自由なる生活を求めることは正しくこの現代の一特徵である。獨裁は單にボルシエヴイキの自己辯明に過ぎないのである。

生活はその絕對的意味に於ては進化しないといへる。之に反して相對的意味に於て進化しつつある。人間の生活は結局するに社會的生活である。自由は社會的生活にいかに位置せんとするか。獨裁は力を豫想する。自由も亦然りである。しかも自由は本能の力に復歸するのみであるに反し、獨裁は權力を豫想するに權力なき社會を考へることが出來ないとは彼らのいひ草である。自由は無秩序と混亂を來すといふ。果してさうであらうか。

自由とは力であるといつた。本能の力が自由でなければならない。本能とは生活の第一の指標である。理智に誤るところ、本能が常に之を救ひつつある。いかんぞ自由が混亂と無秩序を招くことがあらう。それは力のない自由の來すところである。或は單純なる固定せる獨裁の致すところである。力ある自由が先づ社會の秩序をもつて來る。破壞されるものは硬化した生活

だ。それはいつでも生活そのものの現實の力によつてくだかれる。然らばそこに混亂の來るのは當然のことでなければならない。之を怖れるものは現在の固定せる社會のうちに利益を得つつあるもののみである。解放によつて得るものは決してそれを恐れはしない。

社會の進化は單純に生活の進化の法則に從つてゐる。それは無機的から有機的へ、有機的から社會的へと進化しつつある。個を高調することは個の絶對を認めることでない。却つて個を全に聯絡するものだ。社會聯帶とはそこから來る。社會の進化を認めるものは自由をその第一の要件に置く。制度の必要を信じ全體の進化を認めるものだ。さうしてしかも獨裁を××しようとするものである。××××××××××××××××。それはいかにして實現されるのであるか、理論としては小生いふところの無價値の哲學であり、事實としては新しき意味に於ける××××××。

七

現代改造の方針は二つであつた。しかも現代に直面すればそれはただ一つでなければならない。資本主義社會を改造するのに獨裁を以てすることはいたづらにその過失を重ねるものにす

ぎない。生活が第一に要求されるものである。生活の幸福以外に生活の目的はない。さうして自由とはその旗印であり、その絶えざる希望である。すべての外のものは空しき迹にすぎない。

暴力に對する國民の不徹底的態度

安部磯雄

トルストイの無抵抗主義

暴力否認もトルストイ位徹底すれば痛快だ。『人若し右の頰を打たば左の頰を向けよ』といふ基督の教訓を文字通りに實行しようといふのだから、割引もなければ妥協もない。簡單な無抵抗主義で押通ふして行くといふ所に彼の偉大なる力がある。軍備縮少とか軍備徹廢とかいふことも各青年が兵役の義務を拒絕さへすれば何の造作なく行はれるのだと彼は眞面目に說いて居る。『トルストイは老年だからそんな呑氣なことが言へるけれども、青年が一たび兵役に從事することを拒絕して見ろ、直ぐに牢屋にぶち込まれるに定まつて居る』といふ批評に對し、彼だつて非戰論のため何時同一運命に出遇ふかも判りはしないと答へて居る。殊に帝政時代の露國に於て『國家と云ふ名の下に最も多く暴力が濫用されて居る』と絶叫した彼の勇氣に至りては何人も驚かざるを得ない。

絶對的暴力否認が現社會に行はるべきでないことは何人にも容易に考へられる。然し今日行はれぬから何時までも行はるべきでないとは定まらぬ。言ふまでもなく私共は原則として暴力を否認するが、過渡時代に在る現社會には二つの例外を認める必要があると思ふ。第一は國家が暴力を取締るため自ら暴力を用ゆる場合、第二は正當防衛のため暴力を用ゆる場合である。然しこれも例外これも例外といふ風に例外が原則の如く考へられては其こそ大變だから、これに對しては充分なる警戒を要する。正當防衛といふことが自體曖昧なものだ。喧嘩した二人若くは二團體の何れが攻擊的であり何れが防守的であつたかを詮議するものは滑稽である。正當防衛が其範圍を超へて攻勢に轉ずることも少なくないから、正當防衛に限り暴力の使用を許すといふことは考へものだ。出來ることなら此場合にも矢張無抵

抗主義を實行した方が人類の平和と幸福を增進するに賢き方法ではないかと思ふ。

然し國家にまで暴力の使用を禁ずるといふことは實行の出來ることでもないし、よし出來るとしても望ましいことではない。國家といふ團體を成立せしむるには其成立を破壞するが如き成員を取締る必要がある。殊に暴力は常に國體生活を脅すものであるから、國家は已むなく自らの暴力を以てこれを抑壓しなければならぬ。私共が暴力使用を是認するのは斯る場合のみである。然も國家は往々其暴力を目的以外のことに使用し、何等暴力を用いない良民を苦めて居るようなことはないか。これがため却つて其本職たる國内の暴力取締を緩慢にするといふ矛盾に陥て居るのではないか。

闘爭本能

警察力ばかりか大なる兵力を有しながら、國家が徹底的に暴力を取締ることの出來ないのはどういふ譯か。何人も露骨に暴力を擁護することを躊躇する。然し心の奥底には何か暴力を是認するようなものがあるのではないか。少くとも暴行は欺僞竊盜の如き破廉恥的行爲ではないと考へられてゐるようだ。人類には闘爭本能がある。私共の祖先には此本能が生活上必要條件であつたかも知れぬ。私共は即ち此本能を遺傳して居るのだ。今日尚ほ暴力が絕對に否認されて居ないのはこれがためではないかと思ふ。

更に闘爭本能を以て男性の特色であり、人類向上の動機であるとさへ考へて居る人も少なくない。若し一切の暴行を嚴禁し從つて國際戰爭までも全廢することになれば其結果はどうなるか。現代文明は必ず男性的要素を失ふことになり、浮華輕佻の氣風は全社會に浸潤するに至るであらう。これが戰爭謳歌論者の宣傳である。

然し男性的要素を維持するために暴行を是認し、戰爭を擁護するのは餘りに高價に過ぎるではないか。闘爭本能の滿足は必ずしも暴行や闘爭に頼る必要はない。個人と國家が競技運動に大なる興味を感ずるようになれば、これによりて男性的特色は容易に發揮される。更に國際戰爭に就いても同一のことが考へられる。若し世界各國民が國際オリンピツク競技に參加したならば、更にオリンピツクの性質を改善し、其範圍を擴張したならば、歐洲戰爭の様な馬鹿氣た眞似をしなくとも、充分に闘爭本能を滿足せしむることが出來るではないか。

直接行動の効果

合理的手段は兎角緩慢なもので、暴行でやればどんな事でもキビ／＼と片附けて行くことが出來る。クーデターとか直接行動とかが如何にもヒロイツクに響くのは暴力是認の一原因と見て差支はなからう。此點から見れば現在行はれつゝある我國民教育の中に不健全なる分子が多分に含まれて居ることを感ぜざるを得ない。新聞雜誌に猥褻なる記事の掲げられることに就ては充分なる警察の取締があるけれども、每日國民全體の讀物となつて居る講談の影響に就て教育家、宗教家、政治家は果してどれだけの注意を拂ふて居るか私はこれを聽いて見たい。

講談の流行は實に素晴しいものだ。日刊新聞が殆んど全部每日講談のために紙面の一部を割いて居るのを見ても、『講談倶樂部』『講談雜誌』などの賣行が驚くべきものであるのを見ても、私共は其國民の心に及ぼす影響の決して侮るべきものでないことを感ずる。言ふまでもなく講談は多く其材料を殺伐なる封建時代に得て居るのであるから、每日これによりて精神的營養分を吸收して居る國民が徹底的に暴力を否認し得ないのは當然である。講談に次では浪花節が重要なる國民教育機關となつて居るのであるが、暴力是認の宣傳をなすことに於て講談に劣らぬものといふことが出來る。私は浪花節や講談を禁止するに警察力を以てせよとは言はない。然し或程度の取締りを爲すと共に、これに代るべき娛樂を提供して、漸次國民の心を此等の方面から他に轉ぜしむるといふことは必要である。國民の多數が講談を愛讀し、浪花節に耳を傾くる限り、暴力是認の傾向を防止することは極めて困難ではないかと思ふ。

直接行動を標榜して居るサンデイカリストの一派は暴力使用といふことを資本家から學んだのだと豪語して居る。實際私共の行爲は往々何等かの暗示によりて指導されるものである。子供が活動寫眞を見て種々なる惡戲を實演しようといふ氣になるのと同じく、國民全體が講談や浪花節から暗示を得てとんでもなき事をやり出すのと其心理は同一である。最近魚河岸の連中が松本樓を破壞した如きは講談若くは浪花節から學び得た直接行動演出の一幕に過ぎない。

昔から江戶の若者は一言二言爭ふと見る中に早や鐵拳が飛んで居ると言はれたものだ。暴力是認の心理は實に玆に在る。議論を戰はせるのは時間が取れる。腕力を以てすれば何事も早く片付く。これが性急な人の考へであつて、今日も尙ほ此考へが可なりの力を有つて居る。ムツソリニーが暴力で以て一擧伊太利の天下を取れば案を打つて痛快を叫ぶものがある。露西亞や獨逸で直接行動が成功すれば肉躍り血湧くが如く感ずる人がある。此場合右傾とか左傾とかは問題でない。唯其ヒロイツクな

る點に人々は譯もなく感激するのである。

暴力の正當化

國家が合法的に暴力を使用する場合の外暴力使用を嚴禁すべきは勿論の事であるに拘はらず、尙ほ漫に暴力の使用されて居るのは事實である。これは或種の暴行が或程度まで正當化されるためではあるまいか。米國に於ける私刑（リンチ）が何人も公然これを辯護する者がないに拘はらず、尙ほ其跡を絕つに至らないのは、社會が其罪惡たることを幾分割引して見て居るからである。私刑は殆んど黑人が白人を强姦したといふが如き極端なる場合に限られて居る。犯罪の憎むべき程度が高ければ高き程、これに加へられた私刑が幾分正當化されるのは自然の人情であるかも知れぬ。

然し暴力の正當化といふことは頗る危險である。暴力の行はれる每に一々其事情を斟酌するといふことになれば、法律の威嚴は全く地に墜ち、暴力を全滅せしむることは不可能となる。殊に暴力の正當化が如何なる標準によつて行はれるかといふことを考へる時何人も一種の不安に襲はれざるを得ない。中國民一の刑期と甘粕大尉の其とを比較すれば如何なる標準に據りて暴力の正當化が行はれたかを想像することが出來る。

勿論刑期の長短などは問題にしなくともよい。私共が最も恐れるのは暴力の正當化といふことが暴力是認といふ結果を生ずるのではないかといふことである。昨年の震災當時に於けるが如き場合の暴力使用は已むを得ないといふことになり、或程度までこれを正當化するようになれば、再び其の如き不幸が起つた場合暴力は遠慮なく揮はれるかも知れぬ。要するに暴力は國家にのみ許すべきものであつて、これを個人に使用せしむべきものではない。國家は法律を勵行するために暴力使用を必要とする。個人が暴力に訴へるのは自ら司法者を以て任ずるのであつて、こんな僭越なことはない。國家が暴力取締りに緩慢であることは啻に社會の秩序を紊亂するのみでなく、遂に國家自身の基礎をも危くすることになる。

示威運動

魚河岸連中の暴行は沙汰の限りであるが、火保問題のため團體を造つて內務省を訪問するが如きことも今後充分に取締る必要がある。近頃團體の運動さへ行へば大概の目的は達することが出來るといふ觀念を民衆に與へるようになつたのは國家のため悲むべきことであらねばならぬ。火保問題のため內務省を訪問したものは幸にして何等の事變なく其目的を達することが出

來たけれども、これが暴力使用に導く第一歩であるから、豫めこれを禁止することが賢き方法であると信ずる。二三人の者が内務省や市會に押かけて談判を持込むことは民衆の權利であり、社會全體のために奬勵すべきことであるけれども、多數を恃んで威脅を加へるが如きは一種の暴力に外ならない。少くとも暴力使用の可能性を充分に表現するものである。

現社會に於て團結の必要なることは多言を要するまでもないが、團體的行動と示威運動とを混同するものは大なる誤謬である。勞働組合は勞働者の團結であるが、資本家と談判を爲すに當りては單に數名の代表者を送ればよいのであつて、組合員全體の列席を必要としない。數名の代表者を送ることは明に團體的行爲であるけれども、これを示威運動と稱することは出來ぬ。示威運動とは文字の示す如く數百人乃至數千人といふ數の力を以て威壓を試みるのであるから、一歩過れば忽ち暴力化する虞れがある。故に團體的行爲は人類生活に必要缺くべからざるものであるけれども、示威運動は啻に益なきのみか、往々私共の社會生活に害を及ぼすことがある。

示威運動と云へば政治家の間にも可なり廣く行はれてゐる。然し私が此處で批評しようと思ふのは普選のために數十人が隊伍をなして市街を練り歩くが如きものではなくて、五六人乃至七八人の者が個人の宅に押かけて威壓的に詰問することである。現内閣創立當時在野黨の人々は一團となつて、研究會員の中の主要人物を一々訪問したのであるが、或る者は逸早く姿を隱くして面會を拒絶したといふことである。世間では研究會員の弱腰とか臆病とか嘲笑するかも知れないが、私には左樣思はれない。若し直ぐ質問とか詰問とかがあるならば單身其處に乘り込んで行けば宜いではないか。決鬪するのに三人も四人も助太刀を連れて行く法はあるまい。言論を戰はす場合でも三人や四人を相手にすれば少らぬハンディキヤツプがあるのは明である。況んや其相手が酒の力で元氣をつけ、最初から威壓的態度を取るに於ておやである。數人で一人を詰問するといふことが既に公明正大なる態度でないから、絕對に暴力を排斥するためには先づ斯る比較的些細なることを取締るべきではないかと思ふ。要するに數の力を以て人を威壓せんとするのは極めて卑怯なる手段であることをお互に考へることが必要である。

勞働者の示威運動

勞働者がメイデイに對し示威運動をなすことは殆んど先進國全體の習慣となつて居るけれども、これを我國の習慣として採

用するには公平なる考察を要することゝ信ずる。以上論じ來つた所に據れば、絕對的に暴力を禁止するためにはあらゆる示威運動を廢止する必要がある。勞働團體の威力を示すには他に多くの手段があると思ふから、必ずしも示威運動に執着するを要しないではないか。兎に角東京や大阪の如き不完全なる道路を有する都市に於て多數の人々が隊伍を組んで市街を練り歩くと云ふことは交通上から見ても感心すべきことではない。

然しあらゆる示威運動を禁止するといふことが確立してゐなければ、必ず多くの非難攻擊が生じて來る。勞働者の示威運動を禁止して、火保問題や魚市場問題の示威運動を看過するが如きことがあつては法の威信が立たない。政府は宜しく衆議を重ねて示威運動に對する公平なる取締を斷行すべきである。私共は暴力禁止の第一步として大々的に贊意を表する。

然し暴行に導く虞ある示威運動を取締ると共に、一方に於ては言論のため出來得るだけ自由を與へるといふことにしなければならぬ。現在は屋外の集會や言論を禁ずると云ふ窮屈な取締法があるけれども、示威的行動を一切禁止することになれば、此取締りの手を緩めることが得策ではないかと考へる。若し公園內の廣場で勞働者の集會を催すことが出來るやうになれば、メーデイもこんな形式の下に記念せられることになるであらう。演說などが多少激越になつても、隊伍を組んで公園外に出ることは出來ないから、暴行に終るような心配はない。

ロンドンのハイドパーク（公園）が種々なる意味の演說場になつて居ることは誰も知つて居る所である。通行の妨害にならぬ範圍に於て屋外演說や屋外集會が許されることになれば、總選擧の時などにはドノ位便宜であるかも知れぬ。多額の選擧費を支出することの出來ぬ人でも屋外に於て政見を發表することが出來る。普通選擧でも行れることになれば何人も一層多く此必要を感ずるに相違ない。殊にこれが勞働者のために集會の便宜を與へることになるから、勞働者は市街を練り歩いて示威運動をなす必要がなくなる。

政府先づ其模範を示せ

暴力を取締るために政府自らが暴力を用ゆることは社會的秩序を維持するために必要のことであるから、何人もこれに反對することは出來ぬと思ふ。然し暴力の使用は國家が暴力を取締る場合にのみ正當化せられるのであつて、國家といへども此目的意外に暴力を用ゆる權利はないのである。然し柔道、角力、といふが如き技術に達するものに往々暴力濫用の誘惑が來ると同じく、暴力の所有者たる國家にも同一の場合があることを考

へなければならぬ。政府が往々抵抗力なき人民に對して暴力を加へることあるは私共が見聞するところであつて、歐米の先進國に於てすら時にこれを見ることがある。帝政時代の露國に於ては最も甚しかつたのであるから、トルストイは國家を以て暴力使用の張本人であると言ふて居る位だ。

強きを挫き弱きを助けるといふ仁俠的精神も我國民性の一部をなして居るに相違はないが、『弱い者いじめ』といふことも私共が祖先から多分に遺傳して來た所の欠陷ではないかと思ふ。暴行者を取押へるために警察官が暴力を用ゆるのは當然過ぎたことである。然し一旦これを留置所に連れ行けば暴行者は最早暴行者でない。彼れは全く抵抗力を失ふて居る。斯る場合に於て警官が被拘禁者を打たり蹴たりするのは暴力使用の範圍を超へたもので、これが所謂弱者いじめである。私共は斯る事實が屢新聞雜誌によりて傳へられ、或は被拘禁者の口によりて公にされるのを知つて居るから、全く根底のなき虚言であると考へることは出來ない。

政府自ら行ふことは人民も亦これを模倣するといふ傾向がある。昨年の震災を機會として東京附近に現出された修羅場は單に一大天災に伴ふて生じた一大不幸事件として説明し去ることは出來ない。朝鮮人の襲來、社會主義者の陰謀などいふ風説が如何にして生じたか、或人の想像するが如く警察側若くは軍隊側から生じたものであるか。或は×××と主義者との一部に實際陰謀の事實が存在して居たのであるが、私共は今更これを研究しようとは思はない。然し陰に他人を慘殺した者が屢幽靈のために惱まされると同じく、常に鮮人や主義者を仇敵の如くに虐待して居る所の××や國民が偶震災に遇ふて一種の恐怖に襲はれたのだと説明することも强ち牽强附會ではないと思ふ。

更に私共が不可解であると感ずるのは政府自らが往々暴力團體を利用して居るのではないかといふことである。床次氏が内務大臣の椅子を占めて居た時國粹會の設立に援助を與へた如き其一例として見ることが出來るではないか。暴力取締の任に在る政府自らが暴力團體を是認し且つこれを利用するに至りては全く暴力のために宣傳をなしつゝあるのだと言ふて差支はあるまい。私共は徹頭徹尾此の如き不徹底なる政府の態度に反對する。

徹底的暴力否認

自由にすべき思想を取締り、拘束すべき暴力を放任するといふのが現在政府の取つて居る方針のように思はれる。若し此方針が顚倒されたならば、政府は初めて其行くべき道に進むこと

が出來る。一切の暴力に對して政府が假借なく取締れば、如何に過激なる思想が宣傳されても決して恐るゝに足らない。何となれば其思想が暴力となつて現はれるや否や、政府は直に警察力を以てこれを取締るからである。社會の秩序を破壞するものは暴力であつて、思想ではない。思想に嚴にして暴力に寛であることは絕へず社會に不平、不滿、不穩を惹起す所以である。

暴力に對して峻嚴なる取締りをなすことは何人にも異存なきことであらうと信ずる。然し其取締を有効ならしむるためには政府自ら其暴力を不合理に使用してはならぬと同時に絕對的暴力否認の精神を小中學の教科書に發表し、これを國民全體に鼓吹することが必要である。講談や浪花節を法律によりて禁止することは穩當でないけれども、國民教科書を通じて漸次國民の心を他に轉ぜしむることは少しも差支がない。小學校の兒童を教化するには長き年月を要するではないかと懸念する人もあるだらうが、結局急がば廻れといふことになるのである。

然し國民一般として今少し、反省すれば暴力の弊を悟ることが出來ると思ふ。恐らく我國程各方面に於て暴力の用いられて居る國はあるまい。政黨には所屬の壯士がある。會社の總會にも壯士が飛出す例もある。兎に角暴力團體の存在を公認して居る例が他の文明國に在るだらうか。更に社會的方面に於て私共が最も苦々しく思ふことは金を貸して呉れぬから、位地を周旋して呉れぬからといふては忽ち殺意を生じ、甚しきは自分の戀に應じて呉れぬからといふので相手に斬り付けるものさへある。此の如くして貴重なる意志の自由さへも暴力のため滅茶〳〵に蹂躙されて居る。無理が通ふれば道理が引込む。暴力が行はれる所には意志の自由は有り得ない。要するに政府も人民も暴力に對して曖昧なる態度を取つて居るといふことが唯一の禍根である。暴力は絕對に禁止すべし、思想は絕對に自由にすべし、此簡單なる原則を了解し得ない國民程不幸なものはない。

ソビエット露西亞の對外政策の現在と將來

神川彦松

（一）

去る一月廿一日モスクワ郊外のゴルキー莊園で其の多事多難な生涯を終へたニコライ・レニンの後を嗣いで二月二日、ソビエツト、共和聯合國の人民委員會議々長に就任した、アレキシエフ・キワノウイチ・ルイコフは其就職匆々新內閣の內治外交に關する政策を世界に宣明した、彼は先づ露西亞の政權の中心が彼の所謂十月革命以來、露國の政權を掌握し來つた共產黨にあることを聲明し次で內治及び外交の政策に就ては、最近ソビエツト共和聯合國の第二回ソビエツト大會及各共和國の諸大會に於て決議された所である。外交政策の方面に於ては此等の決議は要するに平和の繼續とソビエツト聯合國の國際間に於ける地位の確立を目的とせるものである。ソビエツト、共和聯合國は決して他國の領土を覬覦するものではなく他國人民を支配せんと欲するものではない、然し歐洲現下の不確定なる狀態とヴエルサイユ條約の不安定なることゝは、ソビエツト政府をして赤軍の武力を維持し萬一の攻擊に對して準備をなすの餘儀なきに至らしめてゐると述べた後、ルイコフ氏はソビエツト政府の亞細亞に對する政策に言及して聲明した、ソビエツト露西亞が亞細亞の諸國民の間に於て有する一般的好感及びレニンの名が之等の人民間に於て博せる例外的な好評はレニンが、斷乎として主張したる所の次の政策の齎した所である、即ち、亞細亞の人民が其民族的文化的及び政治的、更生を遂げんとする努力に對しては、無私なる助力と充分なる同情を與ふるの政策である、この政策こそは、吾人が將來に於ても十二分に維持せんと欲する所のものである、而して此の政策は露西亞と土耳其、支那、ペルシヤ、アフガニスタン、及び亞細亞の他の諸國民との關係を强むるに至るであらうと確信する、實際に於て、之はたゞ、民

族自決主義の政策を亞細亞の諸國民との外交關係に適用したものに過ぎない、而して此の民族自決の政策はソビエット政府が既にソビエット共和聯合國を組織する、諸民族に對する關係に於て實行した處である、と宣言したのである。

（二）

レニン沒後のソビエット新政府の外交政策は此のルイコフ氏の聲明に於て其の大綱を示してゐるが、吾人がソビエット露西亞の外交政策の本質と特色とを理解して世界外交の舞臺に於けるソビエット露西亞の地位を明かにせんと欲せば尙多くの點に深入して攻究することを要するが、それには先づソビエット露西亞の權力の本體を知らねばならぬ。

昨年七月ソビエット聯合國第二回中央執行委員會議に於て決定せられ、本年一月下旬、第二回聯合國ソビエット大會の裁可批准を經た所謂ソビエット共和聯合國の新憲法に依れば、ソビエット聯合國の主權の最高機關は聯合國ソビエット大會であり、大會は市ソビエット代表者及び縣ソビエットの會議の代表者から成り、之等は、市及び縣の人口に比例して選出されるのである、大會は、年一回每年十二月に開かれる許りであるから、其開期以外に於ては共和聯合國中央執行委員會が大會に代つて主權の最高機關となるのである、此聯合國中央執行委員會は二院制度であつて所謂普通憲法學上に上院と稱せられるものに該當するのは民族ソビエットであり、下院とも稱し得べきものは聯合ソビエットである、民族ソビエットは、ソビエット聯合國內に存する數十種の諸民族から擧選されるもので、其議員總數は九十九名である、各民族から平等の割合を以て代表者を派出せしむるを本旨としてゐる、他方の聯合ソビエットの方は各共和國から其の人口に比例して議員を選出せしむるもので其議員數は三百七十一名に上り議員割當數を四共和國別にすると勞農露西亞共和國二百七十名、ウクライナ共和國六十八名、コーカサス聯邦共和國二十六名、白露西亞共和國七名の割である、聯合國中央執行委員會は年三回召集されるとが原則となつてゐるから其閉會中に於ける事務を遂行するため二十一名の中央執行委員會幹部を選定するとになつてゐる。これは中央執行委員會から七名、民族ソビエットから七名、聯合ソビエットから七名を選出するのである、此中央執行委員會幹部がソビエット大會及び聯合國中央執行委員會閉會中に於て聯合國全體の主權の最高機關である、行政上に於ける最高機關即ち內閣に該當するものは聯合國の人民委員會議である、之は議長、議長代理及び十人の委員から成つてゐる各委員は各人民委員部の長官である、人民委員

は、聯合國中央執行委員會の任命する所である、人民委員會議と相並んで「合同國家政治局」と稱する、極めて實際上、權力のある機關がある、之は、政治的並に經濟的反革命に對する監視、ソビエット各共和國の革命的努力を統一するを任務とするもので、實際上國家の樞機を掌握してゐるのである、聯合國の司法上の最高機關は、聯合國の最高裁判所であり、聯合國の領土内に革命的正義を確立することを目的としてゐるのである、

憲法上に於ては、上述の如く上下各種の機關が整然たる體系をなして一大偉觀を呈してゐるのであるが、乍然實際に於て權力を壟斷してゐるものは共和黨の領袖達である、聯合國全體の主權は憲法上は、ソビエット大會に屬してゐるが其のソビエット大會は地方のソビエットの會議の左右する所であり、地方ソビエット會議は、共和黨員の左右する所である、共和黨員は、共和黨の首領の命令に依つて行動してゐるのである、結局露國の實權は、共和黨の中央執行委員會に存してゐるのである、之の中央執行委員會は、共和黨の領袖である九名から成つてゐた。即ちレニン、トロツキー、スタリン、カメネフ、ドゼルヂンスキー、ルイコフ、ブハリン、ジンウヰエフ、トムスキー、である、之等が所謂「政治局」を組織しソビエット政府の一切の樞機を掌握してゐるのである即ち露國の實權はソビエット大會にあるのでもなく、聯合國中央執行委員會にも存せず又必ずしも行政委員會議にも存せず實に共和黨の幹部に存するのでる、

（三）

ソビエット露西亞の實權はボルシエビキ革命以來六ケ年を通じ依然として共産黨の手中に存する、露國の一切の政策は共産黨の決定する所である、從つて露國の對外政策も又共産黨の決定する所たるは當然である、然らば彼等の外交政策の根本目的は何であるか、露國共産黨の根本主張は、彼のレニンが呼號したる如く世界の勞働者の大同團結である、世界の總ての國民をして打つて一丸となし、單一なる世界的ソビエット共和國を樹立するにある。世界各國に於て社會的革命を斷行し勞働者及び極貧農夫より成る、共産黨をして政權を掌握せしめ斯くて世界到る所にソビエット共和國を樹立して之を最後に聯合して世界的ソビエット共和國聯邦を建設せんと期したのである、この世界的社會革命の第一歩として露國に於ける社會革命を成就し露國に於て共産黨の權力を樹立し而して世界の共産黨を糾合して世界革命を促進することを目的とする第三インターナショナルをモスコウに組織した。中に露國ソビエット政府と此の第三インターナショナルとは殆ど同心一體の實を有し相呼應して世界の

資本主義に宣戰し社會革命の宣傳と共產黨の擴張とのために奮鬪したのである、レニン、トロツキーは其の執政當時に於ては世界革命の機熟し其の實現の機近しと信じ公然此の理想の實現を宣言し世界到る所に所謂赤き魔の手を延ばしたのである、彼等は「世界革命か然らずば死か」と絕叫したのである、然し世界は彼等の豫期せるが如く廻轉せなかつた、歐洲資本國家の堅城は一朝一夕にして落つべきもない、彼等は一九二〇年の末頃に到りて遂に急速なる社會革命の實現を一先づ斷念するに至つた、一九二一年に入りては、レニンの所謂「息拔き」政策に依りて內にありては新經濟政策を實行し外にありては一九二〇年の初頃よる所謂邊境諸邦エストニヤ、リトアニヤ、ラトビヤ、フインランド等と講和條約をなして其の獨立を承認し其の翌年三月に於ては遂にポーランドと和し又亞細亞の諸國アフガニスタン、ペルシヤ、トルコと通商又は同盟條約を締結するに至つた、更に一九二一年三月英國との間に通商協定を結び同じく四月には獨逸と所謂ラツパロ條約を結びて政治的經濟的提携の實を擧げ六月にはチエツコスロバキヤと通商協定を締結し一九二三年に至りては、デンマークと通商協定を結び其他スカンヂニビヤ諸國伊太利ユゴスラビヤ等との間に通商に關する談判をなすに至つたのである、

ソビエツト政府の此の內治外交政策の變遷は一つに時の勢ひと必要に迫はれた結果である、彼等は內に於ては、經濟組織の破壞、大饑饉、工業の萎微より來る人民生活の困窮を救濟するがために外國の資本と外國製品の輸入の必要に迫られ外に於ては、各國の反動政策、各國社會黨の衰微に餘儀なくされて革命宣傳と革命戰爭を緩和するの他なかつたのである、彼等は資本國家の撲滅を叫ぶことを中止して資本家との共存調和を計らんとするに至り、凡ての政府を否認し之との交通を無視するの政策を止めて各國政府よりの承認を求め各國の伍班に入りて國際生活を營まんとするに至つた、彼等は先づ世界革命を實現することを中止して露國革命の完成、ソビエツト政府の基礎確立を企圖するに至つたのである、斯くてソビエツト政府は、實際の政治的行動に於て第三インターナショナルの國際主義世界革命の理想と一時離れんとするの傾向を示すに至つたのである。

（四）

ソビエツト政府の緩和政策は其の內政上に於けると同じく又外交上に於ても大なる報酬を齎したのである、ボルセビキ革命以來ソビエツト政府に對し敵對政策を執り來つた所の英、佛伊、日、米等所謂聯合國の團結は、本年二月一日の英國の露國

承認、二月七日の伊國の露國承認に依りて遂に崩壞に歸したのである、ソビエツト政府は聯合國との對戰に於て正に最初の勝利を博したのである、聯合國中の二大國の正式承認に依りソビエツト政府の國際的の地位は初めて確立し國際間に於て對等の地位、否寧ろ優勝の地位を以て世界の各國と對立し交渉するの、機會を捕えたのである。露國と列國との間の外交交渉が愈々本舞臺に入らんとするの機運に到達したのである、

露國と列國との外交上の諸問題は極めて廣汎であるが、之を大別すると次の四群となる、

第一、世界大戰以前に於ける外交的諸問題

第二、大戰、革命、及び講和諸條約より起れる諸問題

第三、私人債權及び要求權に關する諸問題

第四、露國と列國との將來の外交關係に關する諸問題

第一に對する問題は、露國の舊帝國政府と列國との間に締結せられたる政治的經濟的の諸條約協定及び之等に關聯して起れる外交上の諸問題である。即ち例へば國境に關する條約、通商條約、航海條約、漁業協定、鐵道協定、領事職務協定等領海範圍の問題の如きものである、之等の國際條約の存續の問題は國際債務の問題と共に所謂國際信義の問題として現今尤も喧傳される問題である、舊露國帝國政府と列國との間に締結せられたる諸條約に就てはソビエツト政府は、之等の條約が露國の人民が常に其虐政に反抗した專制政府が締結したものであると云ふ理由に依り又はソビエツト政府と所謂聯合國との間に戰爭關係が存立したと云ふ理由に依り又或は露國內に於ける事情並に國際關係が條約締結の當時に比し全然一變したと云ふ理由等に依つて、之等諸條約は既に廢棄され又は効力を失ふに至つたものであると主張し來つたものである、從來國際公法の原則に依れば一國內の革命は、國內の事件であつて國家自體の變更を來さない、革命の成功は新國家の發生を意味する者ではなくて單に政府の變更に過ぎない、從つて政府の變更は其國家の國際法上の權利義務に對して影響を爲さゞるを原則とするものである。故に新政府が他國に依りて正式の承認を受くる時は其承認國と被承認國との間に存する一切の條約は、當然復活し其効力を實現すべきものである、若しソビエツト政府が全然斯かる國際法上の根本原則を承認しないと言ふのならば露國と各國との外交關係の再開のために一大障害を與へるものたるは勿論である。乍然、最近時に於けるソビエツト政府の態度に於ては、必ずしも既に確定せる國際公法の原則を無視せんとするものでなく、或はレブス・シツク、スタンチブスの原則により或は戰爭の法規に依

り或は又不可抗力の理由となる等國際法に既に認められたる、原則に根據して舊條約の無効又は廢棄を主張せんとするものに過ぎない、されば、舊條約の効力問題に關しては、舊條約の承認を高調せずして寧ろ、舊條約を戰後の變動せる、狀態に適合するための改正又は整理の問題となし舊條約は如何なる程度まで今日の狀態に於て實行し得べきかを熟議することゝなす時は、此の所謂國際信義の問題は決して實際的解決の困難な問題でないのである。

（五）

第二に對する問題即ち世界戰爭、革命、諸媾和條約より起れる諸問題に就て今日最も世界の視聽を聳てゐるのは國際債務の問題である、ソビエツト政府は其の執政の始に於て一切の國際債務の廢棄を宣言したのである、世界大戰前の露國の舊國債を廢棄するの理由としては、舊帝國政府は、人民の壓制者であり人民の敵であつた、其の國債は人民を苦しむるために使用せられた、此の人民の敵に依り此の人民の不利益のために締結せられた負債は露國の人民は之を繼承するの義務なしとなすのである、若しそれ世界大戰中に起債せられた所謂戰時債務に至りては、之は聯合國の共同事業のために使用せられたるものであり、而して露國は其の事業の何等の利益分配に與つてゐないから、戰時債務を支拂ふの理由はないとなしてゐるのである、然してソビエツト政府は國際債務に關する此の主張に於ては、かつて其の主張を枉げず、ゼノア會議、海牙會議に於ても又列國との談判に於ても頑強に之を固持して毫も譲る所がなかつたのである、從來の國際法の原則に於ては、舊政府の負ひたる國債は、新政府が之を繼承することは動かすべからざる法則と成されてゐるのである、若しソビエツト政府が將來に於ても依然として此の主張を持つて動かざるに於ては露國と他國との外交關係の再開に尤も大なる障害を與ふべきである、乍然、聯合國も多數即ち英伊等に於ては、戰時債務に關しては、原則として之を相互に抛棄することを主張する有力說あり、又戰爭前の露國國債に就ても露國に實際上、償還能力の乏しきを察知し、實際に於ては其の全部又は一部を抛棄せんとするの傾向を呈し來つてゐる、彼のロイド・ジョージの如きもゼノア會議の終に於ては英國の對露戰時債權は露西亞が革命及び干渉に關して英國に對して要求する賠償金と相殺せんとの意嚮を示した、又マクドナルドの如きは夙に一般戰時債務の相殺を主張してゐるのである、又戰時債務以外の國債に關しても米國政府は米國が露國帝政時代に露國に對して與へた國債は全部之を抛棄するも可なりとの意

承認、二月七日の伊國の露國承認に依りて遂に崩壊に歸したのである、ソビエット政府は聯合國との對戰に於て正に最初の勝利を博したのである、聯合國中の二大國の正式承認に依りソビエット政府の國際的の地位は初めて確立し國際間に於て對等の地位、否寧ろ優勝の地位を以て世界の各國と對立し交渉するの、機會を捕えたのである。露國と列國との間の外交交渉が愈々本舞臺に入らんとするの機運に到達したのである、

露國と列國との外交上の諸問題は極めて廣汎であるが、之を大別すると次の四群となる、

第一、世界大戰以前に於ける外交的諸問題
第二、大戰、革命、及び講和諸條約より起れる諸問題
第三、私人債權及び要求權に關する諸問題
第四、露國と列國との將來の外交關係に關する諸問題

第一に對する問題は、露國の舊帝國政府と列國との間に締結せられたる政治的經濟的の諸條約協定及び之等に關聯して起れる外交上の諸問題である。即ち例へば國境に關する條約、通商條約、航海條約、漁業協定、鐵道協定、領事職務協定等領海範圍の問題の如きものである、之等の國際條約の存續の問題は國際債務の問題と共に所謂國際信義の問題として現今尤も喧傳される問題である、舊露國帝國政府と列國との間に締結せられたる諸條約に就てはソビエット政府は、之等の條約が露國の人民が常に其虐政に反抗した專制政府が締結したものであると云ふ理由に依り又はソビエット政府と所謂聯合國との間に戰爭關係が存立したと云ふ理由に依り又或は露國内に於ける事情並に國際關係が條約締結の當時に比し全然一變したと云ふ理由等に依つて、之等諸條約は既に廢棄され又は效力を失ふに至つたものであると主張し來つたものである、從來國際公法の原則に依れば一國内の革命は、國内の事件であつて國家自體の變更を來さない、革命の成功は新國家の發生を意味する者ではなくて單に政府の變更に過ぎない、從つて政府の變更は其國家の國際法上の權利義務に對して影響を爲さゞるを原則とするものである。故に新政府が他國に依りて正式の承認を受くる時は其承認國と被承認國との間に存する一切の條約は、當然復活し其效力を實現すべきものである、若しソビエット政府が全然斯かる國際法上の根本原則を承認しないと言ふのならば露國と各國との外交關係の再開のために一大障害を與へるものたるは勿論である。乍然、最近時に於けるソビエット政府の態度に於ては、必ずしも既に確定せる國際公法の原則を無視せんとするものでなく、或はレブス・シック、スタンチブスの原則により或は戰爭の法規に依

り或は又不可抗力の理由となる等國際法に既に認められたる、原則に根據して舊條約の無效又は廢棄を主張せんとするものに過ぎない、されば、舊條約の效力問題に關しては、舊條約の承認を高調せずして寧ろ、舊條約を戰後の變動せる、狀態に適合するための改正又は整理の問題となし舊條約は如何なる程度まで今日の狀態に於て實行し得べきかを審議することゝなす時は、此の所謂國際信義の問題は決して實際的解決の困難な問題でないのである。

（五）

第二に對する問題即ち世界戰爭、革命、諸媾和條約より起れる諸問題に就て今日最も世界の視聽を聳てゐるのは國際債務の問題である、ソビエツト政府は其の執政の始に於て一切の國際債務の廢棄を宣言したのである、世界大戰前の露國の舊國債を廢棄するの理由としては、舊帝國政府は、人民の壓制者であり人民の敵であつた、其の國債は人民を苦しむるために使用せられた、此の人民の敵に依り此の人民の不利益のために締結せられた負債は露國の人民は之を繼承するの義務なしとなすのである、若しそれ世界大戰中に起債せられた所謂戰時債務に至りては、之は聯合國の共同事業のために使用せられたるものであり、而して露國は其の事業の何等の利益分配に與つてゐないから、戰時債務を支拂ふの理由はないとなしてゐるのである、然してソビエツト政府は國際債務に關する此の主張に於ては、かつて其の主張を枉げず、ゼノア會議、海牙會議に於ても又列國との談判に於ても頑強に之を固持して毫も讓る所がなかつたのである、從來の國際法の原則に於ては、舊政府の負ひたる國債は、新政府が之を繼承することは動かすべからざる法則と成されてゐるのである、若しソビエツト政府が將來に於ても依然として此の主張を持つて動かざるに於ては露國と他國との外交關係の再開に尤も大なる障害を與ふべきである、乍然、聯合國も多數即ち英伊等に於ては、戰時債務に關しては、原則として之を相互に拋棄することを主張する有力說あり、又戰爭前の露國國債に就ても露國に實際上、償還能力の乏しきを察知し、實際に於ては其の全部又は一部を拋棄せんとするの傾向を呈し來つてゐる、彼のロイド・ジョージの如きもゼノア會議の終に於ては英國の對露戰時債權は露西亞が革命及び干渉に關して英國に對して要求する賠償金と相殺せんとの意嚮を示した、又マクドナルドの如きは夙に一般戰時債務の相殺を主張してゐるのである、又戰時債務以外の國債に關しても米國政府は米國が露國帝政時代に露國に對して與へた國債は全部之を拋棄するも可なりとの意

嚮を示すに至つたのである、國際問題に關し尤も頑强の主張を有するは勿論露國に對して最大の權利者である佛蘭西である、佛國とソビエット政府との間の債務問題は、其の解決が尤も困難であるべきである、此の國際問題は、露國との外交關係の決定の上に最大の難關たるべきものであるけれども、佛國等の少數の國を除いては其の實際的解決は至難ではないと思はれる。

ソビエット政府がベルサイユ條約及び其の後の諸條約を否認するの態度に出てゐたことが休戰後に於ける歐洲政局の不安定の最大原因の一つであつたことは世論の認むる所であつた、ボルシエビキ政府が其の自から參加せざりし諸條約を承認せざるも當然である、然し其の後、時の經過と共に重要なる政治問題は露國と各當該國間の特別條約に依りて少くとも一時的解決を得た、露國と其の諸隣國即ちポーランド、フインランド、エストニヤ、リトアニヤ、ラトビヤ、等との關係は各別の講和條約により又獨逸との間の賠償問題は所謂ラッパロ條約に依り解決の道を得たのである、たゞベッサラビヤの所屬問題に關するルウマニヤとの間の懸案は未だ解決を得ず最近ウキンナに於て兩國代表が談判を試みたが、不調に歸したと報ぜられてゐる、國際聯盟との關係に就ても、ソビエット露西亞は之を以て資本國家の聯合なりとなし資本主義の擁護機關なりと目して反對の態度を採つて來たのであるが、此の露西亞の極端なる態度は次第に軟化し近時に於ては國際聯盟に參加せる諸國が、露國に正式承認を與へざるを以て露國も亦國際聯盟を承認しないのであるとなして居る、而して實際に於て技術的の委員會の或者例へば、保健、運輸に關する如き委員會には委員を出して協力せんとするの意嚮すら示すに至つた、若し聯合國が相次で露國を承認するに至つたならば露國の聯盟に對する態度にも大なる改善を見るに至るであらうと思ふ、況や、軍備を撤廢し國際紛爭を武力に訴へて解決せずして正義と好意に依りて解決せんとする理想に於てはソビエット露西亞の主義と聯盟の主義とは、一致するものであるから、露國の國際的地位の確立と共に露國が聯盟と協同するに至るの可能は益々大になるであらうと思ふ、

（六）

第三の諸問題即ち私人の債權及び要求權に關しては、之は主としてボルセビキ革命の共産主義の實行より起つた問題で、第二の諸問題の一部に屬すべきものであるが、現時歐洲に於ける大問題として尤も注目されてゐる問題であると共に又稍性質を同じくする國際債務の問題に對する、ソビエット政府の政策と

の間には懸隔があるから、此の問題を特に引離して述べるのである。露國は戰爭前に於て非常に大なる外國資本を流入せしめたのである、之等多額の外國資本は鐵道、港灣、鑛山、油田、工場施設等の建設に投下せられた、然るに之等の企業はソビエツト政府の命令に依り凡て國有化せられ而もソビエツト政府は國有に際して何等の補償をも與へないから外國の投資をしたる人々は、多大なる損失を蒙つたのである、其の外人の尤も著しきものは英米佛等の大資本國であるが之等の國家は其の市民の蒙つた損害に對して之が賠償をソビエツト政府に對して要求するのである、又露國に於て工場、商舖、家屋等を有してゐた外國人が露國政府に之等の財産の沒收せられたるものに關しては其の外人の本國政府は、ソビエツト政府に對して沒收財産の返還を要求するのである。

ソビエツト政府は此の問題に關して其の共産主義の上よりして斷じて讓歩し得ずとの強硬なる態度を持して居たのであるが然し實際に於ては露國は此の問題に對し多少の讓歩をなし、既に一九二一年の英露通商協定に於ては「一方の當事國又は其の市民が、各當事國の現在又は以前の政府の有する財産、權利又は義務に關して他方の當事國に對して有する凡ての要求は、前文に於て言及されたる正式の一般平和條約に依り衡平に處理せらるべきものなること」を規定してゐる更に又同協定に於て「露西亞に對して財貨又は勞務を供給し其に對して代價を支拂はれざりし私人に對しては、ソビエツト政府は賠償を支拂ふの義務を有することを原則として承認する」と云ふことを規定してゐるのである、然して最近の伊太利との通商條約に於て伊國民にして露國に於て個人財産を沒收されたるものに就ては或程度の返還を約し此の問題に關する伊國政府の要求に多大の滿足を與へてゐるのである、此の問題の公平にして穩當なる實際的解決は之を期するに難くはなからうと思ふ、日本も彼の昨年夏、川上、ヨツフエの豫備交渉に關して此の問題に關する要求を提出したが此の問題に關し當時、ヨツフエ氏は、ソビエツトの勢力は極東殊に重要なる地方に行はれてゐなかつた、隨つて國有制度は行はれなかつたから、財産國有に依り日本人の被害は微々たるもので此の點に關する利害は大ならずと指摘してゐる、從つて問題は歐洲に於ては最大問題の一つであるが、日本のみに關しては實際上の利害が左程重大でないのである。

（七）

以上述べ來つた多くの問題は極めて重大であり實際尤も世上の注意を集めてゐる所であるが、然し眞に世界の將來に對して

重大であり又吾人に執りて興味あるのは、露國外交政策の將來如何、露國と列國との外交關係の將來如何、露國の世界政局上の將來の地位如何の問題であらねばならぬ、世界の將來は此の問題の上に懸ると云ふも敢て過言ではないのである。

ソビエット政府が其の本來の使命となせる世界革命の實現の主張と努力を緩和し、世界をして一大ソビエット聯邦たらしめる野心を制へて、國際社會に於ける普通國家の政策に與せんとせる傾向は前述した所であるが、露國は將來、果して斯かる溫和なる政策を追ふべきであるか否か、若し露國が其の所謂息拔政策を繼續し長く世界革命の企圖を拋棄するに於ては、其は彼等の主義的自殺たるや當然である。世界各國に共產主義を實現せんとする第三インターナショナルの主義精神とソビエット政府の此の溫和政策との相容れざるは言を俟たない、此後のソビエット政府は此の溫和政策を繼續してソビエット露國の國際的地位を確立し國際社會に於ける一員としての穩健なる發達を期すべきか、果た又その本來の使命に生き第三インターナショナルと其の運命を共にし世界的革命を宣傳し共產主義の實現を期すべきであるか、正に彼等は此の十字街頭に立つてゐるものである、前に擧げた彼の新露西亞の首長ルイコフ氏の宣言に徵するならば、彼等は一方に於て溫和政策を繼續し平和政策を變更することなく、國際間に於ける露國の地位を鞏固ならしめんと期してゐるのである。而も彼等は又他の一方に於て彼のソビエット革命の旗印である民族自決の主張を揭げて、亞細亞の諸國民を資本列强の羈絆より脫せしめ、亞細亞の諸國民に民族的文化的及び政治的復活を與ふに努力すべしと聲明してゐる。即ちソビエット政府の息拔政策と同時に彼等本來の社會革命の運動を持續せんと期してゐるのである。露國の此の世界革命の主義政策が他の諸國に對して一大脅威たるべきことは近き將來に於ても尙昨日の如くであると思ふ、乍然、露國の脅威の恐るべきは、ソビエット政府及び第三インターナショナルの活動が强大なる故ではない、若し露國が脅威を各國に投じ得るとすれば其は各國の社會組織が不安定なるが爲である、各國の經濟狀態に病的の處があるがためでなければならぬ、即ち恐るべきは、各資本國家の有する社會的弱點であつて、ソビエット露西亞及び第三インターナショナルの活動ではないのである、米國は近き將來に於て斷じて共產的革命に陷ることはないとは、彼の赤軍の總帥トロツキーの慨然として自白した處であり、凡そ如何なるパンフレツドも如何なる金力も大國民を動かすことは出來ない。大國民は自己の原因に依り自己の力に依りてなすの外社會革命をなすものではないとはソビエットの世界的宣傳の大ギラ

デックが述懐した所である。世界の將來はソビエット政府及び第三インターナショナルの革命的努力に依つて左右されるものではなく、實に世界各國民の内部的社會的展開に依つて決定せらるべきである。若し其れ此後十年又は十五年間、歐洲に於て共產革命の擴延を見ざるに於ては、ソビエット露西亞も孤掌鳴らすに由なく、遂に自ら退きて世界革命を斷念し單に露國一國内に於ける勞働黨と化し去り、恰も現在に於ける濠洲及びニュージーランドの社會黨が其の國々に於て有すると同樣なる地位を保つに過ぎざるものとなるであらうと云ふことは、ラデックすらが彼の著述の中に認めてゐる所である。ソビエット政府をして其の本來の使命を實現せしむるや否やは、懸つて列國の内部狀態と其の外交政策の上に存するのである、ソビエット革命の危險を免かれんと欲するならば各國は宜しく其の内政治策に於て各種の社會問題を解決し、各自國内に於ける社會的革命の素因を除去すると同時に、又克く其の外交政策に於て露國を導きて溫和なる道程をたどらしむるに努力しなければならぬのである。各國は宜しく平和と友情の精神を以て露國に對し、彼等をして國際聯盟に參加せしめ、國際平和の維持と國際協力の發展とに協力せしめねばならぬのである。露國と相携へて國際平和と國際正義と國際連帶の理想の實現に向つて進んで行くならば、萬人の望んで止まざる世界平和の理想境は、此の地上に實現せらるゝの時期のない事はなからうと思ふのである。

(一三、四、九)

社會主義國家の五月祭

茂森唯士

一

一八八九年巴里に開かれた第二インターナショナルの最初の世界大會は、毎年五月一日をもつて國際的勞働祭日とし、全世界の勞働階級の組織的一大デモンストレーションの日と定めた。これは米國勞働階級が一八八六年來メーデーを期して資本家との大規模の鬪爭を決行し、八時間勞働の獲得に成功して來たその勝利の實例にのつとつて、同大會がメーデーを國際的運動の範圍にまで擴大して、全世界の勞働者の權利宣言の日と制定したのである。爾來年を追ふて盛大に赴き、今日ではソウエート、ロシヤの如き、無產階級執政下に於ける獨特のメーデー祝祭日まで出現するに至つたが、これは歐洲大戰によつて屈辱的に破滅した第二インターナショナルの無產階級運動に對する手柄の一つであつたといつてよからう。

一八九〇年の最初の國際的メーデーには、歐米兩大陸の勞働階級は、「八時間勞働」「常備軍廢止」「戰爭に反對する戰爭」の標語を掲げて虐げられたる者の悲壯なる抗議と無產階級の國際的團結の威力を表示するために一齊に蹶起した。

露國で最初にメーデーが行はれたのは、一九〇〇年であつた元來露國の資本主義は、英米獨佛の諸國に比して、百年乃至五十年後れてゐた。それで被搾取勞働群が漸次に擡頭して來た一九〇〇年に於て、最初のメーデーを見たのは當然であつた。同年南露の工業都市ハリコフに於て、約三千の勞働者が、官憲と資本家の壓迫下に壯烈なるメーデーの示威運動を行つて露國に於ける最初の記錄をつくつた。これは、單に露國に於けるメーデーの最初の記錄として記念されるばかりでなく、既に久しい間露國の革命運動を支配して來た「ナロードニキ」や「アナーキスト」のテロリズム的運動が衰退して、無產階級の大衆運動が

擡頭して來たことを語るものとして看過することができない。蓋しメーデーの示威運動の大きな特色が、國民主義的革命運動や、無政府主義的革命運動と全然相容れない無產階級の國際的團結と、大衆の訓練、組織、統制といふことにあるからである。

ハリコフの先覺勞働者によつて蒔かれたメーデーの種子は、翌一九〇一年二年には、ハリコフ、モスクワ、ウオログダ、ソルモオ、サラトフの諸都市のメーデーとなつた。殊に一九〇二年サロトフ市に於けるメーデーは、無產階級の政治的、革命的要求を具體的に揭げて專制主義（ツアリーズム）と資本主義とに向つて肉迫せる最初の示威運動として意義があつた。かくて露國のメーデーは年と共にその參加人員と、戰鬪舞台を擴大して、一九〇五年六年には全露の勞働階級、全露の大小都市に波及し、歐米先驅國のメーデーを遙かに凌ぐ盛況をみせた。就中、ペテルブルグ、モスクワ、カザン、シンビルスク、モーロム、ウオログダ、バクウ、ウハー、ワルシヤワのメーデーは壯烈を極め、到る處軍隊との間に流血の爭鬪が演ぜられた。酷烈なる專制主義官憲の迫害が遂に革命的民衆の怒りを激發せしめて、示威運動は、暴動と化した。ペテルブルグ衞戍司令官で反動軍閥の巨頭クツネツオーフや、バクウの知事が慘殺の危に逢ひ、ウハーの知事とワルシヤワの知事のマクシモーヰチ等が爆彈に傷けられたのも此の兩年のメーデーに於てであつた。尤も當時は此の專制主義國家に於て、その廣さと深さと銳利さとに於て、世界無比の一大ストライキが勃發してゐた。レーニンの記述によると、『一九〇五年一月中の罷工職工數はその直前（一八九五—一九〇四）を平均したる一年間の罷工數の十倍であり、同年の一月から十月にかけて、ストライキは絕えず增大し、驚くほど擴まつた。資本主義發達の幼稚なロシヤは、夥多の、全く特殊な歷史的諸條件の影響を受けて、革命中、被抑壓民衆の活動の波濤の如く膨張—それはすべての大革命に共通する特色である—を世界に示したのみならず、全人口に於ける數的優勢よりも遙かに大なる無產階級の威力を世界に向つて眞先に示した。それは、經濟的要素と政治的要素との混淆せるストライキを世界に示した。（後者は變じて武裝的暴動となつた。）それは、資本主義のために抑壓さるゝ階級の大衆運動及び大衆組織の新形式—即ちソウエート——の誕生を示した』（"Left" Communism An Infantile Disorder P. 71.）

此の大革命にまで高まつた一大ストライキの渦中に於て、一九〇五年六年のメーデーは行はれたのであつた。だからそれはもう革命の演習といはれる普通のメーデーの域からも一歩深く切り込むで、眞劍の革命戰そのものであつた。そうした意味で、

此の兩年に於ける露國のメーデーは、世界無比のメーデーであつた。

併し、革命が敗れて、專制政治(ツアリーズム)が完全に勝利を得、極端なる反動時代が現出されるに及んで、凡ゆる革命的政黨乃至は革命的勞働大衆は再び地底に潜んでしまつた。これは同時にメーデーそのものの蟄息であつた。この社會運動の暗黑時代は一九〇七年から一〇年まで續いた。一九一二年、レン抗山の罷業勞働者數百名の虐殺事件を動機として、久しく地底の苦悶を嘗めてゐた勞働運動は、再び活動の頁を開いて來た。此の形勢に促されて一九一三年一四年には、メーデーも亦復活して來た。そして首都ペトログラード、モスクワ等に於て、軍隊と警官の迫害と戰ひながら屈せざる意氣をもつて露國勞働大衆の示威運動が行はれた。併し帝國主義世界戰爭の勃發と共に、第二インターナショナルは其の眞精神を裏切つて愛國的侵略主義に降伏して了つたので、露國のみならず、列國の無產階級運動は茲に挫折した。從つて無產階級の國際的團結と資本主義への勝利の象徵たるメーデーが挫折したのはいふまでもない。各交戰國の勞働階級は、メーデーに休業して其の階級的敵を、威嚇する代りに、メーデーにも働いてその階級的兄弟を殺すための軍器の製造に忙殺された。

二

メーデーは、無產階級解放運動の消長を測定する好箇のバロメートルである そして又、メーデーは、資本主義の抑壓の下に於ては勞働者のお祭りであることを許されない。それは抑壓され搾取さるる者の痛棘なる反抗と、國家的對峙の中に引き離さるる者の國際的團結を期する階級戰の進軍途上に於ける公然の徵兵と、訓練と、示威との日である。しかも一年に唯だ一日の勞働者の日である。メーデーを實際の効果の上からみるならば、既にメーデーに參加せる勞働者には、階級戰の實際的訓練と、無產階級の國際同胞精神並に階級意識の深化を與へ、未だ參加せざる勞働者には、示威運動の喧傳的効果によつて同じ被搾取無產階級としての眞の立個に目覺めしむる絕好の機緣をつくり與へるであらう。併し、それらよりも更に重大な効果は、何者の重壓をも彈き返し、突破して、無限の未來に伸長せずば止まぬ新興被抑壓階級の、組織的一大デモンストレーションとしての事實の中に含まれる大きな力强い政治的、社會的効果である。

大正十一年の第三回の我がメーデーには「勞農ロシヤの承認」といふ新標語が揭げられた。同じ日の同じ時刻に英國の勞

働階級は、倫敦の日本大使館に「西伯利より即時徹兵せよ」との要求書を突きつけてゐたのである。この事實は、いふまでもなく、勞農露國は無產階級が政權を掌握する新興國家であり、社會主義ソウエート共和國であるが故に、日本の勞働階級がその階級的兄弟的立場から露國の正當なる承認と、露國革命を撃殺せむとする武力干渉の拋棄を日本の支配階級に向つて迫るものである。そして此の事實の中に、全世界の無產階級が同じ血の通ひ、同じ意識に生きる階級的同胞であること、そしてメーデーは彼等の國際的團結の象徵であることが語られてゐる。

三

幾百萬の赤き鐵床……
幾百萬の筋張つた腕……
響け！我が際涯なき領土に渡り
全露五月一日の鐵槌の音！

これは勞農詩人のメーデーを頌ふる詩である。無產階級が勝利を獲た勞農露國では、メーデーは勞働者の祭日として完全に祝はれてゐる。何故に資本主義の國家に於てはお祭りであることを許されないメーデーが、社會主義の國家（それは未だ完全に實現されない過渡期にあるとはいへ無產階級執政によつて重要なる段階を通過したロシヤに於ては不當な言葉でない）に於ては祝祭日たることを許されるか、それはメーデーが勞働者の日であることには兩者の間に變りがないが、その「勞働」そのものの內容と意義とに於て全然相違がある。前者に於ける勞働は、資本そのものの營利のために絞取される奴隷勞働であるに反し、後者に於ける勞働は、勞働者自身がその勞働の主人である自主的社會的勞働だからである。尤も前者に於ても「勞働の自由」が說かれ「勞働神聖」が叫ばれるが、併しその自由その神聖はすべてブルヂュアによつて作られ、ブルヂュアによつて支配されるもので、ブルヂュアの僞瞞と陰蔽にのみ役立つものである。もつと徹底的に言へば、飢死することをのみ許されてゐる自由である。

一九一七年五月一日、始めて新曆をもつて三月革命後最初のメーデーが祝はれた。ツアーリズムを打破つて、酷烈無比なる帝政の暗黑時代から、解放された後の最初のメーデーとして、露國全都市にわたつて極めて盛大に祝はれた。

過去四年にわたる戰爭狀態に倦み疲れた露獨軍隊は、此の日戰線に於て到る處交驩を行ひ、メーデーに祝意を寄せた。彼等は其の頃帝國主義者の利益によつてせられる戰爭の眞の意味を次第に諒解するやうになつてゐた。

首都ペトログラードでは、解放の喜びを稱ふる全市の勞働者兵卒等が群集して、マリヤ宮、冬宮、タウリツ宮前の各廣場、ネフスキー大通りを隙間ないまでに埋めた。

彼等は「非併合主義講和」「全權をソウエートに」「飢えたる者に麵麭を、農民に土地を、全世界に平和を」「土地と自由」「古き世界からの解放」等大書したる赤旗幾百旒を五月の風に飜して、示威運動の大行列に、或は街頭の演説に革命大衆の氣勢を揚げた。此の日の示威運動は、新たにレーニン一派の歸國を迎へたボリシエヰキー黨にとつては最初の目覺ましい活動の舞台であつた。レーニンはツアーリズムから解放された露國のプロレタリア大衆の革命的創造力が、無限に進行し擴大して、完全に勝利を獲得しなければ止まない事を確信してゐた。そして此の創造力の潮の中に身を挺して飛び入つてそれと共に動きそれと共に進んだ。だから彼は、ソウエートの最初の議長チヘーゼやプレハーノフ、ツエレテリ等の「メンシエヰキー」やケレンスキー、チエルノフ以下の社會革命黨員が、此の革命をブルヂユア革命と見做すことによつて、ブルヂユア帝國主義者たるミリユコフ、リウオフ等と妥協苟合し、無產階級の革命的潮流を抑壓するの態度に出でたのとは全然相容れなかつた。リウオフ、ミリユコフ、グチコフ等のブルヂユア帝國主義者によつて構成される第一次臨時政府が聯合國並に自國のブルヂユア階級の利益を擁護するために、帝國主義戰爭を繼續しやうとしてゐるのに對して、無產階級の立場から峻烈に之を摘發し徹底的に抗爭したものはボリシエヰキーであつた。一九一七年のメーデーには、ボリシエヰキーは、帝國主義戰爭の即時中止と、ブルヂユアとの妥協反對を高唱して大いに活躍したのであつた。

四

一九一八年五月一日は、露國の無產階級が、勝利を獲得した後の最初のメーデーである。そして此れはブルヂユアに支配される代りにブルヂユアを支配する無產階級の政權の下に行はれた世界に於ける最初の歷史的意義ある勞働紀念祭であつた。此の日ロシヤ共和國の全土を擧げて盛大なるメーデーが始めてお祭り氣分をもつて祝はれた。とはいへ、それは決して勝ち誇る者の傲りであることを許されなかつた。此の日の標語は『吾々は資本主義に勝つた。吾々は又吾々自身の不用意にも打克たねばならぬ。』といふのであつた。彼等は社會主義革命の建設に必須な無產階級の組織と規律と統制の問題に直面してゐたのである。此の日の示威運動に於けるボリシエヰキーの宣傳的効果によつて、國內の反對分子を一擧にブルヂユア民主的戰線の方に

驅り立てたことは注目すべきであらう。レーニンは此のメーデー直後の「中央執行委員會議」に於て次の如き演說をしてゐる。

『吾々が唯一の民主的戰線の怪物を提供せられた時、私は一人で呟いた——尠くも「ナーシ・ウエーク」「デーロ・ナローダ」等の如き新聞紙を通讀し、又一瞥を與へる程の愉快を持つた時に——「未だその上に君達は唯一の民主的戰線を素めるのか？既に完全無缺な統一を持つてゐるではないか」と。が、然し、ミリユーコフからマルトフに至る間の此の戰線の統一が、五月一日の、あの素晴らしいボリシエヰキーの宣傳に脅威された結果行はれたものであると考へる時に、吾々はまんざらそれを喜ばぬわけではない。』

一九一九——二〇年のメーデーは、怖ろしい革命の受難時代に於て催された。コルチヤツク、デニキン、ユデニツチ、ウランゲル等の反革命軍は相繼いで露國の各地に蜂起し、世界の資本主義國は强大なる武力干涉と經濟的封鎖とを以て「革命」を殺さむとしてゐた。露國の勞働者及び農民は、革命を救ふために武器をとつて戰場に立たねばならなかつた。そこで勞働力の缺乏と建設事業の荒廢を補ふために一九一九年のメーデー直後に一部勞働者の發議によつて土曜日の半日をも休まずに義勇勞働をなすことが決議された。これが「共産土曜日」である。これは最も共産主義的な自覺的勞働なので、レーニンの慫慂によつて、露國の全共産黨員の間に擴まり始めた。ところが一九二〇年のメーデーは恰も此の「共産土曜日」に相當したので、此の日休業するか否かの裁斷を任せられた政府は、此の日をもつて「全露五月一日土曜勞働日」として宣言した。そこで露國の全勞働大衆は、メーデーに休業して祝ふ代りに、一齊に起つて公共的義勇勞働に此の一日を奉仕することとなつた。首都モスクワでは早朝からレーニン始め政府委員、官吏、兵卒が勞働者の指揮の下に、街上に、或は鐵道線路に群をなして「インターナショナルの歌」を高らかに歌ひながら威勢よく働いた。當日の標語は「モスクワ、カザン鐵道第一回土曜勞働より全露五月一日土曜勞働へ」といふのであつたが、レーニンは、此の題下に大要次の如き一場の演說をなした。

『標語に示された道程は一年の間である。いかに我が土曜勞働が些々たるものであつても、いかに凡ての土曜勞働が曝露した訓練と組織と規律との缺乏が甚しくとも兎に角主要なるものは爲され、巨大なるものは動き始めた。そこに凡ての眞髓がある。勞働階級の奸譎な敵は、五月一日の土曜勞働を嘲笑して居り、救はれぬまでに自分を資本主義に賣つた者共は、五月一日

の大勞働祭を共產主義的勞働實施の集團的試圖として利用することを攻擊してゐる。「中略」吾々は、「各人は自分のため、唯神のみは萬人のため」といふ呪はれたる法則を叩き潰すべく又勞働を義務のためにし、若しくは或る一定の賃銀の爲にするといふ習慣を廢絕すべく働くであらう。又吾々は、「萬人は一人のため、一人は萬人のため」といふ法則と「各人は其の能力に應じて働きその要求に從つて與へらるゝ」といふ法則を大衆の日常生活に植えつけ習慣として自覺せしむることに努力するであらう。「下略」」

ゴーリキイも亦「幸福への道」の題下に熱辯を振つた。仕事が終つた後、一同に其の日の麵麭と茶の切符が配付された。「働かざる者は喰ふべからず」のロシヤでは一定年例の健康者は悉く一個の勞働者である。此の勞働者が國を擧げて五月一日を義勇勞働に奉仕したことは、五月一日に勞働を拋棄することをもつて最大の示威とする資本主義國のメーデーと好對照をなすものである。

五

一九二一年に入つて反革命軍が全く敗滅し、英露通商によつて聯合國の經濟封鎖が破れ、露國は漸く落ちついて產業の恢復に取りかゝることが可能になつた。そして三月の共產黨大會では建設の第一着手として「新經濟政策」が採用された。一九二一年のメーデーは極めて樂しく祝はれることができた。殊に當年は露國民の傳統的生活に密着した舊國祭日たる「復活」がメーデーとかち合つたので、全露の農民及び勞働者のお祭は四月三十日から五月三日まで四日間つゞいた。

一九二二年—二三年のメーデーも非常な盛況であつた。それは無產階級の國家の基礎が固まれば固まる程、無產階級の最大の祝祭日たるメーデーも盛大になつてゆくやうに思はれた。クレムリン宮殿前の「赤の廣場」は、其の前夜から大裝飾燈に煌々と輝きわたつた。夜が明けるともうモスクワ全市大騷ぎだつた。モスクワ守備隊は軍樂隊付で堂々と繰り出して來た。「赤の廣場」の演壇は、革命的字句や、標語を書いて張つた赤い幕ですつかり飾られてゐた。十一時頃になると二十臺の飛行機がプロペラの音勇ましく、晴れ渡つたメーデーの空に飛んだ。

さしもに廣い廣場が隅から隅までメーデーを祝ふ兵士と勞働者と彼等の打ち振ふ赤旗の波とに埋まつた。演壇には、ソウエートの代表者、第三インターナショナル代表者が次ぎ次ぎに現れてメーデーを祝福し、革命建設のための激勵の辯舌を振ふた聽衆はそれに對して一々熱切なる拍手を送つた。演說が終ると

會史

第二節　社會階級　(1)概説　(2)武士階級　(3)農民階級　(4)町人階級
第三節　社會問題　(1)米價調節問題　(2)打毀　(3)百姓一揆　(4)土地問題と棄捐
第七章　日本社會史の特性
第一節　日本社會史と明治時代　(1)明治の社會階級　(2)明治の社會問題　(3)所謂社會史の時代的限界
第二節　階級鬪爭の意義　(1)社會階級の鬪爭　(2)貧富の對立

我々「庶民の歴史」「國民の歴史」としての唯一の歴史として、各小學、中學、大學、家庭より申込殺到。

好評十二版

定價貳圓五十錢
送料十七錢

改造社
東京芝區愛宕下町
振替東京八四〇二

徵[illegible]

容

[illegible]三 [illegible]
の歩 五 文藝と道徳 六 酒と女と歌 [illegible]
第四 文藝の起源
一 祈禱と勞働 二 [illegible]人の歩

我國で唯一と云つて[illegible]です。人の家庭[illegible]も此書はなくて[illegible]書は論文集ではありませぬ。[illegible]なくして家庭で文學は[illegible]ませぬ

出版界の新[illegible]

定價壹圓八拾錢
送料拾五錢

改造社

嚠喨たる喇叭の音が鳴り響いて、トロツキーの赤軍閲兵が始まつた。そして宣誓式が擧げられた。それが濟むと、「メーデー萬歳ー」「ソウエート共和國萬歳ー」「赤軍萬歳！」の聲が鯨波をつくつて叫ばれ、インターナショナルの歌が一しきりどよめき渡つた。飛行機隊は空からビラをバラ蒔いた。赤軍につゞいて勞働組合の行列が動き出した。行列は全市民の熱狂で歡呼の中を練り歩いた。

夜に入つてもお祭り騷ぎはやまなかつた。到る處熱狂の嵐歡喜の叫喚が湧いた。市の大通はイルミネーションに飾られ、ボーリツショイ・テアトルを始め各劇場は割れるばかりの盛況であつた。

六

社會主義國家のメーデーがかくの如き方法で祝福されてゐたと同じ日の同じ時刻に、反動ファシスト支配下の伊太利では、メーデー示威運動の勞働者多數が軍隊の銃劍のために鮮血に染つて斃されてゐた。そこに二つのメーデーによつて暗示される現實の世界のすがたがある。

國際勞働會議

浮田 謙

一

國際勞働會議とは、2プラス2が4になるから、二升と二貫目と合はせれば、四尺にならうといふ、政治家の安易なる錯覺から生れた産物である。間尺に合はぬことのあるのは致し方ない、この錯覺を最も雄辯に物語るのが、"Si Vis Pocom, Cole Justitiam." である。

「汝平和を欲するならば、正義を耕せ」――と、古いラテンの書式で記した羊皮紙を下敷にして、『資本』と『勞働』と『政府』との、三つの礎石がをかれ、アルベール・トーマ氏が音頭をとつて、盛んな地鎭式が、國際勞働局新廳舍のために擧行された。すなはち2プラス2エコール4である。

ウイルソンが巴里で、世界の政治家どもを集めて、『平和會議』をやつてゐた最中、瑞西のベルンでは、國際社會主義者大會が催されてゐた。そして、「すべての人民が、一つの團結を形成して、親密に生活すべきことは、國際社會主義者の多年唱道し來りし根本義の一なる」が故に、國際聯盟の成立については、大いに歡呼するものであるけれども、「人民の意志に基かざる聯盟によつて、これを實現せんとするも、それは到底不可能である。」國際聯盟は「各國の勞働者階級が、全力を竭くしてこれを支持するにあらざれば、十分なる發達を遂げて、その任務を遂行することは出來ないであらう」と、たんかをきつたのである。

なぜであるか。國際聯盟はその時において「人民聯盟」ではなく「國家同盟に化しつゝあつたからである。國際聯盟總會には、各國から三名づゝの代表者が出るが、總會に於ける票決權は、各國一票づつである。すなはち、國際聯盟を組織する單位は、『國家』すなはち『政府』であつて、斷じて「人民」ではなかつたのである。

二

しかし『國家』すなはち『政府』をたすけて、戰爭を遂行せしめた動力が『人民』すなはち『勞働』にあつたるが如く、國際聯盟の成立についても、勞働階級の後援は、かくべからざる要件であつた。そこで頭のいゝ政治家達は、『國際聯盟』といふ政治機關のほかに、『國際勞働』といふ産業會議を設けて、わずかに勞働階級の甘心を購つたのである。これがかれ等の、2プラスの2エコール4の眞理である。

聯盟の組織が問題となつたとき、聯盟總會の代表者は、政治議會・人民の各代表者でもつて充てやうではないかといふ相談もあつた。しかしこの組織方法は、國際聯盟の方では否決された代りに、多少形を代へて、國際勞働會議の方に移されることとなつた。これがアルベール・トーマの誇る『三つの礎石』のはじまりで、『平和のための正義』なのである。

勞働と資本と政府とで、政治機關をこさへるといふ考へは、或る意味に於いて、創造的な組織である。たとへば國家の政治機關として、勞働代表と政府代表とよりなる、强力な委員會をつくり、これに國家政治の大權を與へた場合を想像して見るがいい。議會政治一天張りのデモクラシーに、たしかに一新生面を開くものがあるであらう。しかしこれが産業機關である場合は全然意味がちがふ。それはホイットレー委員會だ。ホイットレー委員會は英國ですでに試驗ずみになつてゐる。これが2プラス2の錯覺の第一である。

第二に政治家の錯覺は『重要物資の生産、分配の管理』なる現代社會において最も重要な問題を、國際聯盟の機能のうちから除いてしまつた。それから『國際勞働法の制定』も、國際勞働會議の方へ敬遠してしまつた。すなはち『政治』から『産業』を完全に解放したのである。産業が政治を支配する時代が、『新社會』への過渡期の特色であることは、カール・マルクスの豫言であり、現在がすなはちこの特色期なのであるが、そんなことは平和會議時代の國際政治家の顧みるところではなかつた。政治と産業とを機能的に分裂せしめて、それで新時代への曙光を空想したのである。

これが國際聯盟がいまに振はない原因であり、國際勞働會議の無意味な所以である。

三

英國に勞働内閣が出來たのは、産業がいよ〳〵政治を支配するに至つたといふ意味で、それで驚く價値があるのである。一

昨年の總選擧で、英國の勞働黨は、はじめて正式に『陛下の反對黨』になつた。尤も保守黨の三百四十六名に對して、勞働黨は僅かに百四十二名で、その間に二百名以上の開きがあるが、それは英國の選擧法が、比例代表の原理を採用してゐない結果で、投票數は、保守黨の五百五十萬四千票に對して、勞働黨は四百二十萬二千票を得てゐる。だから勞働黨がも少し多くの投票を集めることができれば、容易に第一黨の壘に肉迫することができるとは、選擧通の豫想であつた。これが昨年の總選擧で適中したのである。

とにかく勞働黨が第二黨になり、ついで勞働内閣を組織するといふことは、産業が政治を支配する――別の言葉で言へば政治が社會化する――といふ意味で、われわれに非常に興味のある事實である。社會では資本と勞働とが、全力をあげて階級的な産業戰をやつてゐるのに、政治は相變らず自由と保守の爭では、はなはだ不合理な話である。法律の社會化や、教育の社會化や、倫理の社會化が必要ならば、政治の社會化も必要ではないか。政治が社會の支配原理たるためには、第一條件として、自ら社會化しなければならぬ筈であり、社會化せざる議會政治が、『否認』されるのも無理からぬ話である。その意味で、英國の政治鬪爭を、資本と勞働との對抗戰に化した勞働内閣の成立は、政治の社會化の端緒として、大いに『政治』のために祝盃を擧げて然るべしである。

日本の勞働總同盟も、本年の大會において、議會否認の旗印を竿から降して、議會行動をその綱領の一に加へることとした。露西亞革命景氣がよければ、議會主義否認となり、英國勞働内閣いづれば、忽ちにして議會行動促進となるなど丶、皮肉なことは言はぬ。産業の政治支配――政治の社會化の意味において、われ等は大いに賛成である。

四

日本の勞働運動は、昨年の震災以來、しきりに右に動いて來た。右傾ははなはだ結構である。議會主義の是認も、その右傾の一象徴である。これもわたくしは賛成だ。そして右傾した總同盟は、政府が勞働代表の選出方法を一變して、勞働組合を單位としたと聞いて、急に國際勞働會議否認をもひつこめた。これはどうであらう。

尤も日本の總同盟が、國際勞働會議を否認したのは、勞働代表の選出方法が面白くない、從つて眞の勞働代表ではないといふので、棚橋君が國際勞働會議に對する抗議も、たしかこの點であつたと思ふ。だから選出方法が一變されて、代表者の鈴木

君が出れば、なんの苦情があるわけはない。變節でもなんでもない。實に正々堂々たる當然である。

しかし國際勞働會議なるものが、その本質において、何をなし得るであらう。また過去において、何をなしたであらう。そして將來において、何をなすであらう。若し日本の勞働運動が、國際勞働會議に、なにか大したことを期待したとしたら――まさか期待もしまいが、――それは間違である。國際勞働會議は、その本來において、なにかを爲すために創作されたものではない。

だからわたくしは、勞働總同盟の、議會主義是認といふ、右傾的『變節』に双手を擧げて贊成するかはりに、同じ右傾的な、しかも『當然』な國際勞働會議是認には、贊成しないのである。

「鈴木文治もえらいものさ、勅任待遇だぜ」と、或る役人をしてゐる友達は言つた。勅任待遇鈴木文治は、同期生河原田勅任官と、轡をならべて巴里にのりこむ。雌雄の決いづれにありやと、愚にもつかぬことが興味の中心となるのだ、勞働代表選出の方法の變更は、日本の『特殊國』たる一條件を、やつと抹殺したにすぎない。勞働總同盟も、決して意を休んずることは許されぬ。

五

尤も國際勞働會議も、日本にとつては、いろいろな意味がある。

第一に、日本が『特殊國』であるといふことの、皮肉な有力な廣告機關である。日本が特殊國であることは、國内においてこそ、筧博士や上杉博士や、その他有力なる志士の奮鬪によつて、充分に廣告が行き屆いてゐるけれども、海外にまで普く國威を發揚するには、國際勞働會議の如き絶好の機會であらう。會議毎に國家の名譽を發揮して、代表者が萬歳の聲と共に、多くの顧問と隨員とを從へて、賑々しく上陸するのを見るのは、實に愉快な光景である。

しかし『特殊』とは『臨時』のことである。日本は列國をすべて特殊化せざる限り、――すなはち全世界の勞働社會事情を、日本並にせざる限り、――いつかは一般化せざるを得ない。少くとも諸外國と、同樣なレベルまでは降下しなくてはならぬ。これは運命である。或は日本の勞働運動固有の努力によるよりも、この運命の方が先に來るかも知れない。特に勞働立法の方面において、わたくしはこの運命に多くを期待する。この意味で『特殊國』待遇が、一つでも多く生ぜんことを、希望す

ゐるものである。

第二にわたくしは、一人でも多く顧問や隨員を、派遣されんことを希望する。多々ます〳〵辯ずである。日本ほどぞろ〳〵と、いろんな人がついて行く國はないさうだが、それが國際勞働會議の、日本における重大な意義の一つである。資金の乏しい勞働組合にとつては、歐洲視察のいゝ機會であるばかりでなく、有爲なる青年官吏にとつては、歐米の勞働事情に通ずる教育事業となる。大ていの政府隨員は、それを機會として、一年なり二年なり視察見學を命ぜられるやうであるが、まつたく好い習慣である。日本の官吏は、下僚ほど頭がすゝんでゐる。それが國際勞働會議を機緣として、進歩せる歐米社會を研究して來ることは、國民的模倣の時代においては、最も有意義なことである。そして役人生活に、十年二十年を辛捧することができるほどの、驚ろくべき忍耐力をもつ青年が、上局に立つにいたつたときに、日本の勞働立法も、少しは進歩するのである。

かういふ經過で、日本の社會は進歩するものであると、わたくしは考へてゐる。然り『意外』が起らぬまでは。……これが國際勞働會議の意義である。

選擧權を如何に行使すべきか

投票上の自然主義

青野季吉

考へて見ると選擧權を「有効」に行使するほど、困難なことはない。今日の組織から云ふと第一、代議士に何を委せるのであるか、その限界が甚だぼんやりしてゐる。人民投票などといふ臨機の方法は日本に存在しないのであるから、代議士の一存に委せておけない重大な問題が飛び出しても、選擧民は腕をくんで傍觀してゐなければならぬ。一旦選び出したが最後、解散でも無ければ丸四年と云ふもの、全く野放しの姿である。中立が本黨へ早變りしようが、「謹愨」が一夜にして「足輕」にならうが、選擧民中の閑人が玄關に詰めかけてぢかに文句を云ふ位が關の山である。それに問題なのは人物である。「學識」があり「高潔」だと云つたところで、集團的に一緒に働いて十分その値打が分つてゐると云ふのでないから、その「學識」や「高潔」が、どんなところでどう發揮されるか皆目分らない。かう考へて來ると容易に安じて投票箱に近づくことは出來ないわけである。今日の組織にかう云ふ弱點があればこそ、まやかし者が乘り出したり、ぺてんが勝利を占めたりして、果ては所謂「政界が墮落」もし、社會が「議會を否認」もするのである。この弊は、普通選擧でも實施されて、團隊本位の比例代表制でも甘く採用されゝば、大部分は除かれやうが、それまでは駄目である。駄目であるからと云つて選擧權を行使しないわけには行かぬ。「行使するからには有効」に行使し度い。そこで問題になる。

▲

吉野博士はどこかで、靜かな平常の氣持で投票せよ、と云ふ意味のことを勸告しておられたが、全く適切な言葉だと思ふ。總選擧に際して、政治的關心が高まりそれに多少の興奮が伴ふのは自然なことで、寧ろ意義のあることであるが、總選擧は何もお祭りではない。政治屋やボスには盆と正月が一緒に來たやうなものであらうが、一般民衆にとつてはそんな性質のものではない。代議士を選擧すると云ふのはつまり、或る何等かの國家的要求を、それを滿たし得る人に托すと云ふことである。明確な當面の要求のない場合には、自分達のためになる要求を議會で主張する人を選んでおくことである。その意味で云へば極めて靜かに、平常の心境で、選擧に臨む可きである。平常普通の心持では、どんな爭をしてはいけないか、どんなものに迷はされてはいけないかに就いて、判斷に苦しむ人は無い。それがお祭り騷ぎに捲込まれたり過度に興奮したりすると、平素の判斷に狂ひが來るのである。簡單なメカニズムである。そこで飽まで靜かな心であることが必要である。さうなれば警察權力や金力や廣告力や情實やを以つて騷ぎ立てゝ來る候補者が、どんな立派な意見を羅列しやうと、てんで問題とならないことは、容易に判斷が付く。これが凡ての投票の準備である。人を觀る場合には、その云ふ所によつて觀ないで、行ふ所によつて觀よ、と云ふ言葉は總選擧のやうな場合特に有意義である。そこで靜であれと云ふことは、即ち最後まで批判的であれと云ふことである。今日までの總選擧には、感情的な浪漫的主義が基調をなしてゐたが、これからは批判的自然主義を基調とすることが肝要である。

總選擧は總選擧毎に歷史的の意味がある。今回のは言ふまでも無く、清浦內閣と云ふ封建的貴族政治內閣を信認するかせぬかの、「國民」の意志を示す總選擧である。つまり政友本黨に多數を與へれば、清浦內閣乃至その思想的相續內閣を信認したことになり、護憲三派に多數を與へれば、それは不信認を表したことになる。この當面の歷史的意義も選擧民は十分に考慮しなければならぬ。ところで實際に、封建內閣を支持する「足輕」とか「奴隷」とか云はれるものは問題でないとしても、護憲三派と稱するものも決して信用出來た代物でないのは、今日までの彼等の行動がいやと云ふほど證明してゐる。護憲派に多數を與へれば、清浦封建內閣に不信認を表明したことにはなるが、清浦を仆しても「封建」は死なぬのである。護憲派が巨體を現はして、またいつ何時、封建思想の相續內閣を作るか知れ

たものでない。彼れの唱へる主憲主義の信用出來ぬことは、淸浦内閣の唱ふる「廓淸主義」の信用出來ぬと同じ程度である。から考へて來ると、淸浦内閣を支持する政友本黨に多數を與へるも、看板の堂々とした護憲三派に多數を與へるも政治の本質の改更と云ふ點から見ると大した差異はない。ところで新黨派の候補や中立や無所屬はどうかと云ふに、これまた海のものとも山のものとも知れない。選擧のタクチックで中立を裝つてゐるのか、それとも本統の中立なのか、それとしたら政黨の勢力で左右されてゐる議會へどんな計畫があつて入つて行くのか、その邊のことは余程疑問である。中立や無所屬で獨尊をきめ込んでゐる者に碌な者があつた例はないと言はれるのも一理あることである。かう言ふ譯であるから政黨の所屬に重きをおくことは——從來はそれが非常に强く、せめて黨籍でも信じなければ、安んじて投票が出來なかつたのである——今日のやうな狀態では余り意義のあることではない。さうなると結極は、過去の行動や意見の大體を調べて、人間として安んじて事を委せ得る人を選ぶのが最も「有効」だと云ふ譯になる。今日の事態ではまたそれ以外に道はない。而して今度の場合、政黨的に見れば比例代表まで行く徹底的な普選、即ち民權の伸張を圖る人が、最も選ばる可き人であることは言ふを俟たない。當面の封建内閣を仆すとか仆さぬとか云ふことよりも、政治の本質を自由主義の上に移すといふ努力が最も肝要で、意義のある政治的運動はその後である

▲

鄕黨利益本位が實際政治の目標とされてから久しいものでその主犯は言ふまでもなく舊政友會である。從來の政治的頽廢の主因がこゝに根ざしてゐることは爭へぬ事實である。選擧民がこの頽廢を脫却して、國家的社會的の利益本位に立脚することは望ましいことである。政治の本質の改更に役立つ投票は、この立場に立つて始めて可能である。勿論、利害關係の主張を離れて政治は無く、今後ますます集團的の利害關係の主張抗爭が、政治の舞臺に濃厚な色を染め出すであらうし、それがまた自然でもあるが、それと鄕黨利本位とはまた別物である。

それにつれて想起され、且つ選擧民に脫却を促し度いのは、曩に一寸觸れた「議會否認」乃至「議會輕視」の態度氣分である。近來の議會が「動物園」などと冷評されるほど頽廢してゐるのを見れば、否認も輕視も尤であるが、差詰め國家に向つて、要求を提示する最も有利な場所は議會より外には無い。だから議會を以つて、要求の爲めに戰ふ場所として受納すれば、

否認や輕視は余りに消極的である。議會を以つて、自身達のために何事かをして與れる場所と解してゐればこそ、「動物園」のやうな實狀を見聞きしては、否認の氣持にもなり輕視の態度も出て來るのであるが、そこは自分達が代表を送つて戰はせる場所、戰つて何事かを行はしめる場所と解すれば、譯のわからぬ動物などは追ひ出して、本統の人間を送り込むやうに努力するのが本統である。特に現在の如き階級社會では、階級間の戰鬪場としての議會の意義は輕視することは出來ない。最近には「議會の利用」と云ふ方へ思潮が向いて來たが、これは議會の「新らたな一是認」として注目す可き現象である。

▲

最後に勞働階級の有權者について一言して置き度い。日本農民組合大會や總同盟大會組合員有權者の選擧權行使を自由としそれぞれ事情に應じて「有効」に行使することゝ決議したやうであるが「有効」に行使する事は、勞働階級の中から候補者を立てるのが一番よい。準備がないことや、勝敗の數などは問題ではない。負けるに定まつてゐても候補者を立てて、覺醒した勞働者中の有權者は勿論、覺醒しない勞働者中の有權者の一部の投票を集めることは、近い將來の政治活動の修練の上からも必要なことである。最初から勝敗の數を主として、戰ふことを少いながらも集めることを主としないのは、ブルジョアジーの投機的選擧の病毒に感染した結果に外ならぬ。「棄權」の態度を捨てた勞働階級が執るべき道はこれより外にない。若しいろんな事情からそれが不可能とすれば、外側の候補者に投票を與ふる外はないが、その場合には、勿論黨籍などは今日大して問題ではない。その候補者の立場の許す限り勞働階級の利害誠實な、その限りに於て信頼す可き候補者の名を記憶す可きである。之を思想的に言へば、どうせ無産階級の思想を以つて立つてゐる候補者がないとすれば、徹底した誠實な自由主義思想の持主に近づかねばならぬ。政治を自由主義の基礎に移し變へることが、無産階級運動にとつて有利なる形勢を打開する所以であることは、今日の日本の狀態にあつては、特に强調されなければならぬことである。而してかゝる便宜も無い場合、頑迷な保守主義者や、反動的國家主義者の候補者には、止むなく「棄權」を以つて答へなければならない。

棄權する理由

高畠素之

◇

抽象問題として、如何なる人物を選擧するつもりかといふなら、苟くも理想し得る限りの、資格なり要件なりを數へ立てられる。然し現實の選擧戰には或る特定の立候補者があつて、その中から比較的好ましい人物を選擇する習慣になつてゐる限り、どんな理想を描いて見たところで所詮は無駄である。殊に現在のごとき小選擧區制の下にあつては、無駄の程度が最も極端である。それも多少の注文はづれならまだ我慢のしようもあるが、多くの場合『清き一票』の方から、ずゐぶんお釣りを貰ひたいやうな代物をも、餘義なく選良として入札せねばならぬとあつては引合はない。然し選擧區制がどうのかうのと、季節離れのした普選屋並みの口上を述べたところで、目前の選擧がその範圍で行はれることに決定されてゐてみれば、善惡に拘らずこの局限された條件內で考へを進めるしかない。

◇

知る人の知るごとく、拙宅の所在地は本郷千駄木町で、有權者としては東京府第九區に屬してゐる。然るにこの選擧區ばかりはどうした加減か、目下のところ中原德太郎氏が立候補を宣言した以外、誰一人として我こそはの名乘りを上げてゐる者がない。將來はどんな理想の人物が飛び出すか知らぬが、少くとも今日（四月六日）までの事情は右の通りである。從つて比較的優良候補を探す術もなし、もし選擧に對する態度を强ひて決定する必要があるとすれば、中原氏を投票するか或は棄權するか、二つに一つを選ばねばならぬことになる。

そこで兩者の何れを取るかといはれるなら、明白に後者だと答へるつもりである。更にその理由はといはれるなら、答辯は

至極に簡單である。簡單だといつても、無競爭の候補者を特に投票する必要がないとか、憲政會公認だから毛嫌するとか、代議士たるべき資格が取立てて不足だとか、さうした尤もらしい根據からの意味ではない。ただ幸か不幸か彼が私立日本醫學專門學校の校長なるが故に、敢て棄權せんとするのである。簡單といつて凡そこれぐらゐ簡單な話はあるまい。

◇

地縁的關係を重んずる現在の選擧人感情からすれば、同じ町内にある日本醫專の校長を擔ぐのが至當であらう。ところがこつちの言分にすれば、それが全く逆な話になつてゐるから助かるまい。日本醫專には何の恩怨もないとはいひたいが、實は甚だしく恩怨を感じてゐるのだ。

卅これも知る人の知るごとくだが、拙宅は千駄木の高台ともいふべき位置に建てられてゐて、家賃の餘り高からざるに比較し、眺望絶佳と自讚してもいい程の見晴らしがある。谷中から上野へかけての模糊たる森を眺めて、一服の煙草を心ゆくまで喫ふは又なき慰樂である。惜しい哉、南方の一角だけは二丁の窪地を隔てて、日本醫專の校舍に面し、眺望の全部が阻まれてゐる。時あつて眼底に映するペンキ塗建築の存在を恨みとする日が多い。取りも直さず、これが日本醫專に好感を表し得ざる一面の心理である。

◇

牛込界隈に早稻田臭味があり、三田界隈に慶應臭味があるやうに、千駄木町界隈が甚だしく日本醫專臭味の濃厚なるものがあることは免れ得ない。その免れ得ない臭味に閉口するのである。

本職的たると内職的たるとを問はず、千駄木町界隈の下宿屋が醫專生徒を第一の華客としてゐるのを始めとして、飲物屋や喰物屋もこれに準じてゐる。皆が皆といふ譯ではなからうが、目擊した範圍内に於ては驚ろくべく上品と反對の連中が多い。その連中によつて醸される雰圍氣の、如何に有りがたくないものであるかは説明するまでもあるまい。トンカツ屋で隣のテーブルから、見堺もなく片言交りの獨逸語なんかで話しかけるのは、定つてこの連中に限られてゐる。馬脚を露はした末には、グルツペになつて飲みませうなどといふ手を喰はせるがオチである。

プロレタリア文士などが覺え立ての社會主義智識をヒケらかしたがると同じく、一つ覺えの獨逸語を鼻に掛けたがるも愛嬌

には相違なからうが、さりとて絕對に尊敬する氣にはなれない。そんなことから日本醫專をグルッペ學校と呼んだり、その生徒をグルッペ書生と呼んだりする隱語も出來た程だから、爾余のところは推察に委せる。

◇

勿論、日本醫專が書齋の眺望を故意に邪魔しようとして、校舍を建築した譯でもなからうし、生徒に片言の獨逸語を自慢させるために敎育してゐる譯でもなからうし、よしんばそれが事實であつたとしても、中原校長の全責任といふまでにも至るまいといふのは理窟である。然し世の中には理外の理といふこともある。これをもう少し平面的にいへば、坊主と袈裟との有機的關係といふことにもなるだらう。あんな學校の校長なら、誰よりも御免蒙りたいといふ感情の存在し得ること、選擧民心理の一例として參考に供するだけでも、棄權する理由は立派に成立し得よう。

もし選擧權といふものが、納稅義務を負擔した代償としての引出物と考へられるなら、有効とはいへないまでも氣の利いた行使方法が幾らでもある。その最も野蠻な方法は、勝敗の大勢を眼中に置かずに、自分の理想とする人物を記名して、文字そのままの『淸き一票』の空彈を放つことであり、その最も肩の凝らない方法は、根津八重垣町の住人中山啓でも投票して見ることである。それにしたところで、醫者としては玄人だが政治家としては素人なことを賣物にしてゐる人間に投票するよりは、遙かに意味のあるものといつてよからう。

◇

然し翻つて考へて見れば、意味のあることといふのも、實は積極的にか、自己滿足を享樂する範圍だけでの話である。動かさなくてもいい無用の兵を動かしたばかりに、折角の理想的人物を戯畫化するのも埒のない業であり、冗談から駒を出して血の氣の多い若い者をケシかけるのも、聊か罪の深い細工である。無難といふ點からすれば愼しむに越したことはあるまい。愼しんで棄權するのである。

尤もこれは現在の條件を動かぬものと假定しての立論であるが、今後現はれるであらうところの候補者の顔振れ如何によつては、必ずしも棄權と態度を決してゐる譯ではない。ただ今日までの狀況のごとく、中原候補のみの獨擅場的な潤歩に委せてゐる本郷區の有樣であつて見れば、比較的優良候補者の自由選擇もならず、さりとて中原候補に投票しようとするだけの熱意

もないから、寧ろ棄權するに如くはないと考へるのみである。從つてより快心の人物が現はれたならば、投票場に馳けつける勞力と時間を惜しまうとも思はぬ。然しそれもこれも五十歩と百歩の相違なら、潔よく棄權することも同斷である。

普選實施後の問題だ

西尾末廣

一

選擧權を如何に行使すべきかといふ問題は、我々勞働組合員に取つてたしかに重大な問題であるけれども、それは昨年の末、勞働總同問の議會對策委員會で取扱つたやうに、普選實施以後に於ける問題であつて、來る五月の總選擧の問題にはならないのである。農民組合の方では、第三回大會に於て、五月の總選擧に際して如何なる態度を執るべきかの問題に就いて、議論が紛糾した模樣であるが、農民組合の方は、現下の選擧法の下でも相當の有權者數を有し、且つ普選に近いところの村會及び縣會の選擧に就いて幾分の經驗を持つて居るので、來る五月の總選擧に際して、選擧權を如何に行使するかといふ問題が、議論に上るのは當り前だと思はれる。

然しながら勞働組合は此點に就いて、農民組合とは多少事情を異にしてゐる。第一、普選實施以前に於ては、勞働組合員にして有權者であるものが、殆んど言ふに足らぬ程少數である。だから選擧權を行使しやうにも無い袖は振られないのである。現在、地方立法機關の選擧權は普選に近い程擴張されてゐるけれども、勞働組合員には、農民組合員のやうに之に關與した經驗もないし、また實際に於て其の可能性も稀薄である。例へば地方の一村落に於て、農民組合の基礎が相當に強固であれば、これを背景として相當數の村會議員を選出することは大して難事ではないが、東京市や大阪市に於て、勞働組合を基礎として相當の數の市會議員を出すといふことは、殆んど覺束ない話であ

る。以上述べたやうな種々の理由からして、勞働組合は農民組合にくらべて、政治行動に對しては可なり愼重な態度を執るやうになつて居る。

二

勞働總同盟は、普選促進運動でさへ此の二三年來之を行はないことになつて居る。これがために我々は、恰かも政治行動を否認するものの如く誤解された。昨年十一月、總同盟の中央委員會が選擧權行使に關して發表した聲明書に述べたやうに、我々が普選運動をしなかつた理由は、勞働組合が議會によつてのみ勞働階級の解放を圖るといふ輕薄な政治的傾向に毒せられざるがためと、勞働組合が其の基礎を充實する必要があつたためである。我國の勞働組合が、今日漸く其の基礎を築くに至るまでには、可成りの惡戰苦鬪を嘗めて來てゐる。我々が種々な迫害や誘惑と戰つて、戰鬪的勞働組合の基礎を確立するがためには、他の事には餘り手を廣げないで、一意專心勞働組合の充實に沒頭する必要があつたのである。農民組合は勞働組合に比較して、今日までの發達過程が順潮であつた。農民組合よりも逆境に處して來た勞働組合が、組合運動意外の運動に對して、自重の態度を取ることも亦必然の現象と云はねばならぬ。勞働組合員であつて、何々勞働黨に入つたり、ブルジョア政黨の下廻りをするやうな連中も大分飛び出しはしたが、あくまで勞働組合に立て籠つて、潔癖すぎる程其の他の運動に對して冷淡であつた者が、今日では最も建全な勞働組合員となつてゐるのである。此の點に就き私は我々の過去の潔癖を肯定するものである。

三

然し今や勞働組合の基礎も確立して來て、勞働組合がモツト廣い眼界でものを考へてもよい自信が出來て來たから、我々は議會行動に就いても考慮を拂ふやうになつた。前述の聲明書の中で此の意味を次の如く語つて居る。

「されど今や普選實施も近き將來にあつて勞働階級が經濟鬪爭の外に政治鬪爭の機會を與へられんとするを以て、我等が勞働階級解放のために、此の新しき戰線をも有效に利用すべきは勿論なりとす。故に我等は普選實施後に於て、議會行動を利用するを至當と認め、選擧權を行使するを妥當なりとす。」

次の問題は、選擧權行使の具體的方法如何であるが、此の問題の決定はそんなに慌わてる必要もないので、これがために特別の機關を設け、愼重に考究することとなつた。聲明書によれ

ば「而して勞働組合が積極的に政黨を組織すべきか否か、若し組織すべしとせば其の方法如何。若し又否とすれば投票權は如何に行使すべきか。また立候補者の選定は如何にすべきか等の諸問題の決定は、之れを愼重に考究すべき必要あるを以て、中央委員會は議會對策委員會を設け、右の任に當らしむることとせり」と述べて居る。右の議會對策委員會は其後解散して、第十三年大會は、新たに本部内に政治部を設けることを議決した。政治部は各地方同盟會内にもそれ〳〵設けられ、此等の機關が互に協力して、目下問題の考究に當つて居る次第である。

四

總同盟としては、選擧權行使の問題は普選後の問題であるから、五月の總選擧に對しては絕對傍觀の態度を執るより外はないけれども、其他の勞働組合、農民組合、更に一般無產階級、無產階級に同情ある知識階級に對し、私一個の希望をいへば、普選實施以前に於て選擧權行使を問題にせさることである。それまでは議會行動をブルヂョア諸政黨の大臣椅子の奪ひ合ひに一任して置いて差支ないと思ふ。無產階級は議會行動に就いて、十分の準備と敎育を重ね、普選實施を待つて、徐ろに議會行動に乘り出しても決して遲きに失することはない。殊に我々勞働組合員に取つては、議會行動の準備と共に勞働組合の牙城を彌やが上にも固めて行かねばならぬ。勞働組合の基礎勢力を確立しないで、議會行動に浮き足になつた日には、忽ち小股を掬はれる破目に陷るのである。我々勞働組合員としては、何んといつても堅牢な勞働組合の城壘を固めることが、あらゆる運動の第一前提である。勞働者がどんな運動に加はるにしても、先づ勞働組合の足場を持ち、しつかりした勞働組合の背景的威力に依つて我々の主張を貫いて行くのでなければ、到底勞働者の完全な發言權は行使出來ないのである。我國の勞働運動發達の日が尙ほ淺く、組合の基礎が申分のない程確立されて居るとはいひ難い今日の事情に於て、しかも先進國の社會思潮に刺激せられて、大急ぎで進まねばならない立場にある我國勞働運動の特殊性から見て、私は選擧行使の問題に就いても、特に組合充實の必要なることを痛感するものである。

候補者選定の政治的準則

板倉卓造

其人格識見に於て、今の米國に第一流の老政治家と尊敬せらる〵エリユー・ルートの名言に、凡そ世界に於て最も有效にして且つ最も有益なる政治教育は、米國にて四年毎に一回行はる〵大統領の選擧である。大統領の選擧に當つては、約一千五百萬の投票者は、選擧の行はる〵前數箇月に亘つて、國家の重要なる問題に就て、讀み、聽き、研究し、考慮し、討論して、國民各自獨立の判斷を決する。此獨立の判斷を決する爲めに、其讀み、聽き、研究し、考慮し、討論することに依て、國民に對して大なる政治教育の機會を供するものである。或は大統領選擧は、財界に非常なる打擊を與ふるのみならず、餘り頻々と行はる〵の煩に堪へずとて、之を非難するものがあるけれども、併しながら凡ての財界の安全なる基礎は何であるかと問はゞ、國民をして政治問題に對して、健全なる判斷を與へ、端嚴なる自制心を有し、且つ之に通曉することを得せしむる所以の堅固なる土臺に外ならない。而して其土臺を築くものは、此選擧に依る政治教育にこそ其最有力なるものであるから、財界の爲めには、是れほど有益にして重要なるものはないと云はねばならぬ。或は大統領選擧の爲めに、莫大なる運動費を調達し、之を濫用するの弊を云々するものがあるけれども、政治的見地よりするときは、凡そ金の使ひ方に是れほど有益な方法はない。最近の大統領選擧に費やされた費用を、米國民の一人當りに割當て〵見れば、僅に米貨三仙半に過ぎない。斯る安價なる費用を以て、斯る大なる教育を與ふるものは、他に其例を見ない所であると、選擧の政治教育的價値を重大視してゐる。

ルートの此言は、幾年か前の著書中に發見せらるるのであるから、彼が今も尚ほ之を信ずるものであるや否やは、余の知らざる所である。併し彼の此選擧に對する政治教育觀が、樂觀に偏してゐる嫌あることだけは、之を斷言するを躊躇しない。大

統領の選擧は勿論、米國に行はるる一切の選擧競爭に於て、有らゆる虛言が行はれ、陰險なる策略が用ゐられ、離間中傷、讒誣陷穽至らざるなく、選擧區に全國、全州、全町村を擧げて、一時に政界の道義を廢頹せしむるの觀あるは、爭ふことを得ない事實である。隨つて政爭の激烈なればなるだけ、各派競ふて得手勝手の宣傳を試み、極端なる人身攻擊にも及ぶを以て、國民は其政治問題に對する公正なる判斷を誤まり、候補者の選定に迷ふの結果、其投票は國民の意思を嚴正に表示したるものと認むるを得ないことゝ爲る。果して然らば選擧は國民に對して必ずしも有效有益なる政治敎育の機會を與ふるものではなくして、却て政治敎育を毒するものと云はねばならぬ。而して此論結は日本の選擧の實際に、一層その適切なるを見る。

余は敢て日本の選擧競爭を以て、世界の何れの國よりも劣惡なるものであるとは云はない。否な日本よりも數層劣惡なる國は多々ある。併し夫れは今これを論ずる可き問題外である。日本の選擧競爭に於ても、各派が故意に政治問題の眞相を惑亂して、國民をして其公正なる判斷を迷はしめ、且つ其候補者の選定を惑はしむるの事實あるに就ては、其投票を國民の眞純なる意思の表決たらしむる爲めには、學界その他の權威ある批判に依て、輿論を指導することの望ましき所であるは云ふまでもなく、若し米國オレゴン州に多年行はれてゐるやうな、リフエレンダムの際、係爭問題に關する賛否兩論を對照併記したる印刷物を、公費を以て無代配布するの方法にても採用せられんには其の效果の著大なるものある可きを信ずるものである。然れども此事たる固より容易に其實行を望むこと能はずとすれば、余は每度の衆議院議員の選擧に於て見る日本の投票者の謬見に就て——然も有識者の間にも行はるゝ謬見に就て、一二の要點を訂正して置きたいと思ふ。

衆議院議員の選擧に際し、投票者が其有する一票を投ず可き候補者の選定を、人物本位の標準に據るのが、殆ど一般に行はるゝ例である。即ち多數の候補者の人物を比較して、其最も優良なりと信ずるものに、其一票を與ふることが、選擧の政治的良心に適するものとするのである。此人物本位の標準を、西洋にても之を「最上人物の說」と稱して、普通に行はるゝ所である。余は之を以て全然取るに足らざる謬說とは云はないけれども、候補者の選定に關する準則としては、之よりも更に一層重要なる考察を加ふ可き他の一事があることを指摘せねばならぬ。蓋し政治は本來人民自ら直接に行ふ可き筈のものであるから、古代の雅典に於けるエクレシヤの如き、瑞典に於ける古來のランヅゲマインドの如き、若しくは米國ニュウ・イングラン

ドの地方に於けるタウン・ミーチングの如き、一國又は一地方の住民總體の集會にて、其政治を決するのが、所謂『民意政治』の本義と認む可きものである。然るに國土廣く、人口多く、社會組織複雜にして、人民の利益關係單一なるを得ざる實際の事情に鑑み、國民直接の集會を催うすこと不可能なるの結果、玆に代表と選擧の二制度が創設せられたのであつて、畢竟已むを得ざるに出でたる便法に外ならない。故に選擧に依て代表者を定めるのは、人民が間接に政治を行ふの意であれば、其選擧に於て、各人の投票せんとする候補者の選定は、自己に代りて政治の局に當るものを發見するに在るのであるから、其選定の準則は、第一に自己と政見を同うするものを見定めることが、本來の本義でなければならぬ。果して然らば候補者の政見如何を先づ檢することなくして、單に其人物の良否を本位として投票を決するのは、政治の本則に反するものと云はざるを得ない。是れ余が普通に行はるゝ人物本位の說を、無條件にて是認すること能はざる所以である。

然らば自己と同一政見の候補者を發見するの方法如何。其最も簡單容易なるは、候補者の屬する政黨を知るに在る。依て或政黨の政見が自己の夫れと合致するか、又は最も接近するもののあるを發見するときは、其黨に屬する候補者に投票するのが、即ち政治の本義に適ひたる選定法であつて、若し候補者にして、人物に於ても亦優良のものならんには、之を目して理想的候補者と云ふのである。然るに(一)選擧の實際に於ては、往往何れの政黨にも黨籍を置かざる候補者が現はれることがある。又(二)何れの政派の政見も自己と合致しないことがある。此場合に各自の投票を如何に決す可きやと云ふ問題が起る。

(一)は即ち所謂無所屬中立の候補者である。此種の候補者は每度中正不偏を標榜するのが其定まれる常例である。然れども彼等が如何に高遠の理想を懷き、如何に名論卓說を喋々するも、政黨に屬することなくしては、其名論も理想も、之を實際に實現するの手段を有せざるものである。凡そ政治は實行であつて、空論ではない。如何となれば投票は國民が之に依て自ら政見を實行せんとする一手段に過ぎないからである。或は中立議員は、諸政黨の間に介在して、所謂キヤスチング、ヴオートの運用に依り、能く其政見を行ふことを得べしとは、屢々聞く所であるけれども、內外の實例に於て、中立議員ほど無力のものはない。假りに所謂キヤスチング、ヴオートを巧に利用し得たりとするも、其獨立の政見を實行する爲めには、極めて迂遠なる手段である。政治は實行にして空論に非ずとすれば、政黨の力に賴るに非ざれば、決して之を期待することを得ない。如何となれ

ば議會の議場は多數決に依る事を決するのであるから、味方の多數に賴ることなくしては、何事も其實行を企圖することを得ないからである。是れ余が中立候補者を排斥する所以である。

(二)若し夫れ今の政黨中何れも自己の政見と合致するものなきが故に、投票を棄權すると云ふの說に至つては、有識階級の間に、最も能く聞く所である。然れども今の政黨に屬するものと雖も、各人悉く政見の一致を見たるが故に共行動を共にするのではない。小異を棄てゝ大同に就き、以て其主義政見を自己の所信に最も近く行はんことを期するに外ならない。人心の異なるは猶ほ其面の如し。自己の所信と全然一致したる味方を求めんとするが如き、人事の實際に望む可からざる所である。故に投票者の期す可き所は、成る可く自己の主義政見に近きものを選定し、之をして其志を遂げしむることに依つて、自己の主義政見の比較的その理想に近く行はるゝことを以て滿足するの外はない。其人にして若し途法もない空想家でない限り、自己の所信に接近せる候補者を發見することは、決して難事ではない。政黨の政爭に超越したるが如き態度を以て得たりと爲し、投票の棄權を以て一見識と考ふるものあるを見るは、要するに政治に理解を有せざるの結果である。

更に最も普通に行はるゝ一謬見として、投票者の心理が、一般に其選擧區の出身者たる候補者を歡迎して、所謂輸入候補者を排斥するに在ることを指摘せねばならぬ。又候補者自身も其選擧區を求むるに、多くは自己の出身地か、然らざれば其地に何等かの緣故を手賴るを以て常例とするのであるが、畢竟代議士を以て其選擧區の代理人とするの誤解に由來するものである。投票者が候補者の人物を判斷し、又代議士をして地方民の要求に適ぜしむるが爲めには、候補者が其地の出身者たり又は其住民たることが、最も好都合であるに相違はない。然れども代議士にして一旦選擧せられたる後は、其人は其國の代議士であつて、其選擧區民の利害代表者ではない。此差別たる英國に於ては、エドマンド・バークの選擧區ブリストル市民に對する有名なる演說以來、佛國に於ては、ガムベッタの小選擧區制に對する猛烈なる反對論以來、既に久しい問題であるが、代議士を以て各選擧區民の利害代表者視する結果、選擧區民が其代議士に對して、各自の地方的繁榮に努力することを期待するのは、議會制度の行はるゝ大多數の國に見る通弊であつて、獨り現時の英國のみ其例外に屬するものである。殊に地方の發達及び繁榮が、常に國家の保護と助成に待つこと最も多き國に在りては、此弊一層極端にして、國家の利益を犧牲に供しても、尙ほ自己の地方的繁昌を圖らんことを、其代議士に求め、代議士

亦これに應じて議會の內外に奔走するの事實は、固より日本ばかりの特有の現象ではない。米國の如きは其弊の最も著しいものであつて、又佛國に於ける小選擧區制の固有弊として多年痛論せられた所である。小選擧區制は慥に此弊毒の釀成者であるが、原則として小選擧區制を採用せる英國に於て、殆ど全く此弊風を認められないのは、其特有の制度に依ることであつて、他國の容易に倣うことを得ない所であるとするも、今日の英國人が、選擧に關する政治的理解に於て、代議士を以て選擧區民の利害代表者視するの謬見を改めたるの一事は、同じ小選擧區制を採用せる日本の選擧界が、假りて以て貴重なる範例とせねばならぬ所である。即ち投票者が其候補者を選定するに、自己の選擧區の出身者もしくは緣故者を歡迎して、所謂輸入候補者を排斥し、動もすれば選擧民の愛鄕心に訴へて、感情的に投票者の心理を動かさんとするのは、到る處に見る慣用手段であつて、選擧運動としては頗る有效なるには相違ないけれども、斯の如きは一に代議士を以て選擧區民の利害代表者視する積年の謬見の致す所であつて、適材を求むる範圍を自ら狹うするものと云はねばならぬ。余は敢て輸入候補者が常に出身候補者よりも優れたるものと云ふのではない。無意味に且つ感情的に輸入候補者を排斥することが、代議士の本分に關する誤解より生じ、然も其弊の重大なるに鑑み、誤解の由來する所を明にして、候補者選定の準則を示さんとしたるに止まる。

不投票ストライクの價値と投票の要件

杉森孝次郎

この際、選擧權をどう行使すべきかと問はれて見ると、棄權のかたちに於けるストライクの價値が、先づ問題として意識さ

れる。抽象的に、すなはち、原則的に理解される選擧權は、現代人にとつて、決してつまらない、無關心をあたひする どう扱はれたつていいものではあるべきでないがゆゑに、具體的に、すなはち現實的に行使される選擧權は、不行使のかたちに於いて最も善く行使される可能が、絶對では當然ありえない。

自選擧區の立候補した人のすべてが、あまりに酷に自己の現在の政治意志を代表する資格に缺けてゐると、自己が正直に、眞實に、切烈に判斷し且つ意識した場合の如きも、棄權最善の一とつの場合たりうる。最低限必要ともいふべきほどの確信も成り立たずに、なほかついい加減に投票することは、あきらかに選擧權に對する不敬であり、不忠である。しかも、かやうな場合は、事實、またこの際、ありえないとは、なに人も、再考をまたずして、斷言し得ないと斷言し得るはずだ。

直接に國政を代議する人が、直接には國内から選出されず、國内の一小部分的地方から選出される制度的制限だけでさへもが、自由な、すなはち、有意義な投票を、しば／＼、絶望的程度にさへも困難にしうる。

責任意識にもとづく／＼棄權をば、無責任な投票よりも輕度の不完全とみとむべき理由は、勿論、上記以上の内容を持つ。

考慮しうべきすべての關係、すなはち、利害得失を考慮した結果として、不棄權を選擧する場合が、この際、當然ありうるとすれば、その場合は、政局をすこしでも進化的方向に誘助する意味の投票に限られる。

現在の既成政黨に附屬すべくあまりにたつとい政治意志の持ちぬしたる候補者が、幸ひにして自區内に見いだされたならば、この際の通則としては、先づその人に投票すべきだ。

既成政黨に屬してゐようが、ゐまいが、或る特殊の政治的必要をすぐれて有能に滿たしうる人を知つて、その特殊の政治的必要を達成する目的に於いて、その人に投票するといふことも、無論、選擧をあたひしうる一とつの場合だ。たとへば、對露問題に關する卓能者を知り、對露問題の非常重大性を知り、その卓能者がたま／＼自區の一候補者であることを知るならば、その人は、かれに投票すべき理由を有しうる如くに。

しかしながら、一とつの重要なる政治問題に關してだけでさへ、眞に國民の代表たりうるほどの智見、技能を有する位の人は、事實上、現在のわが國の場合に於いては、既成政黨の一附

屬者たる位置をば保有しないにきまつてゐると判斷される理由がある。

段々と割り引きして、既成政黨内に投票さきを選擇することを條件とする段になれば、この際としては、その投票さきは、先づ憲政會だ。それから革新クラブあたりだ。

先づ憲政會といつたわけは、それが、數量的に在野の最大黨たる現勢だから、一とたび政權をそれに移し、そして憲政會も、本質價に於いては保存を甚だ貧しくあたひするもの、ほとんど全然あたひしないものであるがゆゑに、成るだけ早く第二の新陳代謝の準備を熟させて、それをして、自然、當然、まもなく往生せしめる方法價が意識されるからだといふにある。

武藤氏の政黨は、それがまだ既成でない點と、政治職業者に通有の不良性をまだ發達させてゐない點と、封建時代的政治意識の迷信と卑屈と虚僞とを――經濟組織觀を別として――比較的に脱却してゐる點とに於いて、實に、既成政黨を助けるよりは、識者の純眞なる公的動機にもとづく援助をまだしもあたひする。

眞實の生産者の社會價と、人格價との意識に於いて、勞働階級、小農階級、水平階級、屬領階級のために正義を主張する人を候補者として立て、その人に投票する現實の可能がある限り、國民は、この際、勿論、この可能に對しても、出來るだけの知と勇とを示すべき當然的理由がある。

青衿の女

長田幹彦

東亞興業の常務をしてゐる田澤は、その日の午後、會社の方の所要で、海上ビルディングの五階にある、武藤の事務所へやつて來たが、要談がすむと、話好きな彼のことゝて又例の女道樂の話をはじめて、ついうかうか時を消してしまつた。壁にかけてある大時計が四時を打つ音で、彼は驚いてやつと歸り支度をしながら、

「やあ、もう四時か。どうも今日はすつかり話し込んでしまつたなあ。」と、云つて、折鞄をかゝへたまゝ、「だが武藤君。今の話はほんとうかい。こんな堂々たる丸の内の大ビルディングの中で、さういふ悪事が行はれようとは一寸想像出來んねえ。ちつと何うも眉唾ものだねえ。」と、いふ。彼は四十といふ年にしては何處か、顏の色光澤もよく、さういふ階級の人間によくある若々しい唇をもつてゐた。

武藤も椅子から立つて來て、

「いや、僕もまだ當つては見んがね、併し一寸聞き込んだことがあるんだよ。兎に角君は斯道の猛者だから、序に探險してみるさ。はゝゝゝゝ。何んなら給仕にでも案内させようか。」

田澤は片手で壁を塗るやうな格好をして、

「いや、恐入ります。何分にもお膝もとぢやあとが恐いからな。はゝゝゝゝ。いづれまあ、君達の御報告を樂しみにして待つてゐよう。いや、どうもお邪魔をした。それではどうか先刻の件はよろしく。」と、彼は鷹揚に挨拶をして、それなり扉を開けて外の廊下へ出た。

田澤は今日は社の自動車が專務を送つて大森まで行つたので、京橋の本社からぽつぽつ歩いて來たのであつた。で、これから又東京驛まで歩いて、そこから省線の電車で中野の自宅へ歸るつもりにしてゐた。

彼は其儘眞直に廊下を行き盡して、エレベーターのところへ

出ると、丁度出合頭に下りて來た奴があるので、それへ乘つた。もうこゝへ勤めてゐる連中はそろそろ退けるのでエレベーターは可成混雜してゐた。襟もとを態と開けた白粉臭い女事務員も四五人、若い會社員の間で揉まれてゐたが、それをみると田澤は今の武藤の話を思ひ出して、急に妙な心持ちになつて來た。かうした女達の中には金で貞操を賣るものがある。それも不思議な手蔓で、こゝのエレベーターの下にゐる靴磨きの親爺が媒合をするのだといふ。田澤は親がゝりの時分から藝者遊びは無論のこと、遊蕩の巷ではあらゆることをして來てゐるので、此頃ではもうそれにも飽きて、何か新しいもの、珍しいものが欲しくて耐らないのであつた。彼は此頃では何處へいつても若い職業婦人達が眼についてならないのであつた。ハイカラで、しやんしやんしてゐて、何處かから初心な、素人臭いところのある若い女が耐らなく彼の好奇心を唆るのであつた。あゝ云ふ連中は何んとかなりさうなものだと常から機會を求めてゐた。

田澤は四五人の女事務員の中で、一番若い女の襟脚のところをそれとなくみてゐると、エレベーターはすうツと第一階へ來て止つた。彼はなるべく女達の方へ體を摺り寄せるやうにしながら外へ出たが、とみると、平常は少しも氣づかなかつたが、成程向ふの隅のところには靴磨きの椅子が置いてある。化粧品の廣告を刻つた木の衝立てのやうなもので後を仕切つてあつて、その前には脊丈の低い、頭の禿げた、もう六十近い親爺が窓の方を向いて、しよんぼり立つてゐた。

田澤はさすがに一寸躊躇つたが、すぐに腹を極めてつかつかそつちへ歩いていつた。その靴音でその親爺は客と知つたか、此方を向いて、ぴよつこり頭を下げた。その段取りが極めて自然にいつたので、田澤は何の苦もなく椅子へいつてさも物臭さうにどかりと腰を下ろして、いきなり兩足を前の支へのうへ載せた。

親爺はもそもそ靴油や、布や、ブラッシを出して、やがて仕事に取りかゝつた。その樣子は何處か無愛想で、女の取持ちなぞをしさうにも思はれない。田澤は何うするかと思つて、心の中では稍失望を覺えながら親爺のするがまゝに任せてゐた。

その親爺はよくみると、もうたしかに六十二三にはなつてゐるらしかつた。ボロ洋服のうへから厚い前懸けをかけて どうみても活動寫眞に出てくる靴屋の親爺である。頭は眞中だけ禿げてゐて、兩側から後頭へかけて白髮がショボショボ生へて、寸のつまつた、いかにも好々爺らしい顏つきをしてゐる。その他に此れといつて特徴もないので、田澤はますます呆氣なさを感じて來た。

すぐ彼の前ではエレベーターがすうッすうッと上つたり下つたりしてゐる。その都度に幾人かの人が下りて來るので、田澤は何んだか極りが惡くなつて來た。ひよつとして變な噂がビルデイングの中で流布してゐるとすると、今頃こゝへ腰をかけてゐる自分を皆は何んと思ふであらう。さう思ふと、うへから下りて來る人が皆自分の顏をじろじろみていくやうな氣さへしてくる。

少し人足が途絶えたと思ふ頃に、親爺はせつせと左の靴を布でこすりながら、突如に、

「旦那。今日は何んだか雪にでもなりさうだね。」と、いふ。その言葉には茨城あたりの訛があつた。

田澤も仕方がなしに、

「うむ、寒さが酷いから、今夜あたりはちらちらやつて來るかも知れんなあ。」といふ。

親爺は顏をあげて、にやりとしながら、

「旦那。今頃あんた靴を磨いてどうするだね。これから眞直にお邸へ歸んなさるだらうに。」と、いふ。

田澤はこゝだと思つて、態と口尻を曲げて笑つてみせながら、

「いや、今夜はこれから寄合へ廻るんだ。どうもお茶屋の玄關先へいつて、泥だらけの靴はぬげんからなあ。はゝゝゝ。」

「ふんとだよ。これで旦那方の寄合ぢやさぞ大變だらう。寄合だけで濟みやえゝが、歸りにや又二次會の何んのとそれこそえらい散財だ。まあ、精々よく磨いとかう。靴磨きなんざ幾らもかゝらにやあからねえ。はゝゝゝ。」

「おほきにさうだよ。此方どらのやうな安月給取りは一度寄合へいきや一月分の月給位は譯はないからねえ。と云つて、偶にや女の顏をみながら酒のひとつとも飲み度しさ、實にどうも情ない浮世になつたもんだよ。」

親爺は靴の底を拂ひながら、

「今夜は何處だね？」と、訊く。

田澤もさぐりさぐり、

「今夜は新橋だ。歸りは赤阪か。それでものゝた十圓は默つて消えてしまふんだからねえ。實に料理屋や、待合位馬鹿々々しく金のいるところはないね。せめて十圓位で上がる遊びでなけりや、とても我々には手におへんよ。はゝゝゝゝ。」

親爺はぢろりと四邊の人影を見廻はして、茶色をした瞼を上げながら、

「旦那、あんた女と遊ぶだけならえゝのがあるだよ。何うだい、私に任せにやあか。十五圓出しや、素人でえゝのがあるで

ね。」と、眉を潜めていふ。その時にふとみると、その親爺の手は兩方とも蟹の足のやうに五本の指が妙な形に固着して動かないのであつた。先刻からどうも指の扱ひ方が變だと思つてゐたが、田澤はその時になつて初めてそれと氣がついたのであつた。

　田澤は急に道樂者らしい口調になつて、

「だつて、小父さん。お前、さういふ玉は今日が今日つていふ譯にやいくめえ。それに素人つていふ奴は食はせものが多いんで、俺は嫌ひさ。」

　親爺は眉を顰めて、

「何にさ、そんなこたあるもんか。これから私の家へさへ來て呉れゝば、私が歸りに寄つて女を誘つていくだよ。譯はにやあよ。」と、いふ。

　田澤は少し乘り出して、

「ふむ、そりや耳寄りな話だな。それがほんとならひとつ頼まうか。宴會なんさ、さうなりやふいさ。は、、、、。面白いね。小父さんの家は何處だい?」

「今書いやるから待つてゐなさい。もうぢき濟むから。」と、云つて、親父はそのまゝ又神妙に右の靴を磨きながら、「そのかはり前金に五圓出すだよ。」と、笑ひながら云つた。

　やがてすつかり磨き上げてしまふと、親爺はその手を拭きもしずに、例の變な手つきで隅の方へいつて、罫線をひいた柄にない手帳の切れつ端へ、何やら鉛筆で書いてくれた。その字も相當に讀める字で、下谷區阪本町二の一松島千代吉と二行に書いてある。親爺はそれを小さくピリツと裂いて、それとなく田澤に渡しながら、肩で田澤を抑すやうにして掌を上へ向ける。田澤も磨き賃を拂ふやうな顔をしてズボンのポケツトから六圓だけつかみ出して、そつと親爺の掌へ載せてやつた。

「ぢや、七時頃行きや大丈夫だな。外れつこはないだらうなあ。」と、田澤は耳打ちして、それなり彼も何喰はぬ顔でつかつかエントランスホールの方へ出ていつた。

　ビルデイングの中にゐる間は少しも感じなかつたが、戸外へ出てみると、空は先刻よりは暗くしぐれて、街路樹を鳴らしてゆく風は砂塵で霞んでゐた。廣い驛前の舗道にはいろんな階級の男や女が一様に風に追はれながらぞろぞろ歩いてゐたが、田澤はその中で襟の白い耳隱しの女ばかりあれこれと眼で物色しながら横へ切れていつた。

　田澤の心持ちはいつになく輕かつた。

　田澤が銀座のカツフエで夕飯をすまして、そこで呼んで貰つ

たタクシで、下谷の阪本へやつて來たのは、丁度午後の七時十分過ぎであつた。マンハツタンカクテールを六杯も呷つたので、彼はいゝ心持ちに醉つてゐた。角の交番のところでタクシを下りると、彼は冷たいしぶきのやうなものが顔へ吹つかけてくるので、やつと粉雪が降つてゐるのを知つたのであつた。

彼は阪本町なぞへは生れて一度も來たことがないので、何處を何う入つていゝか見當がつかなかつた。で、彼はある煎餅屋へ飛び込んで、二丁目の一番地を訊くと、何んでも萬年小學校の向ふ横丁だといふ。彼はその小學校を目當てに、それから二十分ばかりかゝつてやつと、松島千代吉の家を捜しあてた。

そこはなるほど萬年町と阪本の境になつてゐて、いつもじめじめしてゐるやうな貧民窟だつた。二階よりも平家が多く、八百屋や魚屋でも間引きの場末ものばかり賣つてゐた。松島の家はさうした店屋から四五軒入つた横露路になつてゐて、眼の前には小學校の建物が鼻につかへさうに聳えたつてゐた。

田澤は眞鍮の腕の眞新らしい門電燈に「松島」と書いてあるのを捜しあてると、ほつとした。で、少時戸外へ立つて中の樣子を窺つてゐたが、そこは平家で、一寸小ぢんまりした格子づくりの家で、こゝいらにしては眼にたつやうな構へであつた。粉雪は軒燈をかすめてすいすいと舞ひ狂つてゐるので、田澤も急に底寒くなつて、兎に角、そこの格子戸をあけて、態ときちようめんな聲で、「御免。」と、云つてみた。

と、電燈の火影の映つた障子の向ふで、少ししや嗄れたやうな婆さんの聲が、

「誰方。」と、いふ。

田澤はいくらか聲づくろひをしながら、

「あの、松島さんは此方ですか。御主人はもう歸りましたか。」

と、いふと、婆さんは別に警戒するやうな風もなく、

「あゝ親爺さんに用があつて來なすつたのかね。まあ、そこを開けて下さい。」といふ。

田澤は遠慮なしに障子を開けた。上框の三疊には長火鉢や茶簞笥がきちんと置いてあつて、眼のどんよりした五十五六にもならうかと思はれる婆さんが、それでも襟へ手拭ひなんぞ懸けて、見綺麗な風姿で、長火鉢の向ふへ坐つてゐる。すぐ鼻の先に下つてゐる電燈でみると、二本の川筋が彼女の顔を少し曲み加減にみせ、みるから田舍者らしい正直さが現れてゐた。

田澤は此方も柔かく笑つて、

「おかみさん、私は爺さんからこれを預つてきたんだがね」

と、云つて、先刻の番地を書いた手帳の切れ端を長火鉢の傍へ突き出すと、婆さんはちよいとみて左の頬つぺたを曲げて笑ひ

ながら、
「あ、さうかね、旦那だつたかね。實は親爺さんも今迄待つてゐたけど、あんまりあんたの來ようが遲いで、お風呂から義太夫のお溫習へ廻るてつて、つい今しがた出ていきましたよ。まあ、お上んなさい。」

田澤はその時には足で靴をぬいで、もう半分上りかけてゐた。彼は何よりも取付き場がなくなるのを恐れて、もう遠慮もなくうへ丶上つて婆さんと對向ひに長火鉢の前へ坐つた。

婆さんはそれつきり別にお辭儀を云ふでもなく、傍の茶篁筒から茶道具を出して、火鉢へかけた土瓶から番茶を注いで田澤にすゝめたりしてゐたが、その時、裏口の方で、だしぬけにがらつと水口が開いて、

「今晩は、大變に遲くなつちやつて濟みません。それぢや一斗五升置いていきますから。」と、云ふ聲が聞えて、何やらずしんと板の間へ置いたやうな氣勢がする。

と、婆さんはそつちを振向りもしずに、

「あ、お前山城屋さんかね。丁度え丶とこへ來て呉れた。お前なあ、歸りに一寸お師匠さんとこへ寄つて、家の親爺さんにお客さんだといふてお呉れ。」といふ。

外の聲は恐さうに、

「あ、一丁目のお師匠さんかね。ようがすとも、どうも何度有難う。」と、云ひ捨て丶又水口を閉めていつた。その樣子でみると戶外は先刻よりも一層激しい降りになつてゐるらしかつた。

田澤はどう話を持ちかけていゝか分らないので、仕方がなしに世間話なぞをしてゐたが、いろんな世界に打衝かつて來てゐる彼には、どうやら話の節々で、この婆さんももとは田舍で娼妓でもしてゐたことがあるんぢやないかと思へてならなかつた。何故か彼には襟へかけてゐる手拭の格好がじだらくな前生を語つてゐるやうに感じられて、さうしたとこからあの親爺の身性も漸次明るみへ出て來るやうな氣がして來た。

あれでも三十分程待つてゐるとやがてかたこと丶小刻みに溝板を刻む下駄の音がして、親爺が小さな體をちよこちよこやりながら歸つて來た。

「おや、旦那。降るのによく出掛けて來たどねえ。」と、につこり嬉しさうに笑ふ。その顏はいかにも自然で　決して嘘がなかつた。彼はひと風呂浴びて來たものとみえ　顏をてかてかさせて、片手の小指の先で手拭と石鹼箱と輕石を入れた小籠を提げてゐた。

田澤は初めて趺座をかいて、

「おい、小父さん、お前人と約束しといてお溫習はひどいね

たタクシで、下谷の阪本へやつて來たのは、丁度午後の七時十分過ぎであつた。マンハツタンカクテールを六杯も呷つたので、彼はいゝ心持ちに醉つてゐた。角の交番のところでタクシを下りると、彼は冷たいしぶきのやうなものが顏へ吹つかけてくるので、やつと粉雪が降つてゐるのを知つたのであつた。

彼は阪本町なぞへは生れて一度も來たことがないので、何處を何う入つていゝか見當がつかなかつた。で、彼はある煎餅屋へ飛び込んで、二丁目の一番地を訊くと、何んでも萬年小學校の向ふ横丁だといふ。彼はその小學校を目當てに、それから二十分ばかりかゝつてやつと、松島千代吉の家を捜しあてた。

そこはなるほど萬年町と阪本の境になつてゐて、いつもじめじめしてゐるやうな貧民窟だつた。二階よりも平家が多く、八百屋や魚屋でも間引きの場末ものばかり賣つてゐた。松島の家はさうした店屋から四五軒入つた横露路になつてゐて、眼の前には小學校の建物が鼻につかへさうに聳えたつてゐた。

田澤は眞鍮の腕の眞新らしい門電燈に「松島」と書いてあるのを捜しあてると、ほつとした。で、少時戸外へ立つて中の様子を窺つてゐたが、そこは平家で、一寸小ぢんまりした格子づくりの家で、こゝいらにしては眼にたつやうな構へであつた。粉雪は軒燈をかすめてすいすいと舞ひ狂つてゐるので、田澤も急に底寒くなつて、兎に角、そこの格子戸をあけて、態ときちようめんな聲で、

「御免。」と、云つてみた。

と、電燈の火影の映つた障子の向ふで、少ししや嗄れたやうな婆さんの聲が、

「誰方。」と、いふ。

田澤はいくらか聲づくろひをしながら、

「あの、松島さんは此方ですか。御主人はもう歸りましたか。」

と、いふと、婆さんは別に警戒するやうな風もなく、

「あゝ親爺さんに用があつて來なすつたのかね。まあ、そこを開けて下さい。」といふ。

田澤は遠慮なしに障子を開けた。上框の三疊には長火鉢や茶簞笥がきちんと置いてあつて、眼のどんよりした五十五六にもならうかと思はれる婆さんが、それでも襟へ手拭ひなんぞ懸けて、見綺麗な風姿で、長火鉢の向ふへ坐つてゐる。すぐ鼻の先に下つてゐる電燈でみると、二本の出齒が彼女の顏を少し曲み加減にみせ、みるから田舍者らしい正直さが現れてゐた。

田澤は此方も柔かく笑つて、

「おかみさん、私は爺さんからこれを預つてきたんだがね」

と、云つて、先刻の番地を書いた手帳の切れ端を長火鉢の傍へ突き出すと、婆さんはちよいとみて左の頰つぺたを曲げて笑ひ

ながら、

「あ、さうかね、旦那だつたかね。實は親爺さんも今迄待つてゐたけど、あんまりあんたの來ようが遲いで、お風呂から義太夫のお温習へ廻るてつて、つい今しがた出ていきましたよ。まあ、お上んなさい。」

田澤はその時には足で靴をぬいで、もう半分上りかけてゐた。彼は何よりも取付き場がなくなるのを恐れて、もう遠慮もなくうへゝ上つて婆さんと對向ひに長火鉢の前へ坐つた。

婆さんはそれつきり別にお辨茶羅を云ふでもなく、傍の茶簞笥から茶道具を出して、火鉢へかけた土瓶から番茶を注いで田澤にすゝめたりしてゐたが、その時、裏口の方で、だしぬけにがらつと水口が開いて、

「今晩は、大變に遲くなつちやつて濟みません。それぢや一斗五升置いていきますから。」と、云ふ聲が聞えて、何やらずしんと板の間へ置いたやうな氣勢がする。

と、婆さんはそつちを振顧りもしずに、

「あ、お前山城屋さんかね。丁度えゝとこへ來て呉れた。お前なあ、歸りに一寸お師匠さんとこへ寄つて、家の親爺さんにお客さんだといふてお呉れ。」といふ。

外の聲は寒さうに、

「あ、一丁目のお師匠さんかね。ようがすとも。どうも御度有難う。」と、云ひ捨てゝ又水口を閉めていつた。その樣子でみると戸外は先刻よりも一層激しい降りになつてゐるらしかつた。

田澤はどう話を持ちかけていゝか分らないので、仕方がなしに世間話などをしてゐたが、いろんな世界に打衝かつて來てゐる彼には、どうやら話の節々で、この婆さんももとは田舍で娼妓でもしてゐたことがあるんぢやないかと思へてならなかつた。何故か彼には襟へかけてゐる手拭の格好がじだらくな前生を語つてゐるやうに感じられて、さうしたとこからあの親爺の身性も漸次明るみへ出て來るやうな氣がして來た。

あれでも三十分程待つてゐるとやがてかたことゝ小刻みに溝板を刻む下駄の音がして、親爺が小さな體をちよこちよこやりながら歸つて來た。

「おや、旦那。降るのによく出懸けて來たどねえ。」と、につこり嬉しさうに笑ふ。その顏はいかにも自然で決して嘘がなかつた。彼はひと風呂浴びて來たものとみえ顏をてかてかさせて、片手の小指の先で手拭と石鹼箱と輕石を入れた小籠を提げてゐた。

田澤は初めて趺座をかいて、

「おい、小父さん、お前人と約束しといてお温習はひどいね

え。はゝゝゝ。」と、いふと、親爺は操り芝居の人形のやうな手つきで招くやうな格好をして、

「いゝんや、さうぢやにやあよ。義太夫の師匠に一寸懸合ひごとを頼まれてね。はゝゝゝゝ。まあえゝや。とにかく旦那。こんな處にゐちや勿體にやあから、奥へ入つてお呉れ。奥はこれでも綺麗にしてあるからね。」と、云つて、せかせか隔ての紙襖を開ける。

隣りは親爺の柄に似つかはしからぬ八疊で、床の間なぞもきちんと飾りつけてあつた。

親爺は自分ひとりでちよこちよこ働いて、火鉢をもつてくるやら、座布團をもつてくるやら、頻りに田澤をもてなしたが、その間婆さんは長煙管ですぱりすぱり煙草を吸つてゐるばかりで、此方へは知らん顔をしてゐた。

親爺はやがて自分で茶をもつて來て、角火鉢の前へちよこんと坐りながら、妙に得意さうににやにやして、

「ねえ、旦那。あんたほんとにえゝ時に來たよ。今日はあんた、すばらしいのが來るぜ。お隆ちふ女で、そりや別嬪だ。それにハイカラで、體格がよくて、あんた、話しや面白えぜ。寢にやあでも、たゞ前へ坐らしとくだけで値打ちのある女だよ。」と、云つて、一寸田澤の手へ觸る。その手は可笑しい程眞赤で、いやにやんわりと冷ツこかつた。田澤はこの親爺、ひよつとしたら神經癩でもあるんぢやないかと思つて、少し氣味が惡くなつて來た。

田澤はそれでもそんなことは噯氣にもみせずに、

「だが、小父さん、そんなことを云つて、ほんとにお前、職業婦人かね。これで私だつて相當に肚は黒いんだから、變んなものを掴ませたつて駄目だぜ。はゝゝゝ。」さう云ひながら彼はもう二十年も前に淺草あたりで仕込んだ口吻を思ひ出してゐた。

親爺は慌てゝ鼻の先を手で煽ぎながら、

「旦那、笑談いふぢやにやあよ。まあ來てみりや分るさ。」と、云つて「旦那、お酒のむかね。」

田澤は合點いて、

「さあ、ビールにして貰はふか。併しそんな店屋ものや何か入れちや近處の手前眼にたつて困るだらう。何んならもう何にも要らないよ。」

「いや、そんなこたあちつとも構やあしねえ。私んとこはうまくやつてるだもの。心配しにやあでもえゝよ。それぢやビールにお壽司でも取るかね。お隆はお壽司が好きだで、旦那今夜は奢つておやりよ。はゝゝゝ。」

さう云ひながら親爺は又自分で水口から出ていつた。

それと殆んど引違へに、格子が開いて、

「今晩は、小父さん。」と、いふ女の聲が聞える。

婆さんは默つて返事もしなかつたが、もう上框の障子が開いて、そこから一人の若い女がそりツと内の樣子を覗ひ覗ひ入つて來た。と、みると、それは脊丈の高い、なるほど親爺のいふ通り、紛ふ方もない職業婦人らしい女で、顏にもこつてりと化粧をしてゐるので、眼に立つて綺麗であつた。

その女は長火鉢のところへ宙腰になりながら、

「あら、小母さん。今晩は。小母さんもほんとに意地が悪いわねえ。私、お留守かと思つたわ。ほゝゝゝ。小父さんは何うして?又義大夫のお稽古?」と云つて袖口から肉色のレースをみせながら片手で髮の毛上をへかきあげる。

婆さんは先刻のまゝ長煙管で煙草ばかり吸ひながら、親しみのない聲で、

「親爺さんは、何か誂らへものでもしに行つたよ。」と、いふ。

女は嬌態をして、

「あら、さう。ぢや直き歸るわねえ。」と云つて、腰を落しながら、何やら手提げの中からペーパーへ包んだ小箱を出して、

「小母さん。あの私、これ、雑なものですけど、どうか使つて下さいましな。小母さんはハイカラなものは嫌ひだけど、これならね。ほゝゝゝ。」と、云つて、それを火鉢の猫板のうへゝ置く。

婆さんは一寸合點いて、

「お隆ちやん。お前のその袋から出てゐるのはなんだね。」と、差覗くやうにして訊く。

女は手提げを膝のうへゝ載せて、

「これ?これ編み棒よ。私もう少しで仕上るんだけど、電車の中ぢやねえ。」と、云つて、もうそのまゝ手提げの中からオールドローズ色の毛絲の編みかけを出して、さも時間が惜しさうに編棒を操り出す。

田澤はその一擧一動をそつとみてゐた。女がたゞの一度も此方をみもしずに、まるで他人のやうな顏をしてゐるのが却つて妙でならなかつた。編み棒を運んでゐるその格好は何處からみても高等女學校位は卒業した女らしく、着物は銘仙の荒いのを着てゐたが、併し耳隱しに結つた頭髪から、青い衿を帯の上のところまで開けてゐる樣子までがまるまるの職業婦人であつた。口のきゝ方も何處やら品がよくて、よくみてゐると編棒の手捌きも恐ろしく熟練してゐた。

田澤は何んだかいゝ氣持ちで、ぞくぞくしながら金口ばかり喫つてゐた。

やがて親爺が鼻の頭を紅くしながら歸つて來ると女は眼早くそれをみて、

「あら、小父さん。先程は。大變に遲くなつちやつて御免なさい。私、あれから一寸七階に用があつたもんですから、それに電車があれでせう。もう死ぬかと思つたわ。」

親爺は相好を崩して、

「いや、御苦勞だつたねえ。でも來て呉れて私や嬉れしいよ。生憎降つて來たで、お前傘をもつてるかどうかと思つて私や心配してなあ。はゝゝゝ。まあ、えゝ。此方へ來なさい。ねえ、旦那。こゝぢや何んだから裏の四疊へ入んなさい。私が今行火して上げるだから。」と、云つて、又まめに働きだす。

行火と云つても、土製の猫であつた。親爺はそれを裏の長四疊へ運んでいつて、毛布を打ち懸けながら、田澤を先へ入れて、さゝやくやうに、

「ねえ、旦那。どうだね。えゝだらう。あれだつたらお前、月極めにした方が德がいくだ。さうしなせえ。さうして呉れりや、あの子も助かるだよ。私やあの子が可哀想でねえ。」といふ。

田澤は眼ばかり大きくして、

「月極め、結構だね。それで幾何だい？」

親爺は利かない指をそつくり立てゝ、

「これだあ。それに、ビールを三本、お壽司を一圓五十錢さう云つたゞからなあ、それが五圓と、それにこゝの家へ十圓も置くか。」と、いふ。

田澤はカラアをきちきち云はせながら、

「五十圓か。割りにお格好だな。それぢやそれに極めよう。」

「そんなら今金を置きなせえ。あとからぢやお前、女が厭な思ひをするからね。」

田澤は内ポケツトから革の紙入れを出して、その中から六十圓だけ十圓紙幣で出して、

「ぢや先刻海上ビルで渡したのと倂せて、これで丁度だな。」

親爺は眼をくるくるさせて、

「旦那。金は堅いな。あの五兩は私に小遣えさ。實は家の内儀さんに五兩はやるで、もう五兩はづみなさい。あんた重役さんぢやにやあかね。さ、もう五兩出しなさい。」と、云つて、彼は手を出して、田澤の手を押へる。

田澤は又氣味の惡い冷ッこさに恐れをなして、到頭もう五圓出してやつた。

親爺は紙幣を親指と人さし指の間へ器用にはさんで、

「それぢやあとの話しやお互にしなせえ。まだ時間はあるだからゆつくりしてな。」と、云ひながら、そのまゝ向ふへ歸つて、

「お、お隆ちやん。奥へ火をもつていつて上げにやあか。え。何んだて。あゝえゝとも。えゝとも。あの方は私がよくひゐきになる會社の重役さんだ。話の分つたそりやえゝ人だよ。」と、いふのがかすかに聞えてゐた。

やがて間もなく先刻の女は編みものを持つたまゝ足音もたてずに此方へ入つて來た。青い衿の間から透いてゐる胸の肌がその時、又ひとしほチヤーミングにみえた。

お隆は此方へ入ると、まるで態度が變つて口數もきかなければ、ビールの酌も碌にしなかつた。田澤には何から何迄が氣に入つて、彼程の猛者がこゝしばらくはこの女に凝るのぢやないかといふやうな豫覺にさへ打たれながら、初めのうちは自分も默つてビールばかり飲んでゐた。

田澤はやがてふいに馴々しく、

「ねえ、君、君は一體泊れるのかい?」と、訊いてみた。

と、お隆は編みものゝ手を止めて、

「あの、私、私、今夜が今夜つていふんではあの、困りますけれど、……」

「ぢや前から段取りを極めて置けばいゝんだね。」

「えゝ、さうなんですの。」さういふ聲は衿の中で聞えた。

田澤は太膽にその手をつと握つて、

「ねえ、君、編物なんかやめて、しみじみ話さうぢやないか。折角逢つたのに、それぢや話がしにくいよ。一體君の家は何處だね。」

お隆は編物を膝のうへゝ置いて、不格好に體を開きながら、

「私、市谷ですの。」

「ほう、市谷かい。そりや遠いね。それで一人で間借りでもしてゐるのかね。」

「いゝえ、あの、私母と二人でゐますの。」その手は少し慄へ氣味に熱くなつて來た。

田澤は手勝手が悪さうなので、少しお隆の方へ摺り寄つて、彼女を樂にしてやりながら、

「一々いろんな事を洗ひ立てして、少々野暮臭いが、何處かへ勤めてゐるのかい。」

お隆は顏を伏せて、さも恥かしさうに、

「あの、それはどうかお許しなすつて下さいましな。私、勤め先がやかましう御座いますから。」

「いや、こりや大きにさうだね。はゝゝ。いや、私は初めて逢つたんだが、何んだか君がすつかり氣に入つちやつたよ。いづ

れ氣の毒な事情でこんなこともするんだらうが、それはまたゆつくり聞くとして、兎に角こゝぢやどうも、さすがの私も何うにも出來んねえ。どうだらう、今日はこのまゝにして、明日この隨樣ぢやきつと積るだらうから、兎に角ひと晩泊りで、何處かへ雪見に出懸けないか。」と、誘ひをかける。

お降は唯一意命に伏するといふやうに、

「え、どうぞ。」と、いふ。

用澤は強くその胸を引寄せながら、

「丁度宜も明日は土曜だから、會社を午迄にすまして、それから何處かへ行かう。箱根もいゝが、實を云ふと彼處いらは人目が多いんでねえ。だからひとつ人の行かない温泉へでも行かうぢやないか。君は温泉と海岸と何方が好きだね。」

お降はそれでも嬉しさを押へてゐるやうに、

「あの、私、何方でもよろしう御座いますわ。何方へでも連れていつてさへ頂ければ、……」

「それぢやさうだなあ、いつそ遠走りをして信州の方へでも行つてみようか。私は出張にすりや二晩位はいゝからね。」

「え、どうぞ、……私、一度も行つたことがないもんで御座いますから。」

「併し、ほゝゝ。私一人で承知をしてゐてもいかんねえ。君は一體勤め先の方はどうするんだ。」

「そりやあの、私、休みますわ。」

さういふしほしほした樣子をみると、用澤は××その白粉の濃い頰へ○○○○○○○○○○○。○○○○×××××××××○○○○○。

その翌日、用澤は家のものには社用で仙臺へ出張するやうに云ひ置いて、會社からすつと省線で飯田町驛へやつて來た。彼はそこから午後の十二時十六分の列車に乘ることに約束して、昨夜女と別れたのであつた。

用澤はスーツケースたつた一つ持つたまゝの旅裝束で二等の待合室で待つてゐたが、何分にも毎日一二度づゝは必ず通過する驛なので、もし知つた人に逢ひはしまいかと思つてびくびくしてゐた。その日は昨夜ひと晩降つた雪が小降りにはなつてゐたが、やつぱり粉のやうな細かいのが繽紛と風に舞つてゐて、往來には一尺近い積雪があつた。驛前の廣場は荷馬車や自働車の轍でどろどろになつて、紅い鐵橋のうへゝ垂れ下つてゐる灰色の空をみると、泣き度いほど佗びしかつた。家々の向ふには砲兵工廠の煤煙がもくもくと南へ動いて、電車の往來する音までが腹の底へ冷たく滲んで來た。

田澤はもう幾らか冷靜になつてゐるのでお隆がひよつとしたら來やしまいといふ不安に襲はれてゐた。金だけ絞られて逃げを打たれるといふ手はよくあることである。たとへあの女は何うでも、あの靴磨きの親爺が、と思ふと、急に自分のしてゐることが馬鹿々々しくなつたが、併し彼はそれでも胸がわくわくするやうな愛着の念ひにも咬られてゐるのであつた。

驛の大時計をみると、もう十一時半になつてゐる。田澤は冷たいベンチに腰かけながら、まるで二十才位な青年のやうな心持で、窓の硝子戸越しに驛の廣場の方をみてゐた。もう發車間近なので、いろんな人が次から次と驛へ入つて來る。それでも天氣のせいか、いつもの半分の旅客もなかつた。もう時間が時間なので、きつとあのお隆が車でゞもやつて來るだらうと思つて、田澤は車が轅棒を下す度に眼を据ゑて幌の中をみてゐたが、それでもお隆に似た女さへ下りない。

田澤はいくらか自分を嘲る氣になつて、もしお隆がやつて來なかつたら、何ういふ行動を執らうかと思つて、それを考へながら金口をぷかりぷかり喫つてゐた。もし時間迄に來なかつたら、いつそ又あの靴磨きの親爺のところへいつてみようか。それも何うやら業腹な氣もする。それよりも今日は又柳橋へでもいつて、誰れかこれと思ふのを拉して、箱根へでも飛ばふか。何しろ自宅へは出張と云ひ置いて來たのであるから、まさかのめのめと歸つてもいけない。それに內衣囊には千圓近くの金の入つた革の紙入れも入れてゐるので、この好機會を逸し難かつた。

そんなことを考へながら、田澤はふと又大時計をみると、その時すぐ彼方の待合室の入口の處に、一人の女の姿を發見した。それはお召のコートの上へ、青い衿をくつきりとみせた耳隱しの女で、白粉がぬける程白いので、すぐに眼についた。田澤ははつとして、自分でも可笑しい程慌てた格好で立上つて、その女の方へ一寸流眄をくれながら切符を買ひいつた。そして松本までの二等を二枚買つて、つかつか改札口へ出ていつたが女はそれをみると、人目にたゝないやうに後を追つて來て、田澤の後から改札口を出た。石階の處で一寸人足が絶えたので、田澤はにこにこしながら、

「おい、君、何んだつて又あんなところに立つてゐたんだ。私はもう汽車の時間は迫つて來るし、何うしたのかと思つてはらはらしてゐたんだよ。何故聲をかけて呉れなかつたんだね」と、詰るやうに云ふ。

と、お隆は丁寧に辭儀をして、氣弱な息づかひをしながら、

「あの、私、でも、あちらへ入つていくのが極りが惡かつたん―

御座ますもの。」
田澤は石階を上りながら、
「はゝゝ。それでいつ來たんだね。」
「あの、私、もう廿分の餘もあすこに立つてゐましたんですの。もう此方を振顧つて下さるかと思つて、私も氣が氣ぢやなかつたんですわ。」さういふ言葉つきは昨日より打融けてゐた。
田澤は笑つて、
「あ、さうだつたんか。私は又きつと車で來るだらうと思つて、馬鹿な顔をして向ふばかりみて居つたんだよ。ちややつぱり電車で來たのかね」
「え、私、市ケ谷で御座いますもの。」
田澤は歩廊へ上つて來ると、急に取澄した顔になつて、
「あの、此の線は危險だから列車へ入つたら八王子までは別々に坐つてゐるんだよ。」と、耳打ちして、それなり一足先に二等車へ乘つてしまつた。お降は別の昇降口へ廻つて、そこから同じ車室へ乘つて、向ふの一番端に坐つた。
その車室には僅か十六七人の乘客しかゐなかつた。
列車は間もなく發車して、寂しい灰色の空の下を、降り迷ふ粉雪を衝いて西へ西へと駛つていつた。
列車が甲武の國境に跨がる山地へ入る頃には、乘客の數も僅か五六人になつて、それも見も知らぬ顔ばかりであつた。田澤もそれ迄は新聞を出してみたり、何かしてやつと時を消してゐたが、もう退屈で退屈で耐らなくなつて來た。向ふにお降がきちんと坐りながら車窓から寂しさうに移り變る雪の山々を眺めてゐるだけに、彼もいつかしら太膽になつてやがてそつちへやをら立つていつた。そして便所へいつて歸りに、いきなりお降の隣りへ坐りながら、
「どうしたい。別々にゐると寂しいねえ、こゝに居りや何を話したつて聞えやせんから、大丈夫だよ。」と、云つて、「君は、腹は何うだい。今度の驛で辨當でも買はふか。」といふ。
お降はやさしく首を振つて、
「有難う御座いますけど、私、家で早午飯をすまして參りましたから、」
「さうか。それぢや寒いからウヰスキイでも出さう。」と、云つて、田澤はもとの坐席からスーツケースや、外套を抱へて來て、自分で坐席をつくりながら、ケースの中から旅行用の平壜の酒を出した。
お降も旅へ出て、ぐつと氣が浮々してゐるとみえ、それに手傳つてくれながら、

「あの、貴方、今夜は何方へ泊りますの？」と、田澤の顏を見る。

田澤は洋銀の洋盃へウイスキイを注いで、ちびちびやりながら、

「さあ、松本へ着くのが夜の十一時だから、淺間溫泉へでも行つて泊るんだねえ。それとも諏訪でもいゝね。」

「あら、あの、諏訪つて申しますと、あの諏訪湖のあるところなんで御座いますか。まあ、……」と、嬉しさうににつこりする、

田澤は信濃の溫泉はもう三四度も廻つて歩いてゐるので、頻りに面白可笑しく方々の話をしてゐたが、やがてぽうツと醉ひの出た顏になつて、

「ねえ、お隆さん。君は一體いつ頃からあの松島の家へ出入りするやうになつたんだい？」と、訊く。

と、お隆はもう何も彼も打明けるやうな態度で、

「あの、私、先月からなんですの。私、あの人の家へいくのは厭なんですけれど、やつぱりねえ」

「それで、一體何うい ふ筋道を辿つて彼處へ落ちていくのかね。それが何うも私等には分らんねえ」

「いゝえ、それはね、……もう私、すつかりお話ししてしまひますわ。つまりかうなんですの。私達も實はあのビルデイングへはもう一年近くも勤めてゐますんで、やつぱり朝に晩に顏を合はせますもんですから、つい馴染みになつてしまふんですの。あの松島さんはあの通り馴々しい人ですから、よく前を通つたりすると、ねえ、あんた、今日はお庇護樣で十七圓も上りがあつたから、お前さん達に花月のお辨當を奢らう。歸りに待つてゐなさいなんていふんですの。あゝいふ人のいゝ親切さうなお爺さんですから、此方もつい心易だてになつて、お辨當を御馳走になつたり何かするんですわ。そのうちにつまりこの女はお金を欲しがつてゐるなと見拔きますと家へ遊びに來いつて云ひまして、うまく此方からお金のことを云出すやうに持ちかけますんですのよ。私もお恥かしう御座いますけど先月、母が病氣にかゝりまして、お金が入つたもんですから、つい松島さんの口車に乘せられて、お金を貸して下さいつて頼んでしまつたんです さうしますとね、安い利子で二百圓だけなら私の臍繰りを貸してやるから一度家へ來なさいつて云ひますんで、私、それを當てに丁度先月の八日の日に、阪本の家へ參りましたんですの。」

田澤はその顏をみて、

「ふむ。やつぱり昔からある手なんだねえ。それでつまり金が

欲しけりゃ稼げとから來るんだらう。」

お降は寂しく合點いて、

「え、でも、その事はすぐには云ひ出しませんの。その前にちやんと二百圓のお金をみせて、これを日歩五錢で貸してやる××、××××××××××××××、その代り待合へでも何處へでも連れていつてやるなんていひますんですのよ。」

「ほう、あの親爺でもまだそんな色氣があるのかね。」

「あら、ある處ぢや御座いませんわ。あすこへ落ちて來る人には皆一度つゝその手を食はして、そのうへ貴方、あの人は義太夫のお師匠さんていふ人も妾のやうにしてゐますし、淺草あたりの小待合なんかへもちよくちよく遊びにいくらしいんですわ。私達を犧牲にして絞つたお金で、日濟しでも貸してゐるのなら少しは心持ちも分りますが、そのお金で道樂をするんですもの。ほんとに變な人ですわねえ。」

「へえ、あの年でねえ。それで義太夫の師匠つていふのは、昨夜話の出たあの女かね。」

「え、もう何んでも三十五六の女ですけど、一寸粋な人ですわ。あの松島さんはとうからその人に何にしてゐて、やつと二月程前に話が出來たんだとか自慢してゐましたわ。初めは何んでもあの人の養女に當る小さな娘を弟子に上げて、それでうまく話を持ちかけたらしいんですわ。」と、云つて、お降は手帛で口を拭きながら、「それにねえ、貴方もつと可笑しいのは、そのお師匠さんもやつぱり五圓位で彼處へ來るお客樣へ出すんださうですわ。私、その話を聞いてどういふ心持ちなんだらうと思ひましてねえ。」

田澤もさすがに呆れて、

「へえ、そりや亂暴だねえ。一寸聞かない話だ。自分の世話してゐる女を五圓は面白いねえ。はゝゝゝゝ。」と、云つて、新たな酒をつぎながら「それで、君もやつぱりあの親爺の洗禮を受けた方かい。」

お降は嬌態をして、顏をしかめながら、

「あらあ、まさか私、そんなことするもんですか。いくら何んでもあんな人に。第一あの手を見たばかりでぞつとしますわ。」

「お、あの手、あの手、一體ありや何の病氣かね？」

「さあ、私も聞きやしませんけど、自分ぢや若い時に機械で怪我をしたんだつて云つてゐましたわ」

「ふむ、機械の怪我かね。私は天刑病ぢやないかと踏んでゐるんだよ。」

「まあ！」お降はさすがにぞッとしたやうな顏になつた。

田澤は煙草に火をつけて、

「それで、彼處には何人位入るんだい。」と、訊いたが、お隆は顏を伏せて、腰を妙にもぢ〻ながら、

「さあ、私、よく知りませんけど、何んでも五人か六人でせう。」

「それで一體金はどうするんだね。あの親爺がやつぱり頭をはねるのかね。」

「そりや無論ですわ。それも皆さんから十圓頂けば七圓は何の彼んのと云つて、自分が取つてしまふんですの。ですから私達に呉れるのはほんの少しなんですわ。」

「ふむ、酷い奴だね。昨夜なんぞは幾何貰らつたね。」

お隆は恥かしさうに、

「あの、昨夜は二十圓きりですの。ほんとに酷いですわねえ。ですから私もうほんとにあの人の世話になるのは厭で、厭で耐らないんですわ。でもさうかといつて、行かないと、何の彼んのと厭なことを云はれたり、威嚇されたりするもんですから、つい恐くなつて、……貴方は、餘程前から彼處へ被來るんですか。」

田澤は頭をかいて、

「いやあ、私は昨夜がほんの初めてさ。人から聞いたもんだからつひね。は〻〻〻〻」

「あら、お初めてなんですか。そんならもうあんな處へ被來るのはお止しなさいましよ。お人柄に拘はりますわ。そりやあの松島つていふ人は悪い人なんですからねえ。それこそお身分でも分つたら、どんなことをするか知れませんわ。」

「ふむ、成る程ね。あの物柔かなところは大した悪黨だね。あんなのがほんとの悪黨だよ。どんな閲歴のある男かね。」

「さあ、それがまるつきり分りませんの。日本國中知らない處はないなんて云つてゐますし、ほんとに何をして來た人でせうねえ。ビルディングでも大分噂になつてゐるやうですから、今にきつ〻捕りますわ。それを思ふと、私ほんとに厭でねえ、一昨日も私さんざ泣かされたんですわ。私、もういくら呼び出しをかけても來ないつて云ひましたら、そんならそれでい〻。さうなりや俺もどうせ牢屋へ入るから、お前も抱き込んでやる。俺は二週間の拘留ですむが、お前は何うあつても一年位涼ませてやるなんて云ふんですもの。私、ぞつとしてしまひましたわ。」

「ふむ、あの物柔かな口でねえ。」と、田澤も感心して、「まあ、兎に角、どうかして君も泥足を洗ふんだねえ。私も次第に依つちや力になつてやるから、何しろ一日も早く姿を隱して、彼奴の眼を逃れるが一番だよ。」

「でも、私、やつぱり生活の事を思ふと、今の處へ勤めてゐなければなりませんし、ほんとに情なくなつてしまひますわ。」と、云つたかと思ふと、お隆はうすく涙ぐんでしまつた。

田澤も人情に絡んで、

「いや、そんなことは第二の問題さ。君の性根さへ分りや、僕だつて大いに力をかすさ。はゝゝゝ。」と、云つて、態と快活に笑ひながら、「あ、もう大分山が深くなつたねえ。さすがに此處いらへ來ると雪が深いなあ。あれ、お隆さん、見玉へ。あんな谷の底に家がみえてゐるぜ。」

お隆も氣を變へて、車窓へ顏を近づけながら

「あら、まあ、あんなところにね、たつた一軒建ちですわねえ。あんな家に住んでゐたら、どんなに寂しいでせうねえ。」

「はゝゝゝ。それも好きな人とたつた二人ならいゝがねえ。併しあんな處には松島もゐまいから、結句浮世は樂だよ。はゝはゝゝ。」

列車が笹子の隧道を出ると、やがて雪に埋もれた甲州の廣々とした盆地がさながら畫のやうに展けて來た。そこではもう雪が止んでゐるので、富士や駒が岳や地藏岳が氷の宮殿のやうに灰色の空を劃つてゐた。

お隆は小供のやうに肩を縮めて嬉しがつてゐた。

その晩田澤とお隆は淺間溫泉の西石川の二階座敷で、北國めかしい大炬燵で溫りながら、もう浮世も外に打解けて戯れてゐた。炬燵のうへには大きな平盆が載せてあつて、その上にはくさぐさの料理がごてごて並べてあつた。もう午後の十二時を過ぎてゐるのでさすがに廣い宿もしんとして、雨戸にあたる霙の音ばかりがさらさらと聞えてゐる。裏隣りの次の間には燗をつける爲めに火鉢がしかけてあるので、湯のたぎる音もしんみりとした情趣を間内へ響かせてくる。

田澤は可成り醉つてゐた。彼は銚子をとつてもう頰を紅くしてゐるお隆に酌をしてやりながら、

「お隆さん。もう一杯お飲みよ。さうしてゆつくり溫泉で溫つて來て、今夜はせめてひと夜の戀人といふやうな意氣で、旅寢の枕に夢を預けるかね。はゝゝゝ。端唄の文句みたやうなことは云ひつこなしにしようね。はゝゝゝ。」

お隆も美しく笑つて

「ほゝゝゝ。ほんとに面白い方ねえ。私、今日みたやうなことは生れて初めてですわ。」と、いふ。彼女も眼のまわりをうつとりさせて後毛が時々頰にかゝるのがひどく艶めかしかつた。

田澤は又盃を重ねながら、

「はゝゝゝゝ。うまくいふぜ。松島の小父さんの取持ちで、さんざうまいことをして來てゐる癖に。」

「あら、私、厭ですわ。そんなことを仰有つちや。私、ほんとに先月からなんですもの。まだ貴方でほんとに××××わ。」

「はゝゝゝ。人の頭を勘定するなあ恐入るね。併しその前にどうせ荒らしてゐるんだらう。」

「まあ、随分ねえ。」と、云つて、お隆は呆れたやうな顔で、恨めしさうに田澤の顔をみたが、彼女ももう投げやりな心持ちになつてゐるとみえ、すつかり愼しみをなくなして、「あの、それぢや私、何も彼も白狀してしまひますわ。私、實はね、十八の時に處女性つてものを失つてしまつたんですわ。」

「それ見玉へ。漸次襤褸が出て來るぢやないか。それから數へて今日まで何人男を知つてゐるね。いづれ×××××××。」

「あら、そんな、そんな貴方、貴方のやうな方はきつとそんなことを仰有つてお揶揄ひなさるのねえ。ほんとに私、それから數へたつて、×××××すわ。私、松島の小父さんのところへ行く迄は、たつた一人の男の爲に苦しめられてゐたんですもの。」と、云つて、彼女はそつと盃を啣めながら、「あの、私、打明けてお話ししますとねえ、私にはたつた一人姉がありますの。その姉は大阪の或醫者のところへ嫁いてゐましてねえ、私、父が亡りますとすぐそこへ預けられましたんですわ。さうしますとねえ、あの、姉が腎臓にかゝつてしまひましたんで、あの、義兄がつい私に戀をするやうになつてしまひましたんですの。」

「ふむ、よくある奴さ。それで君×××××××××××らう。はゝゝゝ。それが手始めで、それからがこの憐れなる隆子は性格が一變致しまして、彼女は燃え狂ふ情熱の焔に胸を燒かれ、惡鬼の亂舞する地獄の門へと次第次第に辿つていつたのでありました。これを以つて「闇に咲く花」第三卷は遺憾ながらお別れと相成つて居りますか。はゝゝゝ。」と、田澤は活辯そつくりの巧みな聲色をつかつて、「さ、お隆さん、そこいらでひとつ湯へ入らうぢやないか。はゝゝゝ。」

　お隆も笑ひこけて、

「ほゝゝゝ。貴方、ほんとに何んでもお上手ね。ほゝゝほ。」と、笑ひが止まらないやうに云つて、やつと手帛で涙を拭きながら、「でも、貴方、お酒を召飲つた後でお湯へお入りになつてよろしいんですか。」

　田澤はもう炬燵から出て、褞袍の腰へ帶を卷きながら、

「體の心配までしてくれるのは嬉れしいね。なあに私なんさまだ若いんだもの、湯の中で中風なんぞはやらんよ。はゝゝは。

さ、いから。」と、云つて、彼はもう廊下へ出ながら「おう、寒い。こりや寒い。」と、肩を縮めて、階下へ降りていつた。その足音までが凍てゝゐた。

　田澤はもやもや湯氣のたつ浴場へいつて、そのまゝ浴槽へ飛び込んだが、さすがに温泉だけに何んとも云へないいゝ氣持ちがする。もう夜が遅いので、四邊は氣味の惡い程しんとしてゐて、ヂヤボリと湯を掻き亂すと、その物音は湯氣の籠つた天井へ谺してゆくやうに思はれる。硝子窓には絶えず雪がさらさらと囁ぐやうに吹きつけてゐた。

　やがてお隆も下りて來たが、脱衣場のところでもじもじしてゐる。

　田澤は湯氣の中を透かしてみて、

「ねえ、お隆さん。こんな晩に女湯へたつた一人で入つてゐると魔がさす譯。此方へ一緒に入り玉へ。」と、いふ。

××××××××××××××

「×××××××××××××××××××××××××××

××××××××××××××××××××××××××××

××××××××××××××××××××××××××××

××××××××××××××××××××××××××××

××××××××××××××××××××××××××××

×××××××××××××××××××××××××××

「×××××××××××××××××××

××××××××××××××××××××

「×××××××××××××××××××××××××××

××××××××

×××××××××××

「一體君のほんとうの年は幾つだね。」と、訊く。

「お隆はさも氣持ちがよさゝうに嘆息を吐いて、

「私ですか。私二十三ですわ。」

「ほう、二十三か。いゝ年頃だな。お母さんは？」

「母は五十一ですの。」

「それでお父さんは何をしてゐたんだね。」

「さあ、私、それを聞かれると恥かしいんですけれど、あの人やつぱり會社の方へ出てゐたんですの。貴方もさうなんで御座いませう。いくらお隱しになつたつて分つてますわ。」

「いや、別に隱しもしないが、はゝゝゝ。これで私は幾歳にみえるかね。」

　お隆は此方をみて、

「さうですねえ。一寸分りませんけれど、三十七位で被居るか知ら。」

「よう、うまく當てたね。岡星だよ。三十七さ。はゝゝゝ。」
「やつぱり當りまして。實は先刻お話しゝた私の姉婿も貴方と同い年なんですの。三十七の方はやつぱり氣性が何處か似て被居るわねえ。」
「はゝゝゝ。お惚氣かい。ぢやそこで私も後釜に据ゑて貰ふかな。私みたやうに唯道樂だけして來たものは、女に戀をされたなんていふ經驗はまるでないんだからねえ。一期の思出にひとつ熱烈なラヴでもやつてみたいもんさ。惚れるのと、ラヴとは味が違ふからね。」
お隆は湯氣の中でほゝゝゝと艶めかしく笑つてゐた。
田澤は稍蒼ざめてみえる自分の肢體を撫でゝみながら、
「併し私は昨夜逢つた時には、もつと君を買被つてゐたが、これで君もなかなか話せるんだねえ。十八から男の經驗があらうとはまるで知らなかつたねえ。」
「あら、だつて私、唯うかうか夢のやうなことばかり考へてゐたんですもの。今だつて男の方のことなんか何んにも知りやしませんわ。今だつてやつぱり處女と同じですわ。」
「はゝゝゝ。そんなことをいふと、あの松島の親爺が又××を上げるぜ。その×××かいふ人とさんざ面白いことをして置きながら、まだ夢が見足りないのかねえ。私が××××とすりやその算盤は確しかに××××××ねえ。はゝゝゝ。」
「まあ心細いことを仰有るわねえ。私これからは貴方お一人を頼りに思へるのかと思つてましたのに、……」と、いつて、お隆は白い指で恥かしさうに手拭を弄んでゐた。
田澤はいとしくなつて、
「はゝゝゝ。まあ、そんなに心細がることはないよ。それよりもこの溫泉は鹽分があるとみえて、體が浮くねえ。」×××
て×××××××××××××××××××××××××××
×××××××××××××××××××××××××××
×××

信州の旅から歸つて來ると、田澤はもうすつかりお隆が氣に入つて、自分で態々牛込の加賀町へ合宿を探して、そこで一週間に二三度づゝお隆に逢つた。合宿といふのは市の水道課へ出てゐる男の家の二階で、六疊一間を月十五圓で借りたのであつた。彼は唯貸間の札をみて借りた家なので、何の心置もなく店屋ものを取つたりしてお隆と面白可笑しく時を消した。彼は會社から歸りに寄ると、十一時には必ず歸つていつた。
それから三ケ月ばかりの間は、何事もなく過ごしてしまつた。お隆も田澤から月に百圓づゝ手當を貰ふので、ビルデイ

グの方も退いて、母親と二人で南榎町へ越して來て、そこでつゝましやかに暮してゐた。無論松島のところへもそれつきり足踏みもしなかつたが、さうなると暇でならないといつて、編物の手内職なぞを克明にやつてゐた。

田澤はさういふ關係になつても、決して自分の身分や名前をお隆に打明けなかつた。お隆はそれを水臭がつて或時なぞはそれが口舌の種になつて泣いたり拗ねたりしたが、それでも田澤は唯笑つて

「今に分るよ。さう物事の底をほぢくるもんぢやないさ。」などといつてゐた。

お隆はそのうちに漸次合宿で逢ふのを嫌ふやうになつて、どうかして田澤に南榎町の家へ來て貰へといつて頻くせがむやうになつた。女世帶で寂しくはあるし、それに母親ももう田澤にはすつかり惚れ込んでゐるので、一度でもいゝから家へ來て貰れといつて聞かなかつた。

田澤はその都度に、

「いや、お隆さん。さうなるとお互に早く飽きが來て面白くないもんさ。私は今迄にも三度ばかり藝者を圍つたこともあるが、どうも遊びと生活が一緒くたになると長續きがしないもんだよ。惚れた女の親の顔をみるのはよくよくの時さ。はゝゝゝ。」

お隆はその肩へ甘え倚つて、

「だつて、あなた、私にしてみると、こんな貴方、人の家の二階なんぞでこそこそ逢ふのは厭ですわ。どんな貧乏暮しをしてゐても、家だと又いろんな我儘もきくんですもの。」

「いや、それが可かんのさ。どうも女といふ者はすぐに女房氣取りになつてしまふから面白くなくなるんだよ。いつまでもいつまでも情人の氣でゐなくつちや駄目さ。女房なら家へ歸りや鼻につく奴が長火鉢の前へ年が年中控へてゐるんだもの。はゝゝゝ。まあ、いゝさ。こゝが厭なら、これから三度に一度は何處か別な處で逢はふ。それにこの決算期が過ぎりや度々出張があるから、その時にや又一緒に旅をしようよ。私が名前や身分を打明けないのも、それから妾宅なんぞを持たないのも、皆心あつてやつてゐるのさ。全く嘘ぢやない。私はどうかして君と一日でも長く逢つてゐたいと思ふんだ。私は今迄に逢つた女の中で君は兎に角忘れられないんだよ。だからお互に欠伸はしたくないぢやないか。」と、しんみになつていふ。

お隆は泣き出して、

「それは分つてますけれど、でも、でも、何んだか私、貴方が餘まり深入りして下さらないのが頼りないんですわ。いつでも捨てるのに都合がいゝやうなことばかりして被居るやうで、私

にすりや心細いんですもの。」

「はゝゝゝ、お互にまるで考へてゐることが裏腹だね。やつぱり君はまだ若いよ。はゝゝゝ。まあ、いゝ。兎に角今夜はこれで歸らう。そのかはり又市ケ谷の見附まで送つておいでよ。彼の道なら暗くつて人の目にたたないから。」

　さうした晩の別れはきつと涙だつた。

　決算期がすむと、田澤もいくらか暇になつたので、お隆を連れてひと晩泊りで千葉の方の海岸へいつたり、磯部あたりへいつたりした。大阪へ出張した時と、仙臺へ出張した時には二度ともお隆を連れていつてやつた。着物なども相當にこしらへてやつたので、何處へいつてもお隆は奥さん、奥さんと云はれて嬉んでゐた。

　仙臺から歸つて來る頃にはもう田澤もさすがにお隆に飽きてゐた。それに丁度九月へ入つて間もなく田澤は赤痢のやうな病氣に罹つて、駿河臺の病院へ二十日程入院したので、その爲めにお隆とは急にうとうとしくなつてしまつた。しかもその時にはもう彼は素人の味をすつかり覺えて、その病院の看護婦で、色の白い、ぽつちやりした福島生れの女をうまく手に入れてゐた。

　田澤はお隆に丁度八月と九月分の手當をやつてゐないのでせめて爲替でゞも送つてやらうかと思つたが、それもいつの間にかずるずるになつて、その二百圓は看護婦に貢つてやつた錦紗の拂ひに潰されてゐた。お隆がさうであるから無論合宿の間代なぞは忘れてしまつてゐた。

　それでももう十二月へ入つて、小雪のちらつく頃になると、田澤は何にかしら又お隆に逢ひ度くて耐らなくなつて來た。殊に空ッ風の吹き荒ぶ夕暮れに、丸の内の大街衢を砂塵に追はれながら歩いてゐると、通りすがりの若い女達が皆お隆のやうにみえてならなかつた。青い衿を少し開けて、毛絲の肩懸けで兩手を包みながら、前屈みにとつとゝ歩いてゐる女の後姿なぞをみると、田澤は耐らなくなるほどお隆が戀しかつた。

　或晩のこと田澤は精養軒の宴會へいつて歸りに微醉機嫌で、牛込の山伏町で自動車を下りた。そして思ひ切つて南榎町の暗い細路へ入つていつたが、五番地といふのが何處にあるのかまるで分らない。で、幸ひ角燈をちろめかせながら向ふからやつて來た郵便配達に聞くと、これこれだと教へて呉れた。

　教へられたまゝにとある大きな邸の門のやうなところを入つてゆくと、うねうねと曲りくねつた建仁寺垣の兩側に平家の小家が二十戸ほどもつゞいてゐる。それは皆五番地には五番地だつたが、お隆の母親の名である伊藤はなといふ標札は何處にも

見出せなかつた。

田澤は何んだか落膽氣落ちがしてしまつたが、さうなると猶ほのことと逢ひ度くなつて、一番奥の一軒へいつて、丁度水口のところに小婢がゐたので、そつと訊ねてみると、その小婢はすぐ鼻の先の三間ばかりの貧しげな平家を指さして、

「あの、伊藤さんはそこでしたが、先々月お引越しになつてしまひました。」といふ。

田澤は一層力のない聲になつて、

「あの、引越し先は御存知ないでせうか。」と、訊いてみたが、小婢も首を傾げて、

「さあ、つひこの間までそこの向ふのお家に被居つた方が知つて被居つたさうですけど、その方も何處かへお引越しになつてしまひましたんでねえ。」

田澤は仕方がなしに禮を云つてもと來た道の方へ歸つていつたが、お隆のゐたといふ家の垣根からは燈影がちろちろ洩れて、中では女の兒が大きな聲で節をつけて、學校の讀本を讀んでゐるのが聞えてゐた。主人は軍人ででもあるとみえ、格子の中には拍車のついた大きな長靴がぬぎつばなしてあつた。

田澤は何んとも云へない寂しい氣持ちで、近邊の酒屋や八百屋や、到頭終ひには差配の家までいつて聞いてみたが、お隆の行方はかいくれ知れなかつた。

その翌月、彼はもしや又松島の親爺のところへでも現はれてゐやしまいかと一縷の望みを囑して、態々阪本へいつてみたがそこも既に代が變つてゐた。これはあとで海上ビルの武藤に聞いた話であるが、あの松島の親爺はこの九月に悪事がばれて既に檢擧されてしまつてゐたのであつた。その頃の東京の某夕刊新聞に四段ぬきの大見出しで、その事實が詳細に摘發してあつたといふことも、田澤はその時初めて耳にしたのであつた。

こゝで話を切ると、まつたく餘韻があつていゝのだが、併しもう少し辛棒して讀んで貰ひ度い。而もこの後に語る事實はあまりに巧みすぎた小説のやうに思はれるかも知れないが、併し事實談として書き出したものであるから終まで事實を書かして貰ひ度い。

といふのは讀者の中にも或は記憶してゐる人があるかも知れないが、大震災があつてから丁度二月程經つて、各新聞の紙面が漸次整ひ出した頃、可成り眼星しい社會種の一つとして「女給殺ろし」といふ記事があつた。

私は毎日東京、地方を通じて二十八新聞も眼を通すほど新聞が好きなので、朝は殊に私にとつては樂しい時間なのである。

その朝明るい日の射す書齋で、紅茶を喫しながら何の氣なしにその女給殺ろしの記事を讀んでゐると、ふと私の胸に觸れる個所があつて、私は又繰返して讀んでみた。

　その事實はかうなのである。芝の露月町にあるカフヱ、ミドリといふ家で、その前夜の十時に、店でも美人で客を呼んでゐたお雪といふ女給が、芝浦に碇泊してゐる汽船の船員の爲めに拳銃で射殺されたのだといふ。その船員といふのは正直な青年で、つまりそのお雪に操られたのを恨んで、そんな恐ろしい犯行を敢てしたものらしいといふのであつた。しかもその記事のあとにお雪の素性が書いてあつたが、それをみると、お雪は實名を伊藤たまといつて、別名をお雪とも云ひ、お光とも云つてゐたといふ。伊藤たまは相當な會社員の娘で、彼女の姉は本郷の吉祥寺附近に開業してゐる某醫師のもとへ嫁いてゐて、その姉の談によると、おたまは女學校を出るとすぐに男關係が出來てそれ以來もう兩三年の間、殆んど音信もないと、反感を露はにみせた調子で新聞記者に話してゐた。

　そのうへその新聞には本人の寫眞が挿込んであつて、それでみると、いかにも女給のやうな風はしてゐるが、何んだか私には氣になつてならなかつた。その當時のことであるから寫眞版の刷りも極めて悪く、殊に目つきなぞはまるで出てゐなかつたが、併し私は何かしら田澤から聞いたお降といふものを結びつけて考へてみずにはゐられなかつた。

　私も物好きに、田澤が出社する時間を見計つて、會社へ電話をかけてみたが、田澤はいかにも意外さうな調子で、

「へえ、そんな記事が出てゐるかね。そいつは面白い。おい、子供、あすこへいつて今朝の新聞の綴ぢ込みを持つて來い。」と、いつてゐるのが電話口で聞えてゐた。

　やがて私の受話器には卓のうへでがさごそ新聞をひろげてゐる音が聞えたが、やがて、

「ほう、これか。成る程。」と、云つて、讀みだした。あの明るいバラツクで、卓上電話を引寄せて、片手で鼻かなんか撫でながら讀んでゐる田澤の姿が眼にみえるやうだつた。

　少時すると、又田澤の聲が、

「いや、これは恐れ入つたねえ。何にしろ寫眞版が質黑なんでよくは分らんが、どうもさう云はれてみると、眼尻のところや、生へ際があの女のやうな氣もするなあ。併し彼奴がカフヱの女給になつてゐるといふのは、ちつとどうも受取れん話だが、……」

　私は態と笑つて、

「併し、伊藤といふ姓と、それから姉が醫者のところへ嫁いて

見出せなかつた。

田澤は何んだか落膽氣落ちがしてしまつたが、さうなると猶ほのこと逢ひ度くなつて、一番奥の一軒へいつて、丁度水口のところに小婢がゐたので、そつと訊ねてみると、その小婢はすぐ鼻の先の三間ばかりの貧しげな平家を指さして、

「あの、伊藤さんはそこでしたが、先々月お引越しになつてしまひました。」といふ。

田澤は一層力のない聲になつて、

「あの、引越し先は御存知ないでせうか。」と、訊いてみたが、小婢も首を傾げて、

「さあ、つひこの間までそこの向ふのお家に被居つた方が知つて被居つたさうですけど、その方も何處かへお引越しになつてしまひましたんでねえ。」

田澤は仕方がなしに禮を云つてもと來た道の方へ歸つていつたが、お隆のゐたといふ家の垣根からは燈影がちろちろ洩れて、中では女の兒が大きな聲で節をつけて、學校の讀本を讀んでゐるのが聞えてゐた。主人は軍人ででもあるとみえ、格子の中には拍車のついた大きな長靴がぬぎつばなしてあつた。

田澤は何んとも云へない寂しい氣持ちで、近邊の酒屋や八百屋や、到頭終ひには差配の家までいつて聞いてみたが、お隆の行方はかいくれ知れなかつた。

その翌月、彼はもしや又松島の親爺のところへでも現はれてゐやしまいかと一縷の望みを囑して、態々阪本へいつてみたがそこも既に代が變つてゐた。これはあとで海上ビルの武藤に聞いた話であるが、あの松島の親爺はこの九月に惡事がばれて既に檢擧されてしまつてゐたのであつた。その頃の東京の某夕刊新聞に四段ぬきの大見出しで、その事實が詳細に摘發してあつたといふことも、田澤はその時初めて耳にしたのであつた。

こゝで話を切ると、まつたく餘韻があつていゝのだが、併しもう少し辛棒して讀んで貰ひ度い。而もこの後に語る事實はあまりに巧みすぎた小説のやうに思はれるかも知れないが、併し事實談として書き出したものであるから終まで事實を書かして貰ひ度い。

といふのは讀者の中にも或は記憶してゐる人があるかも知れないが、大震災があつてから丁度二月程經つて、各新聞の紙面が漸次整ひ出した頃、可成り眼星しい社會種の一つとして「女給殺ろし」といふ記事があつた。

私は毎日東京、地方を通じて二十八新聞も眼を通すほど新聞が好きなので、朝は殊に私にとつては樂しい時間なのである。

その朝明るい日の射す書齋で、紅茶を喫しながら何の氣なしにその女給殺ろしの記事を讀んでゐると、ふと私の胸に觸れる個所があつて、私は又繰返して讀んでみた。

その事實はかうなのである。芝の露月町にあるカフエ、ミドリといふ家で、その前夜の十時に、店でも美人で客を呼んでゐたお雪といふ女給が、芝浦に碇泊してゐる汽船の船員の爲めに拳銃で射殺されたのだといふ。その船員といふのは正直な青年で、つまりそのお雪に操られたのを恨んで、そんな恐ろしい犯行を敢てしたものらしいといふのであつた。しかもその記事のあとにお雪の素性が書いてあつたが、それをみると、お雪は實名を伊藤たまといつて、別名をお雪とも云ひ、お光とも云つてゐたといふ。伊藤たまは相當な會社員の娘で、彼女の姉は本郷の吉祥寺附近に開業してゐる某醫師のもとへ嫁いてゐて、その姉の談によると、おたまは女學校を出るとすぐに男關係が出來てそれ以來もう兩三年の間、殆んど音信もないと、反感を露はにみせた調子で新聞記者に話してゐた。

そのうへその新聞には本人の寫眞が刷込んであつて、それでみると、いかにも女給のやうな風はしてゐるが、何んだか私には氣になつてならなかつた。その當時のことであるから寫眞版の刷りも極めて惡く、殊に目つきなぞはまるで出てゐなかつたが、併し私は何かしら田澤から聞いたお降といふものを結びつけて考へてみずにはゐられなかつた。

私も物好きに、田澤が出社する時間を見計つて、會社へ電話をかけてみたが、田澤はいかにも意外さうな調子で、

「へえ、そんな記事が出てゐるかね。そいつは面白い。おい、子供、あすこへいつて今朝の新聞の綴ぢ込みを持つて來い。」と、いつてゐるのが電話口で聞えてゐた。

やがて私の受話器には卓のうへでがさごそ新聞をひろげてゐる音が聞えたが、やがて、

「ほう、これか。成る程。」と、云つて、讀みだした。あの明るいバラツクで、卓上電話を引寄せて、片手で鼻かなんか撫でながら讀んでゐる田澤の姿が眼にみえるやうだつた。

少時すると、又田澤の聲が、

「いや、これは恐れ入つたねえ。何にしろ寫眞版が眞黑なんでよくは分らんが、どうもさう云はれてみると、眼尻のところや、生へ際があの女のやうな氣もするなあ。併し彼奴がカフエの女給になつてゐるといふのは、ちつとどうも受取れん話だが、……」

私は態と笑つて、

「併し、伊藤といふ姓と、それから姉が醫者のところへ嫁いて

ゐるといふ事實が可成り有力な證據ぢやないか。そのうへ顏が少しでも似てゐりや猶ほ不思議だねえ。」

田澤はもう一度讀み返してゐるらしく、

「ふむ、拳銃で頭をやられて、即死したのか。年齢は二十三。まあ、かういふ女は大概三年や四年は同じ二十三でゐるから不思議はないとしても、併し可怪しいなあ。もつと寫眞版がはつきりしとると、すぐに解決がつくんだがなあ。あの特徴のある口許が分らんのが、いかにも殘念だよ。かうやつて遠く離してみると、成る程、似とるねえ。しかしあゝいふ泥水へ一度でも足を踏込んだ奴にはカツフエなんぞは馬鹿々々しいだらうがなあ。反對にカツフエからあの松島の親爺のところへ落ちていくんなら分つて居るが、……」

私は受話器をもつ手が草臥れて來たので、

「いや、まあ兎に角報告だけして置くよ。ゆつくり晝飯の時にでももう一度その寫眞をみて昔を偲ぶさ。はゝゝゝ。」

「やあ、大きにね。併しやつぱりお隆かなあ。尤もあれから三年も經つて居るんだし、それに震災といふ大篩ひがかゝつたから、或ひはあの女もカツフエあたりへ現はれたかも知れんねえ。いや、いづれにせよ、生前に一度、再會して置き度かつたよ。はゝゝゝ。これで君の通俗小説の材料が又ひとつ增えた譯かね。まあ、うんと印税のあがるやうな名篇傑作を書くさ。はゝゝゝ。まあ、兎に角今夜又例の家で逢はふ。そして飯でも食ひながら往事を談じようぢやないか。はゝゝゝ。」

私はそれで電話を切つてしまつたが、その晩、或旗亭で田澤に逢ふと、彼は「彼奴が、」「彼奴が」といつて、頻りにお隆のことばかり話題にしてゐた。彼は過ぎ去つたものに對する傷ましい思慕の念を露骨にみせて、自分の歩いて來た淋のやうな際りない愛慾の世界をしみじみ顧望するやうな眼つきをしてゐた。

私はあのお隆が、慘殺されたお雪でなくて、又いつか偶然の機會に、あの丸の内の雜踏の中かなにかであの女がひよつくと田澤の前へ現はれて來た方が却つて事實として面白くはないかと思つてゐる。震災後だけに通俗小説もそれ位本筋であつて欲しいではないか。　（四月十五日）

典籍の廢墟

失はれたる文獻の追懷

内田魯庵

（十二）圖畫類及び書史

東大には繪卷は摹寫ばかりであつたが凡そ百卷を算し、代表的の名卷は略ぼ備はつてゐた。が、摹寫といふ條、何れも名匠の手に成つたもので原本の眞を傳へないのは無かつた。中には山名貫義のもあつた。就中、住吉廣高の『紫式部日記』や田中訥言の『伴大納言』は『考古圖譜』にも載つてる摹寫中の名品であつた、訥言は曾て名卷七種を擇んで臨摹して熱田神宮に奉獻したので、東大の『伴大納言』は即ち其中の一卷であつた。他の六卷は『餓鬼草子』が淺草文庫から轉じて今に帝室博物館の銘物となつてる外は皆亡佚して了つた。原本と光輝を爭ふに足ると有らゆる鑑藏家から嘆稱された此の『伴大納言』、名卷が

失はれたのは限りない遺憾であつた。

支那人の筆であるが、『海洋清宴圖』といふ長崎貿易の實境を描いた奇絲極緻の長卷があつた。元祿六年長崎の唐館が新築されてから同十五年の新地の埋立がマダ竣成しないまでの間の作である。筆者は多分長崎在留の支那人であらうといふ外的確に知る事は出來ないが頗る絢爛細緻を究めたものであつた。日支の發着港灣を兩端として、其間の煙波縹渺たる航程を彼我の商船が來往する圖で、當時の通商の殷盛を徴するに足るものであつた。不思議な事には支那の商船が悉く日章旗を揭げてゐるので、數年前文求堂田中慶太郎氏が支那から本圖を將來した時は史學者間の興味を湧かして、日章旗に關する從來の諸說以外の新資料を提供するものとして一時史學界の問題となつたもの

だ。此圖卷は其後史學會の大會に展觀された事があるから、當時一覽して猶ほ印象を留めるものもあらう

『史學雜誌』に據ると元祿頃の江戸風俗繪卷と非凾某筆の德川家年中行事の畫帖があつたさうだ、最も珍奇なるは寛永九年の刑屍解剖圖、同十二年の婦人刑屍解剖圖である。寛永と云へば十七世紀の初頭で、其頃の解剖圖は歐羅巴でも珍らしいのである。歐羅巴の文明が西教傳來と共に案外早くから移入されたのを證する一資料であつたが、之もアレも皆灰となつて了つた。

○

圖書館で罹災し古書圖を追懷すると同時に惜まれるのは同じく大學の文科の研究室で燒けたアジャンタの壁畫及び燉煌發掘畫の摹本であつた。是等はマダ現存するから再び摹本を作る事が出來るといふ條、之が爲めに特に印度に畫家を派する費用は容易ではない。且費用よりは毒蛇猛獸の出沒する瘴癘の地を踏んで半暗黑の洞窟内で勞作する苦辛は一と通りでなくて、之に耐ゆる適當の畫家を得るはヨリ以上困難である。且又壁畫は日に剝落するから何年後に再び摹寫するも失はれたものと同じものを得られる乎否かは計られない。加ふるにアジャンタ壁畫全部の寫眞も亦灰となつて了つた。アジャンタ壁畫の一部は印度佛教藝術史のドンナ本にも載つてゐるが、全部の寫眞は亦容易に獲られるものでない。

○

帝大圖書館は失はれた書籍を一々憶起せば何百枚を重ねても足りないが、最後に書史目錄等典籍に關する雜著の滅亡を悼惜して帝大文庫の罹災記事を擱筆しやう。

帝大圖書館には大英博物館の總書目を初め和漢洋の書史目錄が凡そ一千二三百冊有つたさうだ。此の書史目錄は圖書館の生命であつて、廣大なる文獻の大海を渉るの羅鍼盤である。元來日本や支那には書目の類が餘り多く無いが、歐羅巴の文獻の廣大なるは書目だけでも一文庫を作るに足るほどの數がある。此の廣大なるビブオグラフヰーの分野に比ぶれば一千二三百冊は渺茫たる大海の小さな入江に過ぎないのであるが、悲しむべきは日本では之だけの書史目錄でさへも備へてる圖書館は東大(或は京大?)を除いて恐らく他に一館も無からう。一千二三百冊どころか百冊と權威ある書目を揃へてる圖書館は眞に寥々指を折るほどしか無いのである。有體に交へば日本では區役所

の戸籍係でも銀行の帳面方でも出來る圖書館事務をさへ執ればライブラリヤンの能事は畢れるものとして肝腎の圖書學の研鑽の如きは全く無用視されてをる。一千有餘の圖書館があつても目錄の興味を理解するライブラリヤンが何人ある乎疑問である。隨つて如何なる貴重の書史でも極めて趣味ある古書の校勘や書籍の歴史逸聞でも渠等には豚に眞珠であつて、此程の書籍を備ふる必要も興味も渠等は感じないのである。

帝大圖書館の一千二三百冊の書史目錄の內容は知らぬが、其中には必ず再び容易に獲られないものがあつたらうと想像する、目錄書史の數は概して刊行部數の少ないものゆゑ忽ち絕版となつて其機を外すと容易に獲られなくなる。書肆の目錄でさへが屢々稀覯書扱ひされて重價を呼ぶものが珍らしく無いのだから、況してや專門書史學者の著述した特殊の書目が一端絕版となるや忽ち昂貴して容易に獲られなくなるは怪むに足りない。(日本でも近來『國書解題』や『隨筆索引』が日に益々市價を騰貴するは目前の例である。帝大の此の書史の蒐集は恐らく和田館長の最も苦辛したものゝ一つで、東大圖書館の復興を經營するに方つて殊に惜むべき損失であつた。)

○

文獻といふよりは寧ろ考古的遺物であるが、帝大にはアッシリヤの楔形文字の瓦(タブレツト)槧が圖書館に三片、上田敎室に二片あつたのが亦灰燼となつて了つた。アッシリヤ遺物であるが埃及のナイル河畔から出土したものであるさうだ。アッシリヤの瓦(タブレツト)槧は特殊の來歷あるのものか著名な史蹟から出土したもので無い限りは歐羅巴では餘り珍らしくないさうだが、日本では東大と京大とに各々若干片あるだけだから、此の滅亡も亦悼むべきものであつた。

(因云、東大所藏書の解題に就ては小中村博士の著述稿本が有つた。和田前館長が心を籠めて編述した帝大稀覯書解題の稿本もあつた。切めては之だけなりと殘つてゐたら災前五車の富を偲ぶ事も出來たらうに、今では各自の覺束ない記憶や曾て過眼した印象を辿る外は無い。和田翁の近簡に、往時を追懷すれば頭岑々を覺ゆとあつた胸次の感慨は同情するに餘りがある。帝大焚書の項を終るに方つて厚く前館長に敬悼の意を表する。)

(十三) 松廼舍文庫と黑川文庫

帝大圖書館に次いで罹災した私人の蒐書で惜まれるのは數あるが、就中最も痛惜されるのは安田善次郎氏の松廼舍文庫と黑川眞道氏の黑川文庫とである。

安田邸は猛火の旋風を集中して此世からの焦熱地獄を現出した被服廠に隣接した最大危險圏内に在つて、現に邸内に逃込んで燒死したものが五百人からあつたさうだ。主人善次郎夫妻及び家族は好運にも大磯に避暑してマダ歸らなかつたので、別邸が倒潰したゞけで無事だつたが、本邸に留守番してゐた三十何人の使用人は四人を除す外は皆非業に死んで了つた。隣邸善雄氏の一家上下十七人が全滅したは新聞に報道された通りで、安田氏は實に今度の震災の最大不幸者の一人であつた。「本ぐらゐは仕方が無いので、若し東京にゐたら九分九厘までは自分の命もなかつたでせう。」と震後初めて會つた時、氏は憮然として感慨を洩らした。

云はゞ文庫が氏の身代りとなつたんだから氏としては大難が小難で濟んだとアキラメられない事は無からう。且三井岩崎と鼎足さる大富豪であるから、先代が趣味の人で無かつたにしろ自然と流れ込んだ萬金の寶器寶軸の類も決して少なくなかつたらうし、氏自身の蒐集した披筒の中にも千金に換え難い大銘物があつたさうだ。金に換算したら氏の富の九牛の一毛にだも當らない文庫の如きは今度の震災で蒙むつた氏の損害中の最小のものであるも解らない。が、松廼舍文庫は當代善次郎氏の三十餘年の採訪の苦辛の結晶で、貨殖以外に文献に志の篤い氏の業績を後世に殘すものであつた。

今は昔し藥研堀に經常の名で通つた小さな古本屋があつた。傍に眼も耳も無いくせに矢鱈と黴臭い小汚ない本を集めて捻つてゐるので、掘出し自慢の古本通が屢々出入したもんだ。經常はモウ三十年も前に故人となつて夫から間もなく店を閉ぢたから今では經常の名を知つてゐるものは殆んど無い。安田氏は其頃の邸宅が近かつたのみで少年時代から此の經常に出入してゐたので、蒐書の淵源の久しきは今では既に古本界の元老である。

松廼舍文庫は別に建物があつたのでは無い。善次郎氏の住邸の一部に藏儲されたので、書籍の數量は決して多くなかつた。數年前の全國圖書館大會に藏儲の一部を展觀した事があつたが、其時出陳されたのは三百七十七部一千冊であつた。藏書は總目錄が出來てゐなかつたから確實な數は解らぬが、恐らく六七千冊ぐらゐなもんだつたらう。が、數量は多く無かつたが選擇つたもので、前記の會に展觀された三百七十七部の如きは皆一と粒選で、一點でも稀覯中の稀覯ならさるは無かつた。

且安田氏は架上に既に備へたものでもヨリ以上の善本出づる時は必ず常に引換えたから、松廼舍文庫本は大抵表紙も題簽も完全に具足した汚損も蟲蝕も無いウブなものであり、改裝したものは又極めて善美を盡してゐた。夫故に同じものでも松廼舍

文庫本は有觸れた世間の藏書家の所藏とは比較にならぬ美本であつた。從つて松廼舍文庫本の多くは再び獲られないものであるが、縱令獲られても此の如き美本は決して再び望まれないだらう。例へば松廼舍文庫の中川翁所藏の『好色一代女』の如き、近時の大蒐書家中川得樓翁が家藏第一の秘佛しとて群客に誇つてゐた佳本で、表紙から題簽から目錄の貼外題までが具備した完全な初摺本であつた。所謂軟いのは元來が遊戲的讀物であるから兎角に粗末に扱はれて汚れてゐるのが普通で、二百五十年前の俗文學で此の如く完全に汚損も蟲蝕も無くウブのまゝ保存されたのは西鶴本で無くとも殆んど絕無である。此の『一代女』の滅亡は書籍としても亦當時の浮世草子の完全な標本を失つたわけである。

又例へば種彥の『用捨箱』の自筆草稿本の表紙の如き高尾切とでも云ひさうな散紅葉の極めて細緻な刺繡であつた。シカモ刺繡通有の重苦しさに失しない淸楚な意匠であつた。佛蘭西では刺繡裝釘を珍重して特に之に關する著述もあるが、日本では刺繡に長じてゐるに拘らず書籍の裝潢に應用したのは餘り多く無い。松廼舍文庫の此の『用捨箱』の裝潢は雅味ある刺繡表紙の好標本であつたが、今や殘念にも失はれて了つた。

松廼舍文庫は劇と能樂とを中心として、此部門に屬する珍本稀籍は殆んど有らん限りを蒐め盡した。寬永正保頃からの芝居狂言本、繪本、繪番附の類には松廼舍文庫以外に見られない天下一品のものがあつた。殊に役者評判記は普次郎氏が架藏を基礎として年表を作つて知人に頒つたほど萬治寬文頃の若衆時代からの古い評判記が殆んど洩れなく揃つてゐた。又例へば二代目柏筵の『椎本先生語類』や芝翫の『歌舞雜談』や『秀鶴册子』の如き名優自筆本は眞に劇道の六韜三略であつた。

又近年松廼舍文庫の架藏に歸した『只誠漫錄』も亦明治の初期の劇仙と稱された關根只誠翁の隨筆として劇道四庫全書の光輝を添ゆるに足るものであつた。元來『只誠漫錄』は何册で揃うものか、又怎ういふわけでポツ／＼斷片的に坊間に現れたのか知らぬが、普次郎氏は坊間に出る度每にポツ／＼蒐めてゐたが、昨年だか一昨年だか關根家の藏書を一手に讓受けた時『只誠漫錄』の殘册も亦盡く架藏に移つた。

『只誠漫錄』は只誠翁が古今雜書を涉獵した讀餘の抄錄や親しく見聞した市井の雜事の書留であるが、大部分が劇に關係して劇道の故實や慣習や淨瑠璃や狂言の取材の考證や作者や役者の心得方や芝居の內幕や樂屋咄や街の噂など何呉れとなく書集めたもので、無系統無秩序の隨筆であるが劇園百般の百科全書ともいふべきものであつた。故寬村翁の如きも亦只誠翁の劇道の

博通には推服してゐたので、屢々『只誠漫錄』に據て考證した事があつた。殊に劇の衰頽時代たる明治前後の梨園の消息に關しては『只誠漫錄』は翁が親しく聞睹した世間に餘り知られない多くの資料を集めてゐた。

劇に關する專門文庫ではマダ公開されなかつたが湯淺半月が管理した俳優組合の演劇圖書館は梨園の名門の傳家の秘書の集積として評判されてゐた。が、數量は知らず、質に於ては松迺舍文庫の一粒撰（ひとつぶえり）の珍本稀籍の蒐集に一籌は脅か五籌も十籌も輸してゐたは當然想像される。が、其の演劇圖書館もマダ公開されない中に全滅して了つたので、劇道の四庫は大部分が烏有に歸して了つたかの感がある。

前條帝大の項下に述べた昨年五月の南葵文庫の江戸時代小說展覽會には年代排列の順序上帝大本の遺缺を補ふ爲めに松迺舍本も亦多くは出陳された。此展覽會で最も衆目を集めた『伊曾保物語』の古活異版二種は松迺舍文庫の逸品であつた。嘶本中の最古版たる元和活字の『戯言養氣集』も亦松迺舍の庫以外に類本を見ないものであつた。赤本中の最古版たる延寶の兒供オモチヤ本に到つては眞に珍中の珍、數年前或る紙屑商の手から某好事家が拾ひ出したのが轉々して松迺舍に收まつたもので、古本の掘出物語に入るべき珍物であつた。就中、最も異彩を放つたのは文福茶釜の前身と見做すべき『東山ばけ狐』であつた。表題が『ばけ狐』とある如く茶釜の化けた挿畫が狸でなくて狐であるのは此のおナジミのお伽噺の變遷を語るものとして最も興味を牽いた。狐狸研究家の渡瀨庄三郎博士は此書の興味が忘れ難くて二日間續いて來觀した。

松迺舍文庫は所謂軟派物のみで無く、善次郎氏の興味は近年漸く硬い物に傾いて此方面の稀覯にも亦富んでゐた。正平本論語や南宗寺論語や慶長勅版の四書及び孝經や元和勅版の銅活『皇宋事類類苑』や室町以前の古刊の『人天眼目』や正中版の『寒山詩』や森立之自筆の『經籍訪古志』初稿本や市野迷庵の『正平板論語札記』の自筆稿本や西村兼文が輯めた『歷代古板譜』や皆尙古家や好書家を隨喜せしむるものであつた。

就中、松迺舍文庫の大銘物として着目したのは棭齋自筆稿本『日本現在書目證註稿』と藤原惺窩自筆の『莊子郭象註』とであつた。前者は幸ひに同好間で數部を謄寫し頒つたが、本文は傳はるにしても數ある棭齋自筆本の中でも殊に勝れて遒勁精嚴な筆蹟を示した此の自筆稿本の失はれたのは棭齋の隨喜者に取つては恰も隋珠の碎かれた如き感が有つた。後者の『莊子郭象註』は果して惺窩の自筆であるか否かは人各々の意見があつたらう。が、筆蹟は極めて雄健眞率大儒の面影

を彷彿するに足るものがあつた。且尋常抄本と異りて亥豕を鮮錀したもので。其中自づから惺窩の面目を窺ふべき創見があつたらうと殊に惜まれる。壽次郎氏は松迺舍文庫中第一の稀本と愛惜して全部を複製して同好に頒つの計畫があつたのだが、其志を果さない中に烏有に歸したのは誠に遺憾であつた。

壽次郎氏は又、松迺舍文庫の藏書解題目錄を作つて知人に頒つの計畫があつて、其原稿は既に脱稿して印刷に附するばかりになつてゐたが、未だ着手する遑の無い中に文庫と共に目錄の原稿までが燒失して了つた。之を追懷するにつけても唯だ記憶や印象を辿るのみである。

○

松迺舍文庫と竝んで最も惜まれるのは黒川文庫の罹災であつた。黒川文庫は春村、眞頼兩先生及び當主眞道氏三代の蒐書であつて、稀本異版の富を以て鳴る。文庫は大小二棟の土藏であつて大庫が池魚に累られたが。小庫が輕うじて免かれて約半數が助かつたのは切めてもの幸福であつた。

黒川文庫は二十四種に類別して大小二棟に分藏されてゐた。燒失したのは歷史、傳記、索引、技藝、隨筆、地理、圖譜、漢籍、繪卷、文書、其他春村翁草稿全部及び眞頼翁草稿の一部で、其の主なるものは左の如し。

(1) 『六國史』（國學諸先賢の手入校合本）
(2) 内藤廣前『國史拾遺』稿本
(3) 金澤文庫本『吾妻鏡』寫本
(4) 傳策彥筆『源平盛衰記』
(5) 古寫『太平記』
(6) 檜山坦齋『史稿』五百九十五册
(7) 内藤廣前『姓氏錄抄註』十七册
(8) 細井貞雄『姓氏考』七册
(9) 高橋廣道『百人傳彙』二十册
(10) 平賀源内自筆『陶器工風書上』
(11) 『畫師冠字類考』十六册
(12) 雅山自筆『畫工便覽』
(13) 篠田喜一『筆のみたま』稿本
(14) 『柳庵隨筆』自筆本十册
(15) 大塚嘉樹『隨筆』三十九册
(16) 『探古錄』原本
(17) 三枝氏『溫故拙記』原本十一册
(18) 朝鮮活字『龍龕手鑑』
(19) 同『韻會』
(20) 五山板『海藏略韻』
(21) 大内本『聚分韻略』

(22) 同『十八史略』
(23) 支那古寫本『太平御覽』二百册
(24) 明德四年板『韻』
(25) 文『琴緖』依藤太輔宮給〻』
(26) 獨山人稿本『流觀百圖』
(27) 春村遺著『猿樂考證』十一册
(28) 同『法華八講集成』八册
(29) 同『碩鼠漫筆』(未定稿未刊本)十册
(30) 同『音韻考證』(未定稿)十册
(31) 同『歷代地方名目抄』六册
(32) 同國語字音に係るもの一切

以上は燒失したものゝ概略である。唯だ其書名を一瞥するだけでも此の黑川文庫の一棟の燒失が我が文献の大損失であるのが首肯かれる。此中、內藤廣前の『國史拾遺』は大學に、篠原喜一の『筆のみだま』は文部省に各々謄寫された複本があつたが、複本も亦失はれて了つた。朝鮮活字の「龍龕手鑑』や五山板の『海藏略韻』は稀覯中の稀覯、容易に再び獲られないものである。大內本二種に到つては古刊中最も傳來の少ないものであつて、大學にも無かつたし上野の圖書館にも亦無いものである。元來大內本といふは山口の大內氏の私刊で無くて京都の大內で上木した勅版の一であろといふ說もあるが、何れにしても御本極めて少なく、三百六十五日古板に沒頭する老書舖でさへも知らないものがあるくらゐで、黑川文庫の大內本は殆んど海內一本の觀があつたのだ。

就中、最も遺憾なるは黑川文庫の誇りとして喧傳された國學諸家の索引の白筆稿本全部の燒失である。其中には岸本由豆流、同由豆伎、內藤廣前、山崎知雄、北靜廬、關岡野洲良、小山田與淸、村田了阿、和學講談所編纂等があつた。其以外春村眞賴兩先生二代の力を盡して纂輯した大索引があつたが、皆一炬に附されて了つた。是等は皆各々一代の精力を捧げたもの、我が一千年間の文献の大ガゼテイーヤであつた。且惣てが盡く白筆の稿本であつて、一部の複本をも殘さないで全滅して了つたは文献の爲め眞に悲むべき大痛恨事であつた。

が、黑川文庫は一棟を剩した爲めに神祇、宗敎、武家、外交、辭書、有職故實、法制、國文、敎育、遊戲等の部門に屬するものが燹火を免かれたのは眞に慶福であつた。殊に『伊呂波字類抄』中の最古寫として聞ゆる黑川家の署名の大銘物たる承久の奧書きある同書の安危は古書校勘家及び好書家間に最も氣遣はれたが、偶々同好相集つて罹災の典籍を追惜しつゝある席上、此の貴重なる『伊呂波字類抄』が無事であつたといふ吉報に接した時は皆思はず歡聲を舉げて此の果報目出度き貴重書の無事

の爲め祝杯を擧げた。

（十四） 竹柏園の萬葉稿と南天莊の古筆稿

佐々木信綱博士の竹柏園は劫火の圏外であつた。歌人以外にビブリオフアイルとしても亦五本の指に數へられる佐々木氏の貴重なる儲藏は幸ひに震火を免かれたが、此の天災の飛禍に災せられた佐々木氏の損失は文獻上重大なるもの丶一つであつた。之に就ては佐々木自身及び關係者の巨細の記述が昨年十二月刊行の『心之花』の震災號に載つてるから爰には簡單な概要に留めて置かう。

佐々木氏がライフ・ウオークとしての萬葉研究は斯界に知らざるものは無い。殊に其業績の一たる『校本萬葉集』の發刊は啻に歌學界のみならず有らゆる讀書人に期待されてゐた。着手以來十二年、容易ならざる苦辛慘憺を積んで漸く大成した此の『校本萬葉集』は全部の印刷を竣つて裝釘も亦殆んど成らんとした時、此の不慮の震火に遭つて一部五千頁五百部が一部をも剩さず盡く製本所で全滅して了つた。剩つさへ金屬原版までが印刷所で燒失して了つた。十二年の容易ならざる苦辛慘憺が天災とは云ひながら一朝忽然として失はれて了つた佐々木氏の悲痛落膽は學者としては産みの子を喪つたにも勝るものが有らうと深く同情する。但だ幸ひなるは一切が失はれて了つたが、發行所博文館に在つた一部の見本の半分と佐々木氏及び校合者の手許に在つた二部の校正刷が殘つたさうだから、イツかは再び印刷される機會が必ず有らうと信ずる。

且、加ふるに此の『校本萬葉集』を完成する爲めの資料として氏が蒐めたものや或は他借したもの丶内の最稀本、氏が專ら參考に資した大學所藏本、及び『校本萬葉集』の完成を記念する爲めの萬葉展覽會を十月十五日帝大の山上集會所で開催する豫定で暫らく保管して置いた諸家の秘本、及び校本完成の過程を語る基礎的諸校合本竝に各種草稿本等を帝大國語教室で燒失して了つた。其中には再び永久に歸らざる不換金の貴重書も有つた。『心の花』には佐々木氏が一々簡單なる解題を與へて其の貴重なる所以を説明してをるから、爰には簡單に書名だけを擧げて置く。

（甲） 諸家秘本

(1) 『萬葉集目錄』（近衛公爵所藏）
(2) 飛鳥井雅章筆本（古河男爵所藏）
(3) 『萬葉童蒙抄』稿本（松井簡治氏所藏）

(4)『萬葉集』中院系統本(谷森武男氏所藏)
(5)『八雲御抄』古抄本(關戶森彥氏所藏)
(6)『萬葉集代匠記』似閑本(橋純一氏所藏)
(7)『萬葉考』五種(竹柏園所藏)
(8)『萬葉略解』況齋手澤本(同上)
(9)『袖中抄』太田全齋手澤本(同上)

(乙)『校本萬葉集』

(1) 校合底本二十册(二十種の萬葉を以て校合した校本の基礎本)
(2) 活版原稿百二十八册
(3) 淨書本二十册(金屬版原稿)
(4) 寛永本二十册(註釋附說書入本)
(5) 同二十册(金澤本校合入)
(6) 「類聚古集」十六册(原本にて校し本集の順に改めたもの)
(7) 元暦校本稿版本三册(原本との對校入)
(8) 『袖中抄』二十册(有栖川宮家本校合入)
(9) 『八雲御抄』(諸本校合入)
(10) 『古葉略類聚抄』索引
(11) 『童蒙抄』、『袖中抄』、『色葉集』等の萬葉索引
(12) 「八雲御抄」索引
(13) 『萬葉集年譜』

(11) 萬葉集諸本寫眞類

右の外『校本萬葉集』の參考に資した帝大圖書館及び國語研究室で烏有に歸した貴重書は澤山あつた。其中で最も惜まれるのは佐々木氏が斡旋して東大に寄托された飛鳥井雅古氏所藏の鹿持雅澄『萬葉集古義』稿本三十四册附卷十四册(竝に雜著稿本三十九册)の燒失であつた。『古義』は洋裝活字本にまで複刻流布されてゐるが、此の偉大なる萬葉集の巨匠の苦辛の跡を辿るべき此の稿本の堙滅は我が文献の痛恨事であつた。(萬葉に關する諸家の典籍の燒失に就ては『心之花』の震災號に委しく報道せらる。)

佐々木氏は萬葉以外に近頃收得した横山由清遺書の中の法制に關する著述稿本及び手澤本百五十部を法制史研究室で、高山寺本の『高野鎭守記』後奈良天皇宸翰の『俊忠集』其他二十餘部の貴重者、竝に桂萬葉切の一幀を各々其の寄托先きで燒失した。劫火の圏外に在つた竹柏園文庫も亦其の秘襲の多くを禍ひされた。

○

竹柏園と相對立する井上通泰博士の南天莊文庫は亦震火に禍ひされて文献上最も痛惜される一つであつた。南天莊罹災典籍は數千卷であるさうだが、其内容は委しく知らない。が、最も惜

まれるは二十年前『蕃山考』を發表されて以來益々深く精究されて殆んど大成した熊澤蕃山傳の稿本と此研究の爲め集められた資料全部の燒失である。之に次いで折に觸れて何くれとなく所懷や考證を披瀝された隨筆が累積して數十冊となつたのが皆盡く灰燼となつて了つた。其中には前人未發の創見や考證該博な新說や極めて趣味深い雜談や含蓄の饒かな教訓が數多く有つたらうと想像されるが、未だ其の片鱗をも世に示さゞる中に燒燼して了つたは眞に遺憾である。

南天莊は亦稀覯の筆跡に富んでゐた。數四の御宸翰を初め朝山意林庵や熊澤了介の短冊の如き傳來極めて少ないものがあつた。就中同人間に最も嘖々されたのは中臣祐春の六首詠草切であつた。祐春の筆蹟が元來稀なる中に此詠草は殊に勝れてゐた。其上に六首の中の一つが元冠を詠じたものであるのが一段と好事家の興味を湧かした。此斷簡は前田香雪の舊藏で曾て『好古類纂』や『書苑』に紹介され佐々木氏の『歌學史』にも挿圖された大銘物であつた。南天莊は又十五行の藍紙萬葉切を庫中の誇りとしてゐた。藍紙萬葉が平安時代書寫の五種の萬葉の一として最も貴重なるは特に呶々するまでも無い。數行と雖ども容易に手に入るべきものでは無いので、本とは某名門の傳來の家寶であつたのを特に割愛されたといふは全く通泰博士の學德に由る。是等の南天莊の誇りとすべき名什は皆火中に亡びて了つた。通泰博士の遺憾は同情するに餘りがある。

○

（因云。近年安田氏が短冊蒐集を初むるや彌富氏の著名なる藏什を初め帝都短冊家の蒐集は百川海に入るが如くに松廼舍文庫に集まつた。此の大蒐集の全滅は松廼舍文庫の重なる災禍の一つであつた。之に加ふるに數こそ多くは無いが南天莊の選擇(よりすぐ)つた名短冊が殆んど全滅し、帝大所藏の著名なる阿川の短冊帖も四帖の中の一帖を燒いて了つた。今や帝都の短冊家としては武藤一郎氏と原邦造氏と相對立するあるのみである。更に加ふるに數ある手鑑中殊に挺んでた梅川安藏氏の著名なる手鑑が失はれたと聞くは古筆界も亦落莫の感がある。）

（一五）市川氏兄弟の典籍禍

古筆の落莫を惜み帝大の火が個人の私藏にも禍ひしたを思ふと、先づ第一に惜まるゝは帝大文科の英文學研究室で失はれた市川三喜博士の古典籍及び英國名流の筆蹟(オートグラフ)であつた。博士は言語學及び英國古典學に於て我が學界の第一人者である。涉獵最も廣く、在歐中は到る處の古書肆に就て古書を探訪するを殆んどレッスンとした。藏書數萬、個人として洋書を備へる博士

の如きは甚だ稀れである。殊に在歐中蒐集した英佛獨古今名流の筆蹟（オートグラフ）二百三十通は日本に於ては恐らく比ひ少きものだらう。此中の八十通と千八百二十年前の古刊全部約三百卷が帝大研究室で灰燼に歸して了つた。

氏の藏書の富からすれば量に於ては極めて少數であるし、學術上の價値からすれば更にヨリ貴いものもあらう。が、市場に重價を呼ぶもので、殊に日本に在つては容易に再び獲難いのは是等の筆蹟（オートグラフ）や古刊本であつた。氏が是等の稀覯の全部を擧げて特に自宅より移して大學の研究室に置いた所以は畢竟祝融氏を免かるゝにヨリ安全と信じたからであらう。前記の佐々木氏を初め大學で私藏を燒いた諸教授は皆自宅に於ける萬一の場合を危惧したからである。が、佐々木氏も市川氏も吉野氏も自宅は瓦一枚落ちず火の子一つ飛んで來なかつたが、大學の安全を信じた爲めに意外の飛禍を買つた。

市川氏の失はれた八十通の筆蹟（オートグラフ）中にはグラッドストーンを初めカアライル、ラスキンの二大評論家、フルード、フリーマンの二大史家、ヒーマンス、エヂウオースの二閨秀、ダアウヰン、フアラデイ、ハックスレー、テインダル、トムソン等近代科學界の巨星、詩畫兩界に跨がる偉才ロセッチ兄妹、近代梨園の鬼才オトリーや艶名一世に隱れなきテリー夫人や文藝學術界の多くの明星を含んでゐた。幸ひに免かれた殘餘の百數十通の中には猶ほ幾多の名流巨匠を集めてゐるが、最も燦爛たる光輝の大部分を失つたのは此種の蒐集の比ひない日本では今度の災厄中最も惜むべきものゝ一つである。

古刊本は主として字書、文法、修辭等言語學に關するものを中心とし、多くは著者の自署或は先賢の識語又は書入がある稀本である。其中にはスキート教授の“*A Student's pastime*”に載つてる Wm. Somner の “Dictionarium Saxonica-Latino-Anglicum 1659”（一三五九年版）や大英博物館の目錄にも見えない Nicholas Brett の Essai pour former une introduction à la Langue Angloise（一三七三七年版）や Owen price の “English Orthographie（一六七〇年版）や、複製ではあるが僅に百二十五部しか印刷しないゲッチンゲン圖書館所藏の英國最古の噺本一五百二六年版の “A Hundred Merry Tales” の石印倣古版（一八八七年版）やアヂソンの全集初版（一七二一年版）やツンベルグの『日本紀行』の佛譯（一七九四年版）や、殊に珍らしきは第二版（一六一二年版）ではあるが Torsellini の “Vita del S. Francesco Savelio” があつた。市川氏は震災當時恰も藏書目錄を印刷中であつたので、震災の爲め印刷遲れて本年一月下旬漸く第一冊を知人に頒つたが、最も

燦爛たる頁の全部が燒燬の星標(アステリスク)を以て符號されてゐたは傷心の涯りであつた。

　市川氏は故萬庵先生の子。書道の名門の出としての傳統の興味が恐らく歐洲名流の筆蹟(オートグラフ)の蒐集に志さしめたのであらう。三喜氏の長兄三陽氏も下谷の自邸が震火に禍ひされた。市川氏兄弟の父祖米庵、萬庵は相續ぎて墨蹟法帖等を蒐集し、十數年前の米庵會には稀覯の碑拓、明清の書畫等鑑賞家をして終日去るに忍びざらしめたものを多く展觀した。幸ひ是等の貴重品の大部分は先年博物館に寄托した爲めに今度の刧火をも免かれたさうだが、三陽氏の書屋に寛齋の自筆稿本全部（其中には著名な『金石私志』や『青蚨私志』の自筆草稿があつた、）及び米庵の『長崎日記』や武淸の北山肖像や山陽の手紙など寛齋、米庵の遺物がマダ澤山あつたのが全部烏有に歸して了つた。市川氏兄弟の文献上の損失も可成重大なものであつた。

（十六）早川氏の貴重なる植物學文庫と小栗氏の眞言の道場

　洋書の蒐集家としては世間には餘り知られないが早川龍助氏は少くも五本の指に數ふべき蒐集家である。早川龍助と云つても誰も餘り知るまいが、三越の向側の室町の漬物屋の主人（震災前先代が死んで新たに相續した）である。漬物屋の若主人と云つても早くから英獨に留學して植物學を究めた近代的科學者で、其篤學は科學界には認められてゐる。留學時代から蒐書に志篤く、專攻の植物學書を中心として好事的には歐洲人の東亞の旅行記を蒐めてゐた。英獨の古書肆を漁つて齎らし歸つた珍本稀籍も無數であつたさうだが、歸朝以來益々集めて飽かず、蒐書の爲めに毎月費す處少くも五百圓を下らず、千圓二千圓と超加する事さへ珍らしくなく、數年連續して曾て弛まなかつたさうだ。書庫の富が尋常好書家の比に非ざるは之を以ても知るべく、稀覯の大著述を集積する植物學文庫としては恐らく大學以上であつたらう。

　早川氏の文庫は不幸にしてマダ其一隅をだも瞥見する機會を持たなかつたので、蒐書の内容を委しく知らぬが、仄聞する處に由ればフランコの著名なる『比島植物誌』（四冊）やブルーメの『瓜哇植物志』（四冊）のやうな大著が洩れなく集まつてゐたさうだ。植物學上世界の權威として知られるカーチスの植物雜誌(ボタニカルマガジン)も初號から現在まで（時價凡そ三千圓）揃つてゐたさうだ。殊に最も貴重なるは千八百七十年頃から發刊して二十四冊まで刊行し今猶ほ未完なる Saccardo の "Sylloge Fungorum"

(『菌譜』、時價凡そ三千磅)である。此のサツカードの菌譜の全部が揃つてるのは日本では恐らく早川氏の文庫のみで、海内一本であつたらうと思ふ。

早川氏は愛書家で、近年は日本の稀覯書類をボツ〳〵集められたさうだが、氏の文庫を重からしむるものは是等の貴重なる植物圖譜であつた。此の貴重なる文庫が氏の小梅の別邸で灰燼となつたは植物學上の文献の重大なる損失であつた。

○

早川氏即ち小田原屋の本家筋に當るは田町の小田原屋即ち小栗兆兵衛氏である。小栗氏は小田原の北條時代からの舊家で權現様御入國に先んじた江戸の草分である。『天正日記』の著者村田平右衛門の家が分散した今日小栗氏が唯一の殘された江戸の草分で、小栗氏其人が東京の最も貴い歴史記念物である。

小栗氏の家には日蓮の棟札があるので有名である。が、小栗氏が江戸の草分でも日蓮時代までは遡ぼらないし、且此邊は德川時代から明治になつても度々回祿に遭つてるから土藏の中に家寳として保存されてる棟札でも今猶ほ無事であるか否かは知らない。(實は著名であるが、實物を見たといふ人は無いやうだ。)且又江戸の草分であるから舊記や文書があるらしく誰にも想像されるが、舊家通有の嚴秘を固守して門外の瞥見を許さないから誰も知らない。が、是等の舊記や文書が有つたにしろ無かつたにしろ今度の震火では此邊のものは一物をも持出す遑が無く、持出しても皆燒いて了つたのである。

小田原屋の當主の叔父に道之助といふのがある。道之助といふよりは空嚴で通つてゐる。分家の龍助氏が英獨で學んだ科學者であるに反して本家の空嚴氏は悉曇から梵語の八千衢まで究めた眞言の優婆塞である。橋場に精舍を設へて佛陀伽耶の釋尊を奉安し、三鈷羯磨五器八器の法具を具足した修法に陶酔してゐた。が、空嚴氏は教門の篤信者であつたが教理の探究者でも典籍の涉獵者でも無かつたから、精舍が劫火に亡びても文献の失はれたものは無かつた。が、四壁に掛けた法隆寺の壁畫の巧緻なる摹手の滅亡は亦頗る惜むべきものであつた。

(十七)　丸善の貴重書の全滅

丸善は書肆である。庫中の典籍は皆賣品である。が、藏版を山と積んだ外に他版の一部をも蓄へない出版書肆は別として常に稀覯を扱ふ書肆のストックは尋常圖書館の書庫よりも實質的に勝れてをる。

丸善は主として新刊を扱つてをるが、此の新刊の中にも少部數の一版限り絶版となる特殊の刊行物がある。殊に近年日に益

々世界の讀書子の興味を集中する東洋研究の圖錄類に到つては刊後二三年、甚だしきは二三ヶ月にして絶版となり稀覯書扱ひされるものがある。最も極端なる一例を擧れば昨年の春發行したスタインの "Serindia" の如きは出版卽時に "*Just published, but out of print*"（發行但し絶版）發行の廣告か絶版の廣告か解らぬやうな廣告をしてゐる。であるから豫告に由て註文しても猶且容易に、（少くも出版正價では）得られないのである。此種のものは新刊書と雖ども決して疎かに出來ないので、僅に數年前の出版で今日倫敦市價が十倍以上に騰貴した例もある。且恁ういふものは啻だ價の問題では無くて同時に市場に品物が乏しくなるから、奉ざ欲しいとなると金に絲目をつけなくても容易に獲られない。丸善の庫中には前記の "Serindia" を初め此種の稀覯的新刊書が少くも數十點あつたらう。

が、是等は近時の刊行であるから目錄正價の數倍に騰貴したゞけで、無いと云つても全く獲られない事は無い。が、古刊本となると價の高下は別として、無いとなれば五年で獲られるか十年で獲られるか期し難い。和書でも十年二十年捜して獲られない例は誰でも經驗してゐる。況んや日本に在つて歐羅巴の古書肆の目錄に由て漁らうとするは大海に泛んで恃もなく釣を垂れるやうなものだ。

丸善は絶間なく英佛獨蘭西の古肆と取引して主として東洋に關する古刊本を集めてゐる。震災當時ストックに持合はした古刊本は手取早く賣價に換算して云へば凡そ十萬圓であつた。惣てが稀覯書といふほどの貴重書では無かつたが、地方を一巡すれば直ちに補充し得られる古本では無いから、此の古刊本の棚は當分復興する事は困難である。

十數年前にも丸善は隣家の火に禍ひされて多くの貴重書を燒いた。其時から比べると商品が十倍してゐるだけ稀書覯も亦數倍してゐる。全部が燒けて了つて目錄も殘らないが、僅に記憶に存する若干冊を擧げて災前の丸善の稀覯の棚の面影を彷彿しやう。

帝大圖書館の條に、「エズイット・プレス」が帝大の誇りの一つであつたを述べたが、此の伴天連の本國への報告は帝大の蒐集が六七十冊、京大のがサトウの蒐めたので凡そ百冊であつた。丸善が前回の火災後英蘭佛獨西等からボツ〳〵集めたのは凡そ八十冊であつたが、主として東西兩大學の所藏と重複しないものを集めたので其中四十五冊は兩大學に無いものであつた。其中には日本で轉宗して無節操を歌はれた澤野忠庵事フエレイラや切支丹史に最も著名なウルガン伴天連事オルガンチノの通信が若干冊あつた。殊に最も珍らしいのは信長の知遇を得て南蠻

寺を建立し常に政務に參畫したルイス・フロイスが信長の横死を報告した通信や、政宗の羅馬遣使の嚮導をしたソテロが寛永元年大村の獄中から法王に上開した報告などがあつた。前條大學の項下にも云つたが「エズイツト・プレス」は今では頗る稀覯となつ゛僅に數頁の斷簡の中にさへ數百圓の重價を呼ぶものがある。東西兩大學に無い四十五册の中には之より以上の高價のものもあつたのである

切支丹及び最始の阿蘭陀貿易に關する日歐交通資料は凡そ數十部を算した。直接日本に交渉する記事が無くても蘭領印度其他近接諸島に關する古刊本を合すれば二百部以上を算したらう。其中殊に稀覯なるは

(1) Diego de San Francisco――Relacion verdadera i breve de la persecucion. (1625.)

であつた。此のディーゴ・ド・サンフラシシスコといふは前記した政宗遣使の嚮導者ソテロの事である。大坂の夏陣に秀忠の陣に紛れ込んで江戸へ來て俘へられ、向井將監に預けられてゐたのを、政宗が歐洲遣使を思ひ立つや將軍に乞ふて向井將監より申受けて仙臺へ招き、親しく歐洲の事情を聞いてソテロの獻策に從つて支倉の遣使を決心したのである。國史には洩れてゐるが、日本の政事に參畫して重要なる役目をしたバテレンの數は多かつたが、其中でもソテロは支倉と列んで、といふよりも寧ろ支倉以上の我が歷史的人物であつた。其人の著述に成る切支丹迫害始末は國史の最も貴重なる資料である。マニラとメキシコと兩地で出版されたのだが、稀覯中の最稀覯で、僅か八十頁かソコラの零册たが二千五百圓といふ重價であつた。が。此の重價を賭けても恐らく再び獲られまいと思ふ。

(2) Correa――Relaçam do alevantamento de Ximabara. (Lisboa. 1643.)

之は島原の役に關したもので、パジエーの書史にも洩れた稀本である。日本には多分無からうと思ふ。

(3) H Brig――Relation of Persecution lately made against the Catholik Christians in the Kingdom of Japonica. (London. 1619.)

著者名は逸したが、千六百十六年墨西哥で出版した西班牙の原本の英譯で、英文で著はされた日本記事の嚆矢である。之も亦極めて珍奇なもので日本には多分有るまいと思ふ。四六判位の小册子であるが、八百圓といふ重價であつた。

(4) Ignacio Stafford――Historia de la celestial Vocion, Missiones Apostolicas, y gloriosa Muerte del Padre Mercelo Franc. Mastrilli; Hijo del

Marques de S. Marsano. (Lisbon, 1639.)

(5) Tursellini——De vita S. Francis Xaverii. (1594.)

以上の內、前者は寛永十四年天草一揆に連座して處刑された殉教僧マストリ、の傳記にて卷頭に刑死の口繪がある。後者はザビール上人の最初の傳記の初版で最も有名なるもの。市川博士所藏の本書の伊太利原本の第二版が東大文科の研究室で燒けたのは上記した通りである。

(6) San Antionio——Chronicas de la Apostolica Provincia de San Gregorio. 3 Vols. (Manila. 1738—44)

千七百三十八年から四十四年と云へば元文寛保頃で切支丹時代から遙か遅れてるが、矢張フランシスカン派の極東傳道記錄である。第一第二の兩卷は比島に同派の教會を樹立するまでの歴史で、第三卷が支那及び日本に關係してゐるが、此の第三卷が極めて稀覯で歐羅巴に僅か數部しか無いと稱せらる。殊に其頃の印刷としては極めて鮮美で、卷頭の二十六聖人が礫刑に處せらるゝ口繪は精巧なる銅鐫である。倫敦の書肆マッグスの近着目錄に本書が載つてるが、價は四十五磅とある。

(7) Jesus Cartas que os Padres e Irmão da companhia de Jesus escreverão dos reynos do Japão e Chira. 2 Vols. (1598.)

本書は葡萄牙派遣のパテレン及びイルマンからの日支傳道に關する本國への書翰集である。之も亦マッグスの目錄に載つてるが、切支丹時代の日葡交渉に關する文獻中の最稀覯の一つでマッグス目錄所藏以外では葡國の某蒐書家の所藏が唯一本あるのみと云つてをる。且マッグスのは小型フォリオ版であるが、コルデイエルの『日本書史』に本書の內容の半ばしかないクオート版のみを載せてるのを以て推すとコ氏はフォリオ版の本書を知らなかつたと見えると云つて暗に自家の藏本の優越を自薦してをる。が、マッグス目錄のものは千五百四十九年から六十六年に到るまでの通信であるが、丸善に在つたのは同じ年から八十年までの分で、內容の量に於て優に二倍してゐた。前者が既にマッグス目錄所載のものと葡國の某蒐書家のものと唯二本であるなら、之に倍加した丸善架藏のものは世界一本の最稀覯と誇負するも必ずしも過言で無からう。(マッグス目錄のものは五十二磅十志であつた。)

(8) Francisco Colin——Labor Evangelica……en Las Islas Filipinas. (Madrid. 1663.)

コーランはエズイト僧で千六百二十五年比嶋に航して佈留何年傳道に努力した教門の偉功者である。本書は其の傳道の結果で

あるが、此嶋の地理風土言語動植物等をも記錄した最始の文獻として科學者からも貴重されてをる。邦人に取つて最も興味深きは切支丹を奉じた爲めに追放されて此嶋へ亡命した日本の諸大名の記事が此中に載つてゐた。

(9) Vita del Padre Alessandro Valignani. (Roma. 1606.)

ヷリニヤーニは日本へ初めて印刷術を傳來したバテレンである。其小傳と日本に於ける事業とは新村博士の『南蠻記』に見える。此傳記は極めて稀本で、恐らくは日本の圖書館或は蒐書家の誰も持つてゐないだらう。同じバテレンの中でも直接に日本の文化に貢献した人で、或る意味では日本のグーテンベルグでもあるから此傳記は日本の圖書館の何れにか置きたかつたので、今となつては殊に遺憾に堪へない。

(10) Buxeda de Leyva——Historia del reyno de Japon. (Caragoca. 1591.)

(11) Gualtieri——Ambasciatori Giaponesi a Roma. (1686.)

前記のワレニヤーニが印刷機械を將來した時は大友有馬の使節の歸朝に同行したので、此の大友有馬の羅馬へ使節を派したのは國史には洩れてゐるが、仙臺の支倉よりも遙に先んじた日本最始の遣歐使である。ワレニヤーニが此使節の歸朝に伴つて來航した途次マカオで大友有馬の使節の日本文の記行を印刷したといふ口碑が傳へられてるが、此の日本文から譯したといふ羅甸譯は殘つてるがマカオで印刷したといふ日本文の原本はドコにも無い。（若し之が殘つてゐたら之こそ眞に世界の稀本である。）爰に擧げる（10）は羅甸譯から更に西班牙文に重譯した大友有馬の旅行記である。（11）は伊太利人に著述された同使節の記事である。二者共に國史の遺漏を補ふべき重要資料である。

(12) Begin en de Voortgaugh van vereenighde Nederlantsche Geoctroyeer de Oost-Indische Co pagnie. 2 Vols. (Amsterdam. 1646.)

(13) Thunberg——Resa uti Europa, Africa, Asia förrattad aren 1770—79. 4 Vols. (Upsala, 1788—94)

(14) Lopez de Castanheda —— Historia do descob rimento e conguista da India pelos portugueses (Coimbra. 1551.)

(15) Oyanguren —— Arte de la Lengua Japona. (Manila 1738.)

以上の内、（12）と（14）は共に印度に於ける西葡人の交通及び經營に關するものなるが、間接には我が文化の移入に交渉する

前者には著名なる『日本記事』の著者カロン其他の在留阿蘭陀人の記事がある。(13)はケンフルと並稱されるツンベルグの記行で、英譯や佛譯は左して珍らしくは無いが瑞典語の原本は滅多に得られない稀本である。(15)のオヤングレンに就ては詳細な解題が新村博士の『南蠻記』に見える。數ある極東文献書史に洩れてる稀本で、十年ほど前ライプチヒの著名な古書肆ヒールセマンの目錄に載つた時は何十年間に二度しか扱はない最稀覯書として特に紹介された。然るにライプチヒ最大の老書肆ですらが此の如く滅多に扱はなかつた此の最稀覯書が其後偶然にも三市の三書肆から續いて丸善に將來された。其の一は京都大學に、其の一はモリソン文庫に入つた。最後の一冊が此の震災の火中に葬むられて了つた。

(16) Jan Huyghen van Linschoten——Voiage into ye East and West Indies. (London. 1598.)

リンスホーテンは中古航海記又は東洋古代地理に興味を有するもので知らざるは無い著名の名である。例へば字書と云へばウエブスター、百科全書と云へばブリタニヤを聯想する如く東洋の航海記と云へば必ずリンスホーテンを思ひ浮べるほど夫程著名である。此のリンスホーテンの英譯は殊に珍らしく、アムスターダムの書肆ミユーラの千九百十二年の年刊目錄には特に英譯の極めて稀覯なる所以を説明して蘭甸原文第一版の二百五十フロリンなるに比べて英譯は九百フロリン(約一千圓)の重價である。普通の英譯でさへが容易に現れないで此の如く重價を呼ばれるが、丸善架藏のは同じ千五百三十八年版であるが普通本の十二枚の地圖以外に更に三十五枚の重要なる細圖を增加した異本であつた。此種の異本は曾てドコの目錄にも見えなかつたもので、眞に最大稀本であつた。但だ難を云へば改裝本であつたが、其裝釘が亦壯麗堅牢を極めて書架の重きをなすに足るものであつた。此一冊なりと切めて助けたかつたと思ふは寓目したもの丶皆忘れ得ない感情であつた。

こんな鹽梅に一々書立てゝゐては丸善の稀覯書だけでも數十頁を要する。が、支那及び極東研究の最大資料たる „Chinese Repository" (20 Complete Volumes and Index)は學習院及びモリソン文庫にはあるが、大學のは燒けて了つたので、丸善のが亦亡びたのは惜しかつた。フヰツツマイヤーの日本文献集も零冊はポツ〳〵本場に現れるが全部を揃へるのは今日では頗る困難となつた。數年掛つて略ぼ全部を蒐めた丸善のフヰツツマイヤーが忽ち灰となつて了つたのも殘念であつた。市川三喜氏の文庫には殆んど全部が揃つてゐて、幸ひ今度の震火をも免れたが、之を外にしては零冊はドコにもあるが揃つてるのは恐

らく無からうと思ふ。

著者も書名も逸したが、ザビール上人の墳墓考といふものがあつた。千六百何年といふ頃の刊行でマカオあたりで出版されたものだが、唐紙に似た紙の木板唐本仕立の帙入（尤も帙は後人の好事であつたかも知れぬが）であつた。和蘭だか葡萄牙だかの古書肆の目錄に曾て載つた事があるが、其外にはツイぞ目錄にさへ見た事が無い最稀本である。羅甸文の木板東洋紙摺の袋綴といふのだから裝釘や版式から云つてもビブリオフアイルをして垂涎三尺せしめるものだつた。之も亦再び得られないだらう。

日露の交渉史料としてはレザノフが來朝した時のクルセンステルンやラングスドルフの世界週行記（二者共に二冊）や、詩人シヤミツソのカムチヤツカの記事が載つてるので著名なコーツエビユーの『ルーリツク搭乘ベエリング探檢記』（千八百二十一年版）や、ミユラーやヴンクーヴーヤラ・ペルースやの航海記や名前を擧げるだけでも十數行以上を要するほど日露接觸に關する史籍があつた。

又滿蒙に關するのではホワース及びドーソンの蒙古史（共に四冊）、コワレフスキーの蒙露佛字典（三冊）、ボツドニエーフの蒙古及び蒙古人、其他ロバート・ユイル其他が特に蒙古人の爲めに僅に少部數をセレギンスクに於て刊行した蒙古文の著述が十數種有つた。以上は直ぐ獲られないでも稀覯といふほどでは無いが、ザハーロフの滿露字典に到つては今の場合到底手に入れ難いものである。

有觸れたもので稀覯の部には入らないが、日本の篤學者の絕間なく熱求する Legge の "Chinese Classics"（八冊）も近頃は段々少なくなつて舶載する度毎に次第に高價となる。Schlagintweit の "Buddhism in Tibet" は最早容易に得られない稀覯書となつた。古刊と云つても五十年や六十年前のものは兎角に輕視するが、丁度日本でも明治の初年のものがソロ〳〵稀本扱ひされるやうに四五十年に立たないもので稀覯書扱ひされてるものがある。

最後に若干の動植物圖譜で最も惜まれるものを擧げやう。第一は

Hooker――Icones plantarum. 30 Volumes and Index.
(Price, 3000 yen.)

である。フーカーの名は苟くも植物學の門口を覗いたものなら知らざるは無からう。本書は二百五十部の限定版で、圖版三千枚。缺本や零冊は珍らしくないが全部揃つたのは四十年末市場に現れた事が無い。殊に最初の十卷は最も稀有の珍本である。

Hooker ―― Botany of Antarctic Voyage. 6

Volumes. (price, 2000 yen.)

本書が植物學上の大寶典たるは早田博士が曾て著述中に紹介された事がある。特に此の中の二冊はタスマニヤの植物譜で頗る稀覯である。

Beddom —— Flora Sylvatica. 2 Vols. Madras 1567-73. (price, 450 yen.)

本書はマドラス及び南方印度の木材用樹木圖譜で、近來著るしく市價を騰貴した。類書が無いから今後は益々珍重されるだらう。

Holbrook——North American Herpetology. 5 vols. 1896-42. (price, 600 yen)

之は蛙屬研究の最大著述にて無比の稀本である。著色圖版百五十枚。

Theobald——Culicidæ of the World. 5 vols. (price, 350 yen)

之は世界の蚊屬の最大研究。僅に十四五年前の出版であるが完本は最早極めて獲難い。

Dresser and Sharp ——History of the Birds of Europe. 9 vols. 1871-96. (prce, 1000 yen)

Gould ——Birds from the Himalaya Mountains 1531.

Bleeker ——Atlas Ichtyologique Indes Néerlandaises. 9 vols. (price, 500 yen)

Bloch ——Ichtyologie. 12 vols. 1785-97 (price, 550 yen.)

前二書は鳥族志、後二書は魚族志である。日本でも本艸書は概して高價であるが、西洋でも動植物圖譜には驚くべきほど重價を呼ぶものがある。稀覯書でなくとも、例へば Oberthür の昆蟲學や蝶類學の如きは一千圓以上を値ひし、僅に小部數の限定版であるから今にも絶版となつたらドレホト騰貴するか計られない。價を云ふと卑しくなるが、稀覯の標準としての價格から云つて二三百圓程度の動植物圖錄の燒失したものは數十冊以上を算した。

恁ういふ黴臭いものや科學的圖譜ばかりでは新人諸君の興味を牽くに足りないが、美術の圖錄や一枚刷の版畫を數へた際涯が無い。其中で稍や惜しいと思ふはマチスを初め現代佛蘭西畫家の自署ある版畫が數種入荷したばかりで誰にも見せる遑が無い中に燒けて了つた。(其中の一枚をデルスニスが持つて來て昨年春の五號館の佛國現代畫展覽會に陳列してあつた。)最う一つ惜しかつたのはロダンが特に描いたデッサンを十數面挿入し

たボードレエルの『惡の華』があつた。ロダンのは殊に勝れた作で浩瀚なる『ロダンの素描集』にも無い畫であつた。僅か五十部しか摺らなかつたので『惡の華』だから漸く三四十頁の四六判の淸楚な小冊子であつたが、百五十圓といふ重價で誰も驚かしものだ。溪仙の挿圖したクロオデルの詩集が自慢になるやうな日本では想像し得られないものであつた。

前にも云つたが、書肆のストツクの災害が文献に及ぼす損失は尋常圖書館の滅亡よりも遙かに大なるものがある。以上に掲ぐるもの丶大部分は篤志の蒐書家の架上には却て其匹を求められるが、圖書館には東西大學其他數四の大圖書館を除いては決して求められないものである。殊に上記の中の數點は日本では得られない（歐羅巴でも）亦容易に坊間に現れない）海内一本なるを思ふて深く其滅亡を痛惜する。

（十八）小林文七翁の遺藏を中心として錦繪の全滅

浮世繪蒐集家として海内第一と稱された小林文七翁の遺著及び遺藏の全滅も亦最も痛惜すべきものであつた。翁の蒐集した錦繪は約十萬枚。其中、廣重八千枚、江戸以前の古版凡そ三十點と稱された。今でこそ錦繪を額緣へ入れて立派な客間の粧飾としたり一枚の寫樂や國政の爲に千金を惜まないものもあるが、元來が女兒供のモテアソビであつて誰一人其眞價を認めるものは無かつたのだから、維新以後外國人の欲しがるまゝに生絲や茶と同樣にドシ／＼輸出して了つた。段々外國人の評判を聞いて漸く目が覺めた頃にはモウ名代のものは地を拂つて無くなつて了ひ、今では錦繪を見るには海外へ踏出さねばならなくなつた。此の江戸繪の落寞蕭條を極むる中に我が小林翁の十萬の蒐畫は錦繪愛好者の意を强うする處だつたが、之が皆一枚殘らず灰となつて了つた。先年上野で開いた翁の藏儲の展覽會や平和博覽會の時自治館樓上に陳列して英國皇太子の台覽に供したのは今ではアツケない昨夜の夢となつて了つた。

翁の蒐畫の中には他に類品の無い天下一品のものがあつた。一々は記憶しないが、兎角の批評こそあれ寫樂の下畫の如きは比類無いものであつた。殊に最も惜むべきは晩年に蒐めた約三十枚の古板畫であつた。江戸以前の板畫は從來から研究され考證されてるが、皆記錄の端に見える零細の記事に由て說を立てるので、實物の殘つてるものは極めて乏しかつた。稀には所藏するものはあつても僅々が數枚に過ぎないので、實物上から研究考證する事が極めて困難であつた。翁の蒐集中にも果して江

戸以前であるか否かで疑はれるものもあつたが、年紀が闕けてゐても雕法や筆彩色から推して疑問の餘地の無い最始の古板畫の立派な標本があつた。

就中、最も深く惜まれるのは我が版畫史の黎明期の燦爛たる頁を作る融通大念佛縁起繪卷であつた。此繪卷は夙に樂翁公に複製されて其頃から著名であつた。略ぼ同じ時代の五山の刻畫の六物圖や十牛圖と比べて此繪卷が果して應永である乎否乎はマダ研究の餘地があつて輕率に決定出來ないが、縱令應永で無くとも寛永を餘り下らないのは衆說殆んど一致してをる。左にも右くにも之だけの長尺の大板畫が江戸初期或は以前に在つたといふは我の文化史の誇りであつた。此繪卷は樂翁公の墨板複製は左程珍らしくないが、筆彩色の原板は頗る稀覯であつて、小林翁が多少施彩を異にする二卷を併せ有するは天特に此の多年の大蒐集に幸ひした殊寵であつたらう。翁は更に又此繪卷を克明に一點一畫苟くもせず典具帖に透寫して殆んど原刊と見紛う精巧なる複本まで作つたが、此の苦辛した複本も原本諸共皆一片の煙となつて了つた。

翁は版畫の外に浮世繪の始祖と稱される浮世正歲を初め又平、師宣、懷月堂以下、及び版畫以後の雪鼎、淸信、淸倍、降つては豐國、廣重等の肉筆畫をも襲藏してゐた。加之ならず浮世畫以外、土佐、狩野、四條、更に遡つては雲谷派までの名什をも多く備へ、殊に光悅、宗達、光琳、乾山等琳派の屏風を以て鑑賞家間に聞え、毎年十一月二日には是等の名品を展陳して交友を招くを恒例としたが、昨年の吉春を最後として、偶然大阪の知人に預けた牧溪、雪舟、啓書記の三幅が免かれた外は一紙をも剩さず皆烏有に歸して了つた。

又翁が秘藏した初代廣重の自筆繪入紀行二冊、北齋遺愛の硯など名匠を偲ぶの銘物として浮世繪同好者間に著名であつたが、皆灰燼中に亡びて了つた。晩年に蒐集した『保元平治』、『盛衰記』、『太平記』、『義經記』等繪入本の異版二百餘種も亦容易に蒐められないもので極めて惜しかつた。

翁は又有らゆる浮世畫師の自署及び印款を細かに年代を分けて精寫集成した『浮世畫家落款集』の遺著があつた。又光琳派の中野其玉氏をして所藏の浮世繪肉筆畫約二千點の中より衣裳模樣に勝れたものを分類臨摹せしめた『浮世畫衣裳文樣集』の遺篇があつた。此外に『光琳二百圖』は彫板既に盡く成りて摺刷されるばかりになつてゐたのが、一部をだに摺刷しない中に各種の稿本と共に盡く燒けて了つた。又翁が漆山天童氏に囑して多年纂輯せしめて唯堂に一枚の挿圖あるものをも洩らさず網羅した『畫工別浮世繪本目錄』の稿本も亦其發刊の部と諸共

たボードレエルの『惡の華』があつた。ロダンのは殊に勝れた作で浩澣なる『ロダンの素描集』にも無い畫であつた。僅か五十部しか摺らなかつたので、『惡の華』だから漸く三四十頁の四六判の清楚な小冊子であつたが、百五十圓といふ重價で誰も驚かしものだ。溪仙の挿圖したクロオデルの詩集が自慢になるやうな日本では想像し得られないものであつた。

前にも云つたが、書肆のストックの災害が文献に及ぼす損失は尋常圖書館の滅亡よりも遙かに大なるものがある。以上に掲ぐるもの丶大部分は篤志の蒐書家の架上には却て其匹を求められるが、圖書館には東西大學其他數四の大圖書館を除いては決して求められないものである。殊に上記の中の數點は日本では得られない（歐羅巴でも）亦容易に坊間に現れない）海内一本なるを思ふて深く其滅亡を痛惜する。

（十八）小林文七翁の遺藏を中心として錦繪の全滅

浮世繪蒐集家として海内第一と稱された小林文七翁の遺著及び遺藏の全滅も亦最も痛惜すべきものであつた。翁の蒐集した錦繪は約十萬枚。其中、廣重八千枚、江戸以前の古版凡そ三十點と稱された。今でこそ錦繪を額縁へ入れて立派な客間の粧飾としたり一枚の寫樂や岡政の爲に千金を惜まないものもあるが、元來が女兒供のモテアソビであつて誰一人其眞價を認めるものは無かつたのだから、維新以後外國人の欲しがるまゝに生絲や茶と同樣にドシ／＼輸出して了つた。段々外國人の評判を聞いて漸く目が覺めた頃にはモウ名代のものは地を拂つて無くなつて了ひ、今では錦繪を見るには海外へ踏出さねばならなくなつた。此の江戸繪の落寞蕭條を極むる中に我が小林翁の十萬の蒐畫は錦繪愛好者の意を强うする處だつたが、之が皆一枚殘らず灰となつて了つた。先年上野で開いた翁の藏儲の展覽會や平和博覽會の時自治館樓上に陳列して英國皇太子の台覽に供したのは今ではアッケない昨夜の夢となつて了つた。

翁の蒐畫の中には他に類品の無い天下一品のものがあつた。一々は記憶しないが、兎角の批評こそあれ寫樂の下畫の如きは比類無いものであつた。殊に最も惜むべきは晩年に蒐めた約三十枚の古板畫であつた。江戸以前の板畫は從來から研究され考證されてるが、皆記錄の端に見える零細の記事に出て說を立てるので、實物の殘つてるものは極めて乏しかつた。稀には所藏するものはあつても精々が數枚に過ぎないので、實物上から研究考證する事が極めて困難であつた。翁の蒐集中にも果して江

戸以前であるか否かで疑はれるものもあつたが、年紀が闕けてゐても雕法や筆彩色から推して疑問の餘地の無い最始の古板畫の立派な標本があつた。

就中、最も深く惜まれるのは我が版畫史の黎明期の燦爛たる頁を作る融通大念佛緣起繪卷であつた。此繪卷は夙に樂翁公に複製されて其頃から著名であつた。略ぼ同じ時代の五山の刻畫の六物圖や十牛圖と比べて此繪卷が果して應永である乎否乎はマダ研究の餘地があつて輕率に決定出來ないが、縱令應永で無くとも寬永を降り下らないのは衆說殆んど一致してをる。左にも右くにも之だけの長尺の大板畫が江戶初期或は以前に在つたといふは我の文化史の誇りであつた。此繪卷は樂翁公の翻板複製は左程珍らしくないが、筆彩色の原板は頗る稀覯であつて、小林翁が多少施彩を異にする二卷を併せ有するは天特に此の多年の大蒐集に幸ひした殊寵であつたらう。翁は更に又此繪卷を克明に一點一畫苟くもせず典具帖に透寫して殆んど原刊と見紛う精巧なる複本まで作つたが、此の苦辛した複本も原本諸共皆一片の煙となつて了つた。

翁は版畫の外に浮世繪の始祖と稱される浮世正歳を初め又平、師宣、懷月堂以下、及び版畫以後の雪鼎、清信、清倍、降つては豐國、廣重等の肉筆畫をも蒐藏してゐた。加之ならず浮世畫以外、土佐、狩野、四條、更に遡つては雲谷派までの名什をも多く儲へ、殊に光悅、宗達、光琳、乾山等琳派の屛風を以て鑑賞家間に聞え、每年十一月二日には是等の名品を展陳して交友を招くを恒例としたが、昨年の吉券を最後として、偶然大阪の知人に預けた牧溪、雪舟、啓書記の三幅が免かれた外は一紙をも剩さず皆烏有に歸して了つた。

又翁が秘藏した初代廣重の自筆繪入紀行二冊、北齋遺愛の硯など名匠を偲ぶの銘物として浮世繪同好者間に著名であつたが、皆灰燼中に亡びて了つた。晚年に蒐集した『保元平治』『盛衰記』『太平記』『義經記』等繪入本の異版二百餘種も亦容易に蒐められないもので極めて惜しかつた。

翁は又有らゆる浮世畫師の自署及び印款を細かに年代を分けて精寫集成した『浮世畫家落款集』の遺著があつた。又光琳派の中野其玉氏をして所藏の浮世繪肉筆畫約二千點の中より衣裳模樣に勝れたものを分類臨摹せしめた『浮世畫衣裳文樣集』の遺篇があつた。此外に『光琳二百圖』は彫板既に盡く成りて摺刷されるばかりになつてゐたのが、一部をだに摺刷しない中に各種の稿本と共に盡く燒けて了つた。又翁が漆山天童氏に囑して多年蒐輯せしめて唯堂に一枚の挿圖あるものをも洩らさず網羅した『畫工別浮世繪本目錄』の稿本も亦其發刊の部と讀替子

に待たれたものであつた。

翁は曾て錦繪の複製を米國へ輸入した事がある爲めに群疑を蒙むれるが、翁の複製は今日でも小林の複製として市場に高く評價されるほど精巧を究めたもので、一生を浮世畫の眞價の發揚に捧げた功績をも亦認めねばならない。此翁一代の精苦が寄紙片楮をも剰さず一瞬の間に焦土の灰となつて了つたは啻に翁一個の不幸のみでなく又我が文化の大損失であつた。が、翁が震災前易簀して此の悲慘の運命に當面しなかつたのは切めてもの翁の幸福であつた。

世間には餘り知られてゐなかつたが、江戸時代からの地本錦繪問屋である兩國の大平事大黑屋平吉氏も數代前から集めた錦繪を多く祕襲してゐた。小林翁の蒐藏の如き稀覯の古板に乏しく、數量も亦少かつたが、春信歌麿以下の名作は大抵揃つてゐたさうだ。殊に手厚く保存されてゐて少しの手ずれだに無く、中には昨今の板卸しであるかのやうに見えるものさへあつて、小林翁のも美板を以て鳴つてゐたが大平のは更にヨリ一層美板であつたさうだ。

「ニンベン」で通つてる高津氏の家に傳はる錦繪は世間に評判されるほどのもので無いといふ説もあるが、左に右く相應の蒐藏家であつたらう。時代は稍や若くなるが、矢張先代から傳へた初代豐國以下の錦繪の蒐藏家としては神田の金物商紀之國屋の名は一部の錦繪愛好家の間に聞えてゐた。錦繪は江戸の名物で主として町家に賞鑑されてゐたから、日本橋あたりの古い商家には世間に知られない先々代からの遺藏を澤山持つてるものが必ず有つたのは想像するに難くない。加ふるに古代錦繪商たる渡邊、諏訪、村幸、酒井、淸水等以下皆全滅して了つた。淸水だけはイクラか搬出したさうだが、イヽものは大抵燒けたので殆んど全滅に近いものだつた。

何しろ錦繪は典籍と違つて蒐集家の大部分が下町であるから、下町の滅亡は亦錦繪の滅亡である。典籍の一部として日本の文化の一面を代表する古代版畫の滅亡は亦極めて遺憾である。

(十九)　佛典及び梵本の罹災

江戸時代からの度々の大火を免かれた淺草の觀音堂は今度の震火にも亦、一時は八方からの火煙に包まれて危かつたのを不思議に無事に助かつて觀音御利生記の數頁を增した。が、同じ佛陀の妙智力が啻だ觀音堂のみを幸ひして他の名刹をドレだけ燒いたか計られない。就中、文獻上最も惜むべきは湯島の靈雲寺の燒失であつた。

靈雲寺は徳川三百年間五指に屈する碩徳淨嚴大和尚の開創であつて、新安派の流の根本道場として聞ゆる關東屈指の名刹である。草創以來二百有餘年間曾て一と度も回祿に禍ひされた事が無かつたので、國寶殿司の十六羅漢や土佐吉光の吉野曼陀羅や寺寶の富を以て帝都第一と知られてゐた。殊に開山淨嚴大和尚は學徳一世を風靡し、儀軌に悉曇に眞言教學中興の祖として仰がれ、教理の闡明に聖經の科註に字記の講述に著述數百卷。我が佛教史上稀有の大學匠であつた。加ふるに門下の四哲四十高足は皆師風を繼承して研鑽に努め編著を述作し、嚴門の文學は蔚然として教界に頂きをなした。『萬葉代匠記』の著者契沖が嚴門の一人であり近松與林子が嚴門の蓮體和尚の教を承けたる如き淨嚴大和尚が教學の偉績以外に文學史上に於ける位置も亦決して輕からざるを證すべきである。

靈雲寺は此の開山淨嚴大和尚及び嚴門諸匠の教相及び梵學に關する諸著を中心として密教の諸聖典を集める數千卷、密門聖教の大寶藏として密宗講學の中央道場であつた。今となれば六萬十菊であるが、此の貴重なる經藏を人家櫛比の市内から移して郊外廣濶の淨域に奉安しなかつたのは大遺算であつた。幸ひに總本尊、及び開山護持の五大尊を初め國寶の殿司、金岡以下の寶軸並に彫像等は免れたが、淨嚴大和尚の畢世の偉業たる此の教門の大寶藏は八百餘坪の堂塔伽藍と共に一字一卷をも殘さず盡く烏有に歸して了つた。靈雲寺には又、寶林一山の歷史を語る新安流の聖教典籍以外に中尊寺の金銀泥の秀衡經七十五卷、普光律師の新安流諸曼陀羅等の寶卷寶軸等が數多あつたが、之も皆亡失して了つた。（靈雲寺の經藏中、淨嚴大和尚以下の新安流聖教に屬する典籍の目錄は幸ひに行武善胤氏の『靈雲叢書解題』に編輯せらる。就て見るべし。）

○

牛島の弘福寺は鐵牛開基の黃檗の名刹で、白金の瑞聖寺と共に東都に二つしか無い唐風の伽藍を以て著名である。不立文字の禪刹であるから二酉五車の藏儲は無いが、黃檗の墨蹟を多く儲へてゐた。殊に開山鐵牛禪師の血書の經卷五軸及び大淀三千風自筆の『隅田河記』（三千風の行脚文集に洩れてるもの）の一卷は寺寶として著名のものであつた。が、火勢が急で本尊の拈華微笑佛でさへが劫火を免れる事が出來なかつたさうで、是等の寺寶は一炬に焚かれて了つた。

○

新らしいものではあるが建築の特異を以て鳴るは深川の本誓寺の樓門であつた。先住福田循誘師の時、檀徒が臺灣から移して寄進した南清風の五彩の樓門で、帝都の建造物中異彩を放ち、

に待たれたものであつた。

翁は曾て錦繪の複製を米國へ輸入した事がある爲めに群疑を蒙むれるが、翁の複製は今日でも小林の複製として市場に高く評價されるほど精巧を究めたもので、一生を浮世畫の眞價の發揚に捧げた功績をも亦認めねばならない。此翁一代の精苦が零紙片楮をも剩さず一瞬の間に焦土の灰となつて了つたは啻に翁一個の不幸のみでなく又我が文化の大損失であつた。が、翁が震災前易簀して此の悲慘の運命に當面しなかつたのは切めてもの翁の幸福であつた。

世間には餘り知られてゐなかつたが、江戸時代からの地本錦繪問屋である兩國の大平事大黒屋平吉氏も數代前から集めた錦繪を多く祕襲してゐた。小林翁の蒐藏の如き稀覯の古板に乏しく、數量も亦少かつたが、春信歌麿以下の名作は大抵揃つてゐたさうだ。殊に手厚く保存されてゐて少しの手ずれだに無く、中には昨今の板卸しであるかのやうに見えるものさへあつて、小林翁のも美板を以て鳴つてゐたが大平のは更にヨリ一層美板であつたさうだ。

「ニンベン」で通つてる高津氏の家に傳はる錦繪は世間に評判されるほどのもので無いといふ説もあるが、左に右く相應の蒐藏家であつたらう。時代は稍や若くなるが、矢張先代から傳へた初代豐國以下の錦繪の蒐藏家としては神田の金物商紀之國屋の名は一部の錦繪愛好家の間に聞えてゐた。錦繪は江戸の名物で主として町家に賞翫されてゐたから、日本橋あたりの古い商家には世間に知られない先々代からの遺藏を澤山持つてるものが必ず有つたのは想像するに難くない。加ふるに古代錦繪商たる渡邊、諏訪、村幸、酒井、清水等以下皆全滅して了つた。清水だけはイクラか搬出したさうだが、イヽものは大抵燒けたので殆んど全滅に近いものだつた。

何しろ錦繪は典籍と違つて蒐集家の大部分が下町であるから、下町の滅亡は亦錦繪の滅亡である。典籍の一部として日本の文化の一面を代表する古代版畫の滅亡は亦極めて遺憾である。

（十九）　佛典及び梵本の罹災

江戸時代からの度々の大火を免かれた淺草の觀音堂は今度の震火にも亦、一時は八方からの火煙に包まれて危かつたのを不思議に無事に助かつて觀音御利生記の數頁を增した。が、同じ佛陀の妙智力が啻だ觀音堂のみを幸ひして他の名刹をドレだけ燒いたか計られない。就中、文獻上最も惜むべきは湯島の麟雲寺の燒失であつた。

靈雲寺は德川三百年間五指に屈する碩德淨嚴大和尙の開創であつて、新安派の流の根本道場として聞ゆる關東屈指の名刹である。草創以來二百有餘年間曾て一と度も回祿に禍ひされた事が無かつたので、國寶殿司の十六羅漢や土佐吉光の吉野曼陀羅や寺寶の富を以て帝都第一と知られてゐた。殊に開山淨嚴大和尙は學德一世を風靡し、儀軌に悉曇に眞言教學中興の祖として仰がれ、教理の闡明に聖經の科註に字記の講述に著述數百卷。我が佛教史上稀有の大學匠であつた。加ふるに門下の四哲四十高足は皆師風を繼承して研鑽に努め纂著を述作し、嚴門の文學は蔚然として教界に重きをなした。『萬葉代匠記』の著者契沖が嚴門の一人であり近松巢林子が嚴門の蓮體和尙の教を承けたる如き淨嚴大和尙が教學の偉績以外に文學史上に於ける位置も亦決して輕からさるを證すべきである。

靈雲寺は此の開山淨嚴大和尙及び嚴門諸匠の教相及び梵學に關する諸著を中心として密教の諸聖典を集める數千卷、密門聖教の大寶藏として密宗講學の中央道場であつた。今となれば六菖十菊であるが、此の貴重なる經藏を人家櫛比の市內から移して郊外廣濶の淨域に奉安しなかつたのは大蹉跌であつた。幸ひに總本尊、及び開山護持の五大尊を初め國寶の殿司、金岡以下の寶軸並に彫像等は免れたが、淨嚴大和尙の畢世の偉業たる此の教門の大寶藏は八百餘坪の堂塔伽藍と共に一字一卷をも殘さず盡く烏有に歸して了つた。靈雲寺には又、寶林一山の歷史を語る新安流の聖教典籍以外に中尊寺の金銀泥の秀衡經七十五卷、普光律師の新安流諸曼陀羅等の寶卷寶軸等が數多あつたが、之も皆亡失して了つた。（靈雲寺の經藏中、淨嚴大和尙以下の新安流聖教に屬する典籍の目錄は幸ひに行武善胤氏の『靈雲叢書解題』に編輯せらる。就て見るべし。）

○

牛島の弘福寺は鐵牛開基の黃檗の名刹で、白金の瑞聖寺と共に東都に二つしか無い唐風の伽藍を以て著名である。不立文字の禪刹であるから二西五車の藏儲は無いが、黃檗の墨蹟を多く儲へてゐた。殊に開山鐵牛禪師の血書の經卷五軸及び大淀三千風自筆の『隅田河記』（三千風の行脚文集に洩れてるもの）の一卷は寺寶として著名のものであつた。が、火勢が急で本尊の拈華微笑佛でさへが劫火を免れる事が出來なかつたさうで、是等の寺寶は一炬に焚かれて了つた。

○

新らしいものではあるが建築の特異を以て鳴るは深川の本誓寺の樓門であつた。先住福田衍誘師の時、檀徒が臺灣から移して寄進した南清風の五彩の樓門で、帝都の建造物中異彩を放ち、

深川名物の一つに數へられてゐた。

本誓寺は增上寺の隱居寺で、近代の名僧と仰がれた行誡上人が晩年久しく隱栖してゐたので、行誡上人書入れの手澤本が澤山あつた。どんなものがあつたか知らぬが行誡上人には深く國學に造詣し歌道にも精しかつたから、佛典以外の典籍にも富んでゐたらうと想像する。先年出水の時、藏書の多くは水に濱つて毀はれたものもあつたさうだが、今度の震火には一括して全部が盡く灰燼となつて了つた。

本誓寺は容齋の菩提所で、容齋は殊に深く行誡上人に歸依してゐたので、多くの名什が寄進された。就中、最も著名なるは十六羅漢十六幅、白衣觀音の大幅、土佐日記繪卷三卷で、容齋一代の傑作に數へられてゐた。其以外松花堂の眞言八祖八幅、行誡上人の貼交ぜの小屏風等は本誓寺に出入するものが口をたゝへて激稱する寺寶であつた。其外に先住術誘師は考古の癖を以て聞ゆる文雅風流の師家であつたから、骨董器玩數ふべからざるほど有つたが、皆火中に堙滅して了つた。

○

浄土宗の壯年學匠にして新らしい佛教界を代表する双璧として盛名ある渡邊海旭、荻原雲來の二師も亦各々董住の精舍と秘藏の經卷典籍とを劫火に禍ひされた。海旭師の藏書二萬卷及び我が佛教史の資料たるべき諸高徳の墨蹟凡そ數千幀は師の董住する深川の西光寺の僧房で一紙をだも剩さず盡く烏有に歸して了つた。

海旭師の二萬の罹災典籍中、殊に惜むべきは印度學（インドロギー）の碩學巨匠の書入れ又は自署の識語、又は著者から寄贈した自署の獻辭あるもの、或は名家の藏書票（エキスリブリス）ある梵文經典であつた。其の重なるものを擧ぐれば

(1) モニトル・ウヰリヤムス手澤本

印度版	吠檀多經及註疏	二卷
同	瑜珈經及英譯	一卷
同	勝論經及英譯	一卷
英國版	佛經スッタニパー	二卷

(2) ロート氏手澤本

毘那耶律藏原典		五卷
法句經	註疏付	二卷

(3) シュミット氏手澤校合本

ノイマン獨譯	中阿含經	三卷
巴利聖典會版	增一阿含經	五卷
同	新阿含經	五卷

(4) フート氏手譯本

シャヷンヌ佛譯悟空傳　特刷本（毎紙批評書入あり）

同　佛譯求法高僧傳

ミナエーフ佛教論、翻譯名義集

此の最後の『翻譯名義集』の卷頭には三十頁に亘る露文の序論があつてフート氏は一々別葉を挿みて獨譯を施こした。フート氏は猶太人で伯林大學の講師であつた。西藏語を善くし略ぼ漢文にも通じて『東蒙古史』の快著がある。白面方顔の肥大漢にして終身娶らず。磊々落々、夜々は大抵カフエーに痛飲するを例とし、リンデンの一カフエーに三鞭の滿を引いて快飮しつゝある時突然溢血して終に長逝した歐人として稀に見るの漢であつたさうだ。

以上の外、ケルヌ、ベンドール、ランマン等獨佛白英蘭露の碩學の手署ある梵本原典、論文著述等は一々海旭師をして會遊を偲ばしむる追懐ならざるは無かつた。殊に師ロイマン翁の二頁に亘る識語あるスタインの『古于闐』二卷は何物にも換え難い恩師の記念であつたのだ。

海旭師が架上の珍とした

カンニングハム　薩婀菩提　（一八九二）

シュミット　蒙古源流　（蒙語及獨譯付）（一八二九）

同　蒙獨字書　（一八三五）

チョーマ　西藏文法　（一八三四）

同　藏英字典　（一八三五）

な稀覯といふほどのものでは無いが、近來漸く乏しくなつた。就中、蒙古源流は容易に獲られなくなつた。が、夫よりも惜むべきは海旭師自身が手寫對校した梵本であつた。

梵文華嚴入法界品　（ケンブリッジ本）

同　十地經　（皇立アジヤ協會本）

同　金光明經　（同、五本校異）

同　五大護秘經　（カルカッタ本、六本校異）

翻譯名義大集梵藏兩語　（露都）

小部諸般若　三部

是等は皆海旭師が研鑽の業績たると同時に後學をも稗益するものであつて梵學の猶ほ未だ十分開拓されざる我が學界に於ては極めて惜むべきものであつた。

海旭師は又藤原鎌倉時代の古寫經や先賢の手抄本や書入本を多く所藏された。が、海旭師の架藏にして最も惜むべきは是等尋常蒐書家の架上に屢々見られる月並的稀覯でなくて梵學研鑽に關する貴重の學術的資料であつた。

○

荻原雲來師も亦多年苦辛して考覈對校した多くの梵本を淺草の誓願寺で燒失した。例へば寂天が漢の大乘集菩薩學論の原典

"Sikshāsamuccaya"の所引の大乘經典を一々漢譯に照らして何丁何行と細かに註記したものや、入楞伽經の原典"Lankavatāra"を漢藏兩譯と對比して訂正し且數百葉の考證を附綴したものや、或は劍橋大學圖書館にて發見手寫した瑜珈論中の菩薩地の原典"Bodhisattva-bhūmi"を西藏譯に對照して貝葉の磨滅缺損した個處や、或は缺葉を補充訂正したものや、或はE. Foucaux の發刊した方廣大莊嚴經("Lalitavistara")の西藏譯及び其の佛譯や、暹羅皇帝より寄贈の巴利文四阿含經の註釋や此種の梵文又は巴利文原典を身親から考覈して註記を施こしたものを多く亡失した。是等の多年の勞苦を積んだ研鑽の跡を片紙も留めず盡く烏有に歸した師の痛恨は眞に同情するに餘りがある。且是等の梵文原典の燒失は啻に所有者の不幸のみならず我が貧しき梵文學の少からざる打撃である。

○

眞宗の碩徳南條文雄老師は新邸落成して移居する間もなく亦震火に禍ひされて所藏の典籍書畫一切を一炬に附した。老師は梵漢洋に跨がる碩學、教門學界に結廬する數十年、鄴架萬卷の富は夙に著聞してゐた。マクス・ミュラーの『東方聖書』やファーガツソンの『樹木及び蛇の崇拜』や印度學(インドロギー)に關するものは老師の常に珍重する架上の西籍であるさうだが、之より以上の貴重の稀本が庫中に深藏されてゐたは想像するに難くない。仄聞する處に由れば老師の愛藏された書幅の中には明の宗泐禪師の七絶の小禎や瑞圖の書聯双對の大幅があつたさうだ。其一端を見ても想像される老師の藏儲の全部が灰燼となつて了つたは眞に痛恨事であつた。

○

『故事類苑』の編纂者佐藤誠實翁の遺書も淺草の正行寺まで燒失して了つた。翁は『故事類苑』の編纂を以て學位を授けられたほど博覽第一と稱された篤學者であつて、單に皇漢學の古典のみならず小說野乘に到るまで精通してゐた。藏書の內容は深く祕めて人に示さなかつたので誰も餘り知らなかつたが、其範圍の極めて廣大なるは『故事類苑』に徵して想像する事が出來る。翁の遺書が沒後正行寺に保管されてゐたのは現住が翁と俗緣があつたからださうだが、三萬卷と稱された藏書が祕佛の如く奧深く閉藏されたまゝ誰にも示されないで灰燼となつて了つたは亦文獻上の大遺憾であつた。

(二十)　焚書の感慨

廣袤何里四方、何十萬人が一時に猛火に包まれて全部が盡く全滅であつた。貴重の名器名什がドレだけ燒燼したかは計られ

ない。單に文献方面で自分の耳朶に逹したゞけでも容易に書盡されないほど無數である。父子二代續いての藏書藏幅の富を以て著聞する菊池澹如氏の文庫。魚は鮮なるを擇び書は古きを愛する池田天金氏の稀覯書畫典籍。隱れたる藏書家山口剛氏の稀覯歌俳小說三萬卷。古淨瑠璃曲譜研究家細川賀茂氏の近松を中心として院本數千卷。六合新三郎氏の著名なる俗曲の蒐集。維新史料編纂所管理の諸家の記錄文書、（維新史料は編纂された稿本は助かつたが諸家から借出した基礎資料は盡く燒失した。）敎會外には餘り知られないが露西亞の宗敎、文學、學術に關した貴重の文獻の寶庫としては東洋第一と稱されたニコライ正敎會の圖書館、橫濱に於ける曾我部、加山兩氏の橫濱神奈川を中心としての蒐書。橫濱市役所の市史編纂所の開港資料。故渡邊和太郎氏の日歐交通、劇及び美術を中心としての樂山文庫、（但し其一部は幸ひに火を免れたさうだが。）鎌倉に於ける圓覺寺塔頭續燈庵の國寶古寫經及び古文書。小田原に於ける尾崎、倉橋兩氏の箱根小田原を中心としての蒐書等。又例へば岩原氏の大師の般若心經や藤堂家の貞和の論語や三井家の元永本の古今集や長氏の成宜園先賢の自筆稿本や手澤本や、正木直彥氏の提唱する過去帳を作つて追懷したいものは限りも無い。閉目沈吟する時は靑卷黃軸の火炎に焰ゆる悲愴の光景が眼前に彷彿する。

渡邊海旭氏が今春寄せられた書簡の端に七絕二首が認められた。曰く、

『江東災火燬无遺、幾萬喪妻亦哭兒、止說裂僧亡此苦、燒書卷々若妻兒。』

『喜看六籍與三藏、燈影糢糊照縹緗、苦稿半宵昏睡裡、夢遊江左舊僧房。』

今春偶然高嶋米峰氏と會談した時、談海旭氏に及びて曰く渠は實に敎門の快漢である。二萬卷の藏書を燒いても恬淡落々孜々として敎務に努めて忘れたるが如くであると。海旭氏が無言の感慨は上記の詩句に溢れて卒讀に堪へない感がある。

其後海旭氏は南條老師から新年の口占を寄せられたと云つて老師の七絕を示した。

『七旬加六又迎年、劫後移家心寂然、唯我新正無所作、青山靜處夢書眠。』

老師の如き三乘悟徹の大覺も亦此詩がある。讀書人としての焚書の悲痛は何物も之に若くものがあらう。幸ひに劫火の巷を遠く離れたる郊外の貧楷大も焚書の筆を擱いて感慨久しうするものがある。（大正十三・二 晦完了）

判檢事の「文化的」態度

堺利彦

公判といふものは多くの人々が直接傍聽してゐるし、又新聞にも毎度その樣子が書かれてゐるので、それがどんなものであるかといふ事は、大抵世間に知れわたつてゐる。然し檢事調べや豫審調べが、實際どんなものであるかといふ事は、ハツキリ世間に知られてゐない。だから私は今、少しばかり、最近に於ける私の經驗を語つて見ようと思ふ。

警部の態度

去年六月五日の早朝、私は先づ警視廳に連れて行かれた。警察といふ處では、毎度なぐられたり、欺されたりした覺えがあるから、今度も何方やられるか知れたものではないと、初めから可なり用心をして掛つたが、其の割合には、(他の人に對しての事は知らぬが、私に對しては)、大して亂暴といふ程の事はなかつた。先づ所持品を、たつた一冊持つてゐた本まで取りあげられ、おまけに帶まで取りあげられて、地下室の監房に放りこまれた。帶のかわりに何か細紐でも貸してくれないかと賴んで見たが、それも絶對にいけないと云つた。人間が帶なしでゐるのは、隨分不愉快なものである。而も其の理由が、首つりをされては困ると云ふのだと聞いては、其の御親切に呆れ返る。

然しそんな事はマアどうでもいゝとする。それから夜中ごろになつて呼出れたが何とかいふ毎度顔を見た事のある警部か何かの男が、背廣服を着て、馬鹿に碎けたやうな態度で、卷煙草なんどを人の前に突出したりして、『君、今度はモウ單純な治安警察法違犯で濟ます方針なんだからアツサリ云つてしまつて呉れ玉へ。』などゝ云ふ。『もひとつ奥の方の事は、近々○○○もあらうといふ際の事だから……』などと、威かすような、安心させるような、恩に着せるような事も心得顔に云ふ。そうかと思ふと、突然、『君等先輩連は石神井で床の間の前にズラリと並んで、そして君は議長席に就いて大いに對論をやつたんだね』などゝ變な事をゲビた態度で云ひだす。これは、石神井に

於ける我々の會合で戸田といふ人が議長になつたといふ事が知れたので、それを私の變名だらうと當推量して、カマをかけたのである事が後に分つた。

官吏が役目の表で、『其方は』と云つたような調子で臨んで來るのは、私は少しも不快に感じない。監獄の役人などが威嚴を保つ爲に（少しは云ひにくそうにして）尊大な言葉遣ひをするのは、さして不自然にも感じない。然し警察官などが、態とらしく碎けた態度で、『君』よばわりをしてやつて來るのは、あんまり好い氣持でない。それに獨りごとのやうなカマかけ話を心得顏にやられるのでは、返事の仕様がない。それで私は右の警部に對して、返事らしい返事もせずにゐると、先方も仕方がなかつたと見えて、其まゝ私を監房に返した。警察では其の外に一つの調べもなかつた。

私に對する警察の調べはそれだけだつたが、後で聞いて見ると、或る人々に對しては、随分ひどいオドカシやウソを云つたそうだ。然し警察としてそんな事のあるのは當り前で、今さら驚くがものはない。私は寧ろ『拷問』の無かつた事を見つけものだと思つてゐるくらいである。然し警察の事は、此の文章では問題でない。

檢事の態度

初めて私を調べた檢事は、先づ『ワタクシは岩松といふ者です』といふ挨拶をした。大變御丁寧だと思つてゐると、それどころではない。彼は、社會問題や社會運動について知識の無い事を散々に斷つて置いて、『從つて少しくどくなるような場合があるかも知れませぬが、それはどうか御許しを願ひます』と云つたような調子で、言辭態度が慇懃を極めてゐた。甚だしきは、『我々のような青二才が』などゝ云つて、年寄の私を喜ばせたりした。

中々老猾な遣り口だとは思ひながら、それでもツイ多少は好い氣持になる。そこが先方の狙ひどころだらう。最初、私は一切の事を否認してゐると、岩松檢事は飽くまでも其の慇懃な態度で、私に賴むように、訴へるように、寧ろ媚びるようにして、裁判事件の進行を助けてくれと云ふのであつた。勿論、彼は警察官のように淺はかなカマは掛けないが、ちよい／＼と證據の一端を漏しながら、隱しても駄目だと云ふ處を見せる。然し『あなたの立場としておつしやりにくい事は萬々承知して居りますから』と、如何にも思ひやりの深そうな態度で、『けれども、これだけの事實は是非認めて戴かないと、……』と云へ

た風に攻め寄せて來る。而もそれが、三時間、五時間と、ずいぶん長い時間を費して、其の時間の大部分は横道の雜談にそれて、折々本道に立戻つては攻め立てるのであつた。尤も、横道の雜談は、先方の戰術であつたばかりではない。私の方でも、返事をはぐらかす一つの方便とした味氣が無いでもなかつた。

　そんなわけで、岩松檢事と私とは結局、根氣くらべといふ事になつた。私が『語學の稽古でもしてユツクリ事件の進行を待ちます』などと逃つて見ると、檢事は『イヤ、知識や經驗では年寄に負けますが、根氣では若い者の方が勝ちますから』などゝ笑ひながら云つたりした。

　つまり岩松檢事は、外の事はどうでもいゝから、問題の會合に私が出席したといふ事だけ認めてくれと云ふのであつた『それだけは是非とも皆さんの御諒解を得たいと思ひます。それでないと、料理屋の女中を大勢、證人として法廷に呼びだしたりしなければならない事になる。其の中には娼妓に賣られてゐる者もある。さういふ者を法廷に出して多くの人の前にさらしたりする事は、甚だ面白くない。私は只その爲に是非とも皆さんの御諒解を得たいのです。』岩松檢事はかういふ人道主義的な立場であつた。然し私は檢事といふ者を信用しないので、其の立場を『諒解』する事が出來なかつた。私は十數年前、數回の裁判事件の經驗に依つて、檢事だの、豫審判事だのといふ者が、隨分甚だしい××を云ふ事を知つてゐる。私は其事を岩松檢事に話した。すると檢事は非常に嘆息した。さういふ事は實に我々の耻辱である。我々には誠に赤面に堪へぬ。然し今日の判檢事は昔の判檢事と違ふ。岩松氏は極力さうした辯明に努められた。然し私は云つた。私が判檢事を信用しないのは、直接の經驗から來てゐる。それをあなたの言葉だけで打消す事は出來ない。あなた方が信用を回復しようと思ふならば、直接の事實を以てそれを示さねばならぬ。

　かういふ問答をした末、岩松檢事は猶ほ頻りに人道的の諒解を求めるので、私は試みに念を押して見た。あなたが私に對して、會合に出席した事を認めろと云はれるのは、女中を證人に呼ぶ事を避けたい爲ばかりだと云ふ事は、それはホントウですかと。すると檢事は、本當にホントウだと答へた。私は其の答を信じたわけでもないが、私がひたすらに罪を逃れやうと努めてゐると思はれるのも少し厭だし、それに實際、いたづらに事件を長びかすも厭だから、二度目の調べの時、出席の事だけを認めた。岩松檢事は只だ其の一事だけ認めてくれればよいと云つたのだから、それを認めた以上、再び檢事の調べを受ける必要はない事になつた。實際、岩松檢事は非常に滿足して引揚げ

た。そしてそれきり私に顏を見せなかつた。然しこれだけの一言を洩らす事を忘れなかつた曰く『外の點は又、いづれ外の人からお訪ねするでせう。』

要するに、岩松檢事が私に與へた印象は、『重忠式』だと云ふ事であつた。芝居の重忠ほどの實意は見えないが、少なくとも形式に於いて重忠であつた。惡く云へば×××であり、×××であり、冷かしに云へば『文化的』である。

その後、三人ほど外の檢事が出て來た。岩松檢事ほど『僞善的』ではないが、皆それ〴〵に『文化的』であつた。其の中の一人は、『僕は里川といふ檢事です』と挨拶した。嚴めしいお役人から『僕』といふ一人稱を聞くのは少し意外だつた。此人は話がテキパキして面白かつた。『云はせないで置くもんか！』などゝいふ棄ゼリフも出た。そういふ率直な態度と、前の猫撫的態度とを比べて見ると、寧ろ後者の方が氣持がいゝ。然し此人に對しては、私の仲間の或る被告は、『君の云ふ事にはモウ一切返事をしない』といふ宣告を與へたさうだ。又、他の被告の中には、或る檢事と喧嘩をして、三時間も默つて睨みあつてゐたそうだ。私はさすがに「年を取つてゐるだけに、先方でも少しは遠慮するやうだし、こちらも大人氣ない事はしたくないし、喧嘩らしい所までには一度も行かなかつた。

然し判檢事全體に對して不信用だといふ話は、私は誰に對してもして置いたが、先方ではいづれも、それは困る〳〵と云つてゐた。そして今の若い判檢事は決してそんなものでないと辯解した。それからズット後になつて、或る檢事に對し『成るほど、今度の經驗に依ると、今の判檢事は昔しのに比べて、稍や信用が出來るやうです』と云ふと、檢事は『稍ですか』と云ふから、『無論です』と云つた。檢事は苦笑してゐた。

チョット名を忘れたが、或る若い檢事は、折々獨逸語などを使つて大いに學識を發揮してゐた。或時、英語で『ダアヰンからクロポトキンへ』と云ふから、それは何の事だと聞くと、『生存競爭から相互扶助へ』といふ意味だつた。所が、其の檢事の考へでは、生存競爭から相互扶助へが進化の過程なのだから、社會主義の云ふやうな階級鬪爭は時代おくれで、勞資協調の相互扶助が當世だと云ふのであつた。これにはチョット返事に困つた。檢事などは生じつか法律以外の學問を嚙つてゐない方が、どうもいゝようだ。然し此の檢事は、まだ新參で檢事氣質に捏ねあげられてゐない爲か、話をするに一番氣持がよかつた

こんな風に、私は大體、總ての檢事に對して、餘り惡い感じは持たなかつたが、最後に昨年の暮、保釋で出る間際になつて、石田檢事から不思議千萬な要求を受けた。それは斯うであ

つた。廿餘人の被告が（只一人の田代君を除いて）、結局みな祕密結社の事實だけは認めたので、事件はスツカリ形づいたのだが、檢事はまだ山川均君を問題にしてゐた。山川君に對しては、證據らしい證據は一つもないが、山川君と私等との平生からの密接な關係上、どうしても山川君が此の事件に關係してゐない筈はない、と云ふのが彼等の考へであつた。それは無理もない事だと私も云つた。然しそれにも係はらず、事實が無いなら仕方がない、證據が無いなら仕方がない。それを無理やり罪に落すわけには行くまい。私はさう云つた。所が石田檢事はこんな事を云ひだした。何しろ山川氏も起訴する積りである、然し、あの病身な人を收監するには忍びない。だから收容しないで起訴したい。けれども、山川氏が事實を認めて呉れればよいが、若し認めないとなると、矢張り收監して調べねばならぬ事になる。それではお互に困る。そこで山川氏本人が認めなくても、あなたが其の事實を認めて下されば、それに依つて事件が確定する。從つて山川氏は收監されずに濟む。だから是非さういふ事にして下さい。

『そんな馬鹿な事が出來るわけが無いぢやありませんか』と、私は檢事に云つた。彼等は我々を七個月も未決監に放りこんでおく間、山川君には一手をも觸れ得なかつたほど薄弱な證據を種にして、それでどうかして山川君を引張りこまうとしてゐるのであつた。病氣の人を收監するに忍びないと云ふが、彼等は既に病中の川崎悦二郎君を無理やり收監して、其の結果、死なせてしまつてゐるではないか。そんな恩惠じみた事を云はないで、收監すべき理由があるなら遠慮なく收監するがいゝ。我々は山川君の長生を切望してゐるけれども、そんな厭な恩惠の下に收監を免かれさせるよりは、寧ろ立派に獄中で死なせたいのだ。況んや今の場合は、證據のない山川君に、私の言葉を以て證據を與へさせようとするのである。そんな馬鹿な事の出來る筈がない。

一體、石田檢事は何と思つてこんな××な相談を私に持ちかけたのか、餘りに道理が分らなすぎる。然るに彼は、其の日、朝から夜までかゝつて、繰返し〳〵其の事で私を責めた。私が永らく獄中にゐたので、判斷力を失つた人間になつてゐると思つたのだらうか。それとも、保釋が許されさうになつてゐる時だから、若しかそれを取消されるといふ恐の爲に、私が山川君を罪に落す氣になると思つたのだらうか。こうなつて來ると、檢事といふ者の心理が想像も出來なくなつてしまふ。

あとで聞いて見ると、まだ斯ういふ事がある。石田檢事はそんな馬鹿な事で私を責めた後、更に吉川守邦君を呼びだして、

山川を××××と迫つたさうだ。『××××』とは、山川×××××といふ意味である。そして其の言ひ草の中には、『山川はあの體でどうせ永くは生きない。それ程ならいつそ××で花々しく××××た方がいゝぢやないか』といふ無茶な言葉まであつたそうだ。檢事などゝいふ者の心理が、いよ〳〵以て珍妙不可思議になつてしまふ。

豫審判事の態度

豫審判事と云へば、直ぐに思ひ出す事が一つある。それは昔、或る豫審判事が、ひどく色の青い、愛嬌の少しもない、冷たい、險しい、厭な人體であつたので、それに對して我々の間に『青鬼』といふ仇名が出來てゐた事である。今その頃の事を思ひ返して見るに、具體的に覺えてゐる事は甚だ少いが、大體の感じ、大凡の氣持は、『青鬼!』の一語に依つて誠に善く表現されてゐる。

それから十餘年の後、(一二三年前)曉民共產黨事件の折、私は參考人として、久しぶりで豫審廷に呼びだされた。其の時、第一に感じたのは、豫審判事が別だん鬼らしくない事であつた。然しそれにしても、私は判事の云ふ事に××××かつた。讀み聞かせられた被告の聽取書などにしても、それが全くの拵へ物でないとも限らず、少くとも部分的にどんなウソが交つてゐないとも限らぬと考へてゐた。すると判事は大へん憤慨して、豫審判事が嘘をつくなどゝいふ言分は聞棄にならんと云つた。聞棄にならねばドウする積りであつたのか知らぬが、まさか其の爲に私から罰金を取るわけにも行かなかつたらしい。それで彼は結局、十餘年前の判事と、今の判事とは違ふといふ事を極力辯明したに過ぎなかつた。其の時にも私は、惡い事實を以て我々に起させた疑惑と不信用とを消す爲には、それと反對な善い事實を見せてくれるより外にないと答へて、言葉だけの辯明が無効だといふ事を指摘しておいた。

然るに其の判事は、可なり善い事實も見せてくれたが、同時に可なり惡い事實も見せてくれた。どうした調べの行きがゝりであつたかは忘れたが、判事が私に對して、何か押しつけるような理屈を並べて來たので、私は直ぐに其の理屈を返上して、『それはあなたの判斷である。判斷は御勝手だが、事實はそれと別である』と答へた。すると判事は餘ほど癪にさわつたものと見え、大きな聲で『おだまりなさい!』と怒鳴りつけた。あんまり芝居がゝりに出られたので、私は少しまごついたが、仕方がないので御注文どほり『だまる』事にした。サアさうなると、今度は先方がお困りと見え、色を和らげて樣々私の機嫌を

取りだした。私の方では、『だまれ』と云ふから『だまる』のだといふ態度でゐたが、然しいつまで睨みあつてゐるわけにも行かず、大抵な所で折合をつけた。其の時わたしは、『今の判事』でも存外舊式の芝居をやるものだと深く感じた。

それにまだ斯ういふ事もあつた。其の事件の被告の中には私の娘も交つてゐたので、それで私は證人としてでなく、參考人として調べられたのだが、第二の豫審判事は私に向ひ、自分の見解に依れば矢張り證人として調べる事が出來るのだと云つて、僞證罪を以て私を威かした。それで私は、では證人としてやつて御覽なさいと云つたが、彼は遂にそれをやり得なかつた。これも實に不愉快な威嚇と感じられた。

參考人に對する彼等の態度がこれである。言葉遣ひなどの外形に於ては、成るほど昔と違つた所もあるようだが、實質上には矢張り『×』が消えてはゐないのだなと、私は考へた。

こういふ經驗を背景にして、私は今度の豫審判事沼義雄氏に接觸した。沼氏は先づ私の手錠をはづさせた。(これは出廷の度毎おなじであつた。他の被告等に對しても、總てそうであつたそうだ。)これは勿論、氣持のわるい筈がない。次に沼氏は私の健康を尋ねてくれた。これも氣持のわるい筈がない。それに沼氏の言葉遣ひが如何にも丁寧であつた。檢事とは違ひ、豫審判事としては、もすこし威嚴を保つといふ態度があるだらうと思つてゐたのに、その點は大いに意外であつた。こんな意外は決して不愉快でない。つまり沼判事こそ本當の『重忠式』をやつてゐるのであつた。岩松檢事の人道振りには大ぶん厭味があるが、沼判事の重忠張りは如何にも眞實らしく感じられた。

それでも私は、前年の實例を見せられてゐるので、此の溫和な親切らしい沼判事でも、いつ何時、開き直つて、芝居掛りでやつて來まいものでもないと考へてゐた。然しそれが遂に一度も出て來なかつたのは、嬉しい事の一つだつた。

かくして私は、沼氏の重忠張りに對し、段々多く信頼の氣持を抱く事になつた。或時、沼氏は私に向ひ、『あなたのような方が此の運動をおやめになつて、反對の宣傳をやつて下さつたら、國家の爲に餘ほど大なる効果があるだらうと思ひます』と云ふような事を話しだした。私はそれに對し、『これまでに隨分御注文どほりの事をした考もありますが、世間から其の無節操を嘲笑されて信用を失墜するだけの効果しかありませんでした』といふ返事をしたが、此の點については、沼氏も他の檢事や警察官など〻同じ程度の理解しかないらしかつた。岩松檢事は私に向つて、『あなたもモウ好いお年ですから、一ツどうです、今後は風月でもお樂しみになつては』と御親切に云つて下

すつた。彼等は總て社會主義の被告に對しては、少なくとも一應、何等かの形で改心を勸告すべく訓令でもされてゐるものと見える。只だ沼氏の善かつた事は、そんな改心勸告はたつた一度きりで、後には『此の事件はこれで濟むのですから、今後は又新たに研究なり運動なり仕直して下さい』といふやうな意味で話してくれた。それは大へん氣持よく聞かれた。

それでも私は矢張り、沼氏の訊問の中にどんなカマがあるか、どんな親切ごかしがあるか、他の被告の調書の讀み聞かせの中にどんなゴマカシがあるか、といふことに氣をつけてゐた。然しそれは大體に於いて先づ安心だといふ結論に到達した。それだけ私は沼氏を信用した。

然しその中でも、親切ごかしだけが一番危險だつた。又、接見禁止中、特に妻子との面會を許してくれるとか云ふやうな、恩を賣られる事が一番苦しかつた。先方では恩を賣る積りではないと云ふかも知らぬが、自然幾らかなりとも其の恩を其の自分の心を危險と感じた。こちらにそういふ弱い心の動きがある以上、經驗に富んだ專門家がそれを見逃す筈がない。從つてそれを利用する事を忘れる筈がない。そこに大なる危險がある。

殊に、一面にはそうした恩をかけながら、一面には未決期間の永びく事を以て暗に(或は明らかに)威嚇されるのが、甚だ困る。或る檢事などは、時として、ウソの云へない事や、拷問の出來ない事をもどかしがるやうな口吻をさい漏して、未決を永引かすといふ事に唯一の拷問的効果を收めようとする態度を明示してゐた。その點に於いては、沼氏は毫も如才はなかつた。勿論、言葉は婉曲であつた。被告等が自白を惜しむ以上、豫審決定がおくれるのは止むを得ないと、如何にも止むを得ないらしく語つた。既に六七個月も未決監に入れられて居つて、年末にはなる、寒さには襲へる、そして自白さへすれば保釋にしてやると匂はされる、そして同時に自白せねばいつまでも置くと威嚇される、これでは誰も一寸參らさるを得ない事になる。

尤も、惡い事をしたのなら、それを自白しまいとするのが不都合だ、早く自白するのが當然ぢやないか、といふ議論も或は×××××××××××××××、ナゼ今日拷問が廢止されてゐるのか、分らなくなる。惡い事をしたのを自白させる爲めには、幾ら拷問しても善い筈ではないか。之に反し、既に拷問が惡いと云ふなら、間接の拷問も惡い筈である。現に今度の我々の事件にも、間接の拷問や、カマや、威かしの爲に、大ぶん變な事が生じてゐる。それは今少し後に話す。

然し私は、右の親切ごかしや、永引の威かしについて、さして深く沼氏を責める氣持にはならなかつた。豫審判事たる役目

柄として、實際止むを得ないだらうと諒察してあげる氣持にもなつてゐた。只だ自分として其の親切にコカされず、其の威かしにオドかされさへせねば善いのだと考へてゐた。それで年末になつて保釋を許された時は、私は獄中で許された最後の手紙を沼氏に宛てゝ、氏の親切と公平とを感謝する旨を書き送つた程であつた。要するに私は『青鬼判事』と『芝居掛り判事』との印象から脫却して、『現今の新らしい豫審判事』を沼氏の上に見たのであつた。

所が、保釋で出て來てから後、他の被告の調べられた樣子などを聞いて、あれこれ照し合せて考へて見ると、沼氏に對する私の心持は大ぶん又變つて來た。

第一、沼氏が他の被告の調書を私に讀んで聞かせた時、或る部分（若しくは或る人の）に對しては、只だ要點だけかいつまんで話して聞かされたのだが、そういふ話の中に、事實と違つてゐる點のある事を發見した。つまり私の心に對して、沼氏に好都合な影響を與へる爲に、他の被告の申立を其の眞實と違へて私に話して聞かせた、と思はれる節があつたのである。現今の判事はさすがに明らかな××は云はぬものと、私は信じてゐたのだが、其の信用がこれで覆がへされた。尤も、沼氏は後に此の事について色々辯明してゐた。決して××を云つたのではないと云つた。然し私としては、決して私の聞き違ひではないと信じてゐる。成るほど、××を云つたのではないかも知れない。只だ都合のいゝ言ひそこなひをしたに過ぎないかも知れない。然らば矢張り、現今の判事はさすがに明らかな××は云はぬ、と云ひ得るわけだ。それに、私ばかりでなく、他の被告の中にも、ちよい〳〵××を云はれたと云つてる者が大ぶんあるのは、どうするか。

第二、被告の中の田代君と云ふのは、全く我々の共產黨に關係のない人で、實に飛んだ迷惑をかけられてゐるわけで、其の眞相は沼氏に分つてゐない筈はないと思はれぬのに、とう〳〵それを有罪に決定してしまつてゐる。現に田代君に對する證據は何んにもない。只料理屋の女中が此の人も來たと云つたに過ぎない。そして其の女中達の言葉に證據力の極めて薄弱な事は、幾多の事實からして沼氏には善く分つてゐる筈である。そこで沼氏は吉川君といふ他の被告をして、田代君に對する證據を作らせた形跡が見える。吉川君の云ふ所に依れば、我々が皆な保釋になつて、田代君たつた一人だけ殘つてゐた年末に、沼氏は吉川君に向ひ、あなたがチョット認めてさへ下されば田代さんも直ぐに保釋にしてあげる、と云つたさうである。それで吉川君は、兎にかく何とでもして田代君を出しておいて、あとで公

判で取消せばいゝと思つて、『さう云はれると、或は田代君も來てゐたか知れません』と答へたさうである。吉川君をして斯ふ云ふ申立をさせる爲めには、どうしても、種々なる×××××しが行はれたに相違ない。私は種々の事情を綜合して、どうしても左樣に信ぜざるを保ない。それから沼氏は又、吉川君の申立を×××にして盛んに田代君を苦しめたさうである。田代君の云ふ所に依れば、夜の十二時近くまでも散々責められたので、苦しさの餘り、遂に有りもせぬ事實を認めかけたが、ヤツト思ひかへして、それだけは食ひとめたさうである。これらの事實から見ると、沼氏も場合に依り、相手に依つては、隨分××××××××しかねないものと考へられる。

まだ外にも多少の疑點はあつたが、大體こんな事から私の沼氏に對する氣持は大いに變つた。そこで私は、最後に豫審廷に呼び出された時、先日差上げた感謝狀の內容を全部取消さねばならぬ事を遺憾とする旨を沼氏に告げた。沼氏は驚いた樣子で種々辯明を費して居られたが、其の辯明は私に取つて何等の効果もなかつた。

然し私は今でも沼氏に對して、そんな惡い感じも持つてゐない。只だ獄中で少しく親切にコカされた氣味合のある事を、我れながらおかしく思ふだけの事である。沼氏が相當に陰險であり・相當に冷酷であらうとも、それは職務上の必要事である。「現今の新らしい豫審判事」としても、正に必要な資格である青鬼判事が文化的判事に進化してゐる事は疑ひのない事實であらうが、其の文化的判事が矢張り本質上、×の性質を保有してゐる事も亦疑ひのない事實である。如何に親切な、公平な、善良な豫審判事でも、一旦起訴された被告を成るべく一人も×××××努める事、罪の疑はしきをも成るべく×××+×××××××手柄とする事、白狀せぬ奴、證據の不足の奴を、樣々に××××、可なり××××構はず、證據らしい物を××××××××　そういふ專門的手腕を發揮せずに居られないのが、組織上の必然なのである、彼等は『國家』を思ひ、『職務』を思ふ時、冷酷も、陰險も、××××××××××××××××××××××公正化するのである。只だ彼等は今、それ等の事を成るべく『文化的』に『×××』に行はふとしてゐるだけの事である。

▲補遺。豫審判事は、警察がどんな惡辣な事をしてゐるかを、成るべく知るまいと努めてゐるらしく見える。證人が警察の指圖で動いてゐるのではないかなどといふ疑問は、豫審判事の頭には起り得ないらしく見える。又事件中にスパイがあつても それが證人として現はれて來て居つても、豫審判事は成るべくそれに氣のつかないやうに努めてゐるらしく見える。豫審判事は被告に對して甚だ丁寧な敬語を使ふが、調書には總て其の敬語を省いてしまふ。人の見ない處では、被告に敬意を表する事を許されるが、人の見る文書の上には、飽くまで官吏の尊嚴を保持せねばならぬものと見える。

新聞編輯及製作苦心談

新聞製作上の苦心

城戸元亮

一

新聞製作上の苦心に就いて、何か書けとの御註文である。が、あへて新聞事業に限らず、凡そ事業である限り、何程かの苦心を伴はないものは無い筈である。それを一々書き立てゝ、樂屋落ちや手前味噌を並べて見た處で、何うにもなるものでは無からう。で、或ひは註文とはぴつたり合はぬかも知れぬが、日頃感じて居る新聞に對する社會の無理解——も話が大きいが、ま、さう云つたものを思ひ浮ぶまゝ書きならべて、責を塞がうと思ふ。若しかすると、それが『新聞製作上の苦心』の一つを、語ることになるかも知れない。

二

議會運動がうるさい、新聞が煽動するからだといふ。何うも輕佻詭激の風が著るしい、新聞が助長する爲だといふ。汽車の惡戯が流行する、こいつも新聞が書くからだといふ。一事は萬事、大臣室などにをさまつて居る連中は、多少都合の惡い事が起ると、此の調子で、至極簡短に、『新聞が惡い』で片附けたがる。

そんなに新聞が惡いだらうか。

三

新聞の是非善惡は、姑く問題外としよう。

それより前に此の連中は、今日の新聞を何と考へて居るのであらう。如何なる組織の下に、如何にして經營され、如何なる過程を辿つて成長しつゝあるのが、今日の新聞であるか、考へてみた事があるのだらうか。

問題は、そこを基點とする。

四

新聞は社會の木鐸で、輿論の指導機關であると、定義された事があつた。從つて、新聞記者は布衣の宰相で、文章は經國の大業といふ譯である。

から云ふ見かたが正しいとなると、或ひは大臣室の連中の註文は、一應尤もであり、これを充たさぬ新聞は、文字通り『惡い』ものであり、不都合なものであるかも知れない。が、惜い事に時代が遷つて居る。少くとも『木鐸』の『指導機關』のといふ榮冠が、新聞に許されて居た時代は、既うに過ぎ去つた。時代人が先走りしたのだ。

五

一言にして云へば、今日の新聞は、混然雜然たる社會の耳であり、眼であり、そして口である。それも、時の爲政者と調子を合はせ、それと同じい意識を持つて動くやうな卑賤なものではない。社會のあらゆる階級を通じて、能ふ限り如實にその感覺を寫し、社會そのもの〻感覺機能を果さうとするのである。

新聞を官報と見、敎科書と見、宣傳ビラと見る時、失望を感じるのは、固よりその處。その責を新聞に負はせて、『新聞が惡い』で片附けられては、新聞の迷惑此の上も無い。新聞は新聞である。新聞以外の何ものでも無いのだ。

六

いふまでも無く、新聞は自立自營せなければならない。その爲めには、少しでも多く賣れ、少しでも多くの人に讀まれなければならない。多く賣り、多く讀まれるには、社會の總べての階級を通じ、時代人の最大多數は、何を聽かうとし、何を見ようとし、何を言はうとして居るかを知り、それに依つて動いて行かねばならない。時代人の先頭に立つとは云はぬが、時代人の中に在つて、時代人の意識を、最も敏感に現はさなければならない。それが自づから指導の實を示した時、指導機關と云へるかも知れぬが、指導を看板にして、時代人に臨むのでは斷じて無い。そんな潜越は、今日並びに今日以後、何ものにも許されないであらう。

繰り返していふが、その時代人の最もよき感覺機關の資格を具備したものこそ、新聞らしい新聞と言はるべきである。

七

更に言葉を換へれば、新聞は社會の鏡である。人間の仕事であり、且つ機敏即捷速を第一とする結果、影の寫しばえに、或ひは不滿であるかも知れぬが、形の無い處に影を作る藝當は、鏡である新聞には出來ない。如何なる場合にも、形あつての影であり、形と影の間に、鏡が挾まるだけである。

かう云へば、新聞の誤報を擧げて駁撃さるゝ向もあらうが、新聞が若し、強ひて嘘を作れば、それは新聞そのものゝ自殺に外ならない。殷鑑遠からず、黄色紙として對手にされなくなつたハースト紙を見れば、多く云ふを要せない。

所謂輕佻詭激の風なるものが、鏡に寫つたからとて、徒らに鏡を攻めるのは、ほくろのある顏を鏡に寫して、なぜにほくろが、寫るかと、鏡を攻むる類ひである。ほくろが氣になるならそのほくろを除くに限る。ほくろの存在如何は、鏡の知つた處でない筈である。即ち、ほくろのある顏をほくろの儘寫してこそ、鏡らしい鏡なので、それから先の事は、時代人はこれを如何に見、社會は如何に考ふるか迄でを、新聞は代辯する。

八

新聞はまた、安全瓣である。

一面、鏡として、(その鏡の明不明は別問題に屬する)社會相を在りのまゝに寫し出して、時代人の爲めに批判の材料を與ふると同時に、進んで、大多數の時代人は、如何に見、如何に考へ、更に、それをなすとして、何を求むるか迄でを代辯する新聞は、或る種の壓迫に因つて内向し、惡化し、言論を捨てゝ直接行動に出で、テロリズムの領土に突入しようとするのを、合法的範圍で滿たせしむるやう機會を提供する。この意味に於て、新聞は確かに社會の安全瓣たる任務を盡しつゝある譯だが必らずしも時の爲政者の耳に、快い議論ばかりが並ばぬので安全瓣却つて煽動するかに見らるゝ事がある。

書を焚き、儒を坑にした秦は如何などゝ、いふだけ野暮である。更にまた、こんな事を不平の一に數へるやうでは、今日新聞記者は勤まらないかも知れぬ。

九

新聞は、報道記事に依つて、意外な色をつけられ、思はぬ迷惑をする事がある。

これは、叙上述べ來つた處を縮むれば、云はでもいゝ事かも知れぬが、或る記事が或る政黨に都合よかつたとては、その政黨と特種の關係でもあるかに推せられ、或る記事が或る一派に好意をもつて書かれてあつたといふので、痛くもない腹を探ら

れる事が珍らしくない。

成程、世間には政黨の機關紙とか御用掛とかもあるとも言ふから、さうした風に考へるのも一應尤もかも知れぬが、新聞本來の性質に鑑みて、將たまた、新聞それ自身、より健全なる成長を望む點から見ても、さうした事の策の得たるものか否かは、多く云ふ迄でも無からうと思ふ。なるべく生地の儘、社會各方面の聲を傳へる、――それを一々、色眼で見られては堪つた話ではないか。

一〇

學者或は新人諸君には、何うも新聞の受けが宜くない。新聞は餘りに、俗人に媚過ぎるとか、新聞はブルジョアジーの機關だとか云つた非難が、即ちそれである。

これも亦、强ひて兎角の辯明をする迄でもなく、叙上今日の新聞の何ものたるかを解して貰へば、自然無くなるであらうと思ふが、新聞が俗人に媚びるのではなく、俗人がそのもの――俗人の感覺そのものが、新聞に現はれて居ると、見らるべきである。

更にブルジョアジーの機關だと云ふ非難は、今日の社會に事業として立つ事を條件とする以上、如何にすれば、(それは獨り新聞のみではなく)ブルジョアを問題外にする事が出來るか、先づそれを、此方から伺ひたいものである。

と云つて、『ブルジョアジーの機關だ』と云ふ事實を、その儘認むるかと云へば勿論異議無きを得ない。社會は、混然また然として居る。そこには種々なる階級があり、利害錯綜、簡短に片附ける事は出來ない。新聞の經營は、今日の處資本主義を離れては望まれないが、新聞そのものは、ブルジョアジーの御機嫌を取つた許りでは、持續されない。なぜならば、時代人はブルジョア許りではない。否、時代の大衆は寧ろその反對の立場にある。新聞はその時代人の感覺機關である以上、小數者の爲めに、本來の機能を抂げる事は出來ない。抂げたら、當然自滅に急ぐものである。その矛盾、これは唯『時』のみが解決つけつゝある。

一一

これを要するに、新聞は社會と偕に進み、社會と偕に遷り、社會と偕に果てしない旅を續けて居る。世間の新聞に對する非難なるものゝ大半は、社會そのものが受くべき非難である。社會から切り離して、新聞を論じ、新聞を非難する時、そこに破綻が生じる、――無理解、この一語に歸して、新聞製作者たる我等は、多くの場合、沈默するのみである。

新聞製作者の惱み

千葉龜雄

一

新聞が、指導機關であるか。それとも報導機關であるかは、いつも新らしくくりかへされる古い問題であるが、新聞の生誕が、大體において、報導機關として起つて來たものであることは、世界新聞發生史を辿つて見ても、爭へぬもののやうに思ふ。已に報道が生命である限りは、報道をより早く、より多くするために、近代産業組織の世界において、それが大營業化され、大資本の下に集注されることは、また或は止み得ない結果でなければならぬかも知れない。

もとより指導機關として立つた新聞も中には多い。新聞の公布性を利用して、その主義主張を社會に高調し、それによつて民衆を率ゐやうとした新聞も決して無いではなかつたのであるたとへばわが明治前期の新聞などは、殆んとその種類のものであつたと云ひ得るであらう。けれどもそれは、民衆の教化がまだ狹い時代、その狹い社會教化を高めるために、時代の知識者が悉く新聞のみに據り、新聞の公布性を利用して、その感化を宣傳した時代においてのみその利目があつたのだ。現代のように、一般民衆の教化が高められ、書籍や雜誌が盛んに刊行され、教育が不完全ながらも行はれて來る社會になると、民衆はもう決して新聞の聲のみに聞かない。また、たとへ新聞が、どれほどの知識者を、新聞社に集めたにしても、それによつて、民衆の一切の指導をする機關になることは不可能である。ましてその以下であれば猶の事であらう。だから近代の新聞が、輿論を動かす力が乏しいとか、社説が猫の尻尾ほどの効用が無いとかいはれるのも、ありやうは、極めて當然な成り行きなのである。つまりは民衆が、不完全な知識しきや持たないところの、新聞の意見などに耳を傾けずとも、新聞が與へるよりはずつと高いところの、高調な知識を得るやうに大體なつたのである。そこで、ウツドロオ・ウヰルソンが云つたやうに、新聞は「意見の糧」を與へるであらう。けれども意見そのものを與へることは出來ない。さればとて、それは新聞の價値や本質が、ちつとでも下落したことではない。たゞ、民衆教化が逆比例に高上したまでゞある。憤慨するには當らない。むしろ喜ぶべきであらう。この意味において、國際關係や國民意志が、その個々の、新

聞社說のみで代表されるやうに電報されて居る現代の様式は、私にとつて大きな疑問を與へずには居ないのである。

二

けれども新聞は、民衆が耳を傾けると傾むけぬによつて、主義主張を低下したり、疎末にしてよい理由は少しも無い。なぜなら、公衆機關としての一つの新聞は、それ自身として、最高の思想と意見を有し、またそれを表現する自然の慾望があり、必要がある筈だからである。それは、生物が空氣を呼吸して生きるやうに、必然であり、自然でなければならぬ。自分の生存の意志である。他人の爲の壓迫であつてはならぬ。然るに現代の新聞が、自分で自分の主張を重んじないで、或は時代の低流に媚び或は自分を社會に沒入して、自分の呼吸を、社會のそれと等しくすることを敢てし得ない。若しくば社會の傳統や經驗に反折して、理想を辨證する機運に見す見す當面しながら、たゞ僅かばかりの聰明と勇氣を持ち合はせぬばかりに、自分から、自分の特權をむざむざ棄權するやうな場合も珍らしくはない。そうした現實が非常に多い。或は記者がそれを自覺しても、社是が、資本是がまた錯誤した社會是がそれを墮胎させる。一つは記者の時代盲である。でなければ、時代の思想壓殺である。なるほど現代のやうな産業組織の社會にあつては、記者もまた、新聞といふ大營業機關の一雇人に過ぎない。機關を作用する意味がたゞ雇主にある。微少な大積みの雇人の意志でどうされる譯のものではない。そう思つて妥協するなら、もとより譯はないのだが、そこにはまた、どうしても妥協しきれない或るものを持ち續けるところの、多くの若い魂がある。新時代の若い新聞製作者の解決されぬ大きな惱みがそこにある。

三

で、現代の新聞は、とにかく意見や主張を疎末にして、たゞ發生の本元であつたところの、報道一方の促進に取りかゝつた。報道には、より早きを要し、より多きを要する。そこで報道を專一とすれば、どうしてもより多くの人間と、より多くの有力な文化機關の使用を必要とせねばならない。大資本の集注が必然性となる所以である。かくしてかつて、廣告によつてのみ、成り立つた過去の新聞は、大資本家に寄生する一つの報道公布機關に過ぎなかつたのであるが、現代の新聞は、外部に依然として、廣告主といふ大資本家を擁し乍ら、新聞それ自身もまた、大資本家として肥え太らさるを得ないのである。さてまた現代において、多數の新聞の存立は、たゞ廣告の多い少ない

によつて波動される。廣告を多くとり入れるには、どうしても多數を賣りひろめねばならぬ。多數を賣りひろめる上には、記事をより通俗化して、これまで新聞を讀まない讀者を顧客とせねばならぬ。新聞を讀み得る程度の社會は、勸めずとも已に讀んで居る。その上をふやすには、どうしても、非讀者を讀者にするに限る。しかも彼等は、きまつて低級な教育しきや享けないものである爲に、新聞を彼等の讀むやうにするには、相應合理性を犧牲にしてまでも、記事の調子と材料を低化せねばならぬのは止み得ない。これがまた若い、いさぎよい魂を持つものにとつて、正に堪へ得られない侮辱でなければならぬ。近代新聞紙の啓蒙化と、低級化は、かうした錯綜した機構の中に醱酵されつゝあるのである。

四

あえて日本と云はぬ、廣く見た近代新聞の産業化が、新聞社それ自身の中に發生させるものは、一つは內の資本主が記事の上に加へる統制であり、二つは、外の資本家たる——廣告主から、間接に與へられる束縛である。かうして彼等記者の自由は、或る意味で幾分褫奪される。更にこの新聞の産業化が、平面に働らいて行く一つの作用は、いわゆるニュウスペエパア・カアニヴリズムの大勢である。大新聞が、或は大資本家が、次第に小新聞を蠶食して行く。或は小新聞が、經營の困難にたへ得ずに崩潰する。それを大資本家が買取つて、自分の專用に供しやうとする。トラストやシンヂゲートや、かくして新聞が資本化して行つた日には、將來の大勢は果してどうなるであらうか。云ふまでもなく、新聞はたゞ、或る特種階級や、或る種の思想の專制する機關とのみなり了るであらう。そしてもともと自由の表現の爲に起つた新聞起元の一本質は、今や却つてその新聞の逆用によつて、自由な思想を殺戮する爲の道具としてのみ利用されることになるであらう。震災以來のわが國新聞は、殊に種々な內部組織の變動を各社で經驗しつゝある。英米新聞界の最近趨勢たるところの、新聞蠶食主義は、大地震といふ天災によつて、わが新聞界にも遠慮なく侵潤して來たのである。併るに山來小新聞そのものは、その公布性の勢力が、大新聞のやうに廣くなかつた。却つてそれが安全帶となつて、わり合に、主張主義に忠實であり、堅固であつたことがあり得た。自分の例を採つては惡いが、少なくとも、自分の居る「讀賣新聞」は、かつて机を共にしたところの、小村、花田、丸山諸氏のペンによつて、現代新聞中の、最も自由で、最も尖銳な強い主張が、相應に表現されて居たと確信する。そしてその確信と主張の爲に、味噌

も葬も同視する無知なともがらに、誤まつて過激な反抗思想として見做され、有形無形の迫害を受けた苦い經驗もある。けれども私はそれが爲に、此等の確信に同意する意見を少しでも撤退するものではない。そして私は、此等の思想の永遠性を信ずると共に、妥協の無い主張を主張することの、いかに快よいものであるかを事實において力強く味はせられた。

が、更に自分の事實を離れて見れば、大資本の新聞蠶食は、理屈として、小新聞の主義主張の虱つぶしでもある。新聞資本化それ自身の危険がそこに宿る。なぜなら、新聞のような、絶對的である公衆機關を、一二の特權で專制することは、王政の寡頭專制政治下のそれ以上に、民衆の反感と憎惡を挑戰する結果になるからである。王の專制意志を感ずるものは、最初はたかたか目覺めた小數に限られるであらう。然るに新聞の公布性によつて、新聞專制を宣布する場合には、この反感が全般的なものになる。その將來する禍が何よりも大きい。

五

次にわれ等が考へるのは、新聞が、報道の機關であるといふ意味についてゞある。世間で新聞を攻擊する人には、或は、新聞が、單なる報道機關であることを擧げ、或は報道そのものに、何等の眞實性や合理性の裏付け無いことを非難する、しかし、私一箇の心理に即して云ふならばかうだ。私が報道機關である新聞に奉仕する一つの理由は、單に事實が、事實である爲に報道するのではない。それを批判の對象としてのみ、思索の與料としてのみ、そしてこれ等の價値を感ずるものとしてのみ、報道する興味と必要を感ずるものであると。そして批判の背景として常住するものは、いつも社會であり、時代であり、また人生であり、人道愛である。たとへその批判がまちがつて居ても、また材料の選擇が、私一箇のまちがつた批判から出立しても、要するに根本において、それが私の批判であり、またその批判を內在とした記事であり、そうした記事を掲げることを許されることのみにおいて、私の記者意識と私の人格主張とが一致し、滿足する。然るにこの記者意識が、現代新聞生活にあつては、幾度でも息苦しい試煉に逢ふ。脅迫に逢ふ。私は決して試煉は恐れない。が、これは強ち私ばかりでない。それは多少の自覺を持つ記者達にあつては、絶えず包圍される惡空氣であらう。そして或はその空氣によつて窒息する。或は屈從する。たゞその場合において、どんな他のものと分裂しても、人格の分裂だけを完全に避け得たものこそは始めて完全に勝利したものといへる。われ等は、現代新聞生活において、絶え

ず、その悲惨な苦闘を自他の間に經驗する。

六

現代の新聞記者にあつて、新聞製作の上で、あまりに社會に媚びよと命ぜられ、あまりに社會に低下せよと命ぜられ、あまりに社會の偏見と無知に忍從せよと命ぜられた經驗が果して乏しいであらうか。もとより新聞は一班性と公布性とをもつ。あまりに特殊な修養と、趣味とは、決して新聞を製作する心理には含まれ得ない。むしろいかにして最多數の讀者に氣に入らうかとは、苟しくも新聞編輯に從事する者の公理であらねばならぬ。されぱとて新聞の製作が、民衆の低下した趣味に媚び、あまえ、それを増長させることに力點が無いのではないが。そして少しづつでもその趣味を高上し、低い趣味を嫌忌させるやうに誘くところの、機縁として與ふる道具として新聞が役立つのではないか。また新聞記者は、それ位の理知があつてもよいのではないか、また新聞の製作は、たとへ積極的に、民衆の意思を導くものでないにせよ。少くとも、時代の背景に調攝して、民衆の意識を照明するやうな參考になる暗示を與へることは、果してそれほどの時代反逆だらうか。安定の破壊だらうか。思ふに過去に力調を置く人は、試驗濟になつた經驗と、過去に生活することのみが、唯一の安定した生活のやうに思つて居るその經驗と過去が、果していつまでも、安定して居るものなら世話はない。議論は、そうした過去だから、經驗だから、一層危險なのだといふのに出發する。なぜなら、過去とは、過去といふそのことが、すでに現在將來の生命が滅びて居ることを前提するからだ。しかも、現在もまた、一瞬の後の過去に過ぎない、だから頼むものはたゞ將來にある、故にかゝる將來の世界を、より良いものに構成する爲に、民衆にその暗示を與ふることが、なぜ、それほどに危險であり、不合理だといふのであらうか。特に新聞が、その實物教授に、最も恰好である理由は、それが、端的に時代の事實の背景を、最も具體的に表現して居る一點にある。と、云つて、だからわれ等は、過去の一切を拋棄せよといふのではない。たとへ過去の遺物の上に、將來を押建てるにしても、なほその過去を、いかに最大限に有利にするかの上に、將來を測定する利幅が大きく働きかけるのであると思ふ。然るに社會人の或る部分は、なぜ日光に背いて墓穴をのみ續るのであらうか。新聞もまた、なぜ將來を照す光とならずに、過去のみを追懷し、憧憬する傷感詩人として生活するのであらうか。こゝにも私の、新聞製作者としての大きな疑がある。

七

けれども、報道が表看板である以上は、何んと云つても現代及び現代以後の新聞は、大資本化されねばならない。小新聞編輯者の現代の悩みは、一々細かい事實などは述べなくとも、たゞ一に資本の缺乏から來る凡ての禍にある。人の問題、通信の問題、歸するところは金があるかないかに歸する。貧乏者の夫婦喧嘩が、多く貧乏から起るのと同じだ。要するに、すべてのものと同様に、金で面を張るのが、現代新聞組織にも共通する通理である。われ等は、せめて文化の機關たる新聞だけは、出來るだけ多數を存立させ、主義主張の出來るだけ複雜の分裂を希求する。その意味においては、東京市の新聞が、十四あらうと十五あらうと、決して多過ぎることを思はぬのである。なぜなら文化が進むに從つて、思想がより微細に分裂するのは、思想大成の自然でもあり、必然でもあるからだ。けれどもそれも恐らく空想に過ぎない。

たゞ現代新聞製作者の瞳を、夢にも輝かせる光明があるならば、それは正しくかういふことであらう、卽ち資本家がその大規模な報道機關を、一路社會民衆利福の沿線に沿ひて、少しも離れさせないやうに進むことである。いかに資本家とても、民衆を精神的に、徹底的に墮落させようとするメフヰストや惡魔ではあるまい。それによつて利得すればよいのだ。たゞ民衆の需要に供給して、浄化された理知によるものを彼等に要求するならば、彼等としても、また清淨な手によつて、利得を謀ることになるであらう。たゞこの場合に斷言することは、少くとも現代にあつてはその種類の能動的なものを、資本家からは望み得ないといふことである。民衆の能動によつてのみ、資本家を能動させることが出來るだけだ。そこで落ちて行くところは、誰も云ふ民衆の理想的な教育化と、文化化でなければならぬ、現代新聞の浄化は、その曉においてこそ、始めて漸く何程かその曉光が望まれるであらうが、さて、そはまた何時のことか。

新聞作りの苦心と出來ない相談二三

野村長一

新聞はたしかに作り憎くなつた。十年前と比べて見ればわか

るが政黨の關係が小面倒になつて居るし、思想問題は御存じの通り、曰く何、曰く何と、新聞記者や編輯者を手こずらせる問題が、一日益しに多くなつて行くばかりだ。

道樂氣分で作つた昔の新聞が戀しい

その時代は、凝つた見だしをつけて、一寸氣取つた文章でも書くと、それで世間がヤンヤと言つたものである。が今ではとてもそんなわけには行かない。護憲團が何うした、火保問題が斯うした、やれ小作爭議の水平運動のと、うつかり書き飛ばされない問題が、毎日二つも三つも紙面に現はれる。

昔しは新米の記者に「筆で書かずに足で書け」と言つて教へたが、やがて近き將來に「筆で書かずに頭で書け」といふ時代が來るかもしれない。

○

先輩某氏が、曾て私に斯う言つた事がある、「何年となく新聞を編輯して見たが、自分で本當に氣に入つた新聞を作つたのは、精々三年に一度位のものだ」と、此言葉を聞いたら、世間の人は豫想外に思ふかも知れないが、新聞作りの苦心は、先づ斯うしたものである。

理想的に出來た新聞は、第一に落ちた種があつてはいけない第二に、一つや二つは素晴らし特種がなくてはいけない、寫眞が鮮明で、重大な誤植がなくて、組版の調子が何んとなく藝術的で、締め切りも刷り上りも、規定の時間より三分や五分は早く行かなくてはいけない。こんな都合の好い新聞は、三年に一度出來れば本當に仕合せだ。社會部から政治部へ又社會部へ學藝部へと、十年近くも編輯をやつて居た私の經驗で、本當に氣に入つた新聞を作つた事は幾度あつたらう。今更思ひ返しても一寸見當が付かない、新聞作りはそれ程骨が折れるのだ。

各々の社には その社に固有の社風といふものがある、其社風の範圍内で、編輯者の善い趣味や立派な見識が現れれば、申分のない新聞と言ふべきであるが、なかなか左うは出來るものではない、素人が見てはわからぬ程度の失策や誤謬は何日の如何なる新聞にも、二つや三つ無い事はない、編輯者の味ふのは、多くの場合得意や自負ではなくて、やるせない自責と慚愧であつた。

○

「新聞は輿論の代表者で、新聞記者は一世を指導する先覺者でなければならぬ……」と私達は教はつたものである、それは曾て新聞記者のイロハであつた。そして今でも尚、誰に聞いても異論の狹みやうのない新聞記者學のイロハである。

少くとも三十年或は二十年前までは、新聞記者は民衆より一段高い所に在つて、――或は高い所に在りと信じて――毎日

〜演說をするやうな緊張した心持で新聞を作つて居たものである。その頃は雜報を書くのも、論說を書くのも大した變りはなかつた。政治上の報導は勿論、市井の一些事を書くにしても、半分は記者の主觀を織込んで、片言隻句の間にも、天下を指導する用意を忘れなかつたものである。が今では何うだらう、假にそんな心持で新聞を作つたとしたら、その新聞は一體どんな事になるだらう。私は決して新聞の商品化に贊成するものではないが、この千古不磨の金言も、昔と今では、ほんの少しばかり解釋の方法が違つて來なければならぬといふことを信じないわけにはゆかない。

議論をすると際限もない、私は一足跳に結論へ急いで、いきなり、そんなら何うすればいゝのかといふ事を話し度い。

一番大事なことは、新聞記者に付き纏ふ尊大な迷信をふり捨てゝ、「讀者と共に新聞を作る」心持になつて欲しい事である。昔も今も、新聞は輿論の代表者で、民衆の指導者たるに變りはないが、少數の記者の意嚮によつて、何うにでもなる程度のアヤフヤな輿論の代表者ではなく、讀者の良心と、善い趣味の上に立つて、その道しるべとなる所謂「天下の公器」であつて欲しいことである。新聞に關する私の意見は、すべてこの出發點から始まる

○

もし事情が許すならば、この――讀者と共に作るといふ――主義を極度まで押し進めて、特別の機關を要する雜報（ニュース）以外の記事を全部讀者に任せる方法を講ずるのも面白からうと思ふ。雜報は字義通り事件の單純なる報導で宜い、新聞社が單にニュースを採るだけでも、今日の機關に二倍或は三倍する機關を持つて居ても、大に過ぎるといふことはないから、私の言ふのは決して新聞の縮少を意味するのではない。

雜報以外の記事――例へば論文、小說、批評、寫眞、繪畫、文藝、等――一切を、出來るだけ讀者の手で作り上げたならば、讀者と新聞社と接近を計る上にも、紙面に活氣を添へる上にも、非常に興味の多いことだらうと思ふ。その爲に多額の賞金を懸けるもいゝ、單に讀者の發表欲と結び付いて、適當に紙面をあんばいしてやるだけでも惡くはない、要はあらゆる記事の上に、讀者が參與し得るといふ事が、私の考へて居る「新時代の新聞」の特色である。

○

雜報を扱ふ上にも、考へなければならぬ事が澤山ある。新聞に對する世の批難は、何時の世にも型で鑄抜いたやうに一定して居る、曰く「新聞は人のアラを探すからいけない、惡事醜行

を發いてばかり居るからいけない」と、これは日本の新聞の歴史あつて以來、殆んどすべての人の口で繰り返された言葉である。そんなにまで嫌はれ乍ら、ナゼ日本の新聞は覺醒しなかつたのか、何時までたつても、悪事醜行を發いて嬉しがつて居ると思はれるのは一體何うしたわけか、凡そ世の中に、これ程わけのわからぬ事はあるまい。

が、少し考へれば何んでもない事だ。新聞の態度を批難して居乍らも、多數の讀者は、案外あんな記事を喜んで讀んでは居なかつたらうか、今日のやうに、新聞間の競爭が激しくなると、お互に少しでも讀者の喜び相な、刺戟の强烈な記事を選ばなければならなくなる。他の新聞でそんな調子でやつて居る中に、或一つの新聞だけ、超然として忠臣孝子の記事ばかり書いて居たらどんなものだらう。

新聞記者と雖も、生れ乍らにして人のアラを探して喜ぶ人種ばかりではない、恐らく總ての記者は、そんなイヤな記事は止し度いと思つて居るだらう。そして、何時かは日本にも、新聞が態度を改めるか、讀者の好みが變るかして、もう少し明るい親しみのある新聞が作られる時機が來るだらうと信じて居る。私一箇の考では、一番先に此機運を觀取して、明るく心持よく作る新聞が「將來に勝」をしめるだらうとさへ思つて居る位である。

柄の無いところに柄をつけたやうな攻撃の記事、醜怪の限りをさらけ出した罪惡に關する記事、或は衆愚に、或は特種の權力に阿つた不徹底な記事、さう言つたものは、早晩紙面から排斥されて、本當に民衆の友たり、輿論の指導者たる明るい新聞の生れる時機が來るだらう。その時の新聞は、もう怖いものでも嫌らしいものでもない、讀者の心へ温かな光を投げかけて、慰籍とも相談相手とも、場合によれば一番優れた指導者ともなるだらう。

○

誰でも言ふやうに、日本の新聞は近頃著しくアメリカ風になつた。報導本位の地味に親切に作られた新聞が、何時の間にやら、特種本位の派手な輕跳なものになつてしまつた。下らない記事でも、特種だから大きくする。重大な事件でも、均霑種だから、或は立ち遲れになつたから小さく扱ふ、これはどの社でも同じやうに實行して居る不文律である。新聞社の意地つ張りの爲に、事件を大小自在に扱はれては、正直な讀者こそ飛んだ災難である。

一つの新聞に抜かれた種は、翌日外の新聞でどんなに扱はれるか、二種以上新聞を併讀して居るものなら、誰でも直ぐ氣の

付くことである。新聞社の方から言へば、抜かれた種を書かずに濟むことなら、何んとか工面をして瘦せ我慢を張り通すだらう、此點に至ると、大新聞と言はれるほど反つて仕末が悪い。

新聞が若し本當に讀者に親切でありたかつたら、お互に之んな意地つ張りは止す事だ。思ひ切つて雅量を示して、前日抜かれた種を、別の方面から觀察して、全く違つた扱ひ方をして見せるのも面白からうではないか、讀者の方から言へば、新聞一つしか取らない爲に、全く知らずに過す事件がどれだけ澤山あるかわからないのだ。

新聞のミダシは段々大きくなるが、記事の項數は次第に少くなる。十年程前迄は、大抵の新聞に、催し物、集會、寄席の替り目、義太夫の語り物まで報導したものだが、今ではそんな野暮つ度い記事を掲げる新聞は一つもない。そして二段抜、三段抜、四段抜の大見ダシを羅列し、初號では物足りなくなつて薩摩下駄見たいな文字を木版で彫らせたりする。併し、そんなデカい見ダシを所有する記事が、ベタで叩き込んだ「明日の催し物」より値打があるかどうか、誰がそれを言ひ切る事が出來るだらう。もう一度言ふが、本當に讀者に親切であり度かつたら、特種競爭をいゝ加減に切り上げて、地味な親切な、報導大事の新聞に歸つたらどうだらう。お互様の事ながら、考へて見ると甚だ心もとない。

○

重要な材料を悉く網羅して、他の新聞に一歩も讓らない新聞を作るのは至極宜い、併しその爲に配達が遅れたとしたら、それが一體どんな結果になるだらう。八時に出かける人が、家を出る迄に新聞を讀めなかつたら、仕事に忙殺されて、一日新聞を讀まずにしまふかも知れない、たつた一つだけ遅い記事を入れた爲に、讀者はすべての記事を一日遅れて見なければならぬ結果になる、締切時間の重要なことは、この一事を考へただけで充分だ。朝鮮滿洲行の新聞などになると、船積の都合で一日も二日も遅れることがある、どんな良い新聞を作つたにしても、締切を遅らせれば、最悪の新聞を作つたより尙ほ悪い事になるのだ。これは非常に解り切つた事で、しかも、何時の編輯者も仕事に熱注すると屢々忘れてしまふ問題であつた。

○

新聞と新聞が、デパートメントストアとデパートメントストアとのやうな競爭をするのは、近頃の風潮のうちで一番いやな事だ。宣傳よりは編輯を大事に、外電や自動車の多いのを誇るより、立派な記者の多いのを誇るやうな傾向に導いて行き度いものである。(終り)

今の新聞經營者の惱み

永代靜雄

難業に堪ゆるが不思議

日本の新聞事業も近年よほどに企業化し、今では一つの立派な商賣と見られてきたが、内幕に入れば研究の餘地多く、米國あたりの同業に比べると餘りの大差に呆れるやうな點もある。しかも世間は米、英に次ぐ新聞國であるかのやうに日本を見る。それだけに日本の經營者の苦心は察すべきである。

たとへば、米國朝夕刊新聞の一日平均總販賣部數約三千百五十萬部（別に日曜新聞一回平均約二千百五十萬部）に對し、日本の一日平均總發行部數は恐らく七百五十萬部を超えないであらう。米國は全人口に對し（日曜紙を除いて）約三人半に一部、日本は約十人一部、さしあたり文化の程度に大きな相違を見る。さりながら、販賣收入に於て、三半對一の比例を取り得るかといふに然らず、米國の新聞はすべて定價賣であるに反し、日本の實狀は讀者の知る通りである、米國は呼賣以外の配達料を讀者から申し受けるに反して、日本では朝夕二回の配達料を新聞社で負擔する。新聞製作の元價についても、米國では安い原料、能率的の機械、それに巨額の資本力をもつて益々元價を低下せしめるに反し、日本では米國以上の高價の用紙、高價で粗悪なインキ、不完全なるにも關はらず極めてお高い通信費を支出せねばならぬ。また、米國朝夕刊二千三十六紙の平均最低廣告料率は百萬部一行當り三弗九仙であるに對し、日本では百萬部の一行當り平均二圓も疑はしい。つまり、經費率は米國以上であり收入率は遙かの下位にある。むしろ日本の新聞經營者がよくこの難局に堪ゆるを不思議とする。

想像に越ゆる販賣苦悶

大朝、大每、報知は日本の新聞界を通じて經營上手の三標本とされる。しかも此の三社すら新聞の定價賣りに成功しないのである。自餘各社の濫賣競走に至つては、悪戰苦鬪、殆んど局外者の想像に數倍し、その事實を語るは語る者の苦痛であるけれども這裏の消息を解せずして新聞經營の苦心は察し難しとする。蓋し各社の販賣苦惱を知るは新聞研究の序幕である。

こゝに定價あり、販賣店の爲めに別に元價を制定する、それはすべての商賣と同じである。たゞ新聞販賣上の特異相は、賣價

にも元價にも甲乙丙丁の數種を置くことである。ある讀者は新聞を定價で買い、多くの讀者は割引されて讀む。元價もさやうに種區分される。販賣競争の激しい地域にあつては、元價は殆んど無代に近く、賣價もまたそれに準ずることさへある。さうして、競争を離れての普通の元價はと問へば、大阪の大新聞は一部平均二錢前後、東京の大新聞は一錢四五厘から七八厘、頁數の尠ない大新聞は一錢二三厘と見るべきである

一口に云へば、いわゆる大新聞は、概して定價の半額程度を販賣元帳の收入とするのである。

定價と實收と製作元價

完全に定價の半額を收め得れば、まだ何とか方角もつくであらう。八十錢定價の新聞を八十萬部賣つて一ヶ月三十二萬圓の販賣收入ありとせば、それは日本の奇蹟である。

たとへば、東京に八十萬部發行する大新聞ありとし、その定價八十錢、販賣元價一部一錢七厘とする。八十萬部に對してその規定元價五十一錢を收むれば、四十八萬圓の月收を得ることであるが、苟くも八十萬部といふ大部數を賣るためには、市内は勿論、關東、東北、北陸より東海道方面に異常の擴張戰を續行しなくてはならぬ。さやうの新聞は大抵販賣店に對して戻し金と稱するもの一部當り五厘位を與ふるのほか、擴張奬勵金一ヶ月當り二十五錢程を支給する。即はち一ヶ月の元價五十一錢に對して四十錢の拂戻しを行なふが故に、その社の實收は一部一ヶ月十一錢に過ぎぬ。八十萬部中の六十萬部をその調子で賣れば月收六萬六千圓、あとの二十萬部を擴張費、または直營店費を差引いて月收三十錢の六萬圓、合して十二萬六千圓となり、その一部當り月收十五錢七厘五毛を算ふるに過ぎぬ。

この例話は思ふに尠なからず讀者を驚かしたであらう。然し八十錢定價の新聞にして、八十萬部を賣らうとすれば、それほどの苦心は皆これを敢てするのである。

その新聞の製作原價は何程か。

朝夕刊十二頁の用紙代約一錢三厘、印刷經費五厘、最低の計一錢八厘、一ヶ月五十四錢也。

これに通信費、俸給、工場費、營業費を加ふれば、一部當り優に三錢五厘に上る。さればこそ、大阪每日は、一部に就て一錢五厘の販賣缺損であると云ふ。八十萬部を賣るとして一ヶ月三十六萬圓の販賣缺損である。まことに立派な社會奉仕ではないか。

さりながら讀者は問ふであらう。「製作元價と賣收入との間の大した溝を一體何が埋めるのだらうか。またその溝を埋めた上

に利益配當の山を築くのは何の力か」と。

廣告増收のための濫賣

答へて曰く「それは廣告料である」

廣告收入は販賣收入と共に新聞社の二大財源である。さうして、廣告收入を増すためには是非とも販賣部數を多からしめねばならぬ。およそ今の日本の新聞經營者の共通する苦悶は、販賣擴張に伴なふ大缺損を補塡するため、いかにして廣告收入を増すべきやにある。逆に云へば、廣告料率算定の第一基礎たる發行部數を如何にして激増せしむべきかにある。この止むなき焦慮こそは、遂に經營者を驅つて新聞の製作元價と販賣實收との大距離を作らしむるに至つたのである。

このやり方は正しいであらうか。否、經營者自身もその錯誤を感じながら尙ほ勢に引かれて危險な道を押し進んでゐるのである。彼等は「最大發行部數」の迷信者ではない。たゞ「最高廣告料率」の熱愛者たるに過ぎぬ。勿論「最大部數」は「最高料率」を産み、廣告料の増收は販賣の大損を補なつて尙ほ二三割の利益をも配當せしめるだらう。然し最高部數への不斷の猛進は、販賣缺損の底止するなき増額である。缺損は部數の激増に正比例する。その繰り回しの愚かさに氣づいた經營者は、無謀の販賣擴張を差し控へたであらう。また一種の經營者は、發行部數を實際の二倍にも宣傳したであらう。後の場合から日本新聞の墮落史は初まるのである。

販賣廣告兩收入の比率

廣告收入を餘りに多からしめやうとするのは危險で有害である。然らばどれほどを健全とするか。まづ今の日本では、販賣收入と相半ばするを良しとされる。東京では報知、中外商業の二社のみこの狀態にある。大每、大朝は販賣五三%に對する廣告四七%程度であり、東京の大新聞は大抵販賣五五、廣告四五%、稀に六對四の割合の社もある。(米國では販賣三五、廣告六五%を普通とし稀に二對八を示す社あり)

販賣、廣告兩收入の比率の健全な社は決して無謀の販賣擴張を試みない。例へば、定價八十錢の八頁新聞にして五十萬部を賣るものありとする。その販賣實收は十五萬圓見當であらう。その新聞は一ケ月千三百段の廣告を掲せる。一行の單價平均一圓と見て月收十六萬六千八百圓、うち一割を廣告取次の代理業者に拂戾せば丁度十五萬八百圓の實收となつて、販賣、廣告兩收入の並行を保ち得る。然るにこの新聞が新たに十萬部を擴張しようとすれば、擴張と一ケ年間の維持との爲めに一部當り尠

なくも七圓を要し、たとへその全讀者を固定せしめて一部三十錢宛一ヶ年三圓六十錢の實收を得るとするも、差引き三圓四十錢、總體で三十四萬圓の缺損となり、これを補塡するためには廣告單價一行十錢宛の値上げを斷行せねばならぬ。萬一それに失敗したとすれば、その社の收入はおびたゞしく跛行狀を呈するだらう。

急務は定價賣りの實行

聰明な經營者は、販賣、廣告兩收入の比率を並進せしめながらに、全體の增收を策するであらう。それには、新聞の定價賣による元價の確立確收を第一とし、廣告料率算定の基準を明確ならしめるを第二とするに相違ない。

定價賣に就ては一般の經營者も贊成であり、大阪の二社は久しい前からこれを實行し、東京の五大新聞も先年來協定の機運を作つてゐたが、震災後は再び惡競爭の渦中にある。それは誰の眼にも「損の競爭」としか映らず、お互新聞の品位と信用とを傷つけ合ふに夢中であるとしか受け取れぬ。たゞ少數俊敏の經營者たちは一日も早く定價賣りを協定實行して元價を高め、それを確收しようとし、幾多の困難を排してこれが實現に努力しつゝある。ともあれ定價賣りの利益は明白である。前に例示した五十萬部八十錢定價の八頁新聞ならば元價一錢五厘は當然でありその月收二十二萬五千圓によつて七萬五千圓の增收を見るではないか。

廣告料率の合理的算出

廣告料率の算定には色々議論もある。しかし經營者の苦心は、その新聞の平均元價に部數を乘じ、これに取次店への手數料を加へ、その和を廣告總行數で除した額にまで單價を引き上げるにある。即ち前に云ふ新聞の場合では元價一錢五厘一ケ月四十五錢に五十萬部を乘じて二十二萬五千圓、これに一割の手數料を加へて二十四萬七千五百圓、これを千二百段で除すと一行一圓三十七錢弱となる。一方販賣、廣告の兩收入は並進して一ヶ月十五萬圓の增收を見らる。

この程度の料率は確實なる五十萬部に對しては決して高くはない。米國の百萬部一行最低三弗九仙に比し寧ろ安きに失する。自體日本の廣告料率は物價指數や世界經濟の實際に照らして不合理に安すぎる。一萬部一行二錢七厘二毛といふが如き廣告料は世界の文明國にないことである。

さて經營者がこれに成功したとする。八頁新聞で一部當り三錢の實收である。製作元價一錢二厘に諸經費一錢三厘を加へ

二錢五厘とするも年純益四十五萬圓を得て社の財政を確立し益々公共機關たる新聞の天職に忠なるを得よう。

最上策は販賣部數公表

今の經營者の苦心は以上に盡きた。最後の問題は、經營者諸君のうち、新聞の廣告料率は必らずや實際の販賣部數と正比例するものなることを味識してゐるのは何人ゐるかである。昨年下半季に於ける全米新聞純販賣數は上半期に比し七％の增加であつたが廣告料率も亦七％だけ增率された。廣告主は喜こんでこれに應じた。米國では各新聞とも年內一日の平均純販賣部數を公表するからである。公正實に羨やむべしである。

日本では販賣部數は勿論、一二の例外を除けば發行部數さへも公表されぬ。然し公表されざる部數を廣告主は比較的正確に調査悉知する。廣告主の知識はもはや虛僞の發表部數をその儘に受け入れない。勇氣あり良心ある新聞社は廣告主の知識に信賴して速に部數を公表し、その增減に應じて廣告料率を高下せしむべきである。この一事をだに斷行すれば、有害無益の濫賣競爭は忽にして止み、新聞の競爭は實力の上に復るであらう。

驅出しの追憶

土岐善麿

ここに極めて零碎な、斷片的な挿話を三四種列擧しよう。これはもとより「苦心」といふべき程度のものでなく、新聞記者生活の記念にもするものでもなく、また新聞製作の要諦などいふべきものでも更にないが、しかも種々雜多な大事件の體驗のほかに、僕にとつては忘れ難い印象、記憶となつてゐるものだ。與へられた課題に對して、諸先輩は過去現在將來に亘る名論卓說を吐き、すばらしい經驗を語られるであらうから、僕は敢てこの『驅出し』の材料を選ばう。それは恰度、社說、論說、論策、謂ゆる『上置き』の大記事などのほかに、紙面の最後のあたりへ組込まれる『今日の問題』とか、「近事片々」とか、『靑鉛筆』などが、新聞製作のうへに讀者への別なヴアリユをもつその意味において。——

人力車

無事な夜勤だ。煙草の吸がらや茶のしぶなどで薄汚なくなつ

たストウブの前、やがて市内版も此儘何の事件もなければ早めに締切らうといふ頃。グラ〳〵とやゝ大きな地震だ。——地震といへば去年の九月から初めて日本にはじまつたものゝやうに思ふが、——思ひもしまいが、——僕が駆出しの新聞記者であつた時分にも、地震はあつたものである。もう一昔以上も前になる。先般の大地震後、すこし位のグラ〳〵は天井で鼠のさわいだぐらゐとしか感じられないが、地震があんな大事件を惹起すとも一般に知らなかつたその時分としては、時計のとまるぐらゐのが相當の記事になつたもので、殊に無事な夜勤のことでもあり、僕はすぐ大森博士訪問を命ぜられた。

大森博士のお宅は目白にある。締切に時間がないからといふので、人力車に乘つた。今では、どこの新聞社でも、『急がないから人力車でいゝ、』といふやうになつたが、その時分は自働車で乘廻はすことなど、夢想もしなかつたもので、大抵の『外交』は利用される限り電車、電車のないところからは人力車、または徒歩。鼻のちぎれるやうな夜風の濠端を僕は小石川へ急ぐ。

どの車もどの車も、同じ方向へ急ぐ人力車は皆僕と一緒にこの地震のことをきゝに大森博士訪問の新聞記者を乘せてゐやうな氣がする、氣が氣でない。しかも屈強げな車夫が曳いてるに拘らず、僕の人力車は一臺また一臺と追ひ拔かれてしまふ。一ツ橋邊りを通るときは、すべての人力車の影は悉く追ひ拔いて、僕の人力車だけが喘ぎ喘ぎ、一歩一歩と離れつゝゆく。足がすくむ。僕は、からだを浮かすやうにして、尻で押すやうにして、やつとそれでも目白臺の博士のお宅へ坂をのぼり切つて、その門前に立つと、はてな！右の柱は冷たく立つて、扉は鎖されたまゝ訪問客もない。叩いても叫んでも内からは應答がない。扉を打つ拳からは血が滲むかとさへ思はれる。胸さわぎしつゝ最後に叫んだのがやつと聞えて、ねぼけた聲が玄關からあつた。博士は其夜そこには居られないで、何處であつたか、もつと奥の雜司ケ谷かのお宅の方だといふ。がつかり悄氣込んでしまつた。ぢや、そこへ行つてくれと車夫にいふと、モウ御免を蒙ります、とおこつた顔だ。いくら哀願しても行かぬといふ。電話はなし、とりつく島もなく、ヤケにさへなつて、やむをえず拜むやうにして、傳通院前迄引返して、郵便局の電話をかり、社の方へ事情を報告すると、待ち草臥れたらしい編輯主任が、にべもなく、『さうですか、ではもういゝでせう、大した地震でもないから。』と、其儘電話は切れてしまつた。

僕は兩頬にながれる涙をとめどもなく拭きながら、その人力車で下谷の家へ歸つたものである。午前二時に近かつたであら

う、途々車夫は僕の車の乘り方が、まるでひどいことを云ひだして、それを教へてくれた。腰をうしろにぐつと引いて、兩足をキチンと『蹴込み』の後方へ揃へたのでは、とても梶が重くて挽けるものではない。」追ひ拔かれるのが癪にさわつてゐるけれども、まさか初めての旦那に、乘り方迄苦情はいへませんでしたからね。」

――其夜の博士訪問の失敗は、全く僕が貧乏記者のホヤ〳〵で人力車の乘り方すら知らなかつたことが唯一の原因であつたのだ。

人力車に乘る度毎に、今でもこの昔の記憶が新しく甦つて來て、いつも微笑を禁じえないのである。

訪問

『お目にかゝりますとのことでございますから、しばらくお待ちくださいまし。』

三つ指をついて、美しい小間使が廊下傳ひに應接室へ導いてくれた。

ある知名な女流の、老教育家が還暦祝賀を催すので、本人の追憶を聞いてこいとの訪問である。

壁の掲物を眺めたり、椅子を撫でたり、しやちこ張つて待ちあぐむこと小半時、ドアがしとやかに開いて、奇麗な二十五六の婦人がはいつて來た。立つたまゝにこやかに僕に會釋をしたので、僕も立つて、一禮したうへ、『このたびはおめでたう存じます、實は老先生の還暦祝賀のお催しがおありと伺ひましたから、それでお目にかゝりたくて參上いたしました、』と一生懸命に申し述べた。その婦人は慇懃に腰をかゞめてゐたが、僕が言ひ終ると、口を開いて、「あの、わたくしもそのことで參上いたしましたのです、わたくしはかういふもので、」と名刺を帶のあひだからとり出した。「××新聞のものでございます―、」

新參の記者はからだぢゆう眞赤になつた。僕には爾來『婦人記者』が大禁物である。

名刺

名刺のことでは忘れもしない。宮内省にAといふ貴族で式部職か何かの『上役』を訪問したときだ。謂ゆる『刺を通じる』と、二三十分待たせて、やつとその人が廊下へ出て來た。廊下での立ち話。例の通り、一向知りません、フムそんなことは知らないね、と要領を得させない。その人が知らない筈はないので、僕はどうにか口說いて聞き込まうとあせるが、對手は飽く迄、素知らぬ顏の無表情で空嘯く。と見ると、その指の間に僕

の名刺がぐるぐると捲かれたり、折られたり、窓の隅の埃をそのコバで拂つたり、種々様々に飜弄されてゐる。僕はぐつと癪にさはつた。

『その名刺はわたくしのです。』

僕はかう押へつけるやうにいつて、下唇を齒でかみしめながらその人の顔を穴のあく程にらみつけた。その人はびつくりして、あわてて、

『あ、これは失禮！』

名刺を延ばして、丁寧に、その表面を見た。そして今迄とは急に、變つた態度で、『實は、そのことは斯ういふ事情になつてゐる』と大略の要領を得させた。名刺を飜弄することは全く無意識なのに違ひない、それを利用して、冷靜の一喝の効果を收めたわけである。

『特種』

『特種』といふものに對する新聞記者の神經、それを手に入れた時の不安と、喜びと、滿足と、その特異な心理狀態は、ちよつと説明がしにくい。たとへば鎌子事件とか、白蓮事件とか、かういふ社會的なニュースに就ても、それに關聯した當事者達の記憶は、記者生活の一生涯を通じて、讀者とはまた全く違つた印象を殘すものだ。鎌子事件に就てのH君の詳密な苦心談などは、いくど聞いても深い興味がそゝられる。これは『長講一席』といふ種類のものである。

僕が夜勤をしたとき、『日光線の列車内ピストル強盜』といふニュースがはいつて來たことがある。それは今日になつても、その材料の出處を明かすわけにはゆかないが、電話が突然、この事件のヒントを傳へて來た時、一緒に編輯の卓を圍んでゐたものは、一齊に歡聲を揚げたものだ。

十一時頃であつたか。すぐ宇都宮の通信部に照會すると、まだ知つてゐない。上野の驛長室でも、判つてゐない。東京鐵道局の局長官舍で、當時のD局長が、鐵道創設以來の新しい大事件として、驚きながら、ある方面の報告を受けてゐたが、そこに照會したのも『我が社』だけと察せられた。しかも詳報は、まるでその列車に記者が乘り込んでゐて、そのピストル強盜に脅迫された被害者の一人でゞもあるやうに、細密に、刻々と集つて來る。これだけの刑事種が、完全な『特種』になりうることは絶無にして稀有だ。吾々は、近來の大事件であると共に、この『完全な特種』といふ意識から、愼重に、しかも胸をおどらせつつ材料を整理した。宇都宮からも、賴んでおいた被害者自身の直話が豐富に電話で送られて來た。すつかり極つた。

そして、市内版の締切時間も遅らせることなく、社會面の上部五段ばかりを大きく扱ふことができたわけだ。

お互に勞をねぎらひ功をかたりつつ、みな一風呂浴びて、宿直室にはいり、新たにお茶をいれて、しばらく賑やかに語つてから、ベツトに一眠りして、眼をあくが早いか、僕は、その朝の市内各社の新聞綴込みを受附から給仕に取り寄せさせた。持つて來たのを一枚づゝ――まづ重な新聞を披いたが、無い、どこにも無い。その時、僕は變な錯覺を感じて、ふと、その綴込みが、一日前のを給仕が間違つて持つて來たものと思つた。しぶい眼をこつすて、改めて日附をみた。たしかな完全な特種になつてゐたのである。

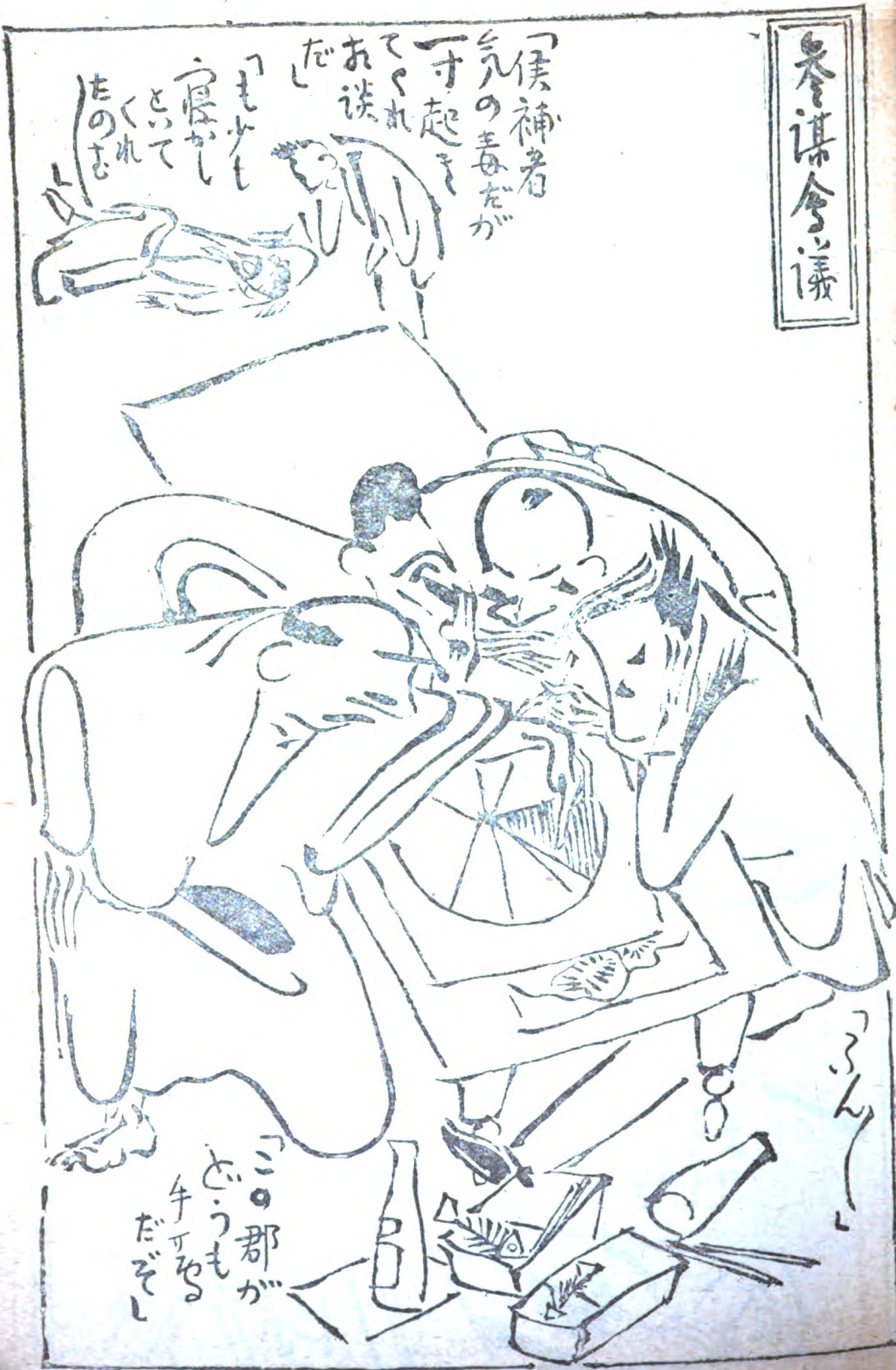
そのピストル强盜は、翌日の夕刊で逮捕された。

特種の心理は、新聞記者の一種の『變態心理』かも知れない。

鳥羽絵「總選擧」

岡本一平筆


依頼状発送
「これで三万六千九十枚と」
「数は揃つてゐるか」
「悴は選挙費に松だけ山を売つたといふ噂だが今年の秋は松だけはたべられんかのう」
「まさかそんなこともござんすまい」
「日曜も遊べずあゝ手が痛くなつたし」

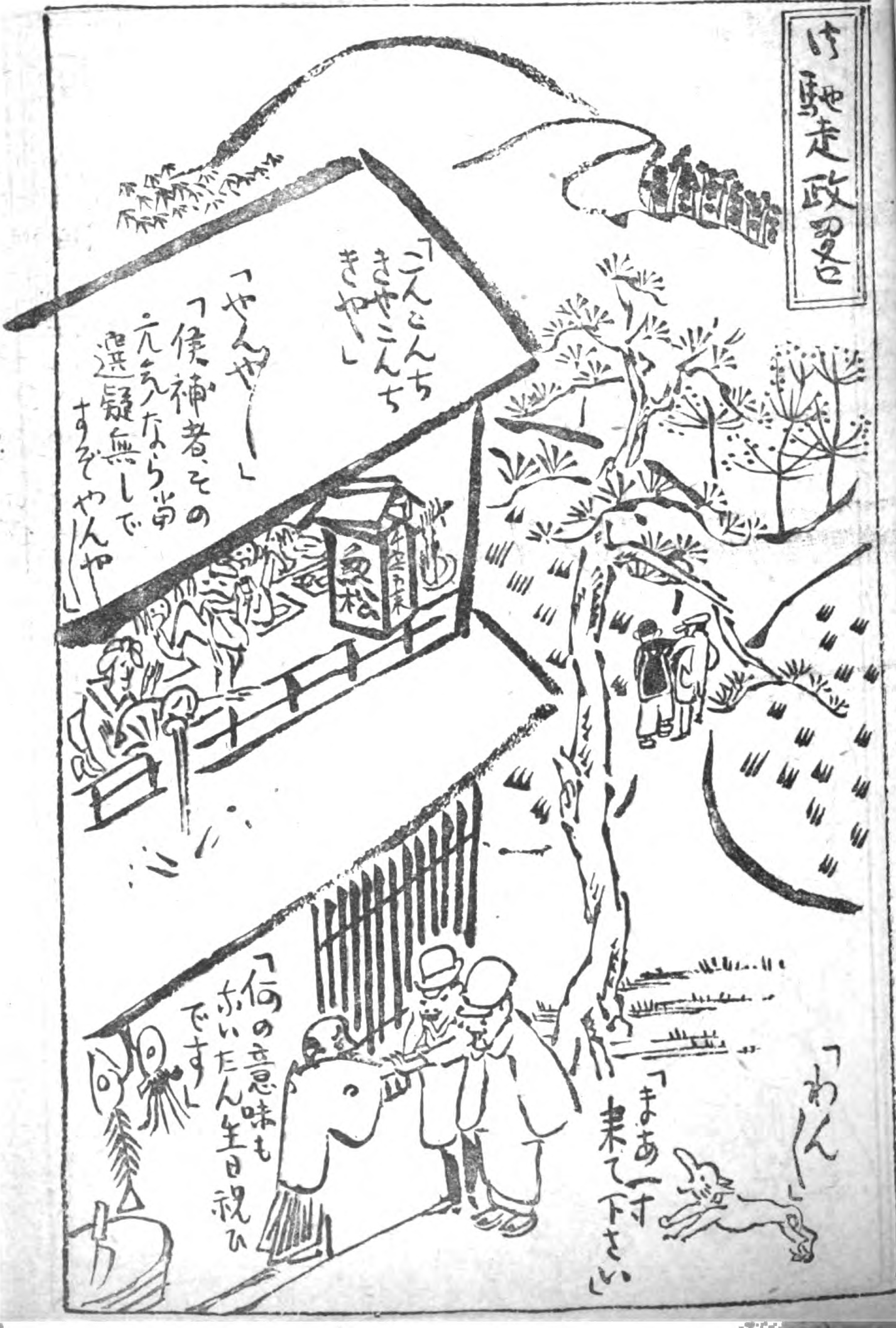

参謀会議
「候補者気の毒だが一寸起きてくれお談だし」
「もし寝かしといてくれたのむ」
「ふん」
「この郡がどうも手するだぞし」


演說會披露
〽今日も活動ぢやない
選挙の演説會入
番合だ
どゝんこどゝしし
〽おやぢさん活動の割引券呉れ」


政見發表演說會
「我輩はつんぼぢや少くとも不法壓迫の声にはつんぼぢやよ」
「弁士中止の声がきこゑぬのか」
「弁士もちといひ過ぎましもたな」
「弁士やれ〱」
「うまいことをいふ」



輸入候補
「以前当県の理事官をなすてらした方でのし」
「何分よろしく、あはん」
「赤ン犬きうなりやつたの」
「ム丶姿の候補者は君へでしのし」


ご馳走政畧
「こんこんちきやこんちきや」
「やんやー」
「候補者その元気なら当選疑無しですぞやんや」
魚松
「何の意味もふいたん生日祝ひです」
「まあ一寸来て下さい」
「わん〳〵」


盛岡にて
達テ總裁
「原先代の髷でも冠って一番」



注進
「油断りならぬ大胆不敵な奴だ」
御たび
大松屋
選挙事務所
「相手方の候補者と運動員が三々五々、そこまで戸別訪問に来よりましたがわしの姿を見ると急いで横町へ逃げこみました」


政府の決意
首相「こうかのし
内相「期日もせまつて来たもつと引締めた顔をなさいじ


候補者色わけ
護憲派
政友本黨側


革新倶楽部の景
候補者「先生何とかして下さい」
木堂「財布はこの通りぢやだが舌はまだある、この方で何とかしよう」


最後の叩頭
「こいつの看板が一番大きい」
「看板に比例して当選率のうち少ない候補者だ」
君 選挙人休憩所
君 選挙人休憩所
君 選挙人休憩所
「候補者の妻君だぜ」
「べつぴんだ」
「ハイー」
「お帰りにはお休みなすって」
「お茶めしあがれ」

文藝の職業化に就て

（三月號の續稿）

里見弴

翻つて、職業化された文藝から生じて來るところの弊害に就いては、更に十分な注目を拂はなければならない。この點にこそ、吾々の、以て自ら誡むべきものが多々あるわけだから。

予の立場を以てするならば、徒に迂曲してその結果を論ずるよりも、靜に作家的良心に内省して、既に蝕まれ、或は蝕まれんとしつゝあるところを剔抉するのが、無論捷徑である。悪い動因から、よい結果が生ずる筈はないのだから、創作心理について述べることは、軈てそこに作りだされたものに對する批評にもなるわけだらう。

まづ第一には、古今東西、人生のあらん限りを蝕んでゐるところの、金錢の誘惑が、「わりの合ふ」と云ふ狀態に絡んで、遠慮なくこゝへも押しよせて來たことを擧げなければなるまい。一口に云へば、金を得たいために、つい發表したくもない仕事を、編輯者の手に渡して了ふことだ。文藝などに與つたところで、どつちみち「わりに合はない」にきまつてゐた古時代には、さほどでもなかつたところの誘惑が、謂ふところの「文運隆盛」に乘じて、遂にその毒爪を逞しうしだしたのだ。人間誰しも、少しでも豊な生活をしたがるのは當然だ。職業化と云ふことが、すかさずその弱點に働きかけて來る。重々同情すべきであるが、然し、そこで「藝術家魂」を僞つて了へば、前にも述べた如く、商魂商才、た

ど一介の商人に墮して了ふばかりだ。予の如き、顧て甚た忸怩だるものがあると同時に、心弱くも、時には、文運の隆盛、文藝の職業化を、衷心から呪はしく思ふことさへある。云ふまでもなく、それは、恥ずべき責任轉嫁ではあるが。

よしんば、金の前に「藝術家魂」を賣り捨てないまでも、人は、衣食の資を得る瀬に對して、有難味とでも云ふやう、馴れ親んだ氣持はもつても、それ以上、尊崇の念となると、とかく失ひがちなものだ。衣食の大切なことは、因より云ふまでもないのだが、東洋流の感情としては、どうしてもそれに對する一種の侮蔑をもち、延いては、依つて以てこれに資するところの仕事までも、卑め輕んずる風がある。今後は、そんな氣持もだん／＼解らなくなつて行くだらうけれど、予の內省には、多少ともその弊が認められるから、一言觸れて置いた次第だ。

次には、資本家によつて强ゐられることだ。これが謂ふところの道樂ならば、「可厭だ、氣が向かないから御免かふむる」の一言でも斷れるし、また場合によつては、自分勝手な發表の機關をもつことも出來るだらうが、全く職業化された今日の狀態では、「文筆勞働」と云ふ、甚だしく不愉快な言葉も、蓋し一面の實相を物語るもので、出版書肆、雜誌經營者などの資本家たちから、表面いかに「先生々々」と祭りあげられてゐても、その實は、昔のお店と出入の職人との關係が、亡靈のやうに背後につきまとつてゐるのだ。だから、「可厭だ、今度は氣が向かないから御免かふむる」でも、立派に通りさうで通らないやうなところがある。そんな氣兼をするのが、抑々自信のない證據だと云つて了へばそれまでだが、群居動物である人間の世界のことは、全然妥協なしには、につちもさつちもいかない道理だ。一人前の小說家だ、と云ふことは、一面、とりも直さず職業の弱味を表白してゐるのだから、看板の手前、いや／＼ながらも筆を執らなければならない場合も生じて來る。職業の强味、――公人としての意識には、遁れる道なく、こんな弱味が裏づけられなければならない、それが人世の約束なのだ。佐藤春夫君が、こんなことを云つてゐたことがある。

「僕なんぞは、洋服でも造るよりほかに、これぞと云つて道樂はなし、食ふだけのことならどうにかやつて行けるのだから、雜誌社の人が、眞に藝術家を遇するの道を以て僕のところに原稿を賴みに來るんなら、ほんとにたゞでも書いてやるんだけれど、どうせ商賣人なんぞにそんな氣持の解るやつは一人だつてゐるわけはなし、仕方がないから、まあ金ででも、彼等の謝意を代辯させて、それで我慢して置くんですな。藝術家を遇するの道を誤つてさへゐなければ、僕はほんとにたゞで書いてやりますよ」

笑ひながらではあつたが、さう云ふ君の心持の底にある眞つ直なところは、予にも悉く同感された。それは、天國を望みながらも、それを信じきれない吾々の心境の、一つの現れと云つてもいゝのだ。佐藤君が、假令百萬長者にならうとも、小說家なり詩人なりの看板をはづして了はない限り、一生たゞで書く機會が、君の前に來ないだらうことを思つて、予の心は暗然とした。

また、これは傳聞だけれど、菊地寬君が、

「今に力のはいつた作は、みんな婦人雜誌にばかり出て、男の雜誌には、ほんの申譯みたいな作しか載らなくなるだらう。誰だつて、少しでも原稿料の多い方へ、一生懸命で書く氣になるのは當然ぢアないか」

と人に語つたことがあるさうだ。これにも、悉く同感したばかりでなく、既に予が、實際そのやうにしてゐたことにさへ心づいたのだ。佐藤君の言葉とは、およそ正反對なことを云つてゐるやうに見えるけれども、共にこれは、職業化された現在の文藝家の心を、正直に云ひ放つた兩極である。極とは云へないまでも、少くも同じ心から出た別々な云ひ現しである。菊地君のは、例によつて直截だし、佐藤君のは、例によつて空想的だ、と云ふやうな、各自のテンペラメントの相違があるだけの話だ。己の仕事が職業化されて來た內心の矛盾と不滿とは、どちらの言葉の裏にも、等しく流

れてゐるのである。

細々と擧げるならば、この他にも、文藝の職業化から生じる弊は澤山あるが、多くは、いかなる仕事でも、職業となれば止むを得ないところの、解り切つた話だからこれくらいにして置かう。

たゞ、前後に、それこそ子供でも承知してゐるほどの解り切つた言葉を添へるなら、何事にも、利害得失の兩面は必ずあるものだ、と云ふこと、人の世の事實として、それは、止むを得ないこと、そして、賢く強く、よい方面を利用し、極力その害毒からは遁れるやうに努力するのが、何よりも肝心な心掛だと云ふこと、——この駄足を加へて、自誡の一文を結ばう。

知ることは決して難くはない。が、いざ行ふとなると、どんなに易く思はれることでも、中々容易ではない。文藝が職業化されて來た。たゞそれだけの、ほんの些細な事實から、吾々は、思ひもかけないほどの害毒をうけないものでもない。いや、それはもう歴々として指し示すことさへ出來るのだ。こんなことは、自分自身の仕事が、まだ僅に職業化されてもゐない人たちが、やきもち半分に、眞赤になつて怒鳴り立てゝゐると、甚だみつともないものだから、吾々は、吾々だけの手で、出來るだけよく、出來るだけ早く、よい方面の利用と、わるい方面の遮斷とに、一生懸命に心掛を保ち進まなければなるまい。

レエニイスムとウィルソニスム

アンリイ・バルビュス

輿論は互に數日を隔てゝ世に生じたる二大事件を告知せられた。レエニンの死と大統領ウイルソンの死とである。兩者いづれも國家全能の首領であり、世界の最も廣大な、また、最も重大な二國を眞に支配してゐた。その二人の同時の死去といふこの暗合を檢證することは不思議なことである。

併し、我々がこの兩者の合致したる死に對して考慮するとしても、それは偉大なる人間性の虛無について反省をなさんがためではなく、寧ろこの二つの名前の對照が我々に、一の並行的な感動を引起し、我々をして、深くも、また、廣く

も相扞格する二つの思想を餘義なく對比せしむるが故である。

世界の有ゆる國々の大方の大新聞は、現實的强要に驅られて、この合衆共和國の前大統領とこのロシヤ人民委員の主領との比較を勢ひせずにはゐられなくなつて、第一に指摘したのは、その極端に目立つた對照である。即ち、世を去つたこの二人の大人物は、それ〲の國に於て、公衆の意志標示の全く異つた對象とせられた。レエニンの葬儀は人間の柩の周圍に展開せられた最も驚くべき崇拜の一つを構成した。無限の行列は、幾日にも亘つて彼の遺骸の前に、いかにも大きな感動と、いかにも宗敎的なまたいかにも心を刺すやうな弔意とを示してつゞかれた。それを目擊した總ての人は一種の信仰的な興奮をもつてそのことを語つてゐる。

大統領ウイルソンは一般の注意をひかずして、自國の生活の中にほんの僅かの場處しかしらない官僚的なわざとらしい弔意を受けて消失した。「彼は既に忘れられてしまつた」といふのが、ウイルソンの死によつて生じた公平な解釋に於て人の見出す立證である。

なるほどこの二人を決定的に判斷すべき時機が來たのではないにしても、この二人物のそれ〲の大きな特質を瞥見し、計上して見るべき時機が到つたのである。そしてその事がおそらく我々をして、如何にして彼等の喪失が東歐羅巴と北亞米利加とに於て、殆ど比較にならないやうな輿論の動きを引き起したかを了解せしむるであらう。

第一に、次の事が聲明せられなければならない。そしてその評價の持つ確實性は將來とても決して減殺せらるゝといふ掛念はない。それは、レエニンとウイルソンのいづれも、兩者全く相反した規準と原則とを代表してゐるといふことである。そして、この規準と原則とは今後、公開的な決定的な鬪爭狀態にある世界に存在すると言ひ得るのである。

大統領ウィルソンは教養の深い人、賢明な立派なプロテスタンテイスムの色彩を帯んだ、爭ふべからざる眞摯誠實の性格の人で、デモクラテイツクの理念と呼ばるべきものを華かに代表してゐる。彼が象徴し、また、彼がその卓越した眞實性によつて光榮を添えてゐるともいふべきは、自由主義、國法國際法、平和主義、そして、約百五十年以來新舊兩大陸の總ての大國民の憲章となつてゐる共和的進化、それ等を記載した魅惑的なプログラムである。

ウイルソンの十四箇條の提議は、合衆國獨立の宣言によつて、また、それに少し遅れて「人權の宣言」によつて世に示されたる理想の發展を、都合よき感動的な言辭で包括したものである。その中では、民衆の權利は民衆自身に委せらるべきが說かれ、特殊利益は一般利益に從屬せらるべく、法に對しては萬人平等たるべきが言はれてゐる。更に、その提議は、一層廿世紀的な條項、即ち各國民間のソリダリテに關する一項を含んでゐる。これ等の立派な概念は、レエニンがそれ等の名に於て物を言ひ、活動したその概念にまさしく近いものである。それと異つたものだとすることは不可能である。政治上社會上の共和有ゆる異つた配合も、多少はとはずその根本原理に相通じてゐることは必然のことである。その根本原理相互には、殆ど相異はあり得ない。社會的領域に於てシステエムの異るといふことはその基本原理によつてゞはない。

されば、ウイルソンに於てはレエニンに於けるが如く、根本的には、共有法に關して、人間の平等と、個人の集合體への從屬とが大事な問題となる。この二人ともに、神權說、特權說、個人專斷說、一言でいへば總體の調和と生存の必然との上に掲げられた古代の共和原理の論議に反對する從來の原則から出發してゐる。

レエニイスムとウイルソニスムとは、帝國主義と專制的壓迫とに共々反向してゐるといふ意味に於ては相似てゐる。併し、この類似はたま〳〵非常なる相異を我々に見するにすぎない。その相異は前提と概論とを離るゝやいなや的確

に目立つて來るのである。

實際この二人の主張の間には一つの深い溝渠がある。我々が前に言及した如く、この二つの主張は全く相反してゐて、社會戰の廣大な戰場に於ける思想と人間との現在未來の闘爭の主題そのものである。

たとへレエニンとウイルソンとの思想を表示する辭句が理智的には或程度の關係をもつてゐるとしても、この二人物の心的狀態は、二人の同時代の人に於て有り得た如く、全く相反對してゐた。彼等二人の行動の仕方及びその理解の方法でさへも全く兩極に立つてゐる。

その主要なる相異點は次のやうである。卽ちウイルソンの理想は、有ゆる立派なデモクラテックなブルジョワの理想と同じく抽象觀念から成立つてゐる。レエニンの思想はこれに反し、人生に、具體的な現實に、身をもつて立ち入るといふ見地に、密接に準據してゐる。

夢と行爲とが相爭ふといふ人間の古い神話は、今日二者相反したる、デモクラテックな思想と革命的な思想とが相持してゐるこの大きな戰鬪に於て、最も明瞭に最も恐るべき方法でつゞけられてゐるといふべきである。ブルジョワ流のデモクラシイの信條宣言は、大方は學者また屢々雄辨家たる人々が自分等の夢想にもとづいて築く建立である。けれどその宣言は實際現實とは何の關係もない。それは夢であり、迷影であり、言辭の彩であり、事物の行進には少しも適合せず、事物に對して些の影響もなし得ない華かな解決である。これは歌者或は辯者の理想であつて、全く變化して、殆どそれとは反對たものにならなければ人間及び事件のなかへ透入することは出來ない

未來に關しての、諸原則たとへば、政治上の平等、または、各國民間のソリダリテの如き原則の共有性を解放せしむ

る人々は、一方に於て、いかにも因襲的な事物の狀態に面接し、その事物は、彼等がそれと適應するものたらんがためには、根本的の變革を强請する。檢證するといふことは變革を問題にするだけであるが故に何ものでもない。行動の積極的方法を思料すると同時に、人々が案出した論理的計畫を活氣づける手段を見出さなければならぬ。さうでなければ、どんな立派な、どんな公正な、どんな純な教義問答でも、公共の不幸に惱む人々にとつては一つの欺瞞にすぎない。

レエニンの聲を聞いた人々は考へる。何よりも大切な務めは理論的眞實を實用的眞實から引離さないことであると。それ等の人々はそれ以後は、お喋りをしながら實は何も言つては居らず、惡いことをばたゞよりよき夢ととりかへるやうなことを喋るのが惡行爲中の最惡なものとして退けるやうになる。彼等には遊戯をすることが出來ない、打算も、假說も、戰爭や、平和や、人權や、勞働權やの思想とともに社會的性質を持つた神仙譚なぞはやることは出來ない。何となればそこにこそ實は、現實によらずしては擊破し解決し得ざる生身の現實があるからである。

されば、レエニンのこの聲こそは生産の實際上の進步及び集合が課する經濟狀態の中に於ける大衆の生存上の必然性を解放した。この聲は、思想と同時に行動を說き、そしてそれは行動が思想によつて豫備にせられた時機に於てゞあつた。

レエニンは一つの新らしい世界黨を造りだした。それは、彼がそれをつくらうと決心した時機には、勞働群集の殉難的な混沌の眞只中で、この黨派が發生し得べきであつたからである。執拗にも、また人が屢々正當と見なすを躊躇した一種の頑强さをもつて、彼はこの黨をば主義の絕對的な一徹さで支持することが出來た。かくて彼は、腐敗したる從つて壞滅すべき要素を包む有ゆるものを根絕した。

かくして彼は第三インタナショナルを造りだした。これは世界の中へ、平均のとれた公正な、一つの廣大な論理界の

骨組の如きものを建立する。彼は彼一人でロシヤ革命をなした。そして彼一人で屢々驚くべき熟練さをもつて、種々な事情に適合せしめてその革命を救ひ出し、かつてそれをしてその本質を離れて貧弱なものたらしめなかつた。彼は屢々全體が生存し、その根本的の意義をもつて發展せんがためには犧牲とならねばならぬものを目擊した。彼のレンオルミストに對する粗暴な態度は一つの深い嘆稱すべき聰明を示してゐる。即ち彼は社會改革者の計畫に對して暴行がいかなる危險を供すべきかを了解した。暴行はそれが初まるやいなや、いかに外面僞善的の容をとつてゐても、最後には官權力と合同することになり、到るところ現狀維持に墮してしまふものである。彼の敵對者等の意識無意識の有ゆる喧騷を超絕して、混亂を引き起し生氣を斷たんとする有ゆる連合と外交とを打越えて、彼は「より好き社會」といふ漂泊的な根のない儚き夢をば、人間力の最も至的なもの、即ち「ル・プロレタリア」へ連結せしめた。

かくの如きが即ち彼の欲したことである。彼はそれを一點の曇りもなく、眞正直に、根本まで欲したのだ。マクシイム・ゴルキイは、勞働者等がレエニイについてこれこそは「有ゆる人間の中で最も正直な人だ」といつたと書いてゐた。この立派な嘆辭は、彼が遺した現實の仕事と共に、彼の天才的辨別力、彼の建設的素質のみならず、彼の確實なる徳性に關する偉大さを示すものである。

ウイルソンの事業は、それを包容した言辭と共に全然消滅してしまつた。この技巧的な觀念、この似而非デモクラシイは何の役にもたゝなかつたであらう。たゞし眞のデモクラシイの敵對者に好都合な混亂を引き起さしめ、やがてはブルジョワ式の反動を强めるに役立つたことだけは別だ。國際聯盟は事件の領域へウイルソニスムを輝し出した。そしてその國際聯盟はインタナショナル同盟の華美なそして卑雜なカリカチユルに過ぎないではないか。何人が眞面目にこれ

を敢て立證するであらう。國際聯盟はその芝居がゝりな見せ掛けで、古代からの誤謬、總てのものに對して或者の永久の略奪、勞人等の群に臨む財政と生産との王者等の再現に假裝さするのに役立つた。

大統領ウイルソンは、彼が一つの思想を表示したとき、一つの美しい思想の有ゆる外貌を備えてゐる思想について人人がなす歎きがちな破廉恥な用法を十分心得てゐなかつたといふことは有り得べきまた眞實らしきことではある。併し人はウイルソンが社會創造の原素たるべき一つの明瞭なことを十分了解してゐなかつたといふ點で嚴しく彼を責める權利はある。即ち、若し人が事物を根底まで探究して、根本的の方法でそれを變化せしめなければ、人はたゞに仕事を空たるものにするばかりでなく、その仕事を禍とし、更に己が對抗しようと擬した敵手に武器を供給することになるといふことである。

これ等の多少の考察は一つの無限の問題の顯著なる或る部面を包むに過ぎないが、我々をして、一方に、ロシヤの民衆が、なるほど今なほ不幸と苦痛と艱難との充ちた途上にあるとはいへ、自分等を自由民たらしめようとする人に對しての感謝と、他方に、人間の廣大な利用に成功せんがためにウイルソンを持囃はした人々が彼等の公有的な機能の一つに面接して示した冷淡な無頓着とを了解せしむるであらう。

百萬燈

オノトは

ビズネス街を照す

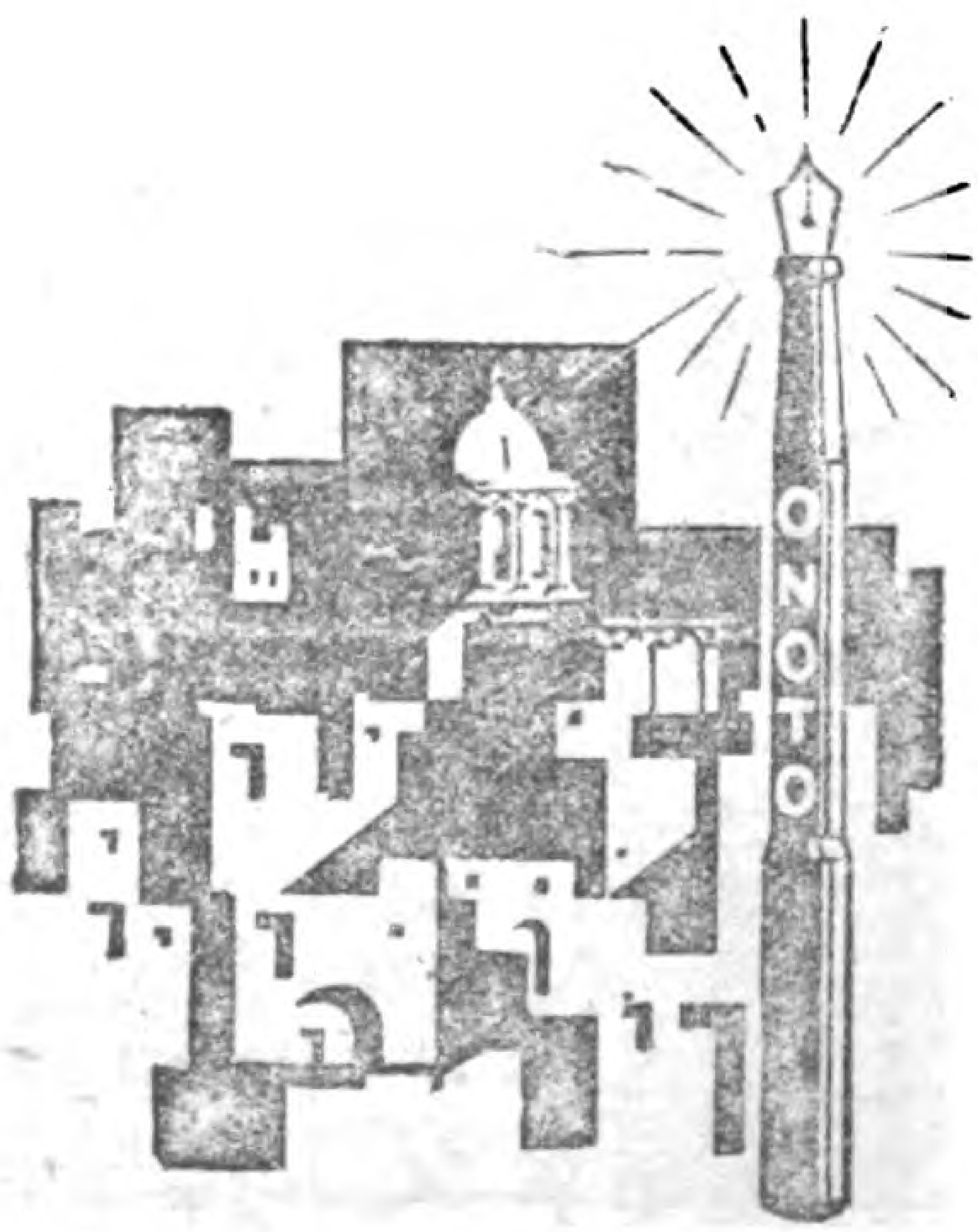
百萬燈!!

新式ストリーム・ライン型

オノト萬年筆　金八圓

萬年筆用アテナインキ三十五錢

送料各金十八錢



東京日本橋通

大阪　神戸　京都　名古屋

丸善株式會社

横濱　福岡　仙臺　札幌

東京――神田・三田・丸ビル・九段

豫約募集

吉澤博士曰く

王朝文學の尊いところは九百年前に源氏物語を生んだといふ過去の事實のみではない。永久に、日本民族が行く可き文學上の進路に暗示の影を投げかけてゐるところにある。然るに言語の變遷は現代人を阻礙して祖先が貯へた寶庫を窺ふことを容さなくなつた。—この秘庫を開いてあるがまゝなる王朝文學の神髓を自由に味ふことの出來るやうに—吾々が王朝文學譯出に志した動機はこゝにある。

全譯王朝文學叢書

締切 五月廿日

執筆者

京都帝大教授 文學博士 吉澤義則
京都第一女教諭 文學士 加藤順三
奈良女高師教授 文學士 春日政治
龍谷大學教授 文學士 吉川理吉
大谷大學教授 文學士 能勢朝次
龍谷大學教授 文學士 有川武彦
富山高校教授 文學士 木枝増一
大阪高校教授 文學士 宮田和一郎
第三高校教授 文學士 島田退藏
大谷大學教授 文學士 鈴鹿三七

裝幀及挿畫筆者

菊池契月　中村大三郎

—第一輯—

一、竹取、伊勢、大和、堤中納言物語
二、蜻蛉、土佐、和泉式部日記
三、落窪物語
四、源氏物語1
五、源氏物語2
六、源氏物語3
七、源氏物語4
八、源氏物語5（宇治十帖の上）
九、源氏物語6（宇治十帖の下）
十、狹衣物語（上）
十一、狹衣物語（下）
十二、とりかへばや物語

平安朝文學の現代語全譯の完成

本叢書の體裁

▼本書の形は別漉紙にして四六版と菊版との中間をとり各卷四百五十頁
▼表紙圖案は淡桃色に金にて模樣を散らせる優雅なもの
▼卷頭に兩畫伯の分擔執筆になる木版數度刷の美術作品

募集豫約略規

▼會費全額金參拾六圓 内申込金參圓（申込と同時に）毎月拂金參圓
▼一時拂金參拾四圓（申込金不要）
▼送料は共に申受く
▼刊行は大正十三年六月より同十四年五月に到り完結

見本進呈

豫約申込所　京都市下長者町油小路西入 株式會社文獻書院内 振替口座大阪六九七九六番

王朝文學叢書刊行會

文學博士 醫學博士 森林太郎全著作集

鷗外全集

菊判 大本 全十八巻 一萬六千頁

第二版 豫約募集

▲弘法型新井白石型ノ格 ギヨォテ型カント型偉人—
▲三千年を通じて我日本が生みし巨人—哲人にして文
▲豪—改革者にして大成者—科學者にして詩人—翻譯
▲に研究に創作に考證に—俊逸の大才と絶倫の精力を
▲以て曠古の業績を擧ぐ—語は獨佛英西伊諾に—學
▲は和漢洋に—一代の豫言者先覺者—思想富贍—識見
▲卓拔—情熱旺盛—筆致新警—宏才明智の近代主義者
▲—博熱大雅の古典學者—

先生の博大なる思想と高華なる藝術とは、我民族文化生活の激勵たり、指導たり、由つて茲にこの大全集第二版の刊行を敢てし天下の清鑑を竢つ。

1 藝術論篇
2 藝術論篇
3 創作小説篇
4 創作小説篇
5 抒情詩、雜文篇
6 史傳篇
7 史傳篇
8 史傳篇
9 史傳篇
10 翻譯戯曲篇
11 翻譯戯曲篇
12 翻譯戯曲篇
13 翻譯戯曲篇
14 翻譯戯曲篇
5 翻譯小説篇
16 翻譯小説篇
17 衞生、軍事篇
18 醫學篇、人文篇

▲内容見本進呈

▲豫約申込 四月卅日限

略規

非賣品豫約者に頒つ
申込金 五圓（最終回費に充つ）
五十錢
毎月拂込 毎月拂金五圓半錢
一時拂込 金九十四圓
配本 大正十三年六月より毎月一冊宛十八ケ月完了

體裝

菊判、最上洋布表紙、天金、頗美本
毎卷著者の肖像、筆蹟其他挿入、紙數平均八百五十頁

申込所

東京日本橋通四丁目
春陽堂 振替東京一六一七番

麹町區内幸町一丁目
國民圖書株式會社 振替東京五二二九八番

東京市牛込區矢來町
電話牛込自八〇〇六番至八〇〇九番
新潮社 振替東京一七四二番

東京市麹町區内幸町一丁目
鷗外全集刊行會
振替東京六二四八五番

野口源三郎著

オリンピアの旅

定價貳圓九拾錢

送料十九錢

四六判上製

新刊發賣

あらゆる事が競爭そのものとも云ふべき現代社會に於て、苟くも優勝者たらむとするものが其の心膽を練るに、近代的競技ほど好適のものはない、國際競技が年と共に盛になり、文明國民の凡てが各優秀な選手を之に送る事に熱中するも無理はない。實に現代の競技は單なる體育ではない、新しい紳士道――現代的武士道は之に依つて修業され、オリンピアは此の紳士道を發揮する場所である。

著者野口氏はオリンピック大會の出場選手であつて、日本出發より英米を經て歸還する迄の彼の旅行記が本書である。流麗達意の文、能く、接觸する風景、人物を活寫してある。新時代の青年紳士に此の一書をお薦めする。

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二

倉田百三著

超克

第四十版

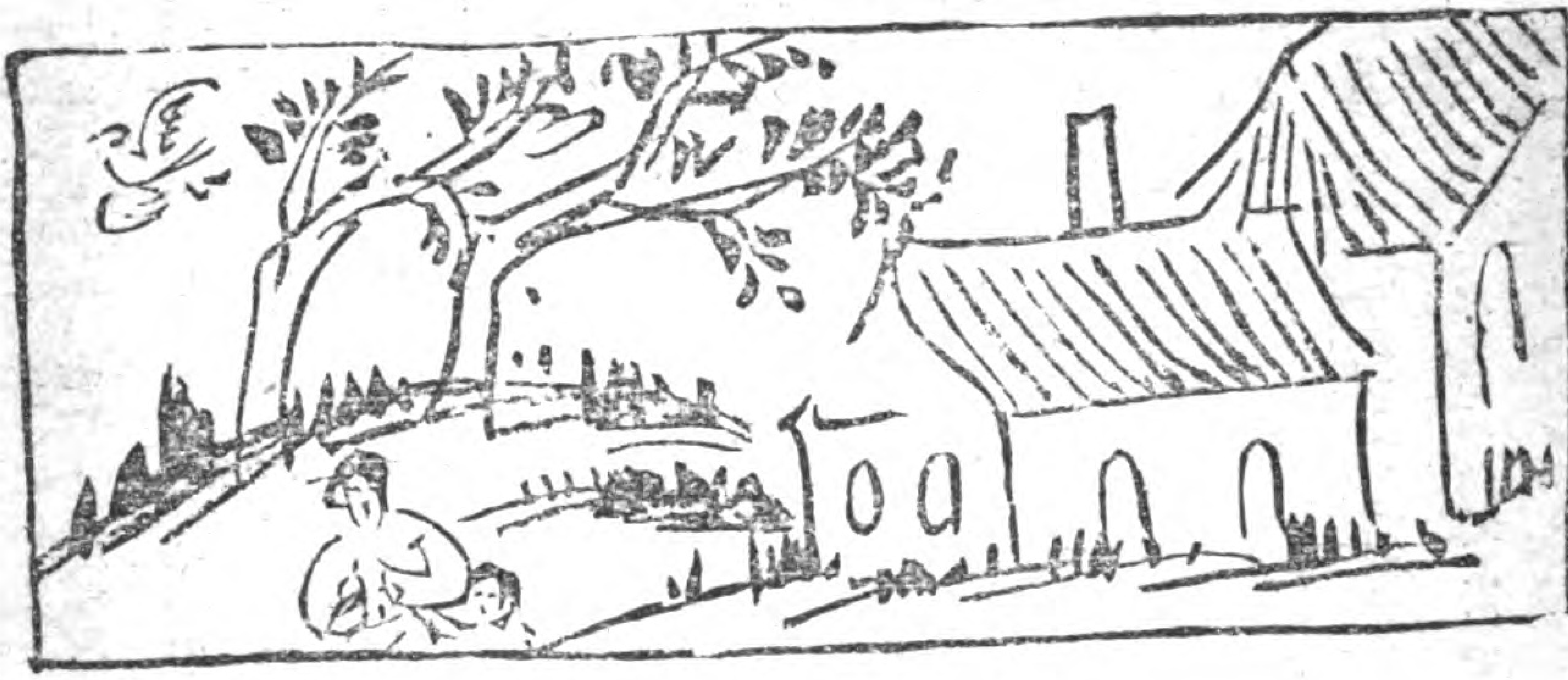
此の書は、ソクラテス的勇氣、卽ち合理的實行意志を以て、自分の內なる「賤民」を征服せんとする思索的努力を跡づけたものである。「轉身」の序文に約束した、自己超克の成績を幾分擧げ得たかと思ふ。自分は、惡の魅力から脫し切る爲に、善と福との嚴密なる一致の觀念に到達した。又善を盡く、且つ其の度に從つて生かさんと努力して、基督教主義と、希臘主義との調和の手がかりがついたやうな氣がする女性美に就いても其の美を盡く、且つ其の度に從つて生かさん事を努めた。此の書は、自分の此れ迄の論文集の中浮いた點の最も尠いものとして、自分を顧みて下さる人々に、讀んでいたゞくのに氣持がいい。(著者)

定價貳圓貳拾錢

送料十九錢

四六判上製

東京芝區愛宕下町　改造社　振替東京八四〇二



人間繁榮

豐島與志雄

津田洋造は、長男が生れた時、その命名に可なり苦しんで、いろいろ考へ惱んだ末、一郎と最も簡單に名づけてしまつた。長女が生れた時も、やはり同樣にして、丁度春だつたので、春子と最も簡單に名づけた。そして、それが結局好都合となつた。彼は男の子が出來る毎に、二郎、三郎、四郎……と順々に名づけていつた。九郎までできたら、此度は自分の名前を一字冠して、洋一郎、洋二郎……としてゆくつもりだつた。女の子に對しては、生れた時の季節や花の名などをつけることにした。そして今、四十歲にして彼は、男の子が一郎から八郎まで八人、女の子が春子冬子梅子秋子桃子の五人、合計十三人の父親だつた。

十三人といふからには、勿論母親は一人ではなかつた。皆合して五人ゐた。

男一人に女五人、そして子供十三人、これなら充分一家繁榮で、目出度くなくもない……と津田洋造は考へた。そして自分が四十歲になつたのを機會に、皆一堂に會してみたらと思つて、妻の八重子に云つてみた。

「俺はもう四十になつたのだから、一生の盛りを越して、これから次第に衰へるかも知れないし、それよりも先づ第一に、酒の量が多いから、腦溢血だの腦貧血だの、そんな風な病氣で、いつころりといつてしまうかも分らない。だから。今のうちに、四十になつたのを機會に、一度皆一諸に……お前が知つてる通り、丁度十三人子供があつて、互に會つたこともないのがあるから、一緒に集つてみたらと思ふんだがね、どうだらう。一つ賑かに、園遊會みたいなことをやつてもいゝし、何處かへ出かけていつてもいゝし、兎に角皆の顔合せだけを、何とかしてしてみたいと思ふんだがね……。」

八重子は長火鉢の前に、人形のやうに坐つてゐたが、眉根をぴくりとさした。

「そして、母親達も一諸でございますか。」

「さうさね、乳飲兒や小さいのがあるから、子供ばかりといふわけにもゆくまい。」

「それでは、私だけ欠席さして頂きます。家の子はもう私が參らないでも大丈夫ですから。」

「それは困るよ。欠席とか出席とかそんな問題ぢやないんだ。お前が俺の妻として、會の中心になつてくれなくちやあ……。」

「私は嫌ですわ。大勢の前に恥をさらしたくありません。」

「だつて、そんなことは、初めからお前も承知してることだし、子供もみなお前の子になつてるぢやないか。俺が他の女に子を生せやうとも、お前を妻として立派に立てゝさへゆけば、それでいゝといふやうな約束ぢやなかつたのかね。」

「えゝ、私はそれを兎や角云ふのではありません。あなたが他に幾人女をお持ちなさらうと、幾人子供をお拵へなさらうと、それは初めから承知の上のことですから、私何とも思つてやしませんし、あなたの本當の妻として、他の女達に

指一本指させはしませんけれど、それでも……恥は恥です。」

「恥だつて……。ではお前は、初めから不承知だつたんだね」

「いゝえ、そんなことを云つてるのぢやありません。あなたは、私が毎日何をしてるか、ちつとも御存じないんでせう。」

「お前が毎日何をしてるかつて……。一體何のことなんだい。はつきり云つてごらんよ。」

八重子は顔を伏せて、默り込んでしまつた。

「おい、どうしたんだい。お前が思つてることを、すつかり云つてごらん。俺はいつもこの通りに、何一つ隱し立てをしたことはないぢやないか。」

八重子はひよいと顔を擧げた。眼がぎらぎら光つてゐた。

「私だつて、あなたに隱し立てをしたことはありません。」

「でも今現に、俺が聞いてもはつきり云はないぢやないか。」

「そんなことを、誰だつてすぐに云へるものですか。あなたにはちつとも察しがないんです。こんど……子供でも出來たら、すつかり云つてあげます。あんまり人を踏みつけになすつていらつしやるから……。」

「え、とんでもないことを云つちやいかんよ。俺がお前を踏みつけにしてるなんて、馬鹿な。だからすつかり云つてごらんと云ふのに。俺に悪いことがあれば何でも改める。え、何のことなんだい、お前が云つてるのは。子供が出來たら云ふなんて、そんな待遠いことをしないで、今すぐに云つたらいゝぢやないか。」

「だからあなたには何にも分らないんです。」

ぷつりと云ひ切つて、彼女は眉根をぴくぴくさした。それは氣持の險惡な證據だつた。この上云ひ爭へばヒステリーを起すかも知れない、と洋造は思つて、もうその問題には觸れないことにした。

「では、皆の顔合せの會合は、お前の氣持がよくなるまで延しといてもいゝ。」と彼は云つた。

それでも、折角思ひ立つたことを中途で止すのは、如何にも殘念だつた。四十になつてこれから老衰期にはいるとか、いつ病氣で頓死しないとも限らないとか、そんなことは妻に對する單なる言葉の調子で、實際の感じとは縁遠いものであつたけれど、十三人の子供を一堂に會合させるといふことが、この上もなく痛快に思へるのだつた。

その痛快だといふ氣持は、二十五六年前まで溯る。

その頃、大學四年の間、津田洋造は一人の戀人を守り續けて、品行方正な學生として通した。然るに、卒業してすぐに結婚しようといふ希望が、眼の前に迫つてきた間際になつて、その戀人――道子から裏切られてしまつた。それも、道子の家庭の事情や道子の境遇などからして、止むを得ない成行ではあつたらうけれど、彼は一圖に失戀の悲痛に馳られて、自殺の決心をした。

彼の家に、無銘ではあるが長義の作だと傳へられてる、白鞘の短刀があつた。彼はそれを持出して、嘗て道子と二人で甘い一日を過したことのある、江ノ島へ出かけた。勿論その時、どういふ方法で何處で死ぬかを、はつきりきめていたわけではなく、たゞ漠然と、萬一の用意に短刀を携へて、失つた戀の遺跡を最後に訪れたのだつた。そして、道子と共に會食した旅館へ、ぼんやりはいり込んだ。

わりに暖い初冬の日だつたが、客は極めて少なかつた。かすかに聞ゆる波の音と共に、夜はしみじみと更けていつた。

彼は八疊の座敷に一人ぼつねんとしてゐたが、ふと物に怯えたやうにぎくりとしながら、短刀の鞘を拂つて、一點の曇

りもない皎々たる刀の、刃先から鍔元までを、ぢつと電燈の光にかざして見た。心の底まで冷く冴え渡つて、刀の方へちりちりと迫つてゆく。そして胸の何處か遠い奥の方で、宛も夢の中のように、道子、道子……と戀人の名が繰返される……。

廊下に女中の足音がしたので、彼ははつと我に返つて、短刀をしまつた。それから何の氣もなく外へ出てみた。短刀の刀を見てるのと同じ氣持の、冷く冴え返つた月夜だつた。彼は賑かな神社と反對の方へ、橋の方へ歩いていつた。うとうと居眠りをしてる橋番の前を、懐手のまゝふらりと通りぬけて、ひたひたとした波の音に聞き入りながら、首垂れて機械的に足を運んだ。

橋の半ば近くまで來た時、彼はぞつとして立竦んだ。すぐ其處に、橋の北側の欄干に背をもたせ、橋の上にぢかに坐つて兩足を投げ出し、月の光を正面から白々と受けて、二人の女がゐた。一人は銀杏返に結つた年増で、旅館の女中らしい服裝をし、一人は背も少し低く年も少し若く、小さな束髪に結つて、白粉つ氣のない淺黒い素顔で、膝に二歳ばかりの子供を抱いてゐた。

彼は初めの驚きが靜まると、思はず二三歩近寄つていつたが、言葉が獨りでに先に出た。

「何をしてるんだい。」

銀杏返の女が、浴衣の上に縕袍を重ねた彼の姿をちらと見上げて、落付いた調子で答へた。

「風流でせう、橋の上からお月見で……。」

彼は苦笑したが、一寸その側を離れ難い氣持になつて、橋の欄干に腰をもたしながら、煙草を吸ひ初めた。二人の女は、彼が側にゐるのを一向氣に留めぬらしく、先程からの話を續けていつた。同郷の者とか以前同じ所で朋輩だつたと

か、さういつた風な親しい間柄で、而もだいぶ久しぶりに出逢つたものらしく、束髪の女が銀杏返の女へ向つて、縷縷として身の上を訴へてゐた。男に逃げられて、子供と二人で困つてゐる、その後の處置に就いて、相談をしてるやうだつた。然し彼は、彼女等の話に耳を澄すといふよりは、夜更けの橋の上で彼女等とひよつくり出逢つたといふ情景に、場合が場合だけに心打たれて、しめやかな淋しい氣持で、茫と月の光に浮出してる遠景を眺め入つた。黒々とした腰越あたりの山の端から、遠く三浦半島の山々が灰色に浮出して、その右手に漫々たる海が、月の光をさらさらと映してる先は急に黝んで、魔物のやうに横たはつてゐる。その沖の方から、冷々とした風が吹いてきた。

彼が二本目の煙草を吸つてゐると、銀杏返の女が不意に呼びかけた。

「旦那さん、濟みませんが、煙草を一本御馳走して下さいな。忘れてきて困つてしまつた。」

彼は二歩近寄つて、敷島の袋とマッチとを差出した。彼女は煙草を一本取つて、マッチで火をつけてから、それを返しながら、初めてぢつと彼の顔を眺めた。

「あら、御免下さい。私あなたを、家の書間の……あのお客さんだとばかり思つて……」

彼女が名指した旅館は、彼のとは違つてゐた。

「いゝぢやないか、」と彼は云つた、「どうせ同じ島の客だから。」

「ですけれど、あんまり失禮なことを……。」

それでも彼女は、煙草をすぱすぱやりながら、彼の方へ話しかけてきた、彼がもう凡ての事情を知つてゞもゐるもののやうに。この女は男から子供の養育料を取りたいのだけれど、男が應じないので困つてるのだとか、男がしきりに子供を取上げようとしてるので、渡してやつたものかどうか迷つてるのだとか、裁判にしないでうまくまとめたいのだと

か、そんな風なことを……。」

「兎に角、どんなことになつても、」と彼は云つた、「子供は母親の手で育てるのが本當だね。」

「えゝ、さうですとも。」と束髪の女がすぐに應じた。「今更あの男は、子供をくれなんて云へた義理ぢやありません。私が子供を生むのを、あんなに嫌がつてゐたんだから。」

そして彼女は、もう何度かしたらしい話を、半ば相手の女に半ば彼に、また繰返し初めた。――彼女が姙娠したのを知つた時、男は俄に不機嫌になつて、些細なことにも彼女を打つたり叩いたりして、しまひにはひどいことを勸めだした。――「私そればつかりはどうしても出來なかつた。意地になつても、生み落してやるぞと思つて、我慢に我慢を重ねて、とうとう生み落してやつた。」――その頃から、男は心變りがして、近くの飲食店の女中とくつついた。彼女の不在の折には、その女を家の中に引張り込むことさへあつた。彼女はもう我慢をしかねて、産後引續き一年足らずの間氣を揉み通しだつたため、多少逆上の氣味も手傳つて、思ひ切つた計畫をめぐらした。或る口實を設けて、一晩家を空けるといふことにして、子供と牛乳の瓶とを男に預けて、夕方から家を出た。そして夜遲くなるまで方々ぶらついた。春先のことで、白梅の花に何度か喫驚した。それから頃合をはかつて、家の裏口から忍び込んで、出刄庖丁を片手にして躍り込んでやつた。思つた通り、男は女を引張り込んで、同じ布團の中に寢てゐた。――「私もうかつとなつて、胸がこんなに脹れ上つて、この野郎と思ふと、初めおどかすつもりだつたのが本氣になつて、出刄庖丁で一つぐいと抉つてやらうとしたよ。するとね、二人の間に、子供がすやすや眠つてるぢやないか。眼の前がほんとに眞暗になつて、それからもう何もかも夢中さ。出刄庖丁を投り出して、わつと喚き立てゝ、子供を引つたくつて、外に飛出したまでは覺えてるが、あの二人がどうしたか、子供がどうしたか、ちつとも頭に殘つてないよ。私はその晩中、子供を抱いてうろつ

いたせいか、子供が風邪を引いて、翌日からひどく熱が出てね、もう駄目かと思つたよ。」――それから男は、相手の女と相談してしまつて、何等の消息もなかつたが、横濱から不意に人を寄來して、子供をくれと云つて來た。「あの女は屹度悪い病氣を持つてるんだよ。それで子供が出來ないものだから、この子をふんだくらうとしてるのさ。」

彼女は話し止めて、膝の子供の頭に頬をすりつけたが、子供がむづむづと動き出すと、いきなり胸をはだけて、乳房を子供の口に含ました。血管が一つ一つ透いて見えるほど、むつちりと張り切つた大きな乳房で、子供はそれを、筋目の深くくゝれた蠟細工のやうな片手で、やんわりと持ち添へながら、息もつかずに、咽せ返るほどぐつぐつと飲み下していつた。冴えきつた冷い月の光が、斜め上から降るやうに落ちてゐて、その乳房と手と子供の赤い頬邊とに、蒼白い艶を投げかけてゐた。

「どんなことがあらうと、子供は生みの母親が育てるのが本當だよ。」と浩造は云つた。「生みの母親の手でなくちや、子供は本當に生々と育つてゆきはしない。向ふで子供を引取りたがつてるのは、父親の情愛が眼を覺してきたのかも知れないぢやないか。君がその子供を丈夫に育てゝるうちには、向ふの男も迷ひがさめて、君の所へ心から戻つてくるかも知れないよ。何にしても、子供を手離しちやいけないよ。養育料やなんかのことは、どうにだつて交渉の仕方はあるだらう。子供は是非とも君が育てなくちやいけない。君が生んだ子だから、そしてこれまで君が育てゝきたんだから、今後も君が立派に育てゝやるのが本當だ。」

彼女は言葉の切れ目切れ目に、さうだよさうだよと云ふやうに、輕く首肯いてみせてゐた。彼が云ひ終ると、ひよいと顔を擧げて、彼の顔をぢつと見た。月の光を受けた仄蒼い素顔の中に、獣のやうに露はな眼が眞圓く光つてゐた。沖の方から吹いてくる風と共に、彼はぞつと肌寒い感じを全身に覺えた。

「兎に角子供を大事にするんだね。」

さう云ひ捨てゝ、彼は何氣ない風に歩き出した。橋の先端近くまでゆつくり歩いていつて、同じくゆつくりと戻つてくると、二人の女はまだ前の通りの姿勢で、細々と語り合つてゐた。彼はこの上二人の話を聞くのが惡いやうな氣がして、吸ひ殘しの五六本はいつてゐる敷島の袋とマッチとを、銀杏返の女に與へて通り過ぎた。

「……親切なお客さん。」

尻上りの調子で束髮の女が云つたらしい言葉が、後ろから追つかけてきたので、彼はふと振向いてみたが、急に顏が赤くなるのを覺えて、すたすたと足を早めた。そして宿に歸つてすぐに寢た。

それだけのことが、自殺の決心をしてゐた彼の悲痛な心へ、變に生温く(なまあたゝか)からみついてきた。彼は翌朝、伊豆の方へ向つて出發した。前夜二人の女が足を投げ出して坐つてゐた所には、冷かな朝風が颯々と吹き過ぎてゐた。

彼は伊豆の温泉に四五日滯在した後、自殺の決心を翻して、急いで東京に戻つてきた。

それから數ケ月の間、津田洋造は花柳の巷へ屢々出入したが、大學卒業後半年ばかりにして結婚する時から、それをぴたりと止してしまつた。その代りに、媒杓人へ向つて次の條件を持ち出した。

「私は結婚後は決して遊里へ足を踏み入れはしません。けれども、他に女を――素人(しろうと)の女をかこつておいて、子供を産ませるやうなことはあるかも知れません。そのことを承知の上で、そして、生れた子供は自分の子として入籍するのを承知なら、すぐにでも結婚しませう。不承知なら、私の方からお斷りします。」

さういふ無茶な條件を、媒杓人は先方へ正しく傳へたかどうか疑問だが、兎に角縁談はすぐにまとまつて、洋造は結婚してしまつた。

結婚後三日目に、彼と妻とは、新婚旅行の旅先で、次のやうな會話をした。

「お前は私の結婚條件を聞いたらうね。」

「えゝ、少しばかり……。」

「そして何と思つた。」

「そんなことを表立つて云ひ出す方は、却つて信頼出來る人だと思ひましたの。」

「では、お前は一生の冒險をして私の所へ來たんだね。」

「と云ひますと……。」

「私が實際そんなことをするかも知れないし、またはしないかも知れない、といふのを、凡て天に任せるといつた氣持で……。」

「さうかも知れませんわ。」

「それでは、私がそんなことを實際にするとしたら……。」

「諦めますわ。」

「諦めるつて……。」

「影に隱れて嫌なことをされるよりは、公然とされた方が却つてよいと、さう思ひ直すつもりですの。」

「お前は可愛いゝ樂天家だね。」

「あなたは樂天家はお嫌ひ。」

「いゝや、大好きだよ。私には悲觀主義くらゐ嫌なものはない。」

そして津田洋造は、その可愛いゝ樂天的冒險家たる妻のために、善良なる良人とならうかと、一寸思ひ直しかけたが、失戀の痛手や江ノ島の橋の感銘は極めて根深いもので、新妻に對する彼の愛情を妨げると共に、彼を初めの意向に立還らしてしまつた。

「子供を澤山拵へてやれ。戀とか愛とかいふ空疏なものをぬきにして、實質的な重みのある子供を、思ふ存分豐富に拵へてやれ。」

そして彼は、友人の紹介で或る秘密な家へ出入して、其處で出逢つた女に、先づ腕相撲を挑んだ。大低は相手にされなかつたが、中に一人、顏はさう綺麗でなかつたけれど、恰幅のいゝ腰のどつしり据つた女がゐて、彼に力一杯ぶつつてきて、何度も彼を打負かした。彼はその女に眼をつけて、遂に自分の所有にして、家を一軒持たしてやつた。

それまではまだよかつたが、そして其後二三の失敗の後、彼は自家の小間使のお常といふ女が、いつも頸筋にねつとりと髮の後れ毛をからみつかせてゐるのに、ふと眼を惹かれて、その親元と交渉の末、家を一軒持たした時、彼の妻は遂に激昂して生家に歸り、離婚の請求をしてきた。それでも彼女は、自分の産んだ長男一郎を乳母の手に托して、後々の始末を立派につけておいてくれた。

離婚後洋造が最も困つたことは、お千代——腕相撲の强い女——とお常との腹に出來る子供の入籍問題だつた。自分の子供は凡て庶子としないで嫡出子とすることに、彼の唯一な道德的矜持があつた。そこへ、折よく再婚問題が起つてきた。相手の女は、彼の會社の下役の娘で、一度結婚したが良人に死なれて、今は自家に戻つてゐるさうだつた。

彼は先づその女に逢つてみた。蒼白く痩せてはゐるが可なりの美貌だつた。たゞ少し頭にぬけてる所がありはすまいかと思はれるほど、無反應な張合ひのない人形のやうな女だつた。彼は自ら進んで、自分の過去の經歴や人生觀などを

語つたが、彼女は默つて聞いてゐるきりで、彼の失戀のくだりなどにも、眼に涙一つ浮べなかつた。そして自分の方の經歴については、餘り話したがらなかつた。それでも最後には要領よく、彼との結婚を承諾した。それが、今の妻の八重子である。

八重子と結婚してからは、洋造の生活は萬事順調に進んだ。父の遺産は次第に殖えていつた。お千代とお常とは幸に多産で、お千代は五人の子を産み、お常は四人の子を産んだ。それから洋造は、仕事の關係上大阪へ行くことが多かつたので、大阪にも一人の妾を置いたが、それが二人の子供を設けた。それらの子供の入籍を、時によると年に二人もの入籍を、八重子は平氣で承諾した。たゞ八重子自身は、結婚後四年目に、冬子一人を産んだばかりだつた。

「兎に角一家繁昌で目出度い。」と津田洋造は考へた。

その目出度い一家の、一人の父親と四人の母親と十三人の子供との會合を、どうして八重子が嫌がるのか、彼には合點がゆかなかつた。その上八重子の口振りによれば、彼女は何か新たな行動や思慮を取りかけてゐるらしかつた。彼はぢつと八重子の樣子に眼をつけ初めた。そして彼女の意外な變化に喫驚した。

どこか少しぬけてゐるらしいほど無反應だつた彼女は、今では可なり敏感にさへなつてゐた。長男の一郎はもう小學校の五年生になつてゐたが、來年は中學の入學試驗を受けなければならないと云つて、八重子はひどく彼に勉强をしひて、彼が少しでも怠りがちな時には、酷しく叱りつけてゐた。さういふ折に洋造が口を出したり、または、冬子もう幼稚園に通ふやうになつて世話がやけないから、お前が少し俺の用をも手傳つてくれと、洋造が忙しさの餘り云ひ出したり、其他子供に關係のある事柄が出てくる際に、八重子はともすると險惡な言葉付になつて、ヒステリーを起しかねない氣色さへ示すことがあつた。この前大阪のお蔦に子供が産れた時などは、些細なことに本當のヒステリーを起して、

四五日むつつりと默り込んでゐた。いつも人形のやうにちんまりと座つてはゐるが、眉根をぴくりぴくりと震はせることが多かつた。

いつの頃からいつの間に彼女がさうなつたのか、實業界に忙しく飛び廻つてゐる洋造には、さつぱり見當がつかなかつた。彼が氣付いた時には、彼女はもう善良な人形ではなくて、危險な人形となつてゐた。そして彼自身もいつとなしに、その危險な人形に對して、壞れ易い瀬戸物にでも對するやうに、手を觸れないでそつとしておく習慣がついてゐた。

こんな筈ではなかつたが……と彼は眼を見張つた。然しなぜさうなつたかは、彼には少しも分らなかつた。

桃の花が散り落ちる頃から、お千代の出産日が迫つてきた。洋造は或る晩、酒に醉つて上機嫌で歸つて來て、八重子の眉根の震へがないのを見定めて、笑ひながら云ひ出した。

「おい、お千代が間もなく子供を産んで來れるさうだよ。男だつたら九郎となる順番だし、女だつたら……藤の花が咲く頃だらうから、藤子と名づけるつもりだが、九郎より藤子の方が響きがよくていゝね。だがまあどちらにしたつて、それで十四人になるわけだ。十三といふ數は、西洋でいけないとしてあるから、なんだか氣になつてゐたが、それを通り越すのだから目出度いよ。……これで何だね、十四人になつたのだから、この秋頃には、一つ例の顏合せの會合でも催してみようぢやないか。それまでに誰か、お常でも、も一人子供を産んでくれて、十五人になると丁度いゝんだが、然し十四人だつて、俺の四十といふ年を逆にした數だから、却つていゝかも知れない。」

八重子は眉根をぴくりとさして、何とも言はなかつたが、彼がその日の書信に眼を通し終つて、生欠伸(なまあくび)をかみ殺してゐる頃、不意に彼女の方から尋ねかけた。

「あなた、お千代がまた子供を産むと云ふのは、本當のことでございますか。」

「本當だとも、そんなことに嘘を云つたつて初まらないぢやないか。」

「そして、子供が十四人になつたら、皆の顔合せの會をなさるおつもりですか。」

彼女の蒼白い顔に險を漂へてるのを見て取つて、彼は少し云ひ澁つた。

「さうさね、お前が皆の母親といふことになつてるし、お前だけが俺の正しい妻なんだから、萬事はお前の氣持次第なんだが……。」

「私はどう考へても嫌ですわ。」

「それぢや止してもいゝさ。……だが、お前はこの頃何だか樣子が變なやうだが、一體どうしたと云ふんだい。それとも、初めからの約束が今になつて嫌になつたのなら、さうとはつきり云つてごらんよ。俺だつて考を變へないこともないからね。」

「いゝえ、そんなことではありません。商賣人の不見轉なんかに手出しをなさるよりは、はつきりこれこれときまつてる方が、まだよいと思つてゐますわ。」

「それでは、お前の考へてることは一體何だい。俺にはさつぱり見當がつかないんだが……。」

そして彼は出來るだけ言葉の調子を和げて、彼女の意中を探りにかゝつたが、彼女はぴたりと心を鎖して一言も洩さなかつた。しまひには彼も諦めて、先に床に就いた。

その夜中に、彼はふと變な心地で眼を覺した。隣りの室に人の氣配がするやうなので、なほはつきり眼がさめて、氣がついてみると、傍の布團に寢てる筈の八重子がゐなかつた。それが變に氣にかゝつて、だいぶ待つて後に、起き上つ

と隣室を覗いてみた。

彼は喫驚した。八重子がしよんぼりと火鉢にもたれて座つてゐて、頭を襟に埋めて考へ込んでゐた。

「どうしたんだい。」

八重子はひよいと顔を與げて、何かを見定めるらしく彼の立姿をぢつと見つめてゐたが、俄に寒い風にでもあたつたかのやうに、ぶるつと一つ身震ひをした。と殆んどすぐにわつと泣き出してしまつた。

彼は一寸呆氣にとられたが、靜に歩み寄つてその肩に手をかけた

「何だよ、こんなに遲くまで起きてゐて、そしてふいに泣き出すなんて……。もつとしかりしてくれなくちや困るぢやないか。」

彼女はもう立派にヒステリーを起してゐた。暫く泣きしきつた後、彼の手を拂ひのけて、また一聲泣き立てゝ、それから急に口早に云ひ續けた。

「私はもう駄目です、とても駄目です。いくら願つても子供なんか出來ません。毎月、月の初めに七日だけ、お地藏様に日參を欠がしたこともないのに、どうして子供が出來ないんでせう。私そのことを考へると、口惜しくて口惜しくて……。お千代にだつてお常にだつて、それから大阪のお蔦にまで、次から次へと子供が出來てゆくのに、私にだけは、冬子が一人出來たきりで、後がどうしてないんでせう。皆から奥様と立てられたつて、子供が出來なければ、ほんの飾り物で、床の間の置物と同じぢやありませんか。私どうしたらいゝんでせう。初めから子種がないのぢやないし、一人出來たからには、後が續いてもよい筈なのに……。いくらお地藏様に日參しても、温泉にやつて頂いても、そのしるしさへ見えないんですもの。私はもう駄目です、何もかも駄目です。このまゝで子供が出來ずに、年をとつてしまつて、

慘めな身の上になるばかりです。もう何もかも、何もかも取返しがつきません。どうしたらいゝんでせう……。」

餘りの意外なことに、洋造は茫然とするばかりだつた。そして漸くのことに一言云つた。

「だつて、一人あればよいぢやないか。」

すると、それがなほ彼女の神經をそゝつた。一人あるからなほいけない、初めから一人もないのならまだ諦めもつく、とそんなことを、彼女は涙ながらにかき口說いた。それが暫く續いてるうちに、彼女は血の氣の失せた眞蒼な顏を急に擧げて、脣の端に細かな震へを見せながら、彼の方へつめ寄つて來た。

「あなたは、他の女にばかり子供を産ませておいて、私一人をないがしろにしておいて、それでよくも、皆の顏合せをしようなどゝ、そんなことが云へたものですわね。」

言葉の調子が前とは全く違つてゐたので、洋造はぎくりとして少し身を退いた。

「あなたは私を正妻だ正妻だとをだてゝおいて、私が馬鹿なものだからいゝ氣になつて、皆の前で私に恥をかゝせるおつもりなんでせう。いくら私だつて、そんなに踏みつけにされては、默つてはおられません。」

洋造は彼女の顏を見つめながら、つとめて平氣な調子で云つた。

「お前のやうに、さう無茶なことを云つてはいかんよ。俺は何も、お前に恥をかゝせるだのお前を踏みつけにするだのと、そんなつもりではなかつたんだ。よく氣を鎭めて考へてごらん。お前に子供が出來る出來ないなんてことは、自分達の知つたことぢやないし、自分達の力でどうにもならないことぢやないか。俺はたゞ、子供がもう十四人にもなるので、一家が……榮えて……目出度いと思つたものだから……。」

彼が云ひ澁つてるのを、彼女は頭から押つ被せた。

「何か目出度いものですか。私に澤山子供が出來て他の女に出來ないのなら、兎も角も、私には一人つきりで、他の女にばかり出來るのが、何が目出度いものですか。そんな風な考へ方をなさるのが、第一私を踏みつけになすつてる證據です。」

さういふ彼女の考へ方が、彼にはどうもはつきり腑におちなかつた。云ひ爭へば爭ふほど、益々變挺に分らなくなつた。この上は彼女の氣の鎭まるのを待つて、ゆつくり話をした方がいゝ、とさう思つて、腕を拱いたまゝ默つてしまつた。彼女はなほ暫く、怒つたり悲しんだりしてゐたが、やがてぷつりと口を噤んだ。ぎらぎらした眼の光が消えて、變にぼんやりした眼付を空に据ゑて、頬の筋肉が堅くこはばつてゐた。その頬が弛んでくるのを待つて、彼は初めて口を開いた。

「お互に云ひ爭つてゐてもきりがないから、落付いて心の中のことを話し合つてみようぢやないか。」

何の返辭もなかつたので、彼は次の言葉を考へたが、先づ火鉢に炭をついで、熱い茶をのんだりした。

「俺のことはもうお前もよく知つてる筈だ。で此度は、はつきり俺の腑におちるやうに、お前の考へをきかしてくれないか。俺にはどうもお前の考へ方がはつきり分らないんだが、……。」

「先程から申した通りですわ。」

平素の通りの調子で彼女は答へた。そしてその樣子にも、もう苛立つた所はなくなつて、いつもの人形に返つてゐた。たゞ眼からほろりと涙を落した。

「いや、お前の考へは分つてゐるが、どうしてそんな風に考へるやうになつたか、それを聞かしてくれないか。」

そして何度も促されて、彼女は靜な調子で云ひ出した。

「前にお話したやうに覺えてをりますが、私はあなたの所へ、自分の身を捨てるつもりでやつて參りましたの。どうせ一度お嫁入りした身體だから、それを投げ出して、父のためを圖りたい氣もありましたし、あなたのお話を聞いて、生意氣にあなたを救つてあげたいといふ氣もありましたし、なんだかいろんな氣持で參つたのでした。けれどもたゞ一つ、あなたの子供を産むことだけはすまひと、心に固く誓つてゐました。所が……冬子が出來てしまつて、それから三四年たつうちに、自分の一生が何のための一生やら、これからどうなつてゆくのやら、何もかも分らなくなつて、それはほんとに淋しい賴り無い氣持で、世の中が眞暗に思はれてきたのです。そして、まだその外にいろんな氣持もあつたやうですが、ふとしたことから、昔のことを……。昔私にもやはり、戀人が一人あつたのでした。戀人と云つてよいかどうか分らないくらいの、ごく淡い感じのもので、相手の人は私の氣持なんか少しも御存じなかつたのです。そして、イギリスへ行かれたきり、次第に消息も絕えてしまひました。私の方でも結婚してしまひ、次にあなたの所へ參るやうになつて、いつのまにかその人のことなんか、遠くへ忘れてしまつてゐました。そのことが、どうした拍子にか、ふと思ひ出されたり、夢に出てきたりするやうになつて、それからは妙に佗しい氣持に沈み込んでゆきました。その頃私は、よくこんな氣持で生きてゐられると、自分でも不思議なほどでした。それがだんだん嵩じてきて、自分でも自分が分らないほどになつてるうちに、どういふのでせう、心持がまるで變つてしまつたのです。あなたにかぶれたのかも知れませんわ。皆あんなに子供を次から次へと產んでるから、私だつてまだ若いし負けてゐるものか、澤山產んでやつて、皆の者を見返してやれ……そんな氣になつたのです。田澤や吉奈の溫泉に度々やつて頂いたのも、そこの湯にはいると子供がよく出來ると聞いたからでした。そしてこの頃では、毎月初めの七日間は、お地藏樣に日參をしてゐます。それからまだ、いろんなことをしてみました。けれど、駄目なんです。こんなにまでして子供が出來なかつたら、自分はどう

なるのだらう……と考へてくると、口惜しいやら情ないやらで、ぢつとしてをられなくなります。そこへまたあなたまでが、皆の顏合せをしようなどゝ仰言るのでせう。こんな心持で、どうしてお千代やお常の前に出てゆかれませう。それこそ恥の上塗りですわ。考へつめてると、かつと逆上せてしまひさうです。いくら夫婦の間だつて、こんな恥しい話は出來やしません。それを、あなたは無理に話さしておしまひなさるのです。……それでもやはり、皆の顏合せをしようと仰言るなら、それでも構ひませんが、私は決して出ませんから……。あなたに話してしまつた上は、猶更出られやう致しません。私はもうどうせ初めから捨てるつもりの身體ですから、どうなつても平氣ですけれど、せめて子供だけなりと、なぜ出來てくれないかと思ふと、それが口惜しくて口惜しくて……。」

ほろりほろりと彼女は涙を落しながら、丁度神の前にでも出たやうに、彼の前に首を垂れて向くなつてしまつた。

彼もその前に首を垂れて、ほつと溜息をついた。

「俺が惡かつた、許してくれ。お前がさういふ心なら、顏合せの會なんかどうだつていゝのだ。それならさうと、初めから云つてくれゝば……何も大したことではないし……。」

「でも私には一生懸命のことなんです。」

「それはさうだらうけれど……。いやもういゝ。そんな話は止さうぢやないか。」

互にまぢまぢと心を見合つてるやうな沈默が續いた。彼女はいつまでも身動き一つしないで、見た所やはりいつもの人形のやうに坐り通してゐた。するうちに、その眉根に深い皺が刻まれてきて、今にもぴくりぴくりと顫え出しさうだつた。彼はぎくりとして、ぢつとしてゐられなくなつた。

「餘り考へ込むといけないよ。」と彼は云つた。「もつと呑氣に樂天的にしつかりしてゐなければ、世の中に生きてゐられ

やしないからね。お前は實際、一家の主婦で中心なんだから、お前がゐなければ何もかもばらばらになつてしまうのだから、そのことをよく心の中に据ゑといて、俺のために……皆のために、ぢつと落付いてゐてくれよ。賴む、ほんとに賴むから。俺もお前の話を聞いてゐると、何だか變な氣持になつてきさうだ。そんなのはいけない考への證據なんだ。どこと云つてまだ俺にも分らないが、どこか間違つてるに違ひない。」

云つてるうちに、彼は自分でも自分の言葉が腑に落ちなくなつて、また默り込んでしまつた。それから、もう寢るやうに彼女に勸めた。彼女はおとなしく彼の言葉に從つたが、たゞ一言獨語の調子で尋ねかけた。

「あなたは、もし誰にも一人も子供が出來なかつたとしたら、どうなさるつもりだつたのでせう。」

「もう云はないでくれ。變な氣がするから。」

そして彼は其處に一人起きてゐて、腕を組んで考へ込んだ。妙に暖いひつそりとした晩だつた。もし一人も子供が出來きなかつたとしたら、その先は——分らなかつた。もしこのまゝでやたらに子供が殖ゑていつたら、その先は——分らなかつた。その二つの分らない問題を順々に考へてるうちに、いつのまにかぼんやりしてしまつて、戸外に騷いでる不氣味な猫の鳴聲に、聞くともなく聞き入つてるのだつた。

さうした自分自身に氣がつくと、彼は慌てゝ布團の中にもぐり込んだ。佗びしい索漠たる感じが四方から寄せてきた。その中で彼は、自分の過去をずつと見渡してみた。何もかも、道子のことも江の島の橋のことも先妻のことも、遠くぼんやりと霞んでしまつてゐた。がたゞ一つ、意外な方面から、綾子の若々しい顔付が覗き出してきた。

綾子といふのは、洋造の伯父の妹娘の靜子と同窓の親友で、女學校を卒業したばかりだつた。前年の夏、戸倉溫泉に行つてた伯父から洋造は手紙を貰つて、いゝ處だから二三日遊びに來ないかと誘はれて、何の氣もなく行つてみると、

伯父と一緒に靜子と綾子が來てゐた。伯父は同じ旅館に丁度よい碁敵を見出して、一日中大抵その方にばかり熱中してゐたので、洋造は自然靜子と綾子とを相手にして、若々しい氣持に遊びくらして、ついうかうかと十日餘りすごしてしまつた。靜子は内氣な弱々しい大人びた娘だつたが、綾子は潑溂としたなかに危つけのある素純な娘で、無雜作に束ねてすぐに解けかゝりさうな髮恰好と、その下の怜利さうな廣い額とか、全體の姿や調子によく調和してゐた。

千曲川の河原が彼等の遊び場所だつた。水に飛び込んで泳いだり小石原の上に寢轉んだりして、川下の彼方に遠く北信の平野が見渡され、更にその向ふには、戸隱や妙高などの奇峯が聳えてゐた。

「山だの川だの平野だの、皺だらけのところを見ると、地球も隨分お婆さんね。」と綾子は云つて頓狂な顔付をした。

「だつて、地球は他の星に比べると、非常に若いつていふぢやないの。」と靜子が答へ返した。

「どうして。」

「あなたもう忘れたの、地理で教つたぢやありませんか。」

「さう。私忘れちやつたわ。」そして一寸小首を傾げた。「そんならあなたは、人間……人類だわね……人類の命は、地球の命の何分の一に當るかそれを知つてゝ。」

「知らないわ。聞いたことがあるやうな氣がするけれど……。何分の一なの。」

「私も知らないわ。」

「まあ。」

睥みつけた靜子の前を、綾子は笑ひながら逃げ出した。大きく牡丹くずしの模樣のある單衣を、河原の小石の上に脱ぎすてゝ、下に着てゐた海水着一つで、川の中に飛び込んでいつた。

「ねえ、來てごらんなさいよ、鮎が澤山ゐるから。」

「嘘。」

「ほんとよ。」

やけに水の中をばやちやばちややつた。

靜子はのつそり立上つて、水際へ行つて覗いてみた。その後ろから、洋造が伯父に借りた海水着一つで飛び込んでいつた。鮎の子が方々に泳いでゐた。

「綾子さんにこれが一匹でもつかまつたら、何でも望み通りのことを聞いてあげますよ。」

「どんなことでも。」

「えゝ。」

水を亂さずにそつと狙ひ寄つたり、不意に馳け出して追つかけたりしたが、小鮎はすいすいと身をかはして平氣な風をしてゐた。洋造と靜子も一緒になつて追ひ廻したが、一匹もつかまらなかつた。帽子の縁まで水だらけにして、すつかり疲れきつて、三人は熱く燒けてゐる河原の上で休んだ。

淸いさらさらとした流れと、圓い小さな石の河原とに、ずつと下の方まで、子供や大人の麥稈帽が點々と散らばつてゐた。

その河原の上を、月の晩には、晝間の嬉戲を忘れはてた落付いた散歩をした。靜子と綾子とはよく歌をうたつた。靜子の聲は細かな顫へを帶びてをり、綾子の聲は張りのある朗かさを帶びてゐた。

「月の光で見ると、津田さんは何だか憂鬱さうにお見えなさるわ。」と綾子は云つた。

洋造は苦笑しながら、默つて二人の傍について歩いた。

「綾子さんはあなたのことを……。」

靜子が云ひかけるのを、綾子は駄々つ兒のやうに、首と手とを打拂つて止めようとした。その樣子か可笑しかつたので、靜子はくすくす笑ひ出した。

「何です、僕のことを。」

「いえ、何でもないの。」と綾子はもう澄し返つてゐた。

「あのことですか、ヒポコンデリーの獅子だといふ……。」

「あら。」

二人は同時に足を止めた。

「僕の耳は千里耳だから、何でもすぐに聞えるんだよ。でも獅子は難有いな。そのお禮に、詩人めいた素敵な名を二人につけてあげませうか。」

「えゝ、どうぞ。」

「さうだな……靜子さんは水中の夢で、綾子さんは空中の夢……つてどうです。」

「水中の夢に空中の夢……。」

靜子はさう繰返して微笑したが、綾子は喫驚したやうな眼で彼の顏を見上げた。

流れの上に渡してある低い小いさな假橋から、きらきらと水に映る月の光を見て、宿の方へ歸つていつた。

月を見るなら、川向ふの鏡臺山に是非登つてみなくてはいけない、と旅館の人にすゝめられて、洋造と綾子とは或る

晩出かけた。夜の山は物騒で恐いと云つて、靜子は一人殘ることになつた。

獅子ケ鼻を廻つて大正橋にかゝると、川下の方から冷々とした風が吹いてきた。妙に空氣が稀薄に思へる晩で、月の光が白々として、兩岸の山がすぐ近くに迫つて見えた。鐵道線路の灯が瞬いてるすぐ上方に、鏡臺山一帶は眞黑く魔物のやうに蹲つてゐた。

「もう止しませうか。」

「えゝ。」

長い大正橋を渡りきつて、向ふ岸を溯つて、いつもの河原に來て休んだ。仄白い河原の小石と、淺瀨の水音と、月の光と、それからあちらこちらに散歩の人の姿が見えた。

「靜子さんは利口ですね。實際都會のものには、夜の山登りなんか駄目ですよ。」

「それでも、靜子さんはそれは月の晩が好きなんですの。私月を見てると、何だか淋しく悲しくなつてきますから……。」

「月を本當に好きな人は、月を見ても淋しく感じない人かも知れません。でも可笑しいですね、靜子さんよりあなたの方がずつと快活なのに……。」

「その代り、もう何もかも嫌になつて、口もきゝたくなくなることがありますの。よく靜子さんに笑はれますけれど……。」

「さう云へば、靜子さんくらゐいつも調子の變らない人はありませんね。」

それから話は靜子のことに落ちていつたが、綾子はふと云ひ出した。

「あなたのことで私靜子さんと議論しましたのよ。」
「え、私のことで……。」
尋ねられると、彼女は急に默つてしまつたが、とうとう口を開いた。
「失戀して間もなく他の人と結婚するのが、いゝか惡いかつて……。」
彼女は眞赤な顏をした。彼も何故となく顏が赤らむのを覺えた。
「あゝ私の昔のことですか。」
靜子や綾子がそれをどうして知つてるのか意外だつた。恐らくその頃の彼の事情をよく知つてる伯母からでも、靜子が聞き出してきたのだらう。
「失戀した後で結婚するのはちつとも不思議ではないと、靜子さんは仰言るのですけれど、向ふの人を本當に愛してゐたら、他の人と結婚なんか出來ない筈だと、私はさう云ひましたの。」
「それが本當です。」
「でも、あなたは……。」
「私のは……別ですよ。」
白々とした額をのべて彼女がぢつと覗き込んでくる……さういふ感じに彼は變に心亂されて、立上つてそこらをぶらつき初めた。川風が既に寒かつた。
「ヒポコンデリーの獅子が失戀したなんて可笑しいでせう。」
「あら私、そんな意味であなたのことを……。」

彼女が今にも泣き出しさうな蹙め顏をしたので、彼は吃驚して打消した。

「分つてゐます。今のは冗談ですよ。」

彼が無言のまゝぶらぶら歩いてゐる間、綾子は同じ所に屈み込んで、しきりに河原の石をかきまはしてゐた。

「何をしてるんです。」

「水中の夢子さんに、綺麗な石をおみやに持つていつて上げるつもりですの。」

彼はふと涙ぐましい心地になつて、一諸に石を拾つた。それから假橋の方を渡つて宿に歸つた。

その晩、彼は知らず識らず綾子の面影を心に浮べてゐた。夢にも彼女のことをみたやうだつた。

それから二日たつて、洋造は東京へ歸つた。汽車の窓から彼は、溫泉の方を見えなくなるまで見送つた。

「俺は綾子に心を奪はれたくない。餘りに不自然なことだ。」

其後、綾子は靜子と一緒に彼の家へ一度遊びに來た。

それだけのことだつた。けれど變に忘れられなかつた。洋造はこれを自分の最後の淸い幻として、心の奥にしまひ込んだ。餘りに奥深くしまひ込んでいつしか忘れていつた。

それが、妻とあゝいふ話をした後に、ひよつくり浮び出て來たのである。

「あれくらゐのことは、世間にざらにあることだ。それを最後の淸い幻だなど〻して、いつまでも心の中に懷いてゐるほど、俺の生活は陰鬱なのかしら。それほど自分の生活から華かなものを絶つて、やたらに子供ばかり拵へてゐて、それでどうなるのだ。」

翌朝になると、また前夜の猫が庭の隅にやつて來て、一匹の猫牝に四五匹の牡猫がかゝつて、皆煤けて泥まみれにな

つて、ぎやあぎやあ騒いでゐた。地面を掠めてくる輕い春風に、そのうす穢い屎の匂ひまで交つてゐた。

洋造は嫌惡の念に驅られて、自ら竹竿を持つて下りていつた。夢中になつて脹れ上つて、打たれてもびくともしないやうなやつを、檜葉や躑躅の茂みの下から、竿の先で突つき出して、隣家の方へ追ひやつてしまつた。額や背中に脂汗をかいた。

その様子を、空色の洋服に着かへてる冬子が、泣き出しさうな顔で椽側から眺めてゐた。

「あつちに行つといで。」

叱りつけておいて、彼は眉をしかめながら戻つて來た。

「だつて、お父さま、可哀さうだわ。」

「他家の猫ぢやないか。」

まん圓くうち開いた眼の中の、青みがゝつた白目の縁に、ほろりと澄明な水玉が出てきて、それをぢつと押へ止めるかのやうに、冬子はあくまでも眼を見開いてゐた。が……大きく一つ瞬きをして、その水玉がはらりとこぼれると、くしやくしやな澁め顔になつた。と同時に、洋造はそれを胸に抱き上げた。

「泣くんぢやないよ。馬鹿だね。」

額の汗を掌で拭いて、彼はのそりのそり庭の中を歩き出した。冬子はきよとんとした潤んだ眼付で、彼の肩にしがみついてゐた。張りきつたくりくりした肉附が、何となく甘酸つぱい肌の匂ひと共に、彼の胸の中に沁み通つてきた。薄すらとかすんだ生溫い朝日の光が、植込の新綠の上に一面に降り注いでゐた。

「俺はもう愛と戀かとか、さういつたものをいつのまにか失つてしまつた。今になつて取返しはつかない。夫婦の愛情

さへももう味へさうにない。俺の生活はどんよりとしてる。然し……。」

彼は兩腕の中に冬子をとんとんとやつて、その固つこいずつしりとした重みを測つた。

女中が冬子を探しに來た。幼稚園へ出かけなければならない時間だつた。

「轉ばないやうに大事に連れて行くんだよ。」

そして彼は妻の方へやつて行つた。

八重子は蒼白い顏をなほ蒼ざめさして、力盡きたやうにがつかりした樣子で、それでもきちんと端坐してゐた。彼の姿を見ると眼を外らした。彼は何氣ない風で云つてみた。

「お前はどこか身體でも惡いんぢやないのか。もし何なら、醫者に診て貰つたらどうだい。」

「それには及びませんわ。」

「それなら、溫泉にでも出かけてみるがいゝよ。俺も一二週間保養をしてみたいから、急な用を片付け次第、一緒に行かうよ。よかつたら……。」そして彼は一寸眉を歪めた。「戸倉にでも行つてみようか。」

「えゝ。」と彼女は上の空で返辭をした。

彼は急に心の落付きを失つて、それから慌しく外出した。

「何といふことだらう、俺達は、揃ひも揃つて子供ばかりほしがつてる。これで八重子が姙娠したら、それこそ萬々歲だ。」

變に擽つたいものが腹の底からこみ上げてきて、彼は往來の眞中で身體を搖つた。

その日彼は自働車を驅つて、お常の家へ不意に晝飯を食ひに行つた。子供四人共丈夫だつた。晩飯はお千代の家へ食

ひに行つた。お千代は大きな臨月の腹をもてあつかつて、肩でせいせい息をしてゐた。

「いつ生れるんだい。」

「もうぢきださうですけれど……。こんどのは大變發育がいゝつて、お産婆さんもさう云つてゐますが、何だかいつもよりお腹が大きくて苦しいんですの。」

「二子ぢやないのかね。」

「あら、いくら大きいつたつて……。」

糸切齒のあたりの金をぴかつとさして笑つたが、その拍子に、眼の縁の薄黑い隈取りが赤くなつた。

飾臺のまわりには子供達が、燕の子のやうに口を並べて、彼がはさんでくれる刺身の切を待つてゐた。彼が少し惡戯をしだすと、それに皆元氣を得て、彼の頭の毛を掴んだり肩に上つたりした。それを彼は順々に並ばして、名前を呼んで返事をさした。

「春子。」

「はい。」と極り惡さうな返事だつた。

「二郎。」

「はい。」と大きな威勢のいゝ聲だつた。

「五郎。」

「はい。」

「桃子。」

「はい。」

「七郎。」

返事がなかつた。皿のものを手づから頬張つて、眼をくるくるさしてゐた。

「此奴はずるいね。今に豪い者になるぞ。」

杯を取上げてぐつと飲んでると、ヒポコンデリーの獅子といふ言葉をふと思ひ出した。それに續いて、水中の夢、空中の夢、と口の中で云つてみた。がどれも、無意味な馬鹿げきつた響きをしか齎さなかつた。

「此奴等も大きくなつたら、いろんな馬鹿げたことをやるだらう。が、兎に角、澤山兄弟姉妹があつて目出度いわけだ。」

ふと、眼の中に熱いものがたまつてくるのを感じて、鼻をすゝりあげたが、それからしきりに杯を重ねた。そして彼は、お千代の大きな腹に眼を据ゑながら、本當に醉つ拂つていつた。



愚かな復讐

佐々木味津三

理非曲直の上から言つても、武道そのものの上から言つても、立合に情實を設けて勝を讓るなどは、元より哲之助にも素直には同意出來かねること柄であつた。それも昨夜のやうに人を介して、言はば婉曲な八百長を申し入れた廣木の態度を思ひ合はすと、自分が信じられなかつたと言ふ點で、又不卒直な點で、寧ろ不愉快を感じた位であつた。

まして對手は日頃自分を目の上の瘤に忌み嫌つてゐる廣木松之介であつた。ことごとに敵意と反感と嫉妬を寄せてゐる廣木松之介であつた。粗豪な點で、狷介な點で、又輕薄な點で、どれだけでも非難の出來る廣木であつた。

が、しかし、今の哲之助にはそれらをいちいち咎め立てやうとする心持は少しも起こらなかつた。またさげすまさうと言ふ考へも起こらなかつた。寧ろ廣木そのもののの心持が解り過ぎる程解るやうな氣がしてならなかつた。自分と相前后して入門し乍ら、自分が一足先に目錄を許されたために、また現在師範代の位置さへも持し

てゐるがために、一倍競爭意識の強い廣木が、ことごとに敵意と反感と嫉妬を抱くのは理の當然にさへ考へられた。

わけても今日の立合は、廣木にとつて實際の關ケ原であつた。若しまた去年のやうに、武運拙なく自分に不覺を取つたとすれば、無論その將來は暗憺たるものに違ひなかつた。おそらく遙かな後輩の下風にさへも立たねばならぬはめにならないとも限らなかつた。

あまつさへ廣木は、近來とみに渡邊老先生の信任を增した一人であつた。無論廣木自身も、その信任に背きたくない程の必死な覺悟があるに違ひなかつた。それを思ふと哲之助には、憎みよりも非難よりも先づ友情が先に立つて、寧ろ廣木のその必死な、懸命な胸中に涙ぐむやうな同情さへ湧いてならなかつた。と同時に一種の義氣さへも湧き上つた。

そして彼は廣木の希望通り、心よく勝を讓る考へで、すばやくたすき十字に綾取ると、廣木の掛け聲に隨ひ乍ら、日頃愛用の木太刀をとつて、靜々と道場に降り立つた。

表ての風はまたひとしきり吹き募つた。ひゆうひゆうと唸りを發し乍ら、風は時々砂塵を捲いて、さツと武者窓から道場に吹き込んだ。

互ひに目禮を送り交すと、やがて二人は左右に分れた。

「いざ！」

廣木の聲には顫へがあつた。

「いざ！」

應じ乍ら、とたんに彼は得意の星眼に位をとつた。

廣木も必死の一手であるか、同じく位を中段に取つた。

「えい！」
「やッ！」
氣合と氣合が空を掠つて、滿座はおのづと片唾を呑んだ。
しかしいざ立合つてみると、あまりに廣木の未熟なわざに、流石の彼も聊か意外であつた。彼が師範代になつて以來、廣木の狹量な嫉妬のために、殆んど小一年と言ふものまるで立合ふ機會さへなかつたが、それにしても對手がこれ程までに、未熟不鍛練な腕前とは思はなかつた。どんなに贔負目にみても、目錄は夢おろか構へえすでにすきだらけであつた。打たうと思へば面小手お胴のどこを衝いても、附け入るすきはざらにあつた。
こんな未熟者に、一片の友情と義心によつて、若し一勝を讓つたとしたら、と言ふ點に氣がつくと、瞬間彼は武道そのものの名分を感じて、全身本能的の義憤にかり立てられた。そして思はず吃然とし乍ら、太刀持つ兩手に力をこめた。同時に體を張つて大きく左上段に構へ直ほすと、滿身にうねりを打たし乍ら、ぢりぢりと容赦なく廣木に詰め寄つた。
えいやつ！と放つ氣合のうちにも、おのづと眞劍さがこめられたものか、對手の廣木はもろくも體をみだし乍ら、一歩一歩あとへ追ひ詰められた。
がしかし次の瞬間、廣木が額にたらたらと油汗を滲まし乍ら、いかにも哀眼がましいまなざしで必死に喘いでゐるのを發見すると、途端に彼は再びはツとわれに歸つた。同時に義心と友情に甘やかされた不思議な感激がまた疾忽として彼の全身によみがへつた。はツと思つて氣合をぬくと、思はず彼はまた星眼に構へ直して、ここへ打ち込めと言はぬばかりに、小手のうちへかすかなすきを見せた。

しかし對手の廣木の方は、一瞬前の肉迫に悉く膽を呑まれたものか、彼が示した小手のすきさへ容易に發見することが出來なかつた。殆んどはめ板一尺近くまでも身を引き乍ら、必死の油汗をぽたぽたと流しつづけた。

今は却つて彼の方が苛々と齒痒かつた。殆んどさそひかけるやうに、重ねて小手にすきを見せたが、それさへ廣木には判りかねた。つひに彼は氣を入れ直すと、自らぢりぢり身を引き乍ら、今度はろこつに胴のうちへ大きなすきをつくつて見せた。

流石の廣木も認めたものか、

「おう！」

と一聲矢聲をあげると、飛び入りさまに獲物を泳がし乍ら、はツしと右胴につけ入つた。

「參つた！」

同時に彼は豫定のごとく、がらりと木太刀を投げすてた。

滿座はどつとどよめき立つた。續いて拍手が空を破つた。

しかし彼は現在明らかに負けてゐ乍ら、心は爽然として明るかつた。これを境ひに今後の廣木がどんなにか惠ぐまれるだらうことを想像すると、たとへ僞りの立合であつたとは言へ、現在おのれ自身その悦びにあやかつてでもゐるやうな亢奮がかんじられた。

そして彼は心よく廣木に目禮を送ると、静かに袴の塵を拂ひ乍ら、いんぎんに席へついた。

がしかし、一端勝を占めたとなると、對手の廣木は突然態度を一變させた。殆んどその場から平日の廣木に立ち歸つて又ろこつに反感と敵意を現しかけた。

のみならずその翌日から、折にふれ時に際してことごとく廣木が彼に對して、惡意ある影口をついてゐると言ふこともまた耳にはさんだ。

「後藤も太刀を取ればひと角の者だが、心構へが文弱で氣に喰はぬ。第一唐人の寢言なぞをひねくるやうでは、武藝者の風上にも置けぬ奴ぢや」

ある日、門弟たちの居流れてゐるところで、恬然とし乍ら廣木が彼を罵つたと言つて、ひそかに告げ口をした者があつた。告げた者は相當信賴のおける若者であつた。

「哲之助の太刀筋には癖があつてどもならぬ。正しい刀法を學びたいなら、拙者の稽古をうけろ」

またある時、一部の門人たちをつかまへて、廣木がそう言ふ廣言まで吐いたと言つて、そつと彼に囁いた者があつた。囁いた者は矢張り相當信賴のおける別な若者であつた。

がしかし、哲之助はそれを信じたくなかつた。第一なにが故に廣木が現在も尚ほ敵意と反感を持つてゐるか、その直接動機がまるで了解出來なかつた。

よしんば廣木の影口が事實であつたにしろ、つとめて彼はそれにこだわりたくなかつた。こだわれば自然に、彼自身廣木に反感と敵意を持たなければならなかつた。敵意を持てばまた自然に、彼と廣木は兩々相對峙しなければならなかつた。

彼は一意その結果を怖れた。道場そのもののために、老來とみに衰へを加へた恩師そのもののために、また門人たち

のために、引いてはおのれたち自身のために、彼はなるべく平地に波瀾を起こしたくなかつた。

そして彼は自ら心に、戸を立て乍ら、すべてを和むおだやかな態度を持して、どの影口にも堅く耳をとぢた。

しかし、事實はむごくもそれを裏切つた。なに故か門人たちは、ひとり減りふたり去つて、次第に彼に稽古を求める者がなくなつた。のみならず手の平返へして、一種侮蔑に近いまなざしまでを、こぞつて彼に向け出した。

「後藤先生！」

ある夜稽古が濟んでから、彼は門人の大三郎から、意外なことを耳に入れた。大三郎は現在彼に稽古をうけてゐるたつた一人の内弟子であつた。水戸藩にあつては士分以下の輕輩であつたが、その割合に太刀筋には見どころがあつた。それを見込んでと言ふわけではなかつたが、自然氣の入れ方も違つてゐたものか、終始大三郎は彼に好意を寄せてゐる一人であつた。

「先生は、廣木先生がこの頃毎晩ご門人衆を召し連れて夜遊びに參られるのをご存じでムりますか？」

なに故か大三郎は少しく昂然とし乍ら、突然威儀を正して意外な言葉を切つた。

「廣木が？」

思はず彼も聞耳立てた。がしかしまたすぐにおのれに立ち歸つた。この場合少しでも廣木に對する影口がましい言葉を、しかも門人の口から耳に入れるのは好ましくないからであつた。それを耳に入れて、この上廣木に對する不快な解釋を強めたくなかつた。

そして彼は目顏で拂ひのけるやうにし乍ら大三郎の告げ口を斥けた。

しかし大三郎は、なにか押さへ兼ねる義憤でも感じてゐるかのやうな面持をし乍ら、聲をひそめて又意外な言葉をは

いだ。

「わたくし、廣木先生のお仕打がなんとしても合點參りませぬ。先生は……先生は、廣木先生に勝をお讓りなされたのでムりませう！」

流石の彼もそれには瞬間はッと驚き上つた。

「たわけめが。めつたなことを申すなッ」

そして思はず大三郎を叱りつけた。

「左樣でムりますか……仰せは……仰せはよく合點が參ります……しかしそれにしてもわたくし廣木先生は男らしくないと思はれてなりませぬ。ご門人衆が先生から背いて去るのはみんな廣木先生に欺かされてゐるためでムりまする……みんな廣木先生からなにがしお振舞をうけてゐるからに違ひありませぬ……そればかりではムりませぬ。老先生までが、廣木先生に前以つて免許皆傳の內意を傳へたさうでムりまする」

「內意？誰にきいた？誰にきいて參つた？」

それを聞くと、折之助も彈かられるやうにつと居住を繕ひ直した。

「それだけは申しあげられませぬ……しかしわたくし言葉にうそ僞りはムりませぬ。……いずれこの道場も誰かに讓り渡さなければ相ならぬ。折之助もよいが、あれはどう言ふものか手前の性に合はぬ讓るならそちより他にないからそのやうに心掛けて折之助だけには萬事ひけを取らぬやうに覺悟いたせ、といふ言葉を老先生がぢきぢきに廣木先生へ申されたさうにムります」

「たしかに間違ひないかッ」

思はず彼も氣色ばむだ。氣色ばみ乍も猶彼はおのれの耳を疑つた。

「誓つて嘘僞りはムりませぬ！」

しかし、大三郎は嘘でムりますとは答へなかつた。

突然彼は義憤のために、五體の先までがひきしまつた。

「誰に聞いて參つた。それをしつかと申せ！」

そして彼はいつのまにか日頃の沈着を失ひ乍ら、稍々咎め立てるかのやうに大三郎へ開き直つた。

「申しあげます……申しあげます……實は立聞したのでムりまする……」

「いつぢや！」

「せん頃試合の前のことでムりまする。老先生の御病間先を通りましたら……ふと廣木先生がお這入りなされましたので、聞くともなしに立聞きいたしたまでにムりまする……ばかしではありませぬ。老先生が仰せられますには……後藤はあれで見かけはおとなしやかぢやが、心のうちはずゐ分と情にこわい奴ぢや、そちに跡目を讓ると聞いたらきつとなにか仕出かすに違ひあるまい、實はそれがわしの氣がゝりぢやが……と斯やうなことまでしかと仰せられました」

「たしかに、たしかに左樣申しおつたかッ」

殆んど色を替へ乍ら、言葉さへあららかに半ば口に出しかけたが、しかし彼は全身義憤のために、二の句を繼ぐことが出來なかつた。

若し大三郎の言葉に僞りなくば、事實渡邊の老先生迄がおろかにも自分を貶げすむやうな言辭まで弄したとすれば、流石の彼にも聞き棄てならなかつた。あまつさへ内意まで與へて、萬事ひけをとらぬやうにいたせと言ふやうな言葉ま

で、臆面もなく放言したとすれば、寧ろ彼には老先生にさへはげしい憎みが湧いた。

しかも明らかに自分の力倆を認めてゐ乍ら、只性が合はないと言ふ理由だけで、武藝者にもあるまじい毛嫌ひをしてゐることに思ひ及ぶと、憎みと共に彼はたまらなく口惜しかつた。

と同時にこれ迄押さへに押へてゐた廣木に對する滿腔の不快が、いつときに化粧立ちし乍ら、五體の先きにまでもみなぎり立つた。

粗暴、狷介、陰險、輕薄な廣木としては、いかにも附け入りそうな事柄であつた。大三郎の告口通り、先づ門人たちを手なづけて、卑怯にも自分を相手から斥けやうと言ふ奸策に違ひなかつた。

果してそれが事實ならば、あまりにもあさはかな廣木の態度に、あらたな敵意が急激に湧き上つた。同時に今迄廣木に對して、強いても好意を寄せやうとしてゐたおのれ自身に腹が立つた。あんな未熟者の廣木に對して、僅かな義心と一片の友情から、おのれ自身を僞つてまでも勝を譲つたのかと思ふと、突然彼は齒ぎしり立つたやうな後悔をさへ感じた。

そして烈しくきつと齒を喰ひしばり乍ら、呻き聲さへ立てゝゐたが、やがて突然居住を直すと、

「よしツ。あすにも廣木と立合つてみせやう。こうなればもはや力づく一つぢや。あすにも眞劍で立合つて見せやう」

言ひ乍ら吃然として、滿身に力瘤さへつくつた。

折から安政戊午の年秋に入つて、大老井伊直弼の大獄は、突如天下を震憾せしめた。

直弼は閣老間部詮勝を京師に送ると、時の所司代酒井若狹及び内藤豐後守と謀らしめて、先ず第一に鷹司、近衛、九

條の三公に幽閉の命を下さしめた。

續いて水戸の藩臣鵜飼吉左衛門父子を初め、當時京師にあつて志士の張本人と目されてゐた梅田源次郎、賴三樹、山科川實以下三十有餘人を殆んど一網打盡にくゝしあげた。

同時に江戸に於ても、各藩の浪士、安島帶刀、橋本左内、吉田寅次郎、飯泉喜内、日下部信政、藤森弘庵以下十五人が悉く召し捕はれて同じく獄に投ぜられた。

のみならず、烈公水戸齊昭は再度の永蟄居を命ぜられ、一橋、尾張、越前、土佐までが隠居謹慎を命ぜられた。

その赴くところ果斷峻烈、まさに疾風迅雷の趣きがあつたので、天下百萬の志士たちは誰一人、大老井伊直弼の大獄に戰慄しないものはなかつた。同時にまた直弼に對する憎しみと反感は、渦を卷いていつときに沸き立つた。

とりわけ烈公水戸齊昭の永蟄居を耳に入れた水藩一圓の藩士たちは、續々として相倚り乍ら、日に日に殺氣立つた。血氣に逸る若武者たちは、ころもを捲いて腕を扼し乍ら、共にまなじりを裂いて、直弼に痛罵を浴せかけた。

無論、哲之助たちの道場も、いつのまにかその餘波に捲きこまれないではゐられなかつた。事を好む門弟たちは、寄り寄りこぞつて毎日議論に花を咲かせた。

恰も中秋名月の宵を閲して、毎年の恒例である月見の宴が、道場内の大廣間に催されることになつた。その夜は珍しく老先生までが、病を押して宴につながると言ふ御觸れ出しがあつた。

しかし、大三郎の告げ口によつて、一意憎しみと義憤を増した哲之助は、今宵こそ廣木の面皮をはいでやらうと言ふ怒りのために、おのづと心身がいきり立つた。次第によつたら、事實眞劍勝負に及ぶ考へであつた。

そして彼は、蒼白な面さしにきつと決心の色をつくると、默々としながら設けの席へついた。

このため彼には、初から一座が已に殺氣立つて感じられた。

やがて酒は一座から秩序を奪ひ去つた。門弟たちは早くも隔てを失ひながら、中には調子はずれの聲をあげて、卑猥な俗歌などを唄ふものさへあつた。

が、誰一人折之助に獻酬をする者はなかつた。殆んど誰もが廣木一人を取り巻いて、見えすひた追従輕薄の言を弄するものばかりであつた。

それをぢつと冷やヽかに傍觀し乍ら、彼は今か今かときツかけの突發するのを靜かに待つた。

その時、なんと思つたか老先生がつと脇息から身を起すと、

「折之助、そちは彦根を討たうとは思はぬか？」

突然彼に言葉をかけた。言葉の意味は、言ふまでもなく彼にもよく了解が出來た。病中とは言ひたがら、日頃埋もれたる志士を以つて自ら任じてゐる老先生が、直弼の大獄に悲憤慷慨を發してゐるのは元より知れ切つたこと柄であつた。がしかし、今の折之助には老先生にさへ一種の反意があつた。事の如何にかヽはらず、存意を棄てて素直に應答が出來なかつた。

彼はわざと默殺すると、さしうつむいたまゝ答へなかつた。

ところがそれを横合から端なくも廣木が奪つて、

「いや、後藤は日頃が穩健派ぢやからな。答への出來ないのが當然ぢや」

突然いらざる口をはさんだ。

「なに？いつそれがしが穩健派と申した。……ならば貴公はみんごと討つてみせる所存かッ」

その一言を耳にはさむと、晢之助も即座に氣色ばみ乍ら開き直つた。

「おもとよりのことぢやわ。君恥かしめられれば即ち臣その所に死するぢや。彦根なぞ討たないでどうするツ」

釣り込まれたものか、廣木も同じやうに開き直つた。

が其の時彼は、突如五體に不思議な意氣地が湧き上つたのに氣がついた。廣木がそれを主張した眞意は、只老先生の存意に、盲從したいからであるのは元より明らかであつた。それと知ると、突然彼は反抗意識が先に立つて廣木と反對意見を固執しないではゐられなかつた。

そして彼は、幾分嘲り氣味さへ加へながら、わざと憎々しげに言ひ放つた。

「よく申しおツたな。いかにもおみなぞが口にしさうな意見ぢや。彦根ひとりを討てば尊王とやらの大志がみんごと遂げられると思つてゐるなぞあさはか過ぎて呆れかへるわ」

しかし、それをきゝつけた老先生が今度は默つてゐなかつた。

「晢之助、言葉が過ぎるぞツ。あさはかすぎるとはなにごとぢや。それだけ立派な意見があるなら、明らかに申せツ」

そしていつになく乾然としながら彼の方へ詰め寄つた。

が、晢之助もひるまなかつた。

「仰せまでもムりませぬ。わたくし、あさはかと申しましたは、切りさえすれば討ちさえすれば、それで志士の本分が立つものと心得てゐるやうなやからが氣に喰はないからに他なりませぬ。わたくしとて尊王の志にひけはとらぬつもりでムります。しかし彦根一人を討てば、大老だけないものにすれば、それで志が貫徹するとは考へられませぬ」

同じく乾然とし乍ら言ひ切つた。

ところがそれをまた廣木が横合から奪つて、突然口をはさんだ。

「言ふなツ、言ふなツ、まことしやかな廣言吐いて、その實命がほしからう。貴樣なぞ身分が身分ぢやからな。自分相當の言を吐きおるわ」

そして廣木はおろかにも人身攻撃に近い言さへ吐いた。

「なに？身分が身分ぢや？はつきり申せ！明らかに申せツ。とくと承はらう！」

それを聞くと彼も氣色ばみながら詰め寄つた。「おうはツきり申さいでかツ。貴樣なぞ多顆が郷士ぢやからな。天竺浪人ぢやからな。天竺浪人は天竺浪人らしいことをほざきおるわ。こうみえてもわれら水藩にはお直参ぢや。殿が辱かしめをうけられてゐるのに、默つてみてゐられると思ふかツ。彥根を討つのが、なにがなにがあさはかぢやツ。なまくら武士めがツ。命がほしいのぢやらうツ」

しかし廣木も決して負けてゐなかつた。

「なんぢや！郷士ぢや？天竺浪人ぢや？なまくら武士と言つたな。よしツ。立てツ。出ろツ。なまくら武士が命がほしいか、お直参とやらがまことの腕か、出合へ立合へツ、」

流石の彼も廣木の毒舌には、も早勘辨がならなかつた。そしてつと膝を立て直ほすと、すでに腰のわざものに片手をかけた。

がしかしその時、きてツと言つて、なにものか力强く彼を制するものがあつた。同時に一抹の落莫とした哀愁が忽焉として彼の全身におそひかゝつた。

その哀しみは、郷士と罵つた廣木の言葉にからまつてゐる脈絡とした冷い寂しさであつた。階級ならぬ階級の裏にひ

そんだ動かすべからざる哀愁であつた。そしてまたこんな猾人ばらを對手にしてなんの得があると言ふ反對な假護からまき起こる哀愁であつた。

途端に彼は立て直した膝を、また彈かれるやうにはツと元へ返へした。引き寄せた腰のわざものを、思はず手から投げ棄てた。

と同時にあらたな意氣地が疾忽として、胸中に湧き上つた。廣木がそうなら意地になつても反對な立場を押し切つてやらう、と言ふ考へがまき起きた。飽く迄もこの意地を立て通して、尊王愛國の大同團結を謀策してやらうと言ふ意氣地が振ひ起きた。

そして彼は思はず武者振ひ乍ら、決然として立ち上ると、

「廣木！貴様天竺浪人と罵つたな。郷士はなまくら武士とさげすんだな。今の一言を忘れるなツ」

一言言ひすて乍ら、その場に滿座を尻目にかけた。

空はいつのまに雲を呼んだものか、城下の町はいちめんのおぼろ月夜であつた。あまつさへぽつりぽつりと冷い秋の雨であつた。

並木の柳は闇にかすみ乍ら、ひとり黑々とうなだれてゐた。

彼はきつと齒を喰ひしばり乍ら、雨に打たれたまゝで、靜かに濠ばたに佇んだ。

「先生！後藤先生！」

その時突然彼はうしろからなに者かに聲をかけられた。

ふりむくと、それは内門弟の大三郎であつた。

「なんぢや」
「お供をいたしとうムります」
大三郎の語音のうちには、あきらかに決意の色があつた。
突然彼は、眼がしらのうるむのを知つた。がしかし彼は敢然として斥けた。
「ならぬ！かへれ！」
「いいへかえられませぬ！ぜひともお供いたしとうムります」
彼は再び眼がしらの熱くなるのを知つた。がしかし、決然とし乍ら斥けた。
「そちはまだ行く先の長いからだぢや。ずゐ分と健固に暮らせ」
そして一言言ひすてると、已に彼はすたすたと足を早めた。

江戸の騒ぎは想像以上に大きかつた。
直弼の果断に依つて、曲りなりにも開港の假條約こそは締結されたが、尊王攘夷の諸勢力は、一倍内にこだわりを増した。
各藩の諸侯たちは、表面開港に賛意を表し乍ら、ひそかにおのおの兵を修めた。武術訓練と言ふような理由をつけて、または御府内警備と言ふやうな名目によつて、中にはあまたの浪人を新規に抱へるものさへあつた。
自然江戸の市中も殺氣立たないではゐられなかつた。戦國の古へに還へるのを怖れて、暗夜ひそかに家をたたむもの

さへあつた。その反對に戰禍の來たらんことをおもんばかつて、にはかに武具刀劍商に早變りした何軒かの提灯屋さへあつた。彼等はこぞつて、一閑張の鎧をつくつた。しかもそれが滑稽なことには、いつのまに購はれるともなく、羽が生えて賣りつくされた。

それらの狼狽をひそかにあざ笑ひ乍ら、一端假條約の締結に味をしめた黑船たちは、悠々江戶灣深くまで碇を進めて、傍若無人に至るところを測量しつくした。

尊王攘夷派の面々が、益々怒りを深めたのは當然であつた。

がしかし、直弼の高壓策は、決してそれに依つて手はゆるめられなかつた。親藩たると幕吏たるとに論なく少しでも志士がましい行爲の見えるものは、容赦なく引ッ捕へた。捕へた者には悉くまた酷刑を科した。

哲之助が潜行し乍ら入府したのは、その年神無月下浣であつた。

彼は初め、水藩の浪士大關和七郎を他賴る所存であつた。

和七郎はもと藩に居たころ、お客分として渡邊先生の道場にも屢々出入したことがあつたので、無論、哲之助にも面識があつた。のみならず彼は、和七郎の性行をよく知つてゐた。寡言沈默輕々に事を發しないところが、何んとなく賴母しかつた。寬容さながらのごとき和七郎ならば、無理にも意氣地を汲んで吳れて、共に大同團結の大志に力を併せて吳れそうに感じられた。

つてをたぐつて、先づ彼は和七郎の居宅を探しにかゝつた。間もなく和七郎は、同じ水藩の脫藩浪士である増子、杉山、海後なぞと、小石川の藩邸近くに浪宅を張り乍ら、暫く世にひそんでゐると言ふことを突きとめた。

彼は一意希望のまなこを輝し乍ら、わだと闇夜を選んでひそかに和七郎等の浪宅を訪れた。

が、しかし彼の希望は、最初から無殘にも打砕かれた。

少くも自分の志に、同意位はしてくれさうに想像されたその大關和七郎が、意外にも過激黨の旗頭であつた。

「ほう、哲之助が參つたとは上乘ぢや。早速一味徒黨に加擔せい！」

言ひ乍ら和七郎は、なんの隔意もなさそうに、直弼斬除の計畫をすぐと彼に打ちあけた。

「おことの出府は千人力ぢや。どうぢや加擔せい加擔せい。これぢやこれぢや」

のみならず和七郎はまるで哲之助を信じ切つて、いつになく亢奮しながら、太刀を叩いて首を討つ仕科までもつくつてみせた。

瞬間彼は失望のために、すべての希望がくつがいされたやうにかんじた。と同時に失意を伴つた寂しさが脈絡として全身におそひかゝつた。

みだりには事を發しない大關和七郎までが、これ程に氣色ばむでゐる位だから、寧ろ自分の計畫が誤つてはゐなからうか、と言ふ疑心さへ湧き上つた。

がしかし次の瞬間、廣木に對するはげしい意氣地が、それにも增して強く彼の心におそひかゝつた。若し一徒黨に加擔したなら、無論廣木があざ笑ふに違ひなかつた。餘の者ならばいざ知らずたとへ石に噛ぢりついても、廣木だけには嘲笑をうけたくなかつた。

　意地にもこの志を押し切つて、飽くまで廣木を見返へしてやらないではゐられなかつた。

「折角でムるが、手前不同意でムる！」

そして彼は決然として言ひ切つた。

「なぜぢや、なぜ不同意ぢや！」

「なぜでもムらぬ。手前聊か念頭があるだけのことぢや。おみたちはおみたちの道を進されい……さらばぢや御免！」

言ひ殘すと彼はまた飄然として立ち去つた。

しかし彼の胸中は流石に寂しかつた、希望半ばに蹉跌した寂しさよりも、信頼される味方から裏切られた寂しさに堪りかねた。

彼はいつになく悄然とうなだれ乍ら、あてどもなく市中をさまよひ歩いた。

その間にあつて、大老井伊直弼の高壓策は、一層手嚴しさを増した。何の關係もないもの迄が、只浪士と言ふ名だけによつて、理由なく吟味をうけた

入府はおろか、出府するのも並たいていでは出來なかつた。

自然に彼も身に危險の迫まつてゐるのを豫知しないではゐられなかつた。

その時ふと彼は、京師ならば、と言ふ考へに思ひ當つた。京師ならば――元よりこれと言つて心當りはなかつたが、京師ならばもつと志の寛やかな慧眼の士が幾人も潛んでゐそうに考へられた。

彼はその場に京師へ潛行の大望を立てた。

海道を棄てて、彼はわざと道を中仙道に取つた。行く先も行く先も中仙道はいちめんの雪であつた。

小諸の城下で、彼は無事年を越した。その年改元あつて翌くれば萬延元年であつた。二月下浣彼は漸くにして入洛を遂げた。

その頃禁中にあつて、尊王愛國の旗幟鮮明な者は、關白九條左府尚忠公であつた。先年直弼が大獄の砌りは、不幸にもその餘波を蒙つて、一時閉門の憂き目に遭つたが、間もなく職に復したために、自然九條家へ出入する諸國の志士もその數を增した。

彼は先づつてを求めて、九條家へ出入の計畫を立てた。出入し乍ら、諸國の志士と交を結んで、おもむろに野望の貫徹を目ろんだ。

がしかし、哲之助が入洛してまだ旬日もたゝない間に、突如大老井伊直弼が狙撃されたと言ふ飛報が傳はつた。

一日大老が公用を帶びて、紀州の藩邸に赴いたところ、歸途喰違ひ見付迄差しかゝると、いづれから放たれたか一發彈丸がそのお召籠を打貫いたと言ふ報であつた。武運强くもたまは佩刀の柄に止まつただけで、大老の身には怪我こそなかつたが、しかしその下手人は水藩に緣故ある者と言ふしらせであつた。

水藩と聞いて、突然哲之助は眼の色替へた。怪しくも胸とどろかし乍ら、誰であるかその姓名に先づ耳を傾けた。

が、下手人は廣木松之助ではなかつた。いかにも水藩に緣故はあつたが、後、宇和島藩へ養子に行つた飯田なにがしと言ふことが知れた。

彼はほつと胸なでおろした。自然に微笑がこみあげて來るやうなこゝろもちを覺えた。

しかしその安神も束の間であつた。まもなく大老暗殺の第二の飛報が、隈なく京師の間に喧傳された。しかもその下手人は僅かに有村次左工門一人をのぞいて、悉く水藩の浪士ばかりであると言ふしらせであつた。

再び彼はほつとし乍ら眼色を替へた。木村權之工門、野村彝之助、大胡聿藏、關鐵之助、齋藤監物の次にいつて、大關和七郎の名があつた。黑澤忠三郎、佐野竹之助、廣岡なにがし、森五六郎……十八人目にいつて、明らかに元水藩町

方吏三兩二人目廣木松之介と言ふ名があつた。

「やつたなッ」

瞬間彼は思はづ唸り上つた。

と同時に今までかつて夢にさへ氣のつかなかつた廣木に對するはげしい嫉妬心が、あらたに强く意識された。そして彼は思はず齒ぎしりし乍ら、

「やつたかやつたか！先んじられたか！」

誰にともなく地團太踏んで口走つた。

が、次の瞬間、彼はぼろぼろと涙ぐんだ。と同時にわが世のすべてが、すべての意氣地が、いち時にもぎとられたやうにかんじた。

そして彼は、身も世もゐられない程寂しさに堪りかねた。見えないところへ、聞へないところへ、全然別な世界へ、すべてから遁れて落ち伸びたかつた。

その時彼はふと越後高田の城下近くに、さる身寄りの者が日蓮寺の住持になつてゐることを思ひ出した。

他賴るともなく彼はそれを他賴る氣になつた。

世は亂世と言ひ乍ら、越路の春はたけなはであつた。道行く里は、いちめんに桃の花ざかりであつた。が、しかし、どこにも櫻田事變の噂はあつた。しかも不思議なことにはどれもこれも彼の耳に傳はるものは、十八烈士を褒めたたえた噂ばかりであつた。

聞くたびごとに廣木に對する妬み心は、一倍强さを增した。それだけにまた彼は先んじられた口惜しさに堪りかねた。

城下の噂はまた格別であつた。利害正邪は二の次として、血に燃ゆる若武者たちは、誰も彼も十八烈士の壯圖に向つて惜しみなく嘆賞の聲を放つた。

益々彼は憂鬱にならないではゐられなかつた。世上の聲が大きいだけに、つい彼自身後悔に墮ちて、無理にも意氣地を押し通したことが、今になつて嘲笑されてゐるやうに感じられた。

事實世のなり行は、彼の意氣地を裏切つたかの趣があつた。彦根ひとりを討つたからとて、何んの足しにならうと罵つたその大老がもろくも首級を擧げられてからと言ふもの、時勢は急轉直下に刻一刻と向を替へた。

自らそれを罵つただけに、益々彼は世をせばめないではゐられなかつた。

絕えずなにものかに追はれるやうな慌しさと寂しさに取りまかれ乍ら、彼は滅多に屋外に顏を出さなかつた。

廣木は櫻田の壯擧には加はることは加はつたが、元より初めから筋目立つた見解があつてからのことではなかつた。老先生の手前、哲之助に對する敵意と反感から、かりそめの言を吐いてゐたが、日に日に脫藩者が多くなるに從つて次第次第に直弼斬除の陰謀が熟するに從つて、いつかおのれ自身でさへも不思議な位亢奮にかりり立てられた。

一味の首領金子孫二郎が歸水して、ひそかに同志の糾合を謀つてゐると聞いて、一意若氣の亢奮から無成算にも徒黨のうちに馳せ加はつた。

その日廣木は、關鐵之助の命によつて、鯉淵、蓮田等兩人と共に後詰の後であつた。左翼切込方の先鋒であつた黑澤、有村、山口、增子、杉山たち五人の者が彦根の供脇を切り亂してゐるその際に乘じて、突如後方から大老に肉迫する手筈であつた。

が、いざとなると、いつか彼は血氣に駈られて列を離れ乍ら單獨に切り込んだ。三人までは確かに討ち止めた記憶があつた。

しかし彼は不思議にも關、岡部、増子、海後等と共に、身に一つのかすり疵さへうけず最後まで生命を完うすることが出來た。

芽出度く本望を遂げたとしても遂げなかつたとしても、無事いのちを完うした面々は、最寄りの自身番か諸侯邸へ自訴すると言ふ最初からの誓ひに從つて、彼もその覺悟を持ち乍ら關、岡部等と共に進退を共にしたが、しかしあの亂戰にさへ無事生命を完うしえたことに思ひつくと、あらたに彼はおのれの生命に強い執着が湧いた。まだやつと二十を一つ越した位の若ざかりで、あつたらいのちを無駄にするのが惜しくさへかんじられた。どこかに別な世界がありそうに感じられた。

彼は急に態度をひるがへすと、その場に關、岡部等の同志と袂を分つた。

そして逃げられるだけ、生きられるだけ、落ち伸びやうと言ふあらたな覺悟をつくつた。

彼はさし當つて水戸の鄕里へ逃げ伸びる考へであつた。至るところすでに蜘蛛手のごとく探索の網を張られた密偵の眼をたくみにくゞつて、わざと南總を迂回し乍ら、身を以つて歸水したのは、恰も酷暑のまさかりであつた。

しかし、彼の老父は武士氣質そのもののごとき男であつた。

「そのざまはなんちや。今更らおめおめ歸へられると思ひおるかッ。たわけ者めがッ。立ち去れ立ち去れい。いさぎよく同志と進退を共にせいッ」

さんざん不興の態であつた。

罵られると、一倍いのちに愛着が湧いた。

その場に彼はまた奥羽路へ姿をかくした。しかし、行く先も行く先もいまだに櫻田壯擧の世評は高つた。誰一人十八烈士に悪罵を加へるものはなかつた。世評は押しなべて彼等に讃嘆の聲を送つた。

それを知ると、彼は更にあらたな考を抱かないではゐられなかつた。おのれ自身かりそめな動機であつたことをよく心得てゐるだけに、それにさへおしなべて公平な世評の加へられてゐるのを耳にすると、急に彼はこの世を甘く見ないではゐられなかつた。と同時に生きられるだけ生き伸びておのれ自らその名聲と世評とを、益々現實に享樂したくなつた。

しかし、幕吏の探索は益々急であつた。屢々彼の身邊に危險の手が加へられた。彼は再び踵を返へして、陸奥から佐竹藩へ落ち伸びた。秋田路から更に道を越路に取つた

殆んど身を以て遁れ乍ら、彼が辛じて高田の城下近くへ落ち伸びたのは、翌文久元年霜月すゑのことであつた。が、不幸にも高田は親藩であつた。殆んど一歳に涉つて一廣木を召捕りえなかつた幕吏は、彼が明かに高田藩へ落ち伸びた足跡を突きとめると、功を急いで藩の偵吏に援助を求めた。ために城下の要所要所は、隈なく偵吏等の手によつて固められた。

城下近くに入つて、彼はそれを初めて知つた。しかしうしろには幕吏の追つ手があつた。流石の彼も、今は全く進退が谷まつた。

その時ふと彼は、直行く人から近くのさる日蓮寺に、水藩緣故の者が一人潜んでゐると言ふことを耳に入れた。

水落ときいて、彼はにはかにまなこを輝やかした。戦場を遁れたい一心から、彼は前後もなく寺へ駈け込んだ。

しかし、寺に潜んでゐた者は、後藤哲之助であつた。

哲之助と知つて、瞬間廣木は二の足がすくんだ。が、生きたかつた。生きるまへには恥も意氣地もなにものもなかつた。

「なにも言ふてくれるな、たのむ、たのむ、この場だけでいいから、救つてくれ！」

廣木は殆んどすべてを投げ出し乍ら、哲之助にすがりついた。

哲之助は、まなこをとぢたまゝ暫く答へなかつた。

「……なぜ切り死しなかつたと言ふぢやらう……しかしわしは生き伸びたい！どうあつても遁れたい。昔のよしみぢや水に流してかばつてくれ！たのむ、たのむ」

言ひ乍らも廣木はおどおどと落付なかつた。

その時ふと哲之助はまなこを開いた。そしてしげしげ廣木を見下した。

突然彼は、心にはげしい嘲笑の湧き上つたのを知つた。彼は殆んど聲を放つてあざ笑ひたいやうな心を感じ乍ら、しかしぢつと廣木を冷やヽかに見下したまゝ、一言も答へなかつた。

が次の瞬間、彼はまたはげしい復讐心に燃えあがつた。

「きさま且つて鄕士と罵つたなッ」

と言ふ記憶が疾忽としてよびさまされた。

「鄕士はなまくら武士と言つたな。天竺浪人は命がほしいと罵つたなッ」

と言ふ怒りが疾忽としてよびさまされた。

と同時に彼の五體に全身復讐心に燃えあがつた。

しかしその時、幕吏はすでに内陣のお庭さきまで足を踏み入れた。

それを知ると、廣木は矢庭に目色を替へ乍ら、殆んど武士一人前の態度にもあるまじいうろたへ方で、いきなり近くの納戸の中へ駈け入つた。

やがて幕吏は哲之助の居間を没した。見るとそこには、世の者とも思へぬ面態怪しげな一介の若侍と、人ほどかれたばかりのやうな旅裝束に一個の包みがおかれてあつた。

切を急ぐことのみに氣を苛立てゐた幕吏たちは、それらの容子からおろかにも哲之助に深い疑ひをかけた。

「其方は何藩の者ぢや！」

初めから彼等は疑ひをもつてたゝみかけた。

しかし哲之助は、いまだに去らないはげしい復讐心のために、暫くの間素直に答へることが出來なかつた。

「何藩の者ぢや明らかに申せ！」

彼等は益々疑惑を深め乍ら重ねてたたみかけた。

初めて彼は、おのれに疑ひのかけられてゐるのに氣がついた。

「いや藩名だけは申しあげられぬ。しかし浪士であることは事實でムる」

そして一言きつぱりとはねつけた。が、彼はおのれの放つた語音のうちに、不用意にも水戸訛りの含まれてゐたことに氣がつかなかつた。

「きさま水藩の者ぢやな」

期せずして幕吏たちは氣色ばみ乍ら詰めよつた。

流石の彼もはツと思つた。が、更に偶然なことには、傍に投げ出されてあつた旅裝束の包みから、廣木松之介と彫られた一箇の印形が計らずも幕吏たちの手によつてあばき出された。

「もはや疑ふ餘地はない。きさま廣木松之介に相違なからう！觀念せい！ありていへ白狀せい！」

幕吏たち一樣にきそひかゝり乍ら、一も二もなく疑ひを決定に變へた。

はツとし乍ら、思はず哲之助も納戸の方をふり返つた。

「滅相な人違ひでムる」

そして半ば口にまで出しかけた。

が、その時彼は突如奇怪な感情にとらへられた。復讐と同時にはげしい嫉心が湧き上つた。只復讐をしたいだけなら、無論廣木はふところに入つた窮鳥であつた。

が、彼には廣木に先んじられた口惜しさがあつた。現在廣木がかちえてゐる名譽に對してはげしい嫉心があつた。

今、自分が廣木松之介になつたならば──松之助になることによつて、名譽をかちうると共に、嫉心が癒やされると同時に、廣木に對する復讐心が完全に果されるやうにかんじられた。

そして彼は釋然とし乍ら、

「いかにも手前廣木松之介に相違ムらぬ」

きつぱりと言ひ切つた。

名乘り乍らも、彼はひそかにいびつな滿足を覺えた。

──完──　十三年四月。



花が咲く

徳田秋聲

磯村は朝おきると、荒れた庭をぶら〳〵歩いて、すぐ机の前へ來て坐つた。庭には白木蓮が枝一杯に咲いてゐた。空からの白さで明るく透けてゐるやうに思へた。花の咲く時分になつてから、陽氣が又た後戻りして來て、咲きさうにしてゐた花を暫し躊躇させてゐたが、一兩日の生温い暖かさで、それが一時に咲きそろつた。そしてその下の方に茂つてゐる大株の山吹が、二分どほり透明な黄色い蕾を綻ばせて、何となし晩春らしい氣分をさへ醸してゐた。何かしら、例年の陽氣に見られない、寒さと暑さの混り合つたやうな重苦しい感じがそこに淀んでゐるやうな日であつた。それは全くいつもの春には見られないやうな、妙に拍子ぬけのした氣分であつた。

彼は何だか勝手がちがつたやうな氣がしてゐたが、それは彼の神經の弱々しさも一つの原因であつたが、餘り自然に興味をもちすぎる彼の習慣から來てゐるものだとも思はれた。其のうへ彼は又この二三日、ひどく煩はしいことが、彼の頭に徹被

「きさま水藩の者ぢやな」

　期せずして幕吏たちは氣色ばみ乍ら詰めよつた。

　流石の彼もはッと思つた。が、更に偶然なことには、傍に投げ出されてあつた旅裝束の包みから、廣木松之介と彫られた一箇の印形が計らずも幕吏たちの手によつてあばき出された。

「もはや疑ふ餘地はない。きさま廣木松之介に相違なからう！觀念せい！ありていへ白狀せい！」

　幕吏たち一樣にきそひかゝり乍ら、一も二もなく疑ひを決定に變へた。

　はッとし乍ら、思はず新之助も納戸の方をふり返つた。

「滅相な人違ひで厶る」

　そして半ば口にまで出しかけた。

が、その時彼は突如奇怪な感情にとらへられた。復讐と同時にはげしい嫉心が湧き上つた。只復讐をしたいだけなら、無論廣木はふところに入つた窮鳥であつた。

　が、彼には廣木に先んじられた口惜しさがあつた。現在廣木がかちえてゐる名譽に對してはげしい嫉心があつた。

　今、自分が廣木松之介になつたならば――松之助になることによつて、名譽をかちうると共に、嫉心が癒やされると同時に、廣木に對する復讐心が完全に果されるやうにかんじられた。

　そして彼は釋然とし乍ら、

「いかにも手前廣木松之介に相違厶らぬ」

　きつぱりと言ひ切つた。

　名乘り乍らも、彼はひそかにいびつな滿足を覺えた。

――完――十三年四月。



花が咲く

徳田秋聲

磯村は朝おきると、荒れた庭をぶら〳〵歩いて、すぐ机の前へ來て坐つた。庭には白木蓮が枝一杯に咲いてゐた。空からの白さで明るく透けてゐるやうに思へた。花の咲く時分になつてから、陽氣が又た後戻りして來て、咲きさうにしてゐた花を暫し躊躇させてゐたが、一兩日の生温い暖かさで、それが一時に咲きそろつた。そしてその下の方に茂つてゐる大株の山吹が、二分どほり透明な黄色い蕾を綻ばせて、何となし晩春らしい氣分をさへ醸してゐた。何かしら、例年の陽氣に見られない、寒さと暑さの混り合つたやうな重苦しい感じがそこに淀んでゐるやうな日であつた。それは全くいつもの春には見られないやうな、妙に拍子ぬけのした氣分であつた。

彼は何だか勝手がちがつたやうな氣がしてゐたが、それは彼の神經の弱々しさも一つの原因であつたが、餘り自然に興味をもちすぎる彼の習慣から來てゐるものだとも思はれた。其のうへ彼は又この二三日、ひどく煩はしいことが、彼の頭に蔽被

さつてゐることを不快に思つた。

それは磯村のやうに、家庭に多勢の子供をもつてゐると同時に、社會的にも少しは地位をもつてゐるものに取つては、可也皮肉な出來事であつたからで、氣の小さい、極り惡るがり屋の彼は、何うかして甘くそれを切ぬけようと、頭腦を惱ましてゐた。

「あの女がまた來ましたよ。」

磯村が何か深い心配事があるやうな調子で、さう言つて、妻に脅かされたのは、三日ばかり前の夜のことであつた。

その夜彼は會があつて、歸りが思ひの外遲くなつた。おしやべりをしたり、酒を飲んだりしたので、彼はひどく疲れてゐたが、妻にさう云はれると、又たかと思つて、少しは胸がどきりとなつた。

勿論その女のことは、人に賴んで、間へ入つてもらつて、去年の冬とにかく一段落ついた形になつてゐたが、しかし相手が執念く出れば、彼はいつまでたつても、安心する譯には行かないのであつた。

「また來たつて。」磯村は輕く問ひ返した。彼女の神經が尖つてゐるやうに思へて、それに觸るのが辛かつた。

今となつては、それは單に彼一人の苦勞ではないことは判つてゐた。寧ろ彼女の方が、餘計氣にしてゐるくらゐであつた。磯村に取つては、思ひがけない災難のやうなものであつた。十年ぶりで、その女から手紙を受取つたとき、彼はそれ以來その女が何うして暮らしてゐたかを知りたいだけの興味で、多分いく分か生活が明みへ出てゐるだらうと想像したところから、どこかでちよつと飯でも一緒に食べて話を聞かうと思つたに過ぎなかつたが、それが不運な彼のために用意された陷穽であつた。彼女を一目見たときから、彼はまざ／＼幻滅を感じた。嫌惡の情がむら／＼起つたが、彼女の話はやつぱり聞きたかつた。そして彼は三度まで彼女を訪問した。彼女の話すところでは、最近まで或る工場持の

保護を受けてゐたけれど、財界の恐慌で、その關係は絶たなければならなかつた。で、すつかり行詰つてゐたところで、磯村に呼出しをかけることを思ひついた

「ちよつと貴方のお名前を見たものですから、一度お目にかゝりたいと思つて、手紙を差上げましたの。でも、多分來ては下さるまいと思つてゐましたのに。」彼女は若い時分とは、まるで違つた、べちつくやうな調子で言ふのであつた。

飲食事をしながら、磯村は出來るだけ彼女から、話を引出さうと焦慮つた結果、少しづゝ小出しにそれを引出させることはできたけれど、それは眞の現在の身のうへくらゐのことであつた。

「私はどうしてかう亭主運が惡いんでせう。この子の父親とも暫く一緒に暮したんですけれど……今憶ふと、それが私の一番幸福な時でした。」

彼女はその男の寫眞など出して見せた。それは大禮服を着飾つた軍人であつた。そしてその子供だと云ふ、五つになる愛らしい子が、餉臺の傍にすわつて鰻を突ついてゐた。

強ち彼女も不眞面目ではなさそうに見えた。ビールに醉つてくると、彼女の生活から來た習慣で磯村の膝へもたれかゝるやうにしたりしたけれど、もう三十年を越した彼女としては、前途の不安を感じないではゐられなかつた。

「小遣をおいて行かう。」磯村は言つた。

「いゝですよ。そんな積りぢやないんですわ。私まだお金はありますから。」彼女は言つた。

勿論さうでもないことが、その後磯村にわかつて來たとほり、彼は田舍に緣談があるので、そこへ行くについて、少しばかり金のいることを、三度目に逢つたとき、その相談を受けてそれを贊成した磯村に打明けた。

田舍へ行つたときには、彼女はもう姙娠してゐた。磯村は彼女の大膽さ、といふよりも、恥知らずに呆れたけれど、

何うしようと云ふ氣も起らなかつた。そして其から磯村の酬いが皮肉に彼に絡はつて來たのであつた。

お産の前後、磯村は二三度、自身彼女に金を屆けたり、爲替を組んだりした。それは磯村に取つては可也骨の折れる仕事であつた。そして子供の顔を見た彼女の慾望が、段々大きくなつて行つた。磯村の要求がいつも裏切られた。勿論それは彼女だけの智慧ではなかつた。

磯村は彼女がまたのこ／＼遣つて來たと聞いて、うんざりしてしまつた。やつぱり本當に解決がつかなかつたのだと思つた。

「子供をつれて來ましたよ」と、妻はわざと突つけるやうな調子で言つた。で、何の子供かと思つて、磯村が問ひ返すと、それは大きい方の子だと言ふので、いくらか安心した。勿論少い方の子にしたところで、それが自分の子であるか何うかは、その時の彼女の身のまはりを、一應取調べる必要もあるのであつたが、何だか似てゐるやうにも思へるので、それを自分に見るのは無論不愉快だつたが、連れてまで來られるのは、慄然つとするほど厭であつた。勿論それは多分地震のために、人間の感情が、總て放散的に、密度を稀薄にされてゐるせいもあつたが、一つは一年と云ふ時日が、彼の惱みを緩和してゐた。そんな事のために頭腦を苦しめることの馬鹿々々しいことは、彼にもはつきり判つてゐた。

「隨分づうづしい女ですよ。自家でもぺちやくちやんと、厭がらせを言つて行きましたが、吾妻さんのところでも、隨分色々なことを言つたさうですよ。まるで此の家が自分の家でもあるやうに、……私が好い着物を着てゐたとか、何かゞ殖えてゐるとか。私慾をつけて、吾妻さんとこへ遣つた處ですから。その結果を聞きに、吾妻さんとこへ行つて、今歸つて來たところですよ。」

「金をやつてないのか。」

「え、あの時は怒つて貰はないと言つたとかで、その儘になつてゐるやうですよ。今度はもつと大きく吹きかけてゐるらしんです。彼女は泣き出し相な顔で口惜さうに言つた。

「あんなに又金をほしがる奴はないからね。」

「なか〳〵片づきませんよ。確かに誰かついてゐるんです。」

「どんな身装で來た。」

「え、それでも子供は縮緬なんか着せてね。」

「それだと厄介かも知れないね。困つてゐると遣りいゝが。」

その翌日から磯村は妻の險惡を感じた。磯村以上にもそれが胸の痞になつてゐることは判つてゐながら、彼女の態度を見ると、餘り感じが好くなかつた。で、彼は出來るだけ口を利かないことにしてゐた。

で、今朝も彼は用事を女中たちに足してもらふことにしてゐた。花が咲くのに、また不愉快な日がつゞくのかと思ふと、頭腦が憂欝になつた。

「どこかへ行つてしまはう。」彼はさうも思つた。

勿論仕事の都合さへできれば今年は吉野の花を見に行かうなぞと思つてゐた。それとも健康を恢復するためには、どこか靜かな山の温泉が好いかとも思つてゐた。彼は毎日〳〵こま〳〵した急ぎの仕事に追はれづめであつた。一日としてペンを手にしない日はなかつた。旅行をするためには、仕事の餘裕をつけることが必要であつたけれど、それも當分望めさうもなかつた。彼は體を虐げてゐることを考へるだけでも、恐ろしいやうな氣がしてゐた。

磯村は、展げられた原稿紙に向ひさうにしては、また煙草を手に取りあげてゐた。

「いや、それよりも芳太郎の試驗は何うなつたらう。」磯村はいつか又その方へ氣を取られはじめてゐた。

大概大丈夫らしかつた。出來ばえを調べて見たところでは、これならば先づ安心だと思はれた。しかし結果はまだ判らなかつた。

「若し今度駄目だとしたら。」

磯村は自分の失望よりも、子供の惱みを考へないではゐられなかつた。芳太郎は咽喉の病氣のために、二年間試驗を受けることができなかつた。一度は地方で、一度は東京で……。地方では、彼は感冒にかゝつて、當日の朝から發熱したが、押して俥で出て行つた。その午後から熱く四十度に昇つた。そして試驗はそれきりであつた。去年は東京でＫ大學だけ受けることになつてゐたが、前日の夜おそくから、扁桃腺の腫れ出したのに氣づいて、手當をしたけれど、矢張り駄目だつた。彼は母と友人に送られて、頭に氷嚢をつけて入場したのであつたが、第一の課目を終へて出て來たときには、顏が眞蒼になつてゐた。そして近所の醫者の手當を受けて、自働車で歸つて來た。扁桃腺は化濃しはじめてゐた。口に〳〵それが咽喉一杯に腫れ來がつて行つた。聲を出すのが困難であつた。呑んだ牛乳が鼻腔からだら〳〵流れ出した。入院して手術を受けたところで、漸とその苦しみから脫れることが出來た。

學校へ通ふことなしに、二年の月日をぶら〳〵してゐることは、文學や音樂に相當な目の開きかゝつた芳太郎に取つては、危險が伴はずにはゐられなかつた。性氣のついた彼に取つては、試驗勉强ほど氣分を憂鬱にするものはなかつた。現代の試驗その物、敎育その物に幾分、疑ひを抱かずにはゐられなかつた。そして其の間それを傍觀してゐる磯村の堪へ忍ばねばならなかつた苦痛は、むしろそれ以上であつた。何事にも不檢束な彼にも、監視と嚴達の餘儀ないことが、痛

惑された。彼は時々芳太郎の氣分を、數學や英語の方へ牽きつけようと力めた。その結果、彼は時々思いのほか苛辣な言葉を口へ出さなければならなかつた。

磯村はそれらの雜然から脫れようとして、強ひて机に坐り返して、原稿紙のうへの埃を輕く吹きながら、漸とのことでペンを動かしはじめた。

すると暫くしてから、格子戸の開く音が彼の耳へ入つた。磯村は原稿の催促か、來客かと思つて、ちよつと安易を失つた氣持で、ペンを止めてゐた。そこへ緣側の方へ芳太郎の影がさした。彼は手に電報をもつてゐたが、入つてくるのを躊躇してゐた。

「どこから。」妻の聲がした。

「これあ秀ちやんだ。」芳太郎の聲がした。

秀ちやんの親である、磯村の姉夫婦が、四月になつたら上京する筈であつた。やつぱり東京にゐる秀ちやんの弟が、一週間ばかり前に、そんな話をして行つた。磯村はてつきり其だと思つたが、妻の感じたところも、同じであるらしく思へた。

「時間がわかつたんでせう。」妻は言つてゐた。

「いや」芳太郎は答へてゐたが、少しまごついたやうに、それを磯村に見せに來た。

「オイワイしますつて何だい。お前に當てたんぢやないか。局はミタだぜ。」

芳太郎は泡をくつたやうに、ちよつとどきまぎしながら茶の室へ行つてしまつた。

「何だ、もう判つてゐるぢやないか。それでも知らしてくれたのは感心だ。」

秀ちやんは脊が高くなつてゐて、もう二年も姿を見せなかつたのであつた。

「多分本統だらうと思ふが、行つて見て來たら何うだ。」

「まさか嘘ぢやないでせう。この頃どこかあちらの方へ勤めてゐるさうですから、確かに見たんでせう。」妻もさう言つて襖をあけて、入つて來た。

「さうだらうとは思ふがね。無論さうだらう。」

「まあ可かつた。」

「これで己もいくらか吻とした」磯村も言つた。

「今度駄目だつたら、もう御父さんには心配かけない、自分で何うかすると言つてゐましたけれど。」

「おれも學校なんか止めさせて、皆なで何か商賣でもして、一緒に働かうかと思つた。」

暫らくすると、磯村はまたペンを動かしはじめた。そしてそれを了させてしまふと、漸と解放されたやうな氣持で、庭へ飛び出した。そして輕い氣持で、昨日から運びこんだまゝになつてゐる植木を植えるために、鍬とシャベルを物置から引張りだして來た。木でも植えたら、廢んだ庭が、少しは生氣づくだらうと思はれた。

それが濟んでから、輕い疲れを樂しみながら、縁側でパンを食べながら、牛乳を呑んでゐると、そこへ吾妻夫婦が訪ねて來た。

「また逢つて來たさうですが……。」磯村は不安さうに訊いた。

「いや、實は今日その、私んとこへ來ることになつてゐましてね。」吾妻はさう言つて、袂から半紙に何か書きつけたものを出して、突きつけながら、

「それでまあから云ふことにしておきました。」

磯村はそれを受取つて目を通した。金の受取と、そして今後何事があつても何等の迷惑を持込まないことと、子供が磯村に關係ないこととが、定法どほりに女の手によつて認められてあつた。

「そのくらゐにしておけば、たとひ何んな事があつても大丈夫です。」

「いや、どうも。」磯村はちよつとお辭儀をした。

「よく聞くと、あの大きい子供のお父さんの、海軍大佐のところへ、金を無心に行くらしいんです。その仕度や旅費や何かでね。どうも方々築をかけておくですからな。大佐も毎月養育料を取られてゐるうへに、時々大きく持込むらしいんで、他所事ながら、お察ししますよ。」吾妻はさう言つて笑つた。

「だが、そんなに質のわるい女でもありませんね。家内が色々に言つて聞かしたら、すつかり共の氣になつたらしいんです。子供も手放すらしいです。」

「子供を實際もつてゐるんですか。」磯村はきいた。

「もつてゐますとも。連れて來たのがさうですもの。」吾妻は答へた。

磯村の妻は「さうでしたか」と言つて悅けてゐたが、實を告げなかつた彼女の氣持は磯村にはわかつてゐた。

「それも奥さんの氣持が素直だからですよ。あの女をそこまで宥めていくのは、大抵ぢやありませんね。」磯村はさう言つて、夫人に感謝した。

「全くですわ。どうせ貴女にしれたからは、私も公然に子供をつれて、是からちよく〳〵伺ひますなんて、私も腹が立ちました。」

「えゝさうですわ、自分の子供を、お宅の坊ちやんや何かと同じやうにね。」夫人も言つた。

「解らないんですよ。格別悪いと言ふ女ぢやないんだ。それだけ始末がわるい。」磯村も批判者の地位に立てたことを、愉快に感じた

「お蔭で私も安心しましたわ。」

やがて四人は、卓の側へ集つて紅茶など飲んだ。そこに先刻の電報が、吾妻の目にもついた。長閑な天氣であつた。

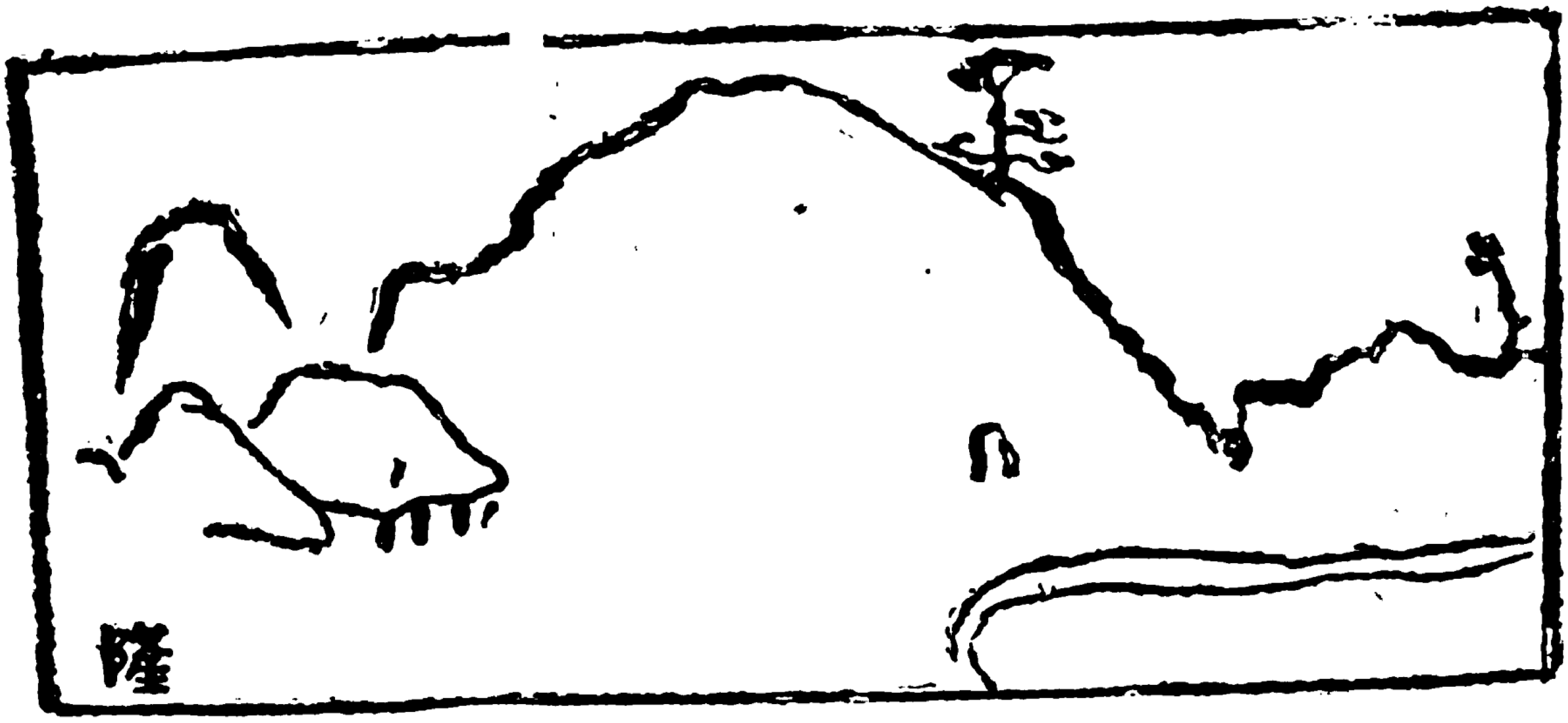
「坊ちやん好かつたんですが。」

「えゝ、お蔭さまで。」

「櫻が咲きますな。一つお花見にでも出かけやうぢやありませんか。」吾妻が出しぬけに言つた。

「え、好いですね。」磯村の妻も早速賛成した。

けれどもまだ何處かに安心し切れない何かゞ、彼女に殘つてゐた。磯村にはそれが何であるかゞ、よく解つてゐた。それを彼女の利己心だとばかりも思へなかつた。彼はこの出來事を、思ひのほか重大視してゐる彼女の心を、今までにも屢々經驗する機會をもつてゐた。それは寧ろ曾て見たこともなかつたやうな、彼女の可憐しさだとしか思へなかつた。



妻の親

瀧井孝作

夜の十一時頃に、新宿驛乘換で私は歩廊の上に居つた。同じ乘換の鷲見に例の時間故逢ふゾと思うた。電氣のあかりの屆く前の方に案の如く友の面は認められた。私が近づくと鷲見は勞れた無表情な眸であつた。この友の許に私は今晩で三泊になる。電車に乘つて漸く鷲見は

「帝劇の切符はあつたヨ」と、用向の備つた由をつげた。私は一日の晩のクライスラーを聽いて、直ぐ夜行で京都へ起つ筈だつた。

「うん、有難う」

私は默頭いて、運轉手のうしろに佇む友に向いて、次で云つた。

「もつと中へはいらう」

「チキ降りる」

高田の馬場驛で電車の留つた傍の改札口から、鷲見は第一番に出た。私はこの道作をやゝ眺めたが、直ぐ其後に續くのであつた。

道の上で私は

「何だかクサイな」と、氣付いて云ふた。
「毎晩いま時分に、鳥居で拐つた羽根を灸くんだ」鷲見は香を左う云つた。
圓い月の霞むだ屋根の間の薄明い空に、私の目は注いだ。
「落合の焼場はこの附近だらウ。風の工合が死人のタサミを吹き下ろすのだョ」
私は主張した。その香であつた。鷲見はやがて
「うちの者に言はないでお呉れ」
左う斷つて稍默つた。で、私は並むで歩きながら、沈んだ友には毒を以て制する程の常談を向けるのであつた
「このあたりの住居の者は、毎晩死人の煙を吸うてゐるんだョ」
目標の高い松の木の梢が朧の空に抽んでゝ居る。稲荷の祠の横手にある宅の表に戻りついた。内の細君の
「さ坊や。お歸りだョ」と云ふのが洩て出た。
出迎へた、玄關口の細君は私に向いて云つた。
「ご一緒でしたの」
「新宿から」
子供は未だ起きて待つて居た。鷲見は茶の間で細君に瓶入の香油、化粧水の派出な色の品を渡した。貰物で彼の通うてゐる場所の花やかさが梢頭に浮んだ。――鷲見は××キネマの社員で京橋のX館の事務の方へ毎日通うてゐるが、水商賣故今よりももつと手堅い職業と云うて、鷲見は仕事に不安を抱いて居る。――鷲見は遲く戻つて晩飯たべる習慣で直ぐ、用意してある茶湯臺の前に坐つた。細君は私の方へまた尋ねた。

「竹内さんはあがります」
「イヤ、今晩は送別會の澤山の御馳走で、戻りには腹こなしに田端からお茶の水まで歩いたわけなんです」
細君は笑つた。鷲見は
「送別會は大勢だつた」ときいた。
「皆で十三人」
私は左うして速達などで知らせた慌しい催しの割合には揃つたと云ひ足した。
細君は良人の食事の給仕しながら、子供は膝の上に乘せて居た。一年と四ケ月の女の子の顔が父の模型かのやうだ。
私は其方に向いて
「毎晩阿父さんの戻る迄起きておる、子供は夜深して體が弱くならない」と云つた。
「その积り、朝寢をして吳れますから。ねエ坊や」
左う細君は答へたが、共暮しの寂しい事には心付ずか、予盾なしに云つた。結婚して二年程の二十二で、漸世帶染た所も却々良いが、——茶の間の隣の間に寢てゐる細君の父親と弟御とを早朝勤に出して遣る事などで用が多い。細君はかゝり人のある重荷から只立働いて居る。——
私はまた、腹に第二番目が出來てゐる細君の重荷を追求するやうに、眸は注いだ。暫時默つた。
「矢張りあすの晩起つの」
「うん」
鷲見の方に向き、私は返事して續けて云つた。

「今晩俳句は書かう」

鷲見は左様な半切の字など書かせて、細君や父親などに友の才能を吹聽したがる。（私はその才能があるか何うか疑問だが）私はそんな事を腹で思つた。

「お前はさきに寢なさい」

鷲見は細君に云つた。私の逗留中この四疊半に休む、かの女は點頭いた。

八疊間に移り、私は墨すりながら、寢床の頭元の疊に毛布を擴げ用意する鷲見の方へ

「畫箋紙は厚い短册か何かで切ればよい。四半切の紙も造つてくれ」と云つた。

鷲見は何か祝ひ事の贈物にするんだから其向の句と先日から云ふのだつたが、私はべつに目出度い句はないので唯近作を出す。指圖通りに切れた紙に向ひ、久々で筆をもつのであつた。が、字には自信がないので手習する程の心持で唯かく。

鷲見は口は結んで、出來る傍から一枚宛、濡れてゐる紙をピンで長押へ留て下げた。

疊の毛布の上に私は身を曲げて、運筆は頭腦でかう云ふ字かきたい計劃しては駄目で體でブッカル程の心根がいる、そんな理屈が稍吞込めて來た。疲勞と墨汁の斷れたのでやめた。

長押にかけてある字を私は一順見廻して、また近寄りしな平氣で引却してもみ捨てた。鷲見の顔にも未練はなかつた。

牡丹餅の故郷の唄をくちづさむ

蜂の巣は書齋の軒に殘されぬ

水の上星のなかにてもつよい星、

「星の句、一番初めに書いた字、中で一番純なやうだな」

私は左う云つた。鷺見は頷いた。

「何も恰度向きだから、表裝させて之を貼らう」

墨の香が鼻にきつい故、椽側に出て雨戸一枚開けた。円い月は仰げない夜半の庭面は薄明るかつた。

「もう寝よう」

「うん」

鷺見に呼ばれて、私は戸閉して入つた。

寝床へ横はり、私は鷺見の方へ向いて話しかけた。

「あすはお昼前に田端の方へ廻り、こゝへは戻らずに起つ筈だ。君は京橋へ出るついでに、僕の籠を東京驛まで持つてゆき、一時預けにして呉れないかネ」

「さうを。バスケツトは提げてゆくのはいやだ」

鷺見は斷つた。が、私は押返して

「僕の處に葉書が二枚あるから、上げるがネ」と云つた。鷺見はその蒐集家故。

「籠はイヤだ。繪は何うしたの」

「この間箪笥の底から松子（亡くなつた女房）の革の財布をとり出した、その中にあつたンだ」

私は左うして、床の間の財布から出した折疊んだ物二枚、向うへやつた。鷺見はみて

「物はつまらンが、雨晴と八ツ見と云うて珍重される圖柄だ」と、そんな事告げながら直ぐ戻した。あちら向に寝返り

して續けた、

「籠は高田の馬場から手荷物で出せば宜い。それに僕は東京驛へ見送りにゆかないョ。早う戻りたいから」——私は、誰は型づけるのが億劫で、敷布團の下側につゝ込んだ。鷲見の頭固は淋しいからだ。籠の方は何うするか定らず、私は聽て眠つた。

あさ目醒ると玄關の襖の方で、お袋の來てゐる、話聲があつた。松子の母親は今日夜汽車で一緒に起つので、暇乞かたぐ＼たづねたのだ。

鷲見は未だ眠つて、床には子供が入つて居つた。私は、漸睡氣の去る頭で、長押に留てある昨夜の字など目廻して居た。暫くして茶の間の襖の方へ起つた。

細君の父親は勤に出てゐる時間で、顏合せる要はなかつた。友の細君は玄關の間で「お目醒。阿母さんがおいでになつて居ります」と、私の方へ云うた。

淡い日向の井戸の側で私は悠くり顏拭いた。内に入ると、鷲見の細君は代つて臺所に出た。

私に向いた、お袋の顏は入齒が出來上つて居た。

「やつと一昨日はめ込んだのですョ」と、白い齒は揃つてゐた。稍下豐で喰まで顏面筋肉が動く。お袋はそして治療の値段の事など直ぐ話した。

私は對座して、目馴れぬ顏面は氣になつた。お袋の義齒まで造つて田舍へ歸つてゆく心根を更に思うたが、口は結んで居た。

お袋は次で

「之が出來たのですョ」と、膝の前に引寄せた松子の寫眞のうわ紙をはいだ。左うして一緒に私の方に向いた。

四ツ切程に引伸した半身で、顏は描き直した跡がある。松子の目もとは艶つぽい。私は鷲見達にまで見せようと思つたが、亡妻の之は何時も揭げてはおけないと思へた。お袋は此の一枚をたづさへて一人田舍に戻るのだ。

私は寫眞は下に措いて

「今夜は十時の汽車で起ちませう。僕は帝劇の外國人の提琴を聽いてすぐ東京驛へ廻ります」

左う云うて、用事は凡すんだ故、時間の打合せだけで宜かつた。

お袋は、起出た鷲見の方へ向いて暇乞の詞でお時儀した。

鷲見は向合うて義歯の成つた面に稍注目した。四ツ切程の寫眞も手に持上げた。が自分の子供の騷ぐ方へすぐ惹かれるのであつた。

座敷の方から出て來た子供は寢卷の儘で、足にムツキがあつたが、人見知りはなかつた。

お袋は笑顏で、子供に何か云ひ乍ら、寫眞など型づけて腰は浮かした。

「では、ごきげん宜しう」

鷲見は工合わるそうに顏あげた。細君は臺所から出て坐り、稍引留て

「まあ」と云つた。

私は佇んで、土間に降りたお袋に云うた。

「三等待合室にゐてお呉れ」

お袋は頷いた。そして鷲見の子供に向き別れの詞を云うた。さらに格子の外では目禮して、立隔たるのであつた。

直ぐ細君は子供と共に、見送りする爲外へついて往つた。

玄關に佇んで居つた、私と鷲見とは間もなく頭は他に移り、かう云つた。

「飯にしよう」

「うん。而して一緒に出よう」

細君は何處まで往つたのかしらん。左うして二人は簡單に朝飯すました。それから出かけるなりにして居た。

「諾かんので通りの方まで出たの、ねェ坊や」と細君は昇つて來た。

玄關の間に居た私は

「おやあ、ゆきますよョ」そんな鹽梅に告げた。

「もうお寄りになりませんの」

「また夏、やつてくるつもりです」

細君は稍默つて目守つた。鷲見は

「籠は、高田の馬場まで持つてゆかう」と云うて手かけた。

私は土間の隅の杖傘を把り佇んでも一度、友の細君と子供の方に向いた。

「阿父さんに、宜敷」

細君に只お時儀した。私は背向いて、前に出た鷲見の跡に從ふのだつた。

私は逗留先の型づいた、少しかるい頭であつた。一つの荷の下りた心持であつた。鷲見は默つて足ばやであつた。

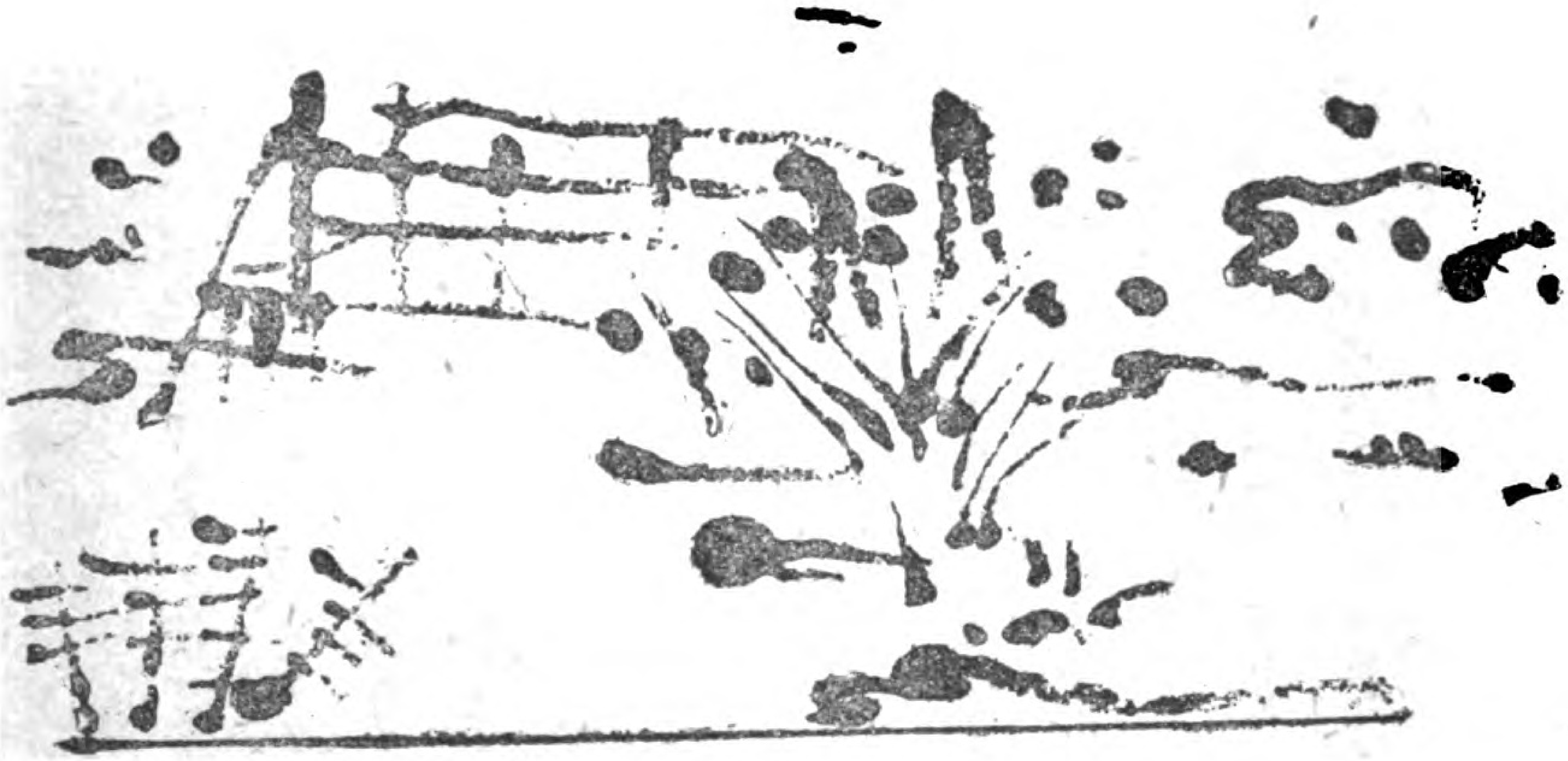
驛で、籠は札つけて預けた。茲で別れる私と鷲見とは肩並べて電車の方角をながめた。

「この間はなした大阪の叔父の方、賴むョ」鷲見は別れ際に左う云うた。

私は點頭いた。而してひとり、あとから來た電車の中に入つた。

…………鷲見は、妻の親御を世話して居るが、實際重荷なのだ。彼は、其親人とはなれよう爲、大阪の叔父の方へ行つて、就職したいと云ふ。異ふ土地へ其親達までついてゆきはしないだらう故。——私は亡妻のお袋と今度別れる事にした。私の仕打で、鷲見の腹は亦極つたのかしらん。

私はそれから不圖苦笑ひした。昨夜寢床の下側につゝ込んだ給はそのなり故、あとで座敷の掃除する細君の有樣が思はれた。(十三年十一月)



夫婦（戯曲）

菊池寛

人物。

おしん。

その夫。重吉。

その子。おまち。

旅の若き男女。

手代風の男。

その他。

時。

明治十五六年頃。

所。

中仙道の宿に近き峠。

細君は何處まで往つたのかしらん。左うして二人は簡單に朝飯すました。それから出かけるなりにして居た。

「誘かんので通りの方まで出たの、ねェ坊や」と細君は昇つて來た。

玄關の間に居た私は

「ぢやあ、ゆきますよヨ」そんな鹽梅に告げた。

「もうお寄りになりませんの」

「また夏、やつてくるつもりです」

細君は稍默つて目守つた。鷲見は

「鞄は、高田の馬場まで持つてゆかう」と云うて手かけた。

私は土間の隅の杖傘を把り佇んでも一度、友の細君と子供の方に向いた。

「阿父さんに、宜敷」

細君に只お時儀した。私は背向いて、前に出た鷲見の跡に從ふのだつた。

私は逗留先の型づいた、少しかるい頭であつた。一つの荷の下りた心持であつた。鷲見は默つて足ばやであつた。

驛で、鞄は札つけて預けた。茲で別れる私と鷲見とは肩並べて電車の方角をながめた。

「この間はなした大阪の叔父の方、頼むヨ」鷲見は別れ際に左う云うた。

私は點頭いた。而してひとり、あとから來た電車の中に入つた。

……………鷲見は、妻の親御を世話して居るが、實際重荷なのだ。彼は、其親人とはなれよう爲、大阪の叔父の方へ行つて、就職したいと云ふ。異ふ土地へ其親達までついてゆきはしないだらう故。——私は亡妻のお袋と今度別れる事にした。私の仕打で、鷲見の腹は亦極つたのかしらん。

私はそれから不圖獨笑ひした。昨夜寢床の下側につゝ込んだ袷はそのなり故、あとで座敷の掃除する細君の有様が思はれた。（十三年十一月）



夫婦（戯曲）

菊池寛

人物。

おしん。
その夫。重吉。
その子。おまち。
旅の若き男女。
手代風の男。
その他。

時。

明治十五六年頃。

所。

中仙道の宿に近き峠。

峠の頂上に在る茶店。四月の終なれど、山國なれば正に春酣なり。雪をいたゞける連山が見える。茶店の軒には、桃が咲いてゐる。時々春らしい鳥の聲が、きこえる。茶店には、駄菓子と、ゆで玉子とわらじ、など置いてある。幕開く、おしん店先で絲車を引いてゐる。うらゝかな朝日が當つてゐる。重吉、田舍の遊び人らしい風をして、ぶらりと歸つて來る。おしん、見て見ぬ風をする。重吉家の中へは入る。おしん不安さうにその方を見る。百姓空の大八車を曳いて上つて來る。

百姓。お早う。

おしん。お早う。もう行つて來なさつたのか。

百姓。おゝ、今朝は六つに起きた。

おしん。宿の景氣は、何うぢや。

百姓。相不變、駄目ぢやのう。本陣の龜屋さんも、おつつけ店をたゝんで、東京へ出なさるちうぞ。

おしん。龜屋さんが……おほ……あんな大きい屋臺骨でも、辛抱が出來んのか。

百姓。何しろ、この冬の間宿り客が、月五六人しかないんぢや。もつとも、德川樣の時だつて、冬の間は道中が少かつたがそれでも一晩に、四十人や五十人は、この宿に宿つたものぢや。前田樣が、お宿りになつた時などは、五つある協本陣まで、一杯になつて、お人足などは、商人の家にまで宿まつたものぢやが。

おしん。妾の店なんか、お客がいくらあつたつて、知れたものだが、それでも月々に賣上が減るばかりぢや、何か今の中に商買換でもしないと、妾達は、顎の下が干上つてしまふ。

百姓。（親指を示し）居るのかい。

おしん。（うなづく）……。

百姓。この頃、御城下の町には、人力と云ふものが出來とるな。かう、宿がさびれると、俺の商買も上つたりぢやから、いつそ御城下の町か、それとも東京へでも出て人力でも曳いてやらうかと思つてる。

おしん。それでも、お前さんなどは、働く氣があるから、おかみさんは仕合せぢや。

百姓。こんな時世になると、ウカ〳〵しては居れんわ。昔のやうに呑氣にしてゐると、餓える外はないわ。

おしん。家の人なんか、そんなことは夢中でばくちばかり打つてゐるんだから。

百姓（その話題を避けるやうに）此間、異人が二人、絹屋さんへ來て宿まつたと云ふが、峠を通らなかつたか。

おしん。通つたよ。縣廳の役人が案内してのう。鼻の高い、恐ろしい顏をしてゐたが、それでも氣は、やさしいと見え、家のおまちに、異人さんが喰べる眞黒なお菓子を呉れたよ。

百姓。ほゝうおまちどんは、可愛くなつたどらう。

おしん。子供が、大きくなると、だん〳〵先が案じられるわ。

百姓。まあ、さう愚痴を云ふな。重吉どんも、いつまでもばくちばかりは打つて居らんわ。今に、何ぞえゝ事があるだらう。……さあ行かう。さよなら。えらいお邪魔しました。

（百姓車を曳きながら去る。重吉、奥から出て來る。風呂敷包みを持つてゐる。おしん見とがめる。）

おしん。もし！　お前何持つて行くだ。

（重吉、默つて出て行かうとする。）

峠の頂上に在る茶店。四月の終なれど、山國なれば正に春酣なり。雪をいたゞける連山が見える。茶店の軒には、桃が咲いてゐる。時々春らしい鳥の聲が、きこえる。茶店には、駄菓子と、ゆで玉子とわらじ、など置いてある。幕開く、おしん店先で絲車を引いてゐる。うらゝかな朝日が當つてゐる。重吉、田舍の遊び人らしい風をして、ぶらりと歸つて來る。おしん、見て見ぬ風をする。重吉家の中へは入る。おしん不安さうにその方を見る。百姓空の大八車を曳いて上つて來る。

百姓。お早う。

おしん。お早う。もう行つて來なさつたのか。

百姓。おゝ、今朝は六つに起きた。

おしん。宿の景氣は、何うぢや。

百姓。相不變、駄目ぢやのう。本陣の飯屋さんも、おつつけ店をたゝんで、東京へ出なさるちうぞ。

おしん。飯屋さんが……おほ……あんな大きい屋臺骨でも、辛抱が出來んのか。

百姓。何しろ、この冬の間宿り客が、月五六人しかないんぢや。もつとも、徳川様の時だつて、冬の間は道中が少かつたがそれでも一晩に、四十人や五十人は、この宿に宿つたものぢや。前田様が、お宿りになつた時などは、五つある脇本陣まで、一杯になつて、お人足などは、商人の家にまで宿まつたものぢやが。

おしん。妾の店なんか、お客がいくらあつたつて、知れたものだが、それでも月々に賣上が減るばかりぢや、何か今の中に商賣換でもしないと、妾達は、顎の下が干上つてしまふ。

百姓。(親指を示し)居るのかい。
おしん。(うなづく)……。
百姓。この頃、御城下の町には、人力と云ふものが出來とるな。かう、宿がさびれると、俺の商賈も上つたりぢやから、いつそ御城下の町か、それとも東京へでも出て人力でも曳いてやらうかと思つてる。
おしん。それでも、お前さんなどは、働く氣があるから、おかみさんは仕合せぢや。
百姓。こんな時世になると、ウカ〳〵しては居れんわ。昔のやうに呑氣にしてゐると、餓える外はないわ。
おしん。家の人なんか、そんなことは夢中でばくちばかり打つてゐるんだから。
百姓(その話題を避けるやうに)此間、異人が二人、龜屋さんへ來て宿まつたと云ふが、峠を通らなかつたか。
おしん。通つたよ。縣廳の役人が案内してのう。鼻の高い、恐ろしい顏をしてゐたが、それでも氣は、やさしいと見え、家のおまちに、異人さんが喰べる眞黒なお菓子を呉れたよ。
百姓。ほゝうおまちどんは、可愛くなつたどらう。
おしん。子供が、大きくなると、だん〳〵先が案じられるわ。
百姓。まあ、さう愚痴を云ふな。重吉どんも、いつまでもばくちばかりは打つて居らんわ。今に、何ぞえゝ事があるだらう。……さあ行かう。さよなら、えらいお邪魔しました。
(百姓車を曳きながら去る。重吉、奥から出て來る。風呂敷包みを持つてゐる。おしん見とがめる。)
おしん。もし！　お前何持つて行くだ。
(重吉、默つて出て行かうとする。)

おしん。何持つて行くだ。（おしん、重吉の手から包みをひつたくる。包みとける。中から、おしんの衣類と子供の着物とが出る。）
重吉。何しやがる！
おしん。お前こそ、何するだ！　俺とおまちとの一張羅持つて行つて何するだ。
重吉。うるさい、默つとれ！
おしん。なに、默つとるだ。手前の着物、剝がれて、なに默つとらう。この人でなし！
重吉。何をうるさい！
（おしんを突き倒し着物を取り上げようとする。おしん、着物にしがみ着いて離さない。）
おしん。わしが、身の皮を剝ぐ思ひして、おまちに買ふてやつた着物だもの、死んだとて持たしてやるものか。
重吉。何をうるさい！（おしんの上に、のしかゝる）
おしん。えゝ、この極道の人でなし。ばくち打つて。勝つと、女郎買ふて、金を無くして、女房や子供の物を剝ぎ取る。渡すものか、渡すものか。
重吉。えゝ何をしやがる。この不貞腐れめ！
（重吉、おしんの手から、着物を奪ひ取る。着物一個所破れる。）
おしん。えゝ畜生！
（武者振りついて來る。重吉、蹴倒す。
重吉。さま見ろ！

おしん。口惜しい！　畜生！　おまちの……おまちの…

重吉。何を云ひやがる……おまちの着物も、くそもあるものか。俺が、一山當てたら、こんな着物何枚も買つてやる。

おしん。え丶、何を……その着物を、わしがどなに思ふてこさへたか…………

重吉。何を、くよくよ云ひやがるんだ……

（重吉、着物を持ちながら、悠々と去る。）

おしん。あゝ口惜しい！（起き上らうとして）あゝ痛い！

おしん。畜生！人でなし、極道！ほんとうに、あんな奴！

（おしん、漸く身體を起し、店先にぼんやり腰かけたまゝ、涙をぬぐつてゐる。麓から、旅の若い男女上つて來る。二人とも馳落者らしくそはそはしてゐる。）

おしん。どうぞ、お休みなさいませ。一休みして、いらつしやいませ。まだ、ずつと上りが續きます。

（男女、もじもじしてゐたが、思ひ切つて床几に腰をかける。おしん、お茶を汲んで出す）

おしん。昨夕は、どちらでお宿りになりました。

男。追分です。

おしん。おゝ追分で……越後の方から、おいでになりましたか。

男。さうです、越後の方です。

おしん。やつぱり、東京へ。

男。さう思つて來たのですが、別に目當と云ふのは、ないのです。

おしん。お連合は、奥さんでございますか。

(男女、恥しさうにする。)

男。と云つたやうなものですが、實は早く云つて見れば、お互夫婦になりたいのを親達が、許さないものですから、かうして馳落して來たのです。

おしん。まあ!

男。驚いたでせう。

おしん。いゝえ、お羨しうござんす。さうして、お若い方が、手を取り合ふて、都をさして、旅をする。それが、本當に一生の花でございますわ。

男。そんなに云つて下さるのは、おかみさん一人ですよ。何處でも、いたづら者か何かのやうに、變な目付で、見れましたよ。だが、もう三分二までは、來ました。もう一息です、これも(女を指す)だん〲歩行になれて來ました。

おしん。(女に)貴女は、初旅でございませう。

女。はい、初の旅で夢のやうに、引き廻はされてゐるのでございます。

おしん。でも、お二人連なら、どんなに心丈夫か、分りません。わたしも、これはと思ふ男に連れられて、東京へでも行つて見たうございます

男。いや、外目にはそんなに羨しく見えるかも知れませんが、玆まで來るのが、大抵ぢやありませんでした。信濃境までは、追手がかゝるかと思つてビク〲してゐました。かうして、拜見したところ、おかみさんなどは、御亭主と

お二人で、山の中で、のんきに暮してゐられるのを見ると本當に、羨しう思ひます。どの家を見ても、どの家を見ても、夫婦揃つて、仲よく暮されてゐるのを見ると、羨しくなります。私達も、早くあゝして落着いて暮せるやうになりたいと、そればかりを祈つて居りませ
おしん。まあ、さうですかね。妾の暮しまでが、羨しく見えますかね。見て極樂、住んで地獄とは、妾のことでございませう、ホンに人様に知れない……（口をつぐむ）
男。えゝ。さうですかね……。
おしん。本當に玆から、幾度逃げようかと……おほゝ初て、お目にかゝつて愚痴はよしませうおほゝゝゝ。
男。ほゝゝ、此方もつひ旅の空の人なつかしさに、入らぬ内證事をきかせて、すみませんでした。さあ、ボツ〳〵行かうかな。……あゝさう〳〵お願ひして置くことがあつた。もう追手は、かゝるまいとは思ひますが、もし人が來て、私達のことを何か訊いても、知らぬと云つて下さいませ。
おしん。承知しましたとも。陰ながら、お二人の幸福を祈つて居ります、どうぞ道中お氣をつけて行つて下さい。峠を降りて、三里と少しおいでになると、昔の御城下です。
男。どうも、ありがたう。おねがひします。
女。さよなら御機嫌よう。
（二人見返りがちに行く。）
おしん。さよなら。御無事に。
（おしん。いつまでも、その方を見てゐる。女兒のおまち、前掛に一杯松ぼつくりを拾つて來る。）

おしん。まあ、澤山拾つて來たね。
おまち。谷へ行くと、もつと澤山落ちてるよ。
おしん。それ丈あれば、澤山ぢや。五日位は、たきつけになるわ。
おまち。お父さんは。
おしん。先刻一寸歸つて來たが、直ぐ出て行つてしまふた。
おまち。お父さんは、何處へ行つとるのだらう。
おしん。さあ、何處だか。………おまち、お前お父さんが居る方がいゝか。
おまち。（うなづく）………。
おしん。だが、お母さん丈でもいゝだらう。
おまち。（うなづく）………。
おしん。どちらでもいゝのか。
おまち。（首を振る）………。
おしん。どちらがいゝんだ。
おまち。二人ゐる方がいゝ。
おしん。さうかのう。あんな極道な親父でもさうかな。だが、おまちお前、お母さんが外へ行くことにすれば、お前も一緒に行くだらう。
おまち。（うなづく）………。どつかへ、お母さん行つてしまふの。

おしん。さうだね。お前のお父さんと一緒に居ると、お前もお母さんも一生苦勞すると思ふから、今の中に何處かへ行かうと思ふの。旅の宿や御城下の町なんかだと直ぐ、お父様に分るから、一層遠方へ行かうかと思つてゐる。

おまち。茲にゐたいな……

おしん。お前には、まだお父さんのしてゐることがよく分らないけれども、大きくなればお父さんが、どんなに惡い人だつたか分るよ。

（おまち、不思議らしく母の顏を見詰めてゐる。手代風の男が、上つて來るのが見える。おしん、出かゝつてゐた涙を拭ふ。）

おしん。あゝお客さまだ。………一服しておいでなさいませ。まだずーと上りでございますよ。

手代風の男。ぢや、一休みさせて貰ひませうか。

おしん。さあ、どうぞ。

（手代風の男腰をかける。おしん、お茶を汲んで出す。）

手代風の男。ほゝう。絶景ですね。

おしん。景色丈は、ようございます。

手代風の男。此の土地は、丁度今が春ですな。

おしん。このやうな山國では、桃や櫻が、一度に咲きます。

手代風の男。なるほどね。向ふの谷間に咲いてゐるのは、櫻ですね。

おしん。さうです。櫻です。

手代風の男。向ふに見える山は、駒ケ嶽ですか。
おしん。いゝえ、駒ケ嶽は見えません。
（手代風の男、おしんの顔容を注意する）
手代風の男。（おまちを見ながら）可愛いお子さんですね。いくつです。
おまち。七つ。
手代風の男。七つにしては、大變ませてゐますね。伯父さんは、九つ位かと思つた。
おしん。皆さん、さう仰しやるのですが、柄ばかり大きくても、することはまるで、ねんねえで困ります。
手代風の男。おかみさんは、失禮ですが、たいへん若く見えますね。七つになるお子さんがあるとは、思へない程ですね。
おしん。とんでもない、もうお婆さんでございますよ。
手代風の男。冗談でせう。おいくつです。
おしん。廿六でございます。
手代風の男。ほゝゝゝそんなになりますかね。私は、まだ三か四かと思つた。器量のいゝ方は、徳ですな。
おしん。御冗談ばつかし。
手代風の男。さう云つちや、何だけれども、おかみさんほどの器量よしを、かうした田舎へ埋もれさせて置くのは、全く以て惜しいですね。
おしん。まあ、お世辭がお上手で……

手代風の男。どうして、お世辭ぢやありませんよ。何うです、御亭主は、何の御商買か知らないが、一つ御亭主を說きつけて、東京へ出て來られちや。おかみさんの器量と愛嬌とを看板に、東京で茶店でも開いたら、こんな山の中でやつてゐるのとは、よつぽど譯がちがひますよ。

おしん。ほんに、東京へでも一緒に行つてくれるやうな、そんな亭主だといゝのでございますけれど。

手代風の男。おゝ、ぢや御亭主が賴りにならないと云ふんですか。

おしん。賴りにならない位なら、いゝんですがね。…………。

手代風の男。ほゝゝゝ。一體御商買は何ですか。

おしん。職業なんて云ふものが、あればいゝんですがね。

手代風の男。職業がない！ぢやつまり遊び人……いやなるほど。それぢや、お困まりでせう。

おしん。困まるの、なんのつて。

手代風の男。初て會つた私に、おつれ合のさん訴をなさる所を見ると、よつぽどお困りでせう。お察しします。

おしん。先刻も……つくづく嫌になつてしまつたのでございますよ。

おまち。（先刻から、少し退屈して居る）お母さん。わらび少し取つて來ようか。

おしん。あゝ取つておいで、あまり遠くへ行つてはいけないよ。

おまち。あゝいゝよ。

（おまち去る）

手代風の男。こんな山の中で、暮して居れば、御亭主だけが杖柱でせう。その御亭主が賴りにならないとすると。

おしん。ほんとに、こんな心細いことはございません。もう馴れてゐますし、この半町ばかり上にも、家が二三軒ありますので、さう淋しいとは思ひませんが、それでも夜などは、子供と二人限りで……歸つて來る晩は、十日に二三度しかないんでございますよ。

手代風の男。なるほどな。それぢや堪りませんな。女房が悪いのは、一生の不作と云ひますが、亭主の悪いのは、不作どころか一生の飢饉ですな。

おしん。ほんとうに、何うしてかう苦しめられるのかと思ひますよ。

手代風の男。こんな事を云つちや、夫婦仲へ水をさすやうで悪いけれども、貴女なんか取返しのつかないと云ふ年でもありませんな。貴女の心掛一つでは……。

おしん。でも子供もありますし……

手代風の男。子供さんだつて、あれだけになれば、足手まどひどころか、もう直ぐ手助けになりますよ。

おしん。…………………

手代風の男。人間は見切りが大切ですな。私達の商買の方でも、さうですがね。私達でも、この品物は持つて居て先の見込があるかどうかを、見切るのが大事ですよ。どうにかなるだらう、どうにかなるだらうで持つて居ると、しまひにはその品物と心中しなければならない羽目になつてしまひますよ。夫婦仲なんでも、さうでせうな、先の見込があるかないかを見極めて、あがきの付く裡にどうかしないと、それこそ、一生の飢餓になるのぢやありませんかね。と云つて私がいやに夫婦仲のことは、精しいやうだが、これで實は獨身ですよ。はゝゝゝ。

おしん。……

手代風の男。東京日本橋の村松と云ふ唐物屋の番頭です。この頃は、田舍の方でもシャツとか帽子とか、いろ〳〵な唐物を使ふやうになりましたのでな。今度は越後から、越前、加賀、信濃と小賣店の掛金を、蒐めて歩いてゐるのですよ。始終得意先を廻つて、旅から旅を歩いてゐるので、つひまだ女房を持たないでゐるのです。だから、本當に夫婦の間のことは分らないかも知れませんが。

おしん。……これで、私のやうな者が、東京へぼんやり出て行つても、路頭に迷ふことはないでせうか。

手代風の男。とんでもない。貴女位の器量を持つて居れば、東京の方で手を出して待つてゐるでせう。女を捨てる餓はないと云ひますがね。貴女なんか、さうですね。私が、貴女であれば東京へ出て、お茶屋か船宿……この頃、船宿がだん〳〵待合と云ふものに變つて行つてゐますがね……お茶屋か待合かの女中になりますよ。貴女は、いくら山の中から、出たと云つて、その器量だし、客あしらひは、馴れてゐる。それに愛嬌がある。何處だつて欣んで置いてくれますよ。この女中さんといふのがいゝ商買ですよ。給金は、少い代りに貰ひと云ふがありましてね。これが、どんなに低くつもつても、月に二三十兩。下手な官員さんの月給なんか追ひつきませんよ。

おしん。でも子供があれば奉公の邪魔でせう。

手代風の男。ところが、もうあれだけになれば、何處だつて、貴女と一所に置いてくれますよ。一寸した用事は出來るし、世話は燒けるでなし……それとも、思ひ切つて藝妓家の下地つ兒にしてもいゝですな。あれだけの子柄なら、きつといゝ藝妓になりますよ。この頃の大臣參議の奥さんは、大抵藝妓上りですよ。

おしん。でも、東京へ行く金はないし、行つてから何處と賴つて行く所はなし……。

手代風の男。そいつは、一寸困りますな……(一寸決心したやうに)だが、おかみさん、貴女の言つてることは本

氣ですか。

おしん。……（寂しく笑つて）まあ本氣のつもりなんですがね。

手代風の男。若し本氣なら……さうですな。袖すれ合ふも、他生の緣とやらで、私が一つ骨折つて上げませうかな。

おしん。えゝつ。（低く）

手代風の男。貴女が、本氣ならですよ。貴女が本氣なら、私が、一肌脫がうと云ふのですよ。

おしん。……。

手代風の男。東京へ一所に連れて行つて上げて、奉公するまで、面倒を見ようと云ふのですよ。

おしん。……。

手代風の男。貴女の御亭主には、少し惡いが、貴女を救ひ出して上げようと云ふのですよ。

おしん。御親切は有がたうございます。

手代風の男。どうです。思ひ切つて行きますかな。

おしん。えゝ（まだいづれともなく。）

手代風の男。先刻も、云つたやうに思ひ切りが、大切ですよ、人間は。私が玆へ休んだことが、貴女の一生の運の岐れ目ですな。貴女が、私と一緒に行くか行かないかゞ、大きい岐れ道ですな。尤もどちらへ行つた方がいゝかは分りませんがね。そこが貴女の見切ですよ。玆に居るより惡くなりつこはありませんよ。だが、私はあまりおすゝめしませんよ。他人樣の女房を、そゝのかすやうになるといけないから。

おしん。でも、妾は今直ぐと云ふわけには……

手代風の男。御尤もです。私はこの峠を降りると、あの御城下の街でも、少し用事がありますから、今日一晩宿まりますが、貴女が決心が着いて後から來ると云ふことが定まれば宿屋で待つてゐますよ。

おしん。…………。

手代風の男。貴女は、私と云ふものが、何んな人間だか分らないで、心配してゐるのでせう。御覽なさい！玆にちやんと、掛取帳を持つてゐますよ。（大きい鞄の中から、掛取帳を出して見せる）。この鞄なんかも、私の店の品物ですよ。東京では、鞄と云ふものが大流行ですよ。それちやんと日本橋本町村松とかいてあるでせう。

おしん。そのお宿と云ふのは……。

手代風の男。住吉町の角屋です。

おしん。角屋さんですか。昔の本陣ですわね。

手代風の男。何うです。來ますかね。

おしん。（決心したらしく）えゝ參りますわ。

手代風の男。さうですか。それは、よく決心が着きましたな。私がお引受しましたからは、惡くは計ひませんよ。だが、おかみさん、こんなことは、——私が一緒に連れて行つたなどゝ云ふことは誰にも氣取られないやうにね。之で氣持がいゝ。おかみさんが、私の云ふことをよく聞きわけてくれた譯だから。

おしん。足弱ばかりで、道中お邪魔ぢやありませんか。

手代風の男。いや、私も、大抵用事も片づいたから、ぶら〲歩いて五月の二三日頃までに、東京へ歸ればいゝのです。おかみさんも、直ぐ絹物が着られますよ。直ぐですよ。

おしん。一度でもいゝから、柔いものに手を通して見たうございますわねえ。

（物賣、天秤棒で、籠を擔いで上つて來る。）

おしん。おゝ吉さん、まあ一服しておいでなさい。

物賣。寄つては居られない。今日は、いそぎぢや。あゝ、おかみさん。お前の家の重吉どんに頼まれたぜ、これを家へ屆けてくれつて。

（紙包みをおしんに渡す）

（おしん、あけて見る。中から、先刻重吉が奪ひ去つたおまちの衣物出て來る。）

おしん。（驚く）……

物賣。ほゝう、おまち坊の着物を買つたんぢやな。重吉も親ぢや、時には感心なことをするのう。ぢや行つて來るわ。歸りに寄るわ。

おしん。どうも吉さん、ありがたう。たしかに。

（物賣去る。おしん、着物を、ぢつと見詰めてゐる）

手代風の男。玆に長く居ると人目についていけない。ぢや宿屋で待つてゐますよ。きつと約束しましたよ。

（男鞄を提げて、歩き去らうとする。）

おしん。あの大抵は、行くつもりですが、若し行きませんでしたら、妾におかまひなく……

手代風の男。（立ち止つて）おや、早や決心が變つたのですか。御亭主が、子供に着物を一枚買つて呉れた丈で、もうそんなに變つたのですか。

おしん。いゝえ、買つて呉れたなんて……

手代風の男。一生涯の事ですよ。思ひ切つて、おいでなさい！待つてゐますから其處が見切りですよ。

（男去る。おまち、先刻から歸つて來てゐる。手代風の男の最後の言葉を聽く。おしん考へ込んでゐる）

おまち。お母さん、何處かへ行くの。

おしん。……いゝえ、もう決して何處へも行きません。

あまち。ぢや、お父ちやんと三人でゐるの？

おしん。あゝ、三人でいつまでも居るのです……おゝわらびが、そんなに大きくなつたの。煮て、お父さんが歸るまで、置いてをいて上げませう。

——幕——

改造社運動叢書の續刊

我國唯一と稱せらるゝ改造社運動叢書の紙型も今回の震災によりて燒失しましたが、共後此叢書の再刊について努力中の處、近比に至り熊谷氏の「テニス」が組み上り、五月上旬には發賣さるゝまでに進捗しました。續いて三宅氏の「野球」も五月中旬に出來します。梅澤氏の「水泳」のみは若干部の殘留品があります。香山氏の「ラクビー」も五月中旬に出來します。尚本叢書以外の槇有恒氏の「山行」も倉庫に若干の殘留品を有し、野口源三郎氏の「オリンピアの旅」（定價貳圓五十錢 三九七頁）も四月中旬に出來してオリンピアの旅へ上る各將士の伴侶ともなり、又運動家たちの此上なき讀物として近く歡迎さるゝでせう

テニス　熊谷一彌（再版中五月上旬出來）
野球　三宅大輔（再版中五月中旬出來）
水泳　梅澤親光（定價壹圓八十錢 送料十五錢）
競走　金栗四三（近刊）
ラグビー　香山蕃（五月中旬出來）
トラック　山岡愼一（近刊）
フイルド　益田弘（近刊）
登山　本社編輯部編（近刊）
撞球　山田浩司（近刊）

改造社「大正大震火災誌」の發行

（菊版、約七百頁餘、内寫眞約百頁、天金、美本として代表的の書）

世界歴史に類例を見ざる大正大震火災は我國有史以來の悲慘事にして、その人命を殞した數字より見るも、物質上の損害より見るも日露戰爭等と比較にもならぬ。此歴史的大慘事を記念せんが爲め我社は七ケ月間の時日を費して數十の社員が日夜寢食を忘れて編輯に努力中であつた。幸に各方面の權威者たち假令ば地震に對しては地震學の泰斗が數名、氣象にあつては氣象學の大家が、各省の被害に對しては次官、局長、課長が、青年團の活動に對しては各府縣知事乃至は青

年間が、飛行機活動に對しては官民のその道の大家が、其他經濟、保險、醫事、衛生、思想、法律、演劇、社會、政治、鮮人問題、自警團問題、大杉問題、震災の側面記錄に對しては一流の文士が、親しく筆を執つて居られるから震火災に對する總ての出來事は本書に網羅し盡されてゐる。そして執筆せる人々が斯道第一流の大家たるに於て後世まで殘る震火災唯一の權威ある史實である。加之、約一百葉の震火災を記念する精巧なる寫眞はその當時の慘憺たる狀景を髣髴せしめて、身躬ら未曾有の大慘事の場面に在るかの思ひあらしむる。特に震源地圖、地質變動圖等學術的の寫眞版は本誌獨特の誇りである。又、帝國大學、宮內省を始め各省、各府縣廳、東京橫濱市長、地質研究所、水路部、航空局等が獻身的に本誌の完成に努力して下さつたことに對しては感激措く能はざるものがある。本誌は全國の家庭各學校等は勿論、諸外國よりも歷史的記錄として大抵購求して戴いたが、尙殘餘の書籍あるやを問合せてくる向が少くない。その方々は十五圓の會費を送つて戴けば少部ならば都合いたします。二月末出來のつもりでしたが、記事、印刷の都合で遲延いたしましたが、もう全部博文館の手で組上りましたから遠からざるうちに完成さるることと思ゐます。

內容一般

一、地圖

1. 東京大火災地圖
2. 震災區域及震源地地圖
3. 地質變動地圖

一、口繪寫眞

1. 雲煙遠望　理學博士　長岡半太郎
2. 學術參考寫眞　(二十四頁)
3. 震火災害寫眞　(四十二頁)
4. 震災風俗寫眞　(三十四頁)

一、地震火災誌

▽地震の學理的攷査

一、關東大地震概說（附一月十五日の強震に就いて）　理學博士　今村明恒

一、關東大震の原因と結果　理學博士　中村左工門太郎

一、地質の變化概要　理學博士　井上禧之助

△地震調査日誌抄　理學博士　今村明恒

△海洋氣象　理學博士　岡田武松

△巴形地形について　理學博士　藤原咲平

△地震研究の方針　理學博士　長岡半太郎

△地震による地球內部の研究　理學博士　石原純

△地震雜感　理學博士　寺田寅彦

△火災概況

一、震火災の影響

日米問題と其對策

米國排日法案の成立と其對策　米田實
對米移民問題管見　堀江歸一
對米雜感　美濃部達吉
排日法の樂屋と役者　吉野作治郎
日米の關係を憂慮す　澁澤榮一
排日法案を何と見る　三宅雪嶺
排日癌の切開を要す　水野廣德
排日の張本ハースト及其新聞　横田四郎
薔薇の刺　堺利彦
埴原正直　川內俊太
社會政策の立場より見たる日米問題　福田德三
新排日案と我國民の覺悟　林毅陸

米國排日法案の成立と其對策

米田實

一

米國の排日的移民法案は、遂に上下兩院を通過し、愈々現實的に日本人の渡米を阻止し且つその體面上の主張を蹂躪し去つたのである、近年我國民が蒙つた外交的屈辱も少くないが、斯くの如きものは、先つ類例希れなる所と言はねばならない。殊に其最後の幕は痛く我國民の憤怒を挑發したこと又た其憤怒の正當なること、誰か能く之を否認し得る豪勇があらう、少しく其經過を顧みると、先づ日本人の歸化權無きに乘じて、不能歸化外國人入國禁止規定を造り以て一部の除外例の外には完全に邦人の米國渡航を禁止せんと企てた米國下院のジョンソン案（同院移民委員長である太平洋沿岸ワシントン州選出下院議員アルバート・ジョンソン氏提出の案）は四月十二日、七十一票對三百二十二票の大多數で下院を通過したのであつた、然かも之に要する討議時間や、僅かに五分、如何に下院の政論家が日本人の利益と主張を無雑作に考へて居たかゞ分る、併し之より一層吾人の神經を刺戟したものは、最初日本に對し比較的公正の態度を衒つて居た上院の暴戻な遣り口であらねばならない、上院は最初一般移民制限問題に就ても、寛容の態度に出てたのであるが、日本移民に關しても、同じく公明を示して居た、それは、其最初基礎として採用して居たリード氏移民法案に依つ

て證明せらるゝ所である、リード案の內容は概略下の如きものであつた。

（一）次に揭ぐる者は移民の部類に屬せず

（イ）官吏及其の家族從者

（ロ）旅行者は商用勉學又は遊覽の爲一時的に入國する者

（ハ）通過旅行者

（ニ）接壤外國を通過して米國內の一地方より他地方に赴く者

（ホ）職務遂行上の必要入國する會員

（ヘ）再入國者

（ト）通商航海條約又は特に移民に關し規定せる協約に依り入國し得る者

（チ）加奈陀、ニューフアウンドランド、墨西哥、玖瑪、ハイチ、ドミニカン共和國、中南米諸國、中央亞弗利加及南米に在る歐洲諸國植民地及保護領に生れたるものにして米國に歸化することを得る者其の妻子

米國市民の子、夫及妻に對してはヴイザ　サチフイケート發給に付優先權を與ふ

（二）毎年度に於ける各國移民入國許可數は一九一〇年米國國勢調査に依る在米國大陸各國人々口の二パーセントとす但し一國に對するクオータの最小限度は一〇〇とす

此案に依ると、明治四十四年の日米通商條約の外に、更らに移民に關する明治四十年の紳士協約を有する我日本人は、前記の「ト」に該當するものとして、リード法案に於ける所謂「移民の部類に屬せざるもの」となるのであつた、勿論我移民の渡米は制限せらるゝには違ひ無いが、それは日米間の紳士協約に基き我政府に於て制限を加ふるのであつて、

米國の立法に依る制限では無いのであつた、之は、明治二十七年舊日米通商條約中移民制限に關する第二條の但書を削除した明治四十四年の新日米通商條約の精神に適合する措置であつたと言はねばならない、然るに四月十日附の駐米日本大使埴原正直氏の國務卿ヒユース氏宛公文が公表せらるゝと、上院は急に硬化し十二日の會議を中止し、十四日には二票對七十六票の大多數で日米紳士協約存續反對を表明し、十五日更らに日本人排斥條項を含むショートリッヂ氏修正案（ショートリッヂ氏は排日の本場太平洋沿岸カリフオルニア州選出上院議員である）を投票を用ゐずして可決し、十六日更らに四票對七十一票の大多數で可決したのである、ショートリッヂ案とは外でも無い、リード案中の「ト」を修正し之を現行通商航海條約の規定の下に商業を營んだ爲めにのみ入國し得るもの」とし、更らに歩を進めて下の如き規定を設けたものであつた。

（二）次の條項を挿入すべし歸化權なき外國人は左の者を除くの外入國を禁止す

（イ）官吏及其の家族從者

（ロ）旅行者又は商用觀光の爲一時滯在する者

（ハ）米國通過者

（ニ）接壤外國を通過して米國内の一地方に赴く者

（ホ）職務執行の必要上入國する海員

（ヘ）再渡航者

（ト）條約の規定に依り入國し得る者

（チ）加奈陀、ニユーフアウンドランド、墨西哥、玖瑪、ハイチドミニカン共和國、中南米諸國、中南米又は西印度

等に在る歐洲植民地及保護領に生れたる者にして米國に歸化することを得る者及其妻子

(リ)宗敎家、大學其の他高等の學校の敎授及其の妻子

(ヌ)學　生

此案は四月二日上院委員會に提出せられて、當時成否不明と傳へられたものゝその內容は不能歸化資格を利用して日本人移民禁止を策したところ大體下院通過のジョンソン案と軌を一にしたこと、言ふ迄も無い、斯くて明治四十三、四年頃から脅威せられて居た日本人の人種的地位を本とする移住禁止は、愈々米國の法典の一部に座位を持ち、太平洋岸排日派の久しき運動は成果を結ぶこととなつたのである、誰が邦人の爲めに、その加へられたる侮辱を怒り米人の爲めに其國際道德心の痲痺を悲み、世界平和の爲めに無用なる人種軋轢傾向の助長を慨せざるものがあらう。

二

然らば卽ち米國議會は如何にして斯くの如き暴擧に出でたのである乎。

久しき間米國上院の外務委員長であつたロッヂ氏、移民法案提出者リード氏其他に徵すると、彼等は之を一に埴原大使若くは大使を通した日本外務省の威脅的公文の罪に歸せんとして居るのを發見するのである。成る程埴原大使の國務卿ヒユース氏宛公文を見ると、その文の中には「日本政府及び國民の感情を激せしむるに足るものなり」と叫んで居り、殊にその結果に於ては「若し此特殊條項を含む法律案の成立を見ん乎、兩國間の幸福にして且相互に有利なる關係に對し重大なる結果(グレーヴ、コンシクエンス)を誘致す可きは本大使の感知せざるを得ざる所」と言明して憚ら無かつた、元來地域廣く人口少く、幼時より他人の束縛を經驗する少き境涯に育成せられた米國人殊に外交上から見ると、國土舊世界より隔離した爲めに他國と

の面倒なる交渉の經驗少く、唯たメキシコ以下多く周圍の劣級的小國を壓迫し宛然覇者的地位を樂み、自然我儘となり過ぎた米國人としては、之れ位ゐの文面……如何にそれが正當な主張なるにもせよ……にも多少膨れ面をせねばならなかつたかも知れ無い、殊にコウ言ふ我儘振りは上院に於て度々經驗せられた所であり、之にはロオスウエルト・タフト・ウイルソン諸大統領も迷惑したことが少く無かつた、就中タフト執政中總括的仲裁々判條約問題の例ウイルソン執政中國際聯盟及講和條約拒否の例はその適證として知らるゝ所である、併し埴原大使公文は上院の排日熱を助長したとしても、之が排日問題の運命を決した根本原因とは言ふことが出來無い、之位ゐの程度で排日立法の成立を助長した原因を擧ぐるならばそれは他にも存在することを疑ふを得無い、何ぞや、彼の大統領候補選擧が正さに二個月後に切迫して居ること、並びに日本が昨年九月の大震災で、國力大低下したと想像せられつゝあること等是れである、即ち米國上院にはハイラム・ジョンソン氏を始め若干の自稱大統領候補がある、此等は現大統領クーリッヂ氏の再度候補たるを阻止し、又た一九一六年一度共和黨大統領候補となつて民主黨のウイルソンと爭ひ敗戰したが、再び候補たる可しと思惟せらるゝ國務卿ヒューース氏の聲望をも害せんと腐心して居る、爲めに如何なる問題をも之に利用して憚らぬことを忘れてはならない、又た昨年の大震災は日本の富力の一割乃至二割を奪ひ殊に戰鬪能力を著しく低下せられたとは、米人が實際よりも遙かに以上に輕信して居る所であり、加ふるに過般の馬鹿々々しき高利の外債募集は非常に日本國の信用を激落せしめたのであつた、ソコデ排日派は今日こそ最も其志を遂行するの最好機と確信するに至つたのである、之も亦た本年に於ける日本移民排斥立法の成功を齎らした一因なることを想はねばならない、併し記憶せねばならぬ點は以上の諸因は單に助因に過ぎ無いことである、決して此等を以て眞の原因と見誤つてはならない、眞の原因は寧ろ彼等が夙に人種的僻見に捕はれて居り、就中東洋人排斥に於て終始一貫して居る點にあらねばならない、又た彼等が十四五年以前か

ら、已に不能歸化資格利用の日本人排斥案を有して居たことにあらねばならない。

三

米人の人種的僻見、それは彼等が國内に於ける一千萬の黑人に如何なる社會的迫害を加へて居るかの問題に照しても分るが、その東洋人排斥並ひに差別的待遇に於ける終始一貫に至つては現在の支那人排斥法、印度人排斥法を見れば何人も容易に了解し得る所であらう、

支那移民に對しては、一八八〇年（明治十三年）支那人排斥を許す米清條約が出來、一八八二年向ふ十箇年間支那人勞働者の入國を禁止する法律が制定せられ、一八八八年、一八九二年、一九〇二、一九〇四年に更らに支那人排斥法律成り、一九〇〇年の法律は今日も效力を繼續して居る、而してその内容は隨分過酷であることを記せねばならないが即ち一八八二年の法律は支那人勞働者の上陸禁止、右勞働者上陸を許した船會社船長の罰則、歸國勞働者再渡航證明以下數項から成り、隨分嚴刻であつたが、一八八八年には再び之を修正し、所謂特別免除階級として上陸を許す可き範圍を益々縮小し、勞働者の主義を廣うし、且つ先きに清國臣民にのみ適用したものを一變して「清人即ち支那人血統となし、その血統に屬する者は、何れの國の臣民であつても、入國を拒否せらるゝやうに定めたのであつた、（之が爲め日本臣民でも臺灣人は支那人排斥法律の下に立つこととなつたのである）、一八九二年になると、在米支那人に居住證明書所持を要求し、右證明書を所持せぬ支那人は、悉く國外に放逐することをも定めたのであつた、當時在米支那人が如何に憤慨した乎は、彼の「六大會社」（支那人の聯合團）の檄文に照しても判明する所である、而して玆に特記せねばならぬのは、此等支那人排斥法律が悉く法文に直接支那人」と指名して居り、その人種的迫害の事實を赤裸々に米國法典内に暴

露して居る點である、次ぎに印度人は如何と言ふと、彼等は支那人より大分遲れたけれども、一九一七年（大正六年）經度緯度に依る移民排斥の規定でその移住を禁止せらるゝに至つたのである、即ち一九一七年移民法には、條約に於て別に規定しあるにあらざる限り東經百十度の西から東經五十度の東に至る地域で、北緯五十度の南に位ゐするものよりの移民の入國を禁じ、唯その內東經五十度より六十五度の間で北緯三十四度から三十八度に亙る部分を之より除外する旨を規定した、是れ即ち印度裏海方面の住民の米國移入を禁止したものであり唯だ目下石油政策上重視せねばならぬ波斯をのみ、巧妙なる外交的見地から除外したに過ぎぬのである、否な米國の東洋人排斥は之に許りでは無い、更らに北緯三十度の南と南緯十度の北との間にある東經百六十度の西の諸島（米國領島を除く）をも拒否地域となし、以て蘭領印度、ニユギニア以下南洋諸島（我が委任統治地を含む）の住民をも排斥して居るでは無い乎。

而して此等は皆な特定の民族を目的とした特定的差別的排斥法律であつて、白人の場合に見る如き一般的制限方法の公平な適用では無いのである、支那人の場合には明かに支那人と指示し、印度人の場合には經緯度を利用する地理的制限に依るの差があつても、その偏頗な差別待遇たるにつきては、如何なる詭辯を用ゆも、隱蔽するの餘地がないのである、試みに之に白人に加へられて居るその制限と比較せよ、白人移民の制限は、一八七五年（明治八年）以來存する醜業者罪人の渡米禁止、一八八五年（明治十八年）の契約勞働者禁止その後に追加せられた白痴、低能、狂人、貧窮者、結核其他傳染病患者、多妻主義者、無政府黨員の上陸禁止等であるが、之は國家が自衞上當然講ぜねばならぬ方策である許りで無く、又た、それは決して白人にのみ適用せらるる法律では無く、日本人にも、他の黃色人種にも同じく適用せられて居るものなることを忘れてはならない、即ち白人に對するそれは、公平且つ一般的な制限であるが、唯だ東洋人に對しては、米國議會は常に差別的・特殊的排斥策を執りつゝ今日に至つたのである、然らば當然斯くの如き對東洋人態度に

馳れて居る米人が、又た日本國民に對しても着々同一の差別的、特殊的排斥立法を策するに至つたことも、之を熟考すると、亦た何の不思議とす可き所があらう。

四

事情已に斯くの如くである、從つて米人が今回の不當なる日本移民禁止方法即ち日本人の不能歸化資格に乘じ之を利用して其米國移住を禁止せんとの計畫を建てたのも、明治四十三年頃からの事である、決して世間に輕忽に考へて居る如く、最近突如立案せられた排斥策でも無く、一時の氣紛れでやられつゝあるものでも無い。

少しくその經過を述べんに、先づそれは一九〇六年（明治三十九年）十月サンフランシスコで日本人學童排斥（日本人學童を一の隔離學校に集めて教育し從前の如く白人の小學校に入れぬと言ふ計畫）が始められ翌一九〇七年春迄日米間の面倒な交渉を見、漸く日本側で在布哇日本人の米國轉航及移住禁止に同意することとして、その代償として學童排斥を救ひ得た時のことである、此件に關係した米國大統領ロオスエルト氏を始め米國政治家は大に日本移民問題研究の必要を感じたが、同時に近年性質變化し來つて歐羅巴移民をも同時に研究せんと考へ出した、ソコデ一九〇七年（明治四十年）四月移民調査會なるものが出來たのである、同委員會は上院より三名、下院より三名、大統領の指名せるもの三名から成り、直ちに多額の費用を投じ國内外國の兩面から同問題を研究し、一九一〇年（明治四十三年）十二月委員長デイリンガム氏から詳細なる研究結果報告を議會に提出したのであるが、その内には教育資格無き移民の入國拒否などを説いて居るが、東洋移民に對する策としては、實に

『市民とならざる移民の入國禁止』

を説いたのである。市民となり得ざる移民の主要なものは、則ち米國々法上歸化して市民となり得ざる東洋人の意味すること言ふ迄も無い所である、記憶せよ、是れ實に明治四十三年十二月即ち今より十四年以前に屬して居るでは無い乎、而して當時支那人に對しては已に嚴刻な排斥法律があり、印度移民數は言ふに足らぬ程度であつたことを考ふると誰かそが實際日本移民を重要な目的物として居たことを拒むものがあらう。

（備考當時の日本移民の米國上陸數は下の如くである、一九〇六年（明治三十九年）一萬三千八百三十五名、一九〇七年（明治四十年）三萬〇二百二十六名、一九〇八年五千八百〇三名、一九〇九年三千百十一名、而して右移民調査委員會が設けられた一九〇七年が渡米日本移民數實に三萬を超へた時代（これは日本移民史上で唯だ一回に過ぎぬが）なるを想ふと、此事實は、前年の學童事件と相俟つて大に移民委員會を刺戟したものたること疑ひが無い）

世上の論者或に言ふ、日本人に歸化權無きことが判明したのは、大正十一年（一九二二年）十月米國大審院が小澤孝雄事件につき最終の判決を下したからである、從つてそれ以前の不能歸化外國移民禁止は必らずしも日本人を目的としたとは言はれ無いと世上議論多いけれども、之位ゐ馬鹿々々しき僻説はあるまい、蓋し明治三年（一八七〇年）米國議會が制定した歸化法にはその條文（改正法律二千百六十九條）に

「本題（歸化法）の諸項は白人たる外人及び阿弗利加出生の外人、阿弗利加血統の人に適用せらるゝものとす」

の規定がある、此法文が通過する際、上院議員サムナー氏（マサチユセツツ州選出の人で人道論者として知られて居る人）は、斯くの如き偏狹な皮膚色、人種上の制限を加へず一般に何人種にも歸化權を許すの實に米國建國の精神に適ふ旨を説いたのであつたが、衆議之を容れず、遂に右の如き規定を成立せしめた、これ實に一八七〇年七月二日上院議事錄に明かな所である。此事實は、米國が政治的見地から非常に融通利きた解釋振りを發揮せざる上、法規上已に日本人

の歸化權を有せざるを否認する難きを示すものではあるまい乎、從つて明治四十三年十二月議會提出の移民委員會報告が、不能歸化外國人移住禁止規定に依り日本人移住禁止を立案して居たことは、誰か之を否認するの蠻勇があらう。

五

而して此移民調査委員會案は、その後、已に度々米國議會に議案として現はれて居たのである、予は之を詳細に述ぶる餘裕を持たぬが、顯著な例を擧ぐると一九十五年（大正四年）米國下院に提出せられたバーネット移民法案第三條の如き是れである、曰く

「下記の部類に屬する人々は合衆國に入るを禁ず

現行法律に依りて歸化して合衆國市民となる能はざるもの

但し旅券に關する現行條約、協約、又は取極或は今後締結せらる可き條約協約若くは取極に於て別に定めあるものは此限りにあらず猶下記の資格若くは職業の人には此規程を適用せず。

官吏、宣教師若くは宗教々師、辯護士、醫師、化學家、技師、教師、學生、文人、商人、旅行者、或は之等に同道し或は其後に入國を求むる其適法の妻若くは十六歲以下の小兒、但し此等の人、其妻、若くは其外國出生の小兒にして合衆國にて右除外的階級に屬する資格若くは職業を失ふときは不法に合衆國に在るものと認め、本法第十九條の規定に從ひ送還せらる可きものとす。

此議案の内容を解剖すると、それは原則として日本人の米國移住禁止を決定するけれど、日本にして日米紳士協約に依つて別に自制政策を繼續する限りは、暫らくは制限策を協約に讓つて置いても差支へ無いやうに餘裕を造らんと企て

たものであつた、但し之は成立を見るに至らずして終つたのである、但し一九一七年に入り、米國移民法の根本的修正が企てらるゝと、又々之は問題となつたのである、但し日本政府は何分「歸化不能」を利用して日本人を排斥する米國の立法策に抗議したので遂に米國は方法を變更し唯だ「現在如何なる方法に依つてか米國より排斥せられ若くは入國を防止せられ居る外國人は米國に入るを許されざるものとす」との規定を加へ、之に依つて「日本との紳士協約に依つて現在制限せられ居る日本人も」右排斥規定に含まるゝものと考へて、一時自ら滿足したのであつた、併し實際から言ふと紳士協約に依つての制限には、何分それが日本政府の自制程度に委せられて居るので、結局滿足が永續出來ず、又た更らに最近米國の移民制限思潮横溢にも激成せられて終に今度の如き排斥法案の出現とその成立を見たのである。

尤も米人としては「勞働者以外の臣民に米大陸行旅行を下附するも勞働者に對しては、再渡米の場合或は已に米國に居住せる父、母、妻子と合せんとする場合或は米國の農園に財産關係を有する場合の外之を下附せず」との主義に成る明治四十年紳士協約の下でも、日本人の渡米が思ふ樣に激減し無かつたことを不平に思つて居る、即ち近年の米國上陸日本人數を見ると下の如くである。

大正六年	八千九百九十一名	大正七年	一萬〇二百十三名
大正八年	一萬〇六十四名	大正九年	九千二百七十九名
大正十年	七千五百三十一名	大正十一年	六千三百六十一名

又た大正九年(一九二〇年)二月二十五日の協定で、寫眞結婚婦人の渡米が同年三月一日から日本側で禁止せらるゝこととなつた、(これは日本側の發案に出てたものである)けれども、之でも米人は不十分と考へたこと丈けは、記憶して善い所である。

六

併しその機會を造つたのは孰れの事情に在つたにもせよ、日本移民の根本的制限が米人に依つて久しく研究せられ考へられたことは上述の如くなるを思ふと、今回の擧や決して不自然とは言へぬのである。

唯だ遺憾とすべきは、彼等が斯くの如く日本人の體面を汚辱するの策の代りに、彼等が大正十年（一九二一年）以來實行して居る「在米各國人々口數を標準としてその若干分を入國せしむる」の公平な制限策に出で無かつたかと言ふこと是れである、況んや同法律は期限終了となるが爲めに、現に上院は「一九一〇年人口の二分」、下院は「一八九〇年人口の二分」案を採用して居るでは無い乎、若し之を日本人に適用せん乎、上院案に依ると、一九一〇年在米日本人口七萬人の二分即ち一千四百が一箇年入國して得る日本人數となり、下院案に依ると、一八九〇年在米日本人々口一萬四千の二分即ち二百八十名が入國許可數となるので、所謂人種的待遇を須ゐずして、同様に邦人の渡米を制限し得るでは無い乎、然るに支那人問題以來、東洋人劣視の慣習に左右せられて居る米國議會が、新策を講ずるの餘裕無くして、無用に邦人の面目を毀損する態度に出でたことは、洵に狂愚の極と言はねばならない。

七

以上は突如上下兩院排日案通過の報道に接した、瞬間に於ける予の所思を吐露したものである、併し玆に一の問題は起る、我國は今後如何にして本問題に對す可き乎是れである。

之につきては、最早や締切り後の雜誌の紙面に餘裕もあるまいから、詳細には述べ得ぬが、萬一本案が今後大統領の

力でも阻止せらるゝを得ず、愈々法律として實施せらるゝに至らば、我國の前途には、現行日米條約を基礎として抗議を繼續し、場合に依つては此問題を國際仲裁々判に附する策を執る可きであらう、蓋し明治二十七年の舊日米通商條約の第二條但書には前條及本條の規程は「勞働者の移住」に關し現に行はれ又た將來制定せらる可き法律勅令及規則には何等の影響無き旨を規定し以て「兩締盟國の一方の臣民或は人民が他の一方の領土内何れの所に至り旅行し或は住居するも隨意たる可く」との第一條以下の規定の効力を減殺したのであつたが明治四十四年締結の新條約になると、此但書を削除したのである、尤もその第一條には兩締結國の臣民又は人民が他の一方の版圖内に旅行し居住することに關しその國の法令に遵由するに於ては內國臣民又は人民と同一の條件で之が自由を享有すと規定し、その國の法令に遵由するを條件としてはあるが此處に言ふ法令に今度の如き法律が含まるゝとは思はれ無い、即ち警察公安、其他一般的な國の法律をこそ意味すれ、今度の如く右條文其者の精神を蹂躙するやうなものまで含むとはドウしても思はれ無い、米國側には別な議論もあらうし、又た仲裁々判附議には矢張り上院の同意が必要なので米政府も苦しむだらうが日本としての進路は之が直接の方法であらう。

此外に大切なのは二つの點である、第一日本人が今度の事に鑑み大に奮勵して國力を富強することである、之は軍備を言ふのでは無い、根本的の國力を言ふのである、國力が富强になれば、今度の如き侮辱は來らぬであらう、第二吾人は人種的軋轢を欲せぬけれども少くとも、此問題は歸化權無き十億人の東洋人全體の共通問題であるから矢張りその全體に覺醒を促し之に依つて米人の反省の機を早くするのが得策の一ではあるまい乎。

猶ほ言ふべきものが多いが、時間の餘裕がないので、茲に本論を終ることにする。

對米移民問題管見

堀江歸一

一

日本が外國に向つて、移住民を送遣すると云ふことは、海外に領土を擴張すること丶共に、日本の國策として、永い間考へられて居つた。然しながら外國で優秀の地位を占める國を通じて、何處に他國に移住民を送遣する國があるであらうか。國の經濟的地位が進めば進むに隨つて、其國は諸外國に向つて、資本を輸出する、技術を供給する、企業能力を提供する。斯くて是等に依つて獲得される利子利潤等を國内に回收して、國民の生活を豐滿ならしめることは、一個の國策として、之を企劃するが、此以外に直に自國の國民を勞働者として外國に送遣すると云ふことは、優等國であれば、之を敢てしない。蓋し優等國に於ける國民の生活程度は勞働者の送遣されんとする國に比較して、優るとも劣ることのない爲めに、到底勞働者を送遣する餘地を見出さないからである。國民を一個の勞働者として外國に移住せしめ、其勞働に對する報酬を本國に回收して、以つて國の繁榮を謀らうとするが如き、人間の肉を商品として、外國

に輸出すると異ならない。國民の外國に於て勞働する者の多ければ多いだけ、又其勞働條件の不良であれば、不良であるだけ、斯る國民を出す國に對する信望の外國に於て薄れ行くことは、免かれ難き勢である。日本は其國策を立てるや、常に理想を高く標置し、優等國の爲す所を學んで居つた。然るに海外移住の一事に於ては、獨り劣等國の爲す所を爲し、移住民の送遣を以つて、殆ど一の國策であるが如くに考へて居つたのは、如何なる意味合に出るものであらうか。

對米移民問題は今や著しく紛糾し來つたと共に、日本に向つて、甚だしく不利なる方嚮に向つて、展開しつゝあることは、爭ふ可からざる事實である。元來一國が外國に對して、移住民として、勞働者を送遣すると云ふことは、其れが內國に過剩なる人口に對する捌口を求める爲めに出づると、彼等の送還金に依つて、內國を富裕ならしめる目的に依るとを問はず、健全なる經濟政策であるとは云へず、又滿足す可き經濟狀態であるとも見られない。勞働者を他國へ送遣する國は他國に比較して、經濟上の能力に於て微弱であり、國民の生活程度亦劣等であるが爲めに、斯る所業に出るものであつて、要するに一國の經濟的環境の不利なるが爲めに、生ずる事相であるとしなければならない。我國は明治の初年から頻に海外移住民の派出に着眼し、始めは布哇を以つて、次には北米合衆國や、加奈陀濠洲を以つて、更に南米諸國を以つて、適當なる移住民の送遣地であるとし、移民會社や、政府の援助に依つて、年々多數の移住民の派出されることを見た。而して此事たる(一)內地に於て富源の乏しき割合に、又商工業の發展するよりも、更に強き割合を以て、人口の增殖する勢盛であり、(二)邦人の常として、且引上げた生活標準を維持する爲めに、人口の增殖に制限を施するよりも、寧ろ人口は之を增殖する儘にして、却つて生活標準を引下げて、平然たる有様であり、(三)斯くて本邦と諸外國殊に米濠兩洲との間に於ける生活程度の相違を大にして、我國民をして是等諸國に移住し易からしめるの事實に基いたものに外ならなかつた。然らば是等移住民の外國に送遣された效果は如何なるものであつたらうか。私は之を對內的と對外的との二つに分つ。對內的に云へば、移住民の派出が其內國の經濟を潤ほしたことの少なからざるや、論を俟たざる所である。通例一國の人民が海外に移住すれば移住した後に於ても、母國の物資を需要する爲めに、母國の物資の海外に於ける販路を擴張するに至ることの利益に世人に依つて認められる所である。我國の雜貨類が南北亞米利加へ輸出されるが如き、我國移住民の需要を充すに基くものであることは、吾人の認める所であるが、斯

の如きは海外移住民の內國に及ぼした效果の小なるものである。更に其大なるものとして、彼等が年々母國に送還する資金の巨額なることが擧げられなければならない。蓋し、我國から北米なり南米なりへ移住する者は其出生地から直に橫濱へ來り、東京や大阪の都會生活を知らないのは勿論出身府縣の府縣廳所在地をも見ないで、其儘汽船の下等室に積込まれて、目的地に送り屆けられる。目的地に到着した後に於ては、或は農耕牧畜なり、或は園藝なり、或は家庭に於ける雜役なりに從事するとしても、本來文化的生活に慣熟せず、語學や社交などに就ても、何等の心得なき彼等の事であるから、單に馬車馬同樣、一直線に勞働し、勞働に依つて收め得た金は成る可く其多くを貯蓄して、本國に送還し、田地田畠を買入れたり、家屋の修築をしたりして、老後の計を立てようとする。元來田舍に生れて、田舍に育ち、粗衣粗食に慣れた者が貯蓄に志すのであるから、其貯蓄金の暫時の間に相當の金額に上り、其れが纏まつた高に上れば、必ず歸國し、自家の鄕里に於て、地主と爲り、金貸と爲り、鄕黨の間に成效者として目されるに至るのである。

二

日本流に云へば、右の如き人は勤儉力行の模範的人物であつて、大いに値する。又現に斯る人々を多く輩出せしめた廣島縣や山口縣の農村が是等の人々の送還金に依つて、富裕を致して居ることも亦爭ふべからざる事實である。然しながら之を移住民を受ける國から見たならば、如何なる考へを起すであらうか。亞米利加人の此の點に於て懷く考へが凝つて、常に排日論となり、排日運動と爲り、遂に排日立法と爲ることは、明白なる事實であつて、試に彼等の感想を綜合すれば、左の數點に歸着するであらう。

一、日本の移住民は米國に來つて、何年を經過しても、米國人に同化せず、自國の宗敎、風俗、生活、思想を齎して、米國に來ると共に、米國に住み、、斯くて米國內に異つた一の小社會を建設しやうとすること、

二、啻に然るのみならず、彼等は生活狀態を改善し、生活標準を向上する念に乏しく、生活費の低廉であるに乘じて低率の賃銀に安んじ、斯くて勞働を提供する爲め、米國の勞働者が團體的勢力に依つて、勞働條件を優良ならしめようとする理想を蹂躙すること、

三、如何に不利なる條件をも忍んで勞働し、之に對する報酬を以つて、貧しき生活を營み、剩し得た貯蓄金は之を本國に送還するなり、又は自信歸國の際に、盡く齎し去るなりする

の害であつて、彼等の爲す所は常に一個の渡り鳥 Birds of Passageに異ならざること、

四、に加ふるに在米日本人が米國に居りながら、所謂大和魂を持して、殊更に愛國心を發揮する所業を外觀に示したり、米國人を挑發する言動をしたりする爲めに、盛に排日的感情を釀成することに至ること、

固より日本移住民の勞働力に依つて、加利福尼洲の農業や、果實栽培業の發達したのは、明白の事實であつて、亞米利加人自身も之を認めて居るであらう。思ふに恩に報ゆるに仇を以つてするは、亞米利加人と雖も、道德上の觀念に訴へて、敢てするを快しとせざる所であらう。然し、日本人が加洲其他太平洋沿岸の開發を以つて、米國人の爲めに德を施したものと考へて居つても、亞米利加人は日本人が自國に移住し來つたり、又は其れ〲其好む職業に就いたりすることを以つて、日本人自身の利益の爲めにするものと認めて居るのであつて、何等之を德として居らない。米國の排日立法に對して、日本人が幾ら舊誼を云々した所で、米國人を動かす力のないのは勿論であつて、現に先例を云へば、米國が大陸橫斷の鐵道を敷設するに當つては、多數の支那苦力を誘導し來り、危險困難なる勞働に從事せしめ、鐵道の完成に就ては、斯る支那人苦力の努力に負う所、極めて大であつたに拘はらず、一度び彼等が鐵道の勞役を終つて、附近の都市に住居を占め、各自の適する生業に從事しようとするや、其米國人の職業に對して、劇烈なる競爭を惹起すの故を以つて、猛烈なる支那人排斥運動の端を發することゝ爲つた一事を以つて、之を知るを得るのである。若しも我國の政治家なり、實際家なりの內に、米國人が日本人の恩誼に酬ゆるであらうとか、又は日本人の加洲開發の爲めに盡した所を德とするであらうとか考へ、之を以つて排日問題緩和の一端に充てる者があつたならば、途方もなき間違とせざるを得ない。

故に日本にして米國に於て排日の憂目を見ることを免かれようとする以上は、排日問題の今日の如く紛糾せざるに先だつて、第一米國をして日本人に歸化權を認めしめ、日本人の歸化に依つて、日本人をして地方政治に相當の權力を揮はしめて、斯くて內部から排日問題の發生することを防止するなり、第二通商條約に於て、一般日本人の入國を認めしめると共に、移住民の入國をも自由ならしめる條項を置かしめ、而して之に對する、代償として日本の米國に送る所謂移住民に就て、日本の自發的意思に基く制限を設けるなり、第三根本的に我國經濟政策を刷新し、改革して、此狹隘なる國土に於て、尙ほ適當なる程度に、七千萬同胞の生活し得られる基礎を基き、以つて米國に

移住民を送遣する必要なきに至らしめるなり對策の確立を試みなかつたのであるか。我國政府は是等の點に考慮し、施設したが、力及ばずして、效を舉げるに至らなかつたのか、其れとも何等の計畫を試みなかつたのか、兎に角排日の機運は早くも米國太平洋沿岸に起り、一の問題に讓歩すれば、他の問題に讓歩することを餘儀なくされ、其間我國民をして屈辱を感じ、仰損を蒙らしめたもの少しとしないのである。一時外務當局者に依つて、滿韓移住民集中論なるものが唱へられたことがある。即ち米國の如き日本移住民に對して、排斥の盛なる方面に向つては、我國からも移住民を送遣せず、之に代つて滿韓に我國民の捌け口を求めしめようと云ふ趣意に聞へたが、我國民が米國に移住するや、資力に乏しく、自己の力役に依つて、生活を送らうとする者である。米國の如き民度の一般に高い國であればこそ、斯る輩に向つて、生業の道を與へるを得るのであつて、若しも彼等にして滿韓に赴いたならば、先づ世界を通じて、民度の甚だ低き支那人朝鮮人と競爭しなければならない。當局者が斯の如き實行に堪へざる政策を唱へて、對米移住排斥の緩和策に充てたと云ふが如き、民を愚にするの甚だしきであつた。

三

問より日本人排斥の目的を以つて、今日まで米國の行ひ來つたことの不合理に充たされて居るのは論を俟たない。蓋し一方に締盟國として通商條約を締結して置きながら、特殊の理由に依つて、日本人の入國に制限を加へようとするからには、其事自身が既に不合理である爲めに、其處置亦不合理と爲ることも、亦免かれ難き所であると考へられる。試に米國に於ける日本人排斥の事歴を顧みれば、其方法の現はれたのは、千九百六年桑港學務局が日本人學童の爲めに、隔離學校を設立することに始り、翌七年學童排斥中止の交換條件として、日本政府は在布哇日本人の米大陸に轉航することを禁止する件に同意し、續いて同年日本政府が自發的に移住民の渡航を制限することを約定した所謂紳士協約の成立を見たのである。斯の如く日本人の入國制限に伸び來つた米國の暴虐は入國後に於ける財産所有權に及ぶことゝ爲り、千九百十三年には日本人の土地所有權禁止、借地權制限の法律、加利福尼州に成立し、千九百二十年には同州に於て邦人の借地權を禁止し、且つ其米國出生子女の後見人たるを得る資格を奪ひ、翌年華聖頓州に於ても、日本人の土地所有權を禁止し、更に千九百二十三年には加利福尼州に於て、日本人の收穫分配に依る耕作を禁止する法律成立し、遂に今回合衆國議會に於て、歸化不能外國移住民の入國禁止を一條項とす

る移住民法の制定を見るに至らんとする次第である。

右の經過に據れば、米國が日本人を壓迫し、排斥することに、力を致すや、到れり盡せりとせざるを得ない。然らば斯る排日的風潮を盛ならしめる原因は何に之を歸す可きであらうか。或る者は米國が日本の軍國的主義を嫌忌するが故であると然も日本は華聖頓會議に於て、最も卒直に軍備縮小の提議を容れ、米國を始め關係諸國に向つて、他意なきことを示したではないか。或る者は米國人の懷抱する人種的偏見の之を然らしめるものであると云ひ、又或る者は米國人が濠洲に倣つて、白人の天地を作らじとする理想から來るものであると云ふ。斯る人種の差別を根據として、日本人に對する待遇を不良ならしめることは、米國人の建國以來唱道する自由、平等博愛の精神に反するの甚だしきものであつて、斯る偏執を根元として、或る人種を拘束し、神が廣く民生の利用するに任せる趣意の下に、與へられた富源の開發を一部の人民に於て、獨占したり、其利益の及ぶ所を狹い範圍に局限したりすることの不可なるは論を俟たない。流石に宗教家の如き、慈善家の如きは、此道理に基いて、排日運動に與せざるのみならず、寧ろ日本人の入國、營業財産所有其他の權利に壓迫を加へることを不當であるとするのも、亦怪むに足らない。米國の如きは國廣へして、富源の豐饒なるに對して、人口乏しく、都會から一步を離れゝば、廣漠たる山河は來つて人の開發を待つの有樣である。果して然らば日本の如く面積や、富源の割合に人口の過剩なる國から、一部の國民を迎へて、米國の富源を開發する任に就かしめることそ、世界通じて人類の收め得べき福祉を平均し、又福祉の分量を大ならしめる所以であつて、米國にして建國當初の國民思想の今日に至るまで、繼承されるからには、必ず此方針の實現を見なければならない。

然るに米國が實際に爲す所は如何であるか。內には黑人を壓迫して、機會均等の原則を破り、外には東洋有色人を排斥して、富源を自國民の壟斷する所たらしめようとする。斯の如くにして米國民は日本の如き此面積の狹隘なる領土に無數の國民の棲息し、生業を求めざる可からざる狀態を目擊しながら、廣濶なる自國の領土を開放することは、何としても之を拒否しようとする。然らば日本人に對して開かれた道は單に二ツあるのみである。其一は日本國民が此狹き領土に於て窒息するが如き狀態の生活を送り、然も生活程度を引下げて、之に堪へ忍ぶことであり、他の一は斯る窮屈なる狀勢に堪へず、之を打開する爲めに、日本人自ら領土廣潤、富源豐富なる國に向つて、侵略を試み、以つて領土上の欲望を逞うするのである。前者の如きは、

米國の爲す所として人道上の非難を免かれないであらうし、後者に就ては、米國自ら日本に向つて、戰爭を挑發し、其平和愛好者たるの本分に背くものとせざるを得ない。

唯玆に米國が常に排日の理由として擧げる事情の內に、日本人として首肯せざる可からざる二ツの事實の存することである。其一は日本人が他國民と同化す可からざる國民であることであり、他の一は經濟上劣等なる條件の下に、甘んじて生活する風を持つことである。日本人が他國に赴いて、其國民と風俗習慣に於て同化せず、又同化することを求めない點に於ては、支那人程でないとしても、相當に頑强なるものゝあることは、內外人の等しく認める所であつて、神棚佛壇を遙に外國に持運ぶのは勿論、幾人かの日本人の集まる所には必ず本願寺や天理敎の出張所が出來たり、最もコスモポリタンの氣風の旺盛である可き米國の都會に於て、何々縣人、某々町村出身者懇親會を催ほすと云ふが如き、鄕土的精神を發揮する有樣であつては、米國人が兎角邦人を異端者扱にし、斯くまでに同化し難き國民であれば、米國に居りながら、時に米國に禍害を及ぼすかも知れない、斯る國民の入國は必ずしも歡迎す可きものではない、其羽翼の整はない內に、壓迫を加へるに如くはない、否羽翼其ものゝ成長することを妨げることを良策とすると云ふ考へが彼等の腦裡に浮び來ることは、何としても之を妨ぐを得ないであらう。歸化權の如き、今日こそ到底日本人に許されざる權利と爲つたが、若しも以前斯る權利が日本人に許されたとして、日本人中能く米國に歸化して、故國の國籍を脫し得る者が續出したであらうか。天涯萬里の地に居つて、尙ほ故國を風習を一蹴するを得ない未練氣に富んだ我國民が歸化權を利用するが如き遂に思ひ及ばざる所であつて此事は日本人が他國民と同化するに如何に難き國民であるかを示すの一資料とするに足りる。

國民の生活權を保障し、彼等をして生活の安定を得せしめることは、今日文明國の社會生活に於て、最も重要視される所であつて、此見地から國家並に地方團體は幾多の社會政策を實行し、勞動組合の如き自治的團體も亦組合員の自制謹愼に依つて、勞動條件の改善を期圖して已まざるものである。即ち米國に於て夙に監獄在監者の製作した物資の市場に於ける價格よりも低廉なる標準に於て、賣却されることに對して、猛烈なる反對運動の行はれたのも、囚徒の勞動に依つて、一般勞動者の賃銀を壓迫する弊なからしめるの趣意に出でたのである。次いで現出したのが受給貧民や、外國移住民の勞動に依つて、一般勞動條件の低下されるに至ることを防ぐの運動であつて、運動者は斯る勞動を呼ぶに低廉勞動（Cheap Labour）の名を以つて

し保護關稅の下に、內國產業の存立を謀る爲めに、生產費の安い外國の物資を排斥することの道理あるが如く、低廉勞動を排斥して、內國勞動條件の維持を計畫することも亦道理ありと稱されるのである。

四

以上の見地から、低廉なる勞動、國內に入る可からざるの制札を高く揭げるものは、勞動組合を始め、總ての勞動運動者であつて、彼等は自家の利益を擁護する立場から、最も熱心に勞動者の團體的運動に妨害を及ぼすが如き低廉勞動者の入國を制限しようとして已まない。而して日本の移住民亦低廉勞動の一種である以上は、勞動組合關係者が一團と爲つて、彼等の入國を喜ばないのは、當然の事實である。而して米國の如き其中央に於けると、地方に於けるとを問はず、デモクラシーの主義の政治上に徹底して居る國に於ては、斯る勞動者の自家防衛に立脚する主張は大なる勢力を持ち、時の政治家の意見を左右せざれば已まない。中央地方の政治家が滔々として低廉勞動の入國禁止論者と爲り、時にルーズヴエルトやタフトの如き政治家が統領として、國交の見地に基き、彼等の主張を曲げしめようとしても、容易に之を爲すを得なかつた所以も亦之を解するに苦まないであらう。現に米國勞動組合聯合會長サミユール、ゴムパース氏は此點に於て、數月出版した「勞動と共動の繁榮」と題する著作中に、明に吾人に語つて居る。曰く

米國の勞動者は最も痛切に自國の產業に於て、仕事、賃銀並に行動に關して、外國の標準の行はれることの有害なる結果を體得した。外國賃銀の標準は米國の生活標準と相容れざるものである。外國の勞動者は多くの仕事から、米國の勞動者を排斥し、彼等の維持する劣等なる標準の行はれる影響は今や廣く社會に傳播するに至つた。

勞働組合運動は多年間を通じて、斯く勞働者のみならず、全全國民に及ぼす有害なる傾向に就て、世人の注意を求めて已まなかつた。蓋し國が外國の生活を營む外國の團體に依つて、多くの穿孔を明けられたならば、到底國民的統一の薄弱と爲ることを免かれないからである。

ゴム、パース氏の如き、博愛主義の念を以つて、勞働運動に從ふ者と雖も、一度び移民問題に對すれば、態度の豹變斯の如くである。以つて一の鑑戒とするに値するであらう。

故に我國にして對米移民を解決しようとする以上は、彼の國に於ける勞動團體の諒解を求めることを捷徑とする道理であることが推察される。如何にして彼等の諒解を求めるかと云へば、我國に於て米國に移住民を送遣する場合には、彼の國に於

て勞働組合に加入し得られる標準能率と同等以上の能率を有するものに限るのである。而して我國に於て適當なる勞働團體の存しないことは、甚だ遺憾であるが、速成でも何でも斯る團體を組織し、此の團體に於て適當としたものは之を米國に送遣して、彼の國の勞働組合に加入せしめることゝする一方に、勞働組合の標準とする技能を有せず、能率を發揮しない者は勞働組合所在地に於て、勞働に就かしめない、時には其入國をも制限することゝしたならば、自ら我國移住民に對する勞働組合の反對を緩和し、其障害を除却するを得た道理である。然るに政府が今日まで實際に行つた所は果して如何であつたらうか。私をして言はしむれば、政府が今日まで爲し來つた所は盡く上記の必要に背反するものゝみであることを遺憾としなければならない。

五

國際間の關係は次第に密接と爲り、幾多の方面に國際的運動の起ることを以つて、必然の勢とするが、其内に於て勞働運動の如きも、亦國際間を通じて、聯繫の保たれる必然性を持つものであつて、殊に移住民問題の紛糾しつゝある日米兩國の間に於て、其然るを見るのである。固より日米兩國の間に於ては、勞働者の生活程度にも、勞働條件にも、勞働能率にも相當の懸隔があり、其懸隔の存することが常に移民問題の暗礁と爲るものであるとすれば、移民問題の解決を容易ならしめるには、此暗礁を除却することが、先決問題と爲るのであつて、而して之を爲すには、勞働者團體の發達に俟たなければならない。然るに我國に於ては、從來勞働者團體の發生又は發達に對して、如何なる政策が政府に依つて行はれて居つたであらうか。歴代の政府は常に勞働者團體の發生を妨碍し、資本家をして之を壓迫するに便ならしめるの方針を取つて、渝らなかつた。斯くて都會の工業勞働者は團體の力に依賴して、各自の生活程度を引上げ、勞働條件を改善するの自由を奪はれ、纔に好景氣時代に勞働に對する需要の劇増することに依つて生ずる賃銀の增進を樂むのが勞働者に取つて、唯一の幸福であつて、然も其幸福も不景氣時代には消散して、殘る所は失業と賃銀の低落とあるのみである。都會の工業勞働者にして、尙ほ斯の如くであるとすれば、其郡村に於ける農業勞働者の勞働狀態の更に不良であることは、之を想像するに難しとしない。此不良の狀態に慣らされた勞働者が群を成して、米國に入國しようとするのが移民制限の行はれる以前に於ける狀態であつたとすれば、彼等の入國に制限の加へられたことに就ては、日本として諒恕しなければな

らない事情が存する。斯くて結局紳士協約の下に、日本の自發的意思に基く移民制限が行はれたとすれば、日本としては、此協約を遵奉するの外なく、亞米利加としては移民制限を此點に止めて、以つて日本の體面を保持する計に出でるのが、姑息の嫌はあるが、日米兩國の爲めに得策であつたらうし、之を日本の側から考へれば、斯る妥協的狀態に居る間に、日本內部の經濟狀態を改善し、勞働條件の向上に依つて、米國諸地方の勞働組合に依つて、承認される資格を備へた勞働者を彼の國に送遣する、更に一步を進めて云へば、外國に移住民を送遣することを必要としない經濟的環境を作り出すことに努力せざる可からざるの道理であつたのである。

然るに我國當局者の短見にして無智なる、總ての點に於て、上記の必要に背反する政策を施して已まなかつた。內國に於て勞働組合や、勞働運動を束縛し、壓迫したことの暴戾は暫く措き、政府の短見無智なることの最も明瞭に暴露されたのは、第一回の國際勞働會議の當時であつて、政府は其代表者をして會議の席上に於て、問題に付せられた八時間勞働制其他の規定を日本に適用することは、尙早であつて、日本としては其適用に堪へ難きことを聲明せしめ、日本自ら特殊國なる名稱の下に、當分の間劣等なる勞働條件に律されるを得ることを約定したのである。國際勞働會議の如きは、成立の當初から世間に重きを成して居つたものではないが、其れにしても第一回の會議は華聖頓に於て、開會された故を以つて、米國官民の間に、多少の注意を惹起したに相違なかつた。其會議の席上に於て、日本が自ら特殊國たることを聲明し、特殊國たる待遇を受けることに安んじたとしたならば、其結果は果して如何であらうか。日本は低廉勞働の產出國であつて、當分此低廉なる狀態を脫する見込みを持たない、隨つて合衆國が勞働者の入國を自由にしたならば、日本は低廉勞働の搬入を試みるものであると云ふことを世界的に公表した次第であつて、斯くて其前ヴェルサイユ講和會議に於て、我國全權が主張した人種差別撤廢の要求の如き、跡方もなく消失し去るに至つたのみならず、爾來排日論者をして日本の移住民を排斥するに就て、動かす可からざる口實を有するに至らしめたことは、蔽ふ可からざる事實である。

過般の震災は天災であり、又之に伴つて生じた火難は多年に亘る邦人の不用意の致す所であり、今日に於ては勿論、當時に於ても兩者共に已むを得ざる災禍として、諦めるの外はないようなもの丶、何故か政府の之に對して狼狽すること、其度を失し、假令ひ非公式とは云ひながら、官邊から震災火難に於ける損害の百億圓に上ると云ふことを發表したるが如き、何と云

ふ不用意の事であつたらうか。爲めに我國の財政に對して、外國人をして不信の念を懷くに至らしめたこと少なしとしない。更に此不信を事實の上に明にしたのが過般の外債であつて、日本が外國に債務を起すに當つて、利廻り七分一厘の高きを以つてしなければならない、此負擔に當るより外に、出づる道を知らないと云ふことは、確に多數米國人をして日本の恐るゝに足らざることを感ぜしめたに相違ないであらうし、又我國に於て震災以來半年以上の久しきに及ぶに拘はらず、帝都復興の計畫は毫も進捗せず、罹災地を擧げて、依然たるバラツク住ひであつて、商工業の萎微不振の甚だしき一事の如き、更に日本の輸出貿易が殆ど一の生絲を重要のものとし、而して生絲の販路は殆ど一の米國に限られ、萬一米國の市場が日本の生絲に對して閉鎖されたならば、日本全國の廣きに亙つて、生絲の產出、販賣、取引に從ひつゝある諸地方に恐慌を惹起すに至ることを見透されたことの如き、往年まで成立して居つた日英攻守同盟は國際間に於ける日本の孤立を防ぎ、日本の國際的威力を增進せしめるに資するもの少なしとしなかつたが、今や此同盟は英國に於て必要の消滅したと共に、敝履の如くに、棄て去られて、其跡を留めず、一方に日英同盟に代ると豫想された國際聯盟は頗る微力である其上に、合衆國は聯盟の一員でなく、聯盟に於て、何事を決議しても、之に拘束されざる地位に居るが如き、其何れを以つてしても我國に取つては、大なる弱點を暴露したものとせざるを得ない。斯くて排日論者中の極端なる者の如きに至つては、此際日本に對して、移民問題に就て、如何なる侮辱を加へた所で、日本は何等の反抗、何等の報復を試みるを得ざるものと考へ、多年解決せんと欲して、解決するを得なかつた、否國際交誼上解決を躊躇しつゝあつた問題の解決に就て、適當の機會を求めたものと想像されるのである。

六

之を米國の方から見れば、移住民法は國內法であつて、如何なる規定を設けても、一國立法權の範圍內に於て、行ひ得るとするかも知れない。即ち元老院の議員等が國務卿から日本大使の抗議文を示されて、內政干涉であるとし、之に憤激して、却つて排日立法の成立を進捗せしめたと稱せられるのも、强ち道理なきの言ではないかも知れない。又一國は自國民をして文明的生活を維持せしめ、又之を進捗せしめるに就て、或る種類の人民の入國を排斥する權利を持つと云へるかも知れない。米國移住民法に所謂「望ましからざる人々」とあるは、即ち之に該當する者と認めるを得るであらう。然も一國が國を開いて、他

と通商を開始する、通商に關聯して、國民の住來、居住の關係と生じ、居住に伴つて財産所有の必要を來し、其財産の內には、不動産の網羅されることも亦當然であるのに、米國の爲す所は通商と云ふ一事は之を許すが、他の總ては擧げて之を奪はうとする。斯る不公正が國際間の正義に訴へて、許され可からざるや、論を俟たない。米國が其自給的狀態に信頼して、鎖國を斷行し、一切の外國人に對して、入國を許さない、假に或る數を限つて、入國を許すとしても、各種の權利に制限を加へ、國に依つて差別を行はないと云ふのならば、議論は全然違つて來る。日本人に歸化權を與へず、斯くて歸化權を有せざる外國人と云ふことを循に取つて、偏頗なる制限を有せざる親から生れた兒には出生に依つて市民權を與へず、更に進んで歸化權を有せざる者の入國を禁止すると云ふように、日本人を眼の敵とする立法を進め來り、始めは州法で制限したものを國法で制限とすると云ふに至つては、日本人に對する不公正の甚だしきものである。日本人は固より米國文明の標準を脅かすが如き程度に於て、日本人の入國自由を强要するものではない。是れが屈辱と感じつゝも、倘紳士協約の成立を承諾した所以であつて、日本としては之を以つて讓歩の絕頂とするのである。

然るに今理不盡にも米國は日本に向つて、讓歩す可からざる所に讓歩を强いようとする。此の場合に日本の爲す可き所としては、唯一の道が開かれて居るのみである。然も現下の國情から云つて、此道に就くことが出來ないとすれば、今後幾年の間、或る目標を懸けて、姑く忍耐す可きのみである。我國に於て國力の最も發展した時代、國民的精神の最も緊張して居つた時代は何時であつたかと云へば、明治二十八年日清戰爭の終つた時から、明治三十七年日露戰爭行はれるまでの十年間であつた。即ち日清戰爭後我國民が正に戰爭の樂を貪らんとしつゝある際に、下された一大鐵槌は即ち三國干涉に依る遼東半島の還附であつて、爾來國民は暗默の間に此屈辱を雪ぐの一大決心を爲し、政府は軍備擴張を計畫して、他日の要務に備へれば、國民又財力を涵養して、軍事上の活動に遺漏なからしめやうとして、政治上に忌む可き紛爭はあつたとしても、國民にある目標に達しようとする緊張味の存したことを爭うを得なかつた。然も日本は日露戰爭に依つて、歐洲の一强國に勝ち、其餘威を以つて、東洋第一の雄國たる地位を占め、東洋に於ては、他に敵する何ものをも見ず、一方に或は日露戰爭に於て、或は歐洲戰爭當時に於て、日本をして謳得せしめた偶然の經濟的利益は却つて日本人に奢侈を敎へ、浪費を盛ならしめて、大國民として持つ可き氣魄を弱からしめた嘆なきを得ざるに至つた。昨年の

震災火難は日本の國力に重大なる損傷を及ぼしたに相違ないのである。然し假に此損傷がなかつたとしても、日本近年の如き弛緩したる國民的精神を以つてして、國家の面目を全うする爲めに、奮起するを得たであらうか。私は此點に就て、大なる疑惑を持つ。

駐米の本邦大使は公文を米國々務郷に送つて、移住民法成立の爲めに、重大なる結果の生ずることを指示したと云ふ。米國の上下兩院如何に無謀であると雖も、重大なる結果の起ることを豫知したならば、今回の如き暴擧を敢てするの道理はなからう。彼等が日本の現狀を觀察し、重大なる結果の惹起されざることを知つて、此國際的暴擧を敢てしたといふのが日本人の感情を刺戟するの甚だしき所以である。然しながら國家の存續は永久であり、國民の感情も亦一時的に消滅するものでない。今回の移住民法が成立しても、世人の想像するが如き重大なる結果は起らないであらう。然も日本國民の腦裡に植付けられた米國人の不公正なる處置によつて、國民的侮辱を蒙つた記憶は他年一日如何なる芽を生じ、又如何なる實を結ぶであらうか。日米兩國民の共に考ふべき所である。

今回の移住民法は如何なる結果を告げるであらうか。大統領の否認に依つて、消滅するか、大統領が之を否決しても、更に上下兩院に於ける壓倒的多數の贊成を狀めて、大統領の裁可を强要するに至るか、私は今日孰れとも判斷を下すを得ないが、日本としては常に如何なる場合に臨んでも、之に處するを得るの覺悟がなければならない。政治上から云へば、國民的侮辱を蒙つた場合に、之を雪ぐ手段に訴へる準備と實力とがなければならず、經濟上から云へば、一日も早く他國に低廉勞働を撤出して、內國人口の調節を求めたり、其送還金に依つて、地方の繁昌を謀つたりする原始的狀態を脫する用意がなければならず、更に之を貿易の關係から云へば、或る一國に國産として最も重要なる物資を輸出し、之に依つて、貿易の均衡を維持しようとする、隨つて其一國の市場を閉塞されたならば、忽にして其重要産業も攪亂されゝば、貿易の均衡も打破されると云ふ有樣であつては、經濟上の關係から、外交上の行動を掣肘されざるを得ざるに至るは勿論であつて、危險の甚だしきものと考へられる。是等の諸點に就て、我國には多くの缺陷の存することを否定するを得ない。之を革正する用意なくして、幾十年の間、移住問題に彷徨し、執着する。今回の如き一大打擊に會して、國民的惶惑を生ずるのも、要するに我國の經濟的立國策に就て、其根本を樹立し、之に向つて國民的努力を利導する何等原動力の存せざる結果である。政黨は徒に所屬議員の員數を殖やし

て、政權に近づかうとし、政權に近づけば、必ず黨臭の紛々たる政治を行つて、他を顧みず、官僚は政黨を操從して、其間に政權を壟斷しようとする。斯くて眞面目なる政治の行はれる時こそ、外侮を招いて、國民を憤激せしめるもの亦故なしとしない。今回の問題に對しては、一の外務大臣、一の全權大使をして責任を負はしめるが如き、事の末である。既往二十數年間少なくとも日露戰爭以來我國に於て實際政治に關係した者こそ盡く責任を頒つ可き者であつて、彼等に一片の良心あれば、將來に處する自己の用意の足らざりしことに就て、深く國民に謝す可きである。

私は以上日米兩國民の立場を考量して、最も公正に移住民問題に批評を試みた積りである。私は此問題が今日の如き紛糾した局面に陷るに就ては、兩國民に共れ〴〵間違つた點のあると共に、兩國民の主張にも亦幾多の道理のあることを知る。米國人が一片の感情に趨つて、有色人種の排斥を企てることの國際間の正義に反するが如く、日本人が國の權利として、米國民の生活程度の向上を妨げようとすることも亦國際間の道德に背くの嫌なきを得ない。兩國識者の冷靜なる考量に待たざる可からざる所以である。

排日の案件は或は上下兩院を通過した儘の形態で成立したとしても、既に從來移住民の送還に就て、制限に制限を加へた我國の事であつて見れば、實質上の損害は餘り大なるものであらうとは考へられない。唯我國の面目が斯くまでも他國に蹂躙され、而して我國現下の實力を以つてしては、之を如何とするも得ないことが國際間を通じて、明瞭と爲つた場合に、我國の支那に對する威力は如何なるものであらうか、抑も朝鮮臺灣等に對して、我國の臨んで居つた權勢は如何なるものと爲るであらうか。白色人種に對する有色人種の同盟と云ふことも印度や支那に於て唱へられるかも知れないが、日本としては聊か難有迷惑の感なきを得ない。左ればと云つて、見す〳〵日本の對外的威が强國に依つて、挫かれたと云ふ事實が起つては、支那に於ては排日が盛に爲り、朝鮮臺灣に於ては、是れ亦日本輕侮の思想の鮮灣人の間に起ることを免がれ難く、此點に於て、我國の對外統治に困難を惹起すことは、吾人の豫め覺悟せざる可からざる所である。

對米雜感

美濃部達吉

アメリカの排日運動は、日本國民に對する侮蔑の感情が其の根柢を爲して居ることは、更に疑を容れぬ。

此の感情は初めはカリフオルニア其の他の太平洋沿岸に起つた地方的感情に過ぎなかつたのが、漸次全國に瀰漫して、今は全米國に通ずる國民的感情となつた。此の國民感情が、暴慢で、無智で、我が儘な國民性と相合して、遂に今回の排日法となつて現はれたのである。

○

感情は理窟ではない。理窟を超越して遙にそれよりも強い力を有つてゐる。

理窟を以て言へば、今回の如き排日法は、千萬言を以てしても到底辯護の餘地は無い。それは法案の提出者も贊成者も熟知して居る所であらう。

若し理窟から出た法律ならば理窟を以て之を反駁することが出來る。理窟を無視した感情に基いた法律案であるだけに、仕末に困る。

○

事の茲に至つたのは、政府の罪でもなければ、外交官が悪いのでもない。詰りは國力の相違である。

「政治は力なり」とは必ずしも久遠の眞理ではないが、唯現代の國際政治に於ては、少くとも目前の問題を解決するものは常に國力である。

國力の相違は自ら侮蔑の感情を誘起する。

アメリカの國民が、日本國民に對して侮蔑の感情を有し、且つ露骨に之を表白するに至つたのは、畢竟國力の遙に日本に優越することを自覺するからである。

○

情ないかな、日本は國力に於て、少くとも經濟力に於て、絕對にアメリカの敵ではない。

如何に侮蔑せられても、如何に無禮を加へられても、默して隱忍するの外、對策あるを知らぬ。せめては相手を侮蔑しようとしても、するだけの氣力も無い。

○

國家百年の大策としては、所詮は亞細亞民族の協力一致を圖るの外は無い。

それは單に政府や外交官に任かして置くべき事柄ではなく、最も大切なるは、一般の國民感情をして其れに向はしめねばならぬ。

○

若し差當つての理窟を言へば、今回の排日法は明に日米通商條約第二條に抵觸するもので、大統領は條約違反の故を以て必ず否認權を行使するであらうと信ぜられるけれども、大統領の否認權は絕對の効力の有るものではなく、若し上下兩院共に各三分の二の多數を以て、再び之を可決するならば、大統領の署名を要しないで、直に法律たる効力を有するのであるから、大統領の否認は固より賴むに足るべきものではない。

吾等日本國民は、唯深く自ら抑損して、自分の地位を自覺し、無意味な尊大、虛榮の心を去つて、切に自分の實力を養ふの外は無い。

排日法の樂屋と役者

吉野作治郎

排日法の通るまで。日が沈むと宵の明星がちか〳〵光り出すと同じように、米國の議會には毎年きまつて類しい排日案が樣々の形で現れた。然しそれはアメリカ政府の努力や日本側の抗議に依つていつも有耶無耶の間に消えて行つた。今年の議會にも下院にはジヨンソン案があり、上院にはロッヂの移民法、リード・ショートリッヂの法案等が提出された。然し米國多數識者の力は屹度これ等の野心ある政客が擔ぎ出した排日法を一刷毛に片附けて了ふことゝ多くの人は期待してゐた。獨り日本人が斯く考へた許りでなく、敎養ある多數のアメリカ人もしかく考へたのである。それはワシントン會議以來の日米兩國は嵐の後の日の出を見るように、晴々しい心持で新なる關係に入つた觀があり、殊に昨年の震災に對するアメリカ人の同情と親切な救援とは涙ぐましい程行屆いたものであつたから、よもやあのアメリカが斯樣な法案を可決するだらう等とは考へられなかつたのも無理はない、

四月に入つて議會の形勢は急に切迫して來た。下院では十二日にジヨンソン案が通過したといふ報道があつたけれども、責任の重い上院議員達は必ずこの案を否決して終ふだらうといふ觀測が一般に行はれてゐた。東京に居る米國大使館の人々、及び米國の新聞記者、これ等は最先きにこの觀測に裏書した。カリフオルニヤの議員等が如何に闘動しても上院の多數を引入れることは覺束ない、そう云つて彼等は多くの日本人を慰めた。

然るにリード氏の提案になる移民法を討議中であつた上院は四月十五日に突如としてショートリッヂの提出した日本人排斥に關する條項を可決した。而も何等の討論を須ゐず投票を行はずして可決したのである。當時米國の國務卿は日本との間に現存する紳士協約の條項を議會に發表し、同時に埴原大使から國務卿に宛た抗議文を公表したが排日派の議員は、彼等の所謂リ

ツツル、ハユが强硬なる抗議を提出して、排日法は日米將來の國交に『重大なる結果』を及ぼすものであると云つた點を捕へて、斯の如きは米國の立法府を脅喝せんとする企であると怒號した。かゝる口實の下にジョンソンやショートリッヂは共和黨の長老ロッヂを說伏せて三時間に亘る秘密會議の後一瀉千里に排日的移民法を可決して終つた。驚いた者は日本人許りではない。英國でも獨逸でもフランスでも新聞紙は多く米國の議會が余りに亂暴であるのを責めた。アメリカの大新聞も共和黨に屬するものは筆を揃へて「上院は日米の國交を危くする」と攻擊した。

加洲の議員が排日的立法に贊成であることは諒解に苦しくない、民主黨が政府いぢめの爲めに之に雷同することも亦無理からぬことである。さり乍らロッヂとも云はれる共和黨の領袖が、大統領やヒューズ氏の苦衷を汲みもしないで遮二無二移民法の中へ日本人排斥の條項を加へて可決して終つたのは何か其處に深い理由のあつたのではあるまいか。黄色い面の日本人が癪に障るとか、危險だとかいふ理由の外に、もつと複雜な利害關係が伏在したのではなからうか。

樂屋の魂膽・米國に於ける日本移民排斥の問題は既に久しい由來を有するものである。日米兩國は斯の如き問題の爲めに太平洋の平和が覺亂せられることを憂へ、一九〇八年の紳士協約を以て、日本は自發的に米國行の移民を嚴禁した。それにも拘らず、日本人は同化不能であるとか、地方の經濟條件を不安ならしめるとか、國防上の危殆を增すとか、ありとあらゆる理由の下に在留日本人の權利は制限せられ、加洲に於ては日本人が土地を所有することはもとより、之を賃借する權利さへも拒否せられた。

他方に於ては、日本の外交政策は侵略主義であるとか、軍國主義的であるとかいふ非難を招き、歐洲大戰の終了と共に太平洋上の風雲は益々急迫したから、大正十一年にワシントン會議を以て太平洋に於ける四國保障條約を締び、海軍制限の協定に調印したけれども、ハースト系新聞紙の排日宣傳は依然として熾烈であつたから、米國人の頭腦に浸潤した反日本的感情は尙牢として拔く可からざる根底を有つてゐる。殊に本年十一月には大統領撰擧が行はれることになつてゐるので、日本人問題は政黨の政略問題として利用せられる危險があつた。即ち共和黨も民主黨も日本人排斥の問題が西部諸洲に於て人氣に投じる事實を看過することが出來なかつた。

然しワシントンの政治家達を惱す問題は單に移民問題許りではなかつた。大統領撰擧戰に於て勝敗を左右するような問題が政府と議會との間に少からず殘つてゐた。先づ第一に油田問題

の紛糾を擧げることが出來る。

油田問題といふのはモンタナの上院議員ウォルシュ（民主黨）が摘發したティーポット・ドームの油田貸下に就て政府大官に不正行爲があつたといふ事件である。民主黨はこの事件に内務長官、海軍長官が關係してゐることを指摘して共和黨の人氣を傷けようとしたのであるが、其結果は民主黨の大統領候補者マツカドーまでも醜關係があるとの嫌疑を受けて、今では兩黨ともに傷いた形になつてゐる。

最近に表面に現はれた問題は減稅法案を中心とする政府と議會との關係である。減稅法案と云ふのは財務長官メロンが提出した所得稅輕減案であつて、之に對して民主黨は下院に修正案を提出した。メロン案は二月末日に下院で否決せられ、共和黨の修正案が却つて下院を通過して上院に廻付された。上院に於てはメロン案の人氣極めて惡しく、動すればメロンの意思に反して減稅案を却けて、退役軍人に恩給を支給する法案を可決しそうな雲行である。これ等の財政案に對する上院の多數の意嚮は現在政府にある政治家と相容れない狀況にあるから、閣員諸公と共和黨の總務との意思の疏通も案外完全に行はれてゐない有樣である。

かういふ空氣の内に移民法の討議は次第に白熱して來た。米國在住の外國人に對する米化運動並に經濟的及社會的立場から移民を制限しようとの主張は在郷軍人團や米國勞働聯合の年來の意見であるから、此趣意に合するような法案に對しては何人も反對の態度を明かにすることを好まない。殊に日本人を排斥する移民法の條項を定めようとする考案に對しては西部諸洲の思惑を考へて、兩黨とも之に反對することに躊躇した。カリフオルニアの上院議員はジョンソンもショートリッヂも共に排日法の通過に極力奔走した形跡がある。

ジョンソンは大統領候補者として滿々たる野心を抱いてゐるがとても加洲のお上り議員では當選圏に入ることは覺束ない。然しカルフオリニア洲の十三票は時として選擧の勝敗を決するに足る投票であるから、共和黨のボッスは黨略の上より加洲の人間を怒らせたくない。かういふ者は勿論ロッヂ其他の黨人にはわかり過る程明瞭にわかつてゐる。それ計りではない、議院に居る我儘者の人達から見れば政府に立つヒユース其他の人々の仕打が必ずしも一から十まで氣に入つたこと計りでもないので共和黨の總務連は閣台の諸公と面白からぬ關係にある。殊に油田問題や司法省の瀆職事件で人氣を損じた共和黨に取つては日米問題を利用して國民の視聽を外交問題に轉換するには絕好の機會である。かういふ行きさつからかれ〴〵評判の芳しくない

日本人移民問題が槍玉にあげられて、疾風迅雷的に上院を通過して了つた。

日本の野朝は愕然として驚き且つ憤つた。排日派の議員は手を打つて喜んだ。米國の大新聞は不當な議會の行動を叱責したが、ハースト系の新聞紙は日頃の毒筆に更に撚をかけて日本移民のみじめな將來をあざ笑つた。さて話はこの排日法の裏面に運動した人々のことに移らねばならぬ。

ハイラム・ジヨンソン。ハイラム・ジヨンソンの面貌は一寸と屋亭を思はしめる。平たい鼻と隼のような眼附、大きな口が太い咽首から境目もなく續いた顎の上にへの字なりに鎮座してゐる。彼は其面貌の示す如く嵐を求める男である。必ずしも革命児ではないが、ロシアに生れたらケレンスキー位の役割は演じたらう。眞打の役者でないにしてもモツブを率ゐる前座の革命家として相當の勢力を持ち得たに相違ない。從來の彼の閲歴は衆愚を喧動し、群集の反感を挑發し、嵐の如く叫ぶどよめきの裡に最も聲高く叫ぶ政客の一人として知られた。一九一〇年以來加洲知事として二度の勤をなし、一九一六年以來上院議員となつたのも凡てこの群集心裡を促へ得る力の致すところであつた。

ジヨンソンは天惠の多いカリフオルニア洲――殊に洲内でも自然の美と風土の饒なサクラメントに生れた。彼が政界に出た頃は、金堀りや山師の札ビラを切る空氣が加洲に彌漫してゐて、東の諸洲の清教徒的な高雅な思想は影さへも見せなかつた。到る處の町の料理屋には強いアルコールの匂と肉を賣る女とが客を呼んだ。ジヨンソンは地方の辯護士の子に生れて、同じように辯護士として世に立つたが、當時加洲の腐敗した政治家の横行と積弊の多い地方行政とは、憤然として彼を蹶起せしめる動機をなした。

洲民の多數の弊を代表して時の政府を痛撃し、洲政府改革の急先鋒として一躍地方政界の大立物となり、テオドル・ローズヴエルトと共に進歩派に投じてから更に全米政界の人氣役者となつた。

彼はこの境遇に左右せられて偶然にしてラヂカルになつた。然し若し群集が反動思想の代表者を要求した場合であつたら恐らく聲を潤らしてラヂカリズムを攻撃したかも知れない。彼を動かすものは民衆の間に流れるパツションであつて、政治上の主義でも哲理でもない。政治上の信念も主義も彼にとつては何等の價値なきものである許りでなく、恐らくは此等の問題を探く理論的に考へたこともあるまいと思はれる。群集の向ふところ、激するところ、即ち彼の政見であり、所論である。然し群集と共に動くものは多くの場合に於てラヂカルでも

る。權利の要求、特權打破、改造の叫、これ等はいづれも一面に於て政治的パッションであり、同時に必然的にラヂカリズムである。唯この種のラヂカリズムは常に危險を伴ふものではない。群集の傾向が危險である場合に於てのみ危險性を帶びる。

ハイラム・ジョンソンが政治家として成功を博し得たと云ひ得るならばそれは彼が群衆を魅する力である。然も其魅力は決してローズヴェルトの如き力强いものではない。ジョンソンの風貌、性格は之に接する者に對して常に不快の感を與へる。溫味のない、利己主義者、我儘な怒つぽい男、さういふ感じはどうしても取り去ることの出來ない印象を與へる。現に一九二〇年の大統領選擧に際しても其選擧の參謀と爭論を斷たなかつた。本年の選擧運動にはオハイオ洲のヒッチコック、市俄古のラスカーの如き選擧上手と大金穴とを參謀長に任命して陣容を張つてゐるが、これも果していつまで圓滑な交涉をつゞけ得るかを怪まれてゐる。

ボラーといふ上院議員が嘗て云つたことに、『ジョンソンと自分と異る點は、自分は凡ての問題を主義の點より觀るけれども、ジョンソンは常に其人物の點より觀察することである。從つて自分は反對論者に對しても憤怒を感じたことはないが、ジョンソンは彼に反對する凡ての人を嫌ふ。ジョンソンは相手方の反對が主義上のものであることを認容せず、彼自身に對する反對と考へる』と。

從つてジョンソンには澤山の友人がない。其周圍の人間——書記や書生に至るまで元氣のない、餓鬼のような面をしてゐるとさる惡口屋が云つてゐる。いづれにしても彼を一貫するものは彼が滿腹の鬪志である。教養に乏しく、理想を欠いてゐるから偶々其云ふところに誠實の表現するものがあつても、其誠實は彼の信念の聲ではなくて、他人に對する嫌惡の情の迸り出たものである。

ジョンソンは共和黨に屬し乍らも、共和黨の多數と相容れない。ノックスを嫌ひ、ハーヂングを嫌ひ、ペンローズを嫌つた。其地盤はモッブデある。其希望は社會の不平等に對する憤怒痛擊の聲を揚げることである。斯の如くして彼は過去二十年吾が加洲の同胞を窮地に陷れることに奮鬪を惜まなかつた。他日彼が政界の落伍者として其淋しい孤獨の生活を送る日が來たら、吾々日本人が「主よ、許し給へ、彼等は知らざればなり」との寛容の心持を以て今アメリカ人に對しつゝある心情をしみじみ思ひ知る時があるだらう。

ヘンリー・ロッヂ。 ハイラム・ハーストの名と並べてこゝにヘンリー・ロッヂを擧げることは暗い心持なしになし得ないこ

とである。アメリカの政界に身を置くこと既に三十七年、今では共和黨の領袖として何人も爭はない地位を占めてゐる彼の名が、排日的移民法の名と結付けられて、永く日本人の記憶に殘さるべき運命となつたことを、私は彼と共に嘆く。七十四歳の高齢にある彼、白髪瘦軀鶴の如き彼、彼浪高き政界の四十年に、惠多き生活を樂しんだ彼の爲めに一九二四年の春を恨まさるを得ない。

ヘンリー・ロッヂが初めてボストン市から撰ばれて下院に入つたのは彼が年僅に卅七歳の時であつた。然し彼は此時既に歴史の教授として六冊の著述を公にし、父より受ついた財産と才能とは政界に於ける新星として其將來を囑目せられた。學者であり、紳士であり、同時に辯護士でもあつた。七十四歳の今日に於ても彼が撰擧區マサチユセッツに歸り、洲民の間に伍して、皺多き冷たき手をのべて撰擧人の手を握る時には、多くの撰擧人は彼を政治學者として又紳士の典型として其名をたゝへる。

ロッヂは一八九三年に上院に入つてからも熱心な行政改革論者として活動した。然し、もつと彼を有名ならしめたことはその愛蘭獨立運動と排英的色彩であつた。彼がクリーヴランド大統領を支持して銀本位を主張した時にも、この法制によつて英國に一撃を與へようとの念は去らなかつた。

ウイルソンとヴエルサイユ條約に對しては彼は全力を擧げて論難した。そして此當時の攻撃は丁度米西戰爭後の條約批准に際して、彼が政府を擁護した時の論理を自ら破壞するに均しい論法であつた。いづれにしてもロッヂのウイルソンに對する反感は頗る强烈であつたが、それは同じく政治學者たる嫉妬に出たものであつて、後進のウイルソンが令名を博したことに不快の念を抱いたものと傳へられる。

ロッヂは二つの野心をもつてゐた。一は大統領となることであり、二は國務卿の職に就くことである。ウイルソン大統領失脚の後は共和黨の候補者として當然彼は推薦せらるべきものと考へてゐた。ハーヂングの當撰後は少くも其の國務卿として就任を求めらるゝことを期待してゐた。然しこの野心は一つも滿足されずに終つたから彼の現政府に對する不滿と怨嗟は決して少くない。この怨いづれの日にか晴さんとの熱念が彼の頭腦に潛在してゐたことは想像するに餘ある。而も一面には共和黨首領として、今大統領撰擧を目前に控えてゐる彼は黨の勝利の爲めにカリフオルニア洲の十三票を失はんことを畏れ、彼の潛在意識は暗に移民法によつて國務卿ヒユーズを窮地に陷れんことを企て、在米日本人の利益と日米兩國の親交とを犠牲にして上

院の共和黨をこの排日法に投票せしめたと解することは果して根據なき臆測に止るであらうか。ワシントン電報は簡單に過ぎてまだ議會内部の秘密を傳へないけれども、この觀測が必ずしも根據ないものでないことは、米國政界の裏面に通ずるもの丶均しく首肯するところであらう。かく推斷して玆にロッチの名をジョンソンと同列に置くことの必ずしも妄でないことを思はざるを得ない。

ロッチは卅七年前に政界に入つた、而も多大の期待を以て迎へられたのであるが、其天稟と、境遇と、性癖とに附纏ふ欠陥は不幸にしてこの期待を裏切つたように思はれる。彼が其昔スペインとの平和條約を批評して大雄辯を揮ふた時、『本員は生きたる現代に就て理想と信任を有し、吾國の將來に就て深き信頼を抱く、本員は今日のアメリカ人を信じ又其の創造したる文明を信頼す…』と壯語したものであつたが其言葉は自信と熱望とに溢れてゐたに拘らず遂には唯一片の古典的演說に終つたかの觀あるを免れない。彼の名句壯語は、之を裏書すべき行動として現れないで終りそうに思はれる。

米國の某記者はロッチを評して『彼には時々小手先のきくといふ外、斷に取立て丶云ふべき材能はない、澤山讀書をするが、少しも身につかない。頭はてんで融通が利かないし、從つて洒落の解る男でもない。但し群集心理を誤解することには天稟の材能を有つてゐる』とひやかした。そして其後に『全くのところ、神かけて、正直にロッチを批評したきゝである』と斷つてゐる。若しロッチが日本人の心持を正直に誤解して排日法案を通過せしめたものならば、吾々は彼の天稟の材能を深く遺憾に思ふ外はない。

排日新聞王ハースト。 マッキンレー大統領が暗殺された時に、其下手人の着物のかくしにイーヴニング・ジョーナルが入れてあつたと傳へられる。イーヴニング・ジョーナルはハースト系の夕刊新聞の最大なるものである。歐洲戰爭から凱旋した米國の兵士が紐育でハーストの接伴委員に迎へられた時には、どれもこれも一齊に怒つたといふ話がある。米國の老記者ヴィラード氏はハーストの最良の友に米國人の健忘症であると云つてゐる。

それ程に米國人はハーストによつて苦い經驗を嘗めた。米西戰爭を起す爲めに如何に苦肉の策を使つたか、歐洲大戰中にハーストの企てた策略がどんなに米國に害を與へたか、而して日本に對しては、移民問題、朝鮮問題支那問題、日英同盟、乃至は軍國主義論等によつて絶へず煽動的の記事を掲載し、今も尚掲載しつゝあることは何人もよく知るところである。

然るに彼は英國のノースクリッフ卿と相併んで世界に於ける新聞王と云はれた。ノースクリッフなき今日に於ては、其新聞

の發行部數に於て彼に追從したるものは一人もない。それにも拘らず或米國人は人としてのハーストを以て現代に於ける最もメランコリー、フイギユワースの一であると云つた。一九二二年に於ける彼の收益は千二百萬弗に上ると稱せられるが、事業熱と金の威力の强い米國に於ても彼は少しの尊敬をも受けてゐない。或種のポリチシアンとして怖れられてはゐるが、何人からも愛せられてゐないこと丈けは確らしい。神秘の人である、然し多數から呪咀の的となつてゐる。數百萬の人が毎日彼の新聞を讀む、然し彼に附隨して行く者は少い。

　ハーストは加洲の桑港に生れた。彼は煽動と誇張とを方針とする新聞經營者であり、政治的に野心滿々たる男である。此等の事實は相作つて彼を極端なる排日家たらしめた。

　この偉大なる排日政治家は三萬八千人の使用人を雇傭し、九個の朝刊新聞と十一の夕刊新聞、十五個の日曜新聞と九個の雜誌とを刊行してゐる。其發行部數はざつとかういふ計算である。

朝刊新聞（九）	百卅四萬三千部
夕刊新聞（十一）	百七十八萬五千部
日曜新聞（十五）	三百五十八萬八千部
雜誌（九）	二百七十七萬四千部

　勿論以上は內輪の見積りであつて一層多數の數字を揭げる人も少くないが、彼等自身の揚言によればハースト系の新聞は米國內の六百九十七萬二千五百家族（米國の四分の一）に讀まれてゐると稱してゐる。

　これ丈けの新聞雜誌を刊行するには一ケ年九千萬弗の經費を要するが、同時に北米合衆國の主要な三十五種の朝刊新聞の受取る廣告料の約三割二分、即ち二千七百七十三萬餘弗はハースト系の新聞に對する計算である。

　ハーストは新聞雜誌の外にインターナショナル、ニユース、サーヴィス及びユニヴァーサル、ニユース、サーヴィスと稱する二個の通信社をもつてゐて、米國の外にも南米方面の多數の新聞に通信を供給してゐる。又その漫畫通信は東京の諸新聞にも揭載せられてジッグスの名は日本の津々浦々に知られるようになつた。

　ハースト系新聞の讀者は多く下層の社會に屬してゐて、教育ある階級には讀まれてゐない。編輯方針は犯罪を種とした社會記事を主とするものであるから上流の家庭に入ることは困難である。報道新聞としても其記事は不正確であり、時としては虛構の事實を捏造することもある。ハースト系の通信社が紐育で報道を捏造し又は聯合通信社の通信を盜用した事件は法庭の問題となつた例に乏しくない。

　斯の如き新聞の大王は實際的社會生活に於て絕大の努力を振ひ得べき筈である。然し今日までの彼の政治的閱歷より云へば一度も大統領となつたこともなく、上院議員又は洲知事に當選したこともない。財を集めるといふことの外には何事にも成功したことは無いように思はれる。それは主として彼に深い政治

的主義なく、道義の信念なく、又これ等の主義と理想に奉仕する熱誠が無いからである。彼の人となりは、冷かな愛嬌のない、そして公的生活の方面から云へば、寧ろ神秘的な性格の持主である。幸にして此等の欠陥あるが爲めに米國はこの人を大統領に戴く危険から救はれたとも云ひ得よう。

ウイリアム・ランドルフ・ハーストは加洲上院議員の子でハーバート大學の出身である。學生の頃から新聞事業に趣味を持ち、殊に紐育ウォールドの經營者ジョゼフ・パリツーの影響を受けた。當時のウォールドは黄色新聞主義を以て全盛を極めてゐた。廿三歳の青年ハーストはハーバートを退學して桑港に歸り、其父の所有するエキザミナー紙を讓受けて之を經營することゝなつた。これが彼の今日ある振り出しである。

ハーストは米國新聞界に知られるようになつてから次第に政界に野心を持つようになつた。其初陣はタマニー派の民主黨下院議員として紐育市から撰出されたことである。一九〇四年には民主黨の大統領候補者として出馬しようと試みたが最も強くブライアンの反對に逢つて果さず、更に一九〇五年にはタマニー派反對の旗印によつて紐育市長の椅子を覘つたが、此時も亦マックレランの爲めに破られて其志を果さなかつた。彼の政治生活に一貫する特質は政治に對する一種の遊戯氣分である。一九二二年の紐育洲知事の撰擧に於ても彼はまんまとアルフレッド・スミスの爲めに破られた。もし此一戰に勝ち得たらば本年の大統領撰擧に於ては有力な候補者として、民主黨の推選を受け得たかも知れないのであつた。勿論彼の政治生涯にこれで終を告げたと云ふことは出來ないが、彼の大統領爭奪戰にとつては大なる痛棒であつた。一九〇二年及び一九〇五年の撰擧に下院議員に當選した當時に於ても、彼は政治的力量を發揮すべき絶好の機會をもつてゐたに拘らず、四ケ年の議院生活に於て何一つ人目を惹くべき事業をなし得なかつた。政治的指導者として彼は其第一次試驗に落第したものである。

最後に附加へたい一挿話は、ロイド・ジョージが政府を退いた後ハースト系の新聞に寄稿の約束を取結んだといふ事實である。歐洲戰爭の間、ハースト系の親獨的宣傳が甚しく英佛諸國の反感を招いて一切其通信の發受を禁止せられたことは有名な出來事であるが、ハーストとロイド・ジョージはこの間の行懸りを一掃して玆に手を握つたのである。感情は感情、勘定は勘定であるといふのが恐らく兩者の心事であらう。ロイド・ジョージは直裁に金がいると明言し、ハーストは常に廣告の必要を痛感してゐる。從つてロイド・ジョージが英國の救濟主たる希望をハーストに賣つたとしても、それは甚しく驚くべき事柄でもない。

ハイラム・ジョンソンやウイリアム・ハーストや、此等の人々の人間としての價値や其社會的功罪を考へて見ると、吾々はローウェルの云つた言葉を更に深く味はずには居られない。

『何故に日當りの良い三階に住らないで、好んで人が穴倉に降りて行くのだらうか』（一三・四・二〇）

日米の關係を憂慮す

澁澤榮一

一

最近、米國の上下兩院に於て排日法案を通過したことは、實に國家の重大事である。私は此事あつて以來、日夜憂慮措く所を知らない。それは恐らく私一人ではあるまい。日本國民皆がさうであらう。私は今、ナニも官職にあるでなし、特に政治經濟的に重要地位にあるわけでもない。單なる一國民に過ぎない。併かも最早、今年八十の老衰の身で、世の中へ出娑婆るのも考へものだし、物々しい斯る天下の大事を喋々するといふことは猶更好まないのである。

だが、私も國民の一人として生存してゐる以上、たとひ官職にはなくとも又老衰はしてゐても、國家に盡すといふ至誠がある間は、天下の大事に當面して憂慮しないわけには行かない。私が青年の頃から服膺して來た古人の教へがある。『古人言、斃而後已』といふ詩の句だ。これは同天詩史の中の句だが、諸葛孔明の『死而後已』から出てゐる。私は此信條を愛するものである。苟も、國民である以上、國家に盡す至情は死に至るまで止むべきものでないと信ずる。

私が此度の排日法案を指して國家の重大事なりとして呼號せんとするのも、その所からで、敢て物好きでも何でもない。殊に米國に對する私の個人的因縁は深いものがあるに於てをやである。

私は埼玉の百姓家に生れたが、子供の時から漢籍が好きで、自然、天下國家に思ひを致すに傾く素養が出來てゐた。元來誰でも少年時の心を動かされた事件は、何時までも感銘を持續するものであるが、私が恰度十四歳のとき、彼の黒船に乘つて日本へ渡來したのが、ペリーであつた。ペリー提督の渡來は、當時日本朝野の迷夢を破つて、鎖國政策を放棄すべく餘儀なく

させた。此大きな事變は、私の心に大きな衝動を與へた。即ち此黑船とペリーとを送つた亞米利加に對する興味が此頃から持てたのである。

其頃、一般の漢學者仲間の頭を風靡してゐた思想は攘夷說であつた。私も一時は其說にかぶれ、二十四、五には農を止めて浪人となつて京都に出て一ツ橋の家來となつてゐた。

ペリー渡來後十年の間に時勢の進運は爭はれないもので、私の如きも、世界のことを多少聞知り攘夷一天張りでは行けないことに氣附いて來た。それでやがて德川民部太夫に隨ひて佛國に赴くに及んで、全く君子豹變して攘夷思想を放擲つた。

かくて私が日本へ歸つて來た頃は、恰度御一新となつてゐて、外國と修交するといふ日本の政治上の根本策が建てられてゐた。私がそれを支持したこと勿論である。

二

開國の當時、修交のあつた諸外國の中で、一番正義を重んじ且つ日本に對する善意が多いと思はれたのは亞米利加であつた。それは下關事件や治外法權撤去問題等によつて例證された。米國公使は、他國の公使よりも、何かにつけて親切で禮儀があつた。米人は成程或點からは拜金宗に見えるけれど、或點からはすつきりしてゐて誠に直情徑行的な所のある面白い國民だといふことが分つて來る。かくして往昔少年の日に、米國は甚だ恐い、日本を占領せんとの惡意があると思つてゐたことが妄想であつたと漸次に分つて來た。そして其結果は、今までとは打つて變つて、お互に親交を增すやうにしたいとの情念が湧いて來るのは、自然の勢ひである。かくして日米間の貿易は進み、日本から海外に輸出する生糸の如き、其七八割は米國に販路を持つやうになり、又彼國から購入する品物も多くなつた。それに移民も、最初は賃金が安くて能率があるといふ所から、彼國の資本家に歡迎されて、加洲其他の太平洋沿岸に多く出稼ぎに行くのをみては、嬉しいことだと思つてゐた。かゝる狀態の下で、明治が四十年も經過し、兩國の親善と平和は、彌が上にも增進して行くのみであつた。所が兩國の修交狀態に一味の暗雲が表はれ初めた。それは日露戰爭に關連して起こつたことである。

米人は由來、鼻柱の強い一種の武士道精神にも似たものを持ち合せてゐる國民である。これは餘談だが、其一例には、舊幕時代國交のそもそも初めの頃、麻布にタウンセント・ハリストといふ米國の公使が住んでゐた。其頃は攘夷論者の餘黨がまだ殘存してゐた際であるから、外國使臣の身邊は必ずしも安全で

はなかつた。果して和蘭公使の通譯が攘夷黨の浪人から切り附けられた。此事件の直後に、各國の使臣は恐れをなして、皆横濱に引揚げたに拘はらず獨りハリスト米公使のみは踏止まつてゐた。さうすることは日本に侮辱を與へるものである、開國の當初には、かうしたことは何處にもありがちである。又再び亂暴者が來て、たとひ殺害されるやうなことがあつても、それは自分の光榮ある運命であると云つた。之を聞き傳へた他國の公使は續々として横濱から歸つて來た。斯樣にして日本の體面を維持してくれた美談として後世に遺つてゐる。此人の墓が紐育の近郊ブルークリンにあるので、私は先年渡米した折、其所を訪ねて、詩や歌を作つて故人を追慕したことがある。

さて日露戰役に關連して日米の國交に一味の暗雲が表はれたと云つたが、日本が露國に打勝つ等といふことは、世界の人が夢想だにしてゐなかつた、殊に米國にとりてはさうであつたし、それを喜ばないと云つた風があつた。其所でかのルーズベルトが乘り出して日露の國交恢復に容喙したのである。其結果は、日本が思ふやうに償金が取れなかつたといふので、米國の不親切を怨んで惡聲を放つ者が出で、戰捷の國威を笠に着て、米人に當り散らしたのが加洲邊りの移民にもあつた。かうしたことが原因となつて排日の運動は起り、遂には日本學童の差別待遇だとか、日本人の職業に制限を設けるとか云つたやうなことゝなつた。それが明治四十年の頃であつて、私が日米問題に對して外交官のみの問題にしておけない、國民外交として微力を盡すべきであると決心した發端も此問題に絡んでゐるのである。

三

私は子供の時から主に漢籍をやつたので英語もよく分らず、不幸にして外國の事と云つたら、支那は別だが、さう詳しくは知らない。けれど人情は何處も同じだと私は思つてゐるから、米國に關する問題にも始終大膽に當面して來た。

前述した通り、米國で日本移民の排斥問題が起つたので、機を見るに敏なるルーズベルト大統領は、日本と紳士協約なるものを締結した。これは決して日本として好ましい協約でなく、それが日米問題を永久に解決するものだとは、誰にも信ぜられなかつた。

それで當時の外務大臣小村侯は、私とは親愛なる間であつたから、私に勸説して、日本の商業會議所が米國の主なる商業會議所に連絡を附けて、日米親善を計つてくれぬかと云ふ相談であつた。私はその頃、東京商業會議所の會頭を中野武營君に讓

つてはゐたが、矢張何彼に、中野君から先輩として相談を受けてゐたし、且つは一國民として日米問題解決の衝に當らうと考へてゐた際ではあつたから、小村侯の請を容れて、日本の商業會議所を代表し、明治四十一年には米國の商業會議所代表を招待し、其翌年には彼方から呼ばれて行つて、御互に親交を換はして今日に至つてゐる。其國交上に及ばした影響は、思ふに少くなかつたであらう。

排日の歴史はかくして長い。其原因と見做さるゝものに二つある。一は即ち、日本人の性格が『同化しない』國民だといふことである。蓋し之は、人種や宗敎の相違によるかも知れないが、同化しないで能力のある人種は、其國の平和を破ぶるといふのである。之は學識ある人々によつて稱へられてゐる排日の理由である。次には勞働階級からの經濟的原因による排斥である。これは米國の人口が稀薄であつた間は問題とならなかつたが、だん〳〵勞働力が充實して來るに從つて起つた問題である。日本人は勤勉な上に勞銀が安い、殊に葡萄栽培の如き特種の勞働に於ては、日本人の方が、却つて白人に比し、技術も優秀だと來てゐるので、白人勞働者の生活を脅威することが偉大だから、自然排斥が起る。其他にも風俗が合はないとか、子供を泣かせるとか、いろ〳〵排斥の口實はある。だが、以上二つが先づ大きな原因となつてゐる。

矢張り『同化しない』といふことから起る面倒の一つに、二重國籍者問題がある。米國で生れた日本人の子供を、米國では米人として登錄するし、日本では日本人となつてゐることである。これが又面倒を惹起す原となつて來た。尙ほ、親は大抵が十分英語を解せぬのと、いつ日本へ歸るかも知れぬので、子供に日本語を敎へる。それも亞米利加化しない理由として批難される。又日本人が寄れば屹度、日本風を發揮する、何處へでも日本村を建てるといふのである。

そして徹底的に日本人を驅逐しやうと、手を變へ、品を變へ、有らゆる運動を起してゐる。最近（大正二年頃から）實現されたのが、土地所有禁止に對する法律である。

かうした憐れむべき滯米同胞の狀態をみて、私はどうしても、根本的對策を講ずる必要を痛感するのであつた。

四

私は日米間の懸案解決の策として、一昨年頃から切りに政府に慫慂するに、米政府と諒解の下に兩國の委員を抱擁する高等委員會を組織し、其委員會で十分調査研究し且つ胸襟を開いて討議した結果を、兩國政府に於て、條約又は別種の協約として

締結すれば、此懸案の解決は容易なるべしと思つたけれど、不幸にして此考へは米の國務卿ヒユーズの反對に逢うて用ひられなかつた。

其後排日問題は益々惡化し、殊にジヨンソン、ロツヂ案の如きはなか〳〵峻嚴な所が見えたから、誰か行つたらよからうと、現內閣の成立當時から政府に忠告してゐたけれど、これも未だに實現されてゐない。かうして日本の政府が拱手傍觀してゐる間に、米國議會の形勢は急轉に直下し、今やかの徹底的排日法案が上下兩院を通過し、日米の關係を一層暗澹たるものとした。

私としては今まで、絕えず此問題を憂慮して對策に腐心して來た積りだが、今少し兩國政府に於ても本問題を解決する熱心があつたら、斯程までに紛糾しなくとも濟んだであらうと遺憾に堪えない。

今や唯一の殘されたる對策としては、米國民に訴へて、其失はれつゝある正義人道を取戾して貰ふことである。道理正しいことは遂には勝つ。善は年久ふして必ず蘇生つてくるものであるといふことを、私は神とは云はぬ、天に對して信じてをる。吾々は何處迄も正しい、米の排日こそ惡いのだから、今に、米國民の中からタンセント・ハリスみたいな公正な人道的勇士が續出して、此惡を驅逐して、遂には米國をして吾々の考に同意さすの時機があるであらうと期待する。

排日法案を何んと見る

三宅雪嶺

米國上下兩院で排日移民法案を通過したに就き、大統領がいかに處置するか、裁可か拒否か默認するか、今のところ明白を缺き、恐らく本誌發行の頃に知らるゝであらう。裁可は不穩當さりとて拒否も効能なく、不意の出來事のない限り實行せらるゝものと考へねばならぬ。何分にも大統領選擧期の迫つてをる際、共和黨も民主黨も西部の投票を得るに努め、排日に力瘤を入れずにをれぬ。少くとも入れるかに示さずにはをれぬ。

埴原大使が"Grave con equence"といふ語を使用したのを以つて威嚇と解し、鬼の首でも取つたやうに偶れ廻はすのも、煽動の意に出てゝ居る。

後から顧みれば、大使が他の語を使用した方がよかつたとし、豈かそれほどに曲解されるとまで思へなかつたらう。何んでもござれ苟も選擧に利用し得ることは、悉く利用しやうとするので、殆んど手の附けられぬ勢ひである。

正義人道を眞向に振翳す國民にあるまじき行動とし、煽動政治家に罪を期せんとするものゝ、煽動するのは煽動されるものがあるからであつて、單に煽動家をのみ責むべきでない。果してハースト系の新聞だけが、排日熱を擧げ他はさうでないか。若干大新聞が正義を主張し兩院の行動を攻撃するけれど、全米國の新聞を區別けすると如何になるか、日本への報道では、輿論が日本に有利になつてをるが、有利なやうに報道する例あり、共まゝに早合點するわけに行かぬ。固より米國に正義人道を執つて動かぬのがあり、世界人類の爲にするのがある。然し、自分勝手なのが相應に多く、夫程勝手でない連中も、脊に腹はかへられぬとするに傾かぬでない。日本が米國に促されて開港し、英語を學び初めた時、米國の教科書を使用し、パーレーの萬國史が幕末から明治二十年頃に及んでをり、中に英國の事を云ひ、「英人は國内でよい人間であり、國外で惡い事をする

を憚らぬ」としてあつた。彼書の編輯された頃、米人の眼に英國がさう見えたのである。

米人は自由の天地に自由を樂しみ、四海兄弟、天國を地上に造るの意氣込みであり、轉じて舊母國の英國を見れば、世界到る處に國旗を揭げやうとし、既に印度を領有し、尙ほ其他の民族を强制し利權を得やうとしてをる。内に居つてゼントルメン、外に出でてゼントルメンでない。

米は、實に英の態度に飽足らず、日本に對しても英の壓迫を緩和するに斡旋したこともあり、ハーリスの名は今に記憶せられて居るが、これ米國が植民地當時の精神を持ち續いてをる間のことであつて、英國と同樣に國力を養ひ、動もすればこれを凌駕するに至り、勢ひ、英と同樣になるを免れぬ。風土が違ふだけ事情が違ふにせよ、國内でよい人、國外で惡い人になるの傾向がある。

日本の開港を促すの時、既に國務卿シユワードが、米の將來の亞細亞にあるを云ひ、爾來機會ある每に力を延ばさうとした。

英國が印度洋を經て東洋に力を延ばし、米が太平洋を經て東洋に力を延ばすことになつてをり、看板が異つても同一の目的を指すことが色々ある。米は遲れただけに急ぐこともある。初め東洋諸民族は、幾段か白人に劣り、憐れむべくとも恐るべきでなく、脅しつ賺かしつ何んとでもなるとしたが、のちに豫想を裏切られたことが樣々あり、日本が支那と戰つて勝つても、露國と戰つて勝つとは、全く思ひ及ばなかつた。露國が支那を侵略するのを防ぐに利用すべく、露に勝つて支那に利權を擴張するなど、分外のことゝして不快を感ずるの色がある。

米國で利權に關係なく良い生活を送らうとする人々は、斯ることを苦々しく思ふも、利權漁りに夢中な連中は、支那の富を我勝手になるが如く思ひ、其邪魔になる日本を、直ちにやつけねばならぬとする。米が日本の肩を持つたのは、その露國と開戰するまでのことであつて、大陸に力を延すとみえると共に、何とかしてこれを抑えねばならぬと考へ初めた。世間には自身よりも下にをる間、切りに同情し、肩を比べるに至つて百方排斥するのがあるが、國家も其勢ひを免れぬ。英は、佛の强きをみて露と共に之を打ち、露の强きをみて佛と共に之を打ち、獨逸の强きをみて佛露と共に之を打ち、常に第一位を占めんとした。米國は初め地廣く人少く、自國内の事業を以て足りたけれど、人口增加し、大國の形を成すに從ひ、世界政策を考へるやうになり、歐洲に出兵したほどであつて、亞細亞に勢力を揮はずにはをれぬ。

亞細亞人排斥は、其移民の多きに過ぐるを憂へた所あるけれど、旣に制限しては其氣遣ひなく、日本も紳士協約の下、精々一年に幾百人といふに留まる。何の害になるべきでなく、それを目の敵にして議會の大問題とするのは、日本の勢力を東洋で抑えつけやうとするに外ならぬ。それといふのも、世界戰役で列國疲弊し、獨りアングロサクソンが最も力を得、よく敵對する者なくなつたに依る。

曾て米國が滿州鐵道に嘴を入れたとき、日露共同して之を遮り其儘になつた。露獨墺三大國家が國際關係の外に出でたのも、アングロサクソンの有頂天になるに與つてをる。

今米國が、英國第二世といふ立場であり、少壯氣鋭、一層力を揮はうとしてをる。假りに日本で、這回米國議會で通過した排日移民案を變改し得るとし、何か之に變るものが現れ出づるに定つてをる。形を異にして實を同じくし、何所までも太平洋及び亞細亞で障害物を排除しやうとする。一年二年で目立つたことなけれど、或期間を經て相應の効果あるとせねばならぬ。

其處で日本が、如何にすべきかが問題になる。氣早な連中は、兵力に訴へよと云ひ出したりする。華聖頓會議が我海軍を縮少し、英米日を、五五三にしたのは、取返しのつかぬ失敗といふが、其消息の世間に明にならぬのは、國情の眞相を考へる事の妨ぎになつてをる。加藤全權委員の苦心は少くなかつた。米國で日米開戰を煽動のみに使はず、幾分か眞面目に考へたのもある。いよ〳〵開戰になつても、日本から米國にまで出兵せず菲律賓を取つて守るであらうと云ふたりした。何程か頭痛の種子になつたのをば、震災で外債を米國に起すの餘義なきに至り、到底開戰するを得ず、したとて永續きせぬとし、多寡を括り、言行に表はすを辭せぬ。萬止むを得ざれば、日本で開戰せぬでなけれど、今夫程までに立到つてをらず、漫りに開戰を口にするなど、他の侮りを招く所以になる。

舊幕時代に、武士は漫りに刀を拔かず拔けば必ず血を見る、といふ諺があつた。武士が何かにつけて刀に手を掛けたのは、不心得の次第とせられた。米國に對しても、最後の決心まで戰意を示すべきでなく、此邊は幾らか訓練を要する所がある。

それならば何を成すべきか、亞細亞諸民族を糾合して米國に當るべきか。それを實行し得るならば、確かに米國を反省せしむるに足るけれど、亞細亞の無力の知られたのは、諸民族の協同し得ないに基づく所が多い。歐洲列國が十字軍を起し、亞細亞に其例ないのは、種々の事情よりするけれど、兎も角も斯邊に協同するを得ぬ事實を認めねばならぬ。協同の必要を說いても、いよ〳〵着手して何程の力になるやが疑はしい。

印度でガンヂが力あつても、畢竟何の結果を齎すか。亞細亞諸民族の協同は、絶對不可能でないとし、漫りに賴むべきではなく、之を賴んで空賴みに終るほど情けないことがない。

有色人を糾合し、協同運動を有効としても、漫りに之を標榜するのは有利でなく、降らぬ威嚇として却て侮られることになる。下手な威嚇ほど役に立たず且つ損になることはない。支那でも印度でも損したのは、概ね實力のない威嚇に出でゝをる。

何んといふても侮蔑を防ぐには、他に依賴するの必要ないことを、明にするに如くはなく、日本から米國に移民しなくても他に相當の途があると分れば、米に於て從來のやうな仕打ちをすべくもない。

墨西哥や南米や、米國ほど住みよくなくても、大規模に移住するに足り、少いながらも新日本を建設するの希望がある。墨西哥は米を嫌ふこと甚だしく、不倶戴天の仇といふても妨げたいほどであつて、行く〳〵米に併合せられるとし幾多紛擾を經た後でなくてならぬ。日本人が入込むのは、日墨双方に利益ないとせぬ。米から餘計な疑を受けるかも知れぬが、墨西哥の歡迎する儘に移民してみるもよいでないか。それよりも滿蒙から西伯利にかけ、地廣く、人は稀れ、人の移るべき所が、殆んど無限の狀態である。氣候が惡くして堪へられぬといふが、設備さへよくせばさうでなく、西伯利のみで、一時內地人が三萬人を超えた。軍隊に附屬してゐたやうでも、兎も角も移住し得ない土地でない。水田さへ作つてゐたのがある。加奈太が次第に開發されるとしても、寒地として棄ておくべきでなく、新發次第で思はぬ運命を開拓し得やう。

西伯利の野は到底露國人の力のみで開發し得べくもなく、必ず他の民族を交ゆるを要し、中にも日本人を必要と見做さねばならぬ。露國人は人種の毛嫌ひなく、或る點に於て平等を實現してゐる。赤化、非赤化で相排斥するのは、双方に利益なく、相當の諒解の下で、隱れた富を開發するのも、自分に益するのみでなく、世界を益すべき順序になる。日本で露國と交通せば、必ず赤化されるといふほど、國民思想の基礎が薄弱なものか。多くの共和國と交つて何の危險あつたか。其程心配して米國の太平洋を乘り越し來る勢力を防ぎ得るか。

英國、伊國等が勞農露國を承認した後に、遲れ走せに承認して何の得る所あるやが疑はしく、此邊を更に巧にし得たら、同じく米に對して騷いでも手應へのある騷ぎになつたらう。國內の勢力爭ひに專らになり他に注意を拂はぬので、得べき所をも得ずに終つて了う。下司の智惠は後から出るといふが、何時迄下司になつてをらねばならぬか。さういふことをしてもそれを

恐れるやうな米國でないと云へば、さうもあらう。日本が新に滿蒙から西比利に發展したとて、米は必要に應じて金力及び人力を用ひ、他を抑制せねば止まぬであらう。

其處になれば我日本の運命は、如何に國民の力を發揮し國力を彌が上に增大し得るかにある。最も憂ふべきは、日本國民の努力が、米國に劣り、アングロサクソンに劣ることである。而して政府が國民の努力を欲しない跡がある。明治維新五條の誓詔の如くして續いたならば、決して現狀に止つてをる筈なく、帝國議會を開設しても、日本より人口一千萬も少い英本國で選擧人を二千一百萬にした時、日本で選擧人を三百萬に限り、それ以上に膨張するのを危險とし少し、でも新な思想を以つて新な運動に從事するを危險として騷ぐやうな事がない。世間でも過去に歸らうとし政府でも之を奬勵するやうになつてをる。それで英米に對抗し得るか如何か。對抗し得ないと明かに云はなくても追隨してをるでないか。それならば移民問題でも彼是云はず順なしく引込んでをる方が世話なしでないか。そしてをれず、何處までも正義人道で爭はねばならぬとならば、先づ自ら覺悟する所なくてはならぬ。世界に向つて、人種差別撤廢を主張し其實行に着手するには、自ら差別に拘泥しないことを明にせねばならぬ。自ら欲しない所を他人に望むのは當つてをらぬ。世界人類の爲めに白人の横暴を挫くには、自ら横暴を戒めるの必要がある。

若し能ふ限りの努力を以つて、物質的及び精神的に進歩發達を計り、たゞ及ばないのを恐れたならば、有色人が賴みにすること云ふまでもなく、米國とて "Grave con'equence" の一言を彼是云はず條理の通つた道理に賛同せずにをれぬであらう。日本が他に輕んぜられるのは、根本に於て進歩發達の努力の缺乏よりしてゐる。

亞細亞大陸の大を以つてして歐米に輕蔑せらるゝのも、進歩發達を怠つたに依る。日本はこれと趣を異にしたので、特別扱ひを受けたが、それでも今は漸く、同じやうにせられる。欠張り亞細亞人は亞細亞人たるか、はた今後率先して模範を示し、亞細亞人が一度び覺醒せば如斯きものであるぞと證明するか。

米國の排日移民法案は、當面の問題として何んとか片附かうが、之に作ふ勢を察すれば遠き將來を考へねばならぬ。

排日癌の切開を要す

水野廣德

米國の排日問題は多年太平洋の波を騒がしたる日米國交上の癌である。毎年少くも一回は其の發作的疼痛に依りて兩國の國交は著しく脅かされて來た。日米の親交を永久に確保する爲めには早晩切開手術に依つて根本療法を施すの必要があるのである。若し徒らに忍苒躊躇して其の期を後れば後る程、危害を大ならしむる虞がある。然る處日米多年の難病たる此の排日癌に對し、最近米國の議會に於て根本的手術が行はれた。祝すべきか、弔すべきかは、手術が果して適法に行はれたるや否や、豫後の結果が良好なるや否やに依つて決せらるべき問題である。若し今回の荒療治に依つて日米國交上の癌を根治し得るとせば、手術の爲めに被むる一時の疲勞や衰弱はさほど意とするに足らないと思ふ。

米國に於ける排日の起源は今世紀の初頭即ち明治三十四年頃からである。自分が海軍の練習候補生として初めて米國の西岸に航海したのは明治三十二年であつた。其の頃米國に於ては支那人排斥運動の漸く終りを告げたる時で、タコマ、シヤトル、サンフランシスコなどに於ては排支氣分が尚ほ頗る濃厚であつた。米人の子供等は途上支那人を見ると、モンキーと罵りながら或は石を投げ付け、或は棒切にて打ち、或は辮髪を引張り、甚だしきは唾をさへ吐き掛ける者があつた。忍耐強き支那人は斯かる侮辱と虐待とを受けながら格別抵抗もせず逃げ去るのが常であつた。我等は此の有様を見て同じ亞細亞の人として同情と悲憤とに堪へなかつた。而して當時支那人排斥の理由とせる處は、今日に於ける排日の理由と殆んど大差なく、一は米支の人種的偏見と、一は支那人の經濟的成功に對する米人の憂慮と嫉妬とに過ぎなかつたと記憶して居る。今日排日運動の策源地と言はるゝ桑港に於てすら、當時に在つては日本人排斥の聲は尚ほ未だ起らず、唯途上に於て野卑な白人勞働者等より「ジヤツ

プ」、「スケベー」などゝ呼び掛けられて不快を感じた位に過ぎなかつたのである。併し鼠の次には猫が追はれ、兎の後には犬が煮られる諺の如く、支那人排斥の次に日本人排斥の起るべきは唯時日の問題であつた。此頃日本人の米國出稼は殆んと無制限の有様で、桑港の如きは一般出稼人は素より、皿洗や窓掃除などの日本の苦學的勞働者が群を成し、其野卑な風俗と ダラシなき生活とは、米人は勿論思慮ある日本人をしてさへも不快の感を抱かしめた。排日の種子は實に此間に蒔かれたのである。

されば米國に於て第一に排日の烽火を擧げたのは、日本人の最も多く居住したる桑港であつた。桑港こそは實に我が在米同胞揺籃の地たると同時に亦排日運動發祥の地である。即ち一九〇〇年（明治三十三年）同市市民大會に於ける日本人排斥の決議こそ、米國に於ける排日運動の濫觴とも云ふべく、翌一九〇一年には日本移民制限の建議案が初めてカ州州會を通過し、排日問題なるものが早くも法律的運動と進化したのである。尋て一九〇四、五年に亙れる日露戰爭の結果、我が國運俄かに勃興するや、一部米國民の嫉妬と恐怖とを招きたるものゝ如く、戰後排日運動は再び强烈となり、一九〇六年には日本學童隔離問題なるものが起つた。戰勝の餘威に乘ぜる我が國民は大に激昂し、政府亦之に關する抗議を米國に提出し、爰に初めて排日問題なるものが日米兩政府間に於ける公式外交問題となつたのである。斯くてて翌一九〇七年には排日の運動を緩和する爲め所謂紳士協約なるものが締結せられ、日本は自發的に移民を制限することを約したるも、未だ以て米國民の排日運動を阻止するに足らず、種々の問題は次から次へと年々カ州議會に現はるゝと共に排日の空氣は漸次米國西岸並に内地各州に迄傳播するに至つた。是に於てか日米兩國民の感情は次第に阻隔し、兩國の國交は次第に急迫を告げ、日米戰爭不可避論は世界到る處に唱道せられ、太平洋は頗る不太平洋の觀を呈したのである。左れば米國に於てもルーズベルト、タフトまど歴代の大統領は痛く之を憂ひ、大に排日運動の抑壓阻止に努力したるにも拘はらず、一九一三年カ州議會は遂に日本人土地所有禁止法案を可決し、我が移民に對して大打擊を與ふるに至つた。

偶一九一四年歐洲大戰の勃發と、我國の聯合國參戰とは、自ら日米國交の氣機を緩和したるも、米國に於ける排日運動は其後と雖とも毫も息止せず、一九一五年には初めて米國の中央議會に排日法案が現はるゝに至つた。是に於て排日問題は米國の地方問題より遂に愈全米的問題と迄轉進したのである。斯くて歐洲大戰の結果、米國は一躍世界第一の富强國となりて鼻息頗る荒く、日本も亦世界五大國の一に列せられて國民的自負増長

し、太平洋を狹んで兩々相對峙するに至つた。而して米國に於ける排日運動は尙ほ年々絕ゆることなく、カリフオルニヤ、ワシントン洲の如き太平洋沿岸洲に於ては在留邦人に對する壓迫益々甚だしく、加ふるに日米兩國間に於ける對支政策の衝突あり、爲めに兩國民の感情は晴遷默移の裡に漸次險惡となり、動もすれば海軍競爭を誘起して大戰前に於ける英獨の轍を踏まんとするの形勢をさへ馴致したのである。唯幸に華府協定に依り無謀にして危險なる海軍競爭は避け得たるも、排日運動は依然として繼續せられ、一九二二年には米國大審院に於て日本人の歸化不能を判決し、翌一九二三年には歸化不能外國移民禁止法案が排日の急先鋒たるジョンソン氏に依つて議會に提出せられ、最近終に上下兩院を通過するに至つたのである。

日本移民禁止條項を含める移民法案は今回下院に於ては三二二票對七一票、上院に於ては七一票對四票（最終投票に於ては六二票對六票）と云ふ殆んと全院一致に近き壓倒的大多數を以て可決通過した。今は唯大統領の批准を待つばかりである。大統領にして一たび批准を行へば新移民法案は法律となつて効力を生じ、日本移民は將來絕對に入米することは出來なくなるのである。即ち米國の爲す處が邪であれ、惡であれ、非人道であれ、不正義であれ、多年我が國民の心を苦しめ、頭を惱まし、時に血を沸かさしみたる排日問題なるものは根本的に消滅するのである。

大統領クーリッヂ氏が國際正義を固守して批准を拒絕するや否や、米國上院が新聞の攻擊に省みて更に考慮するや否やは、事件進捗中の今日遽かに推判すべき限りでない。併しながら日本の如く貴族特權內閣さへ是認せらるゝ官僚國ならばイザ知らず、苟くも國民を基礎とし議會を中心とせる民主共和の米國政府としては、縱令一部の新聞紙が如何に上院を非難しようとも、又米國に快からざる國の新聞が如何に日本に同情しようとも、あれ程の大多數を以て通過したる議會をば大統領として批准せぬ譯には行くまいと信ずる。加之移民法案は米國に取りては純然たる內政問題であつて外國の干渉を容るべき限りでない。故に若し之に對する米國の抗議が强ければ强き程、自尊心の大なる米國人の性格として是が非でも押し通すに極つて居る。殊に上院の態度を非難せる新聞紙は何れも日本移民と直接の交涉關係を有せさる米國東部の新聞であつて、日本移民と直接關係を有せる中部以西の新聞は悉く手を揃へて新移民法案を歡迎して居る樣である。故に大統領が批准を拒む如きことあらば、或は米國の內政上にこれこれ「山々しき結果」を招來するかも知れない。是等の點より考察すれば、我が國民の全部と米國民の一

部とか好まざるに拘らず、クーリッヂ大統領は恐らく之を批准するであらうと思はれる。縱令又大統領が日本に對する情義上一時批准を遲延することありとするも、議院の決議を飜へさゞる限り結局に於て新移民法案は實施せらるゝものと我國民は覺悟せねばならぬと信ずる。

日本の善良なる人達は米國一部の新聞論調を見て、排日は眞の米國民の意志にあらずして低劣なる政治家の「爲めにせん」とる野心にあらざれば、彼等の私的感情に過ぎないと說き、一は以て米國人の歡心を迎へ、一は以て自ら慰めんとして居る。日本の如き制限選擧の國と異り、最も徹底したる普通選擧とデモクラシイの國たる米國に於ては、議會の意思は即ち國民の意思であると認めざるを得ない。其の議會に於て上下兩院ともに八割乃至九割五分以上の大多數の一致したる意見が、國民の眞の意見を代表せずとはどうして言ふことが出來るであらう。殊に議員達が排日問題を以て選擧の道具に供すると云ふ事が、既に米國民の大多數が排日に共鳴せることを示せるものである。何れの國に於ても政治家なるものは國民に最も人氣ある問題をば武器として撰ぶのが常である。とは云へ我等は素より米國一部の國民の我國に對するは同情と排日に對する正論とを開て感謝の意を表するに吝なるものではない。唯彼等の好意は好意として感謝すると共に排日の事實を事實として認めざるを得ないのである。要するに其の事の是なると非なると、正なると邪なるとに拘はらず、米國民の大多數は日本移民を歡迎せざることは疑ふの余地なき事實であると云はねばならぬ。日本移民の在る處排日は必ず付き物である。我等は此の事實を率直に從順に承認すると同時に、何故に米國人が日本移民を好まざるかと云ふことゝ、何故に日本は嫌はれながらも米國に移民を送くらねばならぬと云ふことを研究する必要があると思ふ。

米國の排日には種々の原因と理由とがある。其の米國人側の言ふ處に依れば、民族傳統性質思想等を根本的に異にせる日本人は米國民として到底同化せざること。生活程度低く勞銀廉くして白人勞働者を經濟的に脅威すること、生産力强く繁殖力大なるが爲め將來土地獨占の虞あること、米國に對するよりも祖國に對する愛國心强く有事の場合國防上危險なること、風俗習慣を異にせる日本人との共同生活は白人の生活を不快ならしむること等である。何れも相等の根據と事實とを有して居る。一度米國に於ける日本勞働移民の生活狀態を目擊したる者は、恐らく米人の言を首肯するであらうと思ふ。殊に日本人獨得の國民精神をば共和の米國に於て露骨に發揮鼓吹する如きは、米國民の心を刺戟すること頗る大であらねばならぬ。元來世界に類例

なき特種の歴史と文明と生活様式とを有する日本人は、外國に移住して土着の人民と共同生活を爲す上に大なる缺點と短所とを有して居る。而かも日本の教育方針なるものが動もすれば國粹尊重の保守主義と御國第一の已惚主義に傾けるが爲め、外國人との生活協調をして一層困難ならしむるものがある。要するに米國に於ける排日は黄白兩人種間に於ける宗教道徳生活習俗等種々の因子の錯成せる人種的異同に歸するもので、決して單なる勞働上の經濟問題のみではないと信ずる。日本人の皮膚の色が白くならざる限り、日本移民は到底米國に安住することは出來ないであらう。

米國が歐洲二等國以下の白人移民をさへ許しながら、世界の一等國として五大國の一に列せる日本移民を排斥することは、國際道徳上より見て或は不都合かも知れぬ。我等日本人としても亦大なる憤懣と痛憤とを感ぜざるを得ない。素より新移民法案には歸化不能外國移民とのみありて、劣等國の移民とも、日本移民とも、特に規定してゐない。故に今回の日本移民禁止を以て直に日本に對し劣等國の刻印を捺したものであるとは言へぬが、歐州人と日本人との間に差別的待遇を爲すと云ふ點に於いて吾等日本人の不滿と不快とを抱くものである。之を以つて新移民法案に就きて日本の論ずべき點は、日本人が劣等人種であるや否やの問題でなく、日本人に歸化權が有るや否やの問題である。然るに一九二二年米國大審院は日本人には歸化權無しと明かに判決を下してゐるなれば日本人對する差別待遇問題は今回移民法案に依つて突發したものでなく三年以前に於ける大審院判決當時に發生した問題である。當時之に對し我政府と我が國民とは如何なる抗議を提出したるかを我等は記憶しない。今日の移民法案の通過に驚きて俄かに差別待遇の不法を叫ぶ如きは、聊か期限を過ぎた手形を催促するの感がある。本來或る國が外國の移民を許すか許さぬかは純然なる其國の内政問題に屬し、外國の干渉を受ぐべきものでない。左れば國家社會の安寧と幸福とを保つ爲め歸化權さへ無き外國の移民を拒絶することは國際道徳上責むべきでないと信ずる。日本人は頻りに米國排日の不法と兇暴とを難詰してゐる。其の點に對しては我等も同感である。唯併し我等は米國をせむる前に少しく自ら省る必要があると思ふ。抑も米國に出稼する如き日本移民の大多數は、彼等の生國たる日本に於てすら國政に參與する資格なき劣等國民として一票の參政權すら與へられて居ないものである。然るに米國に歸化したる外國移民は其國籍の如何を問はず、一様平等に參政權を與へられることになつて居る。本國に於てすら參政權を與へざる日本移民に對し、歸化を許して參政權を與へよ

と要求することが出來るであらうか。故に參政權の點より見れば米國が日本移民に歸化を許さざるは寧ろ當然であると云ひ得るのである。素より日本に普通選擧が實施せられたからとて米國が直に日本移民の歸化を許すとは思はれない。併しながら國際間の道理として、日本に米國同樣の普選の實施せらるる迄は、米國に對して日本人の歸化を要求することさへ出來ぬのではないか。人種平等問題と云ひ、移民問題と云ひ、我日本人は餘りに對外敵愾心に過敏なる代りに、今少しく冷靜に、内察内觀の必要があると思ふ。

移民問題は内政問題にして他國の干渉すべきにあらずとすれば、茲に唯問題として殘るは新移民法案が從來結ばれたる條約に低觸すること無きやの點である。日本と米國との間には特に移民問題に關して一九〇七年締結せられたる紳士協約なるものが存在し、日本は紳士的信用を以つて自發的に移民の數を制限することになつて居た。然るに米國上院は今回新移民法案を可決すると同時に、茲に紳士協約をも破棄して仕舞つた。我等は紳士協約なるもの丶條約上の性質を詳知せざるも、若し米國上院の爲す處にして日米條約に違背し、國際信義を蹂躪する如きことありとすれば、我國は正義擁護の爲め正々堂々に抗議を米國に提起すべきである。之に反し米國の爲す處にして若し條約に違背せずとせば、其際我が國の執るべき對策如何?。之が最も重要なる問題であると思ふ。

元來日本移民を排斥するは獨り米國のみではない。英國の植民地なる濠洲、加奈太、南阿の如きは、何れも皆米國以上に極端なる排日政策を取つて居る。人道上より見たる門戸閉鎖の罪は英も米も同樣である。然るに我國民は英國に對して責むること輕く、米國に對してのみ重きは何故であらう。否なあれ程嫌はれ厭やがられながらも尚ほも米國に向つて移民を送くらねばならぬと云ふのは何故であらう?。米國に比すれば距離稍や遠きも、南米諸國の如きは門戸を開ひて日本移民の來るのを待つて居る。然るに日本人は歡迎せらるゝ南米に行かずして、嫌はるゝ米國に行かんとして居る。是れ南米よりも米國の方が收入の多きに依る爲めであらうと思ふ。日本人が米國行きを好むといふ此の心理が、反對に、米國人が日本人の來るのを好まぬと云ふ心理である。紳士協約の實施せられて以來一九二二年に至る過去十五年間に於ける日本移民の數は、米國に渡航したる者男女合して六萬三千五百余人、米國より歸國したる者約十萬五百人で、即ち十五年間に於て在來移民は約三萬七千人を減じて居るのである。之に由つて見れば我國は紳士協約を、誠實に履行せるもので、實際問題としては米國は今更、特に日本移民禁

止を目的とせる法案などを定むる必要はないのである。

更に日本側に就きて考ふるに、絶へず外交上の紛擾を誘起し、常に國民間の反感を激發せしむるの不利を忍んでまでも、斯かる少數の移民を強ゐて米國に送らねばならぬ實際上の必要が何處にあるであらうか。年々千か二千か新法案に依れば百か二百かの移民を出すことに依つて、一年增額六十五萬人を增加する問題を解決せんが爲めでもあるまい。年に三百萬か五百萬圓かの移民の送金に依つて三十億圓の國費を補はんが爲めでもあるまい。要する國家としては渡米移民に依つて得る物質的の利益は甚だ輕微なるものに過ぎない。寧ろ移民あるが爲めに發生する排日問題に依つて直接間接に受くる物質並に精神的損害の方が遙かに大ではないかと疑はれる。是に於てか日本が今日尚ほ移民問題に執着する理由は、移民に依る經濟問題にあらずして寧ろ日本人に對する差別待遇と云ふ國家の體面問題に在るが如く思はれる。故に日本の體面と面目とさへ保たるゝならば、利の少くして害の多き移民問題の如きは適當に打ち切り、以て將來に於ける葛藤の種子を除去することが賢明の策であると信ずる。唯如何に此は我が國の體面を保ち得るかの具體案に至りては、他日大に攻究を要する問題であるが、結局の處今日既に米國に在住せる邦人の既得權を尊重せしむることに歸着するのでは無いかと思はれる。

何れにしても我等は此の機會に於て日米兩國民が虛心に坦懷に協調互讓の精神を以て移民問題を根本的に解決し、依つて以て不愉快なる排日の文字を日米外交文書中より一掃せんことを切望する者である。新聞電報に排日の文字の現はるゝ每に、日米戰爭能否を云はるゝには我等は最早や飽き〳〵した。幸には華府協定に依りて危險なる海軍競爭が停止せらた。更に若し移民問題にして圓滿に解決するを得ば太平洋の波は永久に平かであるであらう。唯こゝに我等の最も注意すべきは、米國の如き大國に對して脅喝威嚇は禁物であると云ふことである。我が埴原大使の通告文中に用ゐたる「由々しき結果」なる一語が、豫期せざる由々しき結果を生じたるに徵するも、現代米國民の性格を窺ふことが出來る。米國に對しては道理に依つて爭ふか、彈丸を以て戰ふかの外はない。露西亞や支那に對する如く、ヤレ西比利亞出兵の、ヤレ浦鹽占領との、口先ばかりの嚇か的宣言では却て相手の輕侮と反抗とを買ふに過ぎないであらう。我等は勝利の豫言こそ爲し得ざれ、日米戰爭を恐るゝものではない。種々の意味に於て此の行詰まれる日本の局面を轉回するには戰爭が最も早や道であるとの感さへも持つて居る。併しながら喋ばかりの米國膺懲や加州占領ならば、言はぬ方が賢明である。

（一三、四、二一）

排日の張本ハースト及其新聞

横田四郎

青瓢箪のやうな顔色をして其癖着物は、道行く人々が振り返つて見直すほど華美なスタイルに、眞紅のネクタイを掛け、小指ほどの細い華奢なステツキを七三に持つた、ハーバート大學の一學生が、ボストン・ポストや、紐育ウオールドを小脇に挾み、如何にも氣の弱さうな表情で、俯向き加減にひよろ〱と歩いてゐる青年があつた。學校へ出席することは殆ど稀で、同級生に向つて、お前の級友にウイリアム・ランドルフ・ハーストと云ふ男があるかと聞くと「さアねえ、そんな男があるかしら？」と首をひねる。併し「赤ネクタイの青瓢箪を知つて居るか」と聞くと「ウン知つてゐるとも、彼奴は何でもサンフランシスコの鑛山師の伜だつてことだよ、氣の若い人間揃ひの西部の生れにしちや、隨分似ても似つかぬ氣の弱い、丹次郎式の男だよ」と答へる。それほどハーストは柔弱な、特に人目を引くやうな華美な恰好をしたのらくら者だつた。そんな男が何うしてノースクリフと共に、世界の二大新聞王と稱せらるゝに至つたのか、さうして何故に彼は排日を鼓吹することに、其全力を傾注してゐるのか、今度の排日移民案に對しては、全米の新聞が、擧つて上下兩院の議決に不滿を洩し、紐育タイムス、ウオールドの如き、常に公正なる評論を掲ぐることに於て定評ある大新聞は別として、今日迄對日論調が、兎角日本に不利なるものがあつた、紐育ヘラルド、又はトリビユーンの如きすら、さすがに今回の事件に就ては、白きを黒しとなすの勇氣はなかつたものと見へて、口を極めて上下兩院を非難し、埴原大使の抗議を是認するの態度を示してゐる。然るに獨りハースト系の新聞に至つては、有ゆる毒舌と、有ゆる嘲罵の形容詞を用ひ、字引に有りつたけの悪罵を極めてゐる。其論調は、全く皮肉と諷刺を超越し「嘘つきハースト」の面目を躍如たらしめたものがある。併し案外に其論鋒を喜ぶ愚衆があるのだから、決して油斷

はならないのである。誠に之を數字的に說明すれば、合衆國に於ける日刊新聞は、現に二千五百餘程ある。其一日の發行紙數は、約二千六百萬枚である。そして此中で、ハーストの持つてゐるのは、明かに判つてゐるものでは、朝夕刊を合せて十八社、並にハーストが關係してゐると思はれるものが八社、更に同じ系統のものを合せて約四十社に近いものになる。二千六百種の新聞社中、三十社や四十社を持つてゐた所で、全體から見れば僅かなものではないかと考へられるが、其發行部數は、ハーストの所有せる十五社、及び關係ありと目されてゐる八社を合せた二十三社の一日發行部數は三百九十萬枚に達し米國に於ける一日の全發行高の一割六分强を占め、これを米國の人口一億一千萬人に割當てると、一千四百萬人の讀者を持つてゐることになるのである。

こればかりでない。ハーストは日刊新聞の外に、日曜毎に發行されるサンデーペーパー十一社の持主であり、其一日曜日發行高は三百四十萬部に上り、更に米國に有する七つの雜誌は、一ケ月三百四十萬を發行し、英國に於て所有する二雜誌は、其發行高毎月三十四萬を以て數へられてゐる。これ等を合算すると、ハーストの勢力下に在る新聞雜誌の讀者は、殆んど全合衆國を席捲してゐることを知り得るのである。然らば即ちハースト系の新聞紙が、一度排日問題を提げて毒づき始めたならば、如何に恐るべき影響があるかは、容易に了解し得るではないか。況んや彼の主宰する新聞は、自ら黃色新聞を以て任ずるだけに、其讀者の大部分は衆愚であり、下層社會に限られてゐるに於てをやである。

今試にハーストが所有してゐることが明白であるもの、及び關係ある新聞雜誌と其發行部數を摘記すると左の如くである。

（△印を附したのはハーストと密接な關係あるものを示す）

一、朝刊（日刊）

シカゴヘラルド・エンド・エキザミナー	三九五、八六〇
紐育アメリカン	八三二、四一九
サンフランシスコ・エキザミナー	一五〇、五五七
ローサンゼルス・エキザミナー	一二七、〇三三
シャートル・ポスト・インテリジェンサー	五五、三一八
ベルチモーア・アメリカン	六〇、二七七
ワシントン・ヘラルド	四九、三二六
△ボストン・アドバタイザー	八二、四三三
△フォートウォルス・レコード	二二、七八四
計	一、七七五、〇〇八

二、夕刊

紐育エブニング・ジャーナル	六五四、九六七
シカゴ・アメリカン	四一五、〇五六
ボストン・アメリカン	二四三、六一三
デトロイト・タイムス	一一二、二四八
ワシントン・タイムス	六六、二一三
アトランタ・ジョルジアン	四五、五五七
バルチモーア・ニュース	一一五、四四六
シラクス・テレグラム	約二二、〇〇〇
△ニュー・オルレアン・ステート	四七、九二一
△ウィスコンシン・ニュース	六六、五四二
△オークランド・ポストエンクオワイヤー	三三、〇九八
△ロチェスター・ジャーナル	約二五、〇〇〇
△サンフランシスコ・コール・エンド・ポスト	九四、〇六七
△ローサンゼルス・エブニング・ヘラルド	一五〇、四六三
計	二、〇九五、一九八

三、サンデーペーパー

ニューヨーク・アメリカン	一、〇六一、八四一
シカゴ・ヘラルド・エキザミナー	七二九、七三五
サンフランシスコ・エキザミナー	二九九、三四一
ローサンゼルス・エキザミナー	二六一、二二九
デトロイト・タイムス	約一五〇、〇〇〇
ワシントン・タイムス	一〇九、〇四六
シートル・ポスト・インテリジエンサー	一一八、一一八
アトランタ・アメリカン	一〇五、八一七
バルチモーア・アメリカン	九八、六一〇
バルチモーア・ニュース	八九、二〇一
サーカース・サンデー・アメリカン	約五一、〇〇〇
△ニュー・オルレアン・ステート	六一、九三三
△ボストン・アドバタイザー	四二七、二一七
△ミルウォーキー・サンデー・テレグラム	一〇二、三〇八
△フート・ウルス・レコード	二四、七二一
計	三、六九〇、一一四

四、雑誌（月刊）

コスモポリタン（紐育）	九九四、三六六
グッド・ハウスキーパー（紐育）	七八〇、五六〇
ハースト・インターナショナル・マガージン（紐育）	二四九、七六[illegible]
ハーパース・バザー（紐育）	約一〇〇、〇〇〇
モーター（紐育）	一八、八〇〇
ナツシユ・マガージン（倫敦）	約一八〇、〇〇〇
グッド・ハウスキーピング（倫敦）	約一五〇、〇〇〇

オーチャド・エンド・ファーム（週刊）　三〇〇、〇〇〇

計（一ケ月發行數）　三、七一四、四八六

右の數字は一九二三年春頃のものであるから、これを今日から見ると、増加はしてゐても、減少したとは考へられない。此偉大なる數字は、裕に日本全國の新聞發行高に相當する、否成はこれを凌駕してゐるかもしれない。雜誌に至つては、恐らく日本全國の政治、經濟、文藝、婦人等の小雜誌の全部を合併しても、ハースト所有の雜誌發行高の半分に當るか否か疑問である。

ハーストは單に多數の新聞を所有するのみならず、更に通信社を所在に持つて、彼れ一流の黄色的ニュースを供給している。其代表的なものは、インターナショナル・ニュース・サービスと、ユニバーサル・サービスの二社である。前者は主として米國内地の夕刊と、南米諸國に通信を供給してゐるが、其得意先は六百餘社に及んでゐる。後者は主として米國内地の朝刊に供給するのを目的としてゐる。此外に尚社會記事を供給する爲めにコスモポリタン・ニュー・サービスを持ち、フイーチューア・ストーリー及漫畫を供給する爲めに、インターナショナル・フイーチューア・サービスを有し、更に廣告の圖案を供給する機關として、スター・アドクラフトを持つてゐる。日本でも大阪毎日新聞、東京日々新聞、及び國民新聞は、フイーチューア・サービスの漫畫通信を購買して掲載したことがある。彼の發する凡ての通信は、凡て、嘘八百と云ふことが判り切つてはゐるが、何分宣傳的で、煽動的で、毒舌と、皮肉と、悪罵を材料としてゐるので、ツイ各新聞社でも面白さに釣られて掲載することになる。

彼は斯くの如き驚くべき通信網を張つて、自己の思ふ所を頗る無遠慮に發表し得る機關を持ち、主として下層社會の民衆を相手に不斷に煽動を試み、排日問題に對しては、單に移民問題のみに限らず、朝鮮問題、滿洲問題、支那問題、山東問題、日英同盟、西比利亞問題等、苟くも日本の事として云へば、有ゆる問題を煽動化して排日皷吹の材料に用ひてゐる。最も最近の例では、四月十六日横濱に入港した米船に便乘してゐた米國人の某將軍が、旅券を所持せざる爲め官憲が上陸を拒んだ正當なる措置が米國に傳はるや一轉して、排日煽動の好資料となり、有ゆる悪罵を弄して日本を罵つてゐることなどは好適例である。

彼は尚此他に寫眞通信社と、活動寫眞會社とを持ち、劇物を作成するコスモポリタン會社と、時事問題、風景及風俗のフイルムを供給するインターナショナル・ニュース・リール社の二機關により、或は排日劇を作成し、或は排日に關する時事フイル

ムや、ことさらに惡風化した日本人の風俗などを撮影して、排日煽動の資料としてゐると云ふ有樣である。

米國の新聞は飽く迄ニユース本位である。ニユースの爲めには幾萬弗の出費をも吝まぬと云ふやり方である。ハースト新聞も亦ニユースに對しては一の特長を持つてゐる。併し其特長は、紐育タイムス、紐育ウオールド、市俄古トリビユーン等の大新聞が、政治、經濟、外交に關するニユースに其特色を見せてゐるのに反して、ハースト新聞は全體を通じて、殺人、强盜、收賄、男女の醜行、家庭の內面暴露等の社會的出來事のニユースを輯錄し、重要なる紙面は常に犯罪記事を以て埋めてゐる。政治外交に關するニユースを掲載する場合でも、其筆法は何事に對しても是認し、又は賞揚することなく、飽く迄反對と排斥と攻擊を以て一貫し、煽動と嘲罵とを以て其社是としてゐる。此方針はハーストのジヤーナリズムの根幹を成すもので、下層階級の衆愚を讀者となし、唯其發行紙數を增加して、彼の資本主義的野望が達せらるれば、それで彼の目的は成就するのだ。そして一頁の上から下まで通したセンセーショナルな題で、社會の暗黑面を暴露した記事を掲げてゐるのを見ると、其毒々しさに憎惡の情を催し乍らも、尙好奇の眼は之れに注がれ易い。彼は此機微を察し、米國人の事に熱し易い性格と心理とを利用して、彼一流の巨彈を放つて排日問題を煽り、日本人勞働者の最も多い西部地方の勞働者の歡心を買はんとしてゐるのである。日本でも此ハーストの編輯方針を善用せんとしたものに、東京每夕新聞、東京每日新聞、關西日報等がある。そして小野瀨不二人、永代靜雄兩氏は、其研究と實行では、先覺者であり、又日本の新聞界に一新紀元を劃した人である。

ハースト紙に缺くべからざるものに奇才アーサー・ブリスベーンの時事評論がある。

彼は現にデトロイト・タイムスの主筆であるが、淺くして博い彼の學識と、天稟の奇才とは、相俟つて其文章に躍然として現はれ、簡單にして明瞭、奇警にして皮肉なる彼の評論は、常に第一面の左欄に掲げられ、一讀して直に下層階級讀者の襟懷に共鳴する。殊に其センセーショナルな書きつ振りは、べらんめゑ黨には缺くべからざる常食となつてゐる。

日本でも最近稍これに似た時事評論を試みる者がある。東京朝日新聞夕刊の『今日の問題』を先頭に、東京日々、報知等の夕刊の短評もその一例だ。

ブリスベーンの年俸は十五萬弗、外にハースト紙の多くの株券を所持してゐる。彼は他の仕事の傍ら極めて短時間に其論評を草し、直に電報を以て太西洋岸及中西部都市に散在するハースト新聞に向つて之を送致する。故に彼の論文は每日同時に全米國に亘つて發表せられ、三百萬の讀者に對して獅子吼してゐる。蓋し彼の如く多數の讀者と相見へてゐる者は、世界中何處にもないであらう。隨つてブリスベーンの存否は、ハースト紙の發行部數に影響することは甚大なので、ハーストも彼に對しては、出來得る限りの優遇をしてゐるのである。

彼の新聞の信用のない一例として有名なものを一二紹介して見ると、一九一六年六月三日、紐育アメリカン紙上に「獨逸海軍の大捷」と途方もない大見出しの下に、

英國海軍省は今夕承認して曰く英國海軍は開戰以來未曾有の海戰に於て獨逸太平艦隊の爲めに大敗せり云々

と掲げた。全米國民は色を失して其記事を熟視し、其報道は東洋方面に迄傳へられて大騷動をした。併しハースト紙以外の全米國の新聞の向ふにも斯るニュースは來なかつたので、直に調査して見ると、其電報はハーストの通信社たる、インターナショナル・ニュース・サービス社に於て捏造されたことが明白になつた。もう一つ面白いのは同年九月三日の市俄古ヘラルド・エンド・エキザミナー紙上に、『倫敦は獨逸飛行船の爲めに空中襲撃を受け、全市火災に包圍さる』と、例によつて大文字の大見出しで、全米を震駭させたが、これも全く彼の通信社の捏造であつた。英國政府は大に其不埒なるを憤り、英本國、加奈太、及英領に對して遂にハースト系新聞の輸入を禁止し、彼の通信社よりの通信を一切嚴禁した。佛國政府も亦英國に倣つて同一禁止を命じた。斯る有樣なので、米國の智識階級は、ハースト系新聞に依つて何等動かさるゝ所はなく、上流の家庭には之を入れることを嫌ひ、コスモポリタン・クラブの如きは之を備付けることさへ禁止してゐる有樣であるが、彼は『吾々の御得意は下級にあり、上中流の家庭は敢て購讀を勸説せず』と豪語してゐる「米國第一」の標語は彼の新聞に印刷して居るモツトーである。

最後に廣告から見たハースト紙の信用を檢討して見やう。便宜の爲め紐育發行の分だけを比較して表示して見ると次の如くである。（表は一九二三年五月の統計）

	發行部數	廣告件數
ウオールド	三五〇、〇〇〇	一九六、七二六
タイムス	三四〇、〇〇〇	一〇九、三一五
ヘラルド	二八〇、〇〇〇	三七、四八五
アメリカン（ハースト）	一八三、〇〇〇	三五、八六三

ハーストの本據たるアメリカンは、其發行部數が他の最大なるものの一倍半以上に達してゐるのに拘らず、其廣告件數は最も劣等である。之を紙面の面積から見ると、タイムスは全紙の五割八分、ウオールドは全紙の五割二分を廣告の爲めに費してゐるのに、アメリカンは僅に二割七分を費してゐるに過ぎない。廣告好きな米國の商人と、金儲け主義のハーストとが揃つてゐるのだから、最大發行部數を有するアメリカンが、最も多く廣告を消化すべき筈なのが、却つて逆になつてゐる。如何にハースト紙の信用が當にならないかを知ることが出來る。

（追言）　本稿を草し終つた時、米國よりの新聞電報は、ブリスベーンの論鋒が、俄に變つて『日本も米國も共に戰爭を欲せず』と論じ、大に其非を悟つた樣子だとの情報を齎した。果して此論旨が永く續くか何うかわからぬが日米親交の爲めに眞に喜ぶべしである。

薔薇の刺

堺利彦

（一）

日米戰爭の噂は數年前に可なり燃えあがつたことがある。今にもいよ／＼開戰になるかの樣に騷ぎたてた人々さへあつた。

然るに今度は思ひの外、靜かだ。まだ『暴米ヨウチヨウ論』を絶叫する豪傑連も出現しないようだ。軍閥としては絶好の機會であるように思はれるのに、忽ち飛びついて利用するといふ程の態度もまだ見えない。さすがに滅多な事の云へない、實質上の理由が痛感されてゐるのだらう。

然し此まゝでは、どうあつても面目が立たぬ。何とかしなくてはならぬ。それが差當り、多くの人々の心的態度であらう。

然し面目だけの問題なら何とかなりそうなものである。既に國務卿ヒューズ君等は色々と取りなしてゐるではないか。勞働總聯盟も、此の事は元來、經濟問題であつて民族問題ではないと釋明してゐるではないか。結局、何かで多少の色をつけて、それで泣寢入になるものだらうかと觀測される。

（二）

けれども、此の問題がそれでスツカリ片づくわけでは勿論ない。經濟問題としても、民族問題としても、此先まだ永い爭ひになる。もと／＼經濟問題があるから民族問題が起るのである。民族の面目を立てる爲には、單なる經濟問題だと云ふ事も出來るし、それを承認して自ら慰める事も出來るが、二つは決して別々の問題ではない。

元來、日本の移民がアメリカに必要である間は歡迎された。然し餘り其の數が多くなつて、相當に經濟上の勢力をも得て來たので、それで持てあまされる事になつた。今でも資本家側としては歡迎したいのかも知れないが、勞働階級と小資産階級と

が承知しない。彼等から見れば、日本移民は恐るべき競爭の敵である。そこでカリフオルニヤ一帶の輿論が日本人排斥になつて來た。

こういふ利害の實質の上に感情が植ゑつけられた。人種的偏見といふ奴が即ちそれだ。ジャップは盛んに侮辱され、迫害された。政治家は益々其の偏見を煽つて、下層階級の經濟的利益に媚びる必要がある。そこでジョンソンの樣な男が出て來た。

日本の政治家から見れば、アメリカは勞働者出身の國であると同時に、それよりもズット重大な意味に於いて、絹をそこに賣りつける國であり、綿や鐵をそこから買ひ取る國である。移民保護の爲に貿易上の大損をするわけには行かない。そこで實際上に自ら移民を遠慮して、先方の感情をも和らげ、自分の面目を保たうとした。謂ゆる紳士協約がそれである。

然し話はそれだけではない。アメリカは久しく日本に品物を賣りつけて儲けて來たが、日本は生意氣にも自分で色々製造を始めた。即ち日本に工業が發達した。日本の工業品が支那その他に輸出されだした。日本は經濟上に於いてアメリカの競爭國となつた。更に近代では、シベリヤ方面に於ける競爭もある。樺太に於ける油田の取り合もある。人種的偏見、人種的反感、人種的憎惡が、いよ／＼高まつて來た。

今度の一件の直接の原因が、アメリカの國内の如何なる事情の上にあるのか、次の大統領選擧に對する作戰と關係してゐるかゐないのか、其の邊の細かいことは、今の所私には分らないが、兎にかく大體の形勢は右に述べたやうな事だらうと思はれる。

アメリカは七十年前、日本が初めて開國した時から親友である。最近には又、震災の當時、澤山の見舞をよこして吳れた親友である。その親友が打つて變つて、こんな事をするのは怪しからぬとの議論がある。然しそんな事は問題にはならない。親切も友情も總て利益の上に咲いた花である。それと同時に、憎惡も反感も皆利益を擁護する刺である。薔薇は花と刺とを同時に持つてゐる或時には花で刺を隱してゐる事もあるが、或る時には刺ばかりが現れる。アメリカの帝國主義と、日本の帝國主義とが衝突する以上、どうしても仕方がない成行である。

(三)

斯樣に、この問題を單なる人種問題として考へる事は、極めて淺薄である。白人對黃人と云へば、チョット黃人種の感情を咬るには足りるが、我々はいつまでそんな事に欺されてはならぬ。現に、フランス人とドイツ人とは、白人同志でありなが

ら、あれほどの憎惡と反感とを持つてゐるではないか。尤も、此の二國人は、ラテン系とチユートン系との對立だとも云へるのだが、然らば同じチユートン系ドイツ人とイギリス人とが、犬と猿とであの大戰爭を引起したのを何と說明するか。又我々と同じ黃色人たる支那人が、アメリカ人と親しんで、日本人を排斥するのは、どうしたわけか。

だから此の問題は、表面は人種問題であつても實質に經濟問題である。大體に於いて、アメリカのブルジユアジーと日本のブルジユアージーとのの、利害の衝突である。アメリカの帝國主義と日本の帝國主義との衝突である。

然し直接の衝突は、アメリカの勞働者と日本移民との間に起つてゐる。それが何故にブルジヨアジーの衝突かといふ議論があるだらう。如何にもチヨツトそう考へられる。然し、アメリカの勞働者も、日本移民も、同じく共に資本制度の下に×××れて居る××××である。彼等が衝突するのは、賃金奴隸をして資本制度の爲に衝突させられるのである。そして其の衝突を利用するものが即ちブルジヨア政治家である。だからアメリカの勞働者と日本移民が衝突するのは、畢竟する所、アメリカの資本制度と日本の資本制度とが衝突するのである。

若し兩國の勞働階級が此の道理を十分に悟つて、互に堅く提携團結して××××××××する事になるならば、それこそ實に××た現象を呈するのだが、まだそこまでは容易に到達し得ない。アメリカの勞働者は日本の勞働者よりも遙かに進んでゐるに相違ないのだが、それでも眼前の小いさな利益の爲に、プロレタリヤの國際的團結を忘れてゐる。

(四)

そこで此の問題は今後なほ種々な形を取つて現はれて來るだらう。つまり兩國とも、××××××××××、(その時には、××××××××××××××が)、その時はじめて此の問題が本當に解決されるだらう。

只、今日の所、此の騷ぎの結果として、一つ面白い傾向が生じかけてゐるらしい。それは日本の支配階級が、アメリカに對抗する意味で、むしろロシヤに近づかうとする氣味合を示すと云ふのである。若しそれが事實とすれば、意外のモウケ物といふべきだらう。「日露獨同盟」といふ誰やらの提唱も思ひ出される。

猶一つ、在米の日本勞働者は定めて憤慨してゐる事と察せられるが、諸君はアメリカ人からばかり侮辱され迫害されてゐるのではありませんよ。日本國内の同胞たる、富豪、資本家、政治家、軍人、××××××××××××××××迫。××××××××××××

埴原正直

川内俊太

埴原といふ人について

今回の移民問題が突發しない前は、彼の名を知るものは外交關係の少數者に限られた。しかし、今回一躍、移民問題の爲に埴原の名は世界的になつた。彼が二十年前華盛頓で奔馬より振り落されんとするアメリカ少女を救援して彼地の外交界でリットル・ハュリーの浪漫的な名で謳はれたことと、赤門閥で固めた霞ケ關でともかく次官となり、大使となつて早稲田の名を擧げたことだけは有名だ。彼は短身小肥りの五尺ソコ〳〵男である、何等策略のない循吏の標本である。循吏というより正直の人間であると云ふ感じがする。

彼が內田のために通商局長から次官に拔擢さるる折、その競爭者に田中都吉があつた。彼も赤門閥外の一橋出身であつたが、彼は埴原に對して能吏の風あり、そして小さい乍ら世の中を渡り歩く略なるものを解しておつた。隨つて部下に乾分をつくるといふこととか、或る團結をつくるといふやうなことを心がけておつた。だから、一面には田中は陰險であるとか、官僚だとか罵られたが、埴原は剛直で青竹を二つに割つたやうな性格を有つていることとて乾兒も出來ねば、さりとて又敵とても出來なかつた。ただ無難な、そして幸福の人として濟輩の羨望の中心となつていた。

彼は甲州のさる村長の嫡男であるから中流以上の家庭に育つた譯だが、彼の乃父は教育に無理解な甲州氣質の一田舍人であつたから小學校以上に彼が進むことを固く拒んだ。乍然、青雲の志に燃えた彼は乃父に無斷で上京し、東京豫備門や早稲田を卒業するまでは夜間勞働をなしつつ力行努力したほどの立志傳中の人間であつた。途中で一度び肺を患つたが、之も彼の抵抗療法で全治した。當時の早稲田は操觚者養成所の觀があつたが、

彼が途を殊にした官界を選んだのは當時學生等が目を瞠つた所で、彼と同じく三十年の英法科を出でたものに實業の日本主筆都倉義一があり、一年前に川島清治郎、一年後れて倉辻白蛇がある。

彼がトン〳〵拍子に進んで米國大使の榮冠に克ち得たのは、決して彼の力倆才幹の拔群を誇る標的とはなり得ぬ。そは外交界が全く無人であるからである。彼は本多駐獨大使の鋭さなく、田中都吉の事務的才幹はないが端的の風格又捨て難き味がある。内田、松井を外務の主班に仰ぐより却つて彼が霞ケ關に主人公となつた方が一脈の新味を加ふるであらう。しかし此人に何を期待すべきかには迷はざるを得ない。

彼は外交官に通有な金持妻君閥の一人で、此點、早稻田の氣を吐くには相應はしくないが、久和代さんと云ふ閨秀畫家を妹に有つことは或る意味で面白い配合をなしてゐる。しかし彼は寸毫も丹青を解せず、無風流、木訥の一漢子であることは彼の頭髮のいつも五分刈であることに依つても證せられる。先づ御大道樂位が此人の最上逸話であらう。

此人が權變に富むロソヂ及びジョンソン、クーリッヂを相手にどんな風雲を捲き起し得るか、それは此人に期待すべき筋合のものではなかろうが、とにかく問題の人として玆に聊か紹介するに止める。

米人の見たハニハラ

ワシントン會議に全權として活躍した埴原氏を評してリッツル・ハニが大きい役割を演じてゐると米人が驚嘆した。彼等がリッツル・ハニと呼ぶ時には、そこに云ひ知れぬ親愛の情をこめてゐる。ハニは日本の大使であるけれどもワシントンの住人として彼等のお仲間の一人として許されて居り、到る處のクラブでも、ホテルでも、町角の露床でもハニは常に人氣者である。

少さく、固い、そして輕快なハニの姿は、明治卅四年の夏から四十三年の暮までワシントンの町に隨所で其影を見せた。朝は國務省に、午后は名士の客間に、夕はホテルの食堂に、そして夜ふけてからはクラブのバーに、時計の發條の如くくる〳〵ときめに動いた。常に樂天的に、快活に、而も親切に人に接した。

十數年を經て彼がワシントンに赴いた時は日米の間に横はる誤解と興憤とが、太平洋の波瀾を豫想せしめる程に險惡な雰圍氣を作つてゐた。ワシントン會議は彼が最も苦心を重ねた一世一代の檜舞台であつた。男加藤に面接するものは黯然として

を正し、公徳川と握手するものはその玲瓏たる人となりに打たれ、而してリッツル・ハニと談る者は十年既知の友に逢つた感を起すと米國人が書いてゐる。ハニはよく米人を解し、米人を愛し、米人を制した。

男幣原が病を獲て歸朝すると、ハニは其後任としてワシントンに行つた。ワシントンの社交界は之に依つて少さく圓い樂天家のハニを迎へて、賑かに昔の仲間に歸つて來たハニの手を握つて喜んだ。國務省の役人も、ホテルの支配人も同じようにその快活な面貌を迎へて「ハロ！ミスター・ハニ」と云つた。

ジョージ・マーヴインといふアメリカの老記者がこんなことを書いてゐる。

「日本の大使と向合つてゐるときんじう頭の東洋の子供か、歡樂と豪快を表はしたビリケンと話してゐるようだ。子供を持つた經驗のある婦人は屹度そつと頭を撫で度い氣になるに相違ない。四十六歳にして偸見た處は子供である——いや非公式に彼は子供なんだ、依つてワシントンを擧げて彼を愛する。何處の國の代表者も彼以上に友達を持つてゐるものはない、その友達といふのは日本大使の友人であるのでなくしてマサナホ・ハニハラの友人なんだ。ハニが人に接するには形式も手續も必要としない。電話を一つ鳴らせば線の片はしに出て來る人は大使閣下其人である…實に無雜作だ。が、この無雜作程人を引つけるものはない。五分間も話してゐる中に相手の子供らしい印象を受ける、ビリケンは佛陀となる…然しこの佛陀は聽上手であり、且つ驚くべき記憶を持つてゐる…ハニは廿年前にアメリカを了解し初めた。今日では米國人以上によく米國を知つてゐる。十六年も米國に住んで、仕事をして、其見解から云つても同情から云つても殆んど米國人と同じ程度になつて了つた。ハニが駐米大使の榮職を無事に勤め上げて日本に歸る時には、日本政府は前例に從つて彼にバロンの榮爵を授けることゝ思ふ。然しバロン貴族も現在の彼には何の加ふる處もない。彼の名は英語譯にすれば「正直」又は「誠實」といふ意味である。正直、埴原は彼の生立から云つても又過去の功績から云つても最もふさはしい稱號である……』

相識るは相信ずる始である。國務卿ヒユースはハニの言動に絶對の信任を措いた。ヒユース對ハニハラの關係は恰もヘー（米國々務卿）とポンスフォート（英國大使）との關係であると稱せられた。それは一八九八年の事である、米國の對スペイン宣戰に抗議する爲めに當時ワシントンに居た獨、墺、露、佛及伊の五ケ國大使はポンスフォート卿を其仲間に入れようと試みた。然しこの抗議は本國政府の贊成を得なかつた爲めに遂に米

國政府へ提出せられずに終った。それから四年經つて偶然に伯林ではボンスフォート卿が米西戰爭の當時歐洲諸國を語らつて北米政府に共同抗議をしようと企てたといふ事實を發表した者があつた。この報道はワシントンでも獨逸大使ホルレーベンの認諾を經て發表せられた。國務卿ヘーは其時新聞記者に對してから聲明した。「事件はまだ調査を終らないが、ボンスフォート卿に決して疚しい點のないことだけは間違ない、あの人はそんな事をたくらむことの出來ない人である。」ハニは同じ程度にヒユースに信任を受けてゐる。二人の間の談話は外交上の辭令の交換でなくして Man-to-man talk, である。移民問題に關する交渉の秘史が後日天下に發表される時期が來たら吾々は何幾多類似の逸話を聞くことが出來るであらう。

然しこのハニハラも米國議會の特殊の雰圍氣を如何ともすることは出來なかつた。埴原正直といふ名は正直なハニといふとだと云ふ米人の註釋も特殊の道徳が行はれる「議會」といふ場所では、其通りに通用しなかつた。黨略と陰謀と權力慾とが萬事を支配する議院の内に立籠ると、日當りの良い戸外にはもつと健全な道徳が行はれてゐると云ふことを忘却して、御都合の爲めには屢々車を横に押した。上院や下院がひた押しに車を横に押す度に公正なアメリカの輿論は忌憚なく此等の政客の行動をたしなめた。今度の排日法の場合も正にそれである。

多數のアメリカ人はリッツル・ハニの淡白な誠實な外交に贊成の意を表してゐる。日本の民論も亦彼の行動を全然是認して居る。それは曾てサリスベリー卿の云つた如く正直は世界の市民の信認を博する唯一の旗印であるからである。

社會政策の立場より見たる日米問題

福田德三

改造社から、此問題に關する卑見を徴せられたが、私の意見は、去明治四十二年に公表したものと、今日と些も異ならない。否私は、當時、我同胞が、私の説を少しでも參考して與れたならば、今日の如き行詰りに陷ることを免れ得たかと思って、甚だ殘念に堪へないものである。私に取っては、今日の事は、十二分に豫期し得られたことである。其證として、私は去大正九年十一月『實業之世界』に公けにした『米國に於ける排日の根本的原因』と云ふ一文から、左の一節を再び玆に掲げて、讀者の一讀を乞ひたいと思ふものである。私は此文に述べた處以外に殆んど言ふ必要を認めないし、此文に述べたことの全部を今日に於いても其儘に主張するものである。

但し、今後、問題の進展如何によっては、私は更らに禿筆を呵して、卑見を陳述したいと思って居る。（十三、四、廿二）

私は、社會政策を單に學問上から研究するのみならず、心の底から一種の信仰として、奉じて居るものである。此の立場から米國の移民問題を考察すると、我が國人が觀察して居る所には、少なからず無理がある。日本人は、米國人にのみ無理があり、日本人には道理のみがある、然るに米國人は、種々の口實を設けて、日本人の道理ある言分を少しも採用しないと考へて居る。成程、米國に於ける實行に現はれた所は、亂暴であり、無理であることを認めなければならぬが、其の亂暴、無理の根底には、大きな道理が存するのである。然るに其道理が認められない爲めに、米國人があせりもがいて、道理を貫徹するために手段を選ばない事になり、而して其の結果が、日本人から見れば無理亂暴と見えるのであらう。然らば、其の大きな道理と云ふのは何んであるか。

社會政策と云ふものはカルタで建てた家（ハウス、オブ、カーツ）の如きものと信ずる。換言すれば一種の人爲の制度であって、自然の運行に任せて置くものではない。今日の經濟組織では、自然の運行に任せて置いては、強者が弱者を虐げる。そこで社會政策を以て、弱者を保護し、強者を抑へ、互角の地位

に立たしめやうとするのである。之れを米國に就ひて見ると、米國では資本家の勢力が頗る大である。勞働者に對する資本家の勢力は、日本では考へられない程大である。然るに又米國では、勞働者の社會政策的勢力が大であつて、勞働者は團結して資本家に對抗し、其の結果勞働條件が高められて今日あるに至つたのである。米國の勞働賃銀は、歐洲の勞動賃銀に比して高く、英國の勞働賃銀に比してさへもなほ高い。世界中オーストラリヤの勞働賃銀を除けば、米國の勞働賃銀が最も高い。而して米國の勞働者の生産能率も亦頗る高い。米國の高い勞働賃銀は、高い能率によつて支持せられて居る。それが米國の勞働者の平均的生活を今日の高さに引上げて居るのである。併し、米國の勞働者の高い生活程度は、勞働者の社會政策的團體の力により、また、米國の國家が、社會政策的團結を認承し、進んで之を支持することによつてのみ得らるゝものである。若し、社會政策的團結が緩み、または打破される時は、米國勞働者の生活程度を今日の狀態で維持することは困難である。

何處の國にあつても、資本家は多くは近眼者であつて、三十年、五十年に亘つての能率の增進よりも、寧ろ目前の生産費低減に目を注ぐものである。米國の勞働者の高い賃銀は、資本家が心から喜んで拂つて居るのではない。たゞ百般の事情之れを甘受せざるべからざるが故に、已むを得ずして拂つて居るのである。それであるから、若し機會があれば、資本家は之れを逸せず、其の間隙に乘じて少しでも賃銀を引下げんと努めて居る。之れひとり米國に限らず、總ての國家に於ける今日の經濟組織内の資本家を支配する心理である。故に勞働者たるものは、嚴密なる注意を以て、少しでも社會政策的運動に緩みを生ぜしめない樣にしなければならぬ。彼等が有する生活程度は、數十年間苦心慘憺して漸く得たものであるが、一度得たからと云つて、安心して自然の成行に任せて置いて宜しいものではない。日日刻々之れを脅かさんとする力が强大に働いて居るが故に、勞働者たるものは、細心の注意を以つて、乘ぜらる可き間隙を作り出さざる樣努力する事が必要である。英國オーストラリアの如く勞働者の社會政策的團結の强い國家にあつては勿論、其の團結力の强くない歐洲大陸諸國でもさうであるが、就中米國に於いては、此の必要が特に大である。

何んとなれば、米國の勞働者の生活程度は、歐洲の勞働者に比して餘程高く、而して米國の産業上の競爭の相手は、米國よりも低い生活程度を持つ所の勞働者を使役する歐洲の工業、產業であり、從つて、米國では、此のカル タの家（ヘ、ウ、・オ

ツ・カーツ)たる社會政策的施設を打破せんとする力が、歐洲は勿論、英國に比べても遙に强いからである。米國では、社會主義的思想は存在するが、實際政治上の運動としての社會主義は微力である。—(之れは私が右の發言をなした當時に就いて言ふ事であつて、今日卽ち歐洲大戰後の米國に就いては、大分異つて居ることは言ふ迄もない)—それには種々の原因があるが、第一の原因は、米國勞働者の生活程度が少くとも歐洲の勞働者の生活程度に比して高いが故に、彼等が現經濟組織に對して抱く不平が、歐洲大陸、就中獨佛の勞働者のそれに比しては遙に弱いものであると云ふ事である。其他にも種々の原因がある。例へば、米國の二大政黨は、勞働者の要求を尊重し、傾聽しつゝあるが故に、他に新なる政黨を作らずとも、勞働者は其の要求を提出する事が、或程度迄は可能である。且また、二大政黨對立の制度と云ふものは如何にも嚴重であつて、其の間第三黨として社會黨、勞働黨が出來る可能が少ないと云ふ如きは之れである(是れ亦十數年前と今日とでは事態が著しく異つて來て居る)—併し乍ら、種々の原因の中、一番强い原因は前述した如く米國の勞働者の生活程度の高い事是れである。之れは勞働者にとつて甚だ仕合な事であると共に、米國全體から見ても亦一の福音たるを失はない。故に米國人として米國を想ふ程の者は、其の資本家的偏見に囚はれない限り、決して此の狀態を變更すべからず、否、更に進んで之れを確保し、常に勞働者の生活程度を高く維持して行かふと云ふことが、一つの國是としても甚だ重要なものである。從つて此の大方針を打破すべき虞ある事柄は、大事の前の小事として、之れを犧牲に供することを辭しない。日本との親交は、米國にとつて甚だ望ましい事であり、支那との交際の益々密にならん事は、熱心に之れを希望するとしても、其の親交を維持する上に起つて來る事柄にして、右の大方針を打破する虞れある時は、多少親交に害ある懸念が存しても、之れは已むを得ないと認むることは、米國人の立場として寧ろ當然と言はざるを得ない。地を換へて、日本、支那の問題として之れを考へても道理に二つはない。日本の立國の大本に害を與へる樣な事柄が生ずる時は、米國との親交が如何に望ましくとも、前者を採つて後者を捨てるのは日本として理の當然である。然るに、日本に於いては、勞働者の生活程度を高く維持して置く事は、未だ國家の大方針とはなつて居ない、寧ろ反對に資本家の利益を擁護する事が國家を富ます大方針の要求する所であつて、之れが爲めには多少勞働者に壓迫を加へる犧牲は、之れを忍ばなければならぬと考へて居る人の方が多數である。斯くの如き考へ方をして居る日本人から見れ

ば、米國が勞働者の生活改善の爲めの社會政策的要求を、あまりに過重して居る樣に見えるのも無理はない。併し乍ら、米國の問題を見るに、日本人の眼を以てするのは間違である。米國の問題を見るには、米國人の眼を以てしなければならぬこと、日本の問題を見るには、日本人の眼を以てしなければならぬと同樣である

扨、カリフォールニヤ洲に於ける移民排斥は、無論種々の原因から生じたに相違ない。人種的反感もあるであらう、經濟的利害の衝突もあるであらう。併し、今單に社會政策の立場から此の問題を觀察すると、日本移民が米國內に增加して行く事は、米國の社會政策の國是に對する一の危險を意味して居るものである。無論日本の移民中には、米國勞働者の生活程度に劣らない生活程度を持ち、勞働者としての品性が、米國の勞働者のそれに一步も讓らないものもあるに相違ない。併し乍ら、全體に就いて見ると、日本移民の生活程度は、米國勞働者のそれよりも遙に下位にある。此の日本移民が少數米國に入り込むことは、必ずしも彼れの社會政策的國是を破壞する事にはならない事であらう。

併し乍ら、カルフォールニア洲の如く、多數の日本移民が入込み、其多くが若干の地域に密集居住して或る種の農業は日本の農夫によつて獨占せらるゝ樣になれば、折角彼等が數十年苦辛して贏ち得た生活程度の向上は逆戾りする處がある。必ずしも日本移民が直接に米國勞働者と競爭する場合に限るわけではない。異つた方面に從事して居つても、低い賃銀に甘んじ、永い勞働時間を以つて働らく多數の日本移民があると云ふ事は、高い賃銀、短い勞働時間を享けて居る米國勞働者にとつて、一の脅威となる。之れは單なる經濟上の利害の衝突とか、競爭上の睨み合とか云ふ小事に非らずして、米國勞働者の社會政策運動の根柢を脅かすものである。故に彼等が此の脅威を排除しようと考へ出すのは決して無理のない事であつて、此の點だけは、道理は米國にあつて、日本に無いと言はなければならぬ。之れは社會政策上より見たる私の日米移民問題觀である。

右は明治四十二年二月十九日慶應義塾大學の講堂に於ける社會政策學會第三回大會に於いて移民問題討議の際、報告者の一人として私の述べた所である。大要は載せて社會政策學會出版の論叢第三冊二十一頁以下にある。私が右の意見を述べた時は、全く賛成者がなくして、反つて、會員の或人の如きは、一種の米探論であると云つて攻撃されたが私は今日なほ右の如く考へ、且つ固く信じて居るものである。

然るに、私は、歐洲大戰以來多くの機會に於いて、米國の僞善、僞正義、僞人道論を駁撃するに、かなり力を用ひた。從つて、今日では、米國嫌ひの一人として認められてゐるやうであるが、私は決して米國が嫌ひなでもい。米國の僞善、僞正義、僞人道に對して憤慨するのは人後に落ちないが、然し彼れに道理あり、我に無理ある時は、遠慮なく公言するのであつて、何時でも身贔屓のみをしようとする考へを決して持つて居ない。米國の事とし云へば、總てがいゝ事ばかりと思つて居る人が、此の度の日米問題に就いて、米國を揚げ、日本を抑へる論を書いたならば、それは初めから囚はれたる僻見と認められても已むを得ないであらう。併し、私はさう認められることはないと信ずる。私は此の度の日米問題に就いて、米國殊にカリフオールニア洲に於ける米國人の不都合、無法の數々を認めるものである。併し乍ら、其の無法、亂暴の根源、少なくとも有力なる原因の一つは、私の考ふる所では、右の社會政策的國是の維持にある。即ち之れは根底に於いて極めて道理ある要求である。其反對に社會政策を認めず、勞働階級の向上發展を冀はず、偏へに國家を富ますのみを以つて第一義とし、之れが爲めには、勞働者の要求を壓迫するも可なりとする人士に取つては、米國に道理が無いと見へるに相違ない。私共の如く社會政策に重きを置くものゝ立場から言へば、米國が勞働階級の向上發展を其の國是の第一位に置くのは、寧ろ賞讃すべき事であつて、非難すべき事ではない。米國が日本に對して禮を失したのは、責めなければならぬ。併し乍ら、米國が根底に於いて、斯くの如き國是の上に立つて居ることを、日本が承認せずして、枝葉の點に就いて、爭つて居るのは、大なる間違である。私は此の意味に於て、日米問題の見方、扱ひ方を、根本的に變更する必要があると信ずる。否、此の必要は、既に明治四十二年に差し迫つて居つた。然るに日本は、日本の立場のみを見て、米國の已むを得ざる立場を察せずして、談判、交渉した事が、此の度の行き詰りの原因であると思ふ。

私は四十二年の社會學會に於いて、日本は今日に方つて深く反省して此の米國の立場を認むるにあらざれば、學童問題は兎に角、日米間の紛爭は增大する一方あるのみと斷言した。今日の狀態は其の斷言が事實となつて現はれたものである。明治四十二年から今日までの間に、一九一三年の土地法制定と云ふ事件があつた。是れが日本が反省すべき第二の機會であつた。然るに日本は少しも問題の根本に徹底することをなさず、外交上の手段、しかも狹い意味の自國本意の立場からのみの外交的交

抄を反覆した。而してそれは美事に失敗に終つて居る。此れが此の度の紛爭を惹き起した原因となつた。遠い原因は、學童問題であるが、もつと溯つて、日本が米國の國是、若しくは建國の大本に於ける社會政策の重要を認めなかつた事にあり、近い原因は、一千九百十三年の土地法制定に際して抗議するに方つて、此の問題を社會政策的に觀察して對米方針を立てなかつた事にある。而して日本では、政府の當局者たると、民間の識者たるとを問はず、少しも此の意味に於ける問題の根底に觸れず、當面の問題についてのみ爭つて居た。今日形勢逼迫して或は日米間に戰端を開くかも知れないまでに進んで居る。若し此問題で干戈を交へるならば、それは日本に取つて大なる不利益である。世界の同情は悉く米國に集中し、日本は第二の獨逸、若しくばそれ以上に、世界の憎惡の標的となるに相違ない。明治四十三年若しくは、一千九百十三年の交でも此の問題に付いて戰爭をするのは、世界に於ける日本の生命を傷けるものであつたが今日の如く世界が社會政策的に目覺めた事驚く可き有樣である時に方つて、唯、國權擴張、利權獲得主義の立場から、日米間に衝突を惹き起すならば、世界に於ける日本の地位は、非常に惡いものとなる事を自覺しなければならぬ。否、日本が、社會政策的理解を十分に示した上と雖も、今日米國と戰端を開くと云ふ事は、單に日本一點張りの觀察から言つても、非常に不利益である。日本は無論獨立國である。併し、世界經濟的には、日本は決して獨立國ではない。他國の力に俟つ事多々である。就中米國との貿易なくしては殆んど一日も立ち行かないのである。ロシアと戰爭する、ドイツ、フランスと戰爭するのは、打擊は打擊であつても、日本を世界經濟的に孤立の地位に置くものではない。之れに反して、米國と貿易が杜絶する事は、日本を瀕死の境に陷れるものである。戰爭の上では日本は勝つであらう。少なくとも勝算が十分でなければ、日本の軍事當局は開戰を承認しない程の判斷力を有するものと信ずる。此の點に於いては、我々は陸海軍の當局者に信賴する。故に彼等にして開戰すべしと主張すれば、我々は暗默の間に、日本に勝味ありと推定すべき理由があると思ふ。併し、我々經濟生活の研究者も亦、其の專攻する所に立つて國家の問題に關する意見を開陳すべき權利ありと信ずる。國と國との戰爭は單に軍隊と軍隊との間に於いてのみ、艦隊と艦隊との間にのみ決せらるるものでないことは、獨逸の例に徵して明白である。獨逸は兵戰に於いて敗衂したと云ふよりも、寧ろ英國の海上封鎖による經濟戰（アウスフンゲルングスクリーグ。飢餓戰）に敗れたのである。而してヴエルサイユの講話談判に於いて更により大いに敗れたの

である。此運命はやがて日米戰爭に於ける日本の運命とならう。海陸戰に於いて日本は勝つであらう、少なくとも私は日本國民として爾か信ぜんと欲する。併し乍ら、經濟戰に於いては日本は一も勝算を有して居ない。米國の驅逐艦數隻は、石油の供給を絕つことによつて直ちに日本に於けるすべての自動車の運轉を停止せしめるであらう、日本に於ける數十の紡績工場をして閉鎖の已むなきに至らしむるであらう。大正八年末の調査によれば、カリフオーニア州に於ける日本人の數は七萬三千九百二十四人である、農業に從事する日本人は七年末の調査によれば、三萬八千八人である。極めて利己的な打算をして見た所で、此れだけの數の日本人の利益重きか、將又日本に於ける數十萬の紡績工女若しくは製糸工女の利益重きかは、言ふを俟たない所である。單に利害の打算から言へば、カリフオーニア州七萬の同胞が悉く引き拂つて米國を去るの已むなきに至るとしても、此問題による戰爭を避ける方が利益である。併し是れは利害の打算だけの話であつて、私は斯くせよと主張するのではない。唯、日米開戰が、日本の經濟上に何を意味するかを考へよと云ふだけである。國家の存在を危くさるゝか、日本が日本として立つ特權が侵害さるゝ場合には、國內總ての紡績工場が破產し、總ての製糸工場が閉鎖し、國民が非常に苦しむとも、戰爭を辭すべきではない、國民が最後の一人となるまでも戰ふべきである。併し乍ら、カリフオーニア州に於ける日本移民問題は、日本立國の大本を危くするものでもなければ、世界に於ける日本の特權をも傷けるものでもない。

此の問題の爲めに戰爭するが如きは、大なる間違である。若し米國が、世界、就中東洋に於ける日本のプレステーヂを侵害するが如き事あらば、之れはあらゆる社會政策的要求を超越する所の大問題と言はなれけばならぬ。

之れに反して、カリフオーニアの移民問題は、其の根底に於いて全く社會政策的に取扱ふべき問題である。情は人の爲めならず、米國の勞働階級の社會政策的要求を尊重すると云ふ事は、やがて日本勞働階級の同樣の要求を尊重する事である。故に少なくとも日本の勞働階級は、カリフオーニア問題を以て、日米が干戈を交ゆる事には贊成しないと思ふ。否、贊成せざるべき筈である。

新排日案と我國民の覺悟

林　毅　陸

一

米國議會今回の排日立法は、吾人日本國民として最も遺憾に堪へないものである。回顧すれば明治三十八年、米國加州に於て學童排斥問題起り、彼等排日派は不憐の我學童に對して、非道殘虐なる迫害を加へたのである。當時の我當局者は種々努力する所あり、漸く此等學童の就學の自由を回復せしむると同時に、其の交換條件として、將來移民の渡航に極度の制限を加ふべきを約した。此が即ち所謂紳士協約にして、愈具體的に成立したのは明治四十年の末であつた。爾來我國は忠實に誠意を以て此の協約を守り、自制的措置に依つて移民渡航に大制限を加へ、唯在米の同胞にして不當なる迫害を蒙らざれば即ち滿足するの方針を執つた。米國政府も我誠意を諒とし、我自制的措置に滿足し、兩國關係は頗る圓滿であつたのである。

然るに加州其他の排日派は、更に在留移民に對する迫害運動を始め、日本人は歸化權なく從つて合衆國市民となり得ざるものなりとの前提の下に、不當なる排日土地法を制定し、且追擊に加ふるに追擊を以てして、修正を經る每々益々其の規定を峻嚴苛酷と爲し、愈在留移民の生活の基礎に對して、致命的大打擊を與へた。然も大審院は日本人に歸化權なしとの判決を與へ、且又此等排日土地法の有効を認め、排日派をして益々得意を催さしめた。吾々は在米同胞が斯くも殘酷なる待遇を受けつつあるを見て痛憤に堪へざりしも、公正なる一般米國民は、此等地方議會の處置を是認せざるべきを信じ、正義の聲の益々勝利を占むべきを期待し、強いて隱忍するに努めたのである。然るに今回更に一層忍び難き一大排日法案が、米國の中央議會を通過し、明治四十年以來我國が多大の痛苦を忍びつつ忠實に守り來たりたる紳士協約をも、物足らずとして否認し、絕對に移

民の入國を禁止し、且他と差別しての劣等待遇に依り、我國民に大侮辱を加へた。コングレスの兩院までが、斯る態度を取るに至りたるは、實に意外千萬である。

二

紳士協約に依りて僅に許され居たる兩親及妻子の呼寄をも禁止するの、如何に非人道非文明なるやは、言はずもあれ、十數年來我國が苦痛を忍びつつ誠意を以て紳士協約を守り、幾多の迫害排斥に對しても、隱忍の上に隱忍し、只管に日米兩國の友好親善を祈り來りたるにも拘らず、我隱忍に報ゆるに驕慢を以てし、我誠意に對するに暴戾を以てし、公々然日本國民の自尊心を蹂躙するの大非違を敢てして憚らざるは、吾人實に公憤抑へ難きものなきを得ないのである。新排日法に據れば、現在の紳士協約に依る制限の上に、一年百四十六名の入國を禁止するに過ぎずとは、埴原大使の公文中に指摘せる所である。斯る輕微の事の爲に、故らに差別待遇の新立法を爲し、不必要の侮辱を日本國民に加ふるは、如何にしても忍容し難き事である。カリフオルニア州又はワシントン州あたりの地方議會の田舍政治家が、政治上の小策の爲に排日問題を利用するは、餘り驚くに足らぬとするも、堂々たるコングレス・メンまでが、大統領選擧戰の魂膽よりして、同樣の醜態を演ずるは、寧ろ米國政治の恥辱ではあるまいか。

一年二三百名の新移民を許すや否やは、比較的に小問題である。絕對に入國を禁止すと言はば、それも米國の任意である。されど差別的立法に依りて、日本國民のみを他の文明國民より區別し、我に劣等待遇を與ふるに至つては、區々の利害を超越せる名譽の問題である。何れの國民も相當の自尊心はある、アムール・プロプルはある。互に之を尊敬するに依つて、國際の平和友好は維持し得らるるのである。特に我國は條約又は法律に依る差別待遇の不名譽を避けんが爲に、十數年來紳士協約にて自制的措置を執り、苦心に苦心を重ねたる其事實は、米人最も之を熟知せる筈なるに、敢て公々然差別待遇の立法を爲し、我國民の自尊心を傷けて憚らざるは、要するに國際の平和友好を顧みざるものと謂はねばならぬ。

ルイ、ナポレオンがクーデタの非常手段に依りて權力を握り帝位に上りたる時、英のヴイクトリア女王は痛く不快の念を抱き、承認の書中に於て、帝王間の慣用敬稱たる『兄弟よ』の文字を用ゐず、單に『良友よ』と言ひ、一時外交界の問題とせられたことがある。今米國は日本國民に向ひ『良友よ』とも言はず、『汝、劣等國民よ』と呼ばんとして居る。吾人は飽迄米國

民の反省を促し、斯る無禮と無法との阻止されんことを强硬に要求せざるを得ない。

三

且今回の排日法は新入國を絶對に禁止せんとするものなるも、若し之を容認するに於ては、飽くことを知らぬ彼等排日派は、更に一歩を進めて、歸化權なき兩親の子は米國市民たるを得ずと唱へ、米國に生れし日本系の子女をも排斥するに至るやも知れぬ。其の危險は實際眼前に迫りつつあるが如くに感ぜらるるのである。

更に又此の問題の影響する所は、甚だ廣く且深くして、我帝國一般の國際的發展の上に、重大なる影響を及ぼすものなることを記憶せねばならぬ。我國は巴里會議以來、人種平等の主張を以て立ち、一切の差別待遇の障礙を打破して以て、我國運の向上發展を期するの大方針の下に努力しつつある。武力に依る發展は過去に屬する。今日は平和的方法以外に發展の道無く、而して我國民の平和的發展は、各方面に於ける差別待遇の打破を以て、最大必要條件と爲すのである。此理想の急速に實現され難きは明なるも、國策の向ふ所は正に此に存するのである。然るに米國の新差別待遇法は、此の國策を眞正面より痛擊し、我國民の正當なるアスピレーションに大頓挫を與へんとして居る、甘んじて之に服するが如きは、國家政策の自殺であり、又國民精神の自殺である。而して米國に於ての此排日法の實施は、他に對する一大奬勵となり、差別待遇の障壁は、益々高く所々に設けらるるに至ることであらう。我國民の平和的發展の道は、益々雍塞せらるることとなるであらう。其の影響する所實に重大なりと謂はねばならぬ。

新排日法は名譽の問題なりとは、上に述べたる所なるがそは決して形式的若くば虛榮的の面目論に拘泥するの意味では無い。對等待遇を要求する我國民の自尊心は、要するに獨立國民としての存在を完うせんことを期するの精神に根ざしてゐる。自尊なくんば自立なし。國民的プライドを傷けざらんことを期するは、即ち國家の獨立を圖る所以である。所謂名譽の問題の根底には、國家存立の重大なる意義が含まれて居るのである。

四

更に又日米兩國關係改善の爲に、從來兩國識者の爲し來りたる一切の努力が、今突如として水泡に歸し去らんとするは、吾人が特に痛恨に堪へざる所である。華盛頓會議以來、日本の親善は著しく增進せられ、太平洋は爲其の名の如く太平なるべき

を保障せられ彼我共に大にこ之を祝した次第である。然るに今回の排日法は忽ち兩國の間に暗雲を投じ從來の苦心を徒勞に歸せしめんとしてゐる。何たる痛恨事であらう。

且單に日本關係だけの事ではない。一般に和協々調の精神を國際間に鼓吹し、國際平和の氣風を増進せしむるは、巴里會議以來の世界的新傾向である。ウイルソンを始とし、米國政治家として之に貢獻したるものも、甚だ多いのである。然るに排日法は正に此の新傾向を逆行し、却つて國際に於ける不和軋轢の惡風を助長せんとするのである。

然も斯く助長せらるべき不和軋轢の爲に人種的反目思想の激成せんとするは、最も憂ふべき事柄である。排日案の裏面に人種的偏見の存するは、蔽ふ可らざる事實である。米國にして飽迄も我を劣等民族として迫害する以上、人種的對峙反目の思想は必然的に激成せられざるを得ない。而してこれは確に人類の文明に對する大叛逆を意味する。吾人敢て輕々に人種戰を口々に欲するものではない。されど精神的には、此の不祥なる傾向を助長すること、殆ど避け難しと謂はねばならぬ。

平和と正義人道とを高く標榜する米國民は、果して右の如き種々の悲むべき結果の將來を忍び得るであらうか。予は之を信ずることが出來ぬ。現に米國の有力なる新聞紙は、筆を揃へてコングレス特に元老院の態度を非難して居る樣である。吾人は大統領クーリッヂ氏が、斷乎として拒否權を活用せんことを望まざるを得ない。排日派が埴原公文中の『重大なる結果』の一句を逆に利用して、排日案可決の口實と爲したるに對し、埴原大使は温順に釋明的の公文を草し、ヒューズ國務卿との間に十分の諒解を遂げたと云はれて居る。此は大統領の爲に、拒否權活用の道を準備するものと見るべきである。議會は再考を求めらるるも敢て反省せず、憲法所定の三分の二の多數を以て、同一決議を爲すべきや否や、豫測し難きも、目下に於ける吾人唯一の希望は、大統領の英斷にある。日本國民の名譽並に米國文明の信用の救はるると否とは、此の英斷如何に依るのである。

五

最後に一言したきは、此際日本國民として最も愼重の態度を要すると云ふことである排日派の無法に對する不滿は、堂々と之を發表せよ。國民的公憤は遠慮なく之を披瀝せよ。抗議すべきに抗議せざるは、益々輕侮を招く所以である。されど決してジンゴイズムの弊風に隨すべきではない。彼れ、我に對して無禮を働くとするも、我れ、彼に向つて無用の無禮を加ふべきでない。況して日米關係惡化云々を口實として、軍國主義の復活

を企つるが如きは、特に戒めねばならぬ。

元來米國には傍若無人の我利〳〵者流多きも、同時に理想を以て立つの士も決して少なくない。米人は物質主義及理想主義の兩面を有する大國民である。兩者の盛衰消長、時に依りて異なるとは云へ、大體に於ては平和を愛し正義人道を重んずるの特色を有して居る。議會ポリチシアンの行動を以て、全國民を律するは酷なるべく、又一時の現象に依つて決定的の斷案を下すも穩當ではない。即ち以上の諸點を念頭に置きて、成るべく冷靜愼重の態度を持し、以て最後の展開如何を監視すべきである。

猶今一ツ注意を促し置き度きは、日本の實力、未だ十分に他の尊敬を持するに足らざるものがあるといふことである。日本國民は自ら大強國の列に入りたりと己惚れ居るも、有形無形の實力に於て、例へば富力に於て、産業力に於て、又文化の程度に於て、猶頗る低級である。排日米人の如きは、日本の怒を買ふも何かあらんと、殆んど眼中に置かぬことであらうと思はれる。吾人は彼等の無禮を寛假するを得ざるも、然も又自ら反省して、自彊自奮する所あるを要するのである。自尊心強き日本國民は、差別待遇等の爲に、其の頭上に一大痛棒を加へられた。此の痛棒は大教訓を含むものと解すべきものである。即ち今後我國民は實力を養ふが爲に、一層の努力を拂はねばならぬ。此點に思を致さず、唯排日米人を冷罵痛撃して以て能事終ると爲すは、常人の與する能はざる所である

(四月二十二日稿)　(終)

勞働代表としての鈴木文治君に呈し其矛盾を詰問する公開狀

福田徳三

私は一個人としての鈴木君に深く敬服するものである。殊に君の勞働運動者としての天分の豐なることと類稀なるを十二分に認むるものである。唯だ友愛會てふ僞善的名稱を以て、他日必ず分袂する日の來る可く、又た來たさざる可からざることを、十二分に知りつゝ、其の顧問評議員等に、澁澤子爵、桑田博士等を推したることの、同氏等に對しては、冷刻なる作術であり、勞働者に對しては不親切なる假面的行爲なることを、常に遺憾として居たものである。即ち私は、數年前友愛會評議員又は顧問たる可く、鈴木君から依頼せられたとき、右の矛盾を指摘し、其樣なる不誠意の會に關係することを堅く辭退したことは、同君も又記憶せられることであらう。然し此れは、官憲の壓迫甚しき當時の事情として或は不得已事かと考へて、私は同君に卑見を陳するに止め、公けに、其矛盾を指摘することを見合せて今日に及んだのである。唯麻生久、其他諸君の友愛會に關係せらるゝ樣になつてからは、私は機會ある毎に、（殊に第一回國際勞働會議勞働代表選擧問題の起つたときに）、右諸君に對して、時には喧嘩をする必要を免れざる團體に友愛と言ふ丸で反對の名稱を冠せるの不誠實なることを力說し、名稱を即時に其實に合するものに改む可きことを建言したのである。當時私の言は、麻生君から即時に贊成を表せられないほど孤立的のものであつたが、其後幸にして、日本勞働總同盟と改稱

せられた。而して、私は一の虚僞を排し得た同會は、今後、純眞に、誠實に、勞働組合としての活動を十二分に發揮するに至るであらうと期待し、又た熱心に之を祈つて居たものである。然るに圖らざりき、頃日鈴木君の日本勞働總同盟の會長として取られたる態度に、默過し難き一の矛盾あることを見出し、私は日本の勞働運動の爲めに、痛恨禁ぜざるの餘り、一私信を鈴木君に送つて、反省を求めた。然るに同君からは、ハガキ一枚の返事にすら接しない。私は、これは、一私人としての出處の問題として論じたのでなく、日本勞働者の總代人としての鈴木君の進退に關する重大の問題として論じたものである。然るに、何故か、鈴木君は、之れに對して答へられない。仍て不得止、私は、茲に此の公開の一文を公けにして、鈴木君に返答を求むることとしたのである。

頃日の新聞紙は傳へて云ふ、日本勞働總同盟名譽會長鈴木文治氏は一旦中央職業紹介委員會委員に任命せられ乍ら、數週を經ずして之を辭任せられたと。而して又近日の新聞紙は報じて云ふ、鈴木君は、社會局の新たに立案せる選擧法によつて當選せる國際勞働會議の日本勞働代表者たることを諾し、政府の任命を受けたと。私が、鈴木君の態度を以て一の大なる矛盾なりとするは、此二種の報道に基くものである。而して、私が矛盾とする所以は、次の考察に基くのである。

（一）鈴木君にして、政府の任命を受くるには、日本勞働總同盟の幹部の一人として、不可なりと信ずるものとすれば、其れは、確かに一の見識である。或意味に於ては、甚だ見上げた見識とも云ひ得る。

然らば、鈴木君は、何故に中央職業紹介委員會委員たるの任命を受けたのか。右任命は、本人の內諾なくして行はれるものではない。鈴木君は、政府內交渉に對して、必ず承諾を與へたものに相違ない。鈴木君の內諾の言明を得

ずして、天降的に同君を右委員に任命するが如きは、政府として決して爲す可からざる處、而して又た決して爲さざりし處なりと確信する。

（二）中央職業紹介委員會は、日本政府が時の政策上の都合によつて、或は設け或は廢する各種の調査會若くは新設の帝國經濟會議の如きものとは、全然其性質を異にするものである。如何なる政府も、擅に之を廢止し得可きものでない。何となれば、右委員會は、國際勞働會議の決議によりて、國際聯盟加入國は必ず之を設置しなければならないものであつて、而して、其委員中には、資本、勞働同數の代表者を包含す可きことが明白に規定せられてあるのである。日本政府は即ち此の決議を尊重し、其官制中に明らかに資本、勞働同數の代表者を委員中に加ふ可きことゝしたのである。此れは、現在の日本の政府としては、寧ろ思切つた英斷であるのである。委員會の數少からずと雖も、資本、勞働代表者を必ず同數に於いて加ふ可きことを、官制として規定したものは、我邦には、右職業紹介委員會を除いては、他に一つもないのである。健康保險組合はまだ實施せられないから姑く問題外とする。此の委員會を他の調査會、例へば、帝國經濟會議の如きの類と同視することは、余人には許され得る誤解なりとするも、勞働總同盟の會長として、殊に、右決議をした國際勞働會議への勞働代表選定に關して、屢々當局者の非を責め、而して今や日本の勞働代表として列席せんとしつゝある鈴木君には、斷じて許さる可き事でないのである。

（三）鈴木君と賀川豐彦君とは、明かに『勞働者の利益を代表し得る者』として、右委員に任命せられたものなることとは、當局者が責任を以て言明せる處であつて、永田東京市長の如きは、當局の此言明を甚だ大膽なるものなりとして、寧ろ驚畏する旨を明言したのである。私は右二人の勞働代表者に對し資本家たること疑なき人々が四人委員に任命せられたのを以て、不可なりとし、協調會の永井亨氏と共に極力勞働者代表者を更らに二名增員して、勞資

同數とするにあらざれば、國際勞働會議の決議の精神に違反するのみならず、我邦の官制の趣意にも合はざるものなりとして、今猶永井君と共に極力增員を主張しつゝあるものであつて、當局も、我々の主張を諒とし、他日適當の機會に於て、增員の取計ひを爲す可しと、非公式に言明して居るのである。然るに、何事ぞ、既に資本代表に對して其半數に過ぎざる勞働代表の數を、鈴木君は自己の辭任によつて更らに、四分の一に減ぜしめ、殘る所賀川豐彥君一名のみを以つて、日本の中央職業紹介委員會に日本勞働者を代表せしむることとしたのである。是れ、眞に勞働者の利益を造次顚沛にも念とす可き鈴木君の處爲たる可けんや。鈴木君の此擧はあらゆる機會に於いて伸張せざる可からざる勞働者の利益を、却つて害する處の甚不親切なる所爲である。

(四) 乍去、鈴木君にして、右中央職業紹介委員會なるものを無益若くは有害のものと信ずるならば、鈴木君は獨り自らのみならず、日本勞働總同盟の誰人をも、右委員たらしめざるも、亦一の見識であり、一の主張であつて、私は、其の見識に敬意を拂ふに吝なるものではない。果して然るならば、鈴木君は何故、政府の內交涉に對して、言下に任命を拒まざりしか。一度受けて、而して旬日の中に遽々然として、之を辭す。私は、鈴木君の不見識、無思慮、輕卒なる、到底日本の勞働代表たるの資格なく、殊に右委員會を必ず設く可しと決議したる其の國際勞働會議を輕侮するものであつて、其會議へ日本委員として參列するは、世界を欺く所業なりと思はざるを得ない。

更らに又、政府が鈴木君とか賀川君とかを任命するに就ては、頑迷なる元老其他を頭に頂く官僚としては、實に尠からざる勇氣と決斷とを要したことと推測し得る。然るに、其政府の內交涉を受諾し、正式の任命も亦これを甘受し乍ら、忽ちにして之を辭すること弊履の如し。之れ當局に背負投げを喰はし、殊に他の勞働代表者たる賀川君に對して(賀川君は受諾に先ち鈴木君と隔意なき協議を遂げられ、又賀川君自らの周圍にある幹部の人々の同意を得ら

れたるものなる由、私の質問に對して賀川君自ら言明せられたのである）背信を敢てしたものである。折角漸次に目覺めつゝ來る日本の官僚の一英斷は、鈴木君の背信によつて、手もなく裏切られ、背負投げを喰はされたのである。向后官僚の頑迷化惡化を責むる權能は、永久に鈴木君自ら之を抛棄したものと云はざるを得ない。

（五）鈴木君にして、國際勞働會議が聯盟各國に必設を要求した右職業紹介委員なるものを無用とし、其樣な無益の決議をした國際勞働會議を無用の長物と認むるとすれば、其れも確かに一の見識である。私は其見識に對して敬意を拂ふに吝なるものではない。果して然りとするならば、鈴木君は其樣な無用の長物たる國際勞働會議に日本委員として參列することを拒絶す可きである。然るに右委員は之れを辭し、代表の任命は之を受けて近く出發せんとすと聞く。是れ實に矛盾にあらずして何ぞや。

（六）更らに又、鈴木君にして、日本政府の任命なるものを甘受するは、今日の現狀に於て勞働組合員として、爲す可からざる處なりとするならば、其れも確かに一の見識である。私は其の見識に對して敬意を拂ふに吝なるものではない。然らば、政府の任命による故を以て紹介委員を辭するならば、同じく政府の任命する勞働代表の任も亦峻拒す可きである。然るに一方は之を受け、他方は之を辭す。是れ大なる矛盾にあらずして何ぞや。

（一）某氏の談として傳はる處によれば、鈴木君は政府の内交渉を受けたる時之を勞働總同盟の同人に諮ることなく獨斷を以て受諾し（帝國經濟會議議員の方も亦然りと傳ふ）たる爲め、任命後同人の反對に會ひ、周章狼狽して辭任したるなりと。私は此說の誤傳ならんことを祈る。何となれば、其れは、勞働組合の責任者として、此以上なき不都合の所爲であるが故に。政府が鈴木君を紹介委員に任命せんとしたるは、勞働代表者としてである。他の委員の多くは（末弘、永井、關、諸君や私の如き）單に一個人として任命されたのである。同じ委員でも、其間大いに意味

が異る。勞働代表者としての鈴木、賀川兩君、資本代表としての山崎龜吉、武藤山治兩君は、國際勞働會議の明かに要求せる特に重き責任を有する委員である。然るに鈴木君が此の重任を受くべき內諾を與ふるに先つて、勞働總同盟の同人殊に幹部の人々と何等の協議をしなかつたと云ふことが、眞であるならば、私は敢て云ふ、此一事を以て同君は、勞働指導者たり勞働代表たる資格を全然有せざることを、自ら聲明した所以であると。高野博士は、友愛會の人ではない、しかも友愛會の反對あるを知るや勞働代表の內諾を取り消した。當時世人は囂々として同博士を責めたが、私は高野博士が內諾したことは實に千慮の一失であると信ずると共に、之を取消した勇氣――無論大學教授の地位を失ふ可きを覺悟して――には、實に熱淚を禁ぜざるほど、敬服し畏服して居るものである。同博士を拘束す可き勞働團體はない、而も同博士は團體の反對あるを知るや、內諾を取消した。而して其れは、何れも正式任命以前であつたことは鈴木君の場合とは甚だ異ふ。而も公人としての出處進退を重ずる同博士は、內諾の失慮に對し其責を負ふて大學教授の地位を拋つた。其の高義、其の淸節、之を思ふだも私は胸中に淸風の湧くを禁じ能はないのである。かくてこそ眞に勞働指導者たり得るのである。鈴木君は高野博士のことに念一及すれば、此度の輕擧盲動、無定見、不見識の背負投げ行爲の責を負ふて、勞働指導者勞働代表たる地位を即時に辭退して、罪を天下に謝す可き筈である。然るに厚顏シア〳〵然として勞働指導者たり勞働代表として渡外せんとす。私は實に日本の勞働運動の爲めに、之れを愧づるものである。

（八）更らに猶鈴木君に語る可きことが起つた。其れは別事でもない。私は去十二日付を以て鈴木君に一文を差出した後、責任ある當局者に質問したる處にては、鈴木君の右委員辭任は、一の實効なき形ちに於て爲されたもので、政府としては、同君は依然として委員たるものと認めるの外ないとの事である。即ち鈴木君は、勞働總同盟の人々の

意見を是認した如く粧ひつつ、實は依然として委員たるのであつて、其爲めに（一）世間を誤解せしめ（二）幹部の同人を錯覺に導き（三）而して、勞働者の利益代表者を資本代表の四分の一たらしめて、之を他人を以て代へて、少くとも二分の一代表の實を擧ぐることをさへ妨げて居るのである。此れ豈に甚しき不應爲の所業ではないか。當局は、鈴木君の辭任云々は、單に某官僚に幹部の反對があつて困る云々と泣き言を並べたる程度のものにして、正式の辭表なるものは紙片一葉すら提出されて居ないと言明して居るのである。

（九）私は、以上を認めて玆まで來た處、偶『東京朝日』の夕刊が到着した。其記事によれば、鈴木君は『私個人の意見から言へば福田博士の言ふ所誠に尤もであるが、然し組合の申し合せに對しては私としては無論之れに依るのが當然であると思ひます』と。然り勞働總同盟が『勞働組合法さへなく、組合に對する政府の眞意がどこにあるか分らない現在は、之れに入るは時機尙早とす』と云ふにありとすれば、其れも確かに一の見識である。私は此見識に對して、深厚なる敬意を拂ふに吝なるものではない。然らば

（甲）何故に、時機の尙早なるに拘らず一度は政府の任命を甘諾甘受して、委員の辭令を受けたか。組合は、『本組合員の政府の委員會に入るは時機尙早なり、故に委員の任命は一旦は之れを受くるは差支なしと雖も、若干日の後には、之を辭す可きものとす』との申合せを爲したのか。果して然るならば、日本勞働總同盟は阿呆の集團なりと斷言す可きである。其の樣な集團が日本勞働組合の代表的なものであるとは、私は實に世界の勞働組合の名に於いて之を愧づるものである。

（二）政府の組合に對する態度明ならざるが故に政府の任命を受くるは、時機尙早なりとは確かに一の見識であつて、私は其の見識に對し深厚なる敬意を拂ふに吝なるものではない。然らば、何故に國際勞働會議へ參列の任命

を其の同じ日本政府から甘受するか。鈴木君は『勞働代表を受けた理由は、今迄外國には我國の勞働事情なるものが、常に政府側からのみ發表されて眞に分つて居ない爲に見當外れの議論がないでもないから、かう云ふ國際的な會議の席上で十分明かにして置きたいことが多いからである、兎も角勞働會議に行つた上で、政府の組合に對する態度を見た結果或は官設組織に入る事もあるかも知れない』と云つて居られるが、其言は支離滅裂な强辯である。

『或は官設組織に入るかも知れない』などと言つて居る鈴木君は、今日未だ正式に委員も議員も解かれて居ないではないか、解かれないように兩天秤をかけて置き乍ら『政府の態度を見た上で或は入るかも知れない』などと立派なことを云ふ、不誠實も極れりと云はねばならぬ。

日本勞働者の事情が能く分つて居ないで、政府が勝手なことをするのは困るから、其疏通の爲めには、信任せざる日本政府の任命を受けて國際勞働會議に參列すと云ふ、然らば國内の職業紹介事業は政府が勝手なことをするに放任し、勞働者の事情を其委員會に疏通せしめないで置いて構はないのか。之れ外國に阿り自國を裏切るものではないか。日本の勞働事情を能く分らしめる必要は、外國に對してよりも、先づ第一に日本に對して存するのである。日本政府には分らしめないで置いても構はない。外國には分らしむ可く、不本意な任命をも甘受するとは、冠履顚倒も亦甚しいのではないか。

要するに、鈴木君言ふ所は、一も辯明となつて居らぬのである。而して此の矛盾極る態度を其會長が取ることを是認し、其の會長を國際勞働會議に代表者として送り出して得々たる日本勞働總同盟は、勞働組合たる其名に對して果して耻る處なきや。何萬の會員を包擁する大團體たる總同盟中果して一人の常識を備へた人は居らざるに

か、怪しき限りである。

さるにても、此くの如く無定見なるグラ〳〵人を代表者として國際勞働會議へ送ることは、險吞千萬なことである。何となれば、外國崇拜に眼のくらめるグラ〳〵人たる鈴木君は、日本勞働者に取りて不利益なる事柄も、外國人の說となれば、フラ〳〵とそれに贊成し、事後誰人かの入れ智慧を受くるや、再び遽々然として其贊成を取消し、かくて世界の嘲笑を日本勞働者にふりかけしめることとならざるを保し得られないから。

日本勞働總同盟の會員諸子以て如何となす。否鈴木君によつて國際勞働會議に代表せられんとしつゝある日本幾十萬の勞働者諸子以て如何となす。私は切に諸子の見る所を問はんとするものである。

鈴木君に望む『兎も角福田博士を御宅に訪問してよく御話をする積りでゐます』などゝ妥協政治家の言ひ草を模倣することなく、私の私信と此の公開狀に對し、公刊物の上で堂々と答へられんことを。四角半式の猫撫辯明は、私は斷乎として排斥する。而して、私は、鈴木君の返答の內容如何によつては、一の日本國民として、國際勞働會議に、鈴木君の此の矛盾する態度を難ずる一狀を郵送して、世界の批判を仰ぎたいと考へつゝあるものなることを茲に言明して置くものである。

（大正十三年四月二十一日夜認む）

私は以上の文を認めて、之れを改造社に送致して、本日午后二時帝國經濟會議の社會析植兩部聯合部會に出席す可く、首相官邸に赴いた。然るに賀川君既に在つて云はるゝよう、鈴木君も今日は出席せらるゝと。間もなく同君は來られ、而して、私に向つて云はるゝよう、昨日の『朝日』夕刊の記事の方は未だ宜しいが、今朝の『中外商業』の貴談なるものは甚だ困る、何とかして、貴君の諒解を得て此問題を圓滿に片付けたいと。私答、圓滿に片付けるなどとは、官僚や妥協政治家の云ふことであつて、勞働代表たる貴君の云ふ可きことではない、私は公人として、君に反省を促すもので、昨夜から今朝に涉つて一文を認めて、今日先刻之を改造社に送つた。之れに對して公けの御返答を承りたい。鈴木君曰く、私が委員を內諾したのは、勞働總同盟幹部の重なる人々の同意を得た上の事であるが幹部は多数であるから、悉くに話をする暇がなかつたため、正式な任命後、反對論が其等話をしなかつた人々から起つて、終いに辭任す

るに至つたのである。其事情を御諒解願たいと。私答、其れならば、諒解ドコロか、更らに矛盾不都合の甚しいものである、私の矛盾を詰問す可き相手は、鈴木君一人と思つて居たが、幹部の重なる人々が一旦同意をして置き乍ら、反對說が他の人々から起つた爲め、辭任を決議したものなりとせば、其等の任命承諾に同意を表した『重なる人々』と云はれる諸君、即ち勞働總同盟の首腦部を形づくつて居る方々にも亦責任は存するのであつて私は、其等諸君に對しても亦た同時に反省を促し、矛盾を質さねばならぬこととなるであらうと。鈴木君曰く、更らに詳報內情を御話すれば、御諒解を得られると思ふから、今別室へ御同行を願たい。私答、私は會議を缺くことを欲しない、會議後、私は今夜の夜行汽車にて大阪へ赴くのであるが、其間二三時間の餘裕はあるであらうから、其時間を利用して御話を承り、私に於いて十分諒解し得られるか、若くは君が紹介委員の辭任を取消されるか、或は又た勞働代表を辭されるかならば改造に送つた私の公開狀は、電話なりにて撤回せしめても宜しいと。鈴木君卽ち之を諾して、會議後の會談を約した。然るに私は會議後直ちに鈴木君と會談す可く、同君を尋ねたが、同君は既に首相邸を辭去せられた由を聞いて、狐につままれた感をした。依つて、私は、今事を改造社へ驅せ、此追記の一節を認めて、之を社員に交附することとした。公人としての鈴木君の擧止の曖昧模糊たること、私は殆んど之を解するに苦むものである。吁。（四月二十二日午後五時半改造社にて認む）。

編輯を了へて

□日本移民排斥、即日本人排斥案は米國の上下院を通過。今後は單に大統領の否認權あるのみだが、しかし彼も選擧に重大な關係を有することとて多分議會の決議を尊重するだらう。そうなつたら我國は泣寢入りか、戰爭か。

□護憲なぞとつまらぬ情實に捉はれて政治家の高處あるを忘るな。犬養だつて數ヶ月前は官僚と苟合した。高橋も其の通、高明たつて桂や大浦の友達だつたネ。今更に護憲もあるまい。政友本黨は云ふも鉾の穢れ。今の時既成政治家の總てを葬れ。高橋と田子の勝負は此意味で何れが勝つも隨意だ。高橋だつて總理になつた時のあのザマではネ。殊に高橋、加藤、犬養なぞが護憲なぞと大きなことを言ひ乍ら政治ゴロ伊東巳代、三浦の門に屁を垂れるザマは日本最醜の政治情景だ。

□對米問題の如き重大問題に對し現在の政黨は何をなしつゝある。政黨あつて國民なく、正義なく人道なし。我々は國民がかくの如き大事を冷々看過しつゝあるを見て思はず悚然たらざるを得ない。

□清浦の對米宣言は小學生の作文の如し。時代は既に二世紀も前に彼を葬つた筈だのに。

□朝鮮大學の創立日出たし、ただ警務と大學と連絡せざることが最必要。そして衡平社運動、全羅に起れる農民運動等に齋藤總督が理解を有つことが刻下の必要。

□佛國文壇の第一人者として英のウエルズと共に世界的文豪たるバルビユースよりの寄稿に對し本社は衷心より氏の厚意を感謝する。

□クローデル大使の留任を記念する文集が出ることになつた。我國の佛蘭西關係の全文壇計畫であることは勿論だがこの文集は本社より五月出版さるることになつた。第一論說篇、第二クローデル篇、第三創作篇である。秀曲は六月號の本誌に紹介する。

□對米問題は、我國民及黃色人に對する最要、最緊の問題だ。我々は多數國民と憂苦を共にせんと欲す。故に締切を平常より一週間も遲延して日米問題を徹底的に攻究した。我社の奮鬪が一片民衆の上にあることを諒として貰ひたい。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	八拾錢	貳錢
半ケ年	五圓六拾錢	特大號共郵稅不用
壹ケ年	拾壹圓廿錢	特大號共郵稅不用

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲增大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲外國よりの御註文は郵稅實費を申受く

▲見本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用は一割增の事

▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

大正拾參年四月廿日　印刷納本
大正拾參年五月壹日　發行

（定價壹圓）

東京市芝區愛宕下町一ノ一
編輯發行兼印刷人　平田貫一郎

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ一
印刷所　秀英舍

東京芝區愛宕下町一ノ一
發行所　改造社
振替東京八四〇二
電話高輪四九九三

京大敎授 宮本英雄著

結婚の基調

定價 一圓五拾錢
送料 十五錢

新刊發賣

「人生は性(セックス)と食(フード)に在る」と西洋の誰かが云つたが、凡ての人生萬般の事象は其の源由に遡れば此の二大本能に在る。而して此の二大本能を如何にして「社會的」に滿足するかと云ふ所に、所謂經濟問題も起り、道德問題も起り、更に其の實際解決の基調として法律問題が起る。本書は宮本敎授が此の二大本能の一たる性方面の微妙なる問題を、法の立場に於て、各方面に亙り深く觀察し、廣く論及したもので、項目を婚姻法の將來、夫婦間の貞操、寡婦再婚、離婚の防止、家族制度と婚姻の五に別つてある。本書を讀まるゝ人は一面社會問題としての兩性問題を解決する鍵を獲ると共に他面人生と法律との深き關係に就き徹底的理解を得らるゝであらふ。

東京芝區愛宕下町

改造社

振替東京八四〇二

イバニエス著　鈴木厚譯

血と砂

定價貳圓六拾錢

送料十九錢
四六判上製

忽ち十版

イバニエスの出現が西歐文壇近時の驚異であつたと共に、彼の出世作「血と砂」は寫實主義文學の廣大な沙漠の中に誕生せる革命的新彩に充ちた**ロマンチシズム**の先驅であつた。

「世界に二人とない闘牛士」として西班牙の首都でもてはやされた**ガルラアド**を主人公とし、それに配するに神の如き美はしき**カルメン**——そして、某侯爵の姪——の間に起れる三角關係に筆を起し、闘牛士の面白き生活、悲壯なる最後、そして我國には全く神祕の國であつた西班牙の異つた舞臺を展開せしむ。

彼は飄然として我國へ來り、又飄然として我國を去つた。彼の驚くべき燃犀、深酷の筆致によりて西班牙に横行する唯物主義的義賊がいかに描かれ、そして八公、熊公の無産階級の世界的大歡樂郷が、闘牛場を通して我等にいかなる新しき興味をそそらしめるか。

それは全く彼の如き思想的に豐富な背景を有つ一大文豪でなければ能きない近代的の收穫であつた。新しくて、面白くて、舞臺が全く變つてるから面白いことは限りない。

東京芝區愛宕下町
改造社
振替東京四八〇二

女性改造主催

第二回文藝思想講演會

講演者

法學博士 末弘嚴太郎先生

佐藤春夫先生

岡本一平先生

片上伸先生

里見弴先生

場所 芝慶應義塾大ホール

日時 大正十三年四月二十日(日曜日)午後一時

會費五十錢

男女とも歡迎

女性改造五月號

―定價金七十錢―

時事雜感その他……（武者小路實篤）
人間の欲望……（土田杏村）
文豪の家庭生活を追懷して―
病床の子規居士（高濱虚子）
鷗外先生の潔癖さ加減（鈴木春浦）
島村抱月といふ人（中村吉藏）
紅葉山人とその夫人（德田秋聲）
樋口一葉女史の家庭（馬場孤蝶）
禽獸論を喜んだ父（國木田虎雄）
家庭に於ける漱石先生（森田草平）
文人藝術家の家庭（内田魯庵）
本年の卒業論文及男女學生の思想傾向
◇桑木嚴翼　◇石原謙　◇古川竹二
◇松原寬　◇渡邊英一　◇千葉龜雄
寧ろ性を禮拜せよ（河田嗣郎氏に）……（平塚らいてふ）
嫁入前の女性に是非讀んで貰ひたい書物……（四十名士）
私は彼女のどこに戀したか
彼女のヒステリー氣質にこそ（宇野浩二）
妻のごの點に牽かれて結婚したかの答へ（岡本一平）
失敬なことを尋ねるものではない（佐藤春夫）
七世までも變らぬ主義（佐々木味津三）
空想する少女（伊藤貴麿）
言ふまでもなく（久米正雄）
彼女達といつて貰ひたい（生方敏郎）
ツンとした高い鼻（上司小劍）
貴郎のを眞似て見たんですわ（村松梢風）
或る旅路にて（南部修太郎）
引力の問答（吉井勇）
山の手電車……（九條武子）
人間巡禮……（深澤邦子）
國際勞働代表とは何か……（鈴木文治）
第五回國際勞働會議の模樣と私の所感……（石原清子）
僻見……（芥川龍之介）
人間……（森田草平）
鳳凰天に搏つ……（柳原白蓮）

文學博士　松本亦太郎著


舶來品を凌駕する
國産第一の純良品
ライオン煉歯磨
チューブ入!
LION
TOOTH PASTE
T.KOBAYASHI&CO
TOKYO
MADE IN JAPAN
PASTE
AN IDEAL
PREPARATION
FOR THE TEETH
GUMS AND
MOUTH
MADE OF
SELECTED
MATERIALS

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF
POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS. ETC.
PRICE: EIGHTY SEN A COPY. TWELVE YEN A YEAR
OFFICE: KAIZOSHA, 1 ATAGOSHITAMACHI SHIBA, TOKIO